

日本研究

第28輯

中央大學校
日本研究所
2010. 2.

目 次

【어학】

韓國語における敬語運用と変化の動向 - 壓尊法と呼称表現を中心に -

姜錫祐

準備、用意、支度の使い分けに関する研究

金昌奎

다문화 가정의 이중 언어사용에 관한 고찰

朴福德

「材質」を表す形容詞述語文の文型と用法

朴海煥

美の語彙に関する一考察

- 「くはし」「きよし」「うつくし」を中心に -

朴惠子

韓日 기초어휘의 複合度 대조

裴株彩・朴志沆

日本語母語話者の會話におけるターン交替の特徴について

- インタビュー會話における定量的分析から -

磯野英治

テレビドラマを用いたシナリオ・ドラマ活動について

- 活動に参加した學習者の意識を中心として -

津崎浩一・山本智子

教師間でピリーの共有を行った教室活動

- ベトナムにおけるノンネイティブ教師とネイティブ教師によるチーム

ティーチングでの実践 -

高橋雅子

일한 국제결혼가정의 언어사용에 관한

연구-일본거주 「夫日本-妻韓國」 국제결혼가정을 중심으로-

韓永玉

【문학】

전근대 한일 양국의 여성담에 관한 소고

- 조선후기 야담과 우키요조시(浮世草子) 속 이색적(異色的) 여성상을

중심으로 -

高永爛

「은하철도의 밤(銀河鐵道の夜)」의 ‘고독’-조반니를 중심으로-

高漢範

지카마쓰(近松) 작품에 있어서 하급유녀의 구원방식

金叵娥

未摘花物語における香り-内面と關係しない香り-

金炳淑

- 오에 겐자부로 『우리들의 시대』 론
 -성(性)의 이미지를 중심으로- 成諒淑
- 『源氏物語』의 여성의 성인식 '모기(裳着)' 고찰 申美眞
- 아리시마 다케오(有島武郎)의 『다시 태어나는 고통(生れ出づる悩み)』에 보이는
 죄의식 고찰 李在聖 崔誠允
- 1960년대 원폭표상 연구
 - 이부세 마사지(井伏鱒二)의 『검은 비(黒い雨)』와
 『시게마쓰일기(重松日記)』를 중심으로- 崔明淑
- 일본근대문학연구
 -한국적 한의 시각에서- 韓基連
- 芭蕉의 俳諧世界에 나타나 있는 '無常'에 관한 고찰 許坤

【문화】

- 오다 노부나가의 정치수단으로써의 다도 朴鎰烈
- 対立的意識活動とジャーナリズム—日本における批判的ジャーナリズム研究のポテンシャル— 安昌鉉
- 일본 사회의 '다문화공생'의 의미와 다문화공생사회로의 과제 李吉鎔

【초청논문】

- 中国における日本語教育の現状と課題
 —北京日本学硏究センターの取り組みを兼て— 曹大峰

- 일본연구소 규정집
- 彙報

CONTENTS

【Linguistics】

Trend of change in Honorific Usage in Korean:

Focusing on Assonho and Address Terms

Kang SukWoo

A Study on the Difference between "zoonbi" "youi" and "sitaku"

Kim ChangGyu

A Study on Bilingual Uses in Multicultural Families

Park BokDuk

Sentence Pattern and the Use of the Adjective Predicative

Construction for [Zaisichu].

Park HaeHwan

A Discussion of Aesthetic Words (Bi No Goi) in Japanese Language - *Kuhashi, Kiyoshi, Utsukushi* -

Park HyeJa

A contrastive study on the degrees of compositeness in basic vocabulary of Korean and Japanese

Bae JuChae and Park JiYeon

Studies in turn-taking in Japanese native speakers' conversations : Quantitative analysis of interviews

Isono Hideharu

A Report of a Scenario-Drama Activity Using TV Dramas

-Focusing on Responses of Learners Who Participated in the Activity-

Tsuzaki Koichi and Yamamoto Tomoko

Classroom Activities Using Belief Sharing Among Teachers

- Team Teaching among Non-Native Teachers and Native Teachers in Vietnam -

Takahashi Masako

The Research of Language-Use In Intermarried Households Between Japanese and Korean

Han YoungOk

【Literature】

A study of woman's tale in pre-modern Korea and Japan

-Focusing on unique women appeared in Yadam and Ukiyozousi-

Koh YoungRan

A Study on the Jobanni's Solitude of *Milky Way Railroad*

Ko HanBum

The Relief Method of the Low-Class Harlot on Chikamatu's work

Kim minA

A scent irrelevant to the inner side of Suetsumuhana

Kim ByungSook

Sexual image of oekenzaburo's 『Our Times』

Sung HaeSook

A Study on the Mogi Ceremony in *Genji-Monogatari*

Shin MiJin

A study on the sense of guilt of Arisima Takeo's literary work,
'Umareizurunayami'

Lee JaeSung and Choi SeongYun

A Study on the representation of an atomic bomb in the 1960s

- Focusing on the Matsuji Ibusei's 『Black rain』 and 『Sigemath's diary』 -

Choi MyungSook

A study on Modern Japanese Literature

-in the view of 'HAN', it is mixed feeling of sorrow and regret
unique Korean-

Han KiRyoun

The Image of 'The Transitoriness' on the Works of Bashō.

Heo Kon

【Culture】

Tea Cremony as the Political Means of Nobunaga Oda

Park JeonYul

Journalism as a confrontational consciousness activity: The potential of critical
journalism studies in Japan

AHN, ChangHyun

The meaning of Coexistence and the challenges of
Multiculturalism in Japan

Lee KilYong

【Invite paper】

韓国語における敬語運用と変化の動向*

— 圧尊法と呼称表現を中心に —

姜錫祐**

kangsw@catholic.ac.kr

< 目次 >

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1.はじめに | 3. 目上への呼称表現と敬語行動 |
| 2. 社会変化と敬語体系変化 | 3.1 目上への呼称表現の類型と許容範囲 |
| 2.1 圧尊法という敬語運用法の特徴 | 3.2 呼称をめぐる韓国人の敬語行動 |
| 2.2 圧尊法の現在と今後の動向 | 4. まとめ |

Key Words : 압존법(Assonho), 경어운용(Honorific usage), 호칭표현(Address terms), 경어변화(Honorific change), 경어행동(Honorific behavior)

1.はじめに

韓国語の敬語は、尊敬表現、謙讓表現、丁寧表現といった種類があるという点で、日本語と酷似している。一方で、運用面には著しい相違が認められ、一般に韓国語は「絶対敬語」、日本語は「相対敬語」ということばで区別される。しかし、韓国語にも日本語の相対敬語的用法に類似した「圧尊法」という敬語法が古くから存在する。

* 이 논문은 2009년도 가톨릭대학교 교비연구비의 지원에 의해 연구되었음.

** 가톨릭대학교 일어일본문화학과 교수, 사회언어학 전공

本稿では、社会構造の変化とともに変わりつつある韓国語の敬語体系について、「圧尊法」に注目し、その特徴および現在の運用実態に触れ、今後の動向について概観したい。また、韓国語の呼称表現を中心に、表現形式の種類やその運用実態から韓国人の敬語行動の特徴について考えてみる。このように韓国人の敬語行動の特徴を見出していくことで、今後の日本語との対照研究および韓国語教育の向上に役立てることを本稿の目的としたい。

2. 社会変化と敬語体系変化

様々な言語現象のなかで、敬語は個人の対人関係をもっともよく反映するものであり、さらに人々が属する社会構造をもよく投影するものである。これはやはり敬語が持つ社会性によるものであろう。従って、敬語現象が文法よりは文法外で説明できることが多いのはある意味では当然のことかもしれない。よって、敬語は一般的な言語現象と同じく、時間の流れに沿って変化していく。

圧尊法は朝鮮時代からその存在が確認される由緒ある敬語法である。しかし、こうした韓国の伝統的な敬語法も次第に衰え、21世紀の現代において圧尊法によって敬語が運用される場面は数少なくなってきている。

以下では、圧尊法の特徴に触れてから、現代の韓国社会で圧尊法が適用され使われる具体的な場面の例から、今後の敬語変化の動向について述べたい。

2.1 圧尊法という敬語運用法の特徴

서정수(1984)は圧尊法について「待遇すべき二人を対比させ、より上の人を高めるために一方の人を低めて表現するものである」と定義している。つまり、圧尊法は、話題の人物が話し手より目上で敬語形式をもって待遇すべき人であっても、その人物より聞き手がさらに目上の場合には、話題

の人物に対して敬語を用いることを避けるという敬語運用法である。これは確かに系統的に相対敬語的用法と分類できるといえるが、本来高めべき相手にもかかわらず、その人物に対する敬語を押しえ、最上位者に対して敬意を表すものであり、角度を換えてみれば、圧尊法こそがある意味最上位者に対する絶対的な敬語法ともいえるのである。

ここで注目しておきたいのは、圧尊法を適用する際に働く韓国人の上下関係把握の意識である。以下は、職場内での序列関係を想定した図である。

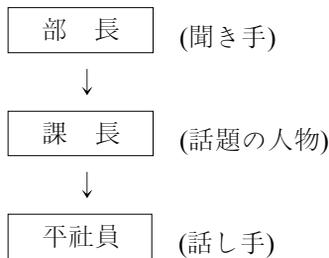


図. 職場内での序列関係

上記の関係で、平社員が課長のことを部長に話す際、平社員が課長のことを高めて待遇したとすると、平社員は聞き手である部長に上下関係もわからない無礼者だと評価されてしまうことになる。すなわち、話題の人物である課長を高めることによって、聞き手である部長よりも課長を目上として待遇していると認識されてしまうわけである。

以上のように、韓国の圧尊法は身分制度が存在していた朝鮮時代から厳しい上下関係の中で、絶対的権威者である聞き手をより絶対化するために用いられてきた。その聞き手より下の者であれば、いかなる者も下げて待遇すべきだという意識から生じた敬語法であり、序列関係の強さをより強調する形で運用されるという特徴があるといえよう。

2.2 圧尊法の現在と今後の動向

歴史的に韓国で身分制度がなくなったのは朝鮮王朝(1392-1910)が滅亡した20世紀初期である。身分制度の崩壊という社会的な大変化が起きてから約100年の歳月が経った現在、はたして圧尊法は韓国社会でどのように運用され、どのような問題に直面しているのか。以下では、圧尊法が適用される場として(1)家庭、(2)軍隊、(3)職場に注目し、その現状および今後の動向をみていく。

(1) 家庭

儒教的思想に裏付けられていた昔の韓国では家父長制の大家族が一般的で、1950年から60年代にかけて祖父母を中心とした3世代が生活を共にすることはめずらしくなかった。その頃の祖父は一家の頂点に立っており、経済力と共に絶対的権威を持っていたと思われ、家庭内において圧尊法が守られていたことが容易に確認できる(召중진1976, 조근범1981)。しかし、近代化・都会化にともない核家族化が進んだ今日において、圧尊法により敬語が運用される場面はほとんどみられなくなった、といっても過言ではない。ただ、稀に中年の嫁が義理の両親に対して夫のことを話題とする際に圧尊法を用いることがあり、若干の痕跡を残しているが、こうした家庭も段々少なくなってきている。

家庭内での圧尊法の衰退の原因としては、家族制度の変化などによる祖父の家庭内地位の低下、また親子関係が親しい間柄(縦の関係から横の関係へ)になってきたことなどの社会的変化と深い関わりがあるものと考えられる。

(2) 軍隊

韓国には徴兵制度があり、心身共に健康な男性に義務付けられている。軍隊は強い規制によって上下関係が保たれる集団であり、その中でのごとくばづかいは軍律の基本となる。現在も軍隊において圧尊法による敬語が運用されていることは姜(1995)で報告されている。厳格かつ安定した序列関

係の存在する軍隊は、圧尊法による敬語の運用にうってつけの場であることは確かであり、今後も圧尊法は保持されていくものと予想される。

韓国人男性の兵役義務期間は、配属する部隊によって若干の差はあるが、約2年で、兵役を終えてから一般社会に復帰しても軍隊での経験は根強く残り、職場などでの敬語運用にも影響を及ぼすものと思われる。

(3) 職場

人が勤める職場は官庁、学校、銀行、病院、郵便局、貿易会社、ホテル、飲食店など、かなり広範囲にわたる。こうした数多くの職場の中で、圧尊法が使われる職場を特定することは難しい。しかし、上述したように圧尊法には序列関係を強調する形で運用されるといった特徴があることから、小規模で家庭的な雰囲気職場よりも、大規模で職位による上下関係がはっきりと区別されているような職場において出現頻度が高くなると思われる。また、場面的には職場内で特に部下(職位の低い人)が上司に業務上の報告をするようなフォーマルな場面において圧尊法による敬語の運用を迫られることが多い。以下は、話し手が平社員、聞き手が部長の場合の例である。

- 1) 김과장님이 그렇게 하라고 지시하시었습니다.
(金課長さまがそのようにしろ、と指示なさいました)
- 2) 김과장이 그렇게 하라고 지시했습니다.
(金課長がそのようにしろ、と指示しました)

上記の1)は話題の人物である課長を高めて待遇している例で、2)は圧尊法を適用した敬語行動の例である。興味深いことに、2)のように職場内で圧尊法を使用する人のほとんどが男性である。韓国では圧尊法に対する教育は高校の時から実施されていることが現行の高校の文法教科書(高等文法、1993年刊行)によって確認できる。にもかかわらず、圧尊法が主に男性専用の敬語法のように使われていることは、高校での教育の効果があるのではなく、むしろ軍隊経験の影響が強く反映されたものと考えられる(姜

1996)。

しかし、圧尊法が序列意識の強い一部の職場、しかもフォーマル場面において主に職位の低い男性によって運用されている点、そして堅苦しい関係よりも並列的な人間関係が好まれる社会風潮等を考慮すると、職場での圧尊法の使用も、やがて衰退の道を辿ることが予想される。

3. 目上への呼称表現と敬語行動

韓国語は、日本語同様、目上に対する2人称代名詞が発達していない。目上の人に使える人称代名詞として日本語では「あなた」「お宅」があり、韓国語では「당신(dangshin)」という表現が挙げられるが、これらは韓国でも日本でも相手との関係によって、その使用の許容範囲はかなり制限される。特に、「당신(dangshin)」は文語では尊称として間違いないが、口語では、不愉快、無礼、生意気な印象を与えやすいため、実際には言い争いなど感情が高ぶったときに用いられることが多い(姜1998)。したがって、厳密に言えば、韓国語には目上に使える代名詞はないのである。以下では、韓国語の目上に対する呼称形式やストラテジーに現れる対人関係を中心にみていく。

3.1 目上への呼称表現の類型と許容範囲

目上に対する適当な人称代名詞がない代わりに、韓国で用いられる主な呼称表現は大きく3つに分けられる。すなわち、姓名名称、身分名称、親族名称である。実際の行動では呼称を回避するストラテジーも見られるが、今回は取り上げず、ここではこれら3つの類型の特徴をそれぞれみていくことにする。また、比較的最近のことではあるが、「님(nim)」(以下、「nim」とする。)が2人称代名詞として単独で使われることがあり、「nim」の用法についても検討してみたい。

3.1.1 姓名名称

姓名名称には「姓」「名前」「姓名」の形態があるが、いずれの形態も目上には単独で用いることはできず、「裴勇俊+nim_J」、「裴勇俊+si_J」のように姓名に尊敬を表わす依存名詞「nim_J」および「刈(si_J)」(以下、「si_J」とする)をつける。「nim_J」は日本語の「様」「殿」にあたる表現であるが、「姓+nim_J」「名前+nim_J」という形ではほとんど用いられない。また、「姓名+nim_J」はフォーマルな場面で使用されることが多く、個人的な人間関係において口語として用いられることはほとんどない。一方、「si_J」は、日本語の「さん」「氏」にあたる表現で、「nim_J」よりも敬意度が低い。「姓+si_J」「名前+si_J」という形で用いると、見下したような印象を与えるため、目上に対しては使われない。また、「姓名+si_J」は目上への使用はかなり制限され、主に同等の親しくない成人同士で使われている。そのため、「si_J」の運用範囲は日本語の「さん」と比べると、かなり狭いといえる。

「姓名+nim_J」は、もともと文語で用いられる形式であるが、最近では口語の世界にまでその勢力が拡散されている。たとえば、銀行、病院、デパート、空港などで客を呼ぶときに、以前は「姓名+si_J」が使われることが多かったが、最近では「姓名+nim_J」のほうがよく使われ、かなり一般的な呼び方になっている。サービス産業の活性化が目覚ましい今の時代において、比較的敬意度の低い「姓名+si_J」にとって代わって「姓名+nim_J」が躍進している状況が観察される。その一方、役所などの公共機関では依然として「姓名+si_J」が使われることが多く、フォーマルな場での呼称として機能を果たしている。つまり、銀行、デパートなどの商業的サービス業か、税務署や役所などの公共サービス業かによって、待遇価値が異なる「nim_J」と「si_J」の使用状況に差異がみられ注目されるのである。さらに公共サービス業の所在が都会か田舎かによっても「nim_J」と「si_J」の使用率には差があることが予想され、今後の実証的な調査研究が期待される。

3.1.2 身分名称

身分名称は、社長、部長、教授などの肩書き、職名などを指すが、日

本語のように単独では使えず、目上には必ず尊敬接辞として「nim」をつけて待遇する。たとえば、韓国語では「金社長nim」のように「姓+身分名+nim」の形が普通である。姓の代わりに「姓名+身分名+nim」の形も可能である。また「身分名+nim」だけで呼ぶことも可能であるが、姓や姓名を前につけるよりは後者のように「身分名+nim」のほうがやや丁寧な印象を与える。

こうした身分名称は自分の属する職場の中の間人間関係、もしくは仕事の関係者との間で使用されることが普通である。しかし、韓国では職場や仕事とまったく関係のない人同士が身分名称で呼び合うことも珍しくない。たとえば、近所に自分より年上で会社での肩書きが部長である人がいたとしよう。家の前でその人に会ってたまに話す程度の人だったら、どう呼ぶか。こういう場合、日本では「姓+さん」のような呼称形式が普通であるが、韓国では「姓」もしくは「姓名」に「nim」や「si」をつけた形の姓名名称は使いにくく、実際の行動では呼称を回避するか、「身分名+nim」「姓+身分名+nim」のように身分名称を用いての呼び方がより一般的だといえる。いわゆる身分名称の虚構的用法といえるであろう。

韓国人が身分名称を使う場合には、基本的には相手を立てて待遇したいという意識がある。したがって、かなり主観的なことではあるが、相手の身分名が社会的に低い場合には、身分名称が呼称として選択されることがなくなる点にも注意したい。

3.1.3 親族名称

親族名称とは、「할아버지(おじいさん)」「아버지(おとうさん)」「아저씨(おじさん)」「아주머니(おばさん)=고모(姑母)/이모(姨母)」「형/오빠(にいさん)」「누나/언니(ねえさん)」などの親族名を指す。これらのうち、「고모(姑母)」は父方の女兄弟、「이모(姨母)」は母方の女兄弟のことを指して言う。ところで、血縁関係のない他人を親族名称で呼ぶことは日本語の呼称の大きな特徴といえる(鈴木1973)が、親族名称を虚構的に使う現象は韓国語にも見られ、日本では適用しにくい場面にまで、日常生活の中で頻繁に使われている。たとえば、韓国では会社や大学近辺の食堂の女主人に対して

「아주머니(おばさん)と呼ぶのが一般的であるが、より親密感を表すために「이모(姨母)や「고모(姑母)」と呼ぶことがある。また、大学の先輩に対して、親しくなった段階では「형/오빠(にいさん)」「누나/언니(ねえさん)」の形式が多用される。この両形式は会社において親しい先輩への呼びかけにも用いられることがあるが、社会人となると男性専用の呼びかけ形式の「형(兄さん)」は尊敬の接辞「nim」が付いた「형(兄)+nim(お兄さん)」が好まれる。ちなみに、これらの形式はフォーマルな場面では現れにくく、どちらかといえば同性間での使用に限定されることが多い。つまり、よほど親しくなければ会社内で異性に対して上記の親族名称を使うことはないといえる。

3.1.4 代名詞的用法としての「nim」の出現

これまで「nim」には、姓名名称の後に置く依存名詞と、身分名称および親族名称の後につける接尾辞として二つの用法があることを取り上げた。これらは韓国語で表記する場合にも違いがある。たとえば「nim」が依存名詞として使われる場合は「배용준 님(裴勇俊 nim)」「용준 님(勇俊 nim)」のように「姓名」と「nim」の間に空白を入れて分かち書きをする。それに対して、接尾辞として使われる場合には、「사장님(社長 nim)」「교수님(教授 nim)」のように分かち書きをしない。

最近、インターネット上では相手に対して「nim」を単独で使うことがあり、これまでの用法とは異なる代名詞としての新しい用法が頻繁に出現しているといった報告がなされている。이정복(2000)は「nim」の使用実態について、普段の日常生活とインターネット上での使い方について調べている。とくにインターネット上での使い方に関しては文語的性向の強い掲示板と口語的性向の強いチャットルームに分けて分析している。その結果、日常生活で「nim」が単独で代名詞として使われることはほとんどないが、掲示板とチャットルームでは頻繁に使われていることが明らかにされた。また、代名詞としての「nim」は、年齢や職業など相手に対する情報があまりない人間関係で出現しやすいことも報告されており、つまり「nim」は「非親密性」「匿名性」という環境で現れやすいことがいえる。

インターネットという限られた空間的制約、そして文語という制約はあるものの、見知らぬ相手への敬意を示すために新しく誕生した「nim」の代名詞的用法は、社会的必要性に応じて分化発展した言語現象として注目される。

3.2 呼称をめぐる韓国人の敬語行動

3.2.1 呼称行動の事例(男性同士)

以下では、上記で述べたそれぞれの表現形式が、実際にはどのように運用されているのかについて探るため、実際の会話場面での使用傾向として次の3つの事例を紹介する。

<事例1>: 「親族名称」→「親族名称」

年下からの親族名称への切り替え提案

身分名称・親族名称の虚構的用法

大学教員であるK(47)は、同じマンションに住むP(50)と1年前に知り合った。KとPの子供は同じ年で、同じ中学校に通っている。子供の友達のお父さん同士という関係で知り合った二人は、当初「子供の名+아빠(パパ)」と呼びあった。両家族が集まって食事をしたり、KとPの二人で酒を飲むようになったある日、年齢のことが話題になり、PがKよりも年上ということがわかった。KはPに対して「형(兄)+nim(お兄さま)」と呼ぶことを提案した。それ以降、KはPを「兄+nim(お兄さま)」と呼び、PはKを「子供の名前+아빠(パパ)」または「姓+教授」(尊敬接辞「nim」のない形)と呼ぶようになった。

<事例2>: 「Ø」→「身分名称」

身分名称の虚構的用法

K(47)とJ(45)は、5年前にゴルフ練習場ではじめて出会った。Jは練習場に知り合いが多いようで、周囲の人から「姓+課長」または「兄+nim(お

兄さま)」と呼ばれていた。KとJがあいさつを交わし、ゴルフに対する話をするようになったところ、Kは周囲を真似て、Jを「姓+課長+nim」と呼んだが、JはKに「저기(あの)」などと呼びかけ、呼称を回避するストラテジーをみせた。二人の距離感が縮まりはじめ、練習終了後一緒に食事に行くようになり、JはKの年齢や職業を知ってからKのことを「教授+nim」または「姓+教授+nim」と呼ぶようになった。一方、KはJに対する呼称を変えることはなかった。その後は特に親しくなる機会のないまま付き合いが続いているが、呼称に変化はみられない。

<事例3>: 「Ø」→「身分名称」→「親族名称」
 年下からの親族名称への切り替え提案
 身分名称・親族名称の虚構的用法

K(47)とH(43)は、1年前に同じスポーツクラブに通う会員として出会った。出会ってからしばらくは日常会話は交わすものの、互いを呼び合うことはなかった。ある日、Kがクラブ会員の集まりに出席すると、隣の席にHが座ることになった。これをきっかけに二人は意気投合し、互いの職業や年齢などの情報を交換したのち、Kは保険会社の社長をしているHを「姓+社長」、HはKを「教授+nim」と呼ぶようになった。半年後、HはKに自分に対して敬語を使わないことを提案した。Kがその提案を受け入れた後、HはKを「兄+nim(お兄さま)」または「名+兄」と呼び、KはHを「名のみ」で呼ぶようになった。状況によっては相手の面子をたてるために身分名称を使うこともあるが、敬語を崩した形で普段呼び合うようになったことで、今まで以上に親しみが増し、互いに何でも気兼ねなく話せるようになった。

3.2.2 呼称行動の特徴

韓国人は、目上もしくは知り合ったばかりの人との関係において、親しくなる前の段階では呼称表現の選択に大変悩まされる。この背景には、上述したように、韓国語には目上に対して使える適当な人称代名詞がなく、

姓名呼称の使用にもかなりの制約があるということが考えられる。また、このような言語事情が、韓国社会における身分名称と親族名称の虚構的用法の発達につながったと考えられる。

悩んだ末に選択された呼称表現は、のちに相互の距離が近づくとつれて、変化が起きる。この変化は、互いに好感をもって親しくなろうという相互の意思により起こるもので、年齢の上下が大枠の基準を定める際の大きな目安となる。韓国人の呼称変化に至るまでのストラテジーや過程を観察すると、次のような特徴があることがわかる。

- ① 目上の人に対する呼称表現は、親しくなるにつれて、「 \emptyset 」→「姓名名称」・「身分名称」→「親族名称」の順に変化する。ただし、「 \emptyset 」→「親族名称」、「姓名呼称」→「親族名称」へと発展することはあるが、一度「親族名称」の関係に発展してからは、ある意図(冗談、フォーマルなど)をもつ特別な場合を除いて、「親族名称」→「姓名名称」・「身分名称」へと戻ることはほとんどない。
- ② 他の呼称表現から「親族名称」への変換を提案できる主体はふつう目下となる。つまり、よほどのことがない限り、目上から提案することはない。こうした行為は、自分が相手より下の立場であるということとを認めることで、親密度を高めたいという自己表明である。この提案に相手が同意すると、心の距離が急速に縮まり、より一層親しみが増すことになる。
- ③ 「親族名称」への切り替えは、スピーチレベルにも影響を与える。たとえば、呼称が「名+兄」もしくは「兄」になれば、述部も敬語形式のない常体(ぞんざいなことば)になりやすい。ただし、親族名称でも「兄+nim(お兄さま)」のように尊敬の接辞「nim」がつくと、常体にはなりにくい。

4. まとめ

以上、本稿では韓国に古くから存在する「圧尊法」という敬語法の歴史や現在の運用実態を探ることで、社会構造の変化とともに衰退しつつある敬語の姿を捉えた。また、韓国人の呼称表現を中心に、表現形式の類型やその運用実態から韓国人の敬語行動の特徴について述べた。

圧尊法とは、絶対的権威者である聞き手をより絶対化するために話題の人物に対しては敬意を示さないという形式であり、日本の相対敬語的な特徴を持っている。これは身分制度が存在していた朝鮮時代から厳しい上下関係の中で、序列関係を強調するために運用されていたが、身分制度の崩壊後、圧尊法が用いられる場面は少なくなってきている。そこで本稿では、圧尊法が適用される場に注目し、その現状および今後の動向について述べた。

まず、家庭内では、稀に中年の嫁が義理の両親に対して夫のことを話題とする際に圧尊法を用いることがあり、若干の痕跡を残しているが、こうした家庭も段々少なくなってきている。次に、厳格かつ安定した序列関係の存在する軍隊は、圧尊法による敬語の運用にうってつけの場であることが確かであり、今後も圧尊法は保持されていくものと予想される。職場のなかでも圧尊法は序列意識の強い一部の職場、しかもフォーマルな場面において主に職位の低い男性によって運用されるといった傾向が強い。しかし、堅苦しい縦関係よりも並列的な人間関係が好まれる社会風潮等を考慮すると、職場での圧尊法の使用も、やがて衰退の道を辿ることが予想される。

韓国語には目上に対して使える適当な人称代名詞がなく、姓名名称の使用にもかなりの制約がある。そのため、目上もしくは知り合ったばかりの人との関係において、親しくなる前の段階では呼称表現の選択に大変悩まされる。このような時、韓国では身分名称、親族名称がよく用いられる。

親族名称を虚構的に使う現象は、韓国語に多く見られ、日本では適用し

にくい場面にまで頻繁に使われる。また、自分の属する職場とはまったく関係のない場面において、近隣の人同士が身分名称で呼び合うことも珍しくない。このような親族名称や身分名称の虚構的用法は日常生活の中でよく用いられ、序列関係を維持しながらも、呼称表現によって親疎関係を調節する傾向が見られる。

以上、韓国では軍隊のような序列関係の厳しい場以外では圧尊法が衰退していく傾向がある一方で、目上や親しくない相手に身分名称や親族名称を虚構的に用いながら、上下関係および親疎関係を調節する言語生活を垣間見ることができた。

<参考文献>

- 金重鎮(1976)「全北 高敞 地域語の 敬語法 研究」『국어국문』18 전북대학교 pp.175-223
- 김혜숙(2000)「높낮이 말씨의 변화 양상」『현대국어의 사회적 모습과 쓰임』월인서정수(1984)『존대법의 연구』한신문화사
- 이정복(2000)「통신 언어로서의 호칭어 ‘남’에 대한 분석」『사회언어학』8-2 한국사회언어학회 pp.193-221
- 曹奎範(1981)「韓國語의 主體尊待補助語幹 ‘시’에 대한 考察」『논문집』15 밀양농잠전문대학교 pp.1-24
- 姜錫祐(1995)「日韓における軍隊敬語の実態」『待兼山論叢』29 号大阪大学文学部 pp.31-48
- 姜錫祐(1996)「韓国の企業敬語における日本語の影響をめぐって」『世界の日本語教育』6号 国際交流基金日本語国際センター pp.219-235
- 姜錫祐(1998)「待遇行動としての韓国語における呼称」『日本語学』17巻9号明治書院 pp.50-53
- 姜錫祐(2000)「教員社会における敬語運用と規範意識」『20世紀フィールド言語学の軌跡』変異理論研究会編 摂河泉文庫 pp.109-122
- 姜錫祐(2001)「話題にのぼる上位人物に対する敬語運用—市役所職員を対象にした調査結果から—」『社会言語科学』第4巻第1号 社会言語科学会 pp.91-102
- 姜錫祐(2003)「日本人の敬語運用についての一考察—対照社会言語学語学の観点から—」『日本學報』57輯1巻 韓國日本學會 pp.1-12
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書

접 수 일: 12월 31일
 심사완료: 01월 08일
 게재결정: 01월 29일

<要旨>

한국어의 경어운용과 변화의 동향

— 압존법과 호칭표현을 중심으로 —

본고는 사회구조의 변화와 함께 변해가고 있는 한국어의 경어체계에 대해 ‘압존법’에 주목하여 그 특징과 현재의 운용실태를 살펴보고 향후의 동향에 대해서 개관하였다. 또한 한국어의 호칭표현을 중심으로 표현형식의 유형과 운용실태를 살펴봄으로써 한국인의 경어행동의 특징에 대해 분석하였다.

압존법은 절대적 권위자인 청자를 보다 절대화하기 위해 화제의 인물에 대해 경의를 표하지 않는 형식으로써 일본의 상대경어적인 특징이 있다. 이는 신분제도가 존재했던 조선시대부터 엄격한 상하관계 속에서 서열관계를 강조하기 위해 운용되었지만, 신분제도의 붕괴 후, 압존법의 사용 장면은 매우 적어지게 되었다. 본고에서는 ‘가정’ ‘군대’ ‘직장’에서의 현재의 운용실태와 향후의 동향에 대해 살펴보았다.

다음으로, 본고에서는 한국어의 호칭표현의 특징 중에서 특히 윗사람에게 사용할 수 있는 호칭표현에 대해 주목하여 분석하였다. 한국어에는 윗사람에게 사용할 수 있는 적당한 인칭대명사가 없고, ‘성명명칭’의 사용에도 많은 제약이 따른다. 따라서 ‘신분명칭’과 ‘친족명칭’이 많이 사용되고 있다. ‘친족명칭’을 허구적으로 사용하는 현상은 한국어에도 보이며, 일본인이 적용하기 어려운 장면에도 빈번히 사용된다. 또한 자신이 속한 직장과 전혀 관계가 없는 이웃끼리 ‘신분명칭’으로 호칭하는 경우도 적지 않다. 이와 같은 ‘친족명칭’ ‘신분명칭’의 허구적 용법은 한국인의 일상생활에서 쉽게 찾아볼 수 있으며, 서열관계를 유지하면서 호칭표현에 의해 친소관계를 조절하는 경향이 있음을 알 수 있었다.

準備、用意、支度の使い分けに関する研究*

金昌奎**

kcg2@pusan.ac.kr

< 目次 >

>

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 3.2 「準備」と「支度」が可能である場合 |
| 2. 一語のみ可能である場合 | 3.3 「用意」と「支度」が可能である場合 |
| 2.1 「準備」のみ可能である場合 | 4. 三語ともに可能である場合 |
| 2.2 「用意」のみ可能である場合 | 5. 「はじめに」に取り挙げた問題の解説 |
| 2.3 「支度」のみ可能である場合 | 6. 結び |
| 3. 二語が可能である場合 | |
| 3.1 「準備」と「用意」が可能である場合 | |

Key Words : 유의어(synonym), 철저한 준비(total preparation), 가벼운 준비(minial preparation), 심적인 준비(mental preparation)

1.はじめに

「準備」「用意」「支度」は以下の(イ)(ロ)(ハ)で見えるように言い換えが可能な類義語であり、三つとも韓国語「준비」に当たるものである。故に、韓国人の日本語学習者にとってこの三つの語の使い分けはとても難しく、その使い分けを究明する必要があると考えられる。

* 이 논문은 2009년도 부산대학교 인문사회연구기금의 지원을 받아 연구되었음.

**釜山大学校、日本語学

- (イ) 旅行の{準備/用意/支度}をしている。
- (ロ) 午前六時には、ちゃんと女房がめしを炊いて、いつ客がご入来してもよろしいよう{準備/用意/支度}し、夜は十時まで商売した。(ao)
- (ハ) 海水浴へ行ったときと同じで、俺は{準備/用意/支度}するものは何もない。強いて言えば金銭面だ。(ya)

一方、「準備」「用意」「支度」は以下の(二)で見ると、a、b、c、dが意味上似たものであるが、「時間副詞」および「主体」の差によって使い分けが違ってくともわかる。

- (二) a、幕があと一時間で上がりますから、役者さんは{支度 /?準備 / * 用意}してください。
- b、幕があと一時間で上がりますから、照明さんは{準備 / * 用意 / * 支度}してください。
- c、幕がすぐ上がりますから、役者さんは{用意 /?準備 / * 支度}してください。
- d、幕がすぐ上がりますから、照明さんは{準備 /?用意 / * 支度}してください。

「準備」「用意」「支度」の使い分けに関する従来の研究論文は全然見当らない。ということで、辞書類に出ている使い分けをいくつか挙げてみると、以下のようなものである。

1) 外国人のための基本語用例辞典

- 準備：物事をする前に、すぐ始められるように物をそろえたりして用意すること。→→ したく、用意
- 用意：これからすることがうまくいくように、そのまえにいろいろとしておくこと。→→ 準備、支度
- 支度：何かをする前に、それらのためにいろいろ準備すること。→→ 用意、準備

2) 類語例解辞典

- * 共通の意味：あることを行うにあって、前もって整えておくこと。
- 準備：物事を行うために、あるいは将来起る事に対応できるように必要な物や条件整えること。
- 用意：物事を行うために必要な物や条件を整えること。
- 支度：やや話し言葉的な表現。食事や服装についていうことが多い。

3) 日本語基本動詞用法辞典

- 準備する：何か行うために、それに必要なものを整える。または、食事を用意する。
- 用意する：物事がうまくいくように、前もって必要なものを整える。
- 支度する：何か行うために、それに必要なものを整える。

以上のことから見ると、「準備」「用意」「支度」の使い分けはまだはっきり定まっていないことがわかる。このような事情で、以下では「一語のみ可能である場合」と「二語が可能である場合」と「三語ともに可能である場合」に分けてその使い分けに関して説明していくことにする。

2. 一語のみ可能である場合

2.1 「準備」のみ可能である場合

(1) 上演の{準備/*用意/*支度}が終わって、やっと家に帰ることができました。

(1)において「準備」が用いられているが、「上演の準備」は計画的(企画的)、多次的かつ徹底的な準備が要されるもので、結果的に時間および過

程(段階)が必要になる。

- (2) その間受験の{準備/ * 用意/ * 支度}でめっちゃめっちゃ忙しかった。
- (3) あすは試験がありますが、まだ何の{準備/ * 用意/ * 支度}もしていません。

(2)(3)における「受験の準備および試験の準備」も(1)における「上演の準備」のように時間のかかる徹底的な準備が要されるものであり、この時も「準備」が用いられている。

- (4) 勉強に対する準備が足りないと、ほかの人よりおくれます。

(4)における「勉強の準備」も「上演の準備」および「受験、試験の準備」と同じく十分な時間のかかる徹底的な準備が要されるものであり、この時も同じく「準備」が用いられていることがわかる。

- (5) 旅行の{準備/ * 用意/ * 支度}が着々進んでいる。

(5)においては、「着々進んでいる」という語句から見て「旅行の準備」は過程的、段階的、体系的、徹底的に行われていることがわかる。この時も「準備」が用いられている。

- (6) 面倒だった栄養価計算も食診断も、今まではみんなパソコン処理。だから情報処理の時間もたっぷり{準備/ * 用意/ * 支度}しました。(ya)
- (7) 韓国の抑明桓外交通商相は10日、北朝鮮が再び核実験を{準備/ * 用意/ * 支度}をしている兆候があるとした米テレビの報道について「主定的に確認できる情報ではない」と語り、実験の可能性を否定した。(朝)

(6)における「情報の処理」は時間のかかる体系的、徹底的な準備が要されるものであり、(7)における「核実験」は「情報の処理」の問題よりもっと時間をかけてする徹底的な準備が要されるものである。ここにおいても注意してする徹底的な準備が要される時は「準備」が用いられていることが

わかる。

以上のことから、一応「準備」は時間を要する段階的、過程的、計画的かつ徹底的な準備の場合に用いられるものであることがわかる。

- (8) 2005年から極秘裡に米国進出を{準備/ * 用意/ * 支度}してきたBOAは、記者会見で、3年間{準備/ * 用意/ * 支度}してきたプロジェクトをスマートに発表する計画だった。(朝)

(8)においてBOAは米国進出のために時間と手間をかけて計画的かつ徹底的な準備をしてきたことがわかるし、このことから「準備」は今まで見てきたように時間および手間のかかる計画的、体系的、徹底的な準備が要される時に用いられるものであるということがわかる。

- (9) 県消防防災課は「防火管理者を決めて{準備/ * 用意/ * 支度}しておかなければいざというときに何もできず、被害が拡大する」と指摘する。(読)

(9)における「消防防災課の仕事」というものも手間、暇のかかる計画的、具体的かつ徹底的な準備が要されるものであり、ここにおいても「準備」が用いられている。

- (10) 入学式準備。2008、4、4。今日は新六年生の初仕事の日です。新しい年度のスタートに向けて{準備/ * 用意/ * 支度}します。最初にそれぞれの仕事の分担を決めます。トイレもばっちりきれいにします。階段も隅々まで丁寧にはきます。(ya)

(10)においても、文の内容から見て「準備」は実際的かつ具体的に時間をもって一つ一つ点検していくというような徹底的な準備の場合に用いられていることがわかる。

今まで説明してきたものを一言で言うと、「準備」は時間をかけてする計画的、体系的、段階的かつ徹底的な準備が要される時に用いられるものであると言える。

2.2 「用意」のみ可能である場合

(11) 救急車には寝台が{用意 / * 準備 / * 支度}りしてあります。(国)

(11)において、「用意」は応急患者のために前もって寝台を準備しておいたという意として使われている。「用意」は何々のために前もって気を使って準備しておくという意として使われているのである。

(12) 万一の時の{用意 / * 準備 / * 支度}ですので、気にしないでください。

(12)において、「用意」はもしかして起こるための前もって準備しておくという意として使われている。ここにおいて文の焦点は完了・完備を前提とした心構え的な準備に置かれている。

(13) 明日の試験には三角定規を{用意 / * 準備 / * 支度}してください。

(13)において、「用意」は明日「三角定規」を忘れないで前もって準備して持ってきてくださいという意味で使われている。ここにおいても文の焦点は前もって気を使って準備しておくところに、すなわち完備を前提とした心構え的な準備のところに置かれているのである。

(14) 午前から雨が降るそうですから、雨具の{用意 / * 準備 / * 支度}をして行きなさい。

(14)において、「用意」は雨が降ることに備えて前もって気を使って「雨具」を準備しておくという意味で使われている。(15)における「用意」も完備を前提とした心構え的な準備のところに焦点が置かれる時に用いられて

1) 本稿において?、??、*の順に文の許容度が下がる。

いる。

(15) {用意 / * 準備 / * 支度}ドン！

(15)における「用意」は気づかい自体を表す「用意」である。要するに、心構え的な準備自体に焦点が置かれている「用意」なのである。試合などではすでに時間と過程を要する練習(準備)が終わって最後に心の準備、すなわち心がけだけが残るからである。(15)は完璧に心がけ、すなわち心構え的な準備に焦点が当てられている場合である。

(16) 私の家にはお金の{用意 / ? 準備 / * 支度}ができないので、それを買うことができません。(基)

(16)における「用意」は何かを買うために前もってお金を準備しておくという意味で使われているが、文の焦点がお金を完備するところに置かれている。ここにおいてお金を準備するのに過程ないし段階が必要な時は「準備」もある程度は許容される。が、ここにおいては過程よりは完備のところに焦点が置かれているので「準備」よりは「用意」を使った方がいい。

(17) 今数学と云ったが、では数学は何を生産する心算か。数学は実は何も生産はしない。之は物を造るための認識のために、その形式や範型や方式を{用意 / * 準備 / * 支度}するにすぎない。(ao)

(17)において、「用意」はある物を造るための認識のために前もってある形式や範囲などを準備しておくという意味で使われている。ここにおいて「用意」を用いることによって文の焦点は何々のために前もって気を使って準備しておくというところに、いわば、心構え的な面と同時に完備の面に置かれるので形式や範型や方式が三つの概念としてではなく一概念として、すなわち形式や範型や方式が一まとまりとして受け入れられているのである。

(18) 著作権保護の対象とする、創作的な表現にも、万人の共用を許す「青空」としての性格がある。すでに生み出された表現を分かち合うに焦点を絞れば、あらためて著作権制度を{用意 / * 準備 / * 支度}する必要はないはずだ。(ao)

(18)における「用意」は前もって気を使って著作権制度を準備しておくという意味として使われている。要するに、(18)においても著作権制度の準備に対する心構えと完備の面に焦点が置かれているのである。

ここまで説明してきたものをまとめると、「用意」は「前もって気を使って準備しておく」という意として使われるものであり、その時、文の焦点は「前もって気を使う」というところ、「準備しておく」というところに同時に置かれるが、文脈によってその重心は前者の方に傾ける場合もあるし後者の方に傾ける場合もある。要するに、「用意」の文において、文の焦点は心構えと完了・完備の両面に同時に置かれるが、その程度の差は文脈の環境によると言える。

2.3 「支度」のみ可能である場合

(19) 武蔵は旅{支度 / * 準備 / * 用意}を終えた。

昔の「旅」というものはしょっちゅうある家出ぐらいのことであり、「旅支度」というものも旅のための日常的なあまり変わりのない軽い身支度などの準備である。ここにおいて「支度」は日常的であり、かつあまり変わりのない身支度などのような準備の場合に使われている。

(20) 貴子さんは身{支度 / * 準備 / * 用意}をととのえて、車が来るのを待った。

「身支度」とは身のまわりの軽い準備、すなわち日常的なあまり変わりのない軽い単純な準備である。ここにおいても「支度」は身のまわりの日常

的な軽い準備の時に使われている。

(21) 山はすでに冬{支度 / * 準備 / * 用意}を始めていた。

「山の冬支度」の場合はいつものように毎年行われる変わりのない準備である。ここにおいて、「支度」は反復的に行われるあまり変りのない準備の場合に使われている。

(22) 競技場には帰り{支度 / * 準備 / * 用意}をする選手だけが残っていた。

競技場での「帰り支度」というものは単純に着替えとか道具などを揃えるくらいの準備である。ここにおいても、「支度」は日常的であり、かつあまり変わりのない準備の場合に使われている。

(23) 雨{支度 / * 準備 / * 用意}をしないで出た日に限って、雨が降る。

「雨支度」とは雨に備えて雨具を揃えるくらいの単純かつ軽い準備である。ここにおける「支度」も単純かつ変わりのない日常的な軽い準備の場合に使われている。

(24) 久しぶりに和服を着ようと思ったら{支度 / * 準備 / * 用意}に手間どってしまった。(国)

文の内容から見て「支度」は前もって準備しておくという心構え的な準備ではなく急に生じた身なりの準備の問題と関連のあることがわかる。ここにおいても「支度」は身なりなどのような軽い準備の場合に使われているのである。

(25) 貧血。今日は目が覚めたら1時間目の授業が始まる20分前でした！……「どうして目覚まし鳴らなかったんだろう？」と目覚まし代わりにしているケー

タイ……大慌てで{支度 / * 準備 / * 用意}してご飯も食べずに学校へ。
(ya)

「大慌てでご飯も食べずに学校へ」ということから、ここにおける「支度」は簡単に身支度をして学校へ行くという意として使われていることがわかる。このことから「支度」は身なりなどのような単純かつ軽い準備の場合に使われていることが確認できる。

ここまで説明してきたものをまとめると、「支度」はあまり変わりのない身のまわりのことや日常的な単純かつ軽い準備の場合に使われるものであり、そのため、「支度」を使うと、文の焦点は「準備」の文とは異なって皮相的かつ表面的な面に置かれるようになる。「支度」が主として「名詞+支度」の構造をしているのも身のまわりのことなどで反復的かつ習慣的に頻繁に使われていたからである。

3. 二語が可能である場合

3.1 「準備」と「用意」が可能である場合

(26) 自分は汽車旅行をする時はいつでも二十万分之一と五万分之一との沿線地図を
{用意 / 準備 / * 支度}²⁾して行く。(地)

「前もって揃えておく」という意味では「用意」でも「準備」でも同じであるが、「用意」の方が旅行の準備に必要なものを前もって気を使って準備しておくというところに焦点があり、比較的簡単に揃えることができるようなイメージがしている。「準備」の方は前もって揃えるのに手間や時間がかかり、割りと大掛かりなイメージがしている。これは「用意」は「準備」よりは心構え的な面に焦点がある表現であり、「準備」は時間要する具体的、

2) 「用意」「準備」「支度」の順は原文の使用が優先であり、作例の場合においては自然さが優先である。

体系的な面に、すなわち実際性に焦点がある表現であることを意味する。

(27) よいスピーチをするには、それなりの{用意/準備/*支度}がいる。(国)

「用意」を使うと、よいスピーチをするために前もって気を使って準備しておくというところに焦点が置かれるし、「準備」を使うと、よいスピーチをするために計画的、具体的、徹底的に準備をするというところに焦点が置かれる。要するに、よいスピーチをするには心構え的な面に焦点が置かれてもいいし、具体的かつ徹底的な面に、すなわち実際性に焦点が置かれてもいいのである。

(28) あすの旅行の{準備/用意/?支度}があるから、今日はたいへん忙しい。(基)

「準備」は過程的、段階的かつ徹底的な準備の場合に使われるので、「準備」を使うと、実際性が浮彫りにされる。一方、「用意」は「準備」よりは心構え的な面に焦点が置かれるので、「用意」を使うと、細心の気づかひが浮彫りにされる。旅行をするためには計画的、徹底的な準備、すなわち準備の実際性に焦点が置かれてもいいし、前もって気を使ってする準備、すなわち準備の心構え的な面に焦点が置かれてもいいので、「準備」も「用意」も可能である。「支度」の場合は身支度などのようなあまりにも軽い準備なので普通徹底的な準備が要される「旅行」とはあまり似合わない。

(29) お産後に必要なバットや清浄綿は当院で{準備/用意/*支度}していません。(ya)

病院などでの患者のための準備は体系的かつ徹底的に行わなければならないので「準備」が使われている。物品などを前もって気を使って準備しておくという意としては「用意」も可能である。要するに、徹底的な準備のところに焦点が置かれる時は「準備」が、気づかひと完備のところに焦点が置かれる時は「用意」が使われるのである。

- (30) 彼はまじめな学生で、毎日質問を{用意 / 準備 / * 支度}してきて、先生に聞きます。

「用意」を使うと、前もって気を使って質問を準備しておくというところに焦点が置かれるし、「準備」を使うと具体的かつ徹底的に質問を準備するというところに焦点が置かれる。ここにおいても、「用意」は心構えと完備の両面焦点が置かれる場合に使われているし、「準備」は具体的かつ徹底的な準備に、すなわち準備の実際に焦点が置かれる場合に使われている。

- (31) 土曜の午後、パリの各停車場には、夫たちを運ぶ汽車が{準備 / 用意 / * 支度}されてある。(海)

「準備」を使うと、具体的、体系的かつ計画的に汽車を準備しておくというところに焦点が置かれるし、「用意」を使うと、前もって気を使って汽車を準備しておくというところに焦点が置かれる。文(31)においても「前もって調べて(揃えて)おく」という意味では「準備」も「用意」も同じであるが、具体的、体系的、徹底的な準備のところを置くか若しくは心構え的な準備のところを置くかによって「準備」と「用意」の使い分けが違ってきているのである。

- (32) あなたは新婚旅行費として、どのぐらい{準備 / 用意 / * 支度}していますか。

「準備」を使うと、計画的、徹底的、具体的な面に、すなわち実際の状況に焦点が置かれるのでせっぱつまった感じがする。一方、「用意」を使うと、前もって気を使って準備しておくというところに、すなわち気づかいの面と完備の面に同時に焦点が置かれるので、せっぱつまった感じがしない。

- (33) 患者の気持が落ち着くように、クラシック音楽を流している他、待ち合いコースには無料のあめも{用意/準備/*支度}している。(ao)

「用意」を使うと、「クラシック音楽」と「無料のあめ」が一要素化、すなわち、概念化になっているような感じがする。それは「用意」の用法が過程、段階を重視するのにあるのではなく、完了・完備の面を重視するのにあるからである。要するに、「用意」の用法のため「クラシック音楽」と「無料のあめ」が二つの概念ではなく「クラシック音楽と無料のあめ」という一つ概念として感じられるのである。一方、「準備」を使うと、具体的かつ実際的な感じ、すなわち「クラシック音楽」と「無料のあめ」が各々具体的に二要素として羅列されているような感じがする。それは「準備」を使うと、具体的、徹底的な面、すなわち実際的な面に焦点が置かれ、「クラシック音楽」と「無料のあめ」は別々の要素として具体的に羅列されているような感じがするからである。

以上のことをまとめると、以下のようである。

- 1) 「前もって調べて(揃えて)おく」という意味では「準備」も「用意」も同じであるが、「準備」を使うと、時間を要する具体的、体系的、徹底的な準備のところに焦点が置かれるので準備の実際性が浮彫りにされる。そして「準備」の方が「用意」よりは前もって調べて(揃えて)おくのに手間や時間がかかり、割りと大掛かりなイメージがする。
- 2) 「用意」を使うと、個々のために前もって気を使って準備しておくというところに、すなわち気づかひの面と完了・完備の面に焦点が置かれるので「準備」よりは真心が伝わりやすいし、完了・完備というイメージが強くなる。そして「準備」よりは「前もって」「あらかじめ」という意味が強いし、比較的簡単に調える、揃えることができるようなイメージがする。
- 3) 実際性に焦点を置くか心づかいおよび完了・完備の面に焦点を置くかによって「準備」と「用意」の使い分けは違ってくる。

3.2 「準備」と「支度」が可能である場合

(34) ゆっくり{支度 / 準備 / *用意}してください。

文(34)においては、身のまわりのこととか単純に道具などを揃えるくらいの準備の意として使われてもいいし、「ゆっくり」という表現から感じられるように過程性を重視する徹底的な準備の意として使われてもいいので、「支度」も「準備」も可能になっている。「用意」は心構え的な面と完了・完備のところに焦点が置かれる表現なので過程性を重視する「ゆっくり」表現とは合わない。

(35) 今晚ご飯の{支度 / 準備 / *用意}をやっていますか。

文(35)においては、日常的な軽い晩ご飯の準備の意として使われてもいいし、計画的、徹底的な晩ご飯の準備の意として使われてもいいので、「支度」も「準備」も可能になっている。が、この文において「準備」を使うと大変なことを行うような気がするので「準備」よりは「支度」を使った方がいい。しかし、「ちゃんと晩ご飯の準備をやっています」という表現のように徹底的な準備を要する場合は軽い準備の時に使われる「支度」は使用されにくい。

(36) そんなこと考えないで、財布とカギだけもって、さっと家を飛び出すことです。途中、後悔することもあります。……出かけないといけなないので{支度 / 準備 / *用意}する気がおきません。今すぐ、バット行動できる、なにか良い方法があったら考えてください。(ya)

文(36)は、身支度などのような軽い準備の意として使われてもいいし、

時間を要する徹底的な準備の意として使われてもいいので、「支度」も「準備」も可能になっているが、文(36)においてはさっさとする軽い準備の意として使われやすいので「準備」よりは「支度」を使うのがよい。「用意」は心構え的な面と完了・完備のところに焦点が置かれる表現なので実際性と関係のある「(今)出かけないといけないのに」というさしせまった表現とは合わない。

この章においても、今まで見てきたように「準備」は手間、暇のかかる計画的、具体的、徹底的な準備の意として使われるものであり、「支度」はあまり変わりのない日常的な軽い準備の意として使われるものであるということが確認できた。この章において、「準備」と「支度」の使用例が「準備」と「用意」の使用例より非常に少ないということがわかるが、それは「準備」と「支度」には「準備」と「用意」に見られるような共通の意味、すなわち「前もって調べて(揃えて)おく」というような意味的な共通性がないからである。

3.3 「用意」と「支度」が可能である場合

(37) ぼくが起きるころ、父はもう会社に出かける{用意 / 支度 / * 準備}をしている。(国)

文(37)は、心構え的な面に焦点が置かれる準備の意として使われてもいいし、身支度などのないいつものようにする軽い準備の意として使われてもいいので、「用意」も「支度」も可能になっている。「準備」は計画的、具体的、徹底的な準備の場合に使われるものなのでいつものように会社に出かけるためにする軽い準備とは合わない。

(38) 外出の{用意 / 支度 / ? 準備}は早くして!

文(38)においても、気づかいのところ、すなわち心構え的な準備の意と

して使われてもいいし、身なりなどのような軽い準備の意として使われてもいいので、「用意」も「支度」も可能になっている。「準備」は計画的、具体的、徹底的な準備の場合に使われるものなので気軽に家を出るくらいの「外出」とは合わない。

この章においても、今までの説明の通りに、「用意」は前もって気を使って調べて(揃えて)おくというところに、すなわち心構え的な面と完了・完備の面に焦点が置かれる場合に使われるものであり、「支度」はあまり気を使う必要のない軽い準備の場合、すなわち身なりとか道具などを揃えるくらいの軽い準備の場合に使われるものである、ということが確認できた。そして、「用意」と「支度」の使用例が非常に少ないのは、「用意」と「支度」には前章で見たように「準備」と「用意」に見られるような意味的な共通性がないことと、「気づかい」という角度から両語は全く逆の表現として使われていることに起因すると言える。

4. 三語が可能である場合

(39) もう食事の{用意 / 準備 / 支度}ができていますか。

「用意」は前もって気を使って調べて(揃えて)おく準備の場合に使われるものなので、「用意」を使うと文は食事の準備の完了の状態が浮彫りにされるし、「準備」は計画的、徹底的な準備の場合に使われるものなので、「準備」を使うと文は具体性および実際性が浮彫りにされるし、「支度」は道具などを揃えるくらいの日常的な軽い準備の場合に使われるものなので「支度」を使うと文は皮相的かつ表面的な面が浮彫りにされる。

(40) 彼は今旅行の{準備 / 支度 / 用意}をしています。

「準備」は計画的、具体的、徹底的な準備の場合に使われるものなので、

「準備」を使うと文は旅行の準備の具体性ないし実際性が浮彫りにされるし、「支度」は道具などを調える(揃える)くらいの軽い準備の場合に使われるものなので「支度」を使うと文は旅行の準備の皮相的かつ表面的な面が浮彫りにされるし、「用意」は前もって気を使って調べて(揃えて)おく準備の場合に使われるものなので、「用意」を使うと文は旅行の準備の心構え的な面が浮彫りにされる。

(41) 旅行の{準備 / 支度 / 用意}は早くして！

「旅行の準備」は計画的かつ徹底的な準備になる可能性もあるし、道具などを揃えるくらいの軽い準備になる可能性もあるし、前もって気を使っていろいろのものを調べて(揃えて)おく準備になる可能性もある。すなわち、文はその時の状況によって解釈が可能なので「準備」も「支度」も「用意」も許容されるのである。

(42) 友人の結婚式に出席する{支度 / 用意 / 準備}はすっかり整えている。(国)

(42)において、「支度」は身支度などのような軽い準備の場合に可能であり、「準備」は計画的、徹底的な準備の場合に可能であり、「用意」は前もって気を使って 調べて(揃えて)おく準備の場合に可能である。要するに、文(44)は状況なりの解釈が可能であり、このため三語とも許容されているのである。

(43) 大仕事に乗り出して、これと並列して{準備 / 用意 / 支度}するのが賢明だろうから、形にできるまでにはしばらく時間がかかる。だが、この問題をリードしてくれた水鱗造さんや入谷芳さんのご協力を仰ぎながら、確実に、進めていきたい。(ao)

(43)においても、ある仕事をするのに時間のかかる徹底的準備に焦点が置かれる「準備」が可能であるし、前もって気を使って調べて(揃えて)おく

準備、すなわち心構え的な準備に焦点が置かれる時は「用意」が可能であるし、道具などを揃えるくらいの軽い準備に焦点が置かれる時は「支度」も可能である。ここにおいても文は状況なりの解釈が可能であり、このため三語とも許容されているのである。

この章においても、前もって調べて(揃えて)おくという点では「準備」も「用意」も同じであるが、「準備」は計画的、具体的、徹底的な面に、すなわち実際に焦点が置かれる時に使われるものであり、「用意」は「準備」よりは完了・完備を前提とした心構え的な面と完了・完備の面に焦点が置かれる時に使われるものであり、「支度」は日常的なあまり変わりのない軽い準備の時に使われるものであるということが確認できた。

5. 「はじめに」に取り挙げた問題の解説

(イ) 旅行の{準備 / 用意 / 支度}をしてください。

「準備」は計画的、具体的、徹底的な準備の場合に使われるものなので準備を使うと文は「旅行の準備」の具体的かつ実際の面に焦点が置かれるし、「用意」は前もって気を使って調べて(揃えて)おく準備の場合に使われるものなので「用意」を使うと文は「旅行の準備」の心構え的な面と完了の面に焦点が置かれるし、「支度」は道具などを揃えるくらいの軽い準備の場合に使われるものなので「支度」を使うと文は「旅行の準備」の皮相的かつ表面的な面に焦点が置かれるようになる。このため、文(イ)において「準備」も「用意」も「支度」も可能なのである。

(ロ) 午前6時には、ちゃんと女房がめしを炊いていつ客がご入来してもよろしいよう{準備 / 用意 / 支度}し、夜は10時まで商売した。(ao)

「準備」は計画的、具体的、徹底的な準備の場合に使われるものなので「

準備」を使うと文は「食事の準備」の具体的、体系的、実際のな面に焦点が置かれるし、「用意」は前もって気を使って調べて(揃えて)おく準備の場合に使われるものなので「用意」を使うと文は食事の準備の心構え的な面と食事の準備の完了の面に焦点が置かれるし、「支度」は道具などを揃えるくらいの軽い準備の場合に使われるものなので「支度」を使うと文は食事の準備の皮相的かつ表面的な面に焦点が置かれるようになり、このため、文(ロ)においても「準備」「用意」「支度」三語が許されるのである。

(ハ) 海水浴へ行ったときと同じで、俺は{支度 / 準備 / 用意}するものは何もない。強いて言えば、金銭面だ。(ya)

「支度」は道具などを揃えるくらいの軽い準備の場合に使われるものなので「支度」を使うと文はどこかへ行くのに必要な道具などを揃えるくらいの皮相的かつ表面的な面に焦点が置かれるし、「準備」は計画的、具体的、徹底的な準備の場合に使われるものなので「準備」を使うと文はどこかへ行くのに何か特別な物でも準備しているようなニュアンスがして、実際のな面に焦点が置かれるし、「用意」は前もって気を使って調べて(揃えて)おく準備の場合に使われるものなので「用意」を使うと文は心構え的な面に焦点が置かれるようになり、このため文(ハ)においても三語ともに許されるのである。

(二) a. 幕があと一時間で上がりますから、役者さんは{支度 / ? 準備 / * 用意}してください。

文aにおいて、文の意味は役者さんがいつものようにする最後の準備点検ないし日常的に身なりを整えるための準備の意として使われているので軽い準備の場合に使われる「支度」がふさわしい。ところで、ここにおいて、「あと一時間で」という表現はある程度の長さの時間を意味し、これは過程的、段階的な準備に連がるので「準備」が使われる可能性もある。しかし、「準備」を使うとあまりにも徹底的な準備になってしまうのでこの文に

は合わない。このため、文aにおいては「支度」が一番ふさわしいのである。

- b. 幕があと一時間で上がりますから、照明さんは{準備 / * 用意 / * 支度}してください。

文bにおいて、「あと一時間で」というある程度の長さの時間を表していることと、「照明さん」という個人を指定していることは徹底的な準備を要求するということを意味し、これは具体的かつ実際的な準備にがり、このため「準備」が使われていると言える。

- c. 幕がすぐ上がりますから、役者さんは{用意 / ? 準備 / * 支度}してください。

文cにおいて、文の意味は団体の準備の意として使われていて、「すぐ」という言葉のニュアンスからは計画的、徹底的な準備は不要であることがわかる。そして、「すぐ」という言葉のニュアンスから緊張感が感じられるし、これは結局心構え的な準備に繋がり、このため「用意」が使われているのである。

- d. 幕がすぐ上がりますから、照明さんは{準備 / ? 用意 / * 支度}してください。

dにおいて、「すぐ」による短い時間の指定と「照明」による具体的な個人の指定は最後の徹底的な準備を要求することであり、かつ、個人に準備することを要求することは心構え的な準備、すなわち「用意」の次元を越え徹底的な準備を要求することであり、このため「準備」が使われているのである。

この章において、今まで説明してきた「準備」「用意」「支度」の意味機能

を持って一章「始めに」に取り挙げた問題を解決してみた。そして、このことは、今までの仮説、すなわち「準備」は時間や手間のかかる計画的、具体的かつ徹底的な準備の場合に使われるし、「用意」は前もって気を使って調べて(揃えて)おく準備の場合に使われるし、「支度」はあまり変わりのない単純かつ軽い準備の場合に使われる、という仮説が正しい、ということを立ててくれている。

6. 結び

今までの説明をまとめると、以下のようになる。

「準備」は一つ一つを点検する計画的、具体的、徹底的な準備の場合に使われるものであり、このため、文の焦点は時間性、過程性、実際性に置かれる。例え「支度」と同じく道具ないし条件を揃えても「支度」よりはその過程および段階に焦点が置かれる。

「用意」は前もって気を使って調べて(揃えて)おく準備の場合に使われるものであり、このため、文の焦点は心構え面と完了・完備の両面に同時に置かれるが、文脈によってその重心が前者に傾ける場合もあるし、後者に傾く場合もある。そして、その重心が心構え的な面に置かれる時は非時間性のため、さしせまった気持の表現のように感じられるし、完了・完備の面に置かれる時はあらゆる素材一素材化(一概念化)した表現のように感じられる。

「支度」はあまり変わりのない、身のまわりのことや日常的な軽い準備の場合に使われるものであり、このため、文の焦点は「準備」の文とは異なって過程性、段階性よりは皮相性、表面性に置かれる。

「準備」と「用意」の使用例が「準備」と「支度」の使用例および、「用意」と「支度」の使用例よりいちじるしく多いのは「準備」と「用意」には他の対照群にはない「前もって調べて(揃えて)おく」という意味的な共通性があるからである。

<參考文獻>

- 秋本克子外(1994) 『類語例解辞典』小学館 p.140
 池上喜彦(1975) 『意味論意味構造の分析と記述』大修館書店 pp.64-93
 小泉保外(1989) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店 pp.229, 243, 531
 寺村秀夫(1991) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版 pp.79~116
 林史典(1986) 『国語基本用例辞典』教育社 pp.324, 346, 867
 文化庁(1971) 『外国人のための基本語用例辞典』大蔵省 pp.434, 461, 1071

<用例出典>

- 「朝日新聞」2009年10月 (朝)
 「海の誘惑」岩波書店 (海)
 「基本用例辞典」文化庁 (基)
 「国語基本用例辞典」教育社 (国)
 「地図をながめて」岩波文庫 (地)
 「読売新聞」2009年3月 (読)
 「<http://www.aozora.gr.jp>」 (ao)
 「<http://www.yahoo.co.jp>」 (ya)

접 수 일: 12월 31일
 심사완료: 01월 08일
 게재결정: 01월 29일

<要旨>

準備, 用意, 支度の 사용구분법에 관한 研究

類義語 準備, 用意, 支度 의 사용구분법에 관한 考察의 結果는 다음과 같다.

「準備」는 시간과 수고를 要하는 計画的, 過程的, 段階的, 徹底的인 準備인 경우에 사용되고, 이로인해 結果적으로 具體性 내지 實際性이 부각된다. 「準備」는 「支度」와 마찬가지로 道具내지 條件 등을 갖추는 準備의 뜻으로 사용이 될지라도 「支度」와는 달리, 過程 및 段階에 焦點이 놓이게 된다.

「用意」는 미리 신경써서 갖추어 두는 準備인 경우에 사용이 되고, 이로인해 文의 焦點은 「미리 신경을 쓴다」는 점에 놓이기도 하고, 「미리 갖추어 놓는다」고 하는 完了·完備의 面에 놓이기도 한다. 미리 신경을 쓴다고 하는 점에 焦點이 놓일 때는 非時間性 때문에 축박한(압박한) 기분의 表現처럼 느껴지기도 하고, 完了·完備의 面에 焦點이 놓일 때는 여러 素材(要素)가 一素材化(一概念化)되는 것처럼 느껴지기도 한다.

「支度」는 그다지 변화가 없는 주변의 일에 관한 것이라든지 일상적인 가벼운 準備인 경우에 사용되고, 이로인해 「支度」가 「準備」, 「用意」와 중복사용이 가능할지라도 「支度」의 文은 皮相性, 表面性에 焦點이 놓이게 된다.

전체적으로 볼때 「準備」와 「用意」의 使用例가 「準備」와 「支度」의 使用例 및 「用意」와 「支度」의 使用例보다 현저하게 많은데, 그것은 「準備」와 「用意」에 「미리 갖추어 둔다」고 하는 意味의 共通性이 존재하기 때문이다.

다문화 가정의 이중 언어사용에 관한 고찰

— 일본, 필리핀출신 이주여성을 중심으로 —

박복덕*

bokpark@hanmail.net

< 目 次 >

>

- | | |
|---------------|---------------------------|
| I. 서론 | IV. 연구결과의 분석 |
| II. 다문화가정현황 | 1. 인구학적 고찰 |
| III. 연구내용과 방법 | 2. 다문화가정 내에서의 이중 언어 사용 실태 |
| 1. 조사대상 및 방법 | V. 결론 |
| 2. 조사내용 | |
| 3. 피조사자의 특성 | |
| 4. 자료 분석 방법 | |
| 5. 연구의 제한점 | |

Key Words : 다문화가정(Multicultural Family), 이중 언어(Bilingual),
글로벌인재(Global Talent)

I. 서론

인간과 동물을 구별하는 가장 큰 차이점 중의 하나가 언어이다. 언어를 통해서 아이는 보살핌을 받고, 소중하게 양육을 받으며 문화를 배운다. 국가와

* 한림성심대학 관광일어통역과 교수

민족 간에 존재하는 큰 장벽은 언어일 가능성이 크며, 언어는 때때로 의사소통과 함께, 다정한 관계를 만드는 데 있어서 필요하다. 가정에서, 공동체와 사회에서 이중 언어 구사자들은 그러한 의사소통의 장벽을 낮출 수 있고, 핵가족과 대가족 간, 공동체 간, 사회를 잇는 다리 역할을 할 수 있다. 한 가지 언어를 구사하는 사람은, 인간과 동물 사이의 본질적인 차이를 나타낼 수 있다. 그러나 이중 언어를 구사하는 사람들은 다른 인종, 믿음, 문화, 언어를 가진 사람들 사이에 다리를 놓을 수 있는 중요한 역할을 할 수 있다.

여기서 이중 언어에 관한 정의를 살펴보면 다음과 같다. 이중 언어(Bilingualism)란 두 가지 언어를 구사하는 현상 또는 이중 언어 교육을 주장하는 이론이다. 그러나 ‘이중 언어’라고 할 때 ‘이중 언어’에 대한 견해는 최대론자(Maximalist)에서부터 최소론자에 이르기까지 다양하다. 최대론(Maximalist theory)에서는 두 개의 언어가 동등하게 거의 모국어 수준으로 잘 구사할 수 있을 때만 이중 언어로 인정한다는 이론이고, 최소론(Minimalist theory)에서는 하나의 모국어와 두 번째 언어에 대해서는 최소한의 수동적인 능력만 있어도 이중 언어로 보아야 한다는 이론이다. 그러므로 이 두 극단적인 견해의 중간쯤으로 생각해 볼 때 하나의 모국어와 의사소통이 가능한 또 하나의 언어를 구사할 수 있는 사람을 이중 언어 인으로 볼 수 있다.)¹⁾

조선일보 기사에 의하면 최근 한국남성과 결혼 한 외국인 이주여성이 12만 명을 넘어섰다. 2007년 연간 총 혼인건수의 11.1%가 국제결혼이었다. 9쌍 중 1쌍이 다문화가정인 셈이다. 다문화가정에서 태어난 2세도 5만8000여명에 이른다. 우리사회는 이미 다문화사회로 성큼 들어섰다.²⁾ 또 장차 몇 년 안에 주한 외국인 근로자 수가 100만 명을 돌파할 전망이다. 한국은 근본적으로 이중 언어교육을 하는 나라는 아니다. 국어가 단일하고 거의 단일민족이므로 한국어만 알아도 기본적인 생활을 하는 데는 아무런 어려움이 없기 때문이다. 그러나 앞으로 국내의 외국인학교나 공교육에서도 한국어와 다른 언어의 이중 언어 반을 설치하지 않으면 안 될 상황에 도달할 것이다. 그래서 실질적으로 이중 언어교육을 할 수 있는 체제를 준비하지 않으면 안 된다고 생각한다.

1) 박영순(2005) 「이중언어교육의 본질과 한국어교육의 과제」 『이중언어학회』 제29호p.12
2) 조선일보, 2009년 1월15일

이에 본 논문에서는 조사자의 근무지인 강원도 내 거주 여성결혼 이민자중 일본·필리핀 출신 이주여성들을 대상으로 다문화가정 내에서의 이중 언어 사용에 관해 고찰해 보고자한다.

다문화가정 내에서의 이중 언어사용에 관한 고찰은 앞으로 한국의 이중 언어교육에 관한 기초자료가 될 수 있으리라 사료됨으로써 본 연구를 수행 하고자한다.

첫째, 강원도 내 거주 일본·필리핀 출신 이주여성들의 인구학적인 배경을 살펴본다.

둘째, 강원도 내 거주 일본·필리핀 출신 이주여성들의 가정 내에서의 이중 언어사용에 관한 실태를 파악해본다.

II. 다문화가정현황파악

1. 국제결혼 현황

[표2-1]에 의하면 1990년대 이후 최근까지 국제결혼 건수는 비약적으로 증가 하였다. 1990년대 총 결혼건수 중 국제결혼이 차지하던 비율은 1.2%에 그쳤으나 2008년에는 비약적으로 증가하여 11.0%에 달하였다. 이 중 외국인 아내와 한국인 남편의 비율은 최근 2-3년간 급격히 증가하여 1990년 0.2%에서 이후 2000년대 초까지 3%를 넘지 않았으나 2005년에 9.9%, 2008년에는 8.6%로 급격한 증가를 보였다. 전체 국제결혼 건수에서 외국인 여성과 한국인 남편의 결혼 비율은 72.2%이고 외국인 남성과 한국여성의 결혼은 27.8%로 그 비율이 2.5배 이상 높다. 이들 한국남성과 결혼한 외국인 여성, 즉 여성결혼 이민자들의 숫자는 1990년부터 2008년까지 누적하여 총 180,684명으로 급증하고 있다.

[표2-1] 국제결혼 건수와 비율

[단위: 건(%)]

연도	총결혼	국제결혼	외국인	외국인
----	-----	------	-----	-----

	건수		아내	남편
1990	399,312	4,710 (1.2)	619 (0.2)	4,091 (1.0)
1995	398,494	13,494 (3.4)	10,365 (2.6)	3,129 (0.8)
2000	334,030	12,319 (3.7)	7,304 (2.2)	5,015 (1.5)
2003	304,932	25,658 (8.4)	19,214 (6.3)	6,444 (2.1)
2004	310,944	35,447 (11.4)	25,594 (8.2)	9,853 (3.2)
2005	316,375	43,121 (13.6)	31,180 (9.9)	11,941 (3.8)
2006	330,634	38,759(11.7)	29,665(9.1)	9,094(2.8)
2007	343,559	37,560(10.9)	28,580(8.3)	8,980(2.7)
2008	327,715	36,204(11.0)	28,163(8.6)	8,041(2.5)

자료 : 통계청, 2008년

2. 다문화가정 자녀의 재학현황

<표 2-2>에 나타난 것과 같이 교육과학기술부가 최근 전국 다문화가정의 초·중·고교생 수를 조사한 결과 총 1만8,778명으로 나타났다. 이는 2006년 7,998명의 2배가 넘는 것으로, 2007년 1만3,445명보다도 5,000명 이상 늘어난 수치다. 이 중 초등학교생 수가 1만5,804명(84%)으로 월등히 많았고, 중학생 2,231명, 고등학생 760명이었다. 또 어머니가 외국인인 비율이 90% 이상으로 대부분을 차지했으며, 부모의 출신국가별 비율은 일본 41%, 중국 22.3%, 필리핀 14% 순이었다.³⁾

[표2-2] 연도별 다문화가정 자녀(청소년)의 재학현황 [인원(%)]

구분	초		중		고		계	
	인원	증감 (%)	인원	증감 (%)	인원	증감 (%)	인원	증감 (%)
2006	6,795	27.4	924	58.5	279	35.4	7,998	30.6
2007	11,444	68.4	1,588	71.9	413	48.0	13,445	68.1
2008	15,805	38.1	2,231	39.4	760	84.0	18,778	39.7

자료 : 2008년, 교육과학기술부

3. 강원도내 다문화가정 자녀 재학(취학) 현황 및 부모 출신국가

3) 조선일보, 2008. 5. 20

2008년도 강원도 내 다문화가정 자녀의 취학 분포를 보면 [표2-3]과 같다. 전체 학생 수 240,550명 중 1,109명이 다문화가정 자녀의 학생 수이며, 유치원생이 104명, 초등학교생이 886명, 중학생이 87명, 고등학생이 27명으로 초등학교생이 가장 많은 것으로 나타났다. 앞으로 지속적으로 유치원생, 초등학교생이 계속 증가 할 것으로 보인다.

[표2-3] 강원도 내 학년별 다문화가정 재학생 현황 [단위: 명]

구분		전체 학생 수	국제결혼 자녀 학생 수	부모가 외국인인 학생 수
유 치 원	만3세	3,021	26	26
	만4세	4,182	32	31
	만5세	7,608	46	45
	계	14,811	104	102
초 등 학 교	1학년	16,192	149	145
	2학년	18,337	181	175
	3학년	18,330	161	154
	4학년	19,082	163	155
	5학년	19,675	150	141
	6학년	19,608	79	79
	계	111,224	886	849
중 학 교	1학년	19,694	28	24
	2학년	19,532	35	35
	3학년	19,905	24	24
	계	59,131	87	83
고 등 학 교	1학년	19,807	16	16
	2학년	18,759	6	6
	3학년	17,101	5	2
	계	55,667	27	24
총계	총계	240,550	1,109	1,058

자료 : 2008년, 강원도 교육청

2008년도 강원도 내 다문화가정 자녀의 부모 출신 국가별 분포를 보면 [표 2-4]와 같다. 강원도 내에서 일본출신이 1,109중 490명이 가장 많고 다음으로 중국(조선족), 필리핀, 베트남, 태국 순으로 나타났다. 본 논문에서는 한국거주 이주여성의 출신국가별 숫자, 또 한국에서의 외국어활용도면에서도 가장 높은 비율을 차지하는 일본어와 영어권인 일본출신 이주여성과 필리핀출신 이주여성의 다문화가정을 대상으로 이중 언어 사용에 관해 조사 분석 하고자 한다.

[표2-4] 강원도 내 다문화가정 자녀의 부모 출신 국가 [단위: 명]

구분	다문화가정 자녀의 부모 출신 국가													
	일본	중국 (조선족)	미국	필리핀	베트남	태국	러시아	몽골	인도 네시아	남부 아시아	중앙 아시아	유럽	기타	계
유	24	21	2	42	4	3	2	0	0	0	2	4	0	104
초	391	235	6	180	25	20	5	2	0	1	4	4	10	883
중	55	24	0	2	6	0	5	1	0	0	0	0	2	95
고	20	2	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	27
합계	490	282	9	225	36	24	12	3	0	1	6	8	13	1,109

자료 : 2008년, 강원도 교육청

III. 연구내용 및 방법

1. 조사대상 및 방법

본 연구의 조사대상 지역으로는 조사자의 근무지인 춘천시를 중심으로 강원

도 내 인제, 양구, 양양, 강릉, 홍천, 횡성, 평창지역에 거주하는 국제결혼 이주여성 56명(일본 출신30명, 필리핀 출신26명)을 대상으로 조사 분석하였다.

면접조사는 2009년 6월 30일~7월 30일 한 달 동안에 걸쳐 구조화된 설문지를 사용하여 일대일 면접조사를 수행하였다.

2. 조사내용

국제결혼 이주여성의 일반 실태분석 문항-인구학적 배경(국적, 학력, 연령, 거주기간, 결혼 연수, 자녀수)과 이주여성들의 모국어와 이중 언어사용에 관한 문항으로 구성하였다.

3. 피조사자의 특성

3.1 국제결혼 이주여성의 특성

[표3-1]에 의하면 일본출신 이주여성들은 한국에 온지 10년 이상 된 이주여성이 23명이고, 5년에서 10년이 6명, 5년 미만은 1명에 불과했으며, 연령도 40대 이상이 26명으로 한국생활이 상당히 익숙한 자들로 구성되었다. 이에 비해 필리핀 출신 이주여성들은 한국에 온지 10년 이상 이 4명이고, 5년에서 10년이 18명, 5년 미만은 4명이었다. 연령은 40대 이상이 9명, 30대가 15명, 20대가 2명으로, 한국생활이 아직 익숙하지 않은 이주여성들로 구성되었다.

[표3-1] 피조사자의 기본속성

[단위: 명(%)]

구 분		일 본	필 리 핀
전 체		30(100.0)	26(100.0)
학력별	고등학교 미만	0	6(23.1)
	고등학교	23(76.6)	8(30.8)
	대학교	7(23.4)	12(46.2)
	대학원	0	0
직업별	급여생활자	1(3.4)	0
	자영업자	0	0
	주부	27(90.0)	24(92.3)
	학생	0	0

	기타	2(6.7)	2(7.7)
연령별	20~29	0	2(7.7)
	30~39	4(13.4)	15(57.7)
	40~49	25(83.4)	9(34.7)
	50~59	1(3.4)	0
	없음	3(10.0)	2(7.7)
자녀수	1명	4(13.4)	6(23.1)
	2명	12(40.0)	15(57.7)
	3명	10(33.4)	1(3.9)
	4명이상	1(3.4)	0
	5년 미만	0	4(15.4)
결혼 연수	5년~10년 미만	3(10.0)	18(69.3)
	10년~15년 미만	18(60.0)	3(11.6)
	15년~20년 미만	9(30.0)	1(3.9)
	5년 미만	1(3.4)	4(15.4)
한국 거주기간	5년~10년 미만	6(20.0)	18(69.3)
	10년~15년 미만	15(50.0)	3(11.6)
	15년~20년 미만	8(26.7)	1(3.9)

4. 자료 분석 방법

수집된 자료는 강원도 내 한국남성과 국제 결혼한 이주여성 56명(일본출신 30명, 필리핀출신 26명)을 대상으로 구조화된 설문지 56부를 자료 분석에 이용하였고, 자료 분석은 SPSS/WIN VER.10.0 프로그램을 이용하였다.

5. 연구의 제한점

본 연구는 춘천시를 중심으로 강원도 내 인제, 양구, 양양, 강릉, 홍천, 횡성, 평창지역에 거주하는 국제결혼 이주여성 56명(일본출신 30명, 필리핀출신 26명)을 대상으로 표본을 선정하였기 때문에 본 연구의 대상자가 한국남성과 결혼한 이주여성을 대표하거나 연구 결과를 일반화하는데 제한점을 지니고 있다.

IV. 연구결과의 분석

1. 인구학적 고찰

1.1 학력과 직업

[표 3-1]에 의하면 학력은 고등학교 졸업자가 일본출신 이주여성 23명, 필리핀출신 이주여성이 8명이며, 대학졸업자는 일본출신 이주여성 7명, 필리핀출신 이주여성이 12명으로 고학력자들로 나타났다. 모국에서의 학력은 상당히 높게 나타났지만 한국에서의 직업은 대부분 가정주부(일본출신 27명, 필리핀출신 24명)로써 정해진 일자리가 없이 가끔 파트타임으로 일을 하고 있는 것으로 나타났다.

1.2 연령과 자녀수

[표 3-1]에 의하면 연령대는 일본출신 이주여성은 30대 4명, 40대 25명, 50대 1명, 필리핀출신 이주여성은 20대 2명, 30대 15명, 40대 9명으로 나타났으며, 자녀수를 보면, 일본출신 이주여성은 1명 4명, 2명 12명, 3명 10명, 4명 이상 1명, 필리핀출신 이주여성은 1명 6명, 2명 15명, 3명 1명으로 나타났다. 대부분 결혼 적령기인 20-30대 결혼하여 현재 30-40대가 되었으며, 학령기에 있는 자녀들을 키우고 있어서 이중 언어 사용에 관해 상당한 관심을 가지고 있었다.

1.3 결혼 연수와 한국거주기간

결혼한 연수와 한국에 거주한 기간을 살펴보면, 필리핀 출신 이주 여성은 결혼연수와 한국거주기간이 거의 동일하게 나타났다. 즉 결혼과 동시에 한국에 와서 살고 있는 것으로 5년 미만 4명, 5년-10년 미만 18명, 10년-15년 미만 3명, 15년-20년 미만이 1명으로, 10년 미만이 69%를 차지하고 있다. 대부분 최근 한국 남성과 결혼해서 한국에 살고 있는 것을 알 수 있다. 일본출신 이주여성의 결혼 연수를 살펴보면 5년-10년 미만 3명, 10년-15년 미만 18명,

15년-20년 미만인 9명으로, 10년 이상이 90%를 차지하고 있다. 한국거주기간 (5년 미만-1명, 5년-10년 미만 6명, 10년-15년 미만 15명, 15년-20년 미만인 8명)은 조금 차이가 있지만 일본출신 이주여성들은 결혼 후 한국에서 생활하고 있는지가 상당히 오래됨으로 그들의 자녀들도 대부분 학령기에 있어 이중언어 사용에 관해 상당한 관심을 보였다.

2. 다문화 가정 내에서의 이중 언어사용 실태

2.1 모국어

[표4-1]에 의하면 출신 국가별의 모국어는 일본출신 이주여성들은 전원 일본어로 답한 것에 비해, 필리핀 출신 이주 여성들은 영어로 답한 사람이 6명, 타갈로그어가 18명, 영어+타갈로그어로 답한 사람이 2명으로 필리핀의 학교교육은 주로 영어로 하지만 자기나라 민족끼리는 타갈로그어를 사용하고 있기 때문에 다양하게 나타난 것으로 볼 수 있다.

[표4-1] 당신의 모국어는? [인원(%)]

구분	일본어	영어	타갈로그어	영어+ 타갈로그어	합계
일본	30(100)	0	0	0	30(100)
필리핀	0	6(23.1)	18(69.3)	2(7.7)	26(100)

2.2 일상대화 시 사용언어

평소 일상생활의 대화는 어떤 언어를 사용하는지에 관해 [표4-2]에서 살펴보면, 일본 출신 이주여성들은 한국어가 86.7%, 한국어와 일본어를 병용해서 사용한다가 6.7%, 일본어만을 사용한다가 6.7%로 나타났다. 필리핀출신 이주여성들은 한국어가 88.5%, 한국어와 영어를 병용해서 사용한다가 3.9%, 영어만을 사용한다가 7.7%로 나타났다. 즉, 일본출신 이주여성 필리핀출신 이주여성 모두 일상생활의 대화는 대부분 한국어로 의사소통을 하고 있는 것으로 나타났다.

[표4-2] 당신은 일상대화 시 주로 어떤 언어를 사용합니까? [인원(%)]

구분	한국어	한국어+일본어	한국어+영어	일본어	영어	합계
일본	26(86.7)	2(6.7)	0	2(6.7)	0	30(100)
필리핀	23(88.5)	0	1(3.9)	0	2(7.7)	26(100)

2.3 남편과의 일상 대화 시 사용 언어

특히 남편과의 일상대화 시 주로 어떤 언어를 사용하는지를 [표4-3]에서 살펴보면, 일본 출신 이주 여성은 한국어가 86.7%, 한국어와 일본어를 병용해서 사용한다가 13.4%로, 주로 한국어로 대화를 하지만 일본어를 병용해서 대화를 하는 경우도 있는 것으로 나타났다.

필리핀출신 이주여성은 한국어가 84.7%, 한국어와 영어와 타갈로그어를 병용해서 사용한다가 7.7%, 영어로 대화한다가 7.7%로 나타났다. 이는 대부분 한국어로 일상대화를 하지만 가끔씩은 본인의 모국어를 병행해서 대화를 하고 있는 것을 알 수 있다.

[표4-3] 당신이 남편과 일상 대화 시 주로 사용하는 언어를 순서대로 써 주세요. [인원(%)]

구분	한국어	한국어+ 일본어	한국어+영어 +타갈로그어	일본어	영어	합계
일본	26(86.7)	4(13.4)	0	0	0	30(100)
필리핀	22(84.7)	0	2(7.7)	0	2(7.7)	26(100)

2.3.1 남편의 외국어 구사 능력

[표4-4]에서 당신의 남편은 당신나라말을 어느 정도 할 수 있는지를 묻은 결과 일본출신 이주여성의 남편은 전혀 못한다가 50%, 필리핀출신 이주여성의 남편은 73.1%로 남편들은 부인 나라의 말을 거의 구사하지 못하므로 대부분 한국어로 의사소통을 하고 있는 것을 알 수 있었다.

[표4-4] 당신의 남편은 당신과의 일상대화 시
당신나라말(모국어)을 어느 정도 할 수 있습니까? [인원(%)]

구분	잘한다	대충한다	조금밖에 못 한다	전혀못한다	합계
일본	1(3.4)	2(6.7)	12(40)	15(50)	30(100)
필리핀	0	1(3.9)	6(23.1)	19(73.1)	26(100)

2.4 자녀와의 일상 대화 시 사용 언어

[표4-5]에서 자녀와의 일상대화 시 주로 사용하는 언어를 살펴본 결과 역시 한국어가 모두 50%이상으로 나타났지만 일본출신 이주여성의 경우는 한국어와 일본어로 대화하는 경우가 40%로, 또 필리핀출신 이주여성의 경우 한국어와 영어를 섞어서 대화하는 경우가 27%로 자녀와는 한국어와 자신의 모국어를 섞어서 사용함으로 이중 언어 사용자로 키우려고 하는 의지가 엿보였다.

[표4-5] 당신이 자녀와의 일상 대화 시 주로 사용하는 언어를 순서대로 써 주세요. [인원(%)]

구분	한국어	한국어+ 일본어	한국어+ 영어	한국어+ 영어+ 일본어	한국어+ 영어+ 타갈로그어	타갈로그어	합계
일본	15(50)	12(40)	0	3(10)	0	0	30(100)
필리핀	15(57.7)	0	7(27)	0	2(7.7)	2(7.7)	26(100)

2.5 자녀의 어머니나라 언어 구사 능력

[표4-6]에 의하면 자녀가 어머니나라 말을 전혀 못 한다 가 일본출신 이주여성 자녀의 경우23.4%, 필리핀출신 이주여성 자녀의 경우는61.6%로 나타났다. 이는 앞의 문항 남편의 경우보다 자녀의 경우는 어머니나라 말을 조금은 구사할 수 있는 것을 알 수 있었다.

[표4-6] 당신의 자녀는 당신과의 일상대화 시
당신나라말(모국어)을 어느 정도 할 수 있습니까? [인원(%)]

구분	잘 한다	대충 한다	조금밖에 못 한다	전혀 못 한다	합계
일본	2(6.7)	4(13.4)	17(56.7)	7(23.4)	30(100)

필리핀	1(3.9)	2(7.7)	7(27)	16(61.6)	26(100)
-----	--------	--------	-------	----------	---------

2.6 모국어 사용 대상

[표4-7]에서 자신의 모국어는 누구와 대화할 때 가장 많이 사용하는지를 조사해보니 일본출신 이주여성은 80%, 필리핀출신 이주여성은 69.3%가 모두 자기나라 모국어는 역시 자기나라 사람들끼리의 대화 시 자기나라(모국어)말로 대화하고 있는 것으로 나타났다.

[표4-7] 당신은 누구와 대화할 때 모국어를 가장 많이 사용합니까? [인원(%)]

구분	남편	남편+ 자녀	남편+자녀 +친지	자녀	자녀+ 고국의친지	친지	고국의친지	기타	합계
일본	0	1(3.4)	0	0	1(3.4)	2(6.7)	24(80)	2(6.7)	30(100)
필리핀	0	1(3.9)	1(3.9)	0	0	5(19.3)	18(69.3)	1(3.9)	26(100)

2.7 모국어 전수

[표4-8]에 의하면 일본출신 이주여성은 96.7%, 필리핀출신 이주여성은 92.3% 모두 자기나라 모국어를 자녀들에게 가르치고 싶어 하는 것으로 나타났다. 이는 앞으로 자신의 자녀들을 한국의 글로벌인재로 두 나라 모두 아이로 키우고자함을 엿볼 수 있었다.

[표4-8] 당신의 모국어를 자녀에게 가르치고 싶습니까? [인원(%)]

구분	예	아니요	무응답	합계
일본	29(96.7)	0	1(3.4)	30(100)
필리핀	24(92.3)	2(7.7)	0	26(100)

2.7.1 모국어를 가르치고 싶은 이유

[표4-8]에서 알 수 있듯이 두 나라 여성 모두 자신의 모국어를 자녀에게 가르치고 싶어 한다. [표4-9]에서 그 이유를 물은 결과 일본출신 이주여성들은 자기나라문화를 이해시키고자함과 동시에 글로벌인재로 키우고 싶다는 응답

이 63.4%로 가장 높게 나타났다. 필리핀출신 이주여성들은 자기나라 문화를 자녀에게 이해시키고 싶다는 응답이 50%로 가장 높게 나타났다. 이는 필리핀 출신 이주여성들은 우선 어머니나라문화를 우선적으로 자녀에게 이해시키고 싶어 하는 간절한 마음이 담겨있는 것을 알 수 있으며, 일본출신 이주여성들은 무엇보다 글로벌 인재로 키우고 싶다는 의지가 강한 것을 알 수 있었다. 최근 다문화가정의 자녀를 글로벌인재로 키우고자하는 바람이 있다는 것을 다음 신문기사에서도 알 수 있다.

키르기스스탄 출신 아즈베코바 굴바르친씨는 “남편이 결혼 초기부터 ‘집안 일에만 매달리지 않고 마음껏 능력을 발휘하면서 살라’고 했다”며 “중앙아시아 국가들이 갈수록 지정학적으로 중요해지고 있는 만큼, 아이들을 이 지역을 잘 아는 글로벌 인재로 키우고 싶다.”고 했다. 이를 위해 부부는 첫째 유진(9)양에게는 키르기스어를, 둘째 유미(7)양에게는 영어를, 막내 대현(5)군에게는 러시아어를 각각 ‘집중교육’할 계획이다. 세 가지 언어가 모두 유창한 어머니 굴바르친씨가 직접 가르칠 계획이다. 아이들이 좀 더 자라면 온 가족이 키르기스스탄과 러시아의 문화유산을 답사할 계획이다.4)

[표4-9] 예라고 답한 사람은 왜 입니까? [인원(%)]

구분	당신과의 원활한 의사소통을 위해 (A)	당신 나라의 문화를 이해시키기 위해 (B)	글로벌인재로 키우고 싶어서 (C)	기타
일본	4(13.4)	3(10)	0	3(10)
필리핀	0	13(50)	5(19.3)	3(11.6)

* 일본 : A+B→1(3.4%) / B+C→19(63.4%)

* 필리핀 : A+C→3(11.6%) / A+B+C→2(7.7%)

* 기타 (친정가족 및 친지와 의사소통을 위해)

* A+B/B+C/A+C/A+B+C→는 두개 이상의 항목을 선택한 것임.

2.7.2 교육 현실

[표4-10]에서 그림 현재 당신나라 모국어를 자녀에게 가르치고 있는가에 관한 질문에 일본출신 이주여성은 56.7%가 가르치고 있다고 응답했으며, 필리핀출신 이주여성도 42.3%가 현재 자녀에게 자신의 모국어를 가르치고 있다고 응답했다. 모두들 이중 언어교육에 상당한 관심을 가지고 자신의 모국어를 가르치려고 노력하고 있다는 것을 알 수 있었다. 요즘 다문화가정의 아빠들도 이에 동참하는 가정이 증가하고 있는 것을 아래 신문기사에 의하면 알 수 있다.

최근 한국 아빠와 외국 출신 엄마로 구성된 다문화가정이 늘어나면서, 한국 아빠들의 역할이 커지고 있다. 요즘 다문화가정 아빠들은 자녀들에게 일방적으로 한국사회에 적응하라고 뉘달하기보다 “엄마 나라의 말과 문화를 익혀 ‘바이링구얼’(bilingual · 이중 언어 구사자)이 되라”고 한다. 한국말만 강요하면 같은 또래 한국 아이들보다 뒤처지기 쉽지만, 두 나라 말을 모두 하면 장차 ‘글로벌 인재’로 자라날 가능성이 커진다. 교육학과 차윤경 교수(한국다문화교육학회 부회장)는 “그동안 한국 아빠들은 자녀들에게 ‘엄마의 말’을 가르치는 데 상대적으로 소홀했던 경우가 많았다”고 했다. 한국사회 적응이 최우선 과제라고 생각한 경우가 많았던 까닭이다. 같은 외국이라도 다르게 보는 ‘이중 잣대’가 은연중에 퍼져있기도 했다. 그러나 차 교수는 최근 들어 이런 경향이 빠른 속도로 바뀌고 있다”고 했다. 다문화가정 아빠들 사이에서 “아내를 존중하니 집안이 밝아지고 아이들이 활달해지더라”는 경험담이 축적된 덕분이다. 아이들이 엄마 나라 말을 자유롭게 구사하는 것이 장차 쪽에도 속하지 못할까봐 걱정하는 대신, ‘양쪽을 다 아는 아이로 키우면 된다’고 생각을 바꾸고 있는 것이다.5)

[표4-10] 그림 현재 가르치고 있습니까?

[인원(%)]

5) 조선일보, 2009년 8월 13일

구분	예	아니요	무응답	합계
일본	17(56.7)	11(36.7)	2(6.7)	30(100)
필리핀	11(42.3)	11(42.3)	4(15.4)	26(100)

* 무응답은 현재자녀가 없거나, 아주 어린 경우 답을 하지 않았음

2.7.3 모국어를 가르치고 있지 못하는 이유

[표4-10]에서 살펴보면 현재 가르치고 있지 못한 경우가 일본출신 이주여성이 36.7%, 필리핀출신 이주여성이 42.3%이다. [표4-11]에서 그 이유를 물은 결과 시간적인 여유가 없다고 응답한 경우가 일본출신 이주여성이 20%, 필리핀출신 이주여성이 15.4%로 가장 높게 나타났다. 이는 여러 가지 집안사정으로 아이들을 돌 볼 여유가 없는 것 같다. 아래 조선일보에 동일한 기사가 실려 있다.

다문화가족 이주여성은 역시 시간적인 여유가 없어서 아들과 찬찬히 말을 주고받을 여유가 없다고 했으며, “아이가 두 나라 말을 다 하면 좋겠지요. 하지만 한국말 그림책 한권 사려고 해도 군청 소재지까지 나가야 하니 . . . 한국말 한 가지라도 제대로 하면 바랄게 없습니다.” 또 적극적으로 엄마 나라 말을 가르치기엔 한국 사회의 편견이 아직 강하다고 판단하는 이들도 많다고 한다.⁶⁾

[표4-11] 아니요 라고 답한 사람은 왜 입니까? [인원(%)]

6) 조선일보, 2009년 8월 13일

구분	한국어실력이 모자라서 (A)	시간적여유가 없어서 (B)	자녀가 원하지 않아서 (C)	사회적분위기가 조성되지 않아서 (D)	기타
일본	0	6(20)	1(3.4)	0	3(10)
필리핀	2(7.7)	4(15.4)	2(7.7)	2(7.7)	0

* 일본 : B+D→1(3.4%)

* 필리핀 : A+B→1(3.9%)/ A+B+C→2(7.7%)

* 기타 (학교공부도 따라가기 힘들다)

* B+D/A+B/A+B+C→는 두개 이상의 항목을 선택한 것임.

2.7.4 모국어를 가르치고 싶지 않은 이유

[표4-12]는 모국어를 자녀에게 가르치고 싶지 않다고 응답한 필리핀 출신 이주 여성 2명(7.7%)은 남편이 싫어해서라고 답했다. 이는 가족의 이해가 없이는 가정에서 이중 언어 사용이 힘들다는 것을 나타낸다.

(2008. 왕한석)의 「또 다른 한국어」에 의하면 외국인 부인들이 자녀들에게 자신의 모어를 가르치고 전승시키기 위해서는 가족들 특히 남편의 적극적인 지지와 협조가 필요하다고 한다. 또 자녀들이 어머니 언어를 배우는 문제에 대한 남편들의 응답은 예상대로 외국인 부인들의 그것에 비해 훨씬 소극적이고, 나아가 뚜렷한 생각 자체가 없는 듯한 반응들도 많았다고 한다.⁷⁾

[표4-12] 모국어를 자녀에게 가르치고 싶지 않다고 답한 사람은 왜 입니까? [인원(%)]

구분	당신이 외국인이라는 사실을 알리고 싶지 않아서	남편이 싫어해서	자녀가 싫어해서	주변의 시선이 두려워서	기타
일본	0	0	0	0	0
필리핀	0	2(7.7)	0	0	0

7) 왕한석(2008) 「또 다른 한국어」 교문사 P.407

V. 결론

본 논문은 강원도 내 거주 여성결혼 이민자중 일본·필리핀 출신 이주여성들을 대상으로 다문화가정의 이중 언어 사용에 관해 고찰해보았다. 본 논문의 구성은 I 장 서론은 연구의 필요성과 목적을 언급, II 장은 본연구와 관련된 다문화가정의 현황과악, III장은 연구내용과 방법, IV장은 연구결과의 분석으로 강원도 내 거주 일본·필리핀 출신 이주여성들의 인구학적인 배경과 다문화 가정 내에서의 이중 언어 사용에 관해 고찰해보았다.

먼저, 인구학적 배경으로 학력은 대학졸업자가 일본출신 이주여성이 7명, 필리핀출신 이주여성이 12명으로 고학력자들이었고, 대부분 결혼 적령기인 20-30대 결혼하여 현재 30-40대가 되었으며, 학령기에 있는 자녀들을 키우고 있어서 이중 언어 사용에 관해 상당한 관심을 가지고 있었다.

두 번째, 가정 내에서의 이중 언어 사용에 관해 일본출신 이주여성은 96.7%, 필리핀출신 이주여성은 92.3%로 모두 자기나라 모국어를 자녀들에게 가르치고 싶어 했으며, 또 현재 자녀들에게 일본출신 이주여성은 56.7%, 필리핀출신 이주여성도 42.3%가 자신의 모국어를 가르치고 있다고 응답했다. 또 가르치고 싶은 이유로는 일본출신 이주여성들은 자기나라문화를 이해시키는 한편, 글로벌인재로 키우고 싶다는 응답이 63.4%, 필리핀출신 이주여성은 자기나라 문화를 자녀에게 이해시키고 싶다는 응답이 50%로 가장 높게 나타났다.

이 연구를 통해 현재 한국에 거주하고 있는 다문화가정은 어려운 환경 속에서도 미래를 위해 자녀들의 이중 언어사용에 상당한 관심을 가지고 자녀들을 이중 언어능력자로 키우려고 노력하고 있다는 사실을 알 수 있었다.

다문화 지원 사업을 펼쳐온 웅진재단 신현웅 이사장은 “다문화가정 아이들은 진흙 속의 보석 같은 존재”라며 “이들에게 엄마의 언어를 가르치는 것은 아이와 가정과 국가가 모두 ‘윈윈’할 수 있는 방법”이라고 했다. 아이들이 ‘특별한 재주가 있다’는 자신감으로 남들과 다르다는 스트레스를 극복하면, 장차 문화적·언어적 강점을 살려 외교와 무역 등에서 두각을 나타낼 잠재력이 충분하다는 것이다. 엄마가 자신의 모국어로 아이를 키울 수 있어야 한다는 것이다.8)

다문화가정의 자녀들은 21세기 세계화·국제화 시대의 중요한 인재이다. 이들을 이중 언어를 구사할 수 있는 글로벌 인재로 키우기 위해 이 연구 결과가 조금이나마 앞으로 다문화가정의 이중 언어 교육연구에 토대가 되었으면 하고 기대해 본다.

<參考文獻>

- 김민수(2005) 「재외교포의 이중 언어에 대하여」 『이중 언어 학회』 제29호 이중 언어 학회
- 박복덕(2007) 「국제결혼 일본출신 이주여성의 한국생활 실태에 관한 연구」 『日本研究』 第23輯 중앙대학교 일본연구소
- 박영순(2005) 「이중 언어교육의 본질과 한국어 교육의 과제」 『이중 언어 학회』 제29호 p.12
- 보건복지부(2005) 「국제결혼 이주여성 및 보건복지 지원 정책방안」
- 왕한석(2008) 「또 다른 한국어」 서울 교문사 P.407
- 전경수외(2008) 「혼혈에서 다문화로」 서울 일지사
- 강원도 교육청자료, 2008
- 교육과학기술부자료, 2008
- 조선일보기사(2008.5.20 /2009.1.15/ 2009.8.13/ 2009.8.14)
- 통계청자료, 2008

접 수 일: 12월 31일
 심사완료: 01월 08일
 게재결정: 01월 29일

<要旨>

多文化家庭の二重言語使用に関する考察

本研究は江原道に住んでいる国際結婚の日本人女性36名とフィリピン女性26名を対象にした多文化家庭の二重言語使用に関する研究である。

日本人女性とフィリピン女性の90%以上が自分の国の言葉を子供に教えてあげたいと言っている。その理由としては、自分の国の文化を理解してもらいたいという気持ちとまた国際的な人物に育ってほしいからと言っている。

「材質」を表す形容詞述語文の文型と用法

朴海煥*

parkhh@sookmyung.ac.kr

< 目次 >

>

- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| I. はじめに | III. 「材質」の形容詞述語文の
文型と意味用法 |
| II. 「材質」を表す形容詞述語
と対象文型 | 1. 本義的意味の用法 |
| 1. 「材質」を表す形容詞述語 | 2. 転義的意味の用法 |
| 2. 「材質」を表す形容詞述語
文の対象文型 | IV. おわりに |

Key Words : 「재질」([Zaisichu]), 형용사서술문(Adjective predicative construction), 문형(Sentence pattern), 용법(Use)

I. はじめに

本稿は今までの拙稿¹⁾に続く現代日本語の形容詞述語文全般についての文型と用法の研究の一部である。本稿の研究の一次的な目的は今までの拙

* 淑明女子大学校 副教授、日本語学

1) 日本語の形容詞述語文についての今までの一連の拙稿の研究では形容詞の意味を「抽象的關係」を表す「眞正、關係、不在、可能性、特異、良適、調子、力、時、形、量、程度」などの12の下位項目、「精神及び行為」を表す「意識感覺、感情、賢愚、能力、詳不詳、繁忙、吉凶、身上、經濟」の九つの下位項目、「自然現象」を表す「視覚、聴覚、嗅覚、味覚、材質、氣象」の六つの下位項目などのように3グループ27下位項目に分類して扱ってきた。この27の下位意味項目のうち「材質、程度」などの2項目を除く意味項目についてはすでにその分析の結果を發表している。その出典の詳細については紙面の関係で省略する。

稿で考察してきたような日本語の形容詞述語文の各下位意味グループについての具体的な分析である。なお、このような研究の次の段階の目的は今までの個別的で部分的な一つ一つの研究を日本語の形容詞述語文全体についての研究に拡大して体系化することである。

「材質」の意味を表す形容詞の意味分類についてはいくつかの先行研究²⁾を参考にして行った。本稿では「材質」の意味を表す形容詞述語文について文脈上の形容詞述語の意味を基準にし、文型論の観点から文の構造と語の意味との関係を分析考察したい。本稿でいう文型論とは述語形容詞を軸として結合する名詞句と助詞の三者間の結合の構造とその構造を決定する背景である語の意味的な特徴との関係を文型の面から分析するという観点である。

本稿の具体的な目的と対象は「材質」の意味を表す形容詞述語と文型の把握、各文型と名詞句や述語形容詞の意味特徴及び助詞の役割などとの関係の分析、「材質」を表す形容詞述語文の主要文型の抽出と主要用法の把握及び文構造の特徴の把握などについて分析考察することである。分析の順序に関しては上記の研究目的及び対象に従い、①「材質」を表す形容詞述語の範囲の選定、②「材質」を表す形容詞述語文の取る文型の抽出、③各文型についての分析考察、④比喩的な意味及び他の意味項目との接点についての考察、⑤「材質」の形容詞述語文の主要文型と用法及び全体的な特徴のまとめ、という順に作業を進めていきたい。³⁾

2) 形容詞の意味の下位分類には主に『分類語彙表』(1964、国立国語研究所、秀英出版)、情報処理振興事業協会技術センター(1990)などの資料を参考にした。以下、「材質」の意味を表す形容詞の意味分類の場合も同様である。

3) 本稿の記述におけるいくつかの基準を示す。

①本稿でいう名詞句とは、述語形容詞と結合する「体言+助詞」のうち、体言の部分を意味する。単独名詞ではなく句や節の場合もある。

②本稿で扱う形容詞は言い切りの形がイである形容詞のみを対象とする。

③名詞句の項目の順番に関しては、述語形容詞に近い項目から「N1項目、N2項目、N3項目」のように表記する。一方、名詞句の項目の数に関しては「1項目、2項目、3項目」のように表記する。

④一つの項目に助詞「は」と「が」とが併用される場合は次のように表記する。N1項目以外の助詞はN1項目に「が」が使われない時は「は・が」、使われる時は「は(が)」と表記する。

II. 「材質」を表す形容詞述語と対象文型

1. 「材質」を表す形容詞述語

「材質」という意味項目は「抽象的關係、精神及び行為、自然現象」などの日本語の形容詞の三つの上位意味グループの中の「自然現象」の下位意味項目の一つである。「材質」の形容詞述語文は自然物を含む自然現象及び人間の身体や人間による加工物などの持つ性質を表す表現を対象とする。具体的には主にその性質の硬度や弾力性や柔軟性などの意味を表す形容詞述語である。このような「材質」を表す対象形容詞の選定においては各種の語彙調査⁴⁾及び用例の分析結果の使用頻度と基本性などを参考にした。

「材質」の形容詞述語文の対象形容詞は本義の意味と転義の意味の2種類に分けられる。ここで「本義の意味」というのはその語の第一意味として「材質」の意味を表す語を、「転義の意味」というのは様々な意味の名詞句と結合することで多様な意味を表す語の用法の中で「材質」関係の名詞句と結合して「材質」の意味を表す語を指す。「材質」の意味を表す本義の意味の形容詞には「硬(固、堅)い、柔(軟)らかい」などの語が、転義の意味の形容詞には「汚い、清い、脆い」などの語がある。本義の場合は形容詞の語彙的意味に「材質」を表す属性が含まれているが、転義の場合は「材質」を表す属性は含まれていないものの共起する名詞句の意味と共に「材質」の意味を表すことになる。一方、「空間量、形」の「細かい、荒い」、「良適」の「いい、悪い」、「視覚」の「濃い、薄い」などのように「材質」の意味との接点を持つ形容詞があるが、これらの語についての分析はそれぞれの意味項目についての論文で扱ったため本稿では省略する。

2. 「材質」を表す形容詞述語文の対象文型

⑤収集用例にない言語特徴の場合は辞書類の記述を参考にしたところもある。

4) 分析対象の形容詞の語彙選定には主に『現代雑誌九十種の用語用字』(1962、国立国語研究所、国研報告21、秀英出版)、『電子計算機による新聞の語彙調査』(1971、国立国語研究所、国研報告38、秀英出版)、『日本語教育のための基本語彙調査』(1984、国立国語研究所、国研報告78、秀英出版)などの資料を参考にした。

「材質」を表す形容詞述語文の対象文型の抽出と選定においては日本語の形容詞述語文の研究のために作成した基礎資料を使った。この基礎資料とは多様なジャンルの言語作品約200件から収集した約5,000文の実例を対象にし、日本語の形容詞述語文における「名詞句、助詞、形容詞」の三者の結合の構造とその構造の背景にある語の意味特徴を細かく分析した実態調査⁵⁾である。本稿では上記の調査の用例を整理した結果に基づき、「材質」を表す形容詞述語文の対象文型として「N1は・が+形」と「N2は(が)+N1が+形」の二つの文型を中心にして分析を行うことにする。

Ⅲ. 「材質」の形容詞述語文の文型と意味用法

上記したように「材質」の形容詞述語文の取る主要な文型は「N1は・が+形」と「N2は(が)+N1が+形」の2種類である。このように「材質」の形容詞述語文の対象文型の種類は少ない方で、当然その用法も比較的単純な方である。この2種類の文型は形容詞述語文の最も基本的な文型でもある。「N1は・が+形」文型は主に本義的な形容詞の主要用法、「N2は(が)+N1が+形」文型は転義的な形容詞の主要用法として使われるのが一般的である。本義的形容詞の場合はその語彙的な属性が強いため判断主体が判断対象に対して全体的な観点から一つの項目にまとめて判断する用法であり、転義的形容詞の場合は本義的形容詞に比べて相対的にその語彙的な属性が弱いため述語形容詞の間接的な意味とN1項目の名詞句の意味とが結合し、いわゆる連語のような形でその意味を表す場合が多いので結果的に二つの項目の名詞句の文型を必要とするのである。このような特徴は「材質」の形容詞述語文の場合にもおおむね同様である。本義的意味の場合は1項目表現が、転義的意味の場合は2項目表現が中心的な用法として使われる。ただし、転義的意味の形容詞の「脆い」の場合は1項目文型を基本とする用法

5) この資料を使った現代日本語の形容詞述語文一般に関する分析報告としては「現代日本語の形容詞述語文の構造」(林海煥、早稲田大学大学院修士論文(1994))がある。

が見られる。一方、実際の言語表現の傾向には転義の場合でも二つの名詞句の項目が省略または縮約した形で1項目文型として使われることが多い。本稿ではこのような「材質」の形容詞群の意味の特徴を重視し、本義的用法と転義的用法の二つの観点から分析と考察を進めたい。

1. 本義的意味の用法

「材質」の意味を表す本義的意味の形容詞には「硬(固、堅)い、柔(軟)らかい」などの2語がある。「硬(固、堅)い、柔(軟)らかい」の形容詞述語文は「N1は・が+形」の1項目文型を基本的な文型にするが、判断の対象を具体化または分化して表す場合には「N2は(が)+N1が+形」文型が使われる。本節ではこの2種類の文型と「硬(固、堅)い、柔(軟)らかい」などの語彙の比喩的な意味の用法を中心に考察する。

1.1. 「N1は・が+形」

「N1は・が+形」文型は「硬(固、堅)い、柔(軟)らかい」の形容詞述語文の取る実用的な面においての最も基本的な文型である。ここで「実用的」というのは、論理的には「N2は(が)+N1が+形」文型のような2項目の名詞句も考えられるが、実際の言語表現ではその2項目の名詞句が省略または縮約されて1項目表現として使われることが多いということである。上述したように「材質」の意味には大きく「硬度、弾力性、柔軟性」などの3種類があるが、これらの中で「硬度」には1項目専用の用法と総括的な1項目用法が、「弾力性、柔軟性」には総括的な用法が見られた。ここで1項目専用というのは2項目文型では現れない用法を、総括的な1項目用法というのは1項目文型が基本ではあるが、その1項目文型は自由に2項目文型に変換できる用法のことである。では、「N1は・が+形」文型についてその2種類の用法別に分析を行う。

1.1.1. 1項目専用の用法

この用法は「硬度」のみに見られるもので、一般的には2項目以上の文型では現れない。それは「硬度、弾力性、柔軟性」などの「材質」を表すそれ

ぞれの意味特徴の違いに依るものと考えられる。この点は「硬(固、堅)い、柔(軟)らかい」の場合「硬度」を表す名詞句と結合した場合が「弾力性、柔軟性」のそれと比べ、名詞句との結合と判断の直接性の度合いが高くなることを示唆する。次はその用例である。

- (1) 鉄はかたい。(用法146)
- (2) ダイヤモンドは硬い。(IPAL377)
- (3) 豆腐はやわらかい。(用法573)
- (4) 糊はやわらかい。(IPAL1147)

上記の例文からも分かるようにこの種の「硬度」についての表現は名詞句の意味を直接的に判断する用法である。このような1項目専用の用法は名詞句の意味と密接な関連がある。「鉄、ダイヤモンド、ガラス、石」や「豆腐、糊、布団、綿」などのように本来その語彙的な属性として「かたさ」や「やわらかさ」という「硬度」の意味を備え持っている場合には一つの名詞句と述語形容詞との結合のみで表現対象に対する直接的な判断が可能なのである。この1項目専用の用法の名詞句には「材質」を有するもので、「かたさ」や「やわらかさ」を基本的な属性として持つものが使われる。主に自然物や人間の生産活動による結果などを表すものが多い。ただし、このように1項目専用の用法が可能の名詞句の数はそれほど多くはない。一方、「かたさ」と「やわらかさ」を表すこの2種類の名詞句の意味には特徴的な違いがある。それは「かたさ」の意味の「鉄、ダイヤモンド、ガラス、石」などの名詞句はそのすべてが原料となる物質で、製品を表すものはあまり使われないという特徴⁶⁾である。これに対して「やわらかさ」の意味の名詞句には「豆腐、糊、布団、綿」などのようにそのような制限がなく、原料と製品の両方が使われる。

この用法は「1.1.2.」の総括的な1項目用法のような2項目文型の名詞句の縮約や省略の表現ではないために一般的に2項目文型への変換は不可能な場合が多い。ただし、次のように「材質」そのものの意味を表す名詞句を補う

6) 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店 p.315 参考。

ことで論理的には2項目表現にすることが可能ではあるが、その場合でも二つの名詞句の意味の重複のため文の自然度ははるかに落ちることになる。

- (1-1) 鉄は材質がかたい。
- (2-1) ダイヤモンドは材質が硬い。
- (3-1) 豆腐は材質がやわらかい。
- (4-1) 糊は材質がやわらかい。

1.1.2. 総括的な1項目用法

この用法は「硬度、弾力性、柔軟性」などの3種類の「材質」の意味に幅広く見られる用法で、1項目文型を基本にしながらも2項目文型への変換が比較的自由的な表現である。それだけに1項目専用の用法に比べると名詞句に対する述語の判断の直接性や属性の度合いは低いと言える。しかし、実際の言語表現の使用頻度からするとこの用法が「材質」の形容詞述語文の最も基本的な用法と言える。次の用例(5、6)は「硬度」、(7、8)は「弾力性」、(9、10)は「柔軟性」の例である。

- (5) パスタというのは、ラザニアにしてもマカロニにしても、ゆでる前は固い。
(新人82)
- (6) あの木は柔らかい。(IPAL1147)
- (7) このベットは固い。(IPAL379)
- (8) 林床は体が沈むほどやわらかい。(天声870501)
- (9) 彼の膝の関節はかたい。(IPAL381)
- (10) 体操選手の体はやわらかい。(用法573)

これらの用例からも分かるようにこの用法の特徴は「パスタ、ベット、膝の関節」などのような名詞句の意味にある。このような名詞句は1項目専用の用法に比べるとその「かたさ」や「やわらかさ」の属性が弱いことが分かる。特に「柔軟性」の場合は「彼の膝、体操選手の体」などのように二つの名詞句の縮約の形を取っている。「柔軟性」の場合は「硬度、弾力性、柔

軟性」などの3種類の意味の中で名詞句に対して判断する形容詞の属性が最も弱いために判断の内容を具体化するための名詞句をもう一つ必要とするのである。「1.1.1.」の1項目専用の用法の記述の内容までを含めて総合的に言うと「硬度、弾力性、柔軟性」の判断における「硬(固、堅い、柔軟)らかい」の属性の度合いは「柔軟性→弾力性→硬度」の順に高いことが分かる。一方、この用法の名詞句の意味は「かたさ」や「やわらかさ」を基本的な属性とすること以外には1項目専用の用法と同様である。「材質」を有するもので、主に自然物や人間の生産活動による結果などを表すものが多く使われる。「柔軟性」の場合に人間の身体を表す意味の名詞句が多く使われるのは特徴的である。

この用法の1項目文型は論理的には文の内容や意図を殆んど変えずに次のような2項目文型に替えられる。

- (5-1) パスタというのはゆでる前は材質が固い
- (6-1) あの木は材質が柔らかい。
- (7-1) このベットはスプリングが固い。
- (8-1) 林床は体が沈むほどクッションがやわらかい。
- (9-1) 彼は膝の関節がかたい。
- (10-1) 体操選手は体がやわらかい。

この2項目文型の表現は「1.1.1.」の1項目専用の用法のそれに比べると文の自然度がるかに高い。追加されたN1項目の名詞句は判断の対象を具体化して表す役割をする。N2項目には1項目文型と同じように「材質」を有する判断対象を表す名詞句が使われる。N1項目には「材質、感触、クッション」などのような「材質」そのものの意味を表す名詞句や「スプリング、関節、体」などのような「材質」の性質を持つ具体的な対象を表す名詞句が使われる。いづれにせよこの2項目文型は実際の言語表現では名詞句の省略や縮約の形で1項目文型として使われることが多い。この点は「材質」を表す本義的意味の用法の主要文型を「N1は・が+形」の1項目文型にした理由である。また、この2項目文型は次の「1.2.」の2項目文型「N2は(か)+N1が

+形」の用法の一部でもある。

1.2. 「N2は(が)+N1が+形」

この文型は本義の「硬(固、堅)い、柔(軟)らかい」の表現の論理的な面での基本文型である。ここで「論理的」というのは実際には名詞句の省略や縮約などの形で1項目文型で使われることが多いが、論理的には二つの名詞句の項目の想定が可能であるということである。「1.1.」の考察の結果からすると1項目専用の用法を除くと「N1は・が+形」文型の殆どどの用法は論理的にはこの2項目文型として使うことが可能である。この2項目文型の用法は主に1項目文型の判断対象の名詞句をより具体化して提示する表現である。次の用例(11、12)は「硬度」、(13、14)は「弾力性」、(15、16)は「柔軟性」の例である。

- (11) 西洋の教会の鐘はスズの含有率が高くて材質が硬い。(天声841230)
- (12) 赤ちゃんは爪が軟らかい。(IPAL1147)
- (13) この椅子はクッションがかたい。(IPAL379)
- (14) 靴底にあたる床は木だから、その感触がやわらかい。(つれづ159)
- (15) 彼は手首が固い。(IPAL381)
- (16) 彼は膝が柔らかい。(IPAL1151)

これらの用例からも分かるようにこの文型は同一の述語の判断の対象をN2項目とN1項目の二つの段階に分けて提示している。N2項目で判断の対象そのもの名詞句を提示した後、N1項目ではN2項目の具体的な部分や特徴を表す名詞句を提示するのである。二つの名詞句の組み合わせには2種類が見られる。その一つは「赤ちゃんと爪、椅子とクッション、彼と手首、彼と膝」などのようにN2項目の方が全体でN1項目の方はその部分や特徴のような組み合わせである。もう一つは「西洋の教会の鐘と材質、床と感触」などのようにN2項目の方が対象そのものでN1項目の方は「材質」そのものの意味を表すような組み合わせである。このような組み合わせの特徴は「硬度、弾力性、柔軟性」の3種類の意味で幅広く観察される。

この用法のN2項目の名詞句には判断を受ける主体として主に人間や動物

及び人間の生産活動による結果や自然物を表すものが使われる。「柔軟性」の場合に人間関係を表す意味の名詞句が多く使われるという特徴は1項目文型と同様である。N1項目の名詞句には1項目文型と同じように「材質」を有するものとして主に自然物や人間の生産活動による結果などを表すものや「材質、感触」などのような「材質」そのものを表すものが多く使われる。N1項目の名詞句の意味的な特徴にはN2項目の表現の具体化という文構造のために全体的なものではなく部分的なものが使われることになる。

このような2項目文型の二つの名詞句は次のように一つの項目に縮約して表現することが可能である。このような縮約の過程を経ても文の表す結果的な意味や内容は変わらない。

- (11-1) 西洋の教会の鐘の材質は硬い。
- (12-1) 赤ちゃんの爪は軟らかい。
- (13-1) この椅子のクッションはかたい。
- (14-1) 彼女の肌は赤ちゃんのように柔らかかった。
- (15-1) 彼の手首は固い。
- (16-1) 彼の膝は軟らかい。

1.3. 「硬(固、堅)い、柔(軟)らかい」の比喩的用法

『現代形容詞用法辞典』では「かたい」について「物が外からの力に対して変形したりこわれたりしにくい様子を表す。」⁷⁾とし、「やわらかい」については「物が外からの力に対して変形したり影響されたりしやすい様子を表す。」⁸⁾としながら両方にプラスマイナスのイメージはないと記述している。この記述からも分かるように「硬(固、堅)い」と「柔(軟)らかい」は「材質」の意味を表す代表的な形容詞で、意味的には対称的な特徴を持つ。このような2語の意味的な特徴と対称性は本義の用法のみならずこれらの語の表す比喩的意味の用法にも現れる。一般的にある意味を表す本義的用法の形容詞は他の意味を表す形容詞グループとの接点を持つ場合は多くない

7) 飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版 p.147

8) 前掲書 p.574

が、比喩的に使われる場合は多い。「硬(固、堅)い」と「柔(軟)らかい」にも様々な比喩的用法が見られるが、その場合にも「かたさとやわらかさとの対称的な対応関係」という基本的な意味特徴は明らかに現れる。このような傾向は日本語の形容詞全体の中でも稀に見られる特徴である。そのような点でここでは「硬(固、堅)い」と「柔(軟)らかい」の比喩的意味の用法とその意味の対称的な対応関係について簡略に考察してみることにする。

まず「硬(固、堅)い」の比喩的用法の用例には次のようなものがある。

- (17) 不景気だから消費者の財布のひもはかたい。(用法147)
- (18) 彼女は身持ちがかたい。(用法146)
- (19) あの子は堅い性格の子です。(用例157)
- (20) この調子でいけば、わか校の優勝は堅い。(用例157)
- (21) 島田さんと友の会の人びとはきずなが固い。(天声860201)
- (22) 幸子の決意は固かった。(消え23)
- (23) 宏子は声は固い。(まどう290)
- (24) 奴は頭がかたい。(用法146)
- (25) 彼の話はいつも堅い。(IPAL391)
- (26) 彼女の顔は冷たくて固かった。(永遠14)
- (27) 健次は振り向いたが、瞬間にその表情はなにか硬かった。(霧の184)

これらの比喩的な意味はある物の「材質」の「かたさ」の意味を基本的な軸にし、共起する名詞句との結合によって様々な意味に具体化している。前述の『現代形容詞用法辞典』は「かたい」と「やわらかい」の両方にプラスマイナスのイメージはないと記述しているが、用例を詳しく吟味すると必ずしもそうではない。例文(17)から(22)まではややプラスイメージよりの意味で、例文(23)から(27)まではややマイナスイメージよりの意味で使われていることが分かる。「硬(固、堅)い」の比喩的用法は全体的には中立的なイメージと言えるが、プラスやマイナスのイメージとしても多く使われているのである。一方、「守り、意志、信念、口」などの名詞句の場合は「硬(固、堅)い」とは共起するが、「柔(軟)らかい」とは共起しない。この点も特徴的である。また、「硬(固、堅)い」には比喩的用法の一つとして「口が固

い、堅い商売、文章がかたい、堅い人間」などのように慣用的に使われる用法も多く見られる。このような慣用的な使い方の場合でもそのイメージはプラスとマイナスの両方にわたっている。

次に「柔(軟)らかい」の比喩的用法の用例には次のようなものがある。

- (28) 怒られるかと覚悟していたが、父の表情はやわらかかった。(用法574)
- (29) いつもはきまじめな先生が、今日は珍しく軟らかい話をされたので、ちょっと驚いた。(用例850)
- (30) それは、外面(そとづら)は強く内面(うちづら)は軟かい。(社長150)
- (31) つまり外部の競争者、妨害者にはときに体を張って戦ったが、社内では人間が違うように軟らかい。(社長150)
- (32) 柔らかい電球の光。(用例850)
- (33) この出版社はやわらかい本も作る。(用法574)

「柔(軟)らかい」の比喩的用法の場合にもある物の「材質」の「やわらかさ」を意味の核にして様々な広がりを見せている。共起する名詞句の意味特徴は「表情、話、人間」などの人間関係や「電球の光、本」などの人間による加工物を表すものが多い。この中で「本」の場合を除くと全体的にプラスイメージとして使われる用法である。マイナスイメージの用法は見られない⁹⁾。特記すべき点は「柔(軟)らかい」のプラスイメージの用法はその殆んどが「硬(固、堅)い」のマイナスイメージよりの用法と対称的な関係にあるという特徴である。つまり、「硬(固、堅)い」は一部の用法を除くとややマイナスイメージの意味の象徴として、「柔(軟)らかい」はその殆んどがややプラスイメージの意味の象徴として使われるのである。このように「硬(固、堅)い」と「柔(軟)らかい」の2語の形容詞はその語彙的な基本的意味と比喩的用法の意味の両方において対称的な関係にあるのである。一方、「柔(軟)らかい」にも「頭がやわらかい、人当たりが柔らかい、柔らかい物腰」などのような慣用的な使い方が多く見られる。慣用的な使い方の場合

9) 「柔らかい本」は通俗的な内容の本という意味としても使われるが、そのイメージとしてはマイナスではなく中立として判断した。

にもそのイメージはプラスの方の表現と言える。

2. 転義的意味の用法

前述したように「材質」の意味を表す転義的用法の形容詞には「汚い、清い、脆い」などがある。本来「汚い、清い」は「清潔」の意味を、「脆い」は「強弱」の意味を表すが、これらの形容詞が特定の意味の名詞句と共起することで「材質」の意味を表すことになる。転義的意味の形容詞は一般的に「N2は(が)+N1が+形」の2項目文型を基本的な文型とするが、実際の言語表現では二つの名詞句の項目が省略または縮約して「N1は・が+形」の1項目文型として使われることが多いということは前述した通りである。「材質」の転義的用法の場合にもそれと同様であるが、「脆い」の場合には特徴的な用法が見られる。「脆い」は転義的な意味の形容詞であるにもかかわらず特定の名詞句と共起する場合は1項目文型を基本文型とする。詳しくは後述する。以上のような背景を踏まえ、本節では「材質」の意味を表す転義的用法の形容詞についてその2種類の主要文型とそれぞれの語彙の意味的な接点の用法を中心に考察する。

2.1. 「N2は(が)+N1が+形」

この文型は「材質」を表す転義的意味の形容詞述語文の論理的な面での最も基本的な文型である。転義的な意味の形容詞が論理的に二つの名詞句の項目を必要とする理由はその語彙的な属性の弱さにある。このような傾向は特に「汚い、清い」に著しい。「脆い」にはこの2項目文型の用法と1項目文型を基本とする用法とが両方見られる。まず「汚い、清い」の用例から見よう。

- (34) 東京湾は水が汚い。(IPAL453)
- (35) (この地域は)水がずっと汚い。(地球33、括弧内筆者)
- (36) 新生児は手が誰でも清い。(パルモ76)
- (37) 東京は空気が清い。(IPAL453)

「汚い、清い」が「材質」の意味を表す場合はその属性の度合いが弱くな

ることは用例からも確認できる。「材質」の意味を表す「汚い、清い」の形容詞述語文は一つの判断対象の名詞句に対する全面的な判断ではないため「材質」の判断を受ける主体としての名詞句とその部分を表す具体的な名詞句の二つの項目を必要とする。つまり、この文型は述語形容詞の持つ「材質」の意味の属性の弱さを補うためにN1項目に表現対象の「材質」を具体的に言い表す意味の名詞句を付け加え、そのN1項目の名詞句と述語形容詞とが結合した形で使われる表現なのである。この点は「1.2.」の本義の「硬(固、堅)い、柔(軟)らかい」の2項目文型「N2は(か)+N1が+形」と同様な特徴で、まずN2項目で判断の対象そのものの名詞句を提示した後にN1項目ではN2項目の具体的な部分や特徴を表す名詞句を提示するのである。「汚い、清い」は「水、手、空気」などの名詞句のみとは共起しない。むしろ「水、手、空気」などのN1項目の名詞句と連語のような形で結合し、N2項目に対する「材質」の判断の意味を作り出すことになる。この文型のN2項目には判断を受ける主体として「東京湾、東京、太平洋、新生児」などのように自然現象としての地域や人間の意味を表す名詞句が使われる。N1項目には「水、空気、手」などのようなN2項目の名詞句の「材質」を具体的に言い表す意味のものが使われる。このような2項目文型はその殆んどが一つの項目に縮約または省略して使うことが可能である。1項目に変換しても文の意味や内容は変わらない。この縮約や省略の用法が「2.2.」の「N1は・が+形」文型の用法の一部である。

- (34-1) 東京湾の水は汚い。
- (35-1) この地域の水は汚い。
- (36-1) 新生児の手は清い。
- (37-1) 東京の空気は清い。

次は「脆い」の2項目文型の用法である。この用法は「脆い」の判断に地域などの背景の要素が追加され、2項目文型として使われる表現である。次はその例文である。

(38) この辺りは地盤がもろい。(IPAL1115)

(39) この辺は岩盤がもろい。(IPAL1115)

この用法の名詞句は「2.2.」の「脆い」の基本用法の1項目文型の名詞句とはその意味特徴が異なる。つまり、「2.2.」の「脆い」の基本用法の「N1は・が+形」文型の名詞句は本来その語彙的な属性として「強弱」の意味を持っているが、この2項目文型の名詞句はそのような意味特徴と属性が弱いためにN1項目の名詞句と述語形容詞とが結合した形でこそ表現対象に対する直接的な判断が可能になるのである。ただし、実際の言語表現ではこの二つの名詞句の項目は縮約して1項目文型として使われることが多い。この用法のN2項目には判断を受ける主体として「この辺り、この辺」のように地域を表す名詞句が多く使われる。N1項目には「地盤、岩盤」などのようなN2項目の名詞句の「材質」を具体的に言い表す意味のものが使われる。このような2項目文型はその殆んどが一つの項目に縮約または省略してして使うことが可能である。

(38-1) この辺りの地盤はもろい。

(39-1) この辺の岩盤はもろい。

2.2. 「N1は・が+形」

この文型には「2.1.」の「N2は(が)+N1が+形」文型の省略や縮約の使い方と「脆い」の基本的な用法の2種類の表現が見られる。2項目文型の省略や縮約の用法は「2.1.」ですでに詳しく考察したのでここでは触れないことにする。ここでは「脆い」の1項目の用法を中心に考察を行う。「脆い」のような転義的意味の形容詞の基本文型として1項目文型が使われる点は特徴的である。次はその用例である。

(40) その合金はもろい。(IPAL1113)

(41) 従来セラミックはもろかった。(IPAL1113)

(42) 鑄物は鋼鉄と違ってろい。(基礎1146)

『現代形容詞用法辞典』では「脆い」の意味について「外からの力に対してこわれやすい様子を表す。」¹⁰⁾と記述している。この記述からすると「強弱」を表す「脆い」の意味は「硬度、弾力性、柔軟性」の「材質」の本義の意味とはやや異なるが、その中の「硬度」の「硬(固、堅)い」の用法の対義の意味の一部と関連があることが分かる。つまり、この種の「脆い」は「合金、セラミック、鋳物、ガラス、瀬戸物」などのように「固い物質ではあるが外力に対して細かく割れたり、崩れ砕けたり、欠けたりしやすい性質のもの¹¹⁾」に対しての属性的な判断なのである。言わば「かたさ」の性質を持っているものに対する強弱の判断と言える。そのような点でこの用法は「1.1.1」の1項目専用の用法の「硬度」の表現と似ているところが多い。その類似点を挙げると一般的には2項目以上の文型では現れないこと、「合金、セラミック、鋳物、ガラス、瀬戸物」など特定の名詞句のみと共起することなどの特徴である。この1項目文型の名詞句には「材質」を有するもので、「かたさ」は持っているが「強弱」の性質の上では弱いという意味を持つものが使われる。主に自然物や人間の生産活動による結果などを表すものが多いが、この用法が可能な名詞句の数はそれほど多くない。

2.3. 転義の意味の形容詞の意味の接点

「1.3.」では「材質」を表す本義の形容詞の語彙の比喩的用法について考察した。転義の形容詞の場合は比喩的用法よりは他の意味項目の形容詞との接点を持つ場合が多い。それは特定の意味項目の属性そのものではなく名詞句との結合を通じて文脈上の意味を表す転義の形容詞の場合は組み合わせを作るN1項目の名詞句の意味特徴によって様々な意味を表すことになるためである。ここでは「材質」を表す転義の意味の形容詞「汚い、清い、脆い」についてそれぞれの形容詞の持つ意味の接点を概略的にまとめておきたい。その記述においては共起するN1項目の名詞句と共起の結果として言い表す意味項目を中心にまとめることにする。

10) 飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版 p.563

11) 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店 p.1146

「汚い」にはおおむね4種類の意味項目との接点が見られる。「汚い」は「エプロン、油汚れ、しみ」などの名詞句と共起する場合は「清潔」の意味を、「色、音、声、字」などの名詞句と共起する場合は「美醜」の意味を、「やり方、手口」などの名詞句と共起する場合は「正不正」の意味を、「金、食」などの名詞句と共起する場合は「執着」の意味を表すことになる。

「清い」にはおおむね3種類の意味項目との接点が見られる。「汚い」は「流れ、月、川」などの名詞句と共起する場合は「清潔」の意味を、「美しさ、心」などの名詞句と共起する場合は「美醜」の意味を、「仲、関係」などの名詞句と共起する場合は「関係」の意味を表すことになる。

「脆い」にはおおむね2種類の意味項目との接点が見られる。「脆い」は「横揺れ、下からの衝撃」などの名詞句と共起する場合は「耐性」の意味を、「情、女、義理人情」などの名詞句と共起する場合は「気力」の意味を表すことになる。

IV. おわりに

以上、「材質」を表す形容詞述語文について名詞句・助詞・述語の三者間の関係を中心に分析と考察を行った。その結果に基づき、「材質」を表す形容詞述語文の主要な文型と用法をまとめると次のようである。

「材質」を表す形容詞述語文の主要な文型として「N1は・が+形」文型には「硬度」判断の専用的用法と「脆い」の基本的用法と本義の意味の「材質」判断の主要用法と実用的な面における「材質」判断の総括的用法などの特徴があり、「N2は(が)+N1が+形」文型には転義の意味の「材質」判断の主要用法と論理的な面における「材質」判断の総括的用法などの特徴があることが分かった。

次に「材質」を表す形容詞述語文のその他の主な特徴としては文型の構造が比較的単純であること、実際には1項目文型が多く使われること、本義の意味と転義の意味の特徴の違いが明らかであること、「硬度」の用法に1

項目専用の用法があること、転義的意味の形容詞「脆い」に1項目文型を基本とする用法があること、本義的意味の用法には比喩的な表現が多く見られること、転義的意味の用法には他の意味項目の形容詞述語文との接点が多く見られることなどの特徴があることが分かった。

<参考文献>

- 石綿敏雄・荻野孝野(1983)「日本語用言の結合価」『朝倉日本語新講座3文法と意味I(付録2)』朝倉書店 p.226
- 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』秀英出版 pp.11-20
- 情報処理振興事業協会技術センター(1990)『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL(Basic Adjectives)』情報処理振興事業協会 pp.376-1163
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版 p.42
- 仁田義雄(1980)『語彙論的統語論』明治書院 p.51
- 飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版 pp.147-575
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店 pp.315-1147

<用例出典>

- (永遠)『永遠のためいき』新田次郎(1912男) 文春文庫 1975
- (消え)『消えた天才ライダー 伊藤史朗の女』小林信也(1956男) CBSソニー出版 1985
- (霧の)『霧の旗』松本清張(1909男) 中公文庫 1975
- (社長)『社長よ驕るなかれ』三鬼陽之助(1907男) 講談社 1973
- (地球)『地球環境のなかの琵琶湖』吉良竜夫(1919男) 人文書院 1990
- (つれづ)『つれづれの味』増田れい子(1929女) 北洋社 1978(1977『毎日グラフ』)
- (天声)『続・深代惇郎の天声人語』深代惇郎(1929男) 朝日新聞社 1977
- (天声)『天声人語・人物編』辰濃和男(1930男) 朝日新聞社 1987
- (天声)『天声人語・自然編』辰濃和男(1930男) 朝日新聞社 1988
- (バルモ)『バルモア病院日記』中平邦彦(1938男) 新潮社 1986
- (まどう)『まどう(上)』瀬戸内晴美(1922女) 新潮文庫 1981(1976, 77毎日新聞載)
- (IPAL) 情報処理振興事業協会技術センター 1990『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL(Basic Adjectives)』情報処理振興事業協会

(基礎) 森田良行(1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

(用法) 飛田良文・浅田秀子(1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版

(用例) 林史典他編(1986) 『国語基本用例辞典』教育社

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

「材質」을 나타내는 형용사술어문의 문형과 용법

본고는 「材質」을 나타내는 형용사술어문에 대하여 문형론의 관점에서 문의 구조와 단어의 의미와의 관계를 분석 고찰한 연구이다. 연구의 목적은 「材質」을 나타내는 형용사술어와 문형의 파악, 각 문형과 명사구나 형용사술어의 의미특징·조사의 역할 등과의 관계의 분석, 「材質」의 형용사술어문의 주요 문형과 용법 및 문 구조의 특징의 파악 등이다.

분석의 결과 「材質」을 나타내는 형용사술어문의 주요한 문형으로서 「N1は・が+形」문형에는 「硬度」판단의 전용 용법, 「脆い」의 기본적 용법, 본의적 의미의 「材質」판단의 주요 용법, 실용적인 면에서의 「材質」판단의 총괄적 용법 등의 특징이 있었다. 그리고 「N2は(が)+N1が+形」문형에는 전의적 의미의 「材質」판단의 주요 용법, 논리적인 면에서의 「材質」판단의 총괄적 용법 등의 특징이 있는 것을 알 수 있었다.

또한, 「材質」을 나타내는 형용사술어문의 그 외의 주요한 특징으로서는 문형의 구조가 비교적 단순한 것, 실제로는 1항목 문형이 많이 사용되는 것, 본의적 의미와 전의적 의미의 특징의 차이가 비교적 명확한 것, 「硬度」의 용법에 1항목 전용의 용법이 있는 것, 전의적 의미의 형용사 「脆い」에 1항목 문형을 기본으로 하는 용법이 있는 것, 본의적 의미의 용법에 비유적 표현이 많이 보이는 것, 전의적 의미의 용법에 다른 의미항목의 형용사술어문과의 접점이 많이 보이는 것 등의 특징이 있다는 것을 알 수 있었다.

美の語彙に関する一考察

— 「くはし」「きよし」「うつくし」を中心に —

朴 恵 子*

keikopark@hanmail.net

< 目 次 >

>

- | | |
|------------|----------------|
| 1. はじめに | 4.1 「くはし」について |
| 2. 先行研究 | 4.2 「きよし」について |
| 3. 研究方法 | 4.3 「うつくし」について |
| 4. 美の語彙の分析 | 5. おわりに |

Key Words : 미의 어휘(aesthetic words), 분류(classification of aesthetic words),
쿠하시(Kuhashi), 키요시(Kiyoshi), 우쯔쿠시(Utsukushi)

1. はじめに

現代において、美を表す言葉(以下‘美の語彙’とする)は、その示す意識内容が明確に区別されていることはなく、そのほとんどは大きく重なり合っており、漠然と区別されているにすぎないが、平安時代(794~1192)に見られる美の語彙は、ある特定の意識内容を持っており、それによって明確に使い分けがされているのである¹⁾。美の語彙に関する国外での研究によると、美の語彙は時代によって変化し、当時の社会的環境や伝統により、その語彙の意味と活用が影響されたことを論じている²⁾。美の語彙

* 中央大學校 講師, 日本語學

1) 北京京子(1976)「枕草子における美的語彙の研究-「うつくし」「うるはし」を中心に-」
『米沢国語国文』3 p.4

は、日本語または他の言語の特定の言語が持つ感想的描写による意味の細分化、または統合等の言語的特性を表すことによる、美の語彙が理解できれば、その言語に対する理解にも役立つはずである。しかしながら、いまだに美の語彙研究は他の研究分野に比べると、さほど進んでいないのが現状である。

日本語では美の語彙に二つの系統があることがわかる³⁾。奈良時代(710~794)の「くはし」は、細かい、小さなものを美と感ずる心を表していた。それにとって代わった「きよし」は清浄、潔白を美と感ずる心が一般化されたものと解釈できる。ところが、次に現われる「うつくし」は小さいものに対する愛情ということから美一般に移行したものである。これは「くはし」の系列に属する。また「きれい」は漢語「綺麗」として、十六世紀になって初めて「きよし」の意味領域に入り込み、⁴⁾清浄の意を表すようになり、やがて美一般を表すように広まっている。これは「きよし」と同じ系列に属している。

よって、本稿では日本語における美の語彙として、小さなものに対する愛情「くはし」「うつくし」と、清浄なものに対する愛情「きよし」が奈良平安時代にはどのような意味領域を各々荷担し、入れ替わりながら現代の美を表す言葉の中心に入り込んだのかを試みることは大きな意義あると思われる。

2. 先行研究

日本語における美の語彙に関する従来の研究は、主に「美の概念」・「美意識」・「美的理念語」・「美的語彙」という観点からその言葉の語義や意義などを把握し、語彙の意味変化の史的展開など記述されたものが多い。まず、美

2) Mara, Michele(1999) *Modern Japanese Aesthetics:: A Reader*, University of Hawaii Press, p.237

3) 大野晋(1973)「美意識の発達と日本語」『理想』483, p.39

4) 浅野敏彦(1973)「綺麗 うつくし きよし ー漢語と和語ー」『同志社国文学』8, pp.82-94

的語彙論における先行研究として、梅野(1988)⁵⁾、美的語彙とはそれらの語彙が「何の、どのような美に用いられているか」というように語彙の対象とするものの検討が美的語彙研究の出発点だということを主張している。このことは日本語の美的語彙の研究についての本格的な先行研究のように思われる。また、原田(1988)⁶⁾による美的語彙の定義とは、貫之の文章で代用し、「心に思ふ事」とは美観の情意的本性を、「見る物聞く物につけて言い出だす」とは、美的観照に基づくことを表現している。真下(1988)⁷⁾、美であるかどうかは、人間の下す評価で決まるものであり、その評価とは、ある時のある場所の人々がくだす評価であって、その語の形は同一でも時代によって意味も変えるものと見なしている。

次に、美の語彙の「くはし」に関する先行研究は他の美の語彙に比べれば数少ない。阿部(1991)は⁸⁾「さかし女くはし女」の視点から「くはし」は「繊細美」をあらわすだけでなく、複合語として使われた場合の「目抄姫」は「神聖な美」としての語義も内在すると記しているのはとても興味深い。しかし扱っている作品と用例が限定されているため、厳密な意味分析までには至っていない。「きよし」に関する先行研究として、山崎(1988)は⁹⁾『万葉集』の中から「きよし」の用例を主に自然(花、動物、鳥、月など)に関わるものと分析し、奈良時代の「美意識を表現する語」として、美的な観点からとらえている。また、谷口(1971)は¹⁰⁾、「きよし」について、『万葉集』から『源氏物語』への語彙の意味変化について幅広い詳細な調査・研究が見られる。龍(1975)は¹¹⁾、平安朝文芸における「きよし」「きよげなり」「きよらな

5) 梅野きみ子(1988)「美を表す語彙」<私の美的語彙論> — 「えん」と「なまめかし」をめぐる [日本語学] 7-11 p.37

6) 原田芳起(1988) 特集・美を表す語彙 <私の美的語彙論> — 私の美的語彙論『日本語学』7-11 p.46

7) 真下三郎(1988)「美を表す語彙 <私の美的語彙論> — 「しほ」について」『日本語学』7-11 p.56

8) 阿部寛子(1991)「衣通郎姫」伝承孝—その(-): さかし女・くはし女の視点から調布日本文化 田園調布学園大学 創刊号 p.35

9) (1988)「美を表す言葉・日本語における美を表す言葉」『日本語学』7-11明治書院、pp.57

10) 谷口典子(1977)「きよし」について(2)万葉集から源氏物語への語彙研究の試み「平安文学研究」47

り」を文法と対象面から見た視点で論じられており、随筆物語文学で表わされるそれぞれの意味領域の相違を確認することができた。「うつくし」に関する先行研究は、数多く見られるが、主な先行研究としては松尾(1972、1976)は12)、「うつくし」を「可愛い」である意味ですべてを解釈し、『源氏物語』での意味不変化を主張し、「うつくし」の性格について述べている。しかし「うつくしげなり」を介して「可愛いらしい」の情態表現としての意味領域を含む問題がある。済田(1971)は13)、奈良時代、平安時代における、「うつくし」「うるはし」を取り上げ、時代別、作品別に比較分析したものである。しかし「うつくし」の対象について詳細な分析は見られるが、意味については一切記述されていない。和田(1981)では14)、『源氏物語』に於ける「らうたし」を「うつくし」との語義上の相異に注目した論として、「うつくし」の語意が明らかになる。最後に、水野雅子(1974)は15)、「うつくし」を意味と対象を年齢との関係で分類することによって、人間評価につながる論であり、用いられた人物、その場面の周辺の事情に左右される「うつくし」の性格が参考になる。

3. 研究方法

日本において、美の語彙が最も発達したのは、王朝貴族がその文化の担い手であり、平安時代の言葉を一目で鳥瞰できる『源氏物語』であろう16)。

-
- 11) 龍富輝子(1975) 平安朝文芸における「きよし」「きよらなり」「きよげなり」『香推濁』20 pp.47-63
 - 12) 松尾聰(1972) 「中古語「うつくし」の語意」『国語展望』31 pp.7-14
松尾聰(1976) 「中古語「うつくし」の語意再説」『源氏物語の全用例から』『国語展望』43、pp.7-15
 - 13) 済田千恵子(1971) 「美意識を表わす形容詞 上代・中古における「うつくし」「うるはし」」『青山語文』2、pp.6-22
 - 14) 和田明美(1981) 『源氏物語』に於ける「らうたし」—特に「うつくし」との語義上の相異に注目して—『高知女子大國文』17 pp.90-99
 - 15) 水野雅子(1974) 『源氏物語』研究「うつくし」の性格『岐阜女子大学紀要』3 pp.157-164
 - 16) 山崎良幸(1988) 「美を表す言葉・日本語における美を表す言葉」『日本語学』7-11、明

『源氏物語』には言葉のあらゆる姿の言葉が書き納められている。

山崎(1988)は、美を表す言葉を大きく「神聖美」・「愛情美」・「属性美」・「感興美」・「外来語の美」の表現に分類し、日本語の美の語彙の本質に触れている。ここでは、山崎の<表1>に表れている美の語彙の分類表の中から、「神聖美」・「愛情美」を分類基準として、小さなものに対する愛情「くはし」「うつくし」と、清浄なものに対する愛情「きよし」がどのような美の意味領域として表されるのかを細分化し、奈良時代・平安時代を通じて、どのような意味を持ち、どのような役割をしてきたか、また言語的特性はどのような形で表われるかを検討する。

基本的には実例を数多く集め、その分析を通して結論を導き出す記述的な研究方法をとる。実例を集める対象とする文献は、『万葉集』・『枕草子』・『源氏物語』の中から、各々の美の語彙を大きく意味と用法に分けて分類整理していく。まず、意味の分類では該当用例が用いられている文脈、場面、美の対象となる意味内容などを吟味して細分化し、各々の文献における美の語彙の意味は如何なる意味領域として用いられているのかを追求したい。分類においては『分類語彙表』の分類方針に従っているが、一部変更した項目は次のとおりである。

人物：様態・容姿心(精神)・髪

事物：調度品・服装儀式・住居・自然・その他

また、用例の文献名称は『万葉集』・『枕草子』・『源氏物語』を

『万』・『枕』・『源』と略称する。

<表1> 美の語彙の分類

語彙	山崎	本稿
くはし	神聖美	神聖美
		繊細美
きよし	清浄美	神聖美
		清浄美
		人工美
		清涼美
		潔白美
うつくし	愛情美	愛情美
		可憐美

4. 美の語彙の分析

4.1 「くはし」について

奈良時代の言葉を見ると、「美」であるということの意味した語彙は「くはし」であると言える¹⁷⁾。まず、辞書類に記述されている『岩波古語辞典』の「きよし」の意味記述によると、

- ① [細し・麗し] すぐれてうつくしい。
- ② [細し・詳し] 事細やかである。落ちがない。と記されていて、また、

また、『日本国語辞典 第二版』においては、

- ① [美・細・妙] こまやかで美しい。精妙である。うるわしい。
- ② [詳・委・精] 細かい点にまでゆきわたっているさま。詳細である。つまびらかである。つぶさである。また、①では単独で用いられることは少なく、「うらぐはし」「まぐはし」「かぐはし」など、複合形容詞として、多く用いられる。また、朝日・夕日・山・湖花女などを主として、自然の造化物の美しさを

17) 大野晋(1973)「美意識の発達と日本語」『理想』483、p.37

表現した。次第に繊細な美を強調するようになり、平安時代以降には ②[細し・詳し]の事柄・様子など詳細であることを表現するようになった。

と記述されていることから、「くはし」については、①[細し・麗し]の「美」であるということの意味した奈良時代の文献の用例を中心に「くはし」に表われる美の分類として「神聖美」「繊細美」がそれぞれどのように区別されているのかを考察する。

< 繊細美 >

奈良時代の「くはし」は、①の[美・細・妙]の字が当てられるところから、従来の繊細な美しさということが言われてきた。ここでは、「くはし」に表れる美の分類として、細やかな、繊細な美として、『日本書紀』1例、『万葉集』の用例の中で3例見られる。

- (1) 走り出のよろしき山の、出で立ちのくはしき山ぞ (万・十三・3331)
- (2) 赤らひく 色ぐはし子を しば見れど 人妻ゆゑに 我れ恋ひぬべし (万・十・1999)
- (3) 青柳の糸の細紗 (万・十・1851)
- (4-1) 花ぐはし 桜の愛で 如此愛(ことめ)では 早くは愛でず 我が愛ずるこらよ (日本書紀・十三・67)

(1)では、山並みの伸びる形がよい山で、そびえる形が美しい山だという意として、「山くはし」の意は、非常に充実しており、密度が細かく、見事だという意味になる。(2)では、ほんのりと紅い頬をした美しい女(ひと)を、こんなにしばしば見ていると人妻だということも忘れて、私は恋いに堕ちてしまうのではなからうかという意味として、「あからひく色ぐはし子」とは、官能的な美しい表現という意味になる。(3)では、青柳の垂れた枝が、細く、細かく、美しいことを指して、「クハシサ」と訓むことから

も、繊細で精妙な美しさが表されている。(4)の意は「こまかく美しい桜の花の見事さよ、同じ愛するなら、もっと早く愛すべきだった。わが愛する姫よ」¹⁸⁾という意として、桜の花びらの繊細な美しさを歌っているように思われる。

< 神聖美 >

「神聖なものを美しいものとして仰ぎ見るのは、多くの民族に共通にみられる現象として、人間が最初に発見したのは、神においてであったのかも知れない」¹⁹⁾といわれるように、奈良時代には、自然を神の存在として信じていた古代人の宗教感からのものではないかと思う。ここでは『日本書紀』1例、『万葉集』による「くはし」の複合形容詞として、「うらぐはし」3例、「まぐはし」3例、「かぐはし」8例、「名ぐはし」3例、「麗し妹」1例、総18例が見られる。

(4-2) 花ぐはし桜の愛で如此愛(ことめ)では早くは愛せず我が愛するこらよ
(日書十三67)

(5) 花ぐはし葦根越しにただ一目相見し見ゆい千たひ嘆きつ (万十一・2565)

(6) 霍公鳥 来鳴く五月に 咲きにはふ 花橋の かぐはしき 親の御言 (下略)(万十九・4169)

(7) 橋の下吹く風のかぐはしき筑波の山を恋ひずあらめかも (万・二十・4371)

(8) 梅の花香をかぐはしみ遠けども心ものに君をしぞ思ふ (万・二十・4500)

(9) (上略) 上つ瀬に鶺鴒を八つ潜け下つ瀬に鶺鴒を八つ潜け上つ瀬の鮎を食はしめ麗
(くは)し妹に 鮎を惜しみ (万・十三・3330)<人間・神聖>

(10) (上略) 馬酔木花咲き 末辺は 椿花咲くうらぐはし山ぞ泣く子守る山 (万・十三・3222<自然・神聖>

(11) (上略) 大和の 黄楊の小櫛を 押へ刺す うらぐはし子それぞれ我が妻 (万・十三・3295)<人間主体・娘>

18) 『日本書紀』<上> 宇治谷 孟 (翻訳) 講談社学術文庫、p.268

19) 山崎馨(1988)「美を表す語彙—上代の美的語彙」『日本語学』7-11、p.13

- (12) (上略)神さび立てり 名ぐはし 吉野の山は かげともの 大御門ゆ 雲居にぞ (下略)(万・一・52)<自然・神聖>
- (13) (上略)島は多けど 名ぐはし 狭岑の島の 荒磯面に 廬りて見れば (下略)(万・二・2-220)<自然・神聖>
- (14) 名ぐはしき印南の海の沖つ波千重に隠りぬ大和島根は (万・三・303)<空間・神聖>
- (15) 上つ毛野まぐはしまるとに朝日さしまきはしもなありつつ見れば (万・十四・3407)<人間・神聖>

(4-2)は、桜の花びらの細やかな繊細な美しさを歌っているものとして、すでに「繊細美」と分類したが、后妃の妹である衣通郎姫に恋心をいだいた帝が衣通郎姫の美しさを桜にたとえて歌った歌でもあるので、背後に神の力を感じる「靈的」²⁰⁾あふれる「神聖美」としての美しさが内在すると思われる。(5)では、「葦の垣根ごしにたった一目ながら目を合わせてしまった乙女のために、もう千たびも嘆いたよ」の意味で、「花グハシ」は花麗しい自然意味である。(6)(7)(8)は、複合語として、自然関しておいが芳しいという意として、人間に対しては美しいまたは愛らしい意がある。(9)は、あの世に行ってしまったもう逢えない愛しの妻を歌った歌で、(10)(11)は橘の花のようにかぐわしい母上様と、愛しい妻を歌ったものである。また、(12)(13)(14)は、それぞれ「吉野の山」「狭岑の島」「大和島根」の名称が立派だという意で、(15)は、あざやかな朝、あなたと向かい合っているとよけいあなたが眩しくみえるという美しい女性の意味である。このように「かぐはし」「うらぐはし」「名ぐはし」「まぐはし」は、多く複合語として使われ、朝日がくはし、夕日がくはし、湖がくはしなど主として自然の造化物の美しさや、人間に対する愛しい、心情表現が内在すると思われる。

4.2 「きよし」について

この稿では、奈良時代と平安時代における「きよし」の用法や、各々の

20) 阿部寛子(1991)「衣通郎姫」伝承孝一その(-):さかし女・くはし女の視点から調布日本文化 田園調布学園大学 創刊号, p.34

文献における「きよし」の意味は如何なる意味領域として用いられているのかを考察し、分類していきたい。

まず、辞書類に記述されている『岩波古語辞典』の「きよし」の意味記述²¹⁾と、『日本国語辞典第二版』において²²⁾の記述を踏まえ、次のように四つの意味に分類し考えたい。

- ① けがれの無い、水や月などが澄み渡っている (清浄美)
- ② さわやかで、すがすがしいこと。(清涼美)
- ③ 宗教・信仰の対象などとして、尊くしておかしたいこと。(神聖美)
- ④ 名声に何の汚点もない。(潔白美)

4.2.1 奈良時代の「きよし」の意味用法

『万葉集』での「清」字には、「さやけし」「すむ」の訓もあるが、最も多いのは「きよし」だけである。²³⁾また、万葉時代には、「きよし」だけで「きよらなり」や「きよげなり」は平安時代になってから用いられたので、ここでは「きよし」を中心に考察していきたい。

- (16) 山川の清き河内と御心を吉野の国の花散らふ(万・一・36) <自然・河・①>
- (17) 川なみの清き河内ぞ春へは花咲きををり秋されば霧立ちわたる(万・六・923) <自然・河・①>
- (18) 玉敷ける清き渚を潮満てば飽かず我れ行く帰るさに見む(万・十五・3706) <自然・渚・③>
- (19) 久方の月夜を清み梅の花心開けて我が思へる君(万・八・1661) <自然・梅・③>

21) 清浄で汚れ・こもりがなく、よけいな何物もない意、純粹・無垢で透明の意と書き記されている。

22) (1) 物事について、けがれや汚れがなく、清浄で、水や月など澄み渡っている。爽やかで気持ちがいい。(2) 心、きもち、動機などについて、けがれやよごれがなく、潔く、卑怯でないさま、(連用形が副詞的になり)残すところがない。

23) 秋山獻(2001)『王朝語辞典』理想社 p.145

- (20) 織女し舟乗りすらしまそ鏡清き月夜に雲立ちわたる (万・十七・3900) < 自然・月・① >
- (21) 月読の光りは清く照らせれど惑へる心思ひあへなくに(万・四・671) < 自然・月・① >
- (22) 言清くいたもな言ひそ一日だに君いしなくはあへかたきかも(万・四・537) < 心・精神・④ >

『万葉集』で「清き」ものの代表は(16)~(21)に表われるようにほとんどが月や水に緑のある河原、渚、山川、浜辺などが「し」の対象とされ、けがれや汚れがなく、清浄で、水や月など澄み渡っている、まるで自分の魂までもが清明な状態にあることを示す清浄、清涼美として表れている。また、(22)は、「きれいごとや言い訳は、もう結構ですわ。一日たりとも、あなたなしの(生活)には、耐えられない」の意として、残るところがないきれいさっぱりとした潔い表現として表れている。

以上、奈良時代における「きよし」の意味について考察してきたが、ほとんどが自然が美の対象とされ、けがれや汚れがなく、清浄、清涼美として万葉独自の自然観を特徴づけるものであると思われる。

4.2.2 平安時代の「きよし」の意味用法

『枕草子』に見られる「キヨ」を語源とする語の出現状態は、形容詞「きよし」形容動詞「きよらなり」、「きよげなり」、名詞「きよらさ」、「きよめ」と成り立っている。「きよし」は、終止形は除き、他は連用形に用いられ、「け清う申し出でられぬ」(二十段)、「けぎよう聞きも入れで」(九十一段)、「きよく知らで」(一一六段)、「きよう忘れて」(二五四段)、「きよう見えきこえず」(二五四段)となり、対象に対する美的内容はほとんど表われない。意味として、

「まったく」、「全々」、「すっかり」等に訳され、副詞的語として用いられるのである。奈良時代の『万葉集』の「きよし」は自然に対する神聖美や清浄美が用いられたが、平安時代に入り「きよし」に限り、自然を対象とする用例は見られない。

- (23) 白く清げなる陸奥紙に、いといと細う書くべくはあらぬ筆して (枕・二十段)<事物・調度品>
- (24) いと白う清げなるに良き筆、白き色紙、陸奥紙など (枕・二五五段)<事物・調度品>
- (25) 青き薄様に、いときよげに書きたまへり (枕・七五段)<人物・様態>

(23)(24)(25)では、それぞれ白色や青色の紙に心ひかれていると言える。また、色彩というよりは透明な感覚としての清涼な美である。

- (26) 清しと見ゆるもの……水をものに入るる透影 (枕・一三九段)<事物調度品>
- (27) 桜の綾の直衣の、いみじうはなばなど、うらの艶など、えもいはずきよらなるに、葡萄染の、いと濃き指貫 (枕・七六段)<事物・調度品>
- (28) 檳榔毛の車の白く清げなるに、蘇枋の下簾 (枕・五五段)<事物・調度品>
- (29) きよげなる立文持たせたる男などの、誦経の物うち置きて (枕・一一一段)<人物・容姿>
- (30) きよげなる若き男どもの、主と見ゆる二、三人、(枕・一一二段)<人物・容姿>

(26)(27)では、透き影や光沢と言った一瞬のうちに変化する動的な光の動きや色彩というよりも透明なしめやかな輝く感覚の世界に魅せられている。また(28)では、色彩の相互間におこなされる華やかな映える色のハーモニー(24)を醸し出す美を用いて表現していると言える。(29)(30)で表われる人物に対しては、「きよげなる若き男」のように姿全体に備わる、格調高い風格美を表現している。このように『枕草子』における、「きよし」「きよら」「きよげ」による美的対象は、主に人物や形状、色彩、位階を中心として、事物全て人工的なもののみで、自然や自然現象によるものは一つも含まない。また、季節感においても、天候、風景等の自然にあるのではなく、そ

24) 龍富輝子(1975) 平安朝文芸における「きよし」「きよらなり」「きよげなり」『香推淵』20、p.58

の季節の出来事、事件を背景としているのが特徴である。

『源氏物語』における、「キヨ」を語源とする語を調べてみると、形容詞「きよし」、形容動詞「きよらなり」、「きよげなり」、「けうらなり」、名詞「きよら」、「きよめ」、「きよまり」、動詞「きよまる」、「きよげだつ」から成り立っている。ここでは「きよし」を中心に「きよらなり」「きよげなり」と「心きよし」における用法と意味を中心に考察していくことにする。

- (31) 月は入り方に空きよう澄みわたれるに、風いと涼敷成て、草むらの虫の声もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草の本なり。(源・桐壺-14)<自然・空>
- (32) 雨のうち降りたるなごりの、いとものしめやかなる夕つ方、御前の若かえで、かしわぎなどの、青やかに茂りあひたるが、何となく心ちよげなる空を見出だ 「和してまた清し」とうち誦じ給うて、(源・胡蝶415)<自然・月>
- (33) 律の調べは、女の物やはらかに 掻き鳴らして、簾のうちより聞こえたるも、いまめきたるもの声なれば、きよく澄める月におりつきなからず。男いたくめでて、簾のもとに歩み来て (源・帚木-50)<自然・月>
- (34) らうがはしく、とかく 紛れ給ふめりしほどに、底清く澄まぬ水に宿る月は、曇りなきやうのいかでかて (源・常夏-5)<自然・水>
- (35) ふる蓮を待ちはべるほど、その夕べまで、水草清き山の末にて勤め侍らむ (源・若菜上-277)<自然・草>

用例(31)~(35)の「きよし」の対象は空・月・水草等の自然を美の対象としている。「きよし」と表された季節はすべて秋で、快い空気の感触としっとりしたあたりの気配につつまれた中で、「澄み渡れる」空、「何となく心きよげなる空」、「澄める月」、底まで澄んだ水を 「きよし」と感じている。即ち、「きよし」は色彩で表すと、無色・白・青、感覚的には、透明感・冷感・清涼感・清澄感・清潔感を与える美なのである²⁵⁾。

25) 谷口典子(1971)「きよし」について(2)「万葉集から源氏物語への語彙研究の試み」『平安文学研究』47

他に、「きよし」系語の上に来て「きよし」系語に影響を及ぼし、その美の条件を規制している上接語として、「口清し」(1)、「物清し」(2)、「心清し」(36)の用例数が見られ、最も用例の多い「心清し」の場合、「清し」の対象は心で、異性に対する不純な感情、つまり懸想心のない潔白・清純の心の様子である。

- (36) かく人のをしはかる、案に落つることもあらましかばいとくちおしくねちけたらまし、かのおとどに、いかでかく心きよきさまを知らせたてまつらむ、(源藤袴-98)<人物精神>

用例(36)から、光源氏が玉髪との仲が疑われ、「何とかして、このような身の潔白なさまをお知らせ申したいものだ」と決心していると解釈できる。「心きよし」の用例中、ほとんど会話や心理状態の独言に表われており、感情主体として、表現されている。即ち、「きよし」の系語が視覚を通して生じた感情を表す視覚美の情意語であるのに対して、「きよし」が上に心物口を上接すると、視覚的要素が消え、心理的作用のみに関する内攻性の強い情意語となる。以上のことから、「きよし」は主に、空月水草等の自然を対象とし、清涼・清浄・清潔・潔白という意味を示す語である。

- (37) 又なきもものねなりとめでさせ給ひければこの折りの清らなり (源・宿木-106)<人物・様態>
- (38) かれはいとかやうに際はなれたる清らはなかりしものを (源・横笛-51)<人物様態>
- (39) この折りの清らをつくし給はむとするため (源・若菜上-274)<人物・様態>
- (40) かたちもさかりににほひていみじく清らなるを (源・若菜うえ-211)<人物・髪>
- (41) この折りの清らなり又ははえはえしきついで (源・宿木-106)<事物・儀式>

人の様子、容姿について「きよら」と言う例が多く、次に調度品や住居である。(37)(38)(39)は、自然美を背景にしてそこのたたかれた人間のしつとりとしめやかな様子を描いている。人物を中心とする美では特に、男性では源氏が最も多く、「きよら」は女性より男性の美を称えていると言える。また(41)は儀式として、花やかなに系統の語が用いられていることから、光輝く華麗な美を表現していると思われる。

4.3 「うつくし」について

この稿では、奈良時代と平安時代における「うつくし」の用法や、各々の文献における「うつくし」の意味は如何なる意味領域として用いられているのかを考察し、分類していきたい。

4.3.1 奈良時代の「うつくし」の意味用法

「うつくし」は「いつくし」の転音で、動詞「いつく」から派生した形容詞である。『時代別国語大辞典上代編』(三省堂)で「うつくし」は、夫婦の間や、父母、妻子、恋人に対する肉親的な親愛の感情をあらわしたと記述されている。

奈良時代には親が子供を大事にし、夫婦がお互いに情愛を注ぎ合うという愛情の表現が、平安時代になると、「うつくし」という美を表す言葉として発達したのは、日本語の大きな特徴であるといえる。

『時代別国語大辞典上代編』(三省堂)での「うつくし」の用例を上げると次の通りである。

- (42) 本毎に花は咲けども何とかも愛し妹がまた咲き出来ぬ其二 (孝徳紀 大化五年) < 人物・親子 >
- (43) 宇都久志伎小目の笹葉にあられ降り (播磨風土記 賀毛群) < 事物・小目 >
- (44) 娃美女貝字豆久志乎美奈 (新撰字鏡) < 人物・女性 >
- (45) 于都俱之枳吾が若き子を置きてか行かむ (齊明紀四年) < 人物・子 >

用例(42)は親の子の情、(43)は小目、あるいは笹葉などの景色に、

(44)(45)は女性、若き子、つまり弱小な者に対する表現である。奈良時代において人間以外のものを対象としている「うつくし」は、(46)の一例のみで、『万葉集』およびその他の奈良時代の資料中には見られない。

この歌の他に、『万葉集』には「うつくし」を一字一音の仮名表記で表わしている歌が五首が見られる。「愛」「恵」を用いて「うつくし」と訓む文献のみを考察の対象にし、その五例を揚げ考察した。

- (47) 父母を見れば貴し妻子見ればめぐし愛し (万・五・800) <人物・妻子>
 (48) 橘の古婆の放髪が思ふなむ心うつくしいで我れは行かな (万・十四・3496)
 <人物・童女→私>
 (49) 天地のいづれの神を祈らばか愛し母にまた言とはむ(万・二十・4392) <人物・母>
 (50) 我が背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝む (万・二十・4422) <人物女性→男性>
 (51) 我が背なを筑紫は遣りて愛しみえひは解かなあやに寝む (万・二十・4428) <人物・女性→男性>

(47)は、父母を見ると尊い。妻子をみると、いとしくかわいいという意の妻子に対する強い愛情を素直に表した歌である。(48)は、橘の古婆の里の童女が私を想っている意で、(49)は、その心がかわいい天地のどこの神を祈ったならば、いとしく想う母にまた話しをすることができるのだらうかという意である。また(50)(51)は、私の夫を筑紫へ遣って、いとほしさに帯は解かないで心乱れて寝ることであろうかという意で、女性が男性に歌った歌である。心の奥から湧き起こる、相手を深く想う心の表現された語として、心情を素直に文字に表し、思わず抱きしめたくくなるような慈しき、愛しさまでも言い表された表現だったと思われる。(47)(48)は、いとほしい妻、老いた母、つまり弱小な者へのいたわり感情でもある。また、(47)の山上憶良から防人・防人の妻までと、奈良時代における知識人から、

土着の教養と呼べるもののない人間に至るまで、あらゆる階層の人間に同じ意味の言葉として使われていたと考えられる。

このように「うつくし」という語は上代において、親子・夫婦恋人などの間で、相手をいつくしみ、たいせつに包み込みたい感情を飾らずに素直に表現した言葉であったことがわかる。

4.3.2 平安時代の「うつくし」の意味用法

平安時代における「うつくし」の意味は、子供の態度や様子の可愛さであり、弱小者に感じる可愛さでもある。弱小者に対して、「うつくし」と意識した平安時代の貴族社会の観念が伺える。用法について、『枕草子』の用例数は「うつくし」一四例、「うつくしげ」四例、「うつくしむ」一例である。

- (52) あやしき弓筈だちたるものなどさきぎて遊びたる、いとうつくし (枕・五十六段) <人物・容姿>
- (53) 三つばかりなる稚児の、寝おびれてうち咳きたるもいとうつくし (枕・一一六段) <人物・容姿>
- (54) 何も何も、小さきものは、いとうつくし。(枕・一四六段) <事物・物>
- (55) いみじううつくしき稚児の、苺など食ひたる。(枕・四〇段) <人物・容姿>
- (56) うつくしきもの瓜に描きたるちごの顔。(枕・一四六段) <人物・容姿>
- (57) 淑景舎のいとうつくしげに、絵に描いたるやうにてゐさせたま(枕・一〇〇段) <人物・様子>
- (58) 頭つきの青くうつくしげに、地藏菩薩のやうにて女房にまじり (枕・二六二段) <人物・様態>
- (59) 扇をつとさし隠したまへる、いみじう、げにめでたく、うつくしと見えたまふ。(枕・一〇〇段) <事物・物>
- (60) つやつやと丸にうつくしげに削りたる木の、二尺ばかりあるを (枕・二二九段) <事物・様態>
- (61) 憎げなる乳児を、おのが心ちの愛しきままに、うつくしみ、かな (枕・九二段) <人物・容姿>

(52)~(54)の「うつくし」は、「たいへんかわいらしい」という意で、(55)は、「大層愛らしい幼児」,(56)は、「かわいらしいもの」、(57)の意は「かわいらしげに」、(58)の意は「かわいらしく」、(59)では、「かわいがり」とそれぞれ訳されている。つまり子供の態度や様子の可愛さであり、弱小者に感じる可愛さでもある。どんなものを「うつくし」と感じたかがわかる。「何も何も小さきものはみなうつくし」と言っているごとく、小さいものでなければならなかった。子供でも、二歳ぐらいとこだわったり、その上では八歳から十歳ぐらいまでの男の子、それ以上はもう「うつくし」の範囲には入らない。このことから当時の貴族社会では、弱小者に対する可憐美を「うつくし」と意識した観念があったと思われる。²⁶⁾また、(60)は俣景舎の装いの様子を、「本当に立派で、すばらしいお方だとみられる」と解釈し、(61)は、「つやつやと丸くきれいに削ったものがとても美しい」と表現され、従来の弱小者に対する可憐美の意味が「立派だ」「美しい」という視覚的・感覚的な美的用法として表現している。しかし、人間を対象とする情意表現が根強く残っていると思われる。

このような「うつくし」の語感覚は、『源氏物語』にも受け継がれていくのである。では、『源氏物語』の用例を見ると、

- (62) 男君達十なるは殿下し給ふ、いとうつくし。人にほめられて、かたちなどよりはあらねど、いとらうらうしう、物の心やうやうしり給へり。(源真木柱-131)
<人物・容姿>
- (63) (源氏が箏の琴ヲ)かき合はせばかり弾きて、(紫の君二)さしやり給へれば、元怨じに果てずいとうつくしう弾き給ふ。(源紅葉賀-255)<人物・容姿>
- (64) かくて、大学の君はその日の文うつくしう作り給ひて (源玉髮-333)<事物・様態>
- (65) (紫上ハ)ちごうつくしみし給ふ御心にて、あまがつ(子ドモノ形ヲシタ人形)など御手づから作りそそくりおはするも (源若菜上-275)<人物・様子>

26) 馬淵和夫(1988)『奈良・平安ことば百話』東京美術、pp.12-13

(62)は愛らし、かわゆらしの意味として使われているのであろう。(63)はかわいらしい態度で、(64)は岩波古語辞典に「見事である」の用例に引かれているように、視覚を主体とする「立派な」「きれいな」という意味が出現してきたものと思われる。(65)は生まれたばかりの明石姫君の腹の若君に対して「こどもかわいがり」ということで使っていたのであろう。「特に恥ずかしがりもなさらず、まるで子供が人見知りをしないような感じがして、気の張らないかわいい感じであらっしゃった」という内容として、幼い者に直接向かっていく愛の気持ちを「かわいく」あるいは「かわいらしく」で表現されているのではなく、「うつくむ」「うつくしがる」のような動詞と結びつきが強いものは、「うつくしむ」様子を「稚児のようにもてなす」というような内容の言葉に変化しはじめている。27)以上のことから、上代において、「かわいいと想う」という言葉が「かわいいと見える」と変化してきたと言える。また、同じ「かわいい」ではあるが、その含有する意味領域は微妙な違いが表われる。28)上代の深い想いを込めた意味は、中古では消滅し、愛らしいもの、あどげないものを見て、「かわいい」と表現したにすぎないものになってきたのである。

『源氏物語』の後半になると、可愛さの意味から独立して、客観的な美の状態として、まるまると太って、色が白くてかわいらしいの「美麗なり」の意味として、色の白さとふっくらとした体つきを表している。

- (66) いと白ううつくしう、ほどよりはをよすげても語りなどし給。(源・柏木-151)<人物・様子>
- (67) 児も、いとうつくしうおはする君なれば白くおかしげなるに(源・横笛-184)<人物・様子>
- (68) いと心やすうちみて、つぶつぶ肥えて白く美し (源柏木-29)<人物・容姿>

27) 秋山巖(2001)『王朝語辞典』理想社、p.70

28) 松尾聰(1972)「中古語「うつくし」の語意」『国語展望』31、pp.7-14

- (69) やうやう起きゐて見たまふに、鈍色のこまやかなるが、うち菱えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐたまへるが、いと うつくしきに、我もうち笑まれて見たまふ。(源・若紫-332) <人物・様子>
- (70) 姫君、いと うつくしうひきつくろひておはす、「久しかりつるほどに、いとこよなうこそ大人びたまひにけれ」とて、小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、(源・葵-54) <人物・容姿>
- (71) げに、かかる交じらひには堪へず、あてに うつくしげなり (源・少女-287) <人物・様子>
- (72) 「舞姫の容貌、大殿と大納言とはすぐれたり」とめでののしる。げに、いとをかしげなれど、ここし うつくしげなることは、なほ大殿のには、え及ぶまじかりけり。ものきよげに今めきて、そのものとも見ゆまじう仕立てたる様体などの、ありがたうをかしげなるを、かう誉めらるるなめり(源・少女-311) <人物・様子>

(69)では、紫上を源氏が「うつくし」と捉えている用例として、主体は対象を目前にすることによって、「我もうち笑まれ」ることにある。(68)も同様に、源氏の腕の中で「心やすくうち微笑ん」でいる薫の描写である。ここでの薫は、「つぶつぶ」と肥えてしろいのであり、それは「ふくよか」で、輝きを帯びた様である。(70)も同じく、久しく紫上と対面した源氏は大人びた紫上の様子に、目を見張りほほえましい思いで見守っている「うつくし」の表現である。このように「うつくし」は人目を強く引き付ける「はなやか」な美、あるいは人の心をなごませる「ふくよか」な美、健康美、陽の美として、すべての対象は目の前にあり、しかもその想いは視覚的・感覚的な面における「かわいい」として、位置づけているのである。(71)(72)は、単に「可愛らしい」というだけではなく、とりわけ接尾語「げ」をとり、美意識を伴った表現としての「おっとりとした可憐な様」と解釈される。このことは、情態性の概念の表現となる²⁹⁾ことと深い関わりがあるのである。このように活用による情意表現が『源氏物語』では、根強く残っていた為、心情表現としての「うつくし」の意が現代日本語の「美しい」表現に突

29) 山崎良幸(1978)『源氏物語の語義の研究』風間書房 p.171

然には変化されなかったと思われる。

5. おわりに

以上のことから、「くはし」、「きよし」、「うつくし」について、意味用法を中心とする美の分類を<表2>にまとめると、奈良時代の『万葉集』における「くはし」には<繊細美>・<神聖美>に表され、平安時代に入ると、美としての表現はすでになくなり、「くはし」は、現代日本語における事細かな詳細の意味に移ってしまっている。こうして見ると、「くはし」は、美一般を表すとともに、微細な一部分も表していたのだろう。

次に奈良時代における「きよし」には、自然を神聖なものとして仰ぎ見るのは、神の存在を信じていた古代人の宗教感からではなかろうかと思う。平安時代の『枕草子』では、「きよし」は副詞的語としての性格が強く、美的対象は人物を中心として、衣装や紙などすべて人為的なもののみで、自然や自然現象にするものは一つも含有していない。また、季節に関してもその季節に当たる行事や儀式を背景としているのである。色彩感においても、無色といった素朴で、なよやかな透明感覚の世界を表現している。

『源氏物語』では、「きよし」の対象は空・月・水・草等の自然を美の対象としている。色彩で表すと、無色・白・青、感覚的には、透明感・冷感・清涼感・清澄感・清潔感を与える美なのである。視覚美の情意語から「心きよし」となると、視覚的要素が消え、心理的作用のみに関する内攻性の強い情意語となる。また「きよら」は人物を中心とする語で源氏の崇高美を表現する反面、顔の描写として、痩せ衰えた衰弱美も表れている。事物に関しては服装や儀式の華やかな美も表れる。

<表2> 美の語彙の意味領域の變化

時代	奈良	平安	
文献	万葉集	枕草子	源氏物語
くはし	織細美 神聖美(自然)	-	-
きよし	清浄美(自然)	人工美(事物)	清涼美(事物) 潔白美(人物)
きよげ	-	威厳美(人物) 素朴美(事物)	氣品美(人物)
きよら	-	なよやかな美 (事物)	神聖・崇高美 (男性) 華麗美(事物)
うつくし	愛情美 (心情)	可憐美人物 (視覚・感覚)	可憐美(弱小者)
うつくしげ	-	-	可憐美(情態)

「うつくし」は上代においては、身分を問わず、男女間または肉親の間で、相手を深く、慈しく想った時などにその気持ちを何の装飾も混じり気もなく、まっすぐに表現した時に表現されている。

平安時代に入ると『枕草子』の中の「うつくし」用例では、「かわいい」「愛らしい」として解釈されるものが多く、主に弱小ものに対する可憐美として表現されるが、その含有する意味領域は微妙な違いが表われる。奈良時代の深い想いを込めた意味は、平安時代では消滅し、愛らしいもの、あどけないものを見て、「かわいい」と表現したにすぎないものになってきたのである。後に「すばらしい」「美しい」という視覚を主体とする美的用法が現われるが、「かわいい」という対象に向けられる情意表現が根強く残っていると思われる。

以上、言葉の意味用法における意味領域には、形容動詞や形容詞から派生した複合形容詞や複合名詞、同じ語幹を持っている品詞など、派生語同士の影響関係によって、語彙の意味領域が変わる場合も随分考えられる。従ってさらに考察の美の語彙の範囲を拡大し、他の美の語彙の派生語まで

も取り入れた美の語彙に関する幅広い考察がもとめられる。

<参考文献>

- 秋山獻(2001)『王朝語辞典』理想社
- 浅野敏彦(1973)「綺麗 うつくしきよし 一漢語と和語」『同志社国文学』8、pp.82-94
- 阿部寛子(1991)「衣通郎姫」伝承孝—その(-): さかし女・くはし女の視点から調布日本文化 田園調布学園大学 創刊号, pp.29-48
- 梅野きみ子(1988)「美を表す語彙〈私の美的語彙論〉—「えん」と「なまめかし」をめぐって [日本語学] 7-11 pp.37-44
- 大野晋(1966)『日本語の年輪』新潮社、pp.19-44
- _____(1973)「美意識の発達と日本語」『理想』483、pp.27-40
- _____(1990)『岩波古語辞典』岩波書店
- 岸上慎二編『校訂枕草子』武蔵書院刊
- 北原京子(1976)「枕草子における美的語彙の研究」-「うつくし」「うるはし」を中心に-『米沢国語国文』3、pp.4-11
- 済田千恵子(1971)「美意識を表わす形容詞 上代・中古における「うつくし」「うるはし」「青山語文」2、pp.6-22
- 上代語辞典編修委員会編(1967)『時代別国語大事典上代編』三省堂
- 谷口典子(1977)「きよし」について(2)万葉集から源氏物語への語彙研究の試み「平安文学研究」47
- 日本大辞典刊行会編(2001)『日本国語大辞典第二版』小学館
- 原田芳起(1988)特集・美を表す語彙〈私の美的語彙論〉—私の美的語彙論『日本語学』7-11 pp.45-50
- 松尾聰(1972)「中古語「うつくし」の語意」『国語展望』31、pp.7-14
- _____(1976)「中古語「うつくし」の語意再説—源氏物語の全用例から—『国語展望』43、pp.7-15
- 真下三郎(1988)「美を表す語彙〈私の美的語彙論〉—「しほ」について」『日本語学』7-11 pp.51-56
- 馬淵和夫(1988)『奈良・平安ことば百話』東京美術 pp.12-13
- 水野雅子(1974)『源氏物語』研究「うつくし」の性格『岐阜女子大学紀要』3、pp.157-164
- 柳井繁外(1994)『源氏物語 新日本古典文学大系』1巻-5巻 岩波書店

- 山崎馨(1988) 「美を表す語彙—上代の美的語彙」 『日本語学』7-11、 pp.13-20
- 山崎良幸(1978) 『源氏物語の語義の研究』 風間書房
- _____ (1988) 「美を表す言葉日本語における美を表す言葉」 『日本語学』7-11明治書院、 pp.57-61
- 有精堂編集部(1975) 『枕草子講座』第一卷第二卷第三卷第四卷 有精堂
- 龍富輝子(1975) 平安朝文芸における「きよし」「きよらなり」「きよげなり」 『香推馮』 20 pp.47-63
- 和田明美(1981) 『源氏物語』に於ける「らうたし」—特に「うつくし」との語義上の相異に注目して— 『高知女子大國文』17、 pp.90-99
- Mara, Michele(1999) *Modern Japanese Aesthetics: A Reader*, University of Hawaii Press.

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<Abstract>

A Discussion of Aesthetic Words(Bi No Goi) in Japanese Language

— *Kuhashi, Kiyoshi, Utsukushi* —

Words reflect the state of mind. Among various classes of words, aesthetic words must be representing uniquely well how people think, create and use their language because they are closely linked to traditional, social, and spiritual values of the society. Hence, studying aesthetic words can be important and conducive to truly understanding a specific language, including Japanese. Unfortunately, these aesthetic words have not drawn enough attention of researchers yet in Korea although scholars in Japan and the western hemisphere are paying more and more attention to these words in understanding Japanese language.

To compare key aesthetic words in Japanese this study scrutinizes the three most important Japanese classics: *Manyoushu*, *Makuranosousi*, and *Genjimonogatari*. Three aesthetic words are chosen for consideration: *kuhashi*, *kiyoshi*, and *utsukushi*. The study finds that there was a significant change in the meaning of these words over the period between 8th century in *Nara* period and early 11th century in *Heian* period. This paper also provides varied meanings and classifications of these aesthetic words in different Japanese classics according to different periods.

韓日 기초어휘의 複合度 대조*

裴 株 彩**

cukbic@catholic.ac.kr

朴 志 沆***

siawasemono@hanmail.net

< 目 次

>

- | | |
|--------------------|-----------------|
| I. 머리말 | 1. 분석 방법 |
| 1. 複合度の 의의 | 2. 분석 결과 |
| 2. 기초어휘 목록 선정 | IV. 두 언어의 대조 |
| II. 한국어 기초어휘의 複合度 | 1. 기초어휘 전체의 대조 |
| 1. 분석 방법 | 2. 등급별 기초어휘의 대조 |
| 2. 분석 결과 | 3. 품사별 기초어휘의 대조 |
| III. 일본어 기초어휘의 複合度 | V. 맺음말 |

Key Words : 한국어(Korean), 일본어(Japanese), 언어유형론(linguistic typology),
 複合度(degree of compositeness), 단순어(simples word),
 複합어(complex word)

I. 머리말

1. 複合度の 의의

언어 간의 유사성과 차이를 체계화하려는 言語類型論의 가장 오랜 형태는 形態論的 類型論이다. 19세기 초 슐레겔 형제의 3분법(고립어, 교착어, 굴절

* 본 연구는 2008년도 가톨릭대학교 교비연구비의 지원으로 이루어졌음.

** 가톨릭대학교 국어국문학과 교수, 한국어학

*** 가톨릭대학교 한국어교육센터 강사, 한국어학

어)이 그 예이다(Jespersen 1921/1964 : 34-36). 그 후 포합어가 더해져 4분법이 흔히 받아들여져 왔다. Comrie(1988 : 452-453)는 綜合指數(index of synthesis)와 融合指數(index of fusion)를 종합함으로써 이 네 유형을 규정할 수 있을 것이라고 했다. 종합지수란 한 단어를 구성하는 형태소 수를 가리키고 융합지수란 한 단어 안의 형태소들이 分節해 내기 어렵게 융합되어 있는 정도를 뜻한다. 한편 Haspelmath (2002 : 4-6)는 Greenberg(1959)의 자료를 바탕으로 작성한 綜合度(degree of synthesis) 통계표를 제시하고 있다. 그 표에 제시한 종합도는 그린란드에스키모어(3.72), 산스크리트어(2.59), 스와힐리어(2.55), 고대영어(2.12), 레즈기어(1.93), 독일어(1.92), 현대영어(1.68), 베트남어(1.06)로 나와 있다. 이어서 영어가 베트남어와 같은 고립어보다 形態部가 크지만 다른 많은 언어에 비해서는 훨씬 작다고 해석했다.

형태론적 언어유형의 개념은 각 언어의 굴절형태부가 어떤 모습을 띠는지에 근거하고 있지만 Haspelmath(2002)가 제시한 통계는 屈折形態論과 造語形態論을 구별하지 않고 종합도 수치를 조사한 것이므로 형태론적 언어유형과는 절반의 관련성만 가진다는 한계가 있다. 여기서 오히려 造語論의 관점에서 도 그러한 통계와 언어유형의 관련성을 분석해 볼 가치가 있다는 암시를 얻을 수 있다. 예를 들어 어떤 언어는 단순어보다 파생어와 합성어가 많고 어떤 언어는 그 반대일 수 있다. 따라서 본고에서는 한 언어의 어휘 가운데 복합어가 차지하는 비율을 複合度라는 개념으로 파악하고 언어에 따라 복합도가 달리 나타날 수 있음을 논의하려 한다. 복합도는 다음과 같이 정의한다.

- (1) 複合度(%) : 전체 단어 가운데 복합어가 차지하는 비율.
- (2) 複合語 : 둘 이상의 형태소로 이루어진 語彙素. 한 형태소로 이루어진 어휘소인 單純語와 대립한다. 형태소의 개수를 기준으로 하면 단순어는 單形態素語, 복합어는 多形態素語라 바꿔 부를 수도 있다. 복합어로는 파생어와 합성어가 대표적이고 이 둘에 해당하지 않는 구조의 어휘소가 존재할 수 있다. 예를 들어 부사 ‘실은(實은)’은 명사 ‘실’에 조사 ‘은’이 붙은 구성이 한 단어가 된 것으로서 파생어도 합성어도 아니지만 복합어로 본다.)¹⁾

1) 최형용(2003 : 29-35)도 ‘실은’과 같은 단어를 “통사적 결합어”라고 부르고 파생어, 합성어와 함께 복합어를 이루는 것으로 파악했다.

예를 들어 한국어 어휘 전체가 50만 단어이고 그 중 복합어가 10만 단어라면 한국어의 복합도는 $20(=100 \times 100000 / 500000)$ 이다. 이것은 전체 단어 가운데 20%가 복합어이고 80%가 단순어라는 뜻이다.²⁾

본 연구는 복합도 조사의 초보적인 작업이므로 한국어와 일본어의 基礎語彙만을 대상으로 하여 복합도를 대조하고자 한다. 두 언어는 우선 屈折論의 관점에서 교착어로 분류되며, 系統的으로 서로 가장 가까운 사이이다. 그리고 歷史的으로 中國語와의 관계도 다른 어떤 언어보다도 가까워서 엄청나게 많은 漢字語를 보유하고 있다. 그중 상당수의 한자어는 의미와 조어구조가 같거나 매우 유사하다. 이와 같이 형태론적으로나 어휘론적으로 비슷한 처지에 있는 두 언어의 복합도를 조사함으로써 복합도가 각 언어의 어휘체계를 이해하는 데 어떻게 이바지할 수 있는지를 탐색하려고 하는 것이다.

2. 기초어휘 목록 선정

基礎語彙는 사용빈도가 높고 중요도가 높은 단어로 구성되므로 우선적으로 어휘분석의 대상으로 삼을 가치가 있다. 또 기초어휘 분석의 결과는 韓國語敎育과 日本語敎育에 이바지하는 바가 있을 것이다.

한국어 기초어휘 목록으로 선택한 것은 조남호(2003)으로 발표된 <한국어 학습용 어휘>이다. 이 목록은 현대한국어의 單語 頻度를 조사한 조남호(2002)를 바탕으로 한국어 학습자가 익혀야 할 기초어휘를 선정한 것이다.

2) 본고의 복합도와 유사한 개념을 나타내는 용어로 ‘配意性’이 있다. 이것은 李崇寧(1967 : 266-267)에서 중세한국어의 ‘거짓말(←僞+言), 목숨(頸+息) 등의 예를 통해 “語의 構造가 配意性(motivation)을 가진 要素로 分析할 수 있느냐”의 관점에서 한국어와 독일어가 영어, 프랑스어보다 “配意性的인 構造가 잘”다고 했다. 한국어의 경우 복합어의 의미가 그 복합어를 구성하는 형태소들의 의미에 바탕을 둔 경우가 비교적 많음을 말하고자 한 것으로서, 달리 말하면 한국어가 복합도가 높은 언어라는 뜻이다. 李崇寧(1967)이 “配意性”이라고 표현한 것은 요즘 번역어인 ‘有緣性(motivation)’에 해당하는 것이지만 그 자체가 복합도와 일치하는 것은 아니다. 그리고 위와 같은 현상을 ‘배의성’ 또는 ‘유연성’이라는 용어로 표현하게 되면 복합어의 조어구조를 의미의 관점에서 파악하는 결과가 된다. 이러한 관점에서 배의성의 개념을 의미론적으로 고찰한 것이 이찬규(2008)이다. 이와 달리 본고의 ‘복합도’는 순수히 조어론적인 관점에서 어휘의 특징을 파악하는 용어이다.

등급	A등급	B등급	C등급	계
단어 수	982	2111	2872	5965

A, B, C등급은 한국어교육과정에서 말하는 初級, 中級, 高級에 각각 해당한다. 이 중 ‘그제서야’는 ‘그제야’의 非標準語이므로³⁾ 기초어휘 목록에 넣을 수 없다. 따라서 <한국어 학습용 어휘>의 5965단어 중 ‘그제서야’를 뺀 5964단어가 분석의 대상이 된다.

일본어 기초어휘 목록으로 선택한 것은 國際交流基金(1994)로 발표된 <일본어능력시험 출제기준>에 제시된 등급별 단어목록이다. 이 목록은 日本語教育에서 어휘 학습 지도에 구체적인 기준을 제시하고 아울러 日本語能力試驗 출제자가 시험 작성에 참고할 수 있도록 함을 목적으로 하고 있다.

등급	4급	3급	2급	1급	계
단어 수	728	681	3626	2974	8009

4급~1급은 일본어교육과정에서 말하는 初級(3, 4급), 中級(2급), 高級(1급)에 해당한다. 3, 4급에는 인사말 등의 표현이 목록과 별도로 제시되어 있는 반면 1, 2급에는 목록 안에 포함되어 있다. 사전에 등재되어 있지 않은 24개의 인사말 등의 표현은 분석의 대상에서 제외했다. 따라서 <일본어능력시험 출제기준>의 8009단어 중 인사말 등의 표현을 뺀 총 7985개의 단어가 분석의 대상이 된다.⁴⁾

3) ‘그제서야’는 『표준국어대사전』(1999/2008, 이하 『표준』으로 약칭)에도 실려 있지 않다. ‘그제야, 이제야’의 남부방언형 ‘그제사, 이제사’가 표준어형 ‘그제야, 이제야’와 섞여 ‘그제사야>그제서야’와 ‘이제사야>이제서야’의 변화를 통해 混成語가 형성된 것이다.

4) 따라서 분석하게 될 한국어와 일본어의 단어 수가 다르지만 직접 대조할 수치는 단어 수가 아니라 백분율의 형태로 표시되는 복합도이므로 형평성에 문제가 없다.

II. 한국어 기초어휘의 복잡도

1. 분석 방법

1) 형태소분석의 어려움

각 단어를 단순어와 복합어로 분류하려면 우선 형태소분석이 이루어져야 한다. 그런데 아직 한국어 어휘 가운데는 형태소분석을 어떻게 해야 할지 불분명한 단어들이 남아 있다. 예를 들어 이익섭·채완(1999:92)는 접미사 ‘-에/에’가 붙어 만들어진 파생명사로 ‘우레, 열개, 썩레’를 제시했는데 이들을 과연 파생어로 보아야 할지 의문이다.⁵⁾ 이 중 ‘우레’에 대해 『표준』은 “우레 【<울에<석상>←우르+에】와 같은 어원정보를 보여 주고 있으므로 현대한국어에서는 파생어로 처리하지 않는다는 뜻이 된다.⁶⁾ ‘우레’는 상당수의 화자들이 ‘雨雷(우뢰)’의 잘못된 형태로 생각하고 있으며, ‘우레’라는 표준어형을 제대로 알고 있는 화자들도 동사어간 ‘울-’(‘슬피 울다’의 ‘울다’)에 접미사 ‘-에’가 붙은 것으로 오해하기 십상이다. 『표준』이 제시한 ‘우르-’(‘소리를 치다’의 옛말) 더하기 ‘-에’에서 온 말임을 아는 사람은 거의 없을 것이다. 오히려 ‘우레’의 단어구조에 대해 별 생각이 없는 사람이 대부분일 것이다.

이와 같이 어원적으로는 파생어였을 것이나 현대한국어에서는 두 형태소의 결합으로 분석하기 힘든 단어들을⁷⁾ 辭典에서와 달리 파생어로 처리하는 태도를 文法書에서 볼 수 있다는 것은 형태소분석에 대해 합의되지 않은 사례가 있음을 뜻한다.

2) 형태소분석의 기준

우리는 『표준』의 형태소분석을 참고하되 다음과 같은 基準에 따라 형태소

5) ‘우레, 썩레’는 고영근·구본관(2008 : 218)에도 파생어로 제시되어 있다.

6) 표제어 ‘우레, 열개, 썩레’의 표기에 붙임표(-)를 넣지 않았기 때문에 이들을 파생어로 보지 않은 것으로 해석할 수도 있으나, 『표준』은 ‘업-에’와 같이 音節字의 경계와 어긋나는 형태소경계는 표시하지 않았다. 따라서 표제어의 표기에 붙임표가 들어 있지 않다고 해서 『표준』이 이들을 파생어가 아니라고 보았다는 해석을 내릴 수는 없다.

7) 널리 알려진 바와 같이 이러한 단어의 형성과정을 語彙化 또는 單一語化라 부른다. 이익섭·채완(1999 : 99-100), 고영근·구본관(2008 : 207-208)도 이 개념을 소개하고 있으나 ‘우레, 열개, 썩레’에는 적용하지 않고 있다.

분석을 수행하고자 한다.8)

- (1) 『표준』의 형태소분석이 문제가 없는 경우 그대로 따른다.
- (2) ‘괴롭다, 외롭다’ 등의 접미사 ‘-롭-’을 분석한다. ‘아름-답다’의 ‘아름-처럼’ <고(苦)>괴’와 ‘외-’를 語根으로 인정하는 것이다.
- (3) 2음절 한자어
 - ㄱ. 적어도 한쪽이 자립어이면 분석한다. ‘냉-면, 매-년, 병-원, 수-학’ 등은 ‘면, 매, 병, 학’이 각각 자립어이므로 분석한다. 반면에 ‘맥주, 학원, 과학, 철학’ 등은 자립어를 포함하지 않고 있으므로 분석하지 않는다.9)
 - ㄴ. 문법적으로 韓國語構成으로 분석이 가능한 ‘장-점, 약-점, 초-점, 관-점, 시-점, 학-점’ 등은 분석하고 漢文構成이 분명한 ‘채점’(서술어+목적어)은 분석하지 않는다.
 - ㄷ. ‘미국, 중국, 일본’의 略稱인 ‘미, 중, 일’은 어느 정도 자립성이 있기는 하지만 ‘미-국, 중-국, 일-본’과 같이 분석하지 않는다.
 - ㄹ. 같은 한자형태소에서 왔더라도 자립어와 의미차이가 크면 자립어로 인정하지 않는다. ‘만일’의 ‘만’과 ‘일’, ‘점심’의 ‘점’ 등은 자립어 ‘만(萬), 일(一), 점(點)’과 同一視하지 않는다.
- (4) 2음절 한자성분은 어근 역할을 하면 의존적이다더라도 분석한다. ‘우체-국’의 ‘우체’가 그 예이다.
- (5) 혼종어는 분석한다. ㉠간-장(간醬), 달-력(달曆), 보-자기(襪자기)10)

8) 『표준』은 표제어에 붙임표를 넣는 방식으로 형태소분석을 제시하고 있는데(이슬-비, 맨-손, 날-개, 웃-음), 다음과 같은 경우에는 형태소분석 정보를 전혀 제시하지 않고 있어서(배주채 2006) 참고가 되지 않는다.

- (1) 형태소경계가 音節의 경계와 일치하지 않는 경우 : 놀리다1(‘누르다(壓)’의 괴동사), 띄우다2(‘뜨다(浮)’의 사동사)
 - (2) 直接成分(immediate constituent)이 셋 이상인 경우 : 상중하(上中下), 동서-남북(東西南北), 피피엠(PPM)
 - (3) 2음절 한자어 : 금방(金房), 방문(房門), 숫자(數字), 첩약(貼藥)
 - (4) 어근과 문법형태 : 믿음직, 누르스름, 떨떠름
 - (5) 선어말어미에 어말어미가 결합한 複合語尾 : -더니, -더구나
 - (6) 어말어미에 조사가 결합한 複合語尾 : -어요, -지요, -지마는
- 9) ‘맥주, 학원, 과학’ 등의 2음절 한자어들도 합성어로 처리하는 것이 일반적이다(이익섭·채완 1999 : 86-87, 고영근·구분관 2008 : 250-252). 그러나 이들은 ‘손발, 벽돌, 등불, 불일, 달걀’ 등에 비해 生産性이 낮으므로 반쯤 單純語化되었다고 보고 복합도를 산출할 때 제외하는 것이 바람직하다고 판단한다.

- (6) 외래어도 자립어나 어근을 포함하고 있으면 분석한다. (예)블-렌, 월드-컵, 티-셔츠, 핸드-폰, 홈-페이지¹¹⁾)

2. 분석 결과

1) 기초어휘 전체

<한국어 학습용 어휘>의 5964단어를 분석한 결과는 다음과 같다.

기초어휘 전체

1형태소어	3425개 57.43%	3425개 57.43%	5828개 97.72%	5945개 99.68%	5963개 99.08%	5964개 100%
2형태소어	2403개 40.29%	2539개 42.57%				
3형태소어	117개 1.96%		136개 2.28%	19개 0.32%		
4형태소어	18개 0.30%				1개 0.02%	
5형태소어	1개 0.02%					

이 통계에 따르면 5964단어 중 多形態素語는 2539개로서 42.57%를 차지한다. 즉 複合度는 42.57이다.¹²⁾

2) 등급별 기초어휘

등급별로 같은 통계를 작성해 보면 다음과 같다.

- 10) 『표준』은 ‘간장, 달력, 보자기’를 분석하지 않았다. ‘보자기’의 원어를 ‘襟-’로 제시한 점에서 ‘보-파리(襟-), 보-통이(襟-)’와 구조가 같다고 할 수 있는데 ‘보자기’만은 형태소분석을 보이지 않았다. 이를 따르지 않는다.
- 11) ‘렌, 컵, 셔츠, 페이지’ 등은 自立語가 분명하므로 분석에 문제가 없다. ‘폰’은 외래어가 아니라 외국어라는 견해가 있을 수 있으나 요즘 ‘휴대폰, 공짜폰, 중고폰, 카메라폰, 터치폰, 폰뱅킹, 폰탕’과 같은 외래어 형성에 적극적으로 참여하여 외래형태소로서의 생산성을 인정할 수 있으며 어근의 지위는 이미 얻은 것으로 보인다.
- 12) 이 5964단어에 대해 『표준』이 형태소분석을 보인 단어는 2272개이다(38.10%). 위에서 본 바와 같이 『표준』은 다형태소어 중 일부에 대해 형태소분석을 보이지 않고 있으므로 38.10이 『표준』에 따른 복합도라고는 말할 수 없다.

A등급

1형태소어	685개 69.76%	685개 69.76%	975개 99.29%	981개 99.90%	982개 100%	982개 100%
2형태소어	290개 29.53%	297개 30.24%				
3형태소어	6개 0.61%		7개 0.71%	1개 0.10%		
4형태소어	1개 0.10%				0개 0%	
5형태소어	0개 0%					

B등급

1형태소어	1197개 56.70%	1197개 56.70%	2077개 98.39%	2106개 99.76%	2111개 100%	2111개 100%
2형태소어	880개 41.69%	914개 43.30%				
3형태소어	29개 1.37%		34개 1.61%	5개 0.24%		
4형태소어	5개 0.24%				0개 0%	
5형태소어	0개 0%					

C등급

1형태소어	1543개 53.74%	1543개 53.74%	2776개 96.69%	2858개 99.55%	2870개 99.97%	2871개 100%
2형태소어	1233개 42.95%	1328개 46.26%				
3형태소어	82개 2.86%		95개 3.31%	13개 0.45%		
4형태소어	12개 0.42%				1개 0.03%	
5형태소어	1개 0.03%					

이상을 종합하면 A, B, C등급 기초어휘의 복합도는 각각 30.24, 43.30, 46.26이다. 초급 어휘의 복합도에 비해 중급 어휘와 고급 어휘의 복합도가 두드러지게 높은 것이 특징적이다.

3) 품사별 기초어휘

주요 품사별로 같은 통계를 작성해 보면 다음과 같다.

명사

1형태소어	2381개 69.95%	2381개 69.95%	3369개 98.97%	3399개 99.85%	3404개 100%	3404개 100%
2형태소어	988개 29.02%	1023개 30.05%				
3형태소어	30개 0.88%		35개 1.03%	5개 0.15%		
4형태소어	5개 0.15%					
5형태소어	0개 0%				0개 0%	

동사

1형태소어	392개 29.37%	392개 29.37%	1291개 96.21%	1341개 99.93%	1345개 100%	1345개 100%
2형태소어	899개 66.84%	953개 70.63%				
3형태소어	50개 3.72%		54개 3.79%	4개 0.07%		
4형태소어	4개 0.07%					
5형태소어	0개 0%				0개 0%	

형용사

1형태소어	117개 31.12%	117개 31.12%	359개 95.48%	374개 99.47%	376개 100%	376개 100%
2형태소어	242개 64.36%	259개 68.88%				

3형태소어	15개 3.99%		17개 4.52%	2개 0.53%	0개 0%	
4형태소어	2개 0.53%					
5형태소어	0개 0%					

부사

1형태소어	204개 52.04%	204개 52.04%	367개 93.62%	386개 98.47%	391개 99.75%	392개 100%
2형태소어	163개 41.58%	188개 47.96%				
3형태소어	19개 4.85%		25개 6.38%	6개 1.53%		
4형태소어	5개 1.28%				1개 0.25%	
5형태소어	1개 0.25%					

명사의 복합도는 30.05이다. 동사와 형용사의 복합도는 각각 70.63, 68.88이다. 동사와 형용사의 복합도가 매우 높은 것이 특징적이다. 명사나 어근에 ‘하다’가 붙은 합성동사, 합성형용사가 많은 점이 중요한 원인이라고 할 수 있다. 부사의 복합도는 47.96이다.

Ⅲ. 일본어 기초어휘의 복합도

1. 분석 방법

1) 품사 구분

일본어 기초어휘 목록에 실려 있는 단어들은 품사의 면에서 名詞, 動詞, 形容詞, 形容動詞, 副詞, 接辭, 接續詞, 感動詞, 助詞, 連體詞, 補助動詞, 補助形容詞, 連語로 구분된다. 접사에는 단위명사인 助數詞도 포함된다. 같은 한자어가 둘 이상의 품사로 쓰이는 경우가 있는데 그 쓰임과 중요도가 큰 쪽의 품사

를 기준으로 삼는다.

2) 형태소분석의 공시성

역사적으로 복합어였던 단어가 현대에 와서 형태소분석이 불가능한 것으로 인식되게 된 것은 단순어로 다룬다. 齋賀秀夫(2005:24-25)에서는 현대 일본어 화자의 언어의식에서 더 이상 분석할 수 없는 단어로 ‘まぶた(mabuta, 瞼), まど(mado, 窓), おしろい(osiroi, 白粉)’ 등을 들어 설명하고 있다.

일본어 단어의 형태소분석에서 크게 문제가 되는 것은 2음절 音讀 漢字語이다. ‘勉強(benkyou, 공부), 生活(seikatu, 생활)’과 같은 단어에서 ‘勉, 強, 生, 活’과 같은 한자형태소들이 한자어를 형성하는 방식은 한국어의 경우와 똑같다. 이들의 형태론적 구조는 현대일본어의 공시형태론으로는 설명할 수 없고 漢文文法에 의거해야 한다. 그래서 文法書에서는 이들을 단순어로 처리한다..

3) 형태소분석의 기준

森岡健二(1997)이 정립한 형태소 분류와 『国語例解辞典』(1985)의 개별 단어 분석을 참고하되 다음과 같은 형태소분석의 기준을 세웠다.

(1) 2음절 음독 한자어

- ㄱ. 단일한 의미를 나타내는 단어는 단순어로 처리한다. ㉠ 勉強(benkyou, 공부), 生活(seikatu, 생활), 種類(syurui, 종류).
- ㄴ. 1음절어에 접사가 연결된 단어는 분석한다. ㉡ 先-週(sen-syu, 지난 주), 役-者(yaku-sya, 배우). 1음절어가 들어 있더라도 나머지 한쪽이 자립어나 접사가 아니면 분석하지 않는다. ‘絵画(kaiga, 회화), 人氣(ninki, 인기)’에는 1음절어 ‘絵, 氣’이 들어 있지만 분석하지 않는다.

(2) 고유어

단어와 단어가 결합한 합성명사, 합성동사(手-紙(tc-gami, 편지), 目-覚める(me-zameru, 잠이 깨다)), 단어에 접사가 결합된 파생어(勤-め-先(tutome-saki, 근무처)) 등은 복합어가 분명하므로 분석한다.

(3) 외래어

한국어에서와 마찬가지로 단어나 어근을 포함하고 있으면 분석한다. ㉢ ‘ボール-ペン(ball-pen), ロープ-ウェー(rope-way). 그러나 ‘ロマンチック(romantic)’는 영

어에서 ‘roman+tic’으로 분석되는 파생어지만 현대 일본어 화자는 이를 단순어로 인식하므로 분석하지 않는다.

(4) 혼종어¹³⁾

‘座敷(za-siki, 다다미방), 役割(yaku-wari, 역할)’와 같은 ‘한자어+고유어’, ‘場所(ba-syou, 장소), 身分(mi-bun, 신분)’와 같은 ‘고유어+한자어’의 구조가 가장 많다. 그 밖에 로마-字(rouma-zi, 로마자)와 같이 ‘외래어+한자어’도 있다. 또 ‘愛-する(ai-suru, 사랑하다)’ 등과 같이 1음절 한자어나 2음절 한자어에 ‘する(suru, 하다)’가 붙은 단어들도 분석한다.

2. 분석 결과

1) 기초어휘 전체

<일본어능력시험 출제기준>의 7985어를 분석한 결과는 다음과 같다.

기초어휘 전체

1형태소어	6253개 78.31%	6253개 78.31%	7860개 98.44%	7976개 99.92%	7985개 100%
2형태소어	1607개 20.13%	1732개 21.69%			
3형태소어	118개 1.48%		125개 1.56%		
4형태소어	7개 0.08%		7개 0.08%		

기초어휘 전체 7985단어 중 多形態素語는 1732개로서 21.69%를 차지한다. 즉 複合度は 21.69이다.

2) 등급별 기초어휘

등급별로 같은 통계를 작성해 보면 다음과 같다.

13) 齋賀秀夫(2005 : 37)에서 제시한 혼종어의 예로는 ‘胃-袋(i-bukuro, 위), 市-バス(si-basu, 시영버스), スリル-感(suriru-kan, 스릴), ゴム-消し(gomu-kesi, 고무지우개)’ 등이 있다.

1급

1형태소어	2296개 77.46%	2296개 77.46%	2939개 99.15%	2962개 99.93%	2964개 100%
2형태소어	643개 21.69%	668개 22.54%			
3형태소어	23개 0.78%		25개 0.84%		
4형태소어	2개 0.07%			2개 0.07%	

2급

1형태소어	2880개 79.34%	2880개 79.34%	3574개 98.46%	3625개 99.86%	3630개 100%
2형태소어	694개 19.12%	750개 20.66%			
3형태소어	51개 1.4%		56개 1.54%		
4형태소어	5개 0.14%			5개 0.14%	

3급

1형태소어	548개 80.35%	548개 80.35%	664개 97.36%	682개 100%	682개 100%
2형태소어	116개 17.01%	134개 19.65%			
3형태소어	18개 2.64%		18개 2.64%		
4형태소어	0개 0%			0개 %	

4급

1형태소어	529개 74.61%	529개 74.61%	683개 96.33%	709개 100%	709개 100%
2형태소어	154개	180개			

	21.72%	25.39%			
3형태소어	26개 3.67%		27개 3.67%	0개 0%	
4형태소어	0개 0%				

이상을 종합하면 1, 2, 3, 4급 기초어휘의 복합도는 각각 22.54, 20.66, 19.65, 25.39이다. 등급별 복합도가 별 차이를 보이지 않는 점이 특징이다.

3) 품사별 기초어휘

주요 품사별로 같은 통계를 작성해 보면 다음과 같다.

명사

1형태소어	4529개 82.20%	4529개 82.20%	5450개 98.92%	5507개 99.95%	5510개 100%
2형태소어	921개 16.72%	981개 17.80%			
3형태소어	57개 1.03%		60개 1.08%		
4형태소어	3개 0.05%		3개 0.05%		

동사

1형태소어	984개 75.17%	984개 75.17%	1302개 99.47%	1309 100%	1309개 100%
2형태소어	318개 24.29%	325개 24.83%			
3형태소어	7개 0.53%		7개 0.53%		
4형태소어	0개 0%		0개 0%		

형용사

1형태소어	162개 70.13%	162개 70.13%	222개 96.10%	231개 100%	231개 100%
2형태소어	60개 25.97%	69개 29.87%			
3형태소어	9개 3.90%		9개 3.90%		
4형태소어	0개 0%		0개 0%		

형용동사

1형태소어	122개 83.00%	122개 83.00%	147개 100%	147개 100%	147개 100%
2형태소어	25개 17.00%	25개 17.00%			
3형태소어	0개 0%		0개 0%		
4형태소어	0개 0%		0개 0%		

부사

1형태소어	132개 33.5%	132개 33.5%	364개 92.39%	392개 99.49%	394개 100%
2형태소어	232개 58.89%	262개 66.50%			
3형태소어	28개 7.1%		30개 7.61%		
4형태소어	2개 0.51%		2개 0.51%		

명사와 동사의 복합도는 각각 17.8, 24.83이다. 형용사와 형용동사의 복합도는 각각 29.87, 17이다. 형용동사는 의미나 기능의 면에서 한국어의 형용사와 비슷하다. 형용동사가 없는 한국어와의 대조를 쉽게 하기 위해 형용동사와

형용사를 합치면 그 복잡도는 24.87이다. 부사의 복잡도는 66.5이다. 다른 품사에 비해 부사의 복잡도가 유난히 높은 것이 특징적이다.

IV. 두 언어의 대조

1. 기초어휘 전체의 대조

기초어휘 전체

	한국어			일본어		
	개수	비율	비율	개수	비율	비율
1형태소어	3425개	57.43%	57.43%	6253개	78.31%	78.31%
2형태소어	2403개	40.29%	42.57%	1607개	20.13%	21.69%
3형태소어	117개	1.96%		118개	1.48%	
4형태소어	18개	0.30%		7개	0.08%	
5형태소어	1개	0.02%		0개	0%	
계	5964개	100%	100%	7985개	100%	100%

표에서 보듯이 韓國語의 복잡도는 42.57이고 日本語는 21.69이다. 한국어는 10단어 중 복합어가 4단어 이상인데 일본어는 2단어 정도로서 상당히 큰 차이를 보인다. 다형태소어의 대부분이 두 언어 모두 2형태소어인데 2형태소어만 놓고 보았을 때도 복잡도가 한국어 40.29, 일본어 20.13으로서 역시 한국어가 일본어의 두 배 정도가 된다. 한국어의 복잡도가 월등히 높다는 것은 그만큼 단어를 만들 때 같은 형태소를 再使用하는 비율이 높음을 뜻한다. 비교적 적은 수의 형태소를 이용하여 더 많은 단어를 이해하고 표현할 수 있다는 점에서 造語의 경제성이 높다고 할 수 있을 것이다.¹⁴⁾

14) 한영균(2006)은 같은 “어기”를 바탕으로 형성된 單語族(word family)을 이용하면 기초어휘를 적은 수의 단어로 구성해도 많은 단어를 학습하게 되는 효과가 있다고 보았는데, 그러한 효과는 일본어보다 복잡도가 큰 한국어에서 더 크게 나타날 것으로 예상할 수 있다.

2. 등급별 기초어휘의 대조

<한국어 학습용 어휘>의 A, B, C등급을 각각 초급, 중급, 고급으로, <일본어 능력시험 출제기준>의 3, 4급을 초급으로, 2급을 중급으로, 1급을 고급으로 보고 등급별로 두 언어의 복합도를 대조하면 다음과 같다.

초급 어휘

	한국어			일본어		
	개수	비율	대조율	개수	비율	대조율
1형태소어	685개	69.76%	69.76%	1077개	77.43%	77.43%
2형태소어	290개	29.53%	30.24%	270개	19.41%	22.57%
3형태소어	6개	0.61%		44개	3.16%	
4형태소어	1개	0.10%		0개	0%	
5형태소어	0개	0%		0개	0%	
계	982개	100%	100%	1391개	100%	100%

중급 어휘

	한국어			일본어		
	개수	비율	대조율	개수	비율	대조율
1형태소어	1197개	56.70%	56.70%	2880개	79.34%	79.34%
2형태소어	880개	41.69%	43.30%	694개	19.12%	20.66%
3형태소어	29개	1.37%		51개	1.40%	
4형태소어	5개	0.24%		5개	0.14%	
5형태소어	0개	0%		0개	0%	
계	2111개	100%	100%	3630개	100%	100%

고급 어휘

	한국어			일본어		
	개수	비율	대조율	개수	비율	대조율
1형태소어	1543개	53.74%	53.74%	2296개	77.46%	77.46%
2형태소어	1233개	42.95%	46.26%	643개	21.69%	22.54%
3형태소어	82개	2.86%		23개	0.78%	
4형태소어	12개	0.42%		2개	0.07%	
5형태소어	1개	0.03%		0개	0%	
계	2871개	100%	100%	2964개	100%	100%

日本語 초급, 중급, 고급 어휘의 복합도는 각각 22.57, 20.66, 22.54로 등급별로 별 차이가 없다. 韓國語는 각각 30.24, 43.30, 46.26으로서 고급으로 갈수록 복합도가 높아진다. 초급에 비해 중급, 고급 어휘의 복합도가 현저히 높다. 기초어휘 안에서 수준이 높아질수록 복합도가 높아진다는 것은 형태소를 재사용해 단어를 만드는 비율이 높아짐을 뜻하므로 단어를 분석적으로 이해하고 학습하는 데 유리하게 작용할 수 있다.

3. 품사별 기초어휘의 대조

주요 품사의 복합도를 대조하면 다음과 같다.

명사

	한국어			일본어		
	개수	복합도	비율	개수	복합도	비율
1형태소어	2381개	69.95%	69.95%	4529개	82.20%	82.20%
2형태소어	988개	29.02%	30.05%	921개	16.72%	17.80%
3형태소어	30개	0.88%		57개	1.03%	
4형태소어	5개	0.15%		3개	0.05%	
5형태소어	0개	0%		0개	0%	
계	3404개	100%	100%	5510개	100%	100%

한국어 명사의 복합도는 30.05이고 일본어는 17.80이다. 기초어휘 전체의 경우와 비슷하게 한국어가 일본어보다 복합도가 두 배쯤 높다.

동사

	한국어			일본어		
	개수	복합도	비율	개수	복합도	비율
1형태소어	392개	29.37%	29.37%	984개	75.17%	75.17%
2형태소어	899개	66.84%	70.63%	318개	24.29%	24.83%
3형태소어	50개	3.72%		7개	0.53%	
4형태소어	4개	0.07%		0개	0%	
5형태소어	0개	0%		0개	0%	
계	1345개	100%	100%	1309개	100%	100%

형용사 및 형용동사

	한국어			일본어		
	개수	비율	비율	개수	비율	비율
1형태소어	117개	31.12%	31.12%	284개	75.13%	75.13%
2형태소어	242개	64.36%	68.88%	85개	22.49%	24.87%
3형태소어	15개	3.99%		9개	2.38%	
4형태소어	2개	0.53%		0개	0%	
5형태소어	0개	0%		0개	0%	
계	376개	100%	100%	378개	100%	100%

일본어의 形容動詞는 한국어의 形容詞와 비슷한 기능을 하므로 일본어의 형용사와 형용동사를 묶어 한국어의 형용사와 대조한다. 동사나 형용사 및 형용동사에서 모두 한국어의 복잡도가 일본어의 2.8배 정도 높다. 한국어 동사와 형용사 가운데 명사나 어근에 ‘하다’를 붙인 합성어의 비율이 매우 높은데 한 원인이 있을 것이다. 일본어에도 한국어의 ‘하다’에 대응하는 ‘する(suru)’가 있지만 ‘하다’만큼 조어 작용이 활발하지는 않다고 할 수 있다.

부사

	한국어			일본어		
	개수	비율	비율	개수	비율	비율
1형태소어	204개	52.04%	52.04%	132개	33.50%	33.50%
2형태소어	163개	41.58%	47.96%	232개	58.89%	66.50%
3형태소어	19개	4.85%		28개	7.10%	
4형태소어	5개	1.28%		2개	0.51%	
5형태소어	1개	0.25%		0개	0%	
계	개	100%	100%	394개	100%	100%

副詞에서는 한국어와 일본어의 복잡도가 逆轉된다. 한국어 부사의 복잡도가 47.96이면 그 자체로도 매우 높은 편이지만 일본어 부사의 복잡도는 66.50으로서 그보다 훨씬 높다. 森岡健二(1997 : 66, 78)도 언급했듯이 일본어 부사에는 체언에 조사 ‘に(ni, 에)’가 붙은 단어, 의성어와 의태어 등의 상징어근과 한자어어근에 조사 ‘と(to, 와/과)’가 붙은 단어가 아주 많다. ‘さらに(sara-ni,

한층), ‘順々に(zyunzyun-ni, 차례차례)’의 ‘-に(ni)’, ‘ほつと(hot-to, 한숨짓는 모양)’, ‘煌々と(koukou-to, 휘황찬란하게)’의 ‘-と(to)’는 어근에 붙어 부사를 형성한다. 또한 ‘言わば(iwa-ba, 이른바), 思わず(omowa-zu, 무의식중에), 却つて(kae-te, 오히려)’와 같은 용언의 활용형도 부사로 활발히 쓰인다. 조어론적인 면에서 일본어 부사가 매우 특징적이라 할 수 있다.

V. 맺음말

한 단어를 구성하는 형태소의 수가 몇 개인가 하는 문제는 이른바 형태론적 유형론에서 관심을 가져 왔으나 屈折論의 관점과 造語論의 관점이 분리되지 않은 채 피상적인 관찰에 머물러 있었다. 造語論의 관점에서는 單純語와 複合語의 比率이 각각 어떠한가를 유형론적으로 연구할 가치가 있다. 그 비율을 複合度라는 개념을 통해 파악하는 것이 가장 초보적인 단계이다.

본고에서는 언어유형론적으로나 계통적으로나 서로 가장 가까운 관계에 있는 한국어와 일본어를 대상으로 복합도를 고찰했다. 어휘 전체의 복합도를 조사하는 것은 현실적으로 쉽지 않은 문제이므로 두 언어의 基礎語彙를 標本으로 삼아 조사했다. 한국어는 <한국어 학습용 어휘>의 5964단어를, 일본어는 <일본어능력시험 출제기준>의 7985단어를 대상으로 했다. 두 언어 모두 단어를 형태소로 분석하는 데 다양한 견해가 있는 형편이므로 辭典과 造語論의 연구를 참고해 분석의 기준을 마련하고 분석을 수행했다.

분석의 결과 기초어휘 전체의 복합도는 한국어가 42.57, 일본어가 21.69로서 한국어가 일본어의 2배 정도로 높은 것으로 나타났다. 初級の 경우 한국어가 30.24, 일본어가 22.57로서 한국어가 일본어의 1.3배 정도인데, 中級과 高級의 경우 한국어가 각각 43.30, 46.26, 일본어가 각각 20.66, 22.54로서 한국어가 일본어의 2배를 넘었다. 중급 및 고급으로 갈수록 한국어의 복합도가 높아지는 현상은 한국어에서 형태소와 형태소를 결합해 단어를 만드는 일이 많아져서 학습자가 단어를 분석적으로 이해하고 학습하는 데 유리한 면이 있다고 해석할 수 있다.

체언인 名詞의 복합도는 한국어가 30.05, 일본어가 17.80으로서 한국어가 일본어의 2배까지는 안 되지만 여전히 높다. 용언인 動詞의 복합도는 한국어가 70.63, 일본어가 24.82로서 한국어가 일본어의 2.8배 정도로 높으며, 形容詞 및 形容動詞의 복합도는 한국어가 68.88, 일본어가 24.87로서 역시 한국어가 일본어의 2.8배 정도로 높다. 용언에서 한국어의 복합도가 월등히 높은 것은 ‘하다’가 결합한 복합어가 많은 데 기인한다고 해석된다. 반면에 副詞의 복합도는 한국어(47.96)보다 일본어(66.50)가 높다.

전체적으로 韓國語 기초어휘의 복합도가 日本語 기초어휘의 복합도보다 2배 정도가 높다. 두 언어에서 기초어휘의 복합도의 이러한 차이가 궁극적으로 무엇을 의미하는지, 또 기초어휘 이외의 어휘로 조사를 확대하면 결과가 어떻게 달라질지, 英語나 中國語 같은 다른 언어들과 대조하면 어떤 결과가 나올지, 그리고 앞에서 단순하게 예상한 바와 같이 복합도가 높은 언어의 語彙學習이 더 유리한 면이 있는 것인지 등 複合度와 관련된 더 깊이 있는 연구들이 우리를 기다리고 있다.

<參考文獻>

- 고영근·구본관(2008) 『우리말 문법론』 집문당
- 배주채(2006) 「사전 표제어의 성분구조 표시에 대하여」 『이병근선생정년퇴임기념 국어학논총』 태학사 pp.737-755
- 李崇寧(1967) 「韓國語發達史 下：語彙史」 『韓國文化史大系 V(言語·文學史) 上』 고려대 민족문화연구소 pp.263-321
- 이익섭·채완(1999) 『국어문법론강의』 학연사
- 이찬규(2008) 「의미 형성의 기반이 되는 유연성 원리로서의 배의성」 『한국어학』 38 한국어학회 pp.269-306
- 조남호(2002) 『현대 국어 사용 빈도 조사』 국립국어연구원
- _____ (2003) 『한국어 학습용 어휘 선정 결과 보고서』 국립국어연구원
- 최형용(2003) 『국어 단어의 형태와 통사 : 통사적 결합어를 중심으로』 태학사
- 한영균(2006) 「한국어 어휘 교육·학습 자료 개발을 위한 계량적 분석의 한 방향」 『어문학』 94 어문학회 pp.119-146
- 國際交流基金(1994) 『日本語能力試驗 出題基準』

小学館(1985) 『国語例解辞典』

山本清隆(2005) 「単純語・複合語・派生語」 <日本語学> 特集 ㉓語彙(Ⅰ) 明治書院 pp.222-229

野村雅昭(2005) 「語種と造語力」 <日本語学> 特集 ㉓語彙(Ⅰ) 明治書院 pp.42-56

_____(2005) 「二字漢語の構造」 <日本語学> 特集 ㉓語彙(Ⅰ) 明治書院 pp.316-327

斎賀秀夫(1997) 「語構成の特質」 『語構成』 ひつじ書房 pp.24-45

森岡健二(1997) 「形態素論：語基の分類」 『語構成』 ひつじ書房 pp.57-87

Comrie, Bernard(1988) “Linguistic typology”, in F. J. Newmeyer ed. *Linguistics : The Cambridge Survey I*, Cambridge : CUP. pp.447-461

Greenberg, Joseph(1959) “A quantitative approach to the morphological typology of language”, *International Journal of American Linguistics* 26. pp.178-194

Haspelmath, Martin(2002) *Understanding Morphology*, London : Hodder Arnold.

Jespersen, Otto (1921/1964) *Language: its nature, development, and origin*, New York : W. W. Norton & Company, Inc.

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

韓日の基礎語彙の複合度対照

言語類型論は主に屈折形態論と関連して一つの単語を構成する形態素の数に関心をもち続けてきた。それは造語論においても意義がある。単語を単純語と複合語に分類するとき、単純語は単形態素語、複合語は多形態素語である。語彙の中で複合語が占める割合、つまり複合語度の面で各言語の類型を考察する必要がある。

韓国語と日本語は系統的にしても類型論的にも非常に近い言語である。また、長い間、中国語から数多い単語を借用してきたという共通点もある。そういうことで韓国語と日本語の複合語を対照することは意味がある。まず、この二つの言語の基礎語彙を対象にして複合度を調べた結果、基礎語彙全体から韓国語の複合度(42.57)のほうが日本語(21.69)の二倍程度高いことがわかった。等級別、品詞別に対照したとき、副詞を除けばほかは全部韓国語の複合度が遥かに高かった。したがって、単語の分析的な理解は語彙学習をすることに当たって日本語より韓国語のほうが大いに役に立つであろうと思われる。

日本語母語話者の会話における ターン交替の特徴について

ー インタビュー会話における定量的分析から ー

磯野 英治*

Chung_ang_isono@yahoo.co.jp

< 目次 >

>

1. はじめに	3.2 分析方法
2. 先行研究	3.2.1 分析手順と方法
3. 調査概要	3.2.2 コーディングについて
3.1 調査方法	4. 分析結果と考察
3.1.1 研究の概要	4.1 会話データの性質について
3.1.2 被験者	4.2 日本語母語話者の会話における ターン交替の特徴について
3.1.3 実験手続き	5. おわりに
3.1.4 文字化方法とターンの認 定について	

Key Words : ターン交替(Turn taking), インタラクション(Interaction),
定量的分析(Quantitative analysis),
会話教育(Instruction in Japanese conversation)

1. はじめに

従来から行われてきた第二言語習得研究の一連の成果は、外国語教育や

* 中央大学校 日語日文学科 助教授、日本語教育学、教育工学、社会言語学
<http://japanese.human.metro-u.ac.jp/~polkadot/ISONO%20hideharu's%20Wave2.html>

第二言語教育に多くの示唆、影響を与え、実際の教授法や学習への応用も行われている。しかしその多くは「文法能力」の習得に関するもので(任 1997)、「運用能力」習得に関する研究はまだ多くはない。

また昨今の会話分析における語用論的研究、及び、自然会話と創作会話の比較研究から、実際の自然なコミュニケーション行動は、会話教材用に作られた会話におけるやりとりとは、かなり異なる特徴を持つことが明らかになってきている。会話分析の基礎的研究として理論的にも様々な示唆を含むこのような結果は、単なる言葉の問題としてだけではなく、実際の対人コミュニケーションを円滑に進めるためにも習得することが必須であることが認識され、「言語教育」にも様々な形で有効に取り入れていく必要性が叫ばれるようになった。現在のコミュニケーション重視の外国語教育では、特に会話教育の分野で「運用能力」の習得が要請されており、この分野の研究、及び実態解明は急務であるということができよう。

また社会言語学の分野でも言語接触の観点から「面と向かって話すこと」の重要性が改めて確認される(ロング・磯野・塚原 2008)など、インタラクションの重要性とその解明についての研究は会話分析の領域にとどまらない。

そのため本研究¹⁾では、「会話における展開性」に大きく関係し、また会話の中でインタラクションの特徴が最も顕著に現れると考えられる会話の「ターン交替」について、日本語母語場面における統制されたデータの会話分析を通じて、初対面二者間会話の中で行われる円滑なコミュニケーションのための特徴を調査、分析する。このための分析項目として、インタビューに対する日本人母語話者24名のターン交替時の特徴について、形式的な分類²⁾から定量的な調査、分析を行う。

1) 本稿は2009年7月14日、オーストラリアで行われた2009年日本語教育国際研究大会にて、筆者が発表した「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴に関する定量的分析—インタビュー会話における調査から—」を増訂したものである。発表において建設的なご意見を下さった方々へ深く御礼申し上げる。

2) 形式的な分類とは表現の形式を指し、当該発話が相対的にどのような機能・効果を果たしているのかといった機能的な分類とは区別される。機能的分類については磯野

この上で、本研究で得られた実際のコミュニケーションにおける「ターン交替」の分析や観点を、有効に会話教育へ取り入れていくための一助としていきたい。

2. 先行研究

ターン交替に関する研究は、社会学を基礎とするSacks、Schegloff、Jeffersonらのエスノメソドロジーの会話分析によるターンテイキングの研究から始まった。ターンテイキングは「話者交替」、「話順交替」などと訳されることが多く、会話のやりとりにおける発話の交換のことを指す用語である。社会学の観点による会話分析からJefferson(1974)は、会話の聞き手は話し手がいつ話し終えるかについての正確な予測ができ、相手の話の終わりと同時に自分が話し始めたり、相手の話の終わりを自分が代わって話したりすることができるという事実を指摘した。またSchegloff & Sacks(1973)は、ターンテイキングが行われるのは一発話が終了したところで話し手がポーズを置いた‘transition relevance place(TRP)’であることを見出した。この特徴として「エー、アー、ンー」などの発話は、ターンテイキングの際に起こりえる沈黙を避けるためのものであることを挙げ、多くの場合話者は一人ずつ交替に話し、発話ターンの長さや順序は一定ではないが、ターンの移行は秩序正しく調整され、発話の重なりなどはあまり見られないといった報告をしている(Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)。さらにLevinson(1983)もSacks, Schegloff & Jefferson(1974)の内容に触れ、会話が多くの場合、発話が重なったり、間が生じることなく進行するのは、発話ターンが移行する可能性のある「移行適格場所(TRP)」が予想されているからであるとまとめている。その後の研究で、ターンテイキング時に起こる発話の重なりをどう理解し解釈するのかという点で議論があったが

(2009b)を参考のこと。

(Edelsky, 1981、Tannen, 1984など)、これらの研究から「話者は一人ずつ話す」という会話におけるターンテイキングの原則は、ユニバーサルなものであると考えてよいだろう。

これら社会学の研究成果を受け継ぎ、日本語でも杉戸(1987)以来、会話におけるターンの交替に関する研究が数多く行われた。主な研究として西原(1991)のターンテイキングの諸要因に関する研究、ザトラウスキー(1993)、堀口(1997)の「隣接ペア」「応答ペア」³⁾の研究、「談話展開」の観点から日本語母語話者のターンテイキングを考察した大浜(1998)、初鹿野(1998)の相手の発話中に自発的にターンを始める場合のテクニックの分析、堀口の行った一連の研究(1988、1990、1991、1997)と初鹿野(1997)の観点について、整理、再分類を検討した研究として松本(2003、2005)がある。

また、用語の扱いに違いはあるものの、数多く研究されている「あいづち」の研究も、その時点でターンの交替が行われていると捉えれば、広義の意味においてターンの交替に関する研究と考えることができる。水谷(1984、1988、1993)は、日本語会話が話の途中であいづちが入ったり、相手の話を引き取って完結させたりというように、会話を話し手と聞き手の二人で作っていく「共話スタイル」であると分析を行っているが⁴⁾、これは会話を大きく談話レベルで考えた場合、会話におけるターンをどのように展開しているのかという会話スタイルの研究であるともいえるだろう。

先行研究における日本語のターン交替やあいづちの研究は、インタラクションやコミュニケーションストラテジーといった研究への関心の高まりとも結び付き、近年日本語教育への応用を目指す方向へ発展してきている

3) 「隣接ペア」とはある発話に対して直接的に対応するその次の発話とのペア、「応答ペア」とは間があくこともあるが、ある発話に対してそれに対応する発話とのペアのことである。

4) 水谷(1984、1988、1993)では、「あいづち」や「共話スタイル」が日本語独特のものであるように論じられているが、外国語においてもSchegloffやSacksなどがこの論文以前にエスノメソドロジーによる会話分析を行い、その諸特徴を報告しており、また水谷以降の研究においても「あいづち」や「共話スタイル」が必ずしも日本語独自のものとは言えないと位置づけられる研究(Ferrara 1992、Clancy、Thompson、Szuki&Tao 1996)もある。

(森・前原・大浜1999)。これら実際の会話データを調査した先行研究は、インタラクション、ターン交替の特徴を解明する貴重な研究でありながらも、必ずしも条件統制や会話データの性質(ロールプレイやOPI)⁵⁾についての問題が解消されている訳ではなく、また質的、局所的な分析に留まっているものも少なくない⁶⁾。

また会話データの条件統制を行って定量的分析を試みている松本(2003, 2005)に関しては、OPIによる会話のやりとりを分析データとして扱っているため、会話の中に現れる現象について、ある程度のコントロールや制限が生じるものと考えられ、また堀口(1997)、初鹿野(1998)など先行研究において提案された形式、機能の分類を整理している点は評価できるが、その分類に関して用語の取り扱いなどの点で問題もある(3.2.2で詳述)。ターン交替という現象そのものは、まさに対話者との相互作用であり、このような会話のやりとりをより確実に研究するためには、条件の統制、定量的分析が必要であり、分析の対象となる会話データについては、少しでも自然なものが求められるであろう。そのため本研究では先行研究で得られた知見を有効に活用しつつ、さらなる実証的な分析が可能になるよう被験者や分析対象となる会話データに関して条件統制を図り(本研究における会話データの性質に関しては4.1で後述)、日本語母語話者の会話で展開されるターン交替の特徴を定量的に調査、分析していく。

また現在の日本語教育における会話教育では、より実践的なコミュニケーション能力育成の観点から、実際の自然なコミュニケーション行動を日本語教育に取り入れようとする動きも活発になっている(鎌田2002、宇佐美 2007)。

-
- 5) ACTFL-OPIとは、外国語学習者の口頭表現能力を総合的に評価することを目的とした会話能力判定方法でありOral Proficiency Interviewのこと。OPIでは会話モードとロールプレイモードの二つの要素によって構成されるインタビュー形式のテストが行われる。
- 6) 俣野夕子(1996)では談話レベルでのグローバルな観点からの分析の必要性が強調され、森・前原・大浜(1999)では、定量的な調査が行われているものの、分析の対象となる会話データはロールプレイ談話である。

以上のような方向性の中で、本研究は実際のコミュニケーションを日本語教育に有効に取り入れていくために必要なその諸特徴について調査、分析する基礎的な研究として位置づけられる。

3. 調査概要

3.1 調査方法

3.1.1 本研究の概要

本研究では、インタビュアーと日本語母語話者24名(以下被験者)の会話データを録画のかたちで収集し、その文字化資料を作成した上で、録画データによる音声的、対人コミュニケーション的特徴と文字化資料を対応させる形で、インタビュアーから被験者へターンが交替した直後の発話の特徴について、形式的な分類のコーディングを行い、分析を行った。分析は分類されたターン交替時の特徴について、その出現頻度と構成比の算出を行い(4.2で詳述)、どのような傾向が観察できるのかを調査した。

3.1.2 被験者

日本語母語場面における日本人インタビュアーは同一の人物とし、もう一人の被験者については日本人(男女各12名)の計24会話とした。それぞれの各ペアは全て初対面、年齢については20代、現在の言語環境は東京で共通語圏という環境条件で統制を行った。

表1：被験者の属性

グループ	年代	現在の言語環境	会話協力者の属性	会話総数
日本語母語場面	インタビュアー：30代 学生：20代	東京 (共通語)	インタビュアー：1名(女性) × 日本語母語話者：男女各12名	24 会話

3.1.3 実験手続き

実験者が会話参加者を引き合わせて、二者間で10分から20分程度の会話をしてもらった。会話の収集方法については、できるだけ自然な会話が収集できるように、リハーサルという設定で、ある程度リラックスした状態で行ったインタビューを事後に同意を得て調査データとして利用するなど、会話データの収集方法を工夫した(西郡 2002、磯野 2007)。

会話については、はじめは日本人インタビュアーが質問するかたちをとり、その後の会話は流れに任せて自由に行い、会話の終わりは会話参加者が自然に終わらせるという方法をとった。被験者に実験の目的は知らせず、会話の録音は音声のほかに、ビデオカメラでの撮影も行った。会話終了後、被験者にはフェイスシート、フォローアップアンケート(五段階評価法)、同意書の記入をしてもらおうという手続きを採用した。

3.1.4 文字化方法

収集した会話データの文字化方法は、「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)2007年3月31日改訂版」(宇佐美 2007)に従い、会話開始から終了までの全ての会話を分析対象とした⁷⁾。

3.2 分析方法

3.2.1 分析手順と方法

本研究ではターン交替の特徴に関して形式的な分類からのコーディングを行い、その出現頻度と構成比を数量的に調査して、日本語母語話者の会話におけるターン交替時の諸特徴について考察を試みた。本研究で分析対

7) 本研究におけるターン交替の認定については、上述したBTSJによる改行の原則に従い、「BTSJ上で改行が行われた時点を指し、かつ対話者の発言にもう一人の話者の発言が続く場合」をターンが行われた(※改行されていても同一人物の会話が続いている場合はターンと認定しない)と操作的に定義した。文字化については会話データのターン交替の認定などの観点から、文字化データの3次チェック(ピアチェック)まで行った。

象となった項目の一例を、以下に示す。

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
11	*	IN	はい、何して<ますか>{<}?。
12	*	F04	<あのー>{>}、公文の(ほー)、採点のバイトを <しています、はい>{<}。

インタビュアーは「IN」、被験者は「F04」で表されており(男性M01-12、女性F01-12)、分析対象となるのは、上記のようにインタビュアーから被験者である「話者F04」へターンが交替した直後の発話である。この会話では、インタビュアーから被験者へターンが交替した際に、被験者は「あのー」というフィラーをまず発して、その後の会話を展開させていることが観察できる。

3.2.2 コーディングについて

本研究では堀口(1997)、初鹿野(1998)が提示している項目とそれを整理して分類を試みている松本(2005)を、ターン交替の際に観察される日本語母語話者の発話の形式におけるコーディング項目として採用した(会話例はG、Hは堀口(1997)、初鹿野(1998)からの引用、他は本研究データからのもの)。

松本(2005)では、会話分析の観点から話者の「ターン交替」を分析するために適した分類が検討されているものの、コーディング項目における用語の取り扱いに関して、日本語文法における品詞分類の観点から問題があり、その影響でコーディング項目の上位、下位概念などに混乱を招きやすい⁸⁾。このため本研究では、ターン交替時の特徴をコーディングする際の用語の取り扱いや上位、下位概念に関して再度の修正を加え、より分類を行いやすいようにした⁹⁾。この上でターン交替におけるコーディングの信

8) 「指示詞・言及語」「あいづち詞」「言い換え語」が同位概念になっている、など。

9) 「接続詞」を「接続」、「指示詞・言及語」を「指示・言及」、「あいづち詞」を「あいづち」、「

信頼性を確保するために、全会話データの25%にあたる6会話(男性3会話、女性3会話)において、筆者とセカンドコーダーそれぞれが個別にコーディングを行い、コーディングの信頼性係数 Cohen's Kappaを算出した¹⁰⁾。その結果 $k=0.910$ という数値が得られ、 $k>0.75$ でコーディングの信頼性が確認された。

A. 「ディスコースマーカー(DM)」: 英語での oh, well, and, but, or, so, because, now, then, I mean, you know, に相当する談話の連結やコンテキストの調整に重要な働きをもっていると考えられる要素で、下記の

「指示・言及」「あいづち」「返答」以外のもの、下記の下位分類。

a1. 「接続」: 「だから」「(それ)で」「でも」「じゃ(あ)」「(それ)なので」「あと」等のいわゆる接続詞に相当するもの

a2. 「つなぎ言葉」: 「まあ」「ただ」「やはり」「ていうか」「なんか」「あんま(り)」「いや(あ)」「やっぱ」「っと」「もう」「こう」等、接続詞とは言い切れないがいわゆる「つなぎ言葉」の類

(例)

113	108	*	IN	<へー>{>}, どんな資格ですか?。
114	109-1	/	F	<u>なんか</u> , TOEFLとか?=?,
115	110	*	IN	=はいはい, <英語のねー>{<}
116	109-2	*	F	< <u>なんか</u> >{>}IELTSっていうイギリスの(ほー)、留学の試験みたいなのあるんですけど(へー)、はい、受けてみたいなって思ってます。

応答詞を「返答」、「繰り返し語」を「繰り返し」、「言い換え語」を「言い換え」、「疑問詞」を「疑問」、「先取り語」を「先取り」に検討・修正した。

10) 評定者間信頼性係数であるCohen's Kappa(Bakeman&Gottman 1986)は、単純一致率から偶然一致率を差し引いた一致率を表すものであり、コーディングの定義、分類方法について問題がないとされる機械的分類の基準値は $k>0.75$ としている。

- a3. 「ファイラー」: 「あの一」「えーと」「えっと(ー)」「あー」「えー」「んー」「うーん」等のいわゆる言いよどみの言葉

(例)

125	119	*	IN	<へー>{>}, あー, もう体力はばっちりですからね (<笑い>), 普段から練習してるから大丈夫ですね。
126	120	*	F	<u>あー。</u>

- B. 「指示・言及」: 「それは」「そんなことはない」「今」「おっしゃる通りですけれども」など、指示詞や以前の発話に言及する語に相当するもの。「指示」と「言及」に下位分類できる。

- b1. 「指示」: 「それは」「そんなことはない」「そこで」のように「こ・そ・あ」を用いた指示詞に相当するもの

(例)

66	65	*	IN	<へー>{>}, それ何歳ぐらいの<頃から?>{<}. [最後のほうはほとんど聞こえない]
67	66	*	F	<それは>{>}中学2年生のときです、<はい>{<}.

- b2. 「言及」: 「今」「おっしゃる通りですけれども」「言ったように」、直前の発話文を受けての「は'wa'~」「の~」「とか~」のような「こ・そ・あ」は用いていないが前のターンの内容を指しているもの。

- C. 「あいづち」: 「はい、ん、ええ、あ、うん、はあ、ほんと、なるほど、うっそー、そうですねえ、そうですか、」など短く、積極的な意味を持たないいわゆる感動詞の類。

- c1. 「はい系」: 「ハ、ン、エ、ア」の音節を含む3音節以内の語

(例)

62	61	*	IN	そう<ですか->{<}</td>
63	62	*	F	<はい>{>}</td>

c2. 「**そう系**」: 「そう」という音韻が含まれる語

(例)

60	59	*	IN	温泉いいところいっぱいあります<よね->{<}</td>
61	60	*	F	<そうですね->{>}</td>

c3. 「**感動詞系**」: 「なるほど、ほんと、へえ、ふーん」等のいわゆる感動詞の類

c4. 「**その他**」: 上記3つに当てはまらないもの(笑いなど)

D. 「**返答**」: 前の話者による質問や疑問、要求、感想に答えるyes, noの意味での「はい」「いいえ」「うん」「ううん」「ええ」「いや」

(例)

81	78	*	IN	すーごーい、勉強熱心<ですね->{<}</td>
82	79	*	F	<いや->{笑い}>{>}</td>

E. 「**繰り返し**」: 発話文中において対話相手が直前に言った言葉をそのまま繰り返す表現。また当該発話が疑問文でも、相手の発話を繰り返しているものを含む。この場合、疑問文に対してYes or Noの意味で明確にそのまま繰り返して答えているもの(「友達はいますか?。」「いますねー」など)は、なんらかのストラテジーとして繰り返しているとは捉えずに「I.直接発話」に分類する。

(例)

111	106	*	IN	じゃあですね(はい)、今年チャレンジしたいこと、何かありますか?。
112	107	*	F	今年チャレンジしたいことですね、たくさん資格を(うん)受けたいな<と思います、はい>{<}。

- F. 「**言い換え**」: 発話文中において、対話相手が直前に言った言葉を意味は変えずに言い換えている表現。なお、限定(「新宿で。」「歌舞伎町ですね。')のように上位概念を下位概念で言い換えているものも含むこととする。

(例)

70	67-2	*	IN	何か自分(は一)、お父様もじゃあ、そういう国際関係の<お仕事を?>{<}。
71	69	*	F	<父は>{>}、あ、いや全然違うんですよ(ふーん)、街作りとか、そういう建築の方で、<はい>{<}。

- G. 「**疑問**」: 相手の発話を引き継いだ発話において用いられている「いつ、どこ、だれ、どう、どんな、どうして」などに関するいわゆる疑問文、半疑問文に相当するものすべて、かつ相手の発話を繰り返していないもの。

(例) 「出身は?」「ニューアークです」「どこですか」「ニューヨークです」

- H. 「**先取り**」: 話し手がこの先言おうとしていることを聞き手が予測してそれに基づいて発話すること。

(例) 「ここでカラスが持ってって」「食べちゃうの」

- I. 「**直接発話**」: AからHの形式を使わず、いきなり会話を始めたり言いたいことを話しているもの。

(例)

48	47	*	IN	<へー>{>}, 走ってというのは、長距離、短距離<とか?<{<。 [→]
49	48	*	F	<私は>{>}中距離で800(へー)、を専門にやってます、はい。

4. 分析結果と考察

4.1 会話データの性質について

データ収集時に被験者に行った5段階評価法によるフォローアップアンケートから本研究における会話データの妥当性についてまとめると以下のようになる。参考とするのは、被験者がデータ収集時に行ったカメラによる録画など周辺的な環境に対して、インタビュアーとより自然なかたちでコミュニケーションをとることができたかという観点であり、その参考になると考えられる項目を一覧表にまとめ、さらにその回答を点数化して求めた平均値を提示する¹¹⁾。

表2：会話の自然さについて

フォローアップアンケートの項目	F, Mそれぞれ24人の回答	割合
5. とても自然に話せた	1	4.2%
4. かなり自然に話せた	6	25%
3. 特に不自然ではなかった	15	62.5%
2. あまり自然に話せなかった	2	8.3%
1. とても不自然な話し方になった	0	0%

11) 本研究で取り扱った会話データはインタビュー会話であり、また許可を得たかたちでの録画も行っているため、厳密な意味で「自然」な会話データとは言えない。しかし冗長を避けるため、創作されたシナリオのある会話とは違って、あるいは会話参加者の言語行動自体は統制されていないという意味で「準自然」なもの本研究では位置づける。実際の会話では被験者からの質問も観察されるなど、和やかな雰囲気の中でやりとりが行われたことも付記しておく。このような会話データの位置づけに関しては土岐(2005)、宇佐美(2007)を参照のこと。

合計	24	100%
回答の平均値	3.25	—

表3：言いたいことを話すことができたかについて

フォローアップアンケートの項目	F, Mそれぞれ24人の回答	割合
5. 大変そう思う	5	20.8%
4. かなりそう思う	14	58.3%
3. ややそう思う	4	16.7%
2. あまりそう思わない	1	4.2%
1. 全くそう思わない	0	0%
合計	24	100%
回答の平均値	3.96	—

表4：録画を意識したかどうかについて

フォローアップアンケートの項目	F, Mそれぞれ24人の回答	割合
5. 全然意識しなかった	6	25%
4. 特に意識はしなかった	8	33.3%
3. 少し意識した	9	37.5%
2. かなり意識した	1	4.2%
1. 非常に意識した	0	0%
合計	24	100%
回答の平均値	3.79	—

4.2 日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴について

コーディング項目の結果から、日本語母語話者24名のターン交替時に現れる特徴の平均を、その出現頻度と使用率の観点から集計を行ったところ、表5、6のような結果となった。

またここでは、各話者のターン交替時に現れる特徴の使用率と構成比を、会話者24人全員の談話におけるターン交替時の基本的な傾向としてグラフ1に示した。

表5：ターン交替時の各出現頻度の平均(形式大分類 M01-12, F01-12)

	DM	指示 ・ 言及	あい づち	返答	繰り 返し	言い 換え	疑問	先取り	直接 発話	合計
平均(回)	49.92	3.92	30.42	4.54	11.63	0.54	0.67	0.29	13.13	91.13
S.D	13.86	2.92	9.04	3.19	5.40	0.77	0.82	0.69	9.34	22.92

表6：ターン交替時の各使用率の平均(形式大分類 M01-12, F01-12)

	DM	指示 ・ 言及	あい づち	返答	繰り 返し	言い 換え	疑問	先取り	直接 発話	合計
平均(%)	27.36	4.300	34.90	5.12	13.15	0.63	0.66	0.39	13.51	100.00
S.D	10.17	2.95	11.26	3.39	6.06	0.98	0.72	0.91	7.08	0.00

グラフ1：日本人母語話者24人の談話における構成要素(形式大分類)

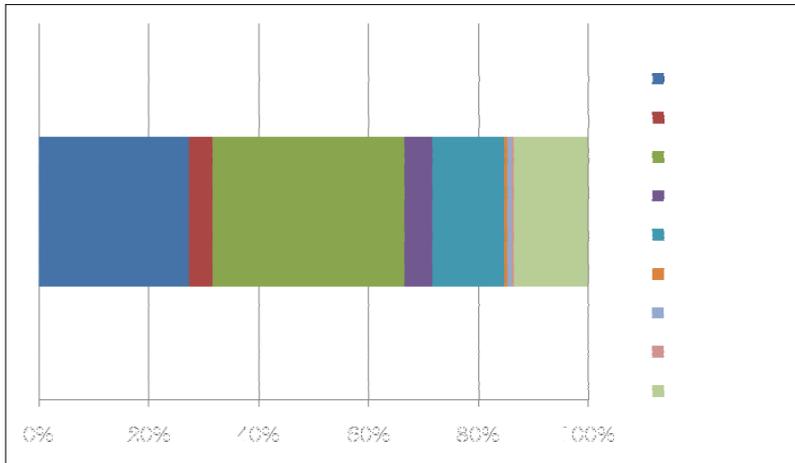


表5は計24会話全体の各分類の出現頻度の平均、表6は1会話における各分類の使用率を割り出した上で24会話の平均をとった数値、グラフ1は表6を視覚的に表したものである。日本語母語話者のターン交替時に観察され

るその特徴として、出現頻度においては「ディスコースマーカー」が一番高い頻度を示しているものの、24人の各会話における形式的分類の使用率の構成比を割り出してみると、「あいづち」が、各会話の構成要素として重要な役割を果たしていることが分かった。今回のような比較的大きなデータを談話レベルで調査した場合も、先行研究(水谷 1984, 1988, 1993, など)における「共話」的な観点と一致する特徴が観察され、日本語母語話者は相手が話している途中に打つ単発的なあいづちのみならず、ターンが交替する際にも「あいづち」から会話を展開していく傾向が見られた。これは発話文レベルでも短いスパンであいづちを使用することによって、意味のずれを修正、回避するとともに、直接的な発話を避けることで、会話相手への配慮になっていると考えられる。

また「あいづち」に続けて高い使用率を数値を示した「ディスコースマーカー」については、談話の連結や当該コンテキストの調整のみならず、母語話者間の会話にも有り得る語彙レベルの齟齬の修正など、より細かいコミュニケーションの調整にも、会話を円滑に進めるための手段としてその使用が観察された。

本研究で24人の会話データを定量的に調査することによって、日本人の会話におけるターン交替について、一定の傾向が観察できたのではないかと考える。本データから観察される傾向として、日本人同士の会話では「いきなり会話を始めたり、言いたいことを話す」ような直接的な発話からターン交替時の会話が開始されることは少なく、何らかの形式的な表現から会話が展開、進行していくという特徴が実証的に観察された。これは前述の「あいづち」と同様に、会話は言いたいことを言いっぱなしにすれば良い訳ではなく、会話相手との円滑なコミュニケーションのためのストラテジーとして、ディスコースマーカーや繰り返しなどの表現形式を使用してターン交替時の会話を開始すると考えることができる。

また会話データで観察できる表5.6、グラフ1のような諸特徴を、男性女性に分けてt検定を行った結果、「返答」の項目については有意な差が認められたものの($t(22)=2.19$, $p<0.05$)、その他の項目には全て有意差はなかった。返答については、当該発話において質問、疑問的な会話が多かったか

少なかったかといった会話の質的な要素が関連していたため、大枠で日本人母語話者のターン交替時に現れる特徴に男女の違いは少ないと考えることができるのではないか。

5. おわりに

これまでの日本語におけるインタラクションの研究は、定性的分析やタスク中心の研究が主であるため、実際の会話を対象とした定量的分析に関する先行研究は多いとは言えない。実際の会話を取り上げ、それぞれどのようにインタラクションが行われているのか、傾向を分析し、実態を把握することで、より実践的なコミュニケーションを日本語教育に有効に取り入れていくための示唆が得られるのではないか。筆者の経験では、日本語で会話をしようとする学習者が「ターン交替の際にどのように会話を始めたら良いのか戸惑う」といった場面に遭遇することがある。このような場合どのようにターン交替し、会話を展開させていくのか、といった観点からも実証的なデータは会話教育に有効な材料を提供できるであろう。

今後の課題として、このようなターン交替時の会話の特徴が、相対的にどのような機能、効果を果たしているのかという機能的な分類、語用論的観点からの定性的分析が必要になると考えられる。例えば下記のような例である。

c2. 「そう系」:

IN	じゃあですねー、お休みの日があったら何をすることが多いですか?。
M04	そうですね、最近はよく麻雀やってますね<笑い>。
IN	普段から、よく話とかしたりする?。
M04	そうですね、やっぱりまた部活の人に<笑い>(はい)、部活の子に(はい)、タイの方がいらっしやいまして。

上段の会話では、INの問いかけにあいづち的な発話として「そうですね」が機能しているのに対し、下段の会話では同じ形式ながらも同意としての機能を有している。つまり本研究で表現の形式的分類として同様にコーディングされた項目であっても、会話相手との相対的な機能・効果という質的な要素が異なる場合が少なくない。今後このような点に関して、定量的な分析とその質的要素を調査することが今後の課題となる。

また定量的、定性的分析という両面的な観点から得られた知見を教育・学習に生かすための知見として、会話データの教材化への展望も模索しなければならないだろう。現在、日本語教育では教科書だけではなく、視聴覚教材としてのeラーニング・mラーニングが導入されてきており、今後その必要性がさらに増加することが予想されている(磯野・関 2008)。当然のことながらコミュニケーションは音声の他に、目線や身振りといった非言語的要素も重要であり、本研究のような会話分析で得られたデータは、映像や音声のある教材として作成されることも望まれるであろう。このような方向性を位置づけるための基礎的な研究として、さらなる定量的・定性的分析を行うことを今後の課題としたい。

<参考文献>

- 磯野英治(2007)「自然会話教材開発研究における素材データの収集について」『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム」報告集3 自然会話教材開発研究部会』、東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室、p.275-279
-
- (2009a)「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴に関する定量的分析－インタビュー会話における調査から－」口頭発表、2009年日本語教育国際研究大会、シドニー、オーストラリア
-
- (2009b)「日本語母語話者のターン交替における定量的分析とその語用論的特徴について－会話教育への示唆－」『2009年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会 Proceedings』、韓国 日本学会、p.122-126

- 磯野英治・関竣泓(2008c)「日本語教育におけるeラーニング・mラーニングの可能性について－授業実践例と日韓の学習ツールの比較の観点から－」『第7回日本語教育国際研究大会予稿集』3、日本語教育学会、p.341-344
- 任荣哲(1997)「社会言語能力と日本語教育」『日本研究』Vol.12、中央大学校日本研究所、p.15-29
- 宇佐美まゆみ(2007)『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム」報告集3 自然会話教材開発研究』、東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室
- _____ (2007)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2)(研究代表者 宇佐美まゆみ)研究成果報告書、p.17-36
- 大浜るい子(1998)「日本人の言語行動－談話展開のためのストラテジー－」『広島大学日本語教育学科紀要』no.8、p.97-105
- 鎌田修(2002)「接触場面の教材化－ヨーロッパと日本を舞台に－」『ヨーロッパの日本語教育』2002年日本語教育シンポジウム・第7回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集、ヨーロッパ日本語教師会・ハンガリー日本語教師会、p.32-43
- ザトラウスキー・ポリ－(1993)『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察－』、くろしお出版
- 杉戸清樹(1987)「発話のうけつき」『談話行動の諸相－座談資料の分析－』国立国語研究所報告書92、三省堂、p.68-106
- 土岐哲(2005)「インタビュー・聞き書きと質問紙調査法」『日本語学』6月臨時増刊号 vol.23、p.32-43
- 西郡仁朗(2002)「自然会話データ『偶然の初対面の会話』～その方法論について～」『人文学報』330号、東京都立大学人文学部、1-18。(転載：文部科学省科学研究費報告書(基盤研究C(2))『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』(研究代表者：宇佐美まゆみ)
- _____ (2004)「新しい日本文化論と日本語教育のためのマルチメディア・コンテンツ『夢を紡ぐ街－東京－』の研究開発」文部科学省科学研究費報告書(基盤研究C(2))『日本語中上級マルチメディア素材のデータベース化及び中国での利用展開』(研究代表者：西郡仁朗)、p.11-17

- _____ (2004) 「日本語教育用AVリソース公開サイト「mic-J」: 004年の状況」文部科学省科学研究費報告書(基盤研究C(2)) 『日本語中上級マルチメディア素材のデータベース化及び中国での利用展開』(研究代表者: 西郡仁朗)、p.5-10
- 西原鈴子(1991) 「会話のturn-takingにおける日常的推論」 『日本語学』10月号vol.10、p.10-18
- _____ (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 初鹿野阿れ(1998) 「発話ターン交代のテクニックー相手の発話中に自発的にターンを求める場合ー」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24、東京外国語大学留学生日本語教育センター、p.147-162
- 藤本かおる・小松恭子・磯野英治・関峻泓・王瑩・西郡仁朗(2008b) 「海外高等教育機関の日本語教育におけるeラーニング・mラーニング利用状況の実態調査」 『2008年度日本語教育学会春季大会予稿集』、日本語教育学会、p.189-190
- 堀口純子(1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」 『日本語教育』64号、p.13-26
- _____ (1990) 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」 『日本語教育』71号、p.16-32
- _____ (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」 『日本語学』第10巻第10号、p.31-41
- _____ (1997) 『日本語教育と会話分析』、くろしお出版
- _____ (1997) 「聞き手の役割2ー予測ー」 『日本語教育と会話分析』くろしお出版、p.81-105
- 俣野夕子(1996) 「接触場面における話者交替」 『阪大日本語研究』8、大阪大学文学部日本語学講座、p.87-106
- 松本剛次(2003) 「日本語インタビュー会話におけるターンテイキングと日本語学習者のその習得過程」東京外国語大学大学院修士論文
- _____ (2005) 「日本語学習者のターンの受け継ぎに関する談話レベルでの横断調査ーフランス語母語話者でのケーススタディー」 『言語社会心理学的アプローチによる自然会話分析方法論ハンドブック』、東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、CD-ROM版、p.135-150
- 水谷信子(1984) 「日本語教育と話し言葉の実態ーあいづちの分析ー」 『金田一春彦博士

古希記念論文集』第二巻 言語学編 三省堂.

- _____ (1988) 「あいづち論」 『日本語学』Vol.7 No.13、p.4-11
- _____ (1993) 「「共話」から「対話」へ」 『日本語学』Vol.12 No.4、p.4-10
- 森恵理香・前原かおる・大浜るい子(1999) 「ターン譲渡の方略としての「繰り返し」と「問い」」 『広島大学日本語教育学科紀要』No.9、p.41-49
- ロング・ダニエル・磯野英治・塚原佑紀(2008a) 「小笠原諸島の欧米系島民に見られる語アクセントの型およびその世代差」 『小笠原研究年報』No.31、首都大学東京小笠原研究委員会、p.31-40
- Bakeman, R.&Gottman, J.M(1986) Observing interaction : an introduction to sequential analysis. *Cambridge university Press*.
- Clancy, P.M., Thompson, S.A., Szuki, R.&Tao, H.(1996) The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, 26, p.355-387
- Edelsky, C.(1981) Who's got the floor? *Language in Society*.
- Ferrara, K.(1992) The interactive achievement of a sentence : Joint Productions in therapeutic discourse. *Discourse Processes*, 15, p.207-228
- Levinson, S.(1983) *Pragmatics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Schegloff, E.A. & Sacks, H.(1973) Opening up closings. *Semiotica*, 7, p.289-327
- Sacks,H. Schegloff, E.A & Jefferson, G.(1974) A sioplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language* 20 No.4, p.696-735
- Tannen, D.(1984) *Conversational style : Analyzing talk among friends*. Norwoos, N.J. Ablex Pub.

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

**Studies in turn-taking in Japanese native speakers' conversations :
Quantitative analysis of interviews**

The purpose of this study is to quantitatively analyze "Turn-taking" in Japanese native speakers' conversations. The number of base subjects totals 24 enabling the analysis of speakers according to age, sex, dialect, and first-time meetings.

We analyzed and coded the utterances which followed turn-taking when an interviewer addressed 24 Japanese native speakers.

As a result, "back-channel feedback" was observed to be a principal element in turn-taking. Thus, just as short back-channel feedback has been shown to advance conversations in previous studies, this study found that back-channel feedback performed a similar role in turn-taking as well.

In addition, such empirical analyses of actual data will enable us to offer effective and realistic materials for instructing non-native speakers in the techniques of Japanese conversation construction.

テレビドラマを用いたシナリオ・ドラマ活動について

— 活動に参加した学習者の意識を中心として —

津崎 浩一*

cautsuzaki@hanmail.net

山本 智子**

tomoko.yamamoto@gmail.com

< 目 次 >

>

- | | |
|-----------------------------|------------|
| 1. 研究の目的と先行論文および本論の
位置づけ | 3. 調査結果と考察 |
| 2. 調査対象者の活動の実態と
調査方法 | 4. おわりに |

Key Words : TV 드라마(TV drama), 시나리오 드라마(Scenario drama),
연기(Acting), 의식조사(A survey on attitude)

1. 研究の目的と先行論文および本論の位置づけ

学習者の興味・関心、日本語学習上の問題点などに注目し、学習者を積極的に参加させ教育効果をあげるには授業でドラマをどう用いるか、つまりドラマを用いた授業の可能性を探ることを目的として、これまで一連の調査研究を行い以下の先行論文を著した。本論の位置づけを説明する上からも、まずこの先行論文の内容に触れたい¹⁾。

* 中央大学校 日語学科 副教授 日本語教育

** 又松大学校 日本学科 専任講師 日本語教育

1) ドラマまたはシナリオ・ドラマを用いた授業に関する先行研究として、津崎(2001)、森山(2004)、早矢仕(2005)などあるが、これについては津崎・山本(2009a)の「先行研

1.1 津崎・山本(2009a)²⁾

津崎・山本(2009a)はテレビドラマを用いた授業をデザインするための予備的調査とその考察で、そこでは学習動機、学習者から見た望ましい授業形態、日本語学習上の興味・関心、コミュニケーションの場で問題となること、テレビドラマをどうとらえているかなど24項目にわたる記述・複数回答形式の設問調査を、韓国の大学の日本語学習者167名を対象に行った。

調査結果を分析した結果、上位回答として次のキーワードが得られた。学習動機は①「ドラマ・アニメ、映画、歌等、メディアを通じた娯楽への関心」が多い。求められる授業形態は②「マルチメディアを使う授業」と③「日本語で話せる授業」で、勉強していてもおもしろいと思う時は④「日本語が理解できた時」と⑤「日本、日本文化等について知る時」だった。また、コミュニケーションで重視することに⑥「(文法的に)正確に話すこと」と⑦「なめらかに(自然に)話すこと」、コミュニケーションで難しさを感じることに⑦「なめらかに(自然に)話すこと」と⑧「聞き取ること」、コミュニケーションで克服したいことには⑨「日本語で話す際の精神的不安定さ」と⑩「発音、プロソディ等の音声的問題」を挙げる学習者が多かった。

1.2 津崎・山本(2009b)³⁾

津崎・山本(2009b)では、上に挙げた①~⑩のキーワードをもとに、学習者が求めていることを満たし、また抱えている問題点を解決するためにどのような方策をとればよいか、そしてその方策をどのように授業に組み込めばいいかなどを含め、日本語教育のためのテレビドラマを使った具体的な授業試案を二つ提言した。

究」を参照のこと。

- 2) 津崎浩一、山本智子(2009a)「テレビドラマを用いた授業のための予備的調査とその考察」『日語日文学研究』68集1 pp.221-238 韓国日語日文学会
- 3) 津崎浩一、山本智子(2009b)「テレビドラマを用いた授業の可能性と授業デザインへの提言」『日本研究』26集 pp.127-145 中央大学校日本研究所

1.3 本論の位置づけ

本論はこれまでの研究の一環であり、津崎・山本(2009b)で提示した授業試案の有効性を学習者への意識調査により考察するものである。津崎・山本(2009b)で提示した「コミュニケーション機能に留意し、テレビドラマを演じる活動(テレビドラマを用いたシナリオドラマ活動)」を軸とした授業に参加した学習者に対し、授業が学習者の意欲にどのような影響を与えたか、学習者の抱える問題点の解消に役立ったかなどを、学習者に対する意識調査を通して考察し、その結果を報告したい⁴⁾。

2. 調査対象者の活動の実態と調査方法

2.1 調査対象者の活動の実態

今回の調査対象者が参加した、上記テレビドラマを用いるシナリオドラマ活動の授業試案の流れをおおまかに記す。

表1：2009bで提示した授業の流れ⁵⁾6)

<p>◆コミュニケーション機能に留意し、テレビドラマを演じる活動（テレビドラマを用いたシナリオドラマ活動）</p> <p>(1) ドラマを見てストーリーを確認</p> <p>(2) ドラマシーンのスクリプトを配布し、シーンの内容理解と重要表現の確認</p> <p>(3) 各シーンの表現のコミュニケーション機能（表現意図）を確認</p> <p>(4) 配役後、プロソディ・シャドーイングなどによる台本読みとセリフ覚え</p> <p>(5) プロソディ・シャドーイングなどでグループごとにセリフ合わせ</p> <p>(6) ノンバーバルコミュニケーションを含む演技の練習 ※(4)～(6)を繰り返す</p> <p>(7) 本番（ビデオ撮影）</p> <p>(8) 撮影した映像を見ながらのフィードバック</p>
--

4) 本論は2009年3月、第32回日本語教育方法研究会(於：横浜、神奈川大学)でポスター発表した内容に加筆したものである。

5) (1)から(8)までの一連の流れで、50分授業10コマ程度使用。詳しい流れは津崎・山本(2009B)pp.141-143を参照のこと。

6) 表1のアンダーラインの部分、ドラマの選択については津崎・山本(2009a)、プロソディ・シャドーイングとモニターシートについては津崎・山本(2009b)を参照のこと。

【注記】学習者の活動中は、教師が各グループを回りながらモニターとフィードバックを行う。
また、モニターシートを用いる。

2.2 調査時期と調査対象者

筆者2名以外に6名の日本語母語話者教師の協力を得て、2008年後期に韓国内の7つの大学、計12のクラスで、2.1に述べた授業を行った⁷⁾。全活動終了後(2008年11月~12月)、これらの授業に参加した学習者に、この活動に対する意識調査を行った。調査対象は韓国の大学に在籍する韓国日本人学習者191名で、詳細は次の通りである。

表2：調査対象者

クラス	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	全体
教師	A	B		C		D		E	F	G		H	
学年	1	教 養	2	3	2	2	2	2	3	1	2	1	
日本語専攻	21	10	29	19	7	9	14	14	14	10	18	4	169
他専攻	2	5	0	0	3	0	5	4	1	0	2	0	22
全体	23	15	29	19	10	9	19	18	15	10	20	4	191

なお、各教師には前述の授業試案と授業の目的を事前に伝えた。ただし授業の性格や学習者のレベルなどによって、試案どおりに行ったクラスと、少し形を変えて行ったクラスがある。また、教師に対しては授業の進め方について記述式アンケートへの回答を求め、データ分析の参考資料とすることにした⁸⁾。

2.3 調査の設問項目

授業に参加した学習者への調査で用いた設問紙は次の25項目からなり、

-
- 7) 2.1で述べた(1)~(8)の一連の活動を1クールとするが、これを複数回行ったクラスと1回だけ行ったクラスがある。両者の結果の比較は、本論3.2で述べる。
- 8) 教師に対する授業の進め方に関するアンケート結果は、学習者に対する調査結果をクラスごとに比較対照し、活動が行われた環境や条件とその結果にどのような関係があるかを考察する際に用いる。ただし、これは別稿で取り扱う。

使用言語は韓国語、回答方法は選択肢によるものとした⁹⁾。回答は各設問につき選択肢から一つ選択としたが、設問9 および設問13~16に限り回答順位3位までの回答を求めた。

表3：2008年後期の意識調査 設問項目一覧

◆ドラマ演技についての設問調査◆

1. 性別	①男	②女	
2. 専攻	①日本語専攻	②その他の専攻	
3. 自分の性格	①外向的	②内向的	③普通
4. ふだん韓国語よく話すほうだと思うか	①はい	②あまり話さない	③普通
5. 自分の日本語能力は <u>自分のクラスの中で</u> どのくらいだと思うか	①平均より上	②平均程度	③平均より下
6. 日本語で積極的に話したいと思っているか	①はい	②いいえ	
7. 学習動機	①ドラマ・アニメ・歌などへの関心から		②外国語（日本語）への関心から
	③日本・日本文化・日本人への関心から		④留学や就職など自分の将来のため
			⑤その他
8. 日本語でコミュニケーションする時重視することは何か	①（文法的に）正確な表現で話すこと		②その状況に適切な表現で自然に話すこと
	③発音・アクセント・イントネーションなど音声的な問題		④聞き取ること
	⑤どんな表現でも意思を疎通させること		⑥その他
9. 日本語でコミュニケーションする時の問題点は何か（ 順に3つ ）	①（文法的に）正確な表現で話すこと		②その状況に適切な表現で自然に話すこと
	③発音・アクセント・イントネーションなど音声的な問題		④聞き取ること
	⑤使用できる語彙の量		⑥使用できる文型の量
	⑦恥ずかしさ、自信のなさ、不安など		⑧その他
10. 以前に役を演じる活動をした経験があるか	①はい	②いいえ	
(10に「①はい」と答えた人)			
11. その活動に積極的に参加できたか	①はい	②いいえ	③その他
12. 今回のドラマを演じる活動はどうだったか	①とてもおもしろかった		②おもしろかった
	③あまりおもしろくなかった		④おもしろくなかった
			⑤その他

9) 設問と選択肢は、津崎(2001)の調査項目選択肢と津崎・山本(2009a)の調査結果を参考に設定し、今回の授業活動と意識調査に協力を得た6名の教師のチェックを経て作成した。

13. ドラマを演じる活動でおもしろかったことは何か (順に3つ)
- ①役になりきって演じること ②他の人の演技を見ること
 - ③実際に日本人が話す会話表現が使えること
 - ④表情や体の動きなど日本人のよくなるしぐさがあったこと
 - ⑤同じグループのメンバーと協力して練習できたこと
 - ⑥練習のためにドラマを見たこと
 - ⑦ドラマを見たり聞きながら、それを追って音声練習したこと
 - ⑧ドラマ中の対話が聞き取れたこと ⑨特にない ⑩その他
14. ドラマを演じる活動でいやだったことは何か (順に3つ)
- ①役になりきって演じること ②他の人の演技を見ること
 - ③セリフを覚えること ④表情や体の動きなどのしぐさをすること
 - ⑤同じグループのメンバーの日本語のレベルに差があること
 - ⑥授業以外の練習に時間がかかって負担が大きかったこと
 - ⑦ドラマを見たり聞きながら、それを追って音声練習すること ⑧特にない ⑨その他
15. ドラマを演じる活動で役に立ったと思うことは何か (順に3つ)
- ①アクセントやイントネーションなど音的なことに自信がついた
 - ②実際の会話で使われる表現や語彙が勉強できた
 - ③それぞれの状況にあった表現が勉強できた
 - ④セリフを覚えて演技をしたので、普通に覚えるより頭の中に残った
 - ⑤ただ話すだけでなく日本人のよくなる表情やしぐさが勉強できた
 - ⑥積極的に日本語で話そうという意欲が湧いた
 - ⑦日本語で話すことへの抵抗が少なくなった ⑧他の学習者との人間関係が良くなった
 - ⑨特にない ⑩その他
16. ドラマを演じる活動で大変だったことは何か (順に3つ)
- ①自然な発音・イントネーションで話すこと ②自然な表情やしぐさをすること
 - ③セリフを覚えること ④役割になりきること
 - ⑤今まで勉強してきた日本語の表現と実際の会話に現れる表現とのギャップ
 - ⑥同じグループのメンバーと協力して練習すること
 - ⑦こうした学習スタイルになじめなかったこと ⑧特にない ⑨その他
17. みんなの前で撮影した映像を見ることや、実際に演技することをどう思ったか (1つ)
- ①自分の演技をチェックしてもらえるので良かった
 - ②練習の成果をみんなに見てもらって良かった
 - ③恥ずかしがっていてやだった ④特にどうとも思わなかった ⑤その他
18. 今後機会があったらドラマを演じる活動に積極的に参加したいか ①はい ②いいえ
(18.に「②いいえ」と答えた人)
19. 積極的に参加したくないと思う理由は何か
- ①演技すること自体が恥ずかしいから ②日本語が上手でないため恥ずかしいから
 - ③演技することがバカらしいから ④グループで活動するのがいやだから ⑤その他

20. ドラマのセリフはどうやって覚えたか
 ①セリフをただ読んで覚えた ②セリフを書きながら覚えた
 ③モデルのセリフを聴きながら覚えた ④その他
21. セリフを覚えてから、主にどのように音声練習をしたか
 ①ただ声に出して練習した ②リピーティング ③シャドーイング ④その他
22. 質問22の練習法は、音声の練習として効果があったと思うか
 ①はい ②いいえ ③よくわからない
23. 演技の練習中に自分や友だちの演技をモニターできたか
 ①はい ②少しは注意を向けられた ③いいえ
- (モニターシートを使った人)**
24. モニターシートは役に立ったと思うか ①はい ②いいえ ③わからない
25. モニターシートは負担になったか ①はい ②いいえ ③特に意識しなかった

3. 調査結果と考察

この章では、テレビドラマを用いるシナリオ・ドラマ活動に参加した学習者に対して行った調査から得られた結果を考察する¹⁰⁾。まず、この活動に対し学習者がどのような意識を持ったかについて述べたあと、この活動の反復がどのような効果を生むか、さらにフィードバックに対する学習者の意識について触れてみたい。

3.1 ドラマを演じる活動に対する学習者の意識

3.1.1 活動への感想

今回のドラマを演じる活動はどうだったか訊ねたところ(設問12)、活動に参加した学習者全体の36%が「とてもおもしろかった」、54%が「おもしろかった」と回答した。参加した学習者の9割が、活動に対して肯定的な感想を持ったと言える。

10) 紙数の都合で本稿では主に全体的な考察結果を述べる。クラスごとに回答傾向が異なる部分、学習者の属性により回答傾向が異なる部分についての考察、すなわち本稿で得られた結果にはどのような要因が背景として考えられるかについては、一部を除き別稿で述べる。

3.1.2 おもしろいと感じた点

ドラマを演じる活動がおもしろいとする学習者が多かったが、具体的などのような点がおもしろかったのかを設問13で訊ねた。ここでは最もそうだと思うものから順に3つ回答を求めた(設問13)。

表4：設問13「おもしろかった点」¹¹⁾

おもしろかった点	回答順位 1位	回答順位 1-3位合計
役になりきって演じること	33(17%)	69(12%)
他の人の演技を見ること	16(8%)	68(12%)
実際に日本人が話す会話表現が使えたこと	58(30%)	119(21%)
チームのメンバーと協力して練習できたこと	27(14%)	77(13%)
ドラマを見たり聞きながら音声練習したこと	23(12%)	94(16%)
(少数回答・省略)		
総回答数	191(100%)	573(100%)

回答順位1位に挙げた回答のうち最も多かったのが「実際に日本人が話す会話表現が使えたこと」で30%、次に「役になりきって演じること」が17%と続いた。回答順位1位から3位までの回答合計でも、「実際に日本人が話す会話表現が使えたこと」が21%で最も多く、次いで「ドラマを見たり聞きながら、それを追って音声練習したこと」16%だった。演じる活動において、実際の会話表現を使うことにおもしろさを感じていることが分かる。

3.1.3 いやだと感じた点

ドラマを演じる活動でいやだと思った点(設問14)に関しても順に3つ回答を求めた。回答順位1位のみの回答も、回答順位1位から3位までの回答合計も次のように回答分布に同じ傾向を示した。まず「特がない」が回答順位1位の回答で24%、回答順位1位から3位までの回答合計でも17%と最も多かった。次に「セリフを覚えること」と「授業以外の練習に時間がかかって負担が大きいこと」という回答が続く。一方、活動自体にかかわ

11) 表の項目は、設問紙の選択肢の提示順に並べた。また、回答が10%に満たなかった項目は、紙数の都合上省略した。以下の表も同じ。

る「役になりきって演じること」「音声練習」などの項目への回答は10%に満たなかった。

3.1.4 役立った点

ドラマを演じる活動で役立った点を訊ねたところ(設問15)、回答順位1位の回答では「実際の会話で使われる表現や語彙が勉強できた」が39%で一番多く、「アクセントやイントネーションなど音声的なことに自信がついた」が19%、「セリフを覚えて演技したので、普通に覚えるより頭の中に残った」が18%と続く。回答順位1位から3位までの回答の合計でも同じく「実際の会話で使われる表現や語彙が勉強できた」という回答が23%で最も多かった。このことから、実際に使われる表現や語彙の習得に役立つ活動と捉える学習者が多いということが分かる。

表5：設問15「役立った点」

役立った点	回答順位 1位	回答順位 1-3位合計
音声的なことに自信がついた	37(19%)	82(14%)
実際の会話で使われる表現や語彙が勉強できた	74(39%)	133(23%)
それぞれの状況にあった表現が勉強できた	8(4%)	69(12%)
普通に覚えるより頭の中に残った (少数回答・省略)	35(18%)	84(15%)
総回答数	191(100%)	573(100%)

役立った点(設問15)で最も多かった「実際の会話で使われる表現や語彙が勉強できた」を回答順位1位で選択した学習者の中では、コミュニケーションの問題点(設問9)として「使用できる語彙の量」を挙げている者が多かった(30%)。これは、使用できる語彙の量の少なさが問題だと考えている学習者に、その問題解決の手段としてこの活動が有益だという意識をもたせることができたと言えるだろう。

表6：設問9の結果について「表現・語彙」の選択者と全体の比較 回答順位1位のみ

コミュニケーションの問題点	表現・語彙	全体
（文法的に）正確な表現で話すこと	14(19%)	32(17%)
その状況に適切な表現で自然に話すこと	14(19%)	46(24%)
発音、アクセントなどの音声的な問題	10(14%)	26(14%)
使用できる語彙の量	22(30%)	45(24%)
日本語で話す際の恥ずかしさ、自信のなさ、不安	4(5%)	19(10%)
（少数回答・省略）		
総回答数	74(100%)	191(100%)

3.1.5 大変だった点

ドラマを演じる活動で大変だった点(設問16)では、回答順位1位の回答を見ると「自然な発音、イントネーションで話すこと」が40%で最も多かった。回答順位1位から3位までの合計で見ると、「自然なしぐさをする」というノンバーバル要素に関する回答の割合も多い。

大変だった点で「自然な発音、イントネーションで話すこと」の回答が目立ったが、一方、ドラマを演じる活動でいやだと感じた点(3.1.3 設問14)においては「ドラマを見たり聞きながら、それを追って音声練習すること」という、音声練習に関する選択肢を選んだ学習者はほとんどいなかった¹²⁾。よって、音声練習は大変ではあるが、その練習をいやだとは思っていないことがうかがえる。

表7：設問16「大変だった点」

大変だった点	回答順位 1位	回答順位 1-3位合計
自然な発音、イントネーションで話すこと	76(40%)	142(25%)
自然な表情やしぐさをする	26(14%)	121(21%)
セリフを覚えること	29(15%)	50(9%)
役割になりきる	25(13%)	79(14%)
こうした学習スタイルになじめなかったこと	15(8%)	59(10%)
（少数回答・省略）		
総回答数	191(100%)	578(100%)

12) 「ドラマを演じる活動でいやだと感じた点」で「音声練習」と回答した学習者は、回答順位1のみで1%、回答順位3位までの合計で3%だった。

3.1.6 ドラマを演じる活動への参加意欲

今後機会があればこうしたドラマを演じる活動にまた参加したいか訊ねたところ(設問18)、「また参加したい」という参加に積極的な学習者が78%、「参加したくない」という消極的な学習者は20%だった。全体の2割にあたる「参加したくない」と回答した学習者に理由を訊ねたが、「演技すること自体がはずかしい」という回答が53%だった。

ここで、この活動に参加したくないという学習者と参加したいという学習者の傾向を比較してみたい。この活動のいやな点(設問14)について、参加したくないとする学習者の回答を見ると「役になりきって演じること」と「表情や体の動きなどのしぐさをすること」という回答がともに21%と多かった。一方、参加に積極的な学習者では、いやな点は「特にない」と答えた者が30%と多く、次に「セリフ覚え」や「時間的な負担」が続くが、「演じること」を挙げた回答の割合は低かった。このことから、役になりきることを負担と感ずるかどうかが、参加意欲の有無に大きく関わっていると見えそうだ。

表8：設問14について消極的な者と積極的な者の比較 回答順位1位のみ¹³⁾

嫌な点	参加意欲	
	参加したくない	参加したい
役になりきって演じること	8(21%)	11(7%)
セリフを覚えること	8(16%)	28(19%)
表情や体の動きなどのしぐさをすること	8(21%)	19(13%)
チームのメンバーの日本語レベルに差があること	5(19%)	15(10%)
授業以外の練習時間の負担が大きいこと	4(11%)	28(19%)
特にない	2(5%)	44(30%)
(少数回答・省略)		
総回答数	38(100%)	149(100%)

ちなみに、「参加したくない」という学習者の属性をみると、自分の性格を外向的だと思う学習者が少なく、そのぶん内向的だと思う学習者が多く

13) この表には、参加意欲について無回答(4名)の欄を設けていない。したがって本来の回答総数は「参加したくない」38名と「参加したい」149名に無回答の4名を加えた191名になる。

なっている(設問3)。また、自分がふだん韓国語(母国語)でよく話すほうかという設問に対して(設問4)、全体の回答結果の割合と比較すると、参加したくない学習者のほうは「よく話す」という回答が低く、「あまり話さない」という回答が多くなる。やはり、学習者の普段の性格が、自分を表出する演技活動にはある程度マイナスに働くとと言える。そのため、このような学習者には精神面でのフォローが必要になるだろう。

表9：設問3・4「学習者の属性」について、参加したくない者と全体の比較

	参加意欲	参加したくない	全体		参加意欲	参加したくない	全体
性格				よく話すか			
外交的		7(18%)	47(25%)	よく話す		13(34%)	83(43%)
内向的		13(34%)	53(28%)	あまり話さない		10(26%)	23(15%)
普通		18(47%)	91(48%)	普通		15(39%)	78(41%)
その他・無回答・不適切		0(0%)	0(0%)	その他・無回答・不適切		0(0%)	1(1%)
総回答数		38(100%)	191(100%)	総回答数		38(100%)	191(100%)

3.1.7 演じる上での精神的側面

自分たちの演技を他の学習者に見られることについてどう思うかという設問に対して、「自分の演技をチェックしてもらえるのでよかった」「練習の成果をみんなに見てもらえてよかった」「恥ずかしくていやだった」「特にどうとも思わなかった」という4つの選択肢を設けた(設問17)。その結果、回答は各項目ほぼ同率で20%台になったのだが、しかしクラス毎に見ると、表10のように、見られることに肯定的なクラス、否定的なクラス、中立的なクラスに分かれた。このように、クラスごとに回答の傾向が変わる部分については、教師の授業の進め方、クラス構成員の属性、教室環境などいくつかの原因が考えられるが、本論では紙数の都合で扱うことができない。この点については各教師から得たアンケートを参考に別稿で考察結果を述べたいと考える。

表10：設問17「演技を見られること」についての各クラスの傾向¹⁴⁾

見られること	クラス											
	②	③	④	⑦	⑧	①	⑤	⑥	⑨	⑩	⑪	⑫
自分の演技を褒めてもらえるのでよかった	47%	45%	21%	21%	18%	9%	10%	11%	11%	10%	15%	0%
練習の結果をみんなに見てもらってよかった	20%	31%	47%	37%	67%	13%	10%	11%	22%	30%	5%	25%
恥ずかしくなくてよかった	20%	7%	21%	0%	7%	45%	40%	33%	17%	20%	25%	25%
特にどうとも思わなかった	0%	14%	0%	37%	7%	35%	30%	33%	44%	40%	50%	50%
その他・無回答・不透明	13%	3%	10%	5%	7%	0%	10%	11%	6%	0%	5%	0%
総回答数	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	積極的					消極的			どちらでもない			

3.1.8 音声練習について

ドラマのセリフを覚える際、リピーティングやシンクロリーディングを併用しつつプロソディ・シャドーイングで練習することを授業試案で提示し、学習者にもそれを説明した。そこで、実際にどのような音声練習の方法を用いたか学習者に訊ねたところ、主にシャドーイングを用いたとする学習者は28%、主にリピーティングで練習した学習者は53%で、シャドーイングよりリピーティングを多く用いているようだった。また、主にモデル音声を使わずにただ声に出して練習した学習者も15%と比較的多く見られた(設問21)。

表11：設問21・22「音声練習の方法」と「その効果」

方法	効果	効果あり	効果なし	わからない
声に出して	29(100%)	17 (59%)	2 (7%)	10 (34%)
リピーティング	101(100%)	88 (87%)	0 (0%)	13 (13%)
シャドーイング	54(100%)	50 (93%)	1 (2%)	3 (6%)
その他	4(100%)	3(75%)	0 (0%)	1(25%)
無回答	3			
総回答数	191			

上の表は、それぞれの音声練習の方法を用いた学習者が、その効果をどのようにとらえたかを表したものである。音声練習にリピーティングやシャドーイングを用いた学習者のほぼ9割は、その練習方法に効果を認めている。特にシャドーイングを用いた者の比率は高い。一方、ただ声に出

14) クラス番号は(表2 調査対象者)に対応。

して練習した学習者は、「音声練習の効果がわからない」という回答が34%と多かった。

3.2 ドラマを演じる活動を行う回数による効果の比較

今回調査した12クラスの対象者のうち、4クラスの学習者は演技の一連の流れ(クール)を複数回行った¹⁵⁾。この4クラス86名の学習者の回答と、演技を1クールのみ行った8クラス105名の回答とを比較したところ、複数クール行ったクラスでは以下の4つの傾向が見られた。

1) 活動への参加意欲が増す

演技を複数クール行った4クラスでは、「機会があればまたこうした活動に参加したい」という学習者が86%見られたが、一方演技を1クールのみ行ったクラスでは71%だった(設問18)。また、演技の感想で「とてもおもしろかった」という回答が、複数クール行ったクラスでは45%だったのに対し、1クールのクラスでは29%と、ここでも差が見られた(設問12)。このように、演技を1クール行ったクラスに比べ、複数クールのクラスでは活動への参加に肯定的・能動的な回答多く、活動への参加意欲が強くなっている。

表12：設問12の回答結果について演技回数別に比較 回答順位1位のみ

演技の感想	演技のクール数	全体	演技複数クール	演技1クール
とてもおもしろかった		69(36%)	39(45%)	30(29%)
おもしろかった		103(54%)	44(51%)	59(56%)
あまりおもしろくなかった		10(5%)	1(1%)	9(9%)
おもしろくなかった		4(2%)	1(1%)	3(3%)
その他・無回答・不適切		53(28%)	1(1%)	4(4%)
全体		191(100%)	86(100%)	105(100%)

2) 演技を見られることに肯定的になる

演技を複数クール行ったクラスでは、演技を見られることに対して「自

15) 4クラスのうち2クラスは3クール、他の2クラスは2クール行った。

分の演技をチェックしてもらえるのでよかった」が30%、「練習の成果をみんなに見てもらってよかった」が28%と続く。演技1クールのクラスでは、36%が「特にどうとも思わなかった」と答えている。演技を複数クール行った学習者の方が、他人に自分の演技を見られることについて肯定的だと言える。

表13：設問17の回答結果について演技回数別に比較 回答順位1位のみ

見られること	演技のクール数	全体	演技複数クール	演技1クール
自分の演技をチェックしてもらえるのでよかった		40(21%)	26(30%)	14(18%)
練習の成果をみんなに見てもらってよかった		52(27%)	24(28%)	28(27%)
恥ずかしがっていてよかった		38(20%)	19(22%)	19(18%)
特にどうとも思わなかった		50(26%)	12(14%)	38(36%)
その他・無回答・不適切		11(6%)	5(6%)	8(6%)
全体		191(100%)	86(100%)	105(100%)

3) 音声への意識が高まる

役立った点として「音声的なことに自信がついた」と答えた学習者が、演技を複数クール行ったクラスで24%、1クールのクラスでは15%だった。また、大変だったこととして「自然な発音イントネーションで話すこと」を、複数クールのクラスでは50%もの学習者が、1クールのクラスでは31%の学習者が挙げていた。すなわち、演技回数の多い方が音声練習を大変だと感じるが、同時にその効果を実感する結果になっていると言える。演技回数の多い方が必然的に音声練習の機会も多く、それだけ音声に対して意識が高まったのだろう。

表14：設問15の回答結果について演技回数別に比較 回答順位1位のみ

役立った点	演技のクール数	全体	演技複数クール	演技1クール
音声的なことに自信がついた		37(19%)	21(24%)	16(15%)
実際会話で使われる表現語彙が勉強できた		74(39%)	30(35%)	44(42%)
普通に覚えるより頭の中に残った		35(18%)	20(23%)	15(14%)
(少数回答・省略)				
全体		191(100%)	86(100%)	105(100%)

表15：設問16の回答結果について演技回数別に比較 回答順位1位のみ

大変だった点	演技のクール数	全体	演技複数クール	演技1クール
自然な発音イントネーションで話すこと		76(40%)	48(50%)	33(31%)
自然な表情やしぐさをする		26(14%)	12(14%)	14(13%)
セリフを覚えること		29(15%)	14(18%)	15(14%)
役劇になりきる		25(13%)	9(10%)	16(15%)
(少数回答・省略)				
総回答数		191(100%)	86(100%)	105(100%)

4) クラスの仲間との良好な協同学習

おもしろかったこととして「グループのメンバーと協力して練習できたこと」という回答の割合が、演技を複数クール行ったクラスでは22%と高かった。とりわけ、他学科の学生が多い一般教養クラスではこの回答が73%で、他の日本語専攻クラスの回答の割合よりも際立って高かった。この活動の反復は、クラスの一体感や学びあいの雰囲気を作るのに効果的だと思われる。

表16：設問13の回答結果について演技回数別に比較 回答順位1位のみ

おもしろい点	演技のクール数	全体	演技複数クール	演技1クール
役になりきって演じること		33(17%)	14(16%)	19(18%)
実際に日本人が話す会話表現が使えたこと		58(30%)	23(27%)	35(33%)
チームのメンバーと協力して練習できたこと		27(14%)	19(22%)	8(8%)
ドラマを見たり聞きながら音声練習したこと		23(12%)	6(7%)	17(16%)
(少数回答・省略)				
全体		191(100%)	86(100%)	105(100%)

3.3 フィードバックに対する学習者の意識

学習活動の効果を高めるために、モニターとフィードバックは不可欠だ。モニターとフィードバックの手法として、今回の活動の授業試案には教師が各グループを回りながら直接行うもの、撮影した演技を教師と学習者が見ながら行うもの、モニターシートを用いて行うものを取り入れた。本論でこれらそれぞれに言及する紙数の余裕はないが、一つ、モニターシートに対する学習者の意識について触れておきたい。

使用したモニターシートは津崎・山本(2009b)で提示したもので、授業のあとに学習者が自分やクラスメイトの活動を振り返るためのコメントシー

トだ。このモニターシートを毎時間使ったのは4クラス2名の教師で¹⁶⁾、学習者の65%が「役に立った」と回答したが、教師のモニターシートの取り扱いにより学習者の反応に違いが見られた(設問24)。

教師Aは、授業後に回収したモニターシートをフィードバックの参考にしたが、返却はしていない。この教師のクラスの学習者は、モニターシートが「役に立った」と「わからない」という回答が各40%程度だった。一方、教師Bは口頭のフィードバックだけでなく、回収したモニターシートに教師のコメント、賞賛、励ましの言葉などを書き加えて返却するという形のフィードバックも行った。こちらの教師のクラスでは、学習者の73%が「役に立った」と回答している。

表：17 設問24「モニターシートの使用」について

モニターシートは役に立ったか	教師 A	教師 B
はい	10(43%)	46(73%)
いいえ	4(17%)	1(2%)
わからない	9(39%)	11(17%)
無回答	0(0%)	5(8%)
全体	23(100%)	63(100%)

モニターシートには、活動を通して学習者が自分自身、あるいは他の学習者に対して感じたことを質問項目に書き入れてもらった。今回モニターシートを使用したのは、学習者に自分自身が行っていること、他の学習者が行っていることに意識を向けてもらうという目的もあったが、「○○さんの発音がいいので、私もがんばらなければと思った」というような教師が外から見ているだけでは分からない学習者の心理的側面もフォローしようという意図があった¹⁷⁾。

そういう意味で、教師Bがモニターシートに励ましのことばなどを書き

16) このモニターシートを使ったクラスは他にもあるが、毎時間使ったのは筆者2名の4クラスのみだった。

17) モニターシートの質問項目は、こうした心理的要素が反映されるようにも留意した。質問項目については津崎・山本(2009b)を参照のこと。

入れて返却したことは、学習者一人一人に、教師から心理的にもフォローされているという気持ちを起こさせ、またフィードバックが自分に向けられているとはっきり認識できたと思われる。そのため、モニターシート使用への意識が高まり、「モニターシートは役に立った」という回答が高率を占めたと考えられる。それに対し教師Aのモニターシートの取り扱いでは、シートに書いたことが直接自分にフィードバックされているという意識を学習者に持たせにくく、また心理的側面を十分にフォローするのが難しかったと言えるのではないだろうか。

4. おわりに

調査結果の考察から得られる、この活動が学習者に与える効果というものを整理し、今後の予定を述べたい。

まず、この活動がおもしろかったと回答した学習者が9割いたことから、提示した授業試案により学習者の興味を惹き、学習上の好奇心をかきたてることができたと考える。

具体的な効果として、実際の会話で使われる表現や語彙の勉強に役立つという回答が多く、セリフが頭の中に残ったという声も見られた。ドラマを用いた演技活動で、あるコミュニケーションの状況に適切な(自然な)表現や語彙の習得が行われ、学習者が問題としている「(文法的に)正確に話すこと」「なめらかに(自然に)話すこと」に対応することができたと言えよう。換言すると、語彙・表現の拡充やノンバーバルを含めた待遇コミュニケーション教育に効果がある活動だと言ってもいいだろう。

音声的な問題についてだが、音声練習にリピーティングやシャドーイングを用いることで音声への意識が高まると言える。音声練習を大変だと答える学習者は多いが、練習自体を否定的には捉えておらず、アクセントやイントネーションなどプロソディ的なことに自信がついたという声が多かった。このことから、この活動は多くの学習者がコミュニケーションの

場で克服したいと考えている「発音、プロソディ等の音声的問題」にも効果があると言えるだろう。

精神的な側面をみると、「役になりきって演じること」や「同じチームのメンバーと協力して練習できたこと」などにおもしろさを感じる声が多かった。前者に関しては、演技をすることが、日本語でコミュニケーションする自信にもつながると思われる。後者については、協同学習という側面から見て学習者同士のラポール形成に有効だと言えよう。こうしたことが、外国語を学ぶ学習者が持つ「外国語で話す際の精神的不安定さ」の緩和につながればと考える。一方、恥ずかしさなど演じることへの精神的抵抗の有無は活動への意欲に影響している。学習者の性格も踏まえ、フィードバックなどによるフォローが必要だと思われる。今後、より適切なモニター、フィードバックの方法を探りたい。

また、同じ試案で行った授業でもクラスによって結果に違いが見られた。3.1.7でも少し述べたが、これについては、その背景となるいくつかの要因が考えられる。この点を明らかにしておくことは、この活動を効果的に運用する上で重要なことと判断する。そのため次稿で、教師に対して行ったアンケートの回答を参照しつつ、授業の具体的な進め方、クラス構成員の属性、活動が行われた環境等の条件とその結果にどのような関係があるのかを比較対照し、その結果を述べたいと考える。

<参考文献>

- 津崎浩一(2001)「ドラマシナリオを利用する学習活動に参加した日本語学習者の意識」『日本語学研究』3号 pp.139-153 韓国日本語学会
- 津崎浩一, 山本智子(2009a)「テレビドラマを用いた授業のための予備的調査とその考察」『日語日文学研究』68集1 pp.221-238 韓国日語日文学会
- 津崎浩一, 山本智子(2009b)「テレビドラマを用いた授業の可能性と授業デザインへの提言」『日本研究』26集 pp.127-145 中央大学校日本研究所
- 早矢仕智子(2005)「海外における日本語学習者のためのテレビドラマ教材による日本語教育」『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』6号 pp.125-135 宮城学

院女子大学大学院

森山新(2004)「日本文化理解教育の具体的方策－映像・交流・webを中心に」『日語
文学研究』19号 pp.33-46 日語文学会

山本千津子(2005)「ロールプレイを用いた口頭表現教育に関する一考察」『講座日本
語教育』41号 pp.64-89 早大日本語研究教育センター

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

TV 드라마를 이용한 시나리오·드라마 활동에 대해서

— 활동에 참가한 학습자의 의식을 중심으로 —

한국에 있는 대학에서 공부하는 일본어 학습자를 대상으로 실시한 예비조사를 통해서, 학습자가 안고 있는 커뮤니케이션상의 문제점을 해결하기 위해, TV 드라마를 이용한 시나리오 드라마 활동을 기본 축으로 하는 수업시안을 디자인했다. 이 시안에 따라, 7개 대학 총 12개 반에서 상기수업을 실시하고, 활동에 참가한 191명의 학습자에게 의식조사를 실시했다.

본문에서는 이 조사결과를 고찰했는데, 그 결과, 많은 학습자가 상기 활동에 긍정적인 참가의욕을 가지며, 또한 활동을 통하여 학습자가 아래와 같은 효과를 인정하고 있다는 것을 알았다.

1. 실제 회화에서 사용되는 어휘·표현의 습득
2. 비언어적 요소를 포함한 대우 커뮤니케이션 교육
3. 발음, 프로소디(prosody) 등, 음성적 문제에 대한 의식 향상
4. 협동학습(協同学習)이라는 측면에서 학습자간 라포르(rapport) 형성

教師間でビリーフの共有を行った教室活動

ー ベトナムにおけるノンネイティブ教師と
ネイティブ教師によるチームティーチングでの実践 ー

高橋 雅子*

s.masako@suou.waseda.jp

< 目 次 >

>

- | | |
|-----------------|---------|
| 1. 先行研究 | 4. 実践報告 |
| 2. チームティーチングの調査 | 5. まとめ |
| 3. 実践の目的とその方法 | |

Key Words : チームティーチング(team teaching), ノンネイティブ教師(non-native teachers),

ネイティブ教師(native teachers), ビリーフの共有(shared belief)

1. 先行研究

1.1 チームティーチングの先行研究

日本国外の日本語教育機関におけるノンネイティブ教師の数は31,645人であり、日本国外の日本語教師総数の70%にあたる(国際交流基金・2006)。そのような状況で、日本国外ではノンネイティブ教師とネイティブ教師によるチームティーチングで日本語教育を行っている機関が多く存在する。

* 早稲田大学大学院 日本語教育研究科 博士課程

国際交流基金の派遣プログラムでは、ネイティブ教師が日本語教育専門家として世界各地に派遣され、チームティーチングをとおしてノンネイティブ教師に養成・教育・成長を指導していく報告がされている(百瀬1996、井上1999、太田1999)。なかでも百瀬(1996)はチームティーチングにおけるノンネイティブ教師とネイティブ教師の協同と役割分担の意義について述べている。

ノンネイティブ教師とネイティブ教師の役割に関して、グエン(2000)は、日本国外のノンネイティブ教師が日本での研修の機会を得ることが非常に少ないことに触れ、その対策として「それぞれの長所を發揮できる部分を分担し、密接に協力して、より高い効果を得られるよう」ノンネイティブ教師が母語で文法説明、ネイティブ教師が会話練習と役割分担をしたチームティーチングに取り組んでいることを報告している。

チームティーチングに関する先行研究の多くは、ノンネイティブ教師とネイティブ教師がチームティーチングを行うことによって、それぞれの特性や長所を生かした効果的な教室活動ができると述べているものがほとんどである。これは、ノンネイティブ教師は学習者の母語に精通しているから「文法を教える人」、ネイティブ教師は目標言語(日本語)の運用に精通しているから「会話を教える人」という固定概念が従来の研究にあるからではないだろうか。しかし、技術面に注目するあまり、個々の教師が持っているビリーフについて考えること、チームを組む相手とビリーフを共有することについては研究がされていない。

1.2 ビリーフの定義と先行研究

ビリーフに関しては、先行研究が数多くなされている。ビリーフの定義について、久保田(2005)は「研究の中でビリーフに関する定義はいまだ統一されていないが、概ね、ビリーフとは、言語学習はこうあるべきだ、あるいは、このように学習、教授すれば効率的に習得できるといった言語学習や言語教授についての信念や考え方を指すものとして理解されている」と述べている。

また、ビリーフを調査する方法として、先行研究では質問用紙(チェックシート)を用いることが多い。日本語教育におけるビリーフの先行研究において、橋本(1993)はHorwitzによるBALLI(Beliefs About Language Learning Inventories)の35項目に27項目を付け加えた質問紙を用いた。齋藤(1996)はBALLIに倣い独自に30の質問項目を作成した。久保田(2005)はHorwitzのBALLIおよびCotterallを参考にして独自に72項目からなる質問紙を作成した。先行研究では質問項目はBALLIを改定したものや調査者が独自に作成したものが多いが、項目の選定基準や理論については詳しく触れられていない。

これらの調査の目的は、教師または学習者の学習スタイルを把握するため、あるいは国・機関における教師の傾向を見るためなどである。そのため、質問内容は多岐にわたり、質問項目数が多く、調査対象は多数で1回または2回程度の調査となっているものが多い。

その一方で、橋本(1993)は、ビリーフ調査を定期的に行うことによって、各自のビリーフの意識化・変化の把握ができることを示唆した。

2. チームティーチングの調査

2.1 チームティーチングの定義

先行研究において、チームティーチングの定義や形態は一様ではない。チームティーチングの定義について、長江(1998)は「複数の教師による単一あるいは複数学級の生徒を全体あるいはグループ、さらに個別で教え、指導に当たること」とし、百瀬(1996)は「複数の教師がチームを組んで協同しながら、それぞれの特性を生かして共通の目標を達成するために実施する授業の形態」とした。

本論では「複数の教師がある一貫性を持ってひとつのクラスを運営すること」とし、必ずしも二人の教師が同時に教室に入ることを指すもの

とはしないこととする。

2.2 チームティーチングの形態

日本国外におけるチームティーチングの形態を把握するために、2003年3月にベトナムで調査を行った。チームティーチングを行っている日本語教育機関6カ所(国立大学の日本語主専攻クラス、民間の日本語学校、NGOの日本語クラス)17クラスの参与観察を行った。それをもとにチームティーチングの形態を大きく6つのタイプ¹⁾に分けた。

タイプ1：ノンネイティブ教師同士のチームティーチング。教室に教師が一人であり、教室活動のすべて(導入、練習、会話、作文など)を行う。

タイプ2：ネイティブ教師同士のチームティーチング。教室に教師が一人であり、教室活動のすべて(導入、練習、会話、作文など)を行う。

タイプ3：ノンネイティブ教師とネイティブ教師のチームティーチング。教室に教師が一人で入る。ノンネイティブ教師が文法の導入を担当し、ネイティブ教師が会話を担当するなど技能別に役割分担をしている。

タイプ4：ノンネイティブ教師とネイティブ教師のチームティーチング。曜日・時間などで担当を分担している。教室に教師が一人であり教室活動のすべて(導入、練習、会話、作文など)を行う。

タイプ5：ノンネイティブ教師の授業にネイティブ教師がアシスタントとして入る。

タイプ6：ネイティブ教師の授業にノンネイティブ教師がアシスタントとして入る。

2.3 チームティーチングの調査

チームティーチングによるクラス運営では何が問題になっているのかを見るために、2003年8月にベトナムで調査を行った。調査協力クラスはチームティーチングで日本語教育を行っている民間の日本語学校の2つのク

1) 17クラスのタイプの内訳は、タイプ1・2・5・6が各1クラス、タイプ3が7クラス、タイプ3が6クラスである。

ラス、AクラスとBクラスである。

Aクラスは2.2のタイプ3にあたり、ノンネイティブ教師が文法を担当、ネイティブ教師が会話を担当と技能別に役割分担をしている。Bクラスは2.2のタイプ4にあたり、ノンネイティブ教師が月・水・金、ネイティブ教師が火・木と曜日ごとに役割分担をしている。

両クラスとも教師は全員20代の女性で、日本語教師歴は1年前後である。両クラスともノンネイティブ教師は来日経験がなく、またネイティブ教師は日本で日本語教師養成講座を修了した後、すぐにベトナムで日本語教育に携わっている。

クラスのレベルは両クラスとも初級後半である。学習者は全員ベトナム国籍で、大学生、社会人、求職中の者、日本人の配偶者など様々である。Aクラスの登録学習者数は25名、Bクラスの登録学習者数は20名である。

各クラス2週間ずつの授業の参与観察を行った。参与観察の際にはフィールドノートを作成し、同時にビデオカメラによる録画、テープレコーダーによる録音を行った。また、授業終了後の教師へのフォローアップ・インタビュー²⁾を行った。インタビューは半構造化インタビューの形式で行い、筆者と1対1で行った。インタビューは本日の授業について質問した。その内容はテープレコーダーに録音し、文字化した。さらに、学習者アンケート³⁾を各クラス2回ずつ行った。アンケート項目は、学習内容、理解度、満足度などについてである。

2.4 チームティーチングの問題点

調査を行ったAクラス、Bクラスの教師は、与えられた役割をこなし、スケジュールのとおり授業を進めているので、うまく授業運営ができていように見える。しかし、役割が決まっているために、自分の担当している部分のみに目が向き、チームを組んでいる相手教師には干渉をせず、

2) ネイティブ教師は日本語が上級レベルなので、フォローアップ・インタビューは基本的に日本語で行った。日本語での表現が難しい場合はベトナム語・英語を使用した。

3) 学習者アンケートはすべてベトナム語で表記し、回答もベトナム語で記入してもらった。

授業内容や授業方針にずれが出てしまっていた。

技能別に役割分担を行っているAクラスでは、ノンネイティブ教師は限られた授業時間内で教えなければならない学習項目が多く、文法や漢字の導入、ドリル練習で自身の担当時間が終わってしまう。そのような状況の中、ノンネイティブ教師は相手のネイティブ教師には導入した文法を使って会話練習をたくさんしてほしいと望んでいた。しかし、ネイティブ教師は「生の日本人である自分の存在価値」を意識し、学習者に自然な日本語を教えることを心がけ、ゲームや歌を取り入れた楽しい教室活動を行っていた。その結果、教室活動は教科書の文法や練習から離れたものとなっていた。学習者は、ノンネイティブ教師の授業は退屈でつまらないと感じ、ネイティブ教師の授業は楽しいが何を学んだのかよく分からないと感じることがあった。ノンネイティブ教師は、学習者が教科書の文法を運用できないのはネイティブ教師の教え方に問題があるのではないかと感じ、一方、ネイティブ教師はノンネイティブ教師の教科書に縛られている教え方に疑問を感じていた。しかし、Aクラスの教師は、自分はなぜこのような授業を行うのか意識的に考えたことはなく、またお互いに意見を口に出すことはないままであった。これは秋田(1992)でも、「信念(belief)は授業行動において暗黙に機能しており、教師自身も自分の信念を自覚していない場合が多い」と指摘している。

曜日ごとに教室に入るBクラスでは、教師は教育機関の方針に縛られていた。学習者が話したいことや使いたい表現があっても、教師は「この部分は自分の担当ではない」「このレベルではまだ早すぎる」「やるべきことが多くて時間が足りない」などの理由で、それらを柔軟に授業に取り入れることができなかった。しかし、機関の方針を重要視し、Bクラスの教師も自分の考えを口に出すことはしなかった。

3 実践の目的とその方法

3.1 実践の目的

チームティーチングで、スケジュールとおりに授業を進め、報告書で引き継ぎをし、会議で学習者の報告をしても、教師が自分のビリーフを意識化し、相手と共有しなければ、バラバラの教室活動になってしまうことが調査で見えた。

そこで、調査で見えた問題点を改善し、チームティーチングでのより良い教室活動を目指すべく、ビリーフの意識化と共有化を行いながら教室活動の実践をした。

3.2 ビリーフ・チェックシートと回答用紙の作成

チームティーチングにおいて相手とのビリーフの共有は大切であると分かっているにもかかわらず、日々の業務に追われている教師にとって、チームを組む相手と話す時間はなかなか取れない。また、話し合いをすると言っても、ポイントを絞って話さないとビリーフの共有にはたどり着かない。そこでチームティーチングを行っている教師がビリーフを意識化・共有化するためにチェックシートを作成した。

チェックシートの作成にあたって、2.2の調査の際に、チームティーチングを行っている教師25名⁴⁾へのインタビューを行った。インタビューは、現在行っているチームティーチングの長所・短所などについて半構造化インタビュー⁵⁾の形式をとり、授業の参与観察後に筆者と1対1で行った。

インタビューの内容は全て文字化し、それを意味のある単位で区切り、コード化⁶⁾した。

4) 内訳はノンネイティブ教師12名、ネイティブ教師13名である。

5) ウヴェ(2002)を参考にした。調査協力者に自由に語ってもらう形式だが、同時に調査者が予め設定した項目についても聞き取るインタビュー方法。

6) データや現象を抽象的な形で表現するために名付けをする作業。ウヴェ(2002)より。

例：2.2チームティーチングの形態のタイプ3のノンネイティブ教師のインタビュー区切り：/、コード化：()

ベトナム人の先生が(ネイティブ教師からみたノンネイティブ教師) /

授業中にベトナム語ばかりを使っていると(ノンネイティブ教師の媒介語の多用) /

学生が(ネイティブ教師からみた学習者) / 直接法や(ネイティブ教師の媒介語の運用力)(日本の教師養成講座で学んだこと) /

日本人の授業を(ネイティブ教師の会話の授業) /

拒否してしまうんですね(媒介語の使用に対する否定的感情)

次に似たような特徴を持つコードをカテゴリーに分け抽象的な名付けをした。カテゴリーは次の37個が得られた。

「ネイティブ教師の存在意義」「ネイティブ教師による正確な発音」「媒介語の利便性」「媒介語の弊害」「授業における楽しさ」「打ち合わせの時間の確保」「相手教師の性格」「自分の性格」

カテゴリーに当てはまるインタビューの部分からビリーフ・チェックシートの質問項目を作成した。質問項目は77個ができたが、チームティーチングを行っている教師が日々の業務の合間に短時間で使用できるように、できるだけ数を少なくすることとした。2.3の調査で授業の参与観察、教師へのフォローアップ・インタビュー、学習者アンケートを行ったが、その中で出てきた意見や問題点を参考に19項目に絞った。質問項目は以下のとおりである。

- 1：会話は日本人教師が教えた方がいい
- 2：文法はベトナム人教師が教えた方がいい
- 3：日本人教師は発音を教えた方がいい
- 4：教えるときはベトナム人教師と日本人教師は役割分担をした方がいい

- 5：授業中に復習をするのは大切だ
 6：繰り返しの練習は大切だ
 7：授業は楽しいほうがいい
 8：学習者が文法を理解していなければ、会話の練習をするのは難しい
 9：授業では、教師は日本語だけを使った方がいい
 10：授業では、学習者は日本語だけを使った方がいい
 11：私は自分が学んだことを授業で活かしたい
 12：授業のスケジュールを守ることは大切だ
 13：今日の学習項目をきちんと教えることが大切だ
 14：学習者は日本人と日本語で話す日本語が上手になる
 15：ベトナム人同士で日本語を話しても効果がない
 16：私は他の教師に授業を見られるのは嫌だ
 17：私は他の教師の授業を見るのは好きではない
 18：私は他の教師の教え方について意見を言うのは苦手だ
 19：私は忙しい

回答は多くの先行研究の方法と同じように、5段階(5：全くそのとおりである、4：そう思う、3：賛成でも反対でもない、2：そうは思わない、1：全く違うと思う)で回答用紙に記入する。<表1>が回答用紙の一部である。また、回答用紙に「一般的なことなく、今の自分の考えで答えてください」と注意書きをつけた。

<表1 回答用紙の一部>

質問番号	5：まったくそのとおりだ	4：そう思う	3：賛成でも反対でもない	2：そうは思わない	まったく違うと思う
1					
2					
3					

また、本論の目的である相手教師とのビリーフの共有のため、回答用紙の下方に以下のような欄を設けた。

<表2 回答用紙の一部>

わたしか4か5の質問番号	
相手が1か2の質問番号	
わたしか2か1の質問番号	
相手が4か5の質問番号	

3.3 ビリーフ・チェックシートの使用法

ビリーフ・チェックシートの使用は、ビリーフの「意識化」「共有」「すり合わせ」を目的とする。使用法は、まず、各自で質問項目に回答し、今現在のビリーフを「意識化」する。次に、相手教師と回答を見せ合い<表2>の欄に記入し、相手のビリーフを知る。自分と相手の違う項目に関して、どうしてそのように考えるのかを述べ、ビリーフを「共有」する。そして、担当するクラスの運営について合意を得るべく話し合う。

話し合いの際にはABC理論を援用した。ABC理論はEllis,A.によって提唱された論理療法で、國分(1999)では次のように説明している。Activation(出来事)がEmotion Consequences(感情的反応)を導くのではなく、その出来事をどのように受け取るか(Belief)により感情は左右されるという考え方で、「~しなければならない」「~すべきだ」「当然~であるべきだ」というBeliefs(考え方、思いこみ、認知様式)を「~にこしたことはない」に変えて、感情や行動を変えていく。ABC理論を援用すると、自分の考えが相手と違う場合、「私の意見は正しい。こうあるべきだ」と感情的になることを抑え、「なるほど、そういう意見もあるんだ」と違いを受け入れ、話し合いを進めことができる。

4. 実践報告

4.1 クラスの概要

上記のチェックシートを用いながら、ビリーフの意識化・共有化したチームティーチングでの教室活動の実践を2006年11月から2007年1月までの3ヶ月間行った。

実践クラスはベトナムの日系企業の日本語クラスで、授業は週2日で1回90分である。担当教師は筆者⁷⁾とノンネイティブ教師(ハイさん・仮名)⁸⁾の2名で、火曜日は筆者、水曜日はハイさんが担当した。また、都合のつく限り、お互いの担当時間にアシスタントとして入った。学習者は日系企業に勤務するスタッフ14名⁹⁾であるが、仕事の都合上、毎回全員がクラスに参加できるとは限らなかった。学習者は全員ベトナム国籍で、クラス開講時に日本語学習歴はなかった。また、企業側からは会話を中心に教えてほしいが文字も導入してほしいとの要望があった。

4.2 授業方法の決定と前半の授業内容

クラス開始前に、二人で授業の内容や方法について話し合った¹⁰⁾。

3.3の方法でビリーフの意識化と共有を行ったが、二人の授業の流れに対するビリーフは異なっていた。ハイさんは文法や語彙を導入後、文法を使用する場面を提示して、会話練習を行った方がいいという考えを持っていた。一方、筆者は場面や表現意図を設定し、それに合った文法を導入した方がいいと考えていた。そこで、企業側の要望を考慮しつつ、このクラス

7) ベトナム語がある程度できること、実践を担当するノンネイティブ教師とある程度の人間関係ができていて、話し合いを持つ時間がとれることなどを考慮して筆者が実践を担当することとした。

8) ハイさんは30代女性、教師歴3年(当時)である。

9) 内訳は男性2名、女性12名。年齢は20代前半から30代後半である。

10) ハイさんの日本語が上級レベルなので、話し合いは主に日本語を使用し、場合によってベトナム語も使用した。

ではどのような授業方法にすればいいかを話し合った。

話し合いの結果、場面・機能シラバスを主としたカリキュラムを作成し、場面や機能に必要な文法・語彙を導入してから会話やスピーチを行うような授業内容を設計した。

また、特定の教科書は使用しないこととし、適宜プリントを配布することにした。

1~12回目の授業は、日本語の音・文字に親しむ活動をしながら、挨拶や自己紹介を扱った。学習者は仕事の都合で欠席が多く、毎回の出席メンバーが変わり、なかなかスケジュールのとおりに進めることができなかった。また、初めて日本語を学習することや仕事の後で疲れていることなどの理由で、担当教師に媒介語¹¹⁾での説明を求めてきた。

4.3 授業方法の修正と授業内容

コース期間中、1か月に1度、ビリーフ・チェックシート¹²⁾を用いて、ビリーフの変化の意識化、相手との共有を行った。その際に、3.3のABC理論を援用したが、理論の導入・説明は行わなかった。話し合いの初回に突然、難しい理論を持ちだすのは、相手に圧迫感を与えてしまうと思ったため、毎回の話し合いの過程で少しずつ取り入れていった。

学習者の出席状況や媒介語使用の要望などから、ハイさんのビリーフに変化があった。以前は媒介語の使用に対して否定的であったが、「文法はノンネイティブ教師が媒介語を使って教える方がいい」という考えに変わり、以前から持っていた「文法や語彙を導入した後、それをを用いる場面を設定し、会話練習を行った方がいい」という考えがより強固なものになった。そこで、授業の方法について二人で話し合い、カリキュラムを修正した。

修正の結果、媒介語から始める授業を行うことにした。まず、教師が本

11) ここでの媒介語はベトナム語と英語を指す。

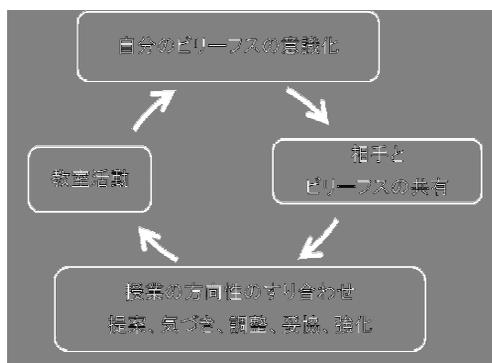
12) ビリーフ・チェックシートはチームティーチングを行っている教師であるなら、教育機関・国籍を問わずに普遍的に使用できることを目的にしたので、実践を行った機関とチェックシート作成の調査機関とが異なっても問題ないと判断した。

日のトピックを提示し、学習者同士でペアになり母語でトピックについて話し合う。そして、どんな話をしたか母語または英語で発表する¹³⁾。次に、教師はトピックのモデル会話を提示し、会話で使用されている文法について説明し、学習者が使用したい語彙を導入する。学習者はその語彙をモデル会話にあてはめ、自分たちの会話を作成する、という流れである。

13~25回目の授業は、忘年会・新年会の場面での簡単な会話練習を行った。ちょうど年末年始の時期であり、学習者は興味を持って授業に取り組んでいた。後日、学習者から実際に会社の忘年会で日本人スタッフと日本語で少しでも会話ができたと報告を聞いた。

コース期間中、月に1回のビリーフ・チェックシートを用いてのビリーフの変化の意識化と共有を繰り返した。クラス開講前の二人のビリーフの違いは、話し合いを持つ中で、許容する度合いが高まり、クラスの運営方針が固まっていた。当初の「教科書を使用しない」というものに加え、「文型積み上げにこだわらない」「学習者の表現意図から考える」「場面を必ず設定する」「協働学習を積極的に取り入れる」「教師・学習者の役割を固定しない」などが出てきた。これらは二人で理由を説明しながら話し合っただけで決めたことであるので、納得しながら教室活動ができた。以下は実践のイメージである。<図1>

13) ハイさんが担当のときはベトナム語、筆者が担当のときは英語で発表することとした。



<図1 実践のイメージ>

26回目以降のクラスは1回完結型の授業を行った。トピックは「家族について紹介しよう」「誘おう / 断ろう」「お願いをしよう」「許可をもらおう」「今までで一番うれしかったこと」などである。

4.4 本実践のまとめ

本実践ではビリーフ・チェックシートを用いながら、教師が無意識であったビリーフを意識化し、それを相手の教師と共有し、ビリーフが異なるものについては話し合いをした。その過程で、お互いに影響を与えあい、徐々に二人のビリーフが近づいていった。その結果、コースの半ばから教師間で運営方針にズレのない教室活動ができた。

チームティーチングによるクラス運営での教師同士の話し合いは、今日の授業はうまくいったか、学習者は理解できていたかなど、技術面の反省になりがちである。しかし、本実践ではチェックシートを用いてビリーフを意識化することによって、自分はどのようにこのような授業を行っているのかと自分自身のビリーフを意識化することができるようになった。この作業をとおして、ハイさんも筆者も「ネイティブ教師・ノンネイティブ教師は~するべきだ」ではなく、「私はこうしたい」「私はこう思う」と一人称を主題化にしてビリーフを話すようになった。

5. まとめ

チームティーチングを行う場合、自分一人だけでクラス運営をするのではないことは、誰もが分かっているはずである。しかし、ノンネイティブ教師とネイティブ教師の担当が決められたチームティーチングでは、各自の与えられた役割、教育機関の方針、決められたスケジュールばかりに目が向き、相手には干渉をしないようにしている状況がインタビュー調査で出てきた。

このようなチームティーチングの方法は実際に多く存在し、決して悪いことではない。しかし、スケジュールや役割分担といった技術的な面ばかりに目を向けるのではなく、チームを組む相手の教師がどのような目的・方針で授業を行っているか、ビリーフを知ることが教室活動の方針にずれがなくなり、より良いクラス運営、よりよいチームティーチングにつながるのではないだろうか。

韓国をはじめ世界各国の日本語教育でも、本実践のようなビリーフの共有を行ったチームティーチングは可能であろう。また、ノンネイティブ教師とネイティブ教師のチームだけではなく、ノンネイティブ教師同士、ネイティブ教師同士のチームティーチングでも応用ができるであろう。

<参考文献>

- 秋田喜代美(1992)「教師の知識と志向に関する研究動向」『東京大学教育学部紀要』第32巻 pp.221-231 東京大学教育学部
- 井上亜子(1999)「スリランカにおける日本語教育の現状と課題」『世界の日本語教育 <日本語教育事情報告編>』第5号 pp.137-153 国際交流基金日本語センター
- ウヴェ・フリック(2002)『質的研究入門 ―人間科学>のための方法論―』春秋社
- 太田陽子(1999)「マレーシアにおける日本語教育 - 現地化に向かう現状と課題 - 」『一

- 橋大学留学生センター紀要』第2号 pp.45-55 一橋大学留学生センター
- グエン・ティ・ビック・ハー(2000)「ベトナムにおける日本事情」『日本語学・日本語教育学 国際シンポジウム報告書』名古屋外国語大学
- 久保田美子(2005)「ノンネイティブ日本語教師のピリーフ調査 - 指導内容、指導方法を中心とした分析 -」『応用言語学研究』第7号 pp.163-176 明海大学大学院応用言語学研究科
- 国際交流基金(2006)『海外の日本語教育の現状 - 日本語教育機関調査・2006年 -』国際交流基金
- 國分康孝編(1999)『論理療法の理論と実際』誠信書房
- 齋藤ひろみ(1996)「日本語学習者と教師のピリーフ - 自律的学習に関わるピリーフスの調査を通して-」『言語文化と日本語教育』第6号 pp.33-50 お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 長江宏(1998)『外国人講師 - その活用とチーム・ティーチング -』三省堂
- 橋本洋二(1933)「言語学習についてのBELIEF把握のための試み - BALLIを用いて -」『日本語教育論集』第8号 pp.215-241 筑波大学留学生センター
- 百瀬侑子(1996)「海外における Non-native 教師のための Team Teaching」『日本語国際センター紀要』第6号 pp.33-50 国際交流基金日本語センター
- Horwitz,E.K.(1987) “Surveying Students Beliefs About Language Learning” Learner Strategies in Language Learning ed.by Anita Wenden & Joan Rubin, Prentice-Hall, London, pp.119-129

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

Classroom Activities Using Belief Sharing Among Teachers

— Team Teaching among Non-Native Teachers and Native Teachers in Vietnam —

There are many organizations outside Japan, conducting Japanese language training using team teaching among non-native teachers and native teachers.

Research on 2 such classes was conducted in Vietnam. In both classes, class was held as scheduled, and the teachers were fulfilling their tasks. However, some differences existed when the teacher was not aware of belief, or because they had no shared belief between their team teaching partners.

In this thesis is the introduction of the practice conducted in Vietnam, standing on the viewpoint that awareness and shared belief leads to better performance at class. Teachers were asked to pay attention to their own belief to share it with others, and hold discussions before add during the session term. Based on these discussions, class schedules and operations were revised. As a result, we saw little conflict among the teachers' beliefs in the class activities.

일한 국제결혼가정의 언어사용에 관한 연구*

— 일본거주 「夫日本-妻韓國」 국제결혼가정을 중심으로 —

한 영 옥**

young@dongnam.ac.kr

< 目 次 >

>

- | | |
|--------------------|---------|
| 1. 서론 | 4. 분석결과 |
| 2. 일본사회의 국제결혼 현황 | 5. 결론 |
| 3. 연구 내용 및 방법 | |
| 3.1 조사대상 및 방법 | |
| 3.2 조사내용 및 자료 분석방법 | |
| 3.3 연구의 제한점 | |

Key Words : 국제결혼(International Marriage), 언어생활(Language-Use)

1. 서론

21세기는 세계화가 지구 어느 곳에서나 빈번히, 또 보편적으로 일어나는 현상의 하나가 되면서 국가 간 이주가 상시적이고 일반적인 흐름이 되고 있다. 문순영(2007)¹⁾은 이 국가 간 노동이동에 있어 최근 두드러지게 나타나는 현상이 이주의 주체가 여성으로 바뀌어, 여성들이 간호사, 가정부, 연예인, 그리고 혼인 등의 형태로 이동의 주체가 되고 있다고 밝히고 있다. 특히 통신기술의

* 본 연구는 2008년도 동남보건대학 연구비 지원에 의하여 수행된 것임

** 동남보건대학 관광일어과 부교수

1) 문순영(2007) 「현행법(안)을 통해 본 국제결혼 여성이주민을 위한 사회적 지원체계에 대한 탐색적 연구」 女性研究 2007. Vol.72 No.1 pp.109-142

발달에 의한 개방정보시스템과 수송기술의 발전에 따라 인적이동이 더욱 활발하게 진행되면서 앞으로 국제결혼커플의 지속적인 증가가 예상된다.

임경혜(2004)²⁾는 국제결혼 관련문제 요인으로 ①부부관계 문제(문화차이, 언어갈등, 생활습관, 문화의 이질성) ②전통적 가치관문제 ③자녀관계 문제(차별대우) ④가정문제(경제, 사회보장제도) ⑤사회적 문제 ⑥부모와의 관계 문제 등을 들고 있다.

또한 조선일보의 기획 시리즈 5편³⁾에서 민성혜와 오성배는 어머니의 미숙한 한국어 사용이 아이들의 전인교육에 있어 장애가 되므로 어머니는 모국어로 아이를 키우고, 한국어 교육은 아버지와 사회가 맡아 이중언어를 사용하도록 키워야한다고 주장하고 있다.

김민수(2005)⁴⁾는 이중언어는 국내에서 자국어에 제2언어로 외국어를 배워 사용하는 경우, 외국에서 교포가 현지어에 자신의 모국어를 배워 사용하는 경우를 지칭하는데, 외국에 사는 교포는 현실에 충실하다 보면 모국어를 잊기 쉽고, 2세에 이르면 모국어는 외국어처럼 멀어지기 쉽다. 따라서 교포의 모국어 습득이 의식적이고 계획적이라면 실질적으로 거의 불가능하지만, 자신의 뿌리인 혈통과 민족적 정체성을 잃지 않기 위해서는 반드시 모국어를 지키고, 2세에게 적극적으로 가르쳐야 한다고 주장하고 있다. 하물며 외국인 남편과 외국에서 거주하는 이주여성들이 그들의 모국어를 2세들에게 가르친다는 것이 얼마나 어려운 일인가는 미뤄 짐작이 가능할 것이다.

江田(2009)⁵⁾는 新田文輝의 말을 빌려 국제결혼에 있어서는 충분한 의사소통을 위해서 적어도 한 쪽 배우자가 상대의 언어를 배우지 않으면 안 되며, 상대방의 나라에서 살 경우 대개 외국인인 배우자가 상대의 언어를 배우게 되고, 따라서 이러한 결혼에서 언어는 상시 문제가 되고 있다고 지적하고

2) 임경혜(2004) 「국제결혼 사례별로 나타난 가족문제에 따른 사회복지적 대책에 관한 연구」 대구대학교대학원 석사학위논문 pp.16-19

3) 조선일보 2008년 5월 13일(화) A6면 기획 시리즈 “동남아 엄마”의 아이들 5.좌담 <두개의 언어를 쓰는 다문화 아이로 키워야>참석자 권오희, 민성혜, 손소연, 양승주, 오성배

4) 김민수(2005) 「재외교포의 이중언어에 대하여」 『이중언어학』제29호 이중언어학회 pp.2-4

5) 河原俊昭・岡戸浩子 編著(2009) 『國際結婚-多言語化する家族とアイデンティティ』明石書店 p.99

있으며, 자녀가 태어나면 언어의 문제는 한층 더 복잡한 단계에 들어선다고 밝히고 있다.

ローズマリー・ブレーガーとロザンナ・ヒル(2005)⁶⁾는 국제결혼에 있어서 언어는 단순한 언어 이상의 의미를 지니므로, 파트너와 모어를 공유하지 않는 이문화 결혼에 있어서, 가정에서 사용하는 언어는 제각각 자신이나 상대의 문화적 배경을 어느 정도 배려하는가, 혹은 어느 정도 새로운 요소를 받아들이는가를 표현하는 상징적 표현이 된다고 밝히고 있다.

이와 같이 언어의 문제는 국제결혼가정에서 떼어놓을 수 없는 불가분의 관계인 것이다. 본 연구는 한영옥(2008)⁷⁾의 후속 연구로, 일본에서 거주하는 「夫日本-妻韓國」의 국제결혼가정(이하 일한가정으로 표기)의 언어사용을 가정과 본인 및 배우자, 자녀로 나누어, 연령별, 학력별, 정착년도별로 조사·분석하여, 다문화사회의 다양한 발전프로그램 중에서 중요한 부분인 언어영역의 기초 자료를 제공하고자 한다. 또한 일본에서 생활하는 국제결혼 한인여성들이 모국어인 한국어의 사용과 2세들의 한국어사용 실태를 살펴봄으로서 앞으로 국제결혼을 생각하는 한국인들에게 모국어에 대한 인식을 새롭게 하고자 한다.

2. 일본사회의 국제결혼 현황

國際觀光振興機構〈JNTO〉의 2007년 말 통계자료에 따르면 일본에는 200만 명이 넘는 외국인시민이 살고 있으며, 2007년에는 835만 명의 외국인이 일본을 방문하고, 1729만 명의 일본인이 외국여행을 갔다고 한다. 이와 같이 외국인과의 접촉이 증가함에 따라 일본사회도 한국과 마찬가지로 국제결혼이 증가하고 있으며, 앞으로도 더욱 증가할 것으로 예상된다.

지한진은 위클리조선(2005.5.27)⁸⁾과 CBS 라디오 ‘뉴스야 놀자’(2006.9.8)⁹⁾

6) 브レーガー・ローズマリー&ヒル・ロザンナ(2005) 『異文化結婚-國境を越える試み』 吉田正記監譯 新泉社 p.45

7) 한영옥(2008) 「다문화 가정의 언어사용에 관한 연구-한일 국제결혼가정을 중심으로」 日本研究 第25輯

에서 일본사회에서 한국인과의 국제결혼 증가배경에 관해, 최근에는 한류 붐으로 인하여 일본 내에서 한국 남성에 대한 선호도가 급격히 높아져 한국 남성과 결혼을 희망하는 일본여성이 폭발적으로 늘었으며, 그동안 한일 국제 결혼은 주로 일본 남성을 원하는 한국여성에 의해 이뤄져 왔지만, 최근에는 한국남성을 원하는 일본여성에 의해 주도되고 있다고 밝히고 있다. 이와 같이 가치관의 변화, 한류 붐을 탄 한국남성의 인기, 혹은 종교적 이유 등으로 일본 사회에서도 이제 국제결혼은 피할 수 없는 상황이 되어버렸다.

우선 일본 사회에서의 외국인 인구의 국적별 분포를 살펴보면 [그림2-1]과 같다. 외국인 인구 중 한국·조선이 473,000명(외국인총수의 30.4%)으로 가장 높은 비율을 차지하고 있으며, 다음이 중국으로 353,000명(上同 22.72%), 브라질이 215,000명(上同 13.9%), 필리핀이 126,000명(上同 8.13%)의 순으로 나타나고 있다.

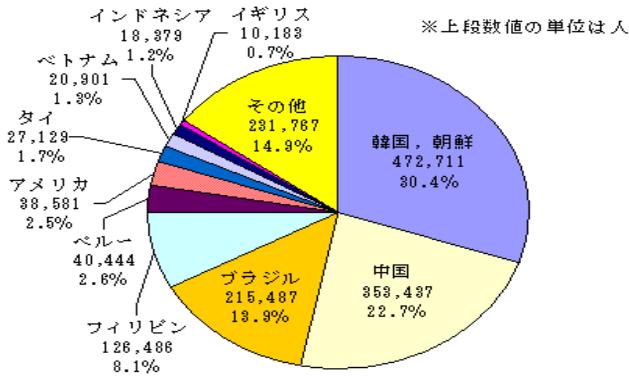
2000년부터 2005년까지의 국적별 외국인 인구의 추이를 厚生省労働統計一覽(2005)을 바탕으로 살펴보면, 몽골이 2,000명(197%), 러시아가 2,000명(63.0%), 베트남이 8,000명(61.2%), 중국이 100,341명(39.7%) 각각 증가한 반면, 미얀마는 700명(20.3%), 이란 600명(12.7%), 한국·조선은 57,000명(10.7%) 각각 감소하고 있으며, 중국의 증가가 눈에 띄고 있으나 한국·조선인이 현재까지는 가장 높은 비율을 나타내고 있다.

이러한 사실은 어떠한 이유에서건 현재 한국인이 일본에 가장 많이 거주한다는 것을 의미하는 것으로 그만큼 일본과의 국제교류가 많음을 나타낸다고 하겠다.

8) 위클리조선, [기고]라쿠엔코리아 사장 지한진 2005. 5. 27. 09:35

9) CBS 라디오 '뉴스야 놀자' [출연]라쿠엔코리아사장 지한진. 이진성 PD, CBS 노컷뉴스 2006. 9. 8. 오후 5:55

[그림2-1] 국적별 외국인 인구 - 전국(2005년)



자료 : 厚生省労働統計一覽(2005)

다음으로 일본 혼인건수의 연차추이를 厚生省労働統計一覽(2005)을 바탕으로 살펴보면, 종전 직후인 1947년, 1948년의 「제1차혼인분」에는 95만 쌍이었으나, 1949부터는 급격히 감소하여 1951년에는 67만 쌍으로 전후 최저치를 기록하였다. 1970년에는 「제2차혼인분」을 맞아 1972년에는 110만 쌍이었으나, 1973년부터 1978년에 걸쳐 다시 급격히 감소한 후, 완만한 감소경향을 보이다가 1988년부터 증가경향으로 바뀌어 증감을 반복하다가 2000년, 2001년 다소 증가하던 것이 2002년 이후 감소하고 있는 것을 알 수 있다.

다음은 厚生労働統計一覽(2005)을 바탕으로 일본의 지역별 국제결혼의 추이를 1975년과 2005년을 살펴보면, 1975년에는 일본의 총 결혼건수는 941,628건이며, 국제결혼건수는 6,045건으로 전체 건수의 0.6%를 차지하였으나, 30년 후인 2005년에는 일본의 총 결혼건수는 714,265건으로 1975년보다 227,363건이나 감소하였음에도 불구하고, 국제결혼 건수는 41,481건으로 오히려 증가하여 전체 건수의 5.8%를 차지하고 있어 급격한 증가세를 나타내고 있다. 또한 「夫日本-妻外國」 부부는 1975년에는 3,222쌍이고, 「夫外國-妻日本」 부부는 2,823쌍으로, 비율은 각각 0.3%로 같았으나, 2005년에는 「夫日本-妻外國」 부부는 33,116쌍으로 4.6%, 「夫外國-妻日本」 부부도 8,365쌍으로 1.2% 증가하고

있어, 「夫日本-妻外國」 부부의 비율이 월등히 높게 나타나고 있다. 결과적으로 일본전역에서 국제결혼 비율이 30년간 약 10배정도 증가한 것을 알 수 있다.

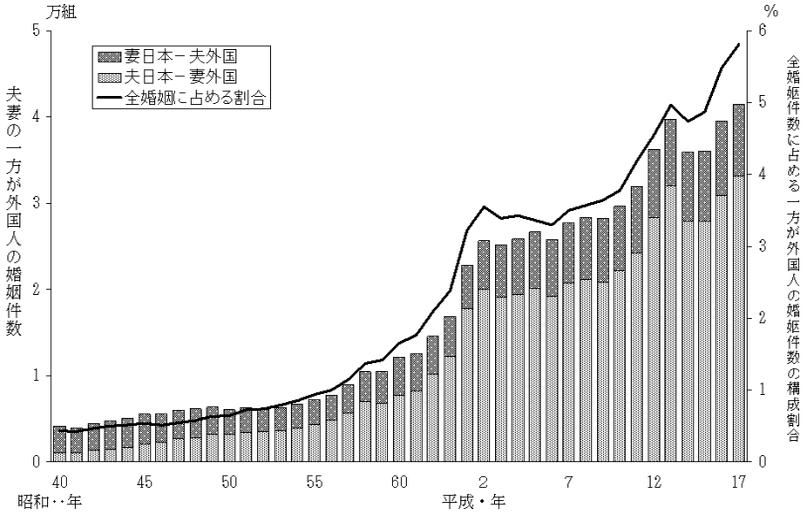
지역적으로는 1975년에는 東京(1635건), 大阪(998건), 兵庫(477건), 神奈川(456건) 순으로 국제결혼 비율이 높았으나, 2005년에는 東京(7,827건), 神奈川(3908건), 愛知(3220건), 大阪(3218건) 순으로 나타나고 있어, 東京을 제외하면 30년 전과 지역적으로 큰 차이를 보이고 있다.

특이한 사항으로는 대부분의 지역에서는 「夫日本-妻外國」 부부가 많은 반면, 沖繩에서만 유일하게 1975·2005년 모두 「夫外國-妻日本」 부부의 비율이 높게 나타나고 있음을 알 수 있다. 이러한 현상은 沖繩에 대규모의 미군기지가 있는 것과 무관하지 않은 듯하다.

다음으로 2006년도 일본부부의 국적별 본 혼인건수 및 구성 비율을 厚生労働統計一覽(2006)을 바탕으로 살펴보면, 「夫日本-妻外國」 부부의 외국인여성 국적은, 필리핀(12,150건), 중국(12,131건), 한국·조선(6,041건), 태국(1,774건)의 순으로 나타나고 있는 반면, 「夫外國-妻日本」 부부의 외국인남성국적은 한국·조선(2,335건), 미국(1,474건), 중국(1,084건), 영국(386건), 브라질(292건), 필리핀(195건) 순으로, 서로 다른 양상을 띠고 있다. 「夫日本-妻外國」의 커플에서는 필리핀과 중국이 월등히 높은 반면, 「夫外國-妻日本」의 커플에서는 한국·조선이 가장 높으며, 미국과 중국이 다른 나라에 비해 비교적 높게 나타나고 있다. 또한 미국, 영국, 브라질을 제외하면 모든 국가에서 「夫日本-妻外國」의 커플이 많은 것을 알 수 있다. 즉 「夫日本-妻外國」 커플은 총 35,993쌍인데 비해, 「夫外國-妻日本」 커플은 총 8,708쌍으로, 상대국가와 혼인건수에서 현격한 차이를 나타내고 있다. 중국이나 필리핀여성들의 일본남성과의 결혼비율이 높은 것은 한국과 마찬가지로 농촌지방남성이 내국인과의 결혼이 어려워지면서 외국여성을 선택하며 생겨난 결과로 보여 진다.

다음으로 1947~2005년 국제결혼 혼인건수의 연차추이를 [그림2-2]에서 살펴보면, 1985년 이래 지속적인 증가 추세를 나타내고 있으며, 2001년에 가장 증가하였고, 특히 「夫日本-妻外國」의 결혼이 급속히 증가하였음을 알 수 있다. 2005년도에는 전국 혼인건수에서 국제결혼 비율이 5.8%를 차지하고 있어 국제결혼의 증가를 잘 나타내고 있다.

[그림2-2] 국제결혼 혼인건수의 연차추이 (1947~2005년)¹⁰⁾



자료 : 厚生労働統計一覽(2005)

3. 연구 내용 및 방법

3.1 조사대상 및 방법

이번 조사는 다문화가정의 언어사용을 규명하기 위하여 동경 및 수도권을 중심으로 20대 이상의 일본거주 「夫日本-妻韓國」의 국제결혼 한국여성을 조사대상자로 삼았다.

전체조사 대상자는 세대별로 20대 21명, 30대 44명, 40대 36명, 50대 이상 4명으로 전체 105명이다. 본 조사는 2005년 11월부터 2006년 8월까지 실시하였으며, 피조사자의 기본속성에 관한 전체, 세대, 학력, 직업별, 지역별, 자녀유무 구분은 <표3-1> 과 같다. 조사는 일한 국제결혼 한국여성 105명을 대상으로 일대일 혹은 그룹별로 구조화된 설문지를 사용하여 실시하였다. 설문조사

10) 서기년도 산출법 <昭和+1925=서기년도, 平成+1988=서기년도>

는 일본에 거주하고 있는 주부라는 것을 전제로 일본어판으로 실시하였으며, 이해를 돕기 위하여 원하는 대상자에 한하여 한국어 해설 판을 함께 나누어 주어 조사를 실시하였다.

조사 대상자를 직업별, 학력별, 지역별, 자녀유무별로 살펴보면 다음과 같다. 세대별 직업은 20대는 주부 33.3%, 자영업자 28.6%, 봉급생활자 23.8%로, 52.4%가 경제활동을 하고 있으며, 30대는 주부 36.49%, 봉급생활자 31.8%, 자영업자 11.4%, 기타 9.1%, 40대는 주부 41.7%, 자영업자 25%, 봉급생활자 19.4%, 기타 8.3%로 나타나고 있다. 50대 이상은 주부 50%, 봉급생활자와 자영업자가 각각 25%로, 전세대별로 전업주부가 가장 높기는 하지만, 봉급생활자와 자영업자를 합하면 전업 주부보다 높아, 20대 52.4%, 30대 43.2%, 40대 44.4%, 50대이상 50%가 경제활동을 하고 있으며, 이는 한국어여성들의 강인한 생활력을 엿볼 수 있는 대목이라 하겠다.

세대별 학력을 보면, 20대는 고졸 9.5%, 대졸 81%, 대학원졸 9.5%, 30대는 고졸 45.5%, 대졸 38.6%, 대학원졸 13.6%로 나타나고 있다. 40대는 고졸미만 11.1%, 고졸 47.2%, 대졸 36.1%, 대학원졸 5.6%, 50대이상은 고졸미만 25%, 고졸 50%, 대졸 25%, 대학원졸 25%로 나타나고 있다. 전체적으로는 20대에서는 대졸이, 30~40대와 50대이상에서는 고졸이 가장 높게 나타나고 있지만, 전체 비율로는 대졸 45.7%, 고졸 39%로 학력 면에서 상당히 높은 수준을 보이고 있다.

거주 지역별로 보면, 20대는 동경 71.4%, 수도권 28.6%, 30대는 동경 54.5%, 수도권 40.9%, 40대는 동경 72.2%, 수도권 25%, 50대이상은 동경이 100%를 차지하고 있어, 30대를 제외한 전세대에서 동경에 거주하는 경우가 월등히 높게 나타나고 있다.

자녀 유무별로 살펴보면, 20대는 유자녀 19%, 무자녀 81%, 30대는 유자녀 86.4%, 무자녀 13.6%, 40대는 유자녀 88.9%, 무자녀 11.1%, 50대이상은 유자녀 100%로, 20대를 제외하면 전세대에서 유자녀의 비율이 월등히 높게 나타나고 있다. 20대는 결혼한 지 얼마 되지 않거나 아직 젊어서 무자녀의 비율이 현격히 높게 나타나는 것이라 여겨진다.

〈표3-1〉 일한 국제결혼 한국여성 피조사자의 기본속성 (인원(%))

구분		20대	30대	40대	50대이상	합계
전체 (105명)		21(20)	44(41.9)	36(34.3)	4(3.8)	105(100)
직업	봉급생활자	5(23.8)	14(31.8)	7(19.4)	1(25)	27(25.7)
	자영업자	6(28.6)	5(11.4)	9(25)	1(25)	21(20)
	주부	7(33.3)	16(36.4)	15(41.7)	2(50)	40(38.1)
	학생	3(14.3)	0	0	0	3(2.9)
	기타	0	4(9.1)	3(8.3)	0	7(6.7)
	무응답	0	5(11.4)	2(5.6)	0	7(6.7)
학력	고교미만	0	1(2.3)	4(11.1)	1(25)	6(5.7)
	고졸	2(9.5)	20(45.5)	17(47.2)	2(50)	41(39)
	대졸	17(81)	17(38.6)	13(36.1)	1(25)	48(45.7)
	대학원졸	2(9.5)	6(13.6)	2(5.6)	0	10(9.5)
지역	동경	15(71.4)	24(54.5)	26(72.2)	4(100)	69(65.7)
	수도권	6(28.6)	18(40.9)	9(25)	0	33(31.4)
	무응답	0	2(4.5)	1(2.8)	0	3(2.9)
자녀유무	있음	4(19)	38(86.4)	32(88.9)	4(100)	78(74.3)
	없음	17(81)	6(13.6)	4(11.1)	0	27(25.7)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다.

3.2 조사내용 및 자료 분석방법

일한 국제결혼 한국여성에 대한 조사내용은 인구학적배경인, 본인나이, 남편나이, 결혼연도, 자녀유무, 거주지와 거주기간, 직업, 학력과 언어사용조사에 있어서는 평소 가정에서 사용하는 언어, 본인이 할 수 있는 언어, 남편이 할 수 있는 언어, 자녀가 할 수 있는 언어로 나누어 조사를 실시하였다. 수집된 일한 국제결혼 한국여성에 관한 설문지 105부를 자료 분석에 이용하였다. 분석은 통계처리 프로그램인 SPSS for Windows(Ver 10.1.3)를 사용하였으며, 비율분석, 교차분석 그리고 다중응답 분석을 실시하였다.

3.3 연구의 제한점

본 연구는 일한 국제결혼 한국여성을 대상으로 하여 연령별 조사를 실시하였으나 50대이상의 대상자를 찾는데 어려움이 많아 너무 적은 수로 분석을

실시하게 된 바, 50대이상을 대표하여 연구 결과를 일반화하는데 제한점을 지니고 있으며, 학력별에서도 고교미만이거나 대학원졸업자가 적어 고교미만이거나 대학원졸업자를 대표하여 연구결과를 일반화하는데 제한점을 지니고 있다. 또한 이중언어에 대한 정의범위를 모국어와 두 번째 언어에 대해서는 최소한의 수동적인 능력만 있어도 이중언어로 보아야 한다는 최소론에 입각하여 논하고 있기 때문에 각 언어의 세분화된 층위를 밝히지 못하는 제한점을 지니고 있다.

4. 분석결과

서론에서 외국에 살면서 2세들에게 모국어를 습득시키기 위해서는 의식적이고 계획적이 아니면 실질적으로 거의 불가능하다고 밝혔듯이 국제결혼 이주여성들이 외국에서 그들의 모국어를 2세들에게 가르친다는 것은 대단히 어려운 일임에 틀림없다.

다음은 실질적으로 일한국제결혼가정의 언어사용에 관하여 분석을 통하여 명확히 규명하고자 한다.

박영순(2005)¹¹⁾은 이중언어(Bilingualism)란 두 가지 언어를 구사하는 현상 또는 이중언어교육을 주창하는 이론이며, “이중언어”에 대한 견해도 최대론자에서부터 최소론자에 이르기까지 다양하다고 말하고 있다. 최대론(Maximalist theory)에서는 두 개의 언어가 동등하게 거의 모국어 수준으로 구사할 때만 이중언어로 인정하는 이론이고, 최소론(Minimalist theory)에서는 하나의 모국어와 두 번째 언어에 대해서는 최소한의 수동적인 능력만 있어도 이중언어로 인정하는 이론이라고 밝히고 있다.

또한 언어교육적인 차원에서 볼 때, 외국어로서 교수·학습은 목표언어의 능력을 어휘 수나 문장유형, 혹은 어떤 과제를 수행할 수 있는냐로 얘기하지만, 이중언어교육에서는 목표언어에 대한 능력을 원어인 수준의 언어능력이

11) 박영순(2005) 「이중언어교육의 본질과 한국어교육의 과제」 『이중언어학』 제29호 이중언어학회(본 논문은 이중언어학회 2005년 동경 국제학술대회(2005.7.9-10. 일본 동경대)에서 기조강연으로 발표된 바 있음) pp.11~12

라는 목표를 가지고 교수·학습하게 된다고 밝히고 있다.

따라서 본고에서는 이중언어에 대한 정의범위를 최소론에 입각하여 논하되, 언어교육은 이중언어교육에 중점을 둔 원어민 수준의 언어능력을 목표로 제안하고자 한다. 왜냐하면 다문화가정의 2세대들은 외국인을 어머니로 두고 있는 최적의 외국어학습 조건을 가지고 있으며, 그들의 언어능력이 원어민 수준정도에 이르러야만 사회의 요구에 부응할 수 있기 때문이다.

또한 연구 분석에 있어서 가정에서의 언어사용 이외의 장면은 모두 일반적인 일상생활에서 한국어나 영어가 필요한 곳에서의 언어사용을 가리키며, 여기서 본인은 조사 대상자인 국제결혼 한국여성을 가리키고, 본인을 중심으로 남편과 자녀로 호칭하며 본인과 부인은 동일 인물임을 밝혀둔다.

4.1 부인의 연령별 가정에서의 언어사용

부인의 연령에 따른 평소 가정에서의 언어사용을 살펴보면 <표41> 과 같다.

<표41> 부인의 연령별 가정에서의 언어사용 (인원(%))

	20대	30대	40대	50대이상	합계
일본어	16(76.2)	17(38.6)	16(44.4)	4(100)	51(48.6)
한국어	2(9.5)	5(11.4)	2(5.6)		11(10.5)
일본어+한국어	3(14.3)	20(45.5)	17(47.2)		40(38.1)
일본어+영어		1(2.3)			1(1)
한+일+영		1(2.3)	1(2.8)		2(1.9)
합계	21(20)	44(41.9)	36(34.3)	4(3.8)	105(100)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다.

부인의 연령별 가정에서의 언어사용을 살펴보면, 20대는 76.2%가, 50대 이상은 100%가 평소 가정에서 일본어를 사용하고 있어 압도적으로 일본어가 높은 반면, 30·40대는 각각 45.5%, 47.2%가 일한 이중언어를 사용하고 있고, 일본어는 각각 38.6%와 44.4%로 2위를 차지하고 있어 세대별로 많은 차이를 나타내고 있다. 전세대별로는 일본어 사용이 가장 높아 48.65%를 차지하고 있으며, 2위가 일한 이중언어 사용으로 38.1%를 나타내고 있다. 또한 한국어

사용도 9.5%로 나타나고 있으며, 특히 30대가 가정에서 한국어 사용비율이 가장 높고 다양한 언어를 사용하는 것으로 나타나고 있다. 따라서 50대 이상과 20대가 언어 환경의 지배를 가장 많이 받고 있는 세대로 나타나고 있다.

4.2 연령별 본인(부인)의 언어사용

연령에 따른 본인의 언어사용을 살펴보면 <표4-2>에서 보는 바와 같이, 20대는 81%, 30대는 81.8%, 40대는 91.7%, 50대 이상은 100%가 한국어와 일본어를 병용하고 있어, 평균 가정에서 20대가 72.2%, 50대 이상 100%가 일본어만 사용하는 것과는 완전히 다른 양상을 보이고 있다. 30·40대에서도 가정에서의 언어사용과 많은 차이를 나타내고 있다. 전세대별로 보면, 한국인인 부인은 90%가 일본어와 한국어를 병용하고 있으나, 가정에서는 52%가 일본어만을 사용하고 있어 상당한 차이를 보이고 있다.

<표4-2> 연령별 본인(부인)의 언어사용 (단원(%))

	20대	30대	40대	50대이상	합계
일본어	1(4.8)	3(6.8)	0	0	4(3.8)
한국어	0	0	0	0	0
영어	0	1(2.3)	0	0	1(1)
일본어+한국어	17(81)	36(81.8)	33(91.7)	4(100)	90(85.7)
일본어+영어	0	0	1(2.8)	0	1(1)
한+일+영	3(14.3)	4(9.1)	2(5.6)	0	9(8.6)
합계	21(20)	44(41.9)	36(34.3)	4(3.8)	105(100)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다.

4.3 부인의 연령별 남편의 언어사용

부인의 연령에 따른 남편의 언어사용을 살펴보면 <표4-3>에서 보는바와 같이, 20대는 61.9%, 40대는 33.3%, 50대는 75%로 가장 많이 일본어를 사용하고 있으며, 30대는 47.7%로 한국어와 일본어의 병용이 가장 높게 나타나고 있어 세대별로 남편의 언어사용에 차이를 보이고 있으며, 40대에서 가장 다양한 언어사용의 양상을 나타내고 있다. 또한 가정에서 20대 76.2%, 40대 44.4%, 50대이상 100%가 일본어를 사용하고 있으며, 남편의 언어사용도 20대 61.9%,

40대 33.3%, 50대이상 75%가 일본어를 사용하고 있고, 30대도 가정에서 일한 이중언어를 45.5%가 사용하고 있으며, 남편도 47.7%가 일한 이중언어를 사용하는 것으로 나타나고 있다.

따라서 남편의 언어사용이 가정에서의 언어사용에 많은 영향을 주고 있으며 깊은 상관관계가 있다고 하겠다.

전세대별로 보면, 남편은 일본어 사용이 43%로 가장 높고, 일한 이중언어 사용이 25.7%, 일·영어의 병용이 11.4%, 일·한·영어의 병용이 10.5%를 나타내고 있어, 부인들은 일·한국어의 병용에 편중되어 있는 반면 남편들은 다양한 언어사용의 양상을 띠고 있다고 하겠다.

〈표43〉 부인의 연령별 남편의 언어사용 (인원(%))

	20대	30대	40대	50대이상	합계
일본어	13(61.9)	15(34.1)	12(33.3)	3(75)	43(41)
한국어	0	0	0	0	0
일본어+한국어	5(23.8)	21(47.7)	9(25)		35(33.3)
일본어+영어	2(9.5)	3(6.8)	7(19.4)		12(11.4)
한국어+영어			4(11.1)		4(3.8)
한+일+영	1(4.8)	5(11.4)	4(11.1)	1(25)	11(10.5)
합계	21(20)	44(41.9)	36(34.3)	4(3.8)	105(100)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다

4.4 부인의 연령별 자녀의 언어사용

부인의 연령에 따른 자녀의 언어사용을 살펴보면 〈표44〉에서 보는바와 같이, 20대는 75%, 30대는 59.5%, 40대는 46.9%로 일한 이중언어 사용이 가장 많은 반면, 50대는 100%가 일본어를 사용하고 있어 큰 차이를 나타내고 있다. 또한 어머니의 연령과 비례하여 자녀의 일본어 사용비율이 높아지고 있어 어머니의 연령과 자녀의 언어사용과는 상관관계가 있다고 하겠다.

이는 자녀가 성장함에 따라 학교나 직장생활 등으로 주변의 언어 환경이 현지어 중심으로 바뀌고, 또한 현실에 충실하기 위해서는 현지어에 집중할 수밖에 없기 때문이라고 해석할 수 있을 것이다. 바꾸어 말하면 자녀가 성장함에 따라 자신의 모국어를 가르치기가 점점 더 어려워진다는 것을 말하며,

이는 김민수(2005)가 교포의 모국어 습득이 의식적이고 계획적이지 아니면 실질적으로 거의 불가능하다고 지적하는 것과 맥을 같이 한다고 하겠다. 20대에서 한국어의 사용이 나타나는 것은 자녀가 아직 어려 주로 가정에서 어머니와 보내는 시간이 많기 때문으로 여겨진다. 또한 40대에서 가장 다양한 언어를 사용하고 있으며, 전세대별로 보면 일한언어의 병용이 51.9%로 가장 높고, 다음이 일본어로 32.5%를 나타내고 있다.

〈표4-4〉 부인의 연령별 자녀의 언어사용 (인원(%))

	20대	30대	40대	50대이상	합계
일본어	0	11(29.7)	10(31.3)	4(100)	25(32.5)
한국어	1(25)	0	0	0	1(1.3)
일본어+한국어	3(75)	22(59.5)	15(46.9)	0	40(51.9)
일본어+영어	0	0	1(3.1)	0	1(1.3)
한+일+영	0	4(10.8)	6(18.8)	0	10(13)
합계	4(5.2)	37(48.1)	32(41.6)	4(5.2)	77(100)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다.

※ 자녀의 나이가 너무 어려 말을 할 수 없는 경우나 무응답은 분석에서 제외하였다

4.5 부인의 학력별 가정에서의 언어사용

부인의 학력에 따른 가정에서의 언어사용을 살펴보면 〈표4-5〉와 같다.

〈표4-5〉 부인의 학력별 가정에서의 언어사용 (인원(%))

	고교미만	고졸	대졸	대학원졸	합계
일본어	3(50)	21(51.2)	23(47.9)	4(40)	51(48.6)
한국어	0	2(4.9)	5(10.4)	4(40)	11(10.5)
일본어+한국어	2(33.3)	18(43.9)	18(37.5)	2(20)	40(38.1)
일본어+영어	0	0	1(2.1)	0	1(1)
한+일+영	1(16.7)	0	1(2.1)	0	2(1.9)
합계	6(5.7)	41(39)	48(45.7)	10(9.5)	105(100)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다.

고교미만은 50%, 고졸은 51.2%, 대졸은 47.9%, 대학원졸은 40%로 일본어 사용이 가장 높으며, 2위인 일한 이중언어 사용은, 고교미만에서 33.3%, 고졸

에서 43.9%, 대졸에서 37.5%, 대학원졸에서 20%를 나타내고 있다. 대졸에서 가장 다양한 언어사용을 하고 있으며, 한국어의 사용은 학력이 높을수록 증가하고 있으며 이는 학력이 높을수록 의식적으로 가정에서 한국어의 사용을 높이려고 노력하는 것으로 해석할 수 있을 것이다.

4.6 학력별 본인(부인)의 언어사용

학력에 따른 본인의 언어사용을 살펴보면 <표4-6>에서 보는바와 같이, 고교미만에서 100%, 고졸에서 90.2%, 대졸에서 81.3%, 대학원졸에서 90%로 일한 이중언어 사용이 압도적으로 높게 나타나고 있으며, 그 밖의 언어사용은 미미한 수준을 보이고 있어 학력별 차이를 거의 볼 수 없으며, 본인의 언어사용은 일한 이중언어 사용에 편중되어 있음을 알 수 있다.

<표4-6> 학력별 본인(부인)의 언어사용 (인원(%))

	고교미만	고졸	대졸	대학원졸	합계
일본어	0	1(2.4)	3(6.3)	0	4(3.8)
한국어	0	0	0	0	0
영어	0	0	1(2.1)	0	1(1)
일본어+한국어	6(100)	37(90.2)	39(81.3)	8(90)	90(85.7)
일본어+영어	0	1(2.4)	0	0	1(1)
한+일+영	0	2(4.9)	5(10.4)	2(10)	9(8.6)
합계	6(5.7)	41(39)	48(45.7)	10(9.5)	105(100)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다

4.7 부인의 학력별 남편의 언어사용

부인의 학력에 따른 남편의 언어사용을 살펴보면 <표4-7>에서 보는바와 같이, 일본어 사용이 고교미만에서 83.3%, 고졸에서 41.5%, 대졸에서 41.7%로 가장 높으며, 특히 고교미만에서는 압도적으로 높게 나타나고 있다. 대학원졸에서는 일한의 이중언어 사용이 54.5%로 가장 높게 나타나고 있으며, 고졸과 대졸에서 가장 다양한 언어사용이 이루어지고 있음을 알 수 있다.

대학원졸에서는 일본어와 영어의 병용이 다른 학력에서 보다 월등히 높게 나타나고 있는 반면, 한일영 삼중언어의 사용은 전혀 보이지 않고 오히려

대졸에서 가장 높게 나타나고 있음을 알 수 있다. 따라서 부인의 학력에 따라 남편의 언어사용이 다양하게 나타나고 있음을 알 수 있다.

〈표4-7〉 부인의 학력별 남편의 언어사용 (인원(%))

	고교미만	고졸	대졸	대학원졸	합계
일본어	5(83.3)	17(41.5)	20(41.7)	1(9.1)	43(41)
한국어	0	0	0	0	0
일본어+한국어	0	15(36.6)	15(31.3)	5(50)	35(33.3)
일본어+영어	1(16.7)	5(12.2)	2(4.2)	4(36.4)	12(11.4)
한국어+영어	0	1(2.4)	3(6.3)	0	4(3.8)
한+일+영	0	3(7.3)	8(16.7)	0	11(10.5)
합계	6(5.7)	41(39)	48(45.7)	10(9.5)	105(100)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다.

4.8 부인의 학력별 자녀의 언어사용

부인의 학력에 따른 자녀의 언어사용을 살펴보면 〈표4-8〉 과 같다.

〈표4-8〉 부인의 학력별 자녀의 언어사용 (인원(%))

	고교미만	고졸	대졸	대학원졸	합계
일본어(1)	1(16.7)	12(35.3)	10(34.5)	2(25)	25(32.5)
한국어(2)	0	0	0	1(12.5)	1(1.3)
일본어+한국어(3)	4(66.7)	15(44.1)	16(55.2)	5(62.5)	40(51.9)
일본어+영어(4)	0	1(2.9)	0	0	1(1.3)
한+일+영(6)	1(16.7)	6(17.6)	3(10.3)	0	10(13)
합계	6(7.8)	34(44.2)	29(37.7)	8(10.4)	77(100)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다.

※ 자녀의 나이가 너무 어려 말을 할 수 없는 경우나 무응답은 분석에서 제외하였다

일한 이중언어 사용이 고교미만에서 66.7%, 고졸에서 44.1%, 대졸에서 55.2%, 대학원졸에서 62.5%로 가장 높았으며, 일본어의 사용은 고졸 35.3%, 대졸 34.5%로 다른 학력에 비해 높게 나타나고 있음을 알 수 있다.

4.9 일본 정착년도와 자녀의 언어사용

일본 정착년도에 따른 자녀의 언어사용을 살펴보면 <표4-8> 에서 보는바와 같이, 일본거주 7년 이하에서는 65%, 8-13년에서는 67.7%로 일본어와 한국어의 병용이 가장 높게 나타나고 있는 반면, 14-18년에서는 46.2%, 19년 이상에서는 61.5%로 일본어 사용이 가장 높게 나타나고 있으며, 7년 이하에서 15%, 8-13년에서 25.8%가 일본어를 사용하고 있는 것을 볼 때, 일본 정착년도와 비례하여 자녀의 일본어 사용이 증가하고 있어 정착년도가 길어질수록 언어 환경의 영향을 많이 받고 있음을 알 수 있다. 따라서 일본 정착년도와 자녀의 언어사용과는 매우 깊은 상관관계가 있다고 하겠다.

<표4-8> 일본 정착년도와 자녀의 언어사용 (인원%)

	7년 이하	8년-13년	14년-18년	19년 이상	합계
일본어	3(15)	8(25.8)	6(46.2)	8(61.5)	25(32.5)
한국어	1(5)	0	0	0	1(1.3)
일본어+한국어	13(65)	21(67.7)	3(23.1)	3(23.1)	40(51.9)
일본어+영어	0	0	1(7.7)	0	1(1.3)
한+일+영	3(15)	2(6.5)	3(23.1)	2(15.4)	10(13)
합계	20(26)	31(40.3)	13(16.9)	13(16.9)	77(100)

※ 검정부분은 최고치를 나타낸다.

※ 자녀의 나이가 너무 어려 말을 할 수 없는 경우나 무응답은 분석에서 제외하였다

5. 결론

본 연구는 세계적으로 급속히 확산되고 있는 다문화·다민족가정을 사회의 일원으로서 받아들이고, 나아가 그들만의 특성을 살려 사회에 이바지하기 위하여 다문화사회 발전프로그램 중, 언어영역의 기초 자료 제공을 목적으로 일본에 거주하고 있는 「夫日本-妻韓國」의 국제결혼 부부를 대상으로 하여 다문화가정의 언어사용을 조사·분석한 것이다. 고찰을 통하여 얻어진 지견을 정리하면 다음과 같다.

1) 일본의 총 결혼 건수에 국제결혼은 1975년에 0.6%이었으나 2005년에는 5.6%로 약 10배가 증가했으며, 沖繩을 제외한 일본 전역에서 「夫日本-妻外國」

형태의 국제결혼이 압도적으로 높게 나타나고 있다.

2) 가정에서의 언어사용은 51%로 일본어가 가장 높으며, 부인의 연령별로는 20대와 50대 이상에서 일본어 사용이 압도적으로 높아 언어 환경의 지배를 가장 많이 받는 세대로 나타나고 있는 반면, 30·40대는 일한 이중언어 사용이 가장 높게 나타나 세대별 차이를 보이고 있다.

부인의 학력별로는 전 학력에서 일본어 사용이 가장 높고, 학력이 높아짐에 따라 가정에서 한국어 사용이 증가하고 있다.

3) 본인(부인)의 언어사용을 연령별·학력별로 보면, 전 세대와 전 학력에서 일한 언어의 병용이 가장 높게 나타나고 있다.

4) 남편의 언어사용을 부인의 연령별로 보면, 20·40·50대이상에서 일본어가, 30대에서 일한 이중언어 사용이 가장 높게 나타나고 있어, 남편의 언어사용이 가정에서의 언어사용과 상관관계가 깊다.

학력별로는 고교미만·고졸·대졸에서는 일본어가, 대학원졸에서는 일한 언어병용이 가장 높게 나타나고 있으며, 고졸과 대졸 부인의 남편에게서 한국어, 일본어, 영어와 같이 언어를 다양하게 사용하는 것으로 나타나고 있어, 부인의 언어사용이 일한 이중언어 사용에 편중되어 있는 것과는 다른 양상을 띠고 있다.

5) 자녀의 언어사용을 부인의 연령별·학력별, 일본 정착년도별로 살펴보면, 연령별로는 20·30·40대에서는 일한 언어병용이 가장 높은 반면, 50대 이상에서는 100%가 일본어만을 사용하고 있다. 또한 어머니의 연령과 비례하여 자녀의 일본어 사용비율이 높아지고 있어, 어머니의 연령과 자녀의 언어사용과는 상관관계가 깊다.

학력별로는 전 학력에서 일한 이중언어 사용이 1위를 차지하고 있으며, 2위인 일본어 사용은 고졸과 대졸에서 가장 높게 나타나고 있다.

일본 정착년도별로는 일본거주 7년 이하와 8-13년에서 일한 이중언어 사용이 가장 높고, 14-18년과 19년 이상에서는 일본어 사용이 가장 높아, 정착년도가 길어질수록 언어 환경의 영향을 많이 받고 있음을 알 수 있다.

결론적으로 일한 국제결혼가정의 한국여성은 대체로 일한 이중언어를 사용하고 있으며, 자녀 또한 일한 이중언어 사용이 비교적 높게 나타나고 있어, 국제결혼 가정에서의 언어 사용이 바람직한 방향으로 가고 있는듯하나, 일본

에서의 정착년도가 길어질수록, 어머니의 연령이 높아질수록 자녀의 한국어 사용이 급속히 감소하고 있어, 자녀가 성인이 되었을 때에는 어머니의 모국어인 한국어를 상실할 우려가 매우 높다.

이중언어교육에서는 목표언어에 대한 능력을, 원어인 수준의 언어능력이 라는 목표를 가지고 학습하게 된다. 이러한 점에 비추어 볼 때, 다문화 가정은 이중언어를 학습하는데 최적의 조건임에 틀림없다. 그럼에도 불구하고 2세대가 성인이 될 때까지 한국어를 지키지 못한다는 것은 매우 안타까운 일이다. 궁극적으로 그들의 자녀가 이중언어를 가지고 사회에 기여하게 되는 것은 성인이 된 후의 일이고, 자녀들의 정체성 확립 또한 매우 중요한 만큼, 한국어 교육은 반드시 해야 하는 의의 있는 일이지만, 의식적이지 않으면 실패하기 쉬우므로, 자녀의 한국어 교육을 위해서는 어머니가 철저한 의식을 가지고 계획적으로 지속적인 노력을 해야 할 것이다.

<參考文獻>

- 김민수(2005) 「재외교포의 이중언어에 대하여」 『이중언어학회』 제29호 이중언어학회 pp.2-4
- 문순영(2007) 「현행법(안)을 통해 본 국제결혼 여성이주민을 위한 사회적 지원체계에 대한 탐색적 연구」 女性研究 2007. Vol.72 No.1 pp.109-142
- 박영순(2005) 「이중언어교육의 본질과 한국어교육의 과제」 『이중언어학』 제29호 이중언어학회 pp.11-12
- 임경혜(2004) 「국제결혼 사례별로 나타난 가족문제에 따른 사회복지적 대책에 관한 연구」 대구대학교대학원 석사학위논문 pp.16-19
- 한영옥(2008) 「다문화 가정의 언어사용에 관한 연구-한일 국제결혼가정을 중심으로」 日本研究 第25輯
- 河原俊昭・岡戸浩子 編著(2009) 『國際結婚-多言語化する家族とアイデンティティ』 明石書店 p.99
- ブレーガー・ローズマリー&ヒル・ロザンナ(2005) 『異文化結婚-國境を越える試み』 吉田正記監譯 新泉社 p.45
- 위클리조선(2005. 5. 17. 09:35) [기고]라쿠엔코리아 사장 지한진
- 조선일보 (2008. 5.13) 기획 시리즈 “동남아엄마”의 아이들 5. 좌담 A6면

厚生省労働統計一覽, 2005

厚生省労働統計一覽, 2006

國際觀光振興機構〈JNTO〉2007년 말 통계자료

CBS 라디오 (2006. 9. 8. 오후 5:55) “뉴스야 놀자” 이진성 PD, CBS 노컷뉴스

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

계재결정: 01월 29일

<Abstract>

**The Research of Language-Use In Intermarried Households
Between Japanese and Korean**

This research focuses on the language-use of the family members from the multicultural household that consist of Japanese husband and Korean wife residing Tokyo and the capital regions of Japan. The collected data includes the language-use of the wife, the husband, and the children as well as the entire household. Such data is analyzed according to the wife's age, level of education, and number of years of residence in Japan. As a result, the research has concluded that the language-use of each household differ more by the age rather than the level of education. Although the majority of the wives in all ages mainly speak only Japanese, the use of Japanese and Korean languages has increased as their education level increased.

Lastly, although children, whose mothers are under fifties, mainly use Japanese and Korean languages, children, whose mothers are over fifties, use only Japanese language. In conclusion, Children's use of Japanese language increased as their mothers' age level has increased. Moreover, the use of both Korean and Japanese by the children has increased as their length of residence in Japan increased. Therefore, a correlation exists between the length of residence in Japan and the children's language-use.

전근대 한일 양국의 여성담에 관한 소고*

— 조선후기 야담과 우키요조시(浮世草子) 속
이색적(異色的) 여성상을 중심으로 —

고 영 란**

youngrankoh@hanmail.net

< 目 次 >

>

1. 서론	2.2 이색적 여성의 갈등
2. 이색적 여성의 성격	2.2.1 이색적 여성의 위상적 갈등
2.1 이색적 여성의 애정문제	2.2.2 이색적 여성의 경제적 갈등
2.1.1 유부녀의 간통 유형	2.2.3 이색적 여성의 성별적 갈등
2.1.2 기녀, 첩, 유녀의 감정 충실 유형	3. 결론
2.1.3 애육에 집착하는 유형	

Key Words : 이색(unique), 우키요조시(Ukiyozousi), 야담(Yadam),
여성상(woman's characters), 비교(comparison)

1. 서론

일본 근세기(近世期) 민중의 이야기를 대중화한 산문으로서 우키요조시(浮世草子)를 들 수 있다. 우키요조시는 평생 유흥에 빠져 사는 조닌(町人) 남성의 삶을 그린 이하라 사이카쿠(井原西鶴 : 1642-1693, 이하 사이카쿠)작 『호색일대남(好色一代男 : 1682)』에서 비롯되어, 출판사 하치문지야(八文字屋)의 인

* ‘이 논문은 2009년 정부(교육과학기술부)의 재원으로 한국학술진흥재단의 지원을 받아 수행된 연구임’(KRF-2007-362-A00019)

** 고려대학교 일본연구센터 HK연구교수, 일본문학 및 문화 전공

기 작가 에치마 기세키(江島其磧 : 1666-1735, 이하 기세키)에 이르러, 그 평이 한 문장을 통해 널리 보급되었다. 기세키는 우키요조시의 하위 장르인 가타기 모노(氣質物)¹⁾에서 인물이 속한 신분, 직업 등에 요구되는 기존의 윤리 및 가치관과 부합하지 않는 성향을 띠는 이색적²⁾인 아들, 딸, 아버지의 모습을 그렸는데, 주인공들은 주로 경제적 부유함 속에서 특이한 개인적 취향을 드러 내어, 골계화 될 수 있는 여지를 지니고 있었다. 이와 같은 인물들을 가타기모노(氣質者)라고 부를 수 있고, 이들 가타기모노는 근세 후기의 게사쿠(戲作) 속 유형적인 인물과는 거리가 멀다 하겠다.

가타기모노(氣質物)의 인기는 당시에 유행했던 세책(貫冊) 가게의 보급력 이 있었기에 가능했다고 할 수 있는데, 세책가게는 조선왕조에서도 후기에 보편화 되어, 이를 통해 조선 후기 소설도 널리 보급되었다.³⁾ 조선 후기 소설 속 인물은 비범하고도 초현실적인 성격을 지녀, 이 역시 유형적이라고 보기는 어렵다. 그런데 이러한 이색적 인물상은 야담(野談)⁴⁾ 속 인물상을 답습한 것 이라고 해도 과언이 아니다.⁵⁾ 이에 가타기모노와 야담 속 이색적 인물상을

- 1) 인물을 위상, 직업 등의 유형별로 묶어 그 유형성과는 동떨어진 모습을 그린 우키요조시 의 한 장르. 이에 해당하는 작품으로 기세키의 『세켄 무스코 가타기(世間子息氣質 : 1715)』, 『세켄 무스메 가타기(世間娘氣質:1717)』, 『우키요 오야지 가타기(浮世親仁氣質:1720)』 등이 있다. 이러한 가타기모노는 메이지기(明治期)까지 지속적으로 집필되었고, 쓰보우치 쇼요(坪内逍遙)의 처녀작 『도세이 쇼세이 가타기(当世書生氣質 : 1885-1886)』도 가타기모노라고 할 수 있다.
- 2) 어떤 유형에 속하는 성질로부터 이탈된, 혹은 상이한 성격을 의미한다.
- 3) 일본 세책 가게에 대해서는 하세토모 지요지(長友千代治)의 『近世貸本屋の研究』(東京堂 書房, 1982)에서 시사 받은 바 크다. 조선기의 세책가게에 대해서는 아래 논문에서 시사 받은 바 크다. 정명기(2003) 「세책본소설의 유통양상」, 『古小說研究』16집, 한국고소설학회, pp.71-99, 정병설(2003) 「세책 소설 연구의 쟁점과 방향」 『국문학연구』10집, 국문학 회, pp.27-57, 전상욱(2008) 「세책 대출장부 연구」, 『溯上古典研究』34집, pp.9-65
- 4) 정명기편(2001) 『야담문학연구의 현단계 1』보고서, p.12 「야담은 이야기꾼들에 의해서 이야기되거나, 또는 유식자에 의하여 문자화된다. 일단 문헌에 정착된 이야기는 또 다른 유식자에 의하여 轉寫되거나, 또 다시 구전되기도 한다.」(조희웅) pp.54-55 「그러나 한문단편의 경우 원래 작가의 허구적 창작의 산물이 아니라 구연되던 이야기를 글로 적어놓은 것이 대부분이다. 그러므로 기록화 이전의 구연과정에 일단 주목할 필요가 있는 것이다. 서사물의 능숙한 구연자인 ‘이야기꾼’들의 활동이 이조 후기로 내려오면서 상당히 활기를 띠어 전문적인 예능으로 발달하고 있었는데, 필자는 당시 ‘이야기꾼’의 활동양상을 講談師, 講唱師, 講讀師의 세가지 유형으로 구분해서 파악해 본 바 있었다.」(임형택)
- 5) 조광국(2002) 『기녀담 기녀등장소설 연구』도서출판 月印, p.14 「둘째, 기녀담의 기녀

비교하여, 그 의미하는 바를 이해해 보고자 한다.

여기서 우키요조시는 다분히 작가의 창작 의도 하에 집필된 것인 반면, 야담은 향담(巷談)이나 야사의 취사 선택적 기록이라고 볼 수 있어, 상이한 두 장르에 묘사되는 인물상을 비교하는 것이 문제가 될 수도 있겠다. 그러나 우키요조시 또한 전적으로 창작에 의한 것이 아니고 향담과 야사 등이 각 일화의 기초가 되는 경우가 빈번하다는 점, 이에 반해 야담 또한 첨삭 및 개변한 측면이 있다는 점을 감안하면⁶⁾, 인물상의 상이점을 조감하는 연구로서 우키요조시와 야담의 비교연구는 필요한 작업이라고 생각한다. 또한 조선 후기 소설이 상당한 길이를 지니고 본격적인 줄거리를 지니는 점에 반해, 우키요조시는 야담의 일화(逸話)에 가까운 비교적 단편적 줄거리와 길이를 지닌다는 측면에서도, 우키요조시와 야담의 비교연구가 우선되어야 한다고 생각한다.

한편 야담 속 일부 여성은 남성에게 순종적이고 귀속적인 모습으로만 묘사 되는 것은 아니어서, 그 특이성과 의의는 한국한문학계에서 연구되기 시작하고 있다. 일례로 『천예록(天倪錄: 17세기 후반 성립)』⁷⁾의 여성담에 국한하여 여성상의 성격을 분류한 이신성의 연구가 있다.⁸⁾ 그 결과 여성은 『천예록』의 여성상은 신분상승형, 위선자 폭로형, 신분 갈등형, 가부장제 도전형, 절대권력 대항형으로 분류된다. 이러한 유형은 당시의 여훈서(女訓書)에서 권장하듯

自意識 구현양상에 대해 고찰하고자 한다. 기녀담은 기녀등장소설에 비해 이른 시기에 출현하여 기녀 자의식 구현의 단초를 제공해준다는 가치가 있다.

- 6) 전개서 『야담문학연구의 현대계 1』 p.12 「야담의 내용은 흔히 화자 또는 기록자의 기억 상실을 매우기 위하여, 또는 흥미 재고를 위하여 임의대로 첨삭되거나 개변되어지는 경우가 있다. 그러나 이러한 경우라고 임의창작에 의하기보다는 자신의 기억 한 구석에 남아 있는 설화적 재산을 끄집어내어 혼입시키게 된다. 이처럼 설화적 요소에 창작적 요소가 쉽게 끼어들 수 있고, 또 양자 사이에 명확한 경계선을 구기가 어려운 까닭에 하나의 작품을 놓고 야담인가 소설인가 논쟁이 종종 야기되어왔으며, 경우에 따라서는 소설의 발생 시기를 『삼국유사』에까지 올려 잡으려는 가설까지 제기되어 왔다.」(조희웅)
- 7) 김동욱, 최상은 공역(2003) 『천예록』, 명문당(이후 텍스트로 삼는다)에는 65, 66화가 게재 되어 있고, 그 내용은 여성의 간통과 남편의 우매함이 주를 이룬다. 그러나 이 내용을 정한국역 『천예록』(2005, 성균관대학 출판부)에서는 담지 않고 있다. 본고에서는 김동욱, 최상은 역을 따른다. 그러므로 『천예록』에는 간통담이 수록되어 있다고 판단한다.
- 8) 이신성(2001) 「『천예록』소재 여성인물야담성격의 연구」 『東洋漢文學研究』, 15호, 동양한문학회, pp.251-283

이 부모나 남편에게 순종하고 가정을 지키는 것을 제일로 삼는 유형과는 거리가 멀다. 이들 여성들은 서민층인 경우도 있지만 기녀·노비 등 하층민인 경우도 있어, 그녀들의 행위나 성격을 단순히 개성에 기인한 것으로 볼 수만은 없다는 것이 본고의 입장이다. 환언하자면 『천예록』의 여성담에는 당시 여성들의 신분과 경제적 한계로부터 야기되는 울분과 욕망이 묘사되어 있다고 보는 것이다. 이와 같은 여성들의 울분과 욕망은 조선후기 소설 속에도 계승된다고 볼 수 있는데, 특히 그 특징이 두드러지는 것은 여성영웅소설이다.⁹⁾ 그리고 이러한 여성의 울분과 욕망은 가타기모노를 비롯한 우키요조시에서도 종종 묘사된다. 이에 야담과 우키요조시 속 이색적 여성상을 통해, 근근대 한일 양국의 여성담의 일면을 비교할 수 있다고 생각한다.

구체적 연구대상은 다음과 같이 선별하였다. 우키요조시 중에서는 사이카쿠의 『호색오인녀(好色五人女 : 1686)』, 기세키의 『세켄 무스메 가타기(世間娘氣質 : 1715)』, 우에다 아키나리(上田秋成 : 1734-1809)의 『쇼도 기키미미 세켄자루(諸道聽耳世間猿 : 1766)』, 『세켄 데카케 가타기(1767)』를 살펴본다. 야담 중에서는 『어우야담(於于野譚 : 1622)』, 『천예록』, 『계서야담(溪西野談 : 1833-1839)』을 살펴본다.¹⁰⁾ 연구대상은 17세기부터 18세기까지 작품 중 여성의 이색성에 초점이 맞추어져 서사되는 것을 선별하되, 『계서야담』은 그 주된 내용이 17세기-18세기의 실화를 엮었다는 점에서 연구대상으로 삼는다.

연구대상 속 일본의 이색적 여성은 총30명, 한국의 경우는 총20명이다.¹¹⁾ 일본의 경우 우키요조시라는 본격적인 통속소설 장르 내에서 일정한 주제를

9) 정병헌, 이유경 엮음(2000) 『한국의 여성영웅소설』, 태학사, p.265 「상대적으로 소외되었던 집단인 여성의 욕구를 반영하고, 그 성취를 드러냈다는 점에서 이 부류의 소설은 문학의 존재 이유를 설명하는 데 가장 적합한 성격을 지니고 있다. (중략) 그런 점에서 실제의 모습과 달리 여성의 꿈을 형상화한 것은 일차적으로 문학의 존재 이유와 맞닿아 있는 것이다.

10) 이후 지면관계로 『호색오인녀』는 (호), 『세켄 무스메 가타기』는 (무), 『쇼도 기키미미 세켄자루』는 (쇼), 『세켄 데카케 가타기』는 (데), 『어우야담』은 (어), 『천예록』은 (천), 『계서야담』은 (계)로 생략한다.

11) 여성이 서사의 초점이 되는 이야기 중에, (호)는 100%, (무)는 76%, (쇼)는 26%, (데)는 50%, (어)는 26%, (천)은 100%, (계)는 14%에 이색적 여성상이 그려진다. 수치는 반올림하였다. (계)의 <일타홍 이야기>, <선천기 이야기>, <옥소선 이야기>는 (천)과 흡사하다.

떤 작품이 출판되었다는 점을 감안하면, 야담 속에서 그려진 이색적 여성의 수가 상대적으로 적은 것은 아니다. 이들 이색적 여성들은 특별히 애정문제와 관련하여 묘사되는 경우가 많았는데, 유부녀이지만 자의, 혹은 반타의적으로 간통하는 유형, 기녀·유녀이지만 자신의 사랑을 위해 감정에 충실한 유형, 자신의 애육에 집착하는 유형으로 나눌 수 있어, 이를 우선 순서대로 살펴보고자 한다.

2. 이색적 여성의 성격

2.1 이색적 여성의 애정문제

2.1.1 유부녀의 간통 유형

(호)2권에는 유부녀 오센(おせん)의 애정담이 전개되고, 그 대강은 다음과 같다. 미녀 오센은 다루야와 결혼하여 잘 살지만, 어느 날 고지야(麴屋) 주인 조자에몬(長左衛門)을 도와주려다가, 그의 부인으로부터 조자에몬과의 관계를 오해받는다. 조자에몬의 부인에 대한 복수심 때문에 오센은 실제로 조자에몬과 깊은 관계가 되고, 이를 남편 다루야가 발견하여 오센 가슴에 못을 박아 죽인다. 이렇듯 오센이 간통에 이르는 심리를 아래에서 확인해 보자.

저런 질투가 심한 부인을 데리고 사는 것이야말로, 저 남자의 인과인가보다. 오센은 (조자에몬의 부인이 퍼뜨린 거짓 소문을) 고민스러워하면서도 참고 들으며 지냈는데, ‘생각해보면 볼수록 못된 마음씨이다. 이미 누명을 쓴 상태이니, 더 이상 시비를 가릴 수도 없고, 저 조자에몬님에게 정을 주어, 저런 여자의 콧대를 꺾어 버려야지.’라고 생각한 후에, 특별한 마음을 쓰기 시작하여 곧 (조자에몬과) 정분이 나고, 몰래 편지를 나누며 동침할 날을 기다린다.¹²⁾

12) 麻生磯次·富士昭雄編(1983)『対訳西鶴全集 好色五人女』, 明治書院, p.58. (이하 번역 및 밑줄은 인용자에 의하고 텍스트로 삼는다.) 「かかる格気の深き女を持ち合あすこそ、その男の身にして因果なれ。おせん、迷惑ながら聞き暮せしが、『思へば思へばにくき心中、とても濡れたる袂なれば、この上は是非にも及ばず、あの長左衛門殿に情けをかけ、あんな女に鼻をあかせん』と思ひそめしより、格別の心ざし、程なく恋となり、しのびのびに申し交し、いつぞの首尾を待ちける。」

위의 인용문을 통해 알 수 있듯이, 유부녀 오센의 간통은 처음부터 의도된 것이 아닌, 복수심에 의한 것임을 알 수 있다. 오센은 “일시적으로 장난쳐서 소맷자락을 잡아당기는 데에도 거침없이 소리를 질러, 그 (장난친) 남자가 (오센이 남녀간의) 정취를 모르는 것에 슬퍼하고, (이 때문에) 후에 그녀에게 말 거는 사람도 없었다.(かりそめにたはふれ、袖つま引くにも、遠慮なく声高にして、その男無首尾をかなしみ、後にはこの女に物いふ人もなかりき。)”¹³⁾라고 묘사되듯이, 결혼 전에는 남성에 대한 거부감마저 있는 순진한 여성이었다. 이러한 오센이 오해를 받아 ‘사회적 약자’로 전락하며 간통이란 극단적 선택을 하게 되는 것이다. 이와 같이 처음부터 의도된 것은 아니지만, 결과적으로 유부녀가 간통하게 되는 이야기는 (호)3권에도 등장한다.

유부녀 오산(おさん)은 대단한 미녀였다. 그녀의 남편이 잠시 집을 비운 사이, 데다이(手代:가게 관리인) 시게에몬(茂衛門)과 오산은 동침하게 된다. 시게에몬은 오산을 하녀 린(りん)으로 착각한 것이었다. 오해에서 비롯된 오산과 시게에몬의 관계이지만, 둘은 자살한 척 하고 남매 행세를 하며 숨어 살다가 결국 발각이 되어 처형당하고 만다. 이렇듯 오산이 간통에 이르는 과정을 다음 인용문을 통해 살펴보자.

‘그렇다고는 하지만, 아주 미운 놈이다. 세상에 남자 가뭇은 생기지 않을 것이다. 린도 괜찮은 미모인데, 시게에몬 같은 정도의 남자를 설마 앞으로 못 갖겠느냐?’라며 거둬(시게에몬에게서 온) 편지 때문에 한탄하며, ‘시게에몬을 흘려 골탕 먹여야겠다.’라고 연애편지를 거둬(린 대신에) 쓰고, (중략) ‘결코 이 일이 세상에 알려지지 않을 일은 없을 것이다. 이렇게 된 이상은 이 몸을 버려, 목숨이 붙어있는 한 유명해져서 시게에몬과 함께 죽어야겠다.’라고 더욱 (시게에몬과의 관계를) 관두지 못하고,¹⁴⁾

오산은 하녀 린 대신에 편지를 써주고 시게에몬의 알미운 마음을 알아차리

13) 텍스트 p.50

14) 텍스트 p.74 「『さりとは、憎さも憎し、世界に男の日照りはあるまじ。りんも大方なる生れ付き、茂右衛門め程なる男を、そもや持ちかねる事やある』と、重ねて又、文にして嘆き、『茂右衛門を引きなびけて、はまらせん』と、かずかず書きくどきて、(中略)『よもやこの事、人にしれざる事あらじ。この上は身を捨て、命かぎり
に名を立て、茂右衛門と死出の旅路の道づれ』と、なほ止めがたく、」

게 되었는데, 린 대신 잠자리를 하는 척 하여 창피를 주려 하였다. 그러나 깜박 잠이 든 사이 시계에몬과 잠자리를 갖게 되고, 그 결과는 죽음만이 남겨져 있다고 생각하며 죽음을 앞에 두고 오히려 격정적으로 시계에몬과의 사랑에 빠지게 된다. 앞서 확인한 오센과 더불어 오산은 ‘간통의 결과는 죽음뿐’인 ‘사회적 약자’가 되어 격정적인 심경변화를 일으켰다고 볼 수 있다.

한편 야담에서도 유부녀이지만 간통을 하는 여성이 (어)420화에서 묘사되니 이를 살펴보자. 한 상인(商人)이 비단을 팔러 왔다가 친정에 온 미모의 부인에게 미혹되어 간통하기에 이른다. 이 경우, 상인에게 매수된 유모가 부인을 속여 간통이 이루어지고, 부인은 끝내 자신이 간통 당한 사실을 모른다. 한편 (어)422화의 박엽은 젊은 시절 어떤 집에 들렀는데, 그 집 부인의 자태가 아름다운 것을 보고 간통하게 된다. 그런데 여기서 박엽과 여성은 ‘서로 기뻐하며 눈길을 주고받았다.’¹⁵⁾라고 묘사된다. 이는 앞서 살펴본 (호)의 오산, 오센보다도 한층 더 의도적인 간통이라고 볼 수 있다. 이와 께를 같이하는 여성은 (천)65화, 66화의 여성들이다. 이들의 일화는 대단히 골계적이라고 볼 수 있는데, 이는 앞서 (어)422화에서 간통담에서 박엽이 “소가 도망간다”며 여성의 남편을 속이는 골계적 전개와도 흡사하다. 일례로 (천)65화의 두 번째 여성의 경우를 살펴보자.

그녀도 셋서방을 데리고 방에 들어섰는데 본 남편이 밖에서 돌아오는 것이었다. 그녀는 즉시 남편을 맞아 두 손으로 남편의 두 귀를 잡아 높이 쳐들고 나가면서 흔들다가 밀어서 뒷걸음쳐 가게하며 말하였다. “당신 어디 가려고? 어디 가는 거야, 당신?” 본 남편은 자기 아내가 애교 부린다고 생각하고 이런 장난을 아내가 하는 대로 맡겨두었다.¹⁶⁾

위와 같이 야담 속 유부녀의 간통담은 대체로 여성이 애초에 적극적으로 간통에 가담한 것으로 설정되었으나, 간통행위 자체에 초점이 맞춰진 것이 아니고, 남편을 속이는 골계적 과정에 초점이 놓여있다. 즉 이색적 여성의 지략과 해학에 초점이 놓여있다고 볼 수 있다. 야담 속 간통녀들은 대부분

15) 신익철 외 3명 옮김(2004) 『어우야담』 돌베개, p.622

16) 텍스트 pp.297-298

‘사회적 약자’이지만, ‘심리적 약자’가 되지는 않았던 것이다. 이에 비해, 우키 요조시 속 간통녀들은 오해와 사고로 인한 ‘사회적 약자’가 되어, 격정적으로 심경변화를 일으켜 간통으로 치달을 수밖에 없었고, 결국 비극적 결말을 맞이하는 차이를 보여주었다.

2.1.2 기녀, 첩, 유녀의 감정 충실 유형

다음으로 사랑을 돈벌이의 수단으로 여겨야 할 기녀, 첩 혹은 유녀이지만, 사랑이란 감정에 충실한 경우를 살펴보도록 한다. (호)1권의 유녀 미나카와(皆川)는 세쥬로(清十郎)의 아버지가 유곽놀이를 반대하자, 걱정적 상태가 되어 자살을 하기에 이른다. 그녀의 자살은 사랑 앞에서 유녀의 신분적 한계를 뛰어넘지 못하는 좌절적 현실을 대변한다고 볼 수 있다. 한편 (테)1.1의 첩이었던 하나조노(花園)는 사랑하는 남자와의 삶을 위해 경제적 안전성을 버리고 야반도주를 하지만, 그녀가 맞이하는 결말은 다음과 같이 묘사된다.

“낙담을 하지 마오, 세상에 녹이 없는 자는 없다는데”, “그것도 그렇군요요”라며 포기하고, 부부는 찻집을 내고 대나무로 만든 의자에 화려한 시가라키 차를 마신다. (중략) 봄이 지나고 여름이 오자 가난해 지고, (중략) 서로 떨어지지 않는 부부사이라며, 부러워하던 소문도 다 옛날 일이다.¹⁷⁾

위의 하나조노는 경제적 안정을 보장해 주는 귀족의 첩이란 신분을 버리고, 사랑을 위해 한페이(半平)를 택한다. 그러나 그 결말은 ‘경제적 쇠락’이라는 좌절적 현실임을 위의 인용문은 시사하고 있다.

다음으로 (테)3.2, 3.3의 유녀 후지노(藤野)는 유녀 적에서 헤어난 상태인데, 사랑하는 남성을 위해 다시 유녀가 되어 돈을 벌고, 그 남성이 죽은 이후 비구니가 되어 공양을 드린다. 후지노가 비구니가 된 모습은 작중에서 “평생 과부로 살아 사이타로의 사후를 위해 열심히 기도하는 것은 중국에서 쓰었다고 하는 열녀전에도 그런 것은 없을 것이다.(一生やもめで身をかため、才太

17) 森山重雄(1977) 『上田秋成初期浮世草子評釈 世間妾形氣』, 国書刊行会(이하, 텍스트로 삼는다) p.195 「心おとすな世の中に無祿の人はないとやら、それもそうよと明らかに、女夫茶店の竹床几、はんなりとした信楽茶。(中略)春過ぎて夏は来にけり瘦世帯。(中略)継目はなれぬ女夫中と、うらやむうわさも一むかし。」

郎が追善をねんごろにとぶらひしは、毛唐人の書し列女伝にも、此かく成るはあるまじ。)¹⁸⁾라고 칭송받고 있다. 이렇듯 우키요조시 속 유녀 및 첩의 감정충실유형은 그 신분적 한계나 현실에 저항하려했을 때 여지없이 좌절적 현실에 직면하게 되고, 이에 반해 후지노와 같이 일생을 남성을 위해 희생한 경우에는 칭송받는 현실을 보여주고 있다.

그러면 기녀의 감정충실유형은 어떻게 묘사되는지, 그 일례의 개요를 아래에서 살펴보자.

<옥소선 이야기>

어린 서생과 평양 기녀 옥소선은 깊이 사랑하였는데, 서생의 아버지가 타지로 떠나게 되어 둘은 헤어진다. 이후 옥소선은 새로운 사또를 모셨고, 서생이 찾아오자 둘은 몰래 달아났다. 후에 옥소선의 내조로 서생은 과거에 급제한다.¹⁹⁾

위의 옥소선의 경우, 기녀라는 신분 때문에 서생의 아버지에 의해 자연히 이별을 맞이하게 된다. 여기서 옥소선은 현실적 저항 없이 새로운 사또를 모셨고, 다행히 서생이 찾아와 둘의 관계는 회복된다. <옥소선 이야기>의 경우, 앞서 본 유녀 미나카와와 달리, 여성이 아닌 남성, 즉 서생이 현실에 저항했다는 사실에 주목할 필요가 있다. 옥소선의 내조로 서생이 과거 급제 하였고, 후에 본부인이 되고 두 아들을 낳아 해로했다고 하는 결말은, 여성이 아닌 남성이 현실에 저항했기에 가능한 결말이라고 볼 수 있다. 즉 ‘후지노와 같이 일생을 남성을 위해 희생한 경우는 칭송받는 현실’과 흡사한 경우가, 바로 현실에 저항하지 않았던 옥소선의 모습에서 묘사되었다고 할 수 있다. 한편 여기에 <옥소선 이야기>와 관련된 흥미로운 연구가 있어 이를 살펴보고자 한다.

<월하선전>은 작자 미상의 한글본으로 1876년 이전에 출현한 작품으로서, 조선 후기의 관기 제도와 기녀 관련 풍속을 둘러싼 당대의 세태를 배경으로 애정 욕구의 실현과 인간의 존엄성을 형상화한 작품이다. (중략) <옥소선이야기>에서는 기녀수

18) 텍스트 p.280

19) (전)17화, (계)권4의 92에 게재되어있다.

청 풍속에 순응하는 옥소선이 그려졌다면 <월하선전>에서는 월하선이 애정회구의 식과 신분상승의식의 자의식을 지닌 인물로 성격이 창조되었음을 말해준다.²⁰⁾

위의 연구를 통해, <옥소선 이야기>는 후에 <월하선전>과 같이, ‘적극적 애정회구의식과 신분상승의식의 자의식’이라는 현실저항의 발현으로 발전되어 갔으리라는 점을 쉽게 추측할 수 있다. 이처럼 야담 속에서도 ‘적극적 애정회구의식과 신분상승의식의 자의식’을 표출한 여성이 묘사되는데, 이는 <일타홍 이야기>에서 확인된다. 그 개요를 아래에서 확인해 보자.

<일타홍 이야기>

일타홍은 심상공과 어릴 적 만나 사랑을 나누었는데, 심상공이 과거에 급제할 때까지 다시 만나지 않기를 일타홍이 먼저 제안한다. 이에 따라 심상공은 과거에 급제하였고, 이때까지 정절을 지켜온 일타홍은 재회 후 첩이 된다. 일타홍은 자신의 죽을 날을 예견하고 심상공은 아끼는 마음에 손수 염습을 하였다.²¹⁾

일타홍은 옥소선과 달리, 스스로 남성을 위해 이별을 고하고 기다리다가 심상공의 과거 급제 후 마침내 첩이 된다. 그녀의 모습은 현실에 저항했다고 하기 보다는, 지략으로써 현실을 타계해 갔다고 보는 것이 적절할 것이다. 그 지략이란 바로 ‘적극적 애정회구의식과 신분상승의식의 자의식’을 위한 것이라고 볼 수 있다. 이에 일타홍의 모습을 통해, 현실에 무작정 저항하는 것이 아닌, 지략으로써 스스로의 욕망과 자의식을 성취해 가는 새로운 유형의 여성상을 확인할 수 있다.

이상의 감정충실유형을 통해, 우키요조시의 유녀 혹은 첩이 현실에 저항한 경우, 대개 자살, 쇠락 등의 부정적 결과를 맞이하였고, 남성을 위해 희생한 경우는 칭송받았음을 알 수 있다. 또한 야담의 경우, 지략으로써 ‘적극적 애정회구의식과 신분상승의식의 자의식’을 성취한 유형이 출현하였다고 이해할 수 있다. 이를 통해, 우키요조시 속 감정충실유형은 주로 남성 중심적 시각에서 묘사되었다고 할 수 있는 반면, 야담 속 감정충실유형은 <옥소선 이야기>와

20) 전계서 『기녀담 기녀등장소설 연구』, pp.285-291

21) (전)18화, (계)권3의 77에 게재되어있다.

같이 남성 중심적 시각에서 묘사된 경우도 있었으나, <일타홍 이야기>와 같이 현실에 슬기롭게 대처하여 자신의 욕망과 자의식을 성취해 나아가는 새로운 여성상이 묘사되었다고 할 수 있다.

2.1.3 애욕에 집착하는 유형

우키요조시와 야담 속에서 애욕에 집착하는 여성이 종종 등장하는데, 그 일례로 (무)3.3의 불심이 깊어 결혼 했어도 잠자리를 갖지 않는 언니와 애욕에 물든 여동생의 대조적 이야기를 들 수 있다. 이 여동생에 대한 묘사는 다음과 같다.

이에 반해 여동생 오나쓰는 혼마치의 옷가게로 시집갔는데, 아랫사람과의 밀통을 즐겼다. ‘참을 수 없다’라며 혈기 왕성한 남편이 눈에 불을 켜고 화내자 부모가 (딸을) 여러 모로 혼냈고, 아나카의 조상을 모시는 절의 스님까지 모셔다가 여러 가지 용서를 구하여 세상에 소문나지 않게 했다. 이혼장을 받아 돌아왔는데, 조금도 (딸은) 이를 창피해하지 않고 젊은 가게 관리자와 이리저리 말장난을 친다.²²⁾

위의 오나쓰를 부모는 재혼 시키려고 하는데, 그 전날 밤에 험상 굳게 생긴 남성이 와서 오나쓰와 결혼약속을 했다며 횡포를 부린다. 이에 부모는 남성에게 돈을 쥐여주며 소문이 나지 않게 한다. 이렇듯 거듭되는 오나쓰의 애욕에 대한 집착은 의외로 권선징악적인 결말을 맞이하지 않고, “여동생은 (오늘도) 아무런 사고를 치지 않았는가?(妹めは何事も仕出来はせぬか)”²³⁾라고 부모가 조마조마해 하며 무마하는 것으로 결말을 맞이한다. 이처럼 애욕에 집착하여도 권선징악적인 결말을 맞이하지 않고 끝까지 이야기 전개되는 경우는 (무)5.1의 26번 결혼하여 아이를 27명이나 갖는 여성의 이야기, (무)6.1에서 신분이 높은 여성이 바람이 나서 도망 다니며 남자들을 속이는 이야기에서도

22) 長谷川強校注(1989) 『新日本古典文学大系 世間娘気質』岩波書店(이하 텍스트로 삼는다), p.450 「是にかはって妹おなつは、本町の呉服屋へ縁につきしが、下々と密通あらはれ『堪忍せぬ』と血氣づよき息子が、血眼になって腹をたつるを、親々異見し其上に谷中の檀那寺の和尚までをかけて、さまざま詫言して世間沙汰なしに暇の状をもらふて立帰り、すこしも是を恥たる粧もなく、若い手代をとらへてはじゃらじゃらとの転合口。」

23) 텍스트 p.452

확인된다.

한편 (쇼)3.3의 늙어도 자신의 여성성을 포기하지 않는 우지에(宇治江)라는 마이코(舞子) 이야기, (테)1.2, 1.3에서 전개되는 늙어도 애욕에 집착하는 오하루(お春) 이야기, (테)4.1의 사랑하는 남자를 얻기 위해 여우로 변하는 게이코(芸子) 이야기는 여성의 애욕을 초현실적인 세계에서만 실현 가능한 것으로 묘사하였다.²⁴⁾

그러면 야담의 애욕에 집착하는 여성상은 어떤 양상을 띠는지, 그 대강을 아래에서 확인해 보자.

(어)427화

어릴 적 문장을 성취하고 용모가 빼어났던 정인지를 옆집 처자가 흠모하였는데, 하룻밤은 처자가 담장을 넘어와 그를 가까이 하고자 했다. 정인지가 정색을 하고 거절하자 그 처자가 소리를 질러 알리려 하였다. 정인지가 부모님께 허락을 받은 후 혼사를 이루도록 하자고 하며 잘 타일렀다. 그러나 정인지는 다른 집으로 옮겨 갔고, 처자는 마음에 상처를 입어 죽었다.

(어)428화

심수경은 젊은 시절 풍채와 거동이 아름다웠고 음악을 잘 알았다. 어느 날 거문고를 댔는데 나이가 젊고 고운 궁녀가 나와 거문고 소리 듣기를 청했다. 심수경은 몇 곡을 타 주고는 다시는 그 집에 거처하지 않았고, 궁녀는 상사병으로 노심초사하다가 끝내 병들어 죽었다.

위의 두 일화의 공통점은 여성이 남성을 흠모하고, 그 마음을 남성이 받아주지 않자 여성은 끝내 병들어 죽었다는 점에 있다. 이렇듯 애욕에 집착하는 야담 속 여성상은 공통적으로 비극적인 결말을 맞이한다고 볼 수 있다. 이는 앞서 (무)의 애욕에 집착하여도 권선징악적인 결말을 맞이하지 않고 골계적으로 이야기가 전개되는 경우, (쇼)나 (테)의 여성의 애욕이 초현실적인 세계에서

24) 줄고(2007, 8) 「氣質物の変容に関する一考察 - 『世間娘容気』から『世間妾形気』へ-」 『일본문화학보』34집, 한국일본문화학회

줄고(2009.09) 「아키나리(秋成)작 가타기모노(気質物) 속 인물상의 변모양상 - 기세키(其蹟)작 가타기모노와의 비교를 중심으로-」 『일본어문학』42집, 한국일본어문학회

만 실현 가능한 것으로 묘사되는 경우와는 거리가 멀다 하겠다. 즉 야담 속 애육에 집착하는 여성상은 우키요조시 속에서의 골계화와 초현실적 묘사에 비해, 비극적 결말을 맞이하는 것으로서, 그 의미가 부정되는 것으로 묘사되었다고 볼 수 있다.

2.2 이색적 여성의 갈등

2.2.2 위상적 갈등

우키요조시와 야담 속 이색적 여성 중에는 남성을 압도하는 인물이 있다. 남성에게 순종적인 여성상이 보편적인 봉건제 사회에서, 이는 특기할 만하다 하겠다. 우키요조시의 경우, (무)1.1의 지참금으로 남편을 얻었으나 유모의 손을 떠나지 못하는 부인, (무)1.2의 신분이 높은 사람의 버려진 딸로서 화려한 취향을 지니고 피리의 명수인 부인, (무)1.3의 우둔한 남편 대신에 글을 읽어 생계를 꾸려가는 고급 여관(女官)이었던 부인, (무)2.1의 부모가 무사신분이었고 이 때문에 무사 기질을 발휘하여 남편을 겁먹게 하는 부인, (쇼)4.2의 부자인 로닌(浪人)의 귀한 외동딸 오하시(お橋), (쇼)4.3의 유학자이자 의사인 아버지를 닮아 박학다식한 여성 등이 있다. 이 중, (무)1.3 속 부인의 모습을 살펴보도록 한다.

원래 부인의 필체는 훌륭하고 자유로운 필체라, 힘 있고 흐름이 물과 같아서 이시가키 기온의 유녀들은 끊임없이 (편지의 대필을) 부탁하여 남들은 모르는 돈을 모아 남편을 비롯한 5명의 식구들을 충분히 먹여 살려가고, (중략) ‘중신이 여기 왔습니다요’라며 (남편의) 엉덩이를 찔러 말하게 하니, 웃음거리가 되었다.²⁵⁾

이처럼 우키요조시 속 여성 중에는 이전의 고귀한 신분이나 직업, 현재의 경제적 우위 등을 통해 남편을 압도하는 인물이 있다. 기본적으로는 남편에게 귀속되는 것이 에도시대 여성의 위상인데, 신분적·경제적 조건에 의해, 여성

25) 텍스트 pp.405-409 「元來女筆は優れて自由なる筆の歩み、いさぎよくなる水のごとく、石垣祇園の遊女より暇なくたのみて、人のしらぬ銀をまふけて、亭主をはじめ五人口をゆるりとやしなふてとおりにけるに、(中略) 『年寄是におります』と、尻をついていはしけると、笑ひ種となつてはてけり。」

스스로의 의도와는 상관없이 남성을 압도하는 경우가 생긴 것이다. 이에 반해, 야담 속 여성 중 남성을 압도하는 경우는 다음과 같다.

(천)25화

성진사는 재주와 명성이 있었으나 성품이 본래 게으르고 못났다. 그의 아내도 역시 번성한 가문 출신으로 재주와 용모가 빼어났다. 집안을 잘 다스려 남편에게 옷을 지어주고 음식을 만들어 주는 것을 매우 잘하였다. 그러나 다만 그 성질이 사납고 포악하여, 남편이 조금이라도 뜻에 맞지 않으면 문득 꾸짖다가 때리기까지 하니, 성생이 아내를 매우 두려워하여 감히 항거하지 못하고 아내에게 잡히고 말았다.

(천)60화

연산군이 부녀자를 겁탈하는 일이 다반사였는데, 어떤 선비의 부인만은 연산군의 부름을 받고도 놀라는 기색이 없었다. 그녀는 거드랑이에 썩은 고기를 끼고 들어가 연산군이 내쳐서 절개를 지킬 수 있었다.

(계)권오134

조태역의 처 심씨는 본래 질투하는 성품이었다. 태역이 그를 호랑이처럼 두려워하였는데, 그 와중에 아끼는 기녀가 있었다. 그녀는 조태역의 처에게 피꼬리 같은 목소리로 노래하듯이 인사를 올렸다. 처인 심씨가 그녀를 보니 얼굴은 이슬을 머금은 복사꽃 같고, 허리는 바람에 나부끼는 가는 버들가지인데, 비단과 비취 구슬로 위아래를 장식한 모습이 참으로 경국지색이었다. 이를 취하지 않는 자는 남자가 아니라고 생각한 심씨는 기녀에게 남편을 허락하되, 탐하지 말라고 이른다.

위의 야담 속 여성은 순서대로 사납고 포악한 성격, 영민함, 사려 깊음 등, 개인의 인성과 지략으로써 남성을 압도하고 있다고 볼 수 있다. 이에 우키요조시의 경우, 여성의 개인적 의도와는 상관없이 각자가 속한 신분적·경제적 우위에 의해 남성을 압도하는 모습이 묘사되었던 반면, 야담의 경우는 인성과 지략으로써 남성을 압도할 수 있는 여성상이 묘사되었다고 하겠다.

2.2.2 이색적 여성의 경제적 갈등

야담 속에서는 여성의 경제적 욕망만이 부각되어 묘사되었다고 보기 어렵다. 여성의 경제활동을 거의 허용하지 않았고, 경제적 안정은 오로지 남편을

비롯한 남성에게 의해 얻을 수 있었다고 할 수 있는 조선시대에 있어서, 이는 지극히 자연스러운 것이라고 볼 수도 있다. 그러나 역설적으로 경제활동이 거의 불가능한 여성들이었기에, 경제적 욕망은 클 수도 있었을 것이다.

에도시대 일본에서도 정도의 차이는 있지만, 여성의 경제적 안정은 주로 남편을 비롯한 남성에게 의한 것이라고 볼 수 있다. 그 좋은 예가 (쇼)와 (테)의 일화라고 할 수 있다. (쇼)1.2의 정숙했던 오유후(お木綿)는 남편 사후 딸을 유녀로 만들어 돈을 벌며 악랄해지고, (테)2.3의 오이토(お糸)는 돈을 위해 스님들을 속이며, (테)3.1의 시게노(繁野)는 돈을 위해 남성을 속이지만 결국 들통 나고 만다. 그 중 (쇼)1.2의 오유후의 구체적 양상을 아래에서 살펴보자.

도깨비라고 생각하지만 다가갈 곳이 없는 처지라 눈물을 흘리며 유혹당하고, 자식을 위한 함정이라고 생각하며 어느새 동침하게 된다. 이 또한 하늘이 맺어준 연이라며 사이를 갈라놓았던 담도 부수고 표면적인 부인과 딸로서 술잔을 교환한다. (중략) 부인 오유후도 이런 악한 남자와 엮여서인지 악하게 변하여 성격이 뒤틀리고, 돈이 되는 딸이라며 귀엽기만 한 것이 아닌 욕심의 대상으로 본다.²⁶⁾

이처럼 오유후는 경제적 안정의 근원인 남편의 사망을 계기로 경제적 욕망을 표출하게 되는데, 이와 달리 남편이 존재함에도 불구하고 경제적 욕망을 드러내는 (테)2.3의 오이토를 살펴보자.

오이토도 날카로운 목소리로, ‘정말로 웃기는 사람들이오 남편이 있는 몸을 잡고 너무 웃기는 말을 하는군. 돌았는지 집을 잘못 찾아왔는지.’라 하며 알면서도 모른 척을 하니, 6명의 스님은 모두 간담이 서늘해지며,²⁷⁾

26) 전게서 『上田秋成初期評釈 諸道聴耳世間猿』 p.46 「鬼と思へど問るれば、かからふ嶋のなき身をは、涙ごかしに濡れられて、子ふゆへの闇にふみかぶり、ついそれなりのころび寝は、これも神の縁結びと、隔の壁も打ぬいて表むきの女房、娘とも親子の盃。(中略)女房おゆふも麻につる蓬ではなふて、松にまつはる捻藤根性に入かはり、銀になる娘じゃと可愛外に欲心魔王、」

27) 텍스트 p.245 「お糸も尖り声にて、ほんにおかしい衆じゃや、ぬしのある身を取らへて、なめ過ぎたものいひ、氣違ひか門たかへかと、みすみす成るいひかたに、六人ながら肝をつぶし、」

오이토는 유부녀임을 숨기고 미모를 이용해서 스님들에게서 경제적 원조를 받아 왔지만, 위와 같이 막상 원하는 만큼의 재물을 얻고서는 스님들을 모른 척 한다. 이와 같이 우키요조시 속에서는 남성의 부재와 상관없이 여성의 경제적 욕망이 묘사되고 있는 점에 반해, 야담 속에서는 이와 같은 여성상이 묘사되지 않는다는 점은 특기할 만하다고 하겠다.

2.2.3 이색적 여성의 성별적 갈등

여성의 경제적 욕망은 우키요조시에서만 묘사되었던 반면, 여성의 울분은 야담 속에서만 묘사된다. 우선 (어)의 울분으로 인한 복수가 묘사되는 경우를 살펴보자.

(어)48화

투기심이 있었던 문익성의 아내는 남편이 첩을 두는 경우, 자신은 냉수만 마시이 때문에 남편이 첩을 두지 못한다고 한다. 이 말을 믿은 이준민의 아내가 냉수만 마시다 죽었다. 문익성의 아내는 실은 몰래 매우 짠 비빔밥을 먹어 냉수만 마시는 것이었다.

(어)45화

아내를 두려워하는 자는 푸른 깃발 아래에, 그렇지 않은 이는 붉은 깃발 아래서라 하니, 어떤 남자가 붉은 깃발 아래 섰다. 붉은 깃발 아래 선 사내에게 그 연유를 물으니, 그 처가 남자 셋이 모이면 여색을 논하니 그 곳에 가지 말라하여, 붉은 깃발에 선 것이었다.

위의 두 일화 속 여성들은 남편을 믿지 못한다는 공통점이 있다. 각기 냉수 마시기, 남자가 모인 곳에 못 가게 하기 등, 소심한 복수이긴 하지만 그녀들의 일상은 남성에게 신경 쓰는 것, 즉 남성에게 의해 좌우되는 것임을 의미하기도 한다. 다음은 (천)의 복수담이다.

(천)21화

어떤 여사가 스스로의 명성과 지위를 믿고 교만한 태도를 바꾸지 않았는데, 수청 드는 기녀마저도 물리쳤다. 이에 감사와 부운이 껴들 내어 여사를 곤경에 빠뜨리고

자 하여, 기녀를 여염집 아낙으로 분장시켜 유혹하게 하였다. 두 사람은 가까워졌고, 기녀의 권유로 어사는 늙은 여인의 모습으로 분장한 후 잔치 자리에 함께 갔다. 곧 정체가 탄로 나고 어사는 이튿날 바로 떠났는데, 이때부터 나라에서 버림받았다.

(천)22화

경주의 어떤 제독관이 매번 기녀를 보면 꼭 담뱃대로 톱톡 치고 멸시하는 말을 하니, 기녀와 부윤 모두 제독관을 싫어했다. 그리하여 부윤이 제독을 속일 수 있는 기녀에게 상을 준다고 하자 어린 기녀 하나가 이에 응했다. 기녀는 여염집 아낙 행세를 하고 제독관을 유혹하였다. 그녀의 집에서 제독관은 술잔을 기울이는데, 헤어진 남편이 왔으며 제독관을 벌거벗은 채로 궤 속에 넣어 자물쇠를 채웠다. 그 궤는 관가에 가서 재판을 받으며 툽질을 당했고, 이에 놀란 제독관이 소리를 쳐서 제독관은 웃음거리가 되었다.

위의 일화 속 여성들은 앞서 본 부인들보다 남성들로부터 한층 더 억압받을 수밖에 없는 기녀라는 공통점이 있다. 이에 그녀들의 복수 또한 한층 더 강화되어, 남성을 사회적으로 매장해버리는 것으로 발전한다. 여기서 조선의 기녀에 상응하는 에도시대의 유녀가 있는데, 우키요조시 속에서 ‘왜 유녀의 복수담은 묘사되지 않았을까’라는 의구심이 든다. 그 이유로서 생각해 볼 수 있는 것은 유녀는 원칙적으로는 금전이라는 매개를 통해 남성과 교류하기에, 기녀와 같은 일방적 멸시와 억압을 받았을 가능성이 상대적으로 낮다고 하는 점이다. 반면 기녀는 조정에서 관리하는 일부 경기(京妓)를 제외하고서는 사회적으로나 경제적으로 상당히 어려운 처지에 놓여있었던 것이 사실이고,²⁸⁾ 위의 (천)의 일화와 같은 지방기(地方妓)의 경우, 남성으로부터의 다양한 멸시와 억압에 시달렸을 가능성은 상대적으로 높다고 할 수 있겠다. 그러므로 우키요조시보다는 야담 속에서 기녀의 복수가 묘사된 것은 자연스러운 일이라고 볼 수 있겠다.

28) 전계서 『기녀담기녀등장소설연구』 pp.32-46에 자세함.

3. 결론

이상의 작업을 통해, 다음의 다섯 가지 측면을 파악할 수 있었다.

첫째, 우키요조시의 간통담을 통해 일종의 사회적 편견과 부조리에 대한 복수로서 간통을 실행하기에 이르는 사회적 약자인 여성의 심경변화를 이해할 수 있었고, 한편 야담 속 간통담을 통해 당대 여성의 지략과 해학을 알 수 있었다.

둘째, 우키요조시와 야담의 유녀, 첩, 기녀의 감정충실유형 중 현실저항유형은 공통적으로 비극적 결말을 맞이한다는 점을 통해, 전근대 한일 양국에서 여성의 감정충실과 현실적 저항은 부정되었다고 볼 수 있다. 다만 <일타홍 이야기>를 통해, 조선후기의 비교적 이른 시기에 여성의 ‘적극적 애정회구의 식과 신분상승의식의 자의식’이 묘사되고 인정되었다고 볼 수 있다. 셋째, 우키요조시 속 여성의 애욕은 그 골계적 묘사와 초현실적 실현가능성을 통해, 전면적으로 부정되었다고 보기는 어려웠다. 한편 야담 속 여성의 애욕은 비극적 결말을 맞이하는 것으로서 그 의미가 부정되었다고 볼 수 있다.

넷째, 우키요조시 속 여성이 남성을 압도하는 경우는 신분적·경제적 우위에 의해 가능했다. 한편 야담 속 여성이 남성을 압도하는 경우는 오로지 개인의 인성과 지략으로써 가능했다. 이를 통해, 남성우위에 서는 여성은 일본에서는 사회적 요건에 의해, 한반도에서는 개인적 능력에 의해 가능했던 것으로 묘사되었다고 볼 수 있다.

다섯째, 우키요조시 속에서는 여성의 경제적 욕망이 묘사되었고, 야담에서는 성적으로 차별받는 여성의 사회적 울분이 묘사되었다.

위와 같은 결과를 통해, 우키요조시와 야담 속 이색적 여성상의 공통점과 차이점은 다음과 같이 정리될 수 있다. 우선 우키요조시와 야담 속 이색적 여성상 중 유녀, 첩, 기녀인데 현실에 저항하며 자신의 감정에 충실한 경우, 그 감정과 저항은 부정적인 결말을 맞이하였다. 이는 곧 사회적 신분을 뛰어넘어 자신의 감정에 충실하고자 한 여성들에 대한 에도막부(幕府)와 조선왕조의 억압을 의미한다. 다만 야담 <일타홍 이야기>를 통해, 여성의 애정회구 의식과 자의식의 실현이 조선 후기에 일부 긍정적으로 묘사되며 인정되었다고 볼

수 있다.

다음으로 우키요조시 속에서 여성의 애욕은 골계화 및 초현실화에 의해 적극적으로 부정되었다고 보기 어려운 반면, 야담 속에서는 죽음에 이르는 것으로 묘사되며 부정되었다고 볼 수 있다. 이는 에도막부 하에서는 여성의 애욕이 일부 묵인되었던 반면, 조선왕조 하에서는 긍정할 수 없는 것이었음을 반증한다.

한편 우키요조시 속에서 사회적 편견과 부조리에 대한 복수로서 간통에 이르는 여성들이 묘사되어 여성이 상대적으로 사회적 약자이며, 그 분노는 극단적으로 표출되었음을 알 수 있었다. 이러한 사회의 편견과 부조리에 대한 극단적 분노는 야담 속에서 다양한 복수로 묘사되었지만, 이때의 복수는 간통과 같은 자멸을 의미하지는 않았다. 역설적으로 에도시대 여성들의 복수는 곧 자멸을 의미한다는 것을 이해할 수 있었다.

우키요조시와 야담의 남성을 압도하는 유형을 통해, 에도사회는 성차별과는 별개로 신분적·경제적 우위가 존재하였음을 알 수 있고, 조선사회는 성차별이 존재함에도 불구하고 개인의 능력이 인정되고 있음을 알 수 있었다.

마지막으로 우키요조시는 여성의 경제적 불안정성, 야담은 성차별에 의한 여성의 불안정성이 강조되었다고 할 수 있다. 특히 기녀의 성적 차별과 신분적 차별에 의한 이중의 사회적 박탈감이 묘사되고 있어, 에도사회의 유녀와 조선사회의 기녀의 입지가 상이한 것임을 알 수 있었다.

지금까지의 고찰을 통해, 전근대 한일 양국의 여성담 속 이색적 여성이 성적, 신분적 차별을 받았다는 점에서는 유사한 갈등을 겪었을 것임을 쉽게 상상할 수 있다. 그러나 에도사회의 이색적 여성들은 현실적 저항을 위해 간통이라는 극단적 방법을 택한 반면, 조선사회의 이색적 여성들은 비교적 소극적으로 저항하였던 것으로 묘사되었다. 또한 조선사회의 이색적 여성들이 지략, 해학을 비롯한 개인적인 능력을 발휘하고 자아를 실현하고자 한 측면이 작중 인정되었던 반면, 에도사회에서는 여성의 애욕만이 묵인되었던 경향이 있다고 할 수 있다. 이는 에도사회와 조선사회가 여성의 성애와 능력을 바라보는 시각 차(差)를 시사하는 것이다. 또한 간통이라는 동일한 행위 때문에 에도사회의 여성은 비극적 결말을 맞이하고, 조선사회의 여성은 그 지략과 해학으로써 타계해 나아간다는 점에서, 전자는 상대적으로 이색적 여성들의

현실적 모습을 묘사하였고, 후자는 소설적 낭만성을 투시한 결과라고 볼 수 있다.

그러므로 본고의 연구 결과는 ‘이색적 여성’이라는 동일한 매개를 통해, 전근대 한일 양국의 픽션이 ‘인간을 어떻게 조명했는가’라는 의문에 대한 실마리를 확인할 수 있었다고 생각한다. 즉 에도사회는 이색적 여성들의 현실적 고민과 갈등의 묘사에 보다 치중한 반면, 조선사회는 이색적 여성들의 현실적 고민과 갈등을 인정하면서도, 한편으로 지략, 해학 등의 능력을 통해 현실을 헤쳐나아가고 성적 한계를 뛰어넘는 이상적 인간상을 조명하였다고 생각한다.

<參考文獻>

- 김동욱, 최상은 공역(2003) 『천예록』 명문당, p.129, p.134, pp.297-298
 신익철 외 3명 옮김(2004) 『어우야담』 돌베개, p.622
 이신성(2001) 『『천예록』 소개 여성인물야담성격의 연구』 『東洋漢文學研究』, 15호, 동양한문학회, pp.251-283
 정병현, 이유경 엮음 (2000) 『한국의 여성영웅소설』 태학사, p.265
 정명기편(2001) 『야담문학연구의 현단계 1』 보고사, p.12, pp.54-55
 조광국(2000) 『기녀담기녀등장소설연구』 도서출판 月印, p.14, pp.32-46, pp.285-291
 麻生磯次·富士昭雄編(1983) 『対訳西鶴全集 好色五人女』, 明治書院, p.50, p.58, p.74
 長谷川強校注(1989) 『新日本古典文学大系 世間娘気質』 岩波書店, p.450, p.452, pp.405-409
 深谷克己(2006) 『江戸時代の身分願望』 吉川弘文館, pp.112-116
 森山重雄著(1977) 『上田秋成初期評釈 諸道聴耳世間猿』 国叢刊行会, p.46, p.195. p.245 p.280

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

前近代日韓両国の女性談に関する小考

— 朝鮮王朝後期野談と浮世草子の中の異色的女性像を中心に —

本稿は浮世草子と朝鮮王朝後期野談の中の異色的女性像を考察したものである。今回の考察を通して、前近代の日韓両国の女性談の中の異色の女性たちが共に性的、身分的差別を受け、類似する葛藤を経験した事、想像し得た。ただし、浮世草子の異色的女性達は抵抗のために姦通という極端な方法を選んだ反面、野談の異色の女性達は比較的消極的抵抗をしたと見受けられる。また、野談の異色の女性達が知略、諧謔を始め個人的能力を発揮し自我を実現しようとした側面が作中認められた反面、浮世草子では女性の愛欲だけが黙認された傾向があったと見受けられる。これは江戸社会と朝鮮王朝社会の女性の愛欲と能力に関する認識の差異を示唆するものである。また、姦通という同一の行為のために、浮世草子の女性は悲劇的結末を向かえ、野談の女性はその知略と諧謔で以て、打開していくという側面で、前者は相対的に異色的女性の現実的な姿を描き、後者は小説的浪漫性を投資したものと見受けられる。

したがって、本稿の研究結果は「異色的女性」という同一の要素を通じて、前近代日韓両国のフィクションが「人間のどの局面を照明したのか」という疑問に関する鍵を得たと考えられる。つまり、浮世草子は異色的女性の現実的苦悩と葛藤の描写に、より重きを置いた反面、野談は異色的女性の現実的苦悩を認めつつも、一方で知略、諧謔を通して現実を克服して行き、性的限界をも越える理想的人間像を照明したと考えられる。

「은하철도의 밤(銀河鐵道の夜)」의 ‘고독’*

— 조반니를 중심으로 —

고 한 범**

< 目 次 >

>

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. 머리말 | 4. [초기형3]과 [후기형] |
| 2. 겐지의 삶에 있어 고독 | 5. 맺음말 |
| 3. 겐지 작품의 고독 | |

Key Words : 고독(solitude), 은하철도(Milky Way Railroad), 조반니(Jobanni), 캄파넬라(Campanella), 도시코(Tosiko)

1. 머리말

미야자와 겐지(宮沢賢治)의 대표적 동화 「은하철도의 밤」에는 [초기형1] [초기형2] [초기형3] [후기형]이라는 4종류 텍스트가 있다.¹⁾ 각각의 텍스트에는 주인공 조반니가 친구 캄파넬라와 함께 기차에 타서 밤하늘의 은하수를 여행하는 공통된 내용이 들어 있다. 이들 텍스트는 별빛으로 가득한 환상적 은하수가 이야기의 주요한 무대이지만, 그 밑바탕에는 매우 우울하고 고독한 분위기가 감돈다.

* 이 논문은 2009년도 동서대학교 교내학술연구비 지원을 받아 연구되었음.

** 동서대학교 외국어계열 일본어학과 부교수 일본근현대문학

1) 4종류의 텍스트를 보다 세분하여 6종류로 분류하려는 시도도 있다.(米地文夫(2009) 「『銀河鐵道の夜』六分割論——『樂しき先驅形』と『ありうべかりし第五次稿』の識別——」 『宮沢賢治 Annual』 19 宮沢賢治学会イーハトーブセンター pp.157-168)

「은하철도의 밤」의 각 텍스트는 겐지의 개고 작업에 의해 작품 내용의 보완과 교체, 그리고 삭제 등이 이루어져 있다. 그리고 주인공 조반니의 모델은 겐지 자신이고, 캄파넬라의 경우는 여동생 도시코(とし子)와 친구 호사카 가나이(保阪嘉内)로 보는 것이 일반적이다.²⁾ 「은하철도의 밤」의 모티프와 주제를 보더라도 많은 사람이 지적하듯이, 여동생 도시코와의 사별이나 친구 호사카와의 결별에 의한 고독의 극복, 말하자면 그의 내면적 과제이며, 그리고 그것이 ‘모두의 진정한 행복’까지 승화되는 데에 있다고 생각할 수 있다.³⁾ 요컨대, 도시코나 호사카와의 이별에 의한 고독의 극복이 「은하철도의 밤」의 모티프와 주제가 되었고 또한 그 극복이 내면적 과제로서의 ‘모두의 진정한 행복’으로 승화되어 있다.

그런데 「은하철도의 밤」에서 우울함의 근원은 자주 조반니가 품고 있는 병적이라고 할 수 있을 정도의 고독에 전가시키는 경향이 있다. 이것은 일찍이 나카무라 미노루(中村稔)가 지적하고 있는 것과 같이 겐지가 세상을 떠나기 1년쯤 전 하카키 히카루(母木光)에게 보낸 1932년 6월 21일자 편지⁴⁾에서 자신을 “재벌로 여겨지는 사람의 사회적 피고”라는 열등감,⁵⁾ 즉 가난한 농민을 상대로 헌옷가게와 전당포를 운영하였던 사업으로 느끼던 농민에 대한 죄의식이나, 라스지인협회(羅修地人協會)⁶⁾의 좌절을 반영한 것으로 보고 있다.⁷⁾

나카무라와 같이 조반니의 감정에 겐지의 감정이 투영되어 있다고 보고, 겐지 자신의 사회적 피고로서 좌절자로서의 열등감과 고독을 조반니의 고독

2) 菅原千恵子の(1972) 「『銀河鉄道の夜』新見——宮沢賢治の青春の問題——」 『文学』40-8 岩波書店 pp.28-43

3) 万田 務(1986) 『孤高の詩人 宮沢賢治』 新典社 p.278

4) 특히 신문에 지난 주 써 주셔서 남동생도 읽고 친척도 읽어 도대체 누가 쓴 것이냐고 말하고 있었습니다. 호의는 과분하지만 뭐라 해도 저는 이 고향 마을에서는 부자로 불리는 사람, 사회적 피고 관계에 속하기 때문에 눈에 띄는 일이 있으면 항상 반감을 갖는 분이 많아 참으로 싫습니다. 참으로 싫은 꼴을 많이 겪어 왔습니다. 재벌에 속하면서 전혀 재산이 없는 것만큼 견딜 수 없는 것은 지금 상황입니다.(『新校本宮沢賢治全集』 제15권 본문편 筑摩書房 p.406) 이하, 겐지 작품의 인용문에 대한 출처는 ‘권·편·쪽’으로 약기한다.

5) 中村 稔(1972) 『宮沢賢治』筑摩書房 p.138

6) 1926년 4월 교사직을 그만둔 겐지는 자취하면서 농민이 되어 생활하였다. 그리고 그해 8월 라스지인협회를 창립하고 농촌계몽활동에 들어갔지만 결국 1년을 유지하지 못하고 실패로 끝났다.

7) 각주 5의 p.74

과 관련시켜 파악하려는 시도에 대해 아마자와 다이지로(天沢退二郎)는 다음과 같이 말하고 있다.

그러나 조반니의 감정—그 철저한 고독감과 명랑함으로의 지향에 작가의 고독이 투영되어 있다고 하면, 내 생각으로는 거기서 중요한 것은 오히려 그 고독감이야말로 그 시인으로서의 즉 시 제작이 역지로 그를 끌어들이며 햇갈리게 한 이공간간의 본질적 고독 그 자체의 현상이라는 관점이라고 생각된다.⁸⁾

[후기형]의 작품세계가 그리스신화 중에서 오르페우스와 에우리디케 신화의 전형적 틀을 답습하고 있고, 그 신화의 이야기에 그려져 있는 사후세계의 ‘본질적 고독’으로서 조반니의 고독을 파악하고 있다.⁹⁾

나카무라와 아마자와의 견해에 대해 이리사와 야스오(入沢康夫)는, 나카무라 미노루와 같이 “사회적 피고의 일족”으로서의 죄의식이나 농업기사로서의 좌절감이라는 것의 반영이라고 볼지, 아니면 아마자와 타이지로와 같이 “에우리디케를 잃는 오르페우스”로서의 시인의 본원적 고독이라고 볼지는, 이 작품의 비밀을 해석하는 데에 있어 큰 갈림길이라고 말하며,¹⁰⁾ 조반니의 고독에 라스지인협회 활동의 좌절이 반영되어 있다고 보고 있다.

본 연구는 이상과 같은 견해들을 시야에 넣고 겐지의 삶과 그의 작품들을 통하여 「은하철도의 밤」의 [초기형3]과 [후기형]에 있어 조반니의 고독을 고찰하고자 한다.

2. 겐지의 삶에 있어 고독

겐지의 남동생 세이로쿠(清六)는 집안에서 함께 지내던 시절의 겐지에 대해 다음과 같이 말하고 있다.

8) 入沢康夫(1979) 『討議「銀河鉄道の夜」とは何か』 青土社 p.170

9) 아마자와는 “죽는 감파넬라는 에우리디케이고, 그를 사랑하여 사후세계를 함께 여행하면서 그만 상대를 잃어버리고 현실의 생명 세계로 돌아오는 조반니가 오르페우스”라고 보고 있다.(각주 8과 동일)

10) 草野心平編(1981) 『宮沢賢治研究 II』 筑摩書房 p.141

형은 가족들과 함께 식사를 할 때조차 웬지 창피한 듯이 또한 죄송한 듯한 모습으로 음식 씹는 것도 가능한 소리를 내지 않으려고 하였다. 또한, 상반신을 앞으로 구부려서 고개를 숙이고 걷는 모습이나, 다른 사람보다 화려한 복장을 하려고 하지 않았던 일 등, 모두 어린 때부터라기보다는 전생에서 갖고 태어난 행각승과 같은 점이 있었다고 생각한다.¹¹⁾

겐지가 어릴 때부터 소심하고 내성적 성격이었음을 증명하고 있다. 또한 세이로쿠는 겐지에 대해 “당시의 현웃·전당포라는 음울한 그리고 생계 곤란자를 대상으로 하는 가업이 겐지에게 미친 영향도 적지 않았다.”¹²⁾고 말하고 있다. 이와 같이 선천적으로 소심하고 내성적인 성격과 가업에 대한 죄의식은 평생 겐지의 사고를 지배하는 결과가 되었다고 할 수 있다.

겐지는 직업 작가로서 작품을 제작한 적이 없고, 오직 자신의 삶과 문학을 양립시키려고 시도하였던 작가이었다. 그는 삶을 통하여 두 가지 큰 역할을 하였다. 하나는 농촌활동이고 또 하나는 창작활동이다. 이 두 가지 활동은 겐지에게서 떼려야 뗄 수 없는 상관관계를 갖고 있었다. 그가 남긴 많은 작품에는 그 자신의 고뇌와 좌절이 내재되어 있다고 말해 지고 있다. 또한, 법화경을 포교하기 위해 제작한 소위 ‘법화문학(法華文學)’으로 불리는 동화에는 부친과의 갈등 속에 도달한 법화경 사상이 들어 있다고 말해 지고 있다. 이러한 작가로서의 특징에 대하여 모리 소이치는 다음과 같이 말하고 있다.

미야자와 겐지에게는 행위와 말, 행동과 문학이란 오직 하나이고 둘이 아니었다. 그에게는 마음의 내부에서 외부로 향해 움직이는 것이 있을 때, 어떤 때는 문학이 되고 어떤 때는 행동이 되었다. 그 모두가 새로운 세계를 사람들의 마음에 심어 주기 위한 방법이었다.¹³⁾

겐지 문학은 삶과 분리해서 생각할 수 없을 만큼 긴밀하게 연결되어 있다고

11) 宮沢清六(1987) 『兄のトランク』 筑摩書房 p.244

12) 각주 11의 p.216

13) 森莊己池(1948) 「『銀河鉄道の夜』——研究ノート・1——」 『宮沢賢治研究』 1 農民芸術社 pp.8-9

지적하고 있다. 모리가 지적하고 있듯이, 겐지의 모든 작품에 대하여 ‘행위와 말, 행동과 문학’이 하나로 일치되어 있는 지는 의문이지만, 겐지의 상당수의 작품에 적용하여 볼 수 있다는 것은 의심할 여지가 없다. 이러한 특징을 반영하고 있듯이 겐지 문학에 대한 연구는 현재까지 그의 삶과 관련된 고찰이 주류를 이루어 왔다.

37년이라는 길지 않은 겐지의 일생을 살펴보면 부친과의 갈등, 형제 중에 가장 사랑하였던 여동생 도시코의 죽음, 가장 친했던 친구 호사가 가나이와의 결별, 농촌운동의 좌절, 여러 차례에 걸친 병상생활 등으로 정신적 육체적으로 고난의 연속이었다.

1914년 3월 모리오카중학교(盛岡中学校)를 졸업하였을 때, 부친은 가업을 계승할 것을 바라며 겐지가 고대하던 상급학교로의 진학을 반대하였다. 이 일은 겐지가 삶에 있어서 처음 느꼈던 큰 좌절이라고 할 수 있다. 그러나 가업을 돕다가 부친의 허락으로 다음 해 모리오카고등농림학교(盛岡高等農林学校)에 입학할 수 있었다. 그리고 중학을 졸업하고 가업을 돕다가 가을경 법화경을 읽고 큰 감명을 받아 법화경을 평생 독실하게 믿게 되었다.

1918년 3월 모리오카고등농림을 졸업하고 군대에 입대하여 당시 일본의 시베리아출병에 참가하려고 부친에게 간청하지만 부친의 반대로 모교 연구생이 된다. 그 해 6월 말경에는 현재 자신의 일에 대해 의문을 표하며 장래 광물을 취급하는 사업을 하겠다는 편지를 2차례 보내고 있다.

1918년 12월 일본여자대학교를 다니던 도시코가 병에 걸리자 겐지는 간병을 위해 상경하게 되는데 다음 해 1월 말부터 2월 초에 걸쳐 부친에게 보낸 편지에서 인조보석 제조 사업을 하겠다고 주장하며 구체적 사업계획을 제출하였지만 부친은 끝내 허락하지 않았다. 게다가 법화경의 독실하게 믿게 된 겐지는 1920년 10월에는 니치렌종(日蓮宗)을 믿으며 재야불교단체를 이끄는 다나카 지가쿠(田中智学)가 창립한 고쿠추회(国柱会)에 가입하게 되었다. 니치렌종의 독실한 신자가 된 겐지는 조도진종(浄土真宗)을 믿는 집안을 개종시키려고 하다가 수차례 걸쳐 부친과 마찰을 빚게 된다.

겐지는 1921년 1월 말경 가게를 보다가 무단가출하여 도쿄 우에노(上野) 부근에 있던 고쿠추회 회관에서 봉사활동을 시작하였다. 부친은 수차례의 편지로 귀가를 종용하지만, 겐지는 집안의 개종을 요구하며 거절하고 있는데

1921년 2월 24일자 답장에 다음과 같이 쓰고 있다.

일단 귀가하라는 말씀 여러 번 사실로 마음속에 새기는 바입니다만, 개종하시는 날에는 모든 저의 작은 희망과 일은 포기하고 무엇이든지 분부하시는 대로 따르겠습니다. 그때까지는 귀항하지 않을 것을 처음부터 맹세하였으므로 부디 이 점 양찰하여 주시고, 매우 조속히 범화경과 니치렌 성인에게 귀의하셔서 일가 동일한 마음으로 정말로 말씀하시는 것과 같이 세속적 진리로나 불법을 행하는 데에 활동하도록 지성으로 기원을 드립니다.

(제15권 본문편 p.210)

부친을 개종시키려는 강렬한 의지가 강하게 적혀 있다. 그러나 그해 9월경 여동생 도시코가 병에 걸렸다는 연락을 받고 귀가하지만, 부친과의 종교적 대립이 해소되었던 것은 아니다. 1921년 7월경 이후부터 겐지가 범화경 신앙을 강요적으로 믿게 하여 사상적·신앙적으로 교분을 유지하려고 시도하여 왔던 친구 호사카와 소원하게 된다. 그리고 그 해 12월 하나마키농림학교(花巻農林学校) 교사가 되었다. 다음 해 11월에는 가족 중에서 유일하게 겐지와 함께 범화경을 믿으며 따르던 여동생 도시코가 세상을 떠나서 겐지는 정신적으로 큰 충격을 받는다.

겐지는 1926년 3월말 4년 남짓 근무하고 있던 교사직을 사직하고 4월초부터 독거생활을 하며 농민이 되어 농촌활동에 뛰어 든다. 그리고 그해 8월말 라스지인협회를 창립하여 농학교의 제자 20여명과 함께 개간, 레코드 콘서트, 악기 연습 등의 농업지도와 문화 활동을 겸한 농촌운동을 시도하는 집회를 개최하였다. 그러나 다음 해 2월초 불운사상을 학습하는 집회로 의심을 받게 되어 부정기적으로 집회가 개최되다가 9월경 겐지의 급성폐렴으로 중단되었다.

나카무리는 라스지인협회의 좌절 이후에 해당하는 1927년 「은하철도의 밤」을 제작되었다고 보고 있지만¹⁴⁾ 잘못된 견해이다. 왜냐하면, 「은하철도의 밤」의 최초 텍스트 [초기형1]이 라스지인협회의 창립 이전이던 1924년 12월경 성립되었기 때문이다.¹⁵⁾

14) 각주 5의 pp.44-45

15) 줄고(2008) 「『봄과 수라(春と修羅)』 제2집의 도시코와 ‘은하’——「은하철도의 밤(銀河鉄道の夜)」 [초기형1]의 성립과 관련하여——」 『일본연구』 37 한국의대일본연구소 pp.251-271

겐지는 1928년 8월초 발열하여 병상생활을 하다가, 같은 해 12월 급성폐렴으로 심한 객혈을 하여 다음 해 1년 동안 요양생활을 하였다. 그 후, 1930년 2월 말경 건강이 회복되어 다음 해 2월말 도호쿠쇄석공장(東北碎石工場)의 기사가 되지만, 그 해 9월 도쿄 출장 중 다시 발열하여 1933년 9월 21일 임종하기까지 긴 투병생활에 들어간다.

말년 겐지는 중병에 걸려 체력이 떨어지고 좌절과 절망에 빠져 생활하고 있었다. 이러한 사실은 말년의 편지들을 통하여 엿볼 수 있다. 농학교의 제자이던 사와사토 다케지(沢里武治)에게 보낸 1930년 4월 4일자 편지에서 다음과 같이 적고 있다.

당신이 부디 지금 일을 쉽고 가벼운 것으로 생각하지 말고 끝까지 신중하고 정확히 처리하여 나가실 수 있기를 바랍니다. 나도 농학교 4년간이 가장 보람이 있는 때였습니다. 단지 말기에 하찮은 정도인 자신의 재능을 자만하여 실로 오만한 태도가 되어 버린 것을 후회하더라도 이미 소용없습니다. 게다가, 그 무렵은 여전히 나에게서 생활의 정점이기도 하였습니다. 다시 한 번 새로운 진로를 개척하여 조금이라도 여러분의 후의에 보답하고 싶을 뿐입니다.

(제15권 본문편 281쪽)

겐지는 농학교 교사로서 있었을 때의 말기에 ‘오만한 태도’에 빠졌던 것을 반성하면서 자신과 같은 과오에 빠지지 않도록 초등학교 교사로서 직분을 다할 것을 당부하고 있다. 또한 임종을 10일쯤 남기고 농학교 제자이던 야나기하라 쇼에쓰(柳原昌悦)에게 보낸 1933년 9월 11일자 편지에서는 자신의 삶을 회상하여 다음과 같이 적고 있다.

나의 이러한 비참한 실패는, 그저 이미 오늘날 일반적인 중병 ‘오만’이라는 것의 하나의 분파에 잘못 가담한 것이 원인입니다. 아주 작은 재능이라든가 기량이라든가 신분이라든가 재산이라든가 하는 것을 뭐가 자신이 갖추고 있는 건가 생각하여 자신의 일을 무시하고, 동년배를 비웃고, 머지않아 어디에선가 자신을 소위 사회의 높은 자리로 끌어올리려 오는 사람이 있는 것처럼 생각하고, 공상만하며 생활하여 도리어 완전한 현재 생활을 맛보지도 못 하고, 몇 년인가가 보람 없이 지나가서 마침내 자신이 쌓고 있던 신기루가 사라지는 것을 보고는, 단지 이제 사람에게 화내고 세상을 개탄하

여, 따라서 스승과 벗을 잃고 우울증에 걸린다고 한 것 같은 순서입니다.

(제15권 본문편 459쪽)

겐지는 자신의 인생을 되돌아보며 ‘오만’이라는 교만한 마음 때문에 ‘근심하고 번민’하여 온 것이 결과로서 병을 얻게 되었다고 판단하고 있다. 바꾸어 말하면, “그가 ‘세계 전체의 행복’을 걸은 ‘선의’를 방해하여 그를 ‘수라’에 몰아넣은 것인 ‘오만’에 대한 반성을 고백한 것이다.”¹⁶⁾ 그리고 겐지가 ‘분파’에 가담하였다는 것은 자신의 삶에 대하여 겸손하게 표현한 것으로 그는 결코 분파에 편승하기는커녕 오히려 자신의 독자성을 지키려고 노력하였다고 할 수 있다. 이러한 측면에서 볼 때, 그의 ‘오만’이라는 것은 내적 태도로서 “그 자신의 자아의 확립에 대한 고투, 개성적 존재에 대한 도정을 가리키고 있다.”¹⁷⁾고 보는 것이 타당할 것이다.

3. 겐지 작품의 고통

사토 미치마사(佐藤通雅)는 겐지의 어두운 측면에 언급하여 작품과 관련하여 다음과 같이 말하고 있다.

「쑥독새의 별」 「나메토코야마의 꿈」 「까마귀의 북두칠성」 「은하철도의 밤」 등을 고려하고, 게다가 말년까지의 삶의 모습을 생각할 때, 겐지상의 중요한 측면으로 “사는 것을 강요당한 사람”의 인상이 강하게 든다.¹⁸⁾

사토가 지적하고 있듯이 시나 동화에는 겐지 자신의 암울했던 생활을 연상 시키기에 충분한 어두운 측면이 그려져 있는 작품이 많다. 우선, 시에서 살펴보면 1924년 4월에 출판된 『봄과 수라(春と修羅)』 제1집의 모두에 수록되어 있는 「굴절률(屈折率)」에 다음과 같이 그려져 있다.

16) 東 光敬(1949) 『宮沢賢治の生涯と作品』 百華苑 p.239

17) 福島 章(1970) 『<パトグラフィ>双書 3>宮沢賢治 芸術と病理』 金剛出版 p.190

18) 佐藤通雅(1979) 『宮沢賢治の世界——短歌と童話——』 泰流社 p.286

나나쓰모리의 이쪽 하나가/물속보다도 더 밝고/그리고 매우 크게 느껴지는데/
나는 울퉁불퉁하게 언 길을 걸어/울퉁불퉁한 눈을 밟고/맞은편 냇과 같은 양떼구름
을 향하여/침울한 모습의 우편집배원처럼/(알라딘의 마술 램프를 찾아)/서두르지
않으면 안 되는 것인가 (제2권 본문편 13쪽)

홀로 심상 여행을 떠나려는 겐지 자신의 심경이 그려져 있다. 시 제목의 ‘굴절률’이라는 표현은 물리학에서 빛의 현상을 의미한다. 이러한 표현의 사용에 대해 온다 이쓰오(恩田逸夫)는 겐지가 직업으로 인조보석 제조에 대한 관심에서 비롯된 것으로 추정하고 있지만,¹⁹⁾ 작품 속에서 “심리 변화기복의 상태”로서²⁰⁾ 겐지의 심리에 있어 굴절을 상징하고 있다.

시집의 목차에 의하면 「굴절률」의 창작날짜는 1922년 1월 6일로 되어 있는데 고이와이농장(小岩井農場)²¹⁾을 방문하여 제작한 것이다. 이 무렵 겐지는 고향에서 하나카키농학교(花巻農學校) 교사로 근무하기 시작하여 1개월쯤 지나고 있었다. 그에게 ‘나나쓰모리’²²⁾는 손짓하여 부르는 신비에 찬 성스러운 공간이고 ‘아연과 같은 양떼구름’은 기피하여야 하는 속되고 음울한 공간이다. 게다가, 떠나면 시공을 향한 시간 여행을 사전에 암시하고도 있다. 겐지는 자신을 ‘우편배달부’로 파악하고 있는데 사람들에게 행복할 소식을 배달하기도 하지만 때로는 나쁜 소식도 배달하는 것이 ‘우편배달부’이다. 그 모습 속에 겐지는 고독을 느끼고 있는 것이다.

「굴절률」의 직후에 슬러 있는 「구라카케²³⁾의 눈(くらかけの雪)」도 현실

19) 恩田逸夫(1981) 『宮沢賢治 1 人と芸術』 東京書籍 p.285

겐지는 1919년 1월말에서 2월초에 걸쳐 부친에게 보낸 편지에서 장래 인조보석 제조에 종사하고 싶다는 희망과 조사자료, 그리고 사업계획 등을 적고 있다.(제15권 본문편 146-157쪽)

20) 恩田逸夫(1981) 『宮沢賢治2 詩研究』 東京書籍 p.26

21) 1891년 창업한 일본 최대의 민영종합농장. 모리오카시의 서북 11킬로, 이와테산(岩手山)의 남쪽 산기슭에 위치한다. 창업자 이노우에 마사루(井上勝), 출자자 이와사키 야노스케(岩崎弥之助), 후원자 오노 기신(小野義真)의 머리글자를 읽기 쉽게 거꾸로 늘어놓아 명명되었다.(原子朗(2000) 『新宮沢賢治語彙辞典』(第二版) 東京書籍 p.246)

22) ‘나나쓰모리’는 모리오카시 서쪽 시즈쿠이시쵸(雫石町)와의 경계에 있는 이키모리아마(生森山), 하치모리아마(鉢森山), 고히치모리아마(小鉢森山), 미테노모리아마(三手ノ森山), 마쓰모리아마(松森山), 시오가모리(塩ヶ森), 그리고 그 주변의 언덕에 대한 총칭으로 높이는 300미터 전후이다.(각주 21의 p.528)

23) 이와테산(岩手山) 남동쪽에 있는 높이가 897미터의 구라카케야마(鞍掛山)라는 산을

에 대한 불안이 바탕에 깔려 있다.

의지 되는 것은/구라카케야마 능선의 눈썹/들도 숲도/황량하거나 우중충하여서/
조금도 의지가 되지 않으므로/마치 효모처럼 보이는/몽롱한 눈보라이지만/희미한
소망을 보내는 것은/구라카케야마의 눈썹/(하나의 고풍스런 신앙입니다)

(제2권 본문편 p.14)

구라카케야마에 내린 '눈'이라는 자연현상을 소재로 하여 자연 풍경에 대한 객관적 묘사가 이루어져 있고, 겐지는 홀로 눈보라를 맞으며 불안한 마음에 쫓기며 걷고 있는 것으로 묘사되어 있다. 게다가 「고이와이농장」에서는 현실의 고독을 느끼며 그 고독이나 쓸쓸함을 직시하고 수용하여 살아가려고 시도하고 있다.

자아 똑똑히 눈을 뜨고 누구에게나 보이고/명확히 물리학의 법칙에 따르는/이것
들 실재하는 현상 속에서/새롭게 똑바로 일어나/밝은 비가 이렇게 세차게 내리는데
/마차가 지나간다 말은 적어서 검다/사람은 짐수레에 서서 간다/이제 결코 외롭지
않다/몇 번 외롭지 않다고 말해 보았자/다시 외롭게 되기 마련이다/그렇지만 이것
으로 괜찮다/전부 외로움과 비통함을 태워서/사람은 투명한 궤도를 나아간다

(제2권 본문편 88-89쪽)

몇 번이나 외롭지 않다고 말하더라도 또 외로워지기 마련이므로 “전부 쓸쓸함과 비통함을 태워서 / 사람은 투명한 궤도를 나아간다”고 묘사하여, 외로움과 비통함을 극복하여 사람으로서 올바른 길을 나아가겠다고 겐지는 선언하고 있다. 다시 말하면, 외로움과 슬픔을 극복하여 인간으로서 바른 길로 나아가겠다고 선언하였을 뿐만 아니라, 오히려 그것을 에너지로 삼아 나아가갈 것을 결심하였다. 요컨대, 겐지의 심상은 불확실한 앞날에 대하여 불안한 마음을 느끼면서도 자연 속에 일말의 희망을 가지며, 나아가서는 외로움이나 괴로움 뿐만 아니라, 고독도 외면하지 하지 않고 받아들이며 나아가려고 하고 있다.

조반니의 고독에 겐지의 심정이 투영되어 있다고 보는 나카무라는 그 근거로서 「[모두 식사도 마친 것 같고]([みんな食事もすんだらしく])」라는 시의

초고1에 해당하는 「경내(境内)」라는 시에 겐지의 절망이 그려져 있는 점을 지적하고 있다.

그 시커멓고 거대한 것을/나는 도무지 움직일 수 없다/결국 나로서는 불가능한 것인가/모두 이미 식사도 마친 것인가/다시 정을 두들기거나 손을 손뼉을 치거나/ 숲 전체 매우 떠들썩하게 되었다/건너편은 조금 전/모두 함께 들어온 도리이²⁴⁾/수 양버들이랑 벚꽃이랑 물/도리이는 환한 여름 들판에 열려 있다/아아 소나무 숲을 나와 신전을 올라가/에미²⁵⁾랑 격자로 둘러싸인/어두침침한 판자 위에/몸을 던져 나는 울고 싶다/그렇지만 나는 그렇게 해서는 안 된다/무외 무외/기필코 나아가라
(제5권 교이편 pp.97-98)²⁶⁾

더욱이 나카무라는 「[구라카케야마의 눈]([くらかけ山の雪])」의 초고1에 들어 있는 내용에도 겐지의 외로움을 지적하고 있다.²⁷⁾

구라카케야마의 눈/친구 한 사람 없고/동지 한 사람도 없고/단지 내가 어렵듯이
소망하여/미약한 소망을 의탁하는 것은
(제6권 교이편 p.89)²⁸⁾

겐지는 자신이 자연 이외에는 의지할 곳이 없는 외로운 신세로 묘사하고 있다. 그러나 「경내」는 겐지가 [초기형]을 제작한 이후 농촌 봉사활동을 하던 시기의 것이고, 「[구라카케야마의 눈]」의 초고1은 「경내」보다 이후에 제작된 것이다. 게다가 겐지가 농촌활동을 시작하기 이전에 제작한 「은하철도의 밤」의 [초기형]에도 조반니의 고독이 그려져 있다. 그러므로 두 작품의 내용을 근거로 조반니의 고독에 대한 출처를 찾으려는 것은 잘못이다.

24) 신사 입구에 세운 두 기둥의 문.

25) 소원을 빌거나 소원이 이루어졌을 때, 그 사례로 신사나 절에 말 대신 봉납하는 말 그림의 액자.

26) 『校本宮沢賢治全集』(筑摩書房)에서는 「그 시커멓고 거대한 것을(そのまつくらな巨大なものを)」이라는 제목으로 수록되어 있었다.

27) 각주 5의 pp.76-77

28) 겐지가 말년 병상에서 사용한 『비에도 지지 않고 수첩(雨ニモマケズ手帳)』에 들어 있었던 작품이다.

겐지는 자신의 고독에 대해 『봄과 수라』 제2집의 「서(序)」에서 다음과 같이 피력하고 있다.

나는 어디까지나 고독을 사랑하고/뜨겁고 녹녹한 감정을 싫어하므로/혹시 만약 이라도 저에게 좀더 일을 기대하는 분은/동인이 되어 달라고 말하거나/원고 재촉이나 집금우편을 보내시거나/저를 괴롭히지 않도록 부탁드립니다

(제3권 본문편 p.9)

『봄과 수라』 제2집은 1924년 2월부터 1926년 1월 사이에 발상한 시를 수록하고 있다. 그리고 시집의 「서」는 1928년 4월 중순부터 6월 초까지의 사이에 제작되었다고 추정되고 있다.²⁹⁾ 이 시기는 라스지인협회 활동이 중단되고 1년쯤 지난 때이다. 겐지는 그 해 9월경 폐렴에 걸려 와병 중에 있다가 12월에는 급성폐렴으로 발전하여 1921년 2월 중순경까지 요양생활을 하게 된다.

4. [초기형3]과 [후기형]의 ‘고독’

조바니는 겐지가 모델이고 캄파넬라는 일찍이 여동생 도시코가 모델로 인식되고 있었는데³⁰⁾ 도시코 이외에 친구 호사카의 모델설이 제기되기에 이른다.³¹⁾ 게다가 「은하철도의 밤」의 세계를 뒤덮고 있는 깊은 고독을 이해하기 위해서는 적어도 도시코와의 사별과 친구 호사카와의 결별이라는 두 요인이 작용하였다고 보는 것이 타당하다.

나카무라는 조반니의 깊은 고독에 대해 언급하며 조반니와 캄파넬라의 관

29) 入沢康夫(1979) 『新修宮沢賢治全集』第3卷 筑摩書房 pp.446-447

30) 「은하철도의 밤」의 내용을 연상시키는 내용들과 조반니와 캄파넬라의 이름이 이탈리아 식이라는 것을 들어 이탈리아의 신문기자·소설가 에드문도 데아미치스(Edmondo De Amicis, 1846-1908)가 1886년 발표한 소년소설 『쿠오레(Cuore)』에 영향을 받았다는 견해도 있다.(天沢退二郎(1985) 『別冊太陽 宮沢賢治 銀河鉄道の夜』平凡社 p.8), 그러나 캄파넬라의 이름은 17세기 사상가 도마조 캄파넬라(Tommaso Campanella, 1568-1639)와 연관된 것이라고 보는 것이 가장 자연스러운 것이다.(각주 21의 p.153)

31) 각주 2와 동일

계를 만들어낸 작가의 원체험에 겐지의 여동생 도시코의 죽음이 있다고 지적하고 있다.³²⁾ 그러나 호사카와의 결별로 받았을 정신적 충격이 조반니의 고독에 영향을 끼쳤을 것이라는 점은 전혀 언급하고 있지 않다. 「은하철도의 밤」에서 조반니에 대한 캄파넬라의 서먹서먹한 태도에는 생전 겐지와 도시코의 오누이 사이와 같은 친근함이나 돈독함이 결여되어 있는 것은 분명하다. ‘고독’이라는 측면에서 조반니에게는 겐지의 심정이 겹쳐져 있는 데에는 의문의 여지가 없다.

「은하철도의 밤」의 텍스트들에는 영원한 친구이자 동반자이기를 기대하던 캄파넬라에게서 소외감을 느끼면서 일어나는 조반니의 심경이 공통되게 그려져 있다.

“왜 나는 이렇게 슬픈 것일까? 나는 더욱 마음을 깨끗하고 크게 먹어야 한다. 저기 물가 훨씬 건너쪽으로 마치 연기와 같은 작고 푸른 불이 보인다. 저것은 정말로 조용하고 차갑다. 나는 저것을 잘 보고 마음을 진정시켜야 한다.” 조반니는 뜨겁고 아픈 머리를 양손으로 누르듯이 하고 그쪽을 보았습니다. “아아, 정말로 영원히 어디까지라도 어디까지라도 나와 동행할 사람은 없는 것일까? 캄파넬라도 저런 여자 아이와 재미난 듯이 이야기하고 있고 나는 정말로 괴롭다.”

(제10권 본문편 pp.18-19, p.121, pp.164-165, 제11권 본문편 pp.158-159)

위의 인용 부분은 「은하철도의 밤」의 [초기형1]에서 [후기형]에까지 똑같이 삽입되어 있다. 그런데 조반니는 “왜 나는 이렇게 슬픈 것일까?”라고 하여 자문하고 있다. 그리고 은하계의 작고 푸른 불빛을 바라보며 마음을 진정시키려고 하고 있다. 그러나 조반니는 자신과 어디까지라도 함께 갈 상대가 없다고 느끼며 캄파넬라가 소녀와 대화하는 것에 대하여 질투를 느끼고 있다. 그래서 조반니는 “나는 정말로 괴롭다”는 감정이 솟구치는 것을 억누를 수 없는 것이다. 조반니의 괴로움은 “영원히 어디까지라도 어디까지라도 나와 동행할 사람”이 없다고 생각하는 데에서 생기고 있다. 게다가 조반니는 질투심과 동시에 고독도 느끼고 있는데 그러한 마음은 반복적으로 묘사되어 있다.

32) 각주 5의 p.150

“이런 조용하고 좋은 곳에서 나는 왜 더욱 유쾌해 질 없는 걸까? 왜 이렇게 혼자 쓸쓸한 것일까? 그렇지만 캄파넬라는 너무 한다, 나와 함께 기차를 타고 있으면서 전적으로 저런 여자 아이하고만 이야기하고 있는걸 뭐. 나는 정말 괴롭구나,”

(제10권 본문편 pp.19-20)

위의 인용은 「은하철도의 밤」의 모든 텍스트에 있는 내용이지만, 끝부분이 [초기형1]에서는 영탄조의 “나는 정말 괴롭구나.”라는 조반니의 독백이 [초기형2] 이후의 텍스트에서는 “나는 정말 괴롭다.”로 개고되어 고독한 감정이 상대적으로 부각되어 있다.

「은하철도의 밤」의 [초기형3]에는 괴로운 현실에서 벗어나서 하늘세계로 떠나고 싶다는 조반니의 독백이 있다.

“나는 이제 먼 곳으로 가버리고 싶다. 모두와 이별하여 어디까지라도 어디까지라도 가버리고 싶다. 그렇지만, 혹시 캄파넬라가 나와 함께 거주면, 그리고 함께 들판이나 여러 가지 집을 스케치하며 어디까지라도 어디까지라도 가는 거라면 얼마나 좋을까? 캄파넬라는 결코 나를 화나게 하지 않는다. 그리고 나는 얼마나 친구를 갖고 싶어 하는가? 나는 이제 캄파넬라가 정말로 나의 친구가 되어 결코 거짓말하지 않으면, 나는 목숨이라도 주어도 좋다. 그러나 그렇게 말하려고 하여도 지금은 나는 그 말을 캄파넬라에게 할 수 없게 되어 버렸다. 함께 놀 시간조차 없다. 나는 이제 하늘의 멀고 먼 곳으로 오직 혼자 날아가 버리고 싶다.”

(제10권 본문편 138쪽)

위의 독백은 조반니가 마을 변두리에 있는 언덕 정상에 올라가 밤하늘을 바라보며 말하고 있는 것이다. 조반니의 소망에는 현실에서 도피하려는 절박한 심정이 담겨져 있다. 그리고 이를 위하여 캄파넬라의 동행을 갈망하면서, 캄파넬라가 자신에게 진실한 친구가 되어 준다면 그를 위하여 희생할 각오도 내비치고 있지만, 또 한편으로는 혼자 하늘로 날아가 버리고 싶다고 말하고 있다. 조반니가 현실에서 도피하여 먼 하늘세계로 가려는 행위는 겐지의 다른 작품에서도 찾아볼 수 있는데³³⁾ 아마자와는 조반니의 고독에 대하여 다음과

33) 초고 집필이 1921년경으로 추정되는 동화 「속독새의 별(よだかの星)」에서 주인공 속독새, 1923년 5월 11일부터 23일에 걸쳐 이와테매일신문(岩手毎日新聞)에 연재되었던 동화 「시그널과 시그나레스(シグナルとシグナレス)」의 시그널, 1924년 12월에 간행된 동화집 『주문이 많은 요리집(注文の多い料理店)』에 수록되어 있는 「까마귀의 북두칠

같이 말하고 있다.

조반니의 고독이란, 작품의 불가능성——항상 캄과넬라와 둘이서 어디까지라도 가고 싶다고 바라면서, 마침내 그것을 이룰 수 없는 것의 상징적 의미를 짊어지고 있는 것이다.³⁴⁾

아마자와의 견해는, 조반니의 고독감을 드러내는 독백이 거의 언제나 캄과넬라와 관계되어 있거나 캄과넬라에 대한 감정에 촉발되어 있는 것뿐인 점에 주목하고 있다. 물론 작품 그 자체의 내용만을 놓고 보면 타당한 견해라고 하겠다. 그러나 4개의 「은하철도의 밤」에는 변경된 부분과 변경되지 않은 부분이 있고, 변경된 부분은 개고 시기의 겐지 의식이나 관심사와 깊이 관련되어 있고, 변경되지 않은 부분은 겐지에게 있어 불변의 부분으로 그의 생애를 일관하는 윤리나 신앙과 깊이 결부되어 있다.³⁵⁾ 이러한 점을 주목할 때 각 개고 시점의 겐지 의식을 무시할 수는 없을 것이다.

[초기형3]은, 늦어도 1926년 말에는 개고가 시작되었을 것이라고 여겨지는 [초기형2]의 제작 이후부터 늦어도 1931년 가을까지는 제작되었다고 추정되고 있는데³⁶⁾ 현실에서 탈출하여 하늘 멀리 가버리고 싶다는 조반니의 소망에는 오랜 병상생활 속에서 병약한 몸으로 삶에 대한 좌절과 절망을 느끼고 있었을 겐지의 심경이 담겨져 있다.

[초기형1] [초기형2] [초기형3]에서 조반니는 불행한 소년으로만 그려져 있다 그러나 [후기형]에서는 불행한 처지 속에서도 열심히 살아가려고 하는 활기찬 소년으로 그려져 있다. 부루카니로 박사의 최면 실험에 관한 내용이 삭제되고 은하철도에서 만난 사람들과의 체험을 통하여 조반니가 깨닫게 된 부분이 추가되어 있다. 또한, 결말에서는 조반니의 새로운 삶에 대한 여행을 예고하고 있다.

성(鳥の北斗七星)에서 까마귀 대위의 약혼자 까마귀의 꿈 등이 있다.

34) 각주 8과 동일

35) 西田良子(2003) 『宮沢賢治 『銀河鉄道の夜』を読む』 創元社 p.227

36) 杉浦 静(1994) 「『銀河鉄道の夜』の成立——第一次稿から第三次稿を中心に——」 『国文学』 39-5 学灯社 pp.17-20

조반니는 이미 여러 가지 일로 가슴이 팍 차서 아무 말도 못 하고 박사 앞을 떠나서 빨리 어머니에게 우유를 갖고 가서 아버지가 귀가하는 것을 알리려고 생각하자 이미 쏟아진 강가에서 거리 쪽으로 달렸습니다. (제11권 본문편 p.171)

[후기형]에는 위에 인용한 부분의 직전에 캄파넬라가 물에 빠진 급우 자네리를 구하다가 행방불명이 되었다는 내용도 추가되어 있어 [초기형3] 이전의 텍스트들에 비하여 작품세계에 있어 큰 변화가 일어나 있다. 「은하철도의 밤」의 [초기형]과 [초기형2]에 비하여 부친의 부재, 모친의 병, 빈곤, 급우로부터 소외 등의 내용이 추가되어 [초기형3]과 [후기형]에서 조반니는 이야기의 출발점에서 한결같이 불행한 처지로 묘사되어 있다. 그러나 조반니의 처지는 [초기형3]에서 [후기형]으로 개고를 거치면서 크게 개선되어 있다. 이러한 변화에 대하여 니시다 요시코(西田良子)는 다음과 같이 말하고 있다.

제4차 원고는 ‘환상 4차원의 이야기’를 사실적 ‘소년소설’로 고치기 위하여 모두 부분에 복선을 추가하고 부루카니로 박사의 최면실험을 삭제하여, ‘현실세계→비현실세계→현실세계’라는 판타지 형식을 써서 ‘은하여행’은 조반니가 잠시 조는 사이의 사건으로 만들고, 게다가 ‘소년소설’다운 향일성 있는 작품으로 만들기 위해 주인공 조반니의 인상을 극단적으로 어둡게 하는 것을 피하고, 자립한 건강한 소년의 인상을 붙여놓고, 마지막에 주재하던 부친의 귀환을 암시하여 희망을 가질 수 있는 작품으로 만들었다.³⁷⁾

[후기형]의 조반니도 [초기형1] [초기형2] [초기형3]과 마찬가지로 처음에 불행한 소년으로 그려지지만 이야기 결말에서는 밝은 희망을 품고 살아가려는 소년으로 변화되어 있다. 다시 말하면, 비록 환경적으로 불행한 처지에 있으면서도 은하여행의 체험을 통하여 정신적으로 성장하여 나가는 과정이 그려져 있는 성장소설로 탈바꿈한 것이다.

5. 맺음말

37) 각주 35의 pp.226-227

4종류의 「은하철도의 밤」에서 조반니가 현실세계에서 느끼는 고독에서의 해방은 영원한 동반자의 출현에 대한 기대를 반영한 것이기도 하다. 그리고 그 동반자로서 친구 캄파넬라와 함께 은하철도 여행이 시작되고 있다.

조반니의 고독은 [초기형1]부터 [후기형]에 이르기까지 묘사되어 있지만, 성립 시기에서 볼 때 [초기형1]은 겐지가 라스지인협회 활동을 시작하기 훨씬 이전의 것이어서 조반니의 고독에 라스지인협회 활동의 좌절이 반영되어 있다고 보는 것은 잘못이다.

겐지 문학이 겐지의 삶과 분리해서 생각할 수 없을 만큼 긴밀하게 연결되어 있다는 점과 조반니의 모델이 겐지라는 점에 주목할 때, 조반니의 고독에는 원천적으로 친구 호사카와의 결별이나 여동생 도시코와의 사별뿐만 아니라, 겐지의 천성적 성격이라든가 삶 속에서 느꼈던 소외나 좌절 등이 반영되어 있다고 할 수 있다.

1924년 4월에 출간된 『봄과 수라』 제1집의 시들 중에서 겐지는 고독한 존재로서 자신을 묘사하며 그 고독을 받아들이며 살아갈 것을 표현하고 있다. 또한, 『봄과 수라』 제2집의 「서」가 집필되던 1928년 초여름 무렵에는 고독을 사랑하고 있다고조차 표명하기도 하여 삶 속에서 고독을 즐기고 있다. 이러한 겐지가 모델인 조반니가 느끼는 고독은 개고 시기의 겐지 의식과 무관하지 않은 경우도 있다. 이것은 1926년 말 이전에 개고가 시작되었을 것이라고 추정되는 [초기형2]가 제작된 이후부터 1931년 가을경까지는 제작되었을 것이라고 추정되는 [초기형3]에서 찾을 수 있다. 거기서 조반니는 매우 고독한 소년으로 그려져서 불행한 현실에서 벗어나서 먼 하늘로 가버리고 싶다고 혼자말을 하고 있다. 이러한 혼자말을 하게 된 배경에는 라스지인협회 활동의 좌절과 1년 이상의 병상생활에서 느끼는 죽음에 대한 공포가 반영되어 있다고 하겠다.

[초기형1]과 [초기형2]에 비하여 부친의 부재, 모친의 병, 빈곤, 급우로부터 소외 등의 내용이 추가되어 [초기형3]과 [후기형]에서 조반니는 이야기의 출발점에서 한결같이 불행한 처지로 묘사되어 있다. 그러한 조반니의 처지는 [초기형3]에서 [후기형]으로 개고를 거치면서 크게 개선되어 있다. 게다가 [초기형3]과 다르게 [후기형]은 조반니가 친구 캄파넬라와의 사별을 통해 정신적으로

성장하여 가는 성장소설의 형태를 취하고 있다.

그런데 [후기형]이 제작되었을 무렵 겐지는 지인들에게 보낸 편지에서 자신의 삶을 회상하여 농민에 대한 죄의식, 좌절과 실패, 오만으로 점철되어 있다고 반성하고 있다. 이러한 겐지가 말년의 고독한 심경 속에서 [초기형3]을 개고한 [후기형]에서 처음부터 불행하게 묘사한 조반니를 이야기의 결말에서 밝은 희망을 갖고 활기차게 살아가려는 소년으로 변모시킨 것은, 오랜 병으로 심신이 쇠약할 대로 쇠약해져서 자신의 죽음을 직시하며 삶을 돌아보고 반성하던 차에 깊은 고독에서 탈피하려고 하는 의지를 하나의 작품세계로 그려낸 것에 불과한 것이다.

<參考文獻>

- 東 光敬(1949) 『宮沢賢治の生涯と作品』百華苑 p.239
 天沢退二郎(1985) 『別冊太陽 宮沢賢治 銀河鉄道の夜』平凡社 p.8
 入沢康夫(1979) 『新修宮沢賢治全集』第3卷 筑摩書房 pp.446-447
 入沢康夫외(1979) 『討議 「銀河鉄道の夜」とは何か』青土社 p.170
 恩田逸夫(1981) 『宮沢賢治 1 人と芸術』東京書籍 p.285
 _____ 『宮沢賢治 2 詩研究』東京書籍 p.26
 草野心平編(1981) 『宮沢賢治研究 II』筑摩書房 p.141
 高 漢範(2008) 「『봄과 수리(春と修羅)』 제2집의 도시코와 ‘은하’——「은하철도의밤(銀河鉄道の夜)」 [초기형1]의 성립과 관련하여——」
 『일본연구』37 한국외대일본연구소 pp.251-271
 佐藤通雅(1979) 『宮沢賢治の世界——短歌と童話——』泰流社 p.286
 杉浦 静(1994) 「『銀河鉄道の夜』の成立——第一次稿から第三次稿を中心に——」
 『国文学』39-5 学灯社 pp.17-20
 _____ 「『銀河鉄道の夜』の成立——第一次稿から第三次稿を中心に——」
 『国文学』39-5 学灯社 pp.18-20
 菅原千恵子외(1972) 「『銀河鉄道の夜』新見——宮沢賢治の青春の問題——」 『文学』
 4 0-8 岩波書店 pp.28-43
 中村 稔(1972) 『宮沢賢治』筑摩書房 pp.44-45
 _____ 『宮沢賢治』筑摩書房 p.74
 _____ 『宮沢賢治』筑摩書房 pp.76-77

- _____ 『宮沢賢治』筑摩書房 p.138
- _____ 『宮沢賢治』筑摩書房 p.150
- 西田良子(2003) 『宮沢賢治 『銀河鉄道の夜』を読む』 創元社 pp.226-227
- 原 子朗(2000) 『新宮沢賢治語彙辞典』(第二版) 東京書籍 p.153
- _____ 『新宮沢賢治語彙辞典』(第二版) 東京書籍 p.216
- _____ 『新宮沢賢治語彙辞典』(第二版) 東京書籍 p.246
- _____ 『新宮沢賢治語彙辞典』(第二版) 東京書籍 p.528
- 福島 章(1970) 『<バトグラフィ双書 3> 宮沢賢治 芸術と病理』 金剛出版 p.190
- 万田 務(1986) 『孤高の詩人 宮沢賢治』新典社 p.278
- 宮沢清六(1987) 『兄のトランク』筑摩書房 p.216
- _____ 『兄のトランク』筑摩書房 p.244
- 森荘巳池(1948) 「『銀河鉄道の夜』——研究ノート・1——」 『宮沢賢治研究』1 農民
芸術社 pp.8-9
- 米地文夫(2009) 「『銀河鉄道の夜』六分割論——『楽しき先駆研』と『ありうべかりし
第五次稿』の識別——」 『宮沢賢治 Annual』19 宮沢賢治学会イーハトーブ
センター pp.157-168

접 수 일: 12월 31일
심사완료: 01월 08일
게재결정: 01월 29일

<要旨>

「銀河鉄道の夜」の「孤獨」

— ジョバンニを中心として —

本研究は、賢治の生活と文学が、切っても切れないほど不可分の関係にあると言われるところに注目して、「銀河鉄道の夜」におけるジョバンニの孤独を探ってみたものである。

「銀河鉄道の夜」は、所謂 [初期形一] [初期形二] [初期形三] [後期形] という四つのテキストとして分類される。これらのテキストの中でジョバンニの孤独は、病的だといえるほどである。「銀河鉄道の夜」の主人公ジョバンニが賢治のモデルである点に注目する時、その孤独の源泉には、妹とし子の死別と友達阪嘉内との決別だけではなく、賢治において生まれつきの性格や生活の中で感じた疎外と挫折などが反映されていると言える。

「銀河鉄道の夜」のテキストは、各々制作された時期が大体明らかになった現在、羅修地人協会の挫折がジョバンニの孤独に反映されていると見るのは間違いである。何故かと言えば、[初期形一]は羅修地人協会の挫折よりもっと以前に当たる一九二四年一二月頃制作されたからである。

ジョバンニの孤独は、改稿時期における賢治の意識に深く関わっている場合もある。これは、一九二六年末以前に改稿が始められたと思われる [初期形二]が制作されてから、一九三一年秋頃までには制作されたと推定される [初期形三]で窺うことができる。そこでジョバンニは非常に孤独な少年として描かれて不幸な現実から逃れて遠くの空へ行ってしまうという独り言を言うのである。この独り言の背景には、羅修地人協会の活動の挫折と一年以上も病臥していた中で感じた死への恐怖による孤独が反映されているのである。

さて、[後期形]が制作された頃賢治は知人に送った手紙の中で自分の生を顧みながら家業による農民への罪意識、挫折と失敗、傲慢などを内省している。こうした賢治が晩年孤独の中で、[初期形三]を改稿した [後期形]の中で最初から不幸な少年として描写したジョバンニを物語の結末で明るい希望をもって元気に生きて行こうとする少年に変えたのは、長い病で心身が衰え自分の死を直視して生きを回顧しながら反省していた時期に深い孤独から脱皮しようとする意志を一つの作品世界を通じて表したものに過ぎないのである。

지카마쓰(近松) 작품에 있어서 하급유녀의 구원방식*

김 민 아**

minajapan@hanmail.net

< 目 次 >

>

- | | |
|--------------------------------|-----------------------|
| I. 서론 | IV. 타인의 죽음을 통하여 얻은 구원 |
| II. 실패한 신주로 인해 유녀의 신분에서 벗어난 여인 | V. 결론 |
| III. 반전 끝에 이루어진 극적인 구원 | |

Key Words : 신주모노(shinjumono), 구원(The help), 유녀(A harlot),
라쿠세키(rakuseki), 세와조루리(sewajoururi)

I. 서론

지카마쓰 문자에몬(近松門左衛門 1653~1724)은 100여 편이 넘는 조루리(浄瑠璃)와 가부키(歌舞伎) 작품을 집필한 일본 근세를 대표하는 극작가이자 일본 문학을 대표하는 작가이기도 하다. 그의 예술은 봉건제도 체제하의 서민들의 마음을 사로잡아 크나큰 반항과 감동을 불러일으키며 위대한 극작가로서 군림하였다.

지카마쓰 세와조루리 24편중에 무려 13편의 작품에서 유녀가 주인공으로 등장하고 있다. 주인공으로 등장하는 유녀들은 작품에서 중요한 역할을 차지하며 비극으로 이끌어 가고 있다.

* 이 논문은 2008학년도 신진우수연구자 지원사업에 의한 것임.

** 서일대학교 겸임교수, 일본고전문학

여자 주인공으로 유녀가 많이 등장하는 것은 유곽이 당시 서민들의 문화의 일부인이었다는 점도 작용을 했겠으나 그 이상의 의미가 있을 것으로 생각된다. 일본 유녀의 기원에서 살펴볼 때, 일본 유녀가 지니고 있는 성성(聖性)과 천성(賤性)이라는 이중성¹⁾, 그리고 근세시대 유녀가 지니고 있는 특성 등이 지카마쓰의 비극성립에 큰 영향을 끼쳤다고 보여진다. 본 논문에서는 지카마쓰 세와조루리의 여주인공 중 가장 많은 비중을 차지하고 있는 유녀에 주목하여 논지를 전개시켜 나가고자 한다.

지카마쓰 세와조루리 24편 중 무려 13편의 작품에 등장하고 있는 유녀들은 공통점을 지님과 동시에 제각각의 특성도 지니고 있다. 유녀의 등급도 최상위 등급인 다유에서 최하급 유녀 오자레(おじゃれ)에 이르기까지, 다양한 유형의 유녀들이 등장한다.

유녀들은 남자 주인공을 이끌며 신주로 치닫기도 하고 사랑하는 남자를 위해 살인을 저지르기도 하고, 정인의 가족들과 갈등과 의리 관계를 형성하기도 하면서 극 전체에 큰 영향을 끼치고 있다. 죽음과 관련되어 있는 신주모노(心中物)의 유녀들은 ‘관음의 화신’²⁾과도 같은 역할을 하고 있기도 하다.

극의 내용과 전개에 있어서 제각각 차이를 보이고 있기는 하나 이들 유녀는 모두 지카마쓰에 의해 인정이 넘치는 인물로서 그려지고, 고달픈 현실로부터 ‘구원(救い)’받고 있다. 여기에서의 ‘구원(救い)’이란 불교에서의 구원, 즉 불·법·승의 삼보에 귀의하여 모든 괴로움으로부터 구원을 포함하여 현실에서도 유곽을 벗어난 곳에서 전개되는 새로운 삶을 의미한다.

도리이 후미코도 『메이도오 히카구』(冥土の飛脚 이하 편이상 작품명은 원어로 표기)의 우메가와(梅川)가 깊은 애정으로 그의 정인 추베를 구원하고, 그의 아버지인 마고에몬까지도 구원하고 있다고 논하고 있다.³⁾ 『長町女腹切』의 오하나(お花)도 정인 한시치(半七)의 고모의 죽음으로 인해 구원 받았다고

1) 일본의 유녀는 원래 가미고토(神事)와 관련된 형태로 성행위나 성적요소를 띤 주술, 가무 등을 행하고, 천황, 궁정과 밀접한 관계가 있었기 때문에 종교적 의미를 가지며 성스러운 존재로서 파악되는 반면, 불교적 시집에서 볼 때 원죄 깊은 존재로써 파악할 수 있다.

2) 滝口洋(1969) 「近松世話浄瑠璃の宗教的性格」 『茨城キリスト教短大紀要』 p.13 茨城キリスト教短大

3) 鳥居フミ子 『近松の女性たち』 武蔵野書院 1999 p.172

서술하고 있다.

이와 같은 ‘유녀와 구원’에 대한 언급은 원죄 깊은 존재인 유녀는 후세에서의 구원을 생각할 수 없다고 서술하고 있는 『시키도오오카가미(色道大鏡)』⁴⁾를 살펴보면, 이 세상의 애욕에 봉사하며 살아가는 유녀가 구원을 생각할 수 없을 정도의 깊은 죄업을 지닌 존재로 인식되고 있었음을 알 수 있다. 또한 지카마쓰도 유녀와 원죄, 그리고 구원의 관계를 인식하고 괴로운 유녀의 신분에서 벗어나는 것이야말로 유녀에게 있어서 가장 큰 구원이라고 인식하고 있었다고 생각된다.⁵⁾

본고는 지카마쓰의 작품 가운데 정형성을 지니고 있는 여자 주인공이 등장하는 3작품을 대상으로 하였다. 순수하고 착하며, 순정적이고 현실적인데다가 정인(情人)을 위해서라면 강인한 면모도 보여주는 여성상이다. 일반적으로 이와 같은 성격을 지니는 여자 주인공들 중에 특히 유녀(遊女)에 주목하자 한다.

『단바요사쿠마치요노코모로부시(丹波与作待夜の小室節)』 『冥途の飛脚』 『나가마치은나노하라키리(長町女腹切)』 등의 3작품에 등장하는 하급유녀들은 신주모노의 하급유녀들이 종교적 특성을 지니며 중요한 역할을 했던 것과는 대조를 이루고 있다. 이들은 극의 중심에서 남주인공을 리드하며 이야기를 이끌어 가는 존재로 묘사되고 있지 않다. 여자 주인공이긴 하나, 남주인공과 다른 등장인물을 보조해주는 부수적인 역할에 지나지 않고 있다.

최상위 등급의 다유에게는 평범한 여인의 삶을 부여하여 현세에서 구원하였고, 신주모노의 하급유녀들에게는 종교성을 부여하여 지카마쓰가 창조해낸 지극히 근세적인 ‘타계’에서 구원하였다. 다음의 세 작품에 등장하는 하급유녀들(고만, 우메가와, 오하나)은 과연 어떠한 방식으로 지카마쓰에 의해 구원되고 있는지 상연연대 순에 따라 고찰해보고자 한다.

4) 況やながれを立る女なれば、罪障須彌より高く、生死蒼海よりも深し、後世恐れずむば有べからず。

藤山箕山(1974) 『色道大鏡』 卷四 八木書店 참조.

5) 第5節 지카마쓰와 유녀 참조.

II. 실패한 신주로 인해 유녀의 신분에서 벗어난 여인

— 『丹波与作待夜の小室節』의 고만(小まん) —

『丹波与作待夜の小室節』에 등장하는 고만은 하급유녀 중에서도 가장 미천한 오자레(おじゃれ)이다. 오자레는 오가는 여행객들을 상대로 몸을 피는 여관의 유녀를 말하는데, 아침부터 저녁까지 여관 입구에 서서 끊임없이 호객행위를 해야만 했다. 이 때문에 유녀 신분이기에는 하나, 다유, 덴진 등과는 비교도 되지 않을 만큼 비참한 신세였고, 유녀 축에 들지도 못했다.

이 작품은 소재가 된 실제 사건이 존재하지 않고, 그 대신 고만과 요사쿠(与作)에 대한 유행가요가 존재하기 때문에 가코모노(仮構物)로 분류된다.

시기는 확실치 않으나, 세키(関)지역에 밀집해 있는 여관의 오자레였던 고만을 노래한 가요가 유행하기 시작했고, 세키는 교통의 요지였기 때문에 오가는 여행객과 마부들로 항상 떠들썩했는데, 이런 여행객들에 의해 고만의 유행가요는 1620년대 전국적으로 퍼졌다고 전해진다.

세키의 고만을 노래한 가요로는 『오치바슈(落葉集 1740)』 권4 「古来中興當流歌百番」 가운데 수록되어 있는 「四季花笠踊」⁶⁾, 『와카미도리(若みどり 1706)』 권4 「せきのこまん」 등이 있다.

요사쿠에 대한 유행가요도 세키에서 시작하여 1620년대에는 전국적으로 유행하게 되었는데, 『落葉集』 가운데 「馬土踊」⁷⁾가 수록되어 있다.

이와 같이 고만과 요사쿠는 원래 각각의 유행가요 속에서 만들어진 전설상의 인물이었으나, 언제부터인가 사랑하는 연인 사이가 되어 유행가요로서 널리 퍼지게 되었다. 이 가요의 내용은 단바의 요사쿠가 세키의 유녀 고만과 사랑하는 사이가 되었는데, 요사쿠가 에도에서 출세하여 무사가 되어 고만과 행복한 결실을 맺는다는 내용이었다. 「서민들은 고만과 요사쿠의 유행가요를 좋아하며 즐겨 불렀고, 지카마쓰는 이 유행가요를 소재로 하여 『丹波与作待夜

6) 이하 본문 인용은 藤井乙男校注 『近松世話物全集』全3卷 1942-1944에 의함

関の小万は亀山通ひ、色を含むや冬籠り、まつ立つ春の祝ひには、逢ふてふ鳥の花笠、夏は川瀬に網代笠、秋は踊りに菅笠を、揃へてそれぞれ小万、踊りだせ小万。

7) 関のお地藏は親よりましちや、親も定めぬつまを持つよの、かへではないかこれ与作、さつたもない事、ほてつばらめがえ、坂は照る照る鈴鹿は曇る、さきはいと言うてははいどうし、間の土山雨が降る

の小屋節』를 창조하였다」⁸⁾고 알려져 있다.

1771년에 간행된 『山家鳥虫歌』에 요사쿠를 묘사한 대목이 있다.

요사쿠는 단바의 마부였으나, 지금은 에도의 무사 요사쿠를 생각하면, 갠 날도 흐려지듯이, 세키의 고만의 눈물이 비를 내리게 하는 것일까⁹⁾

이 내용과 같은 노래가 『丹波与作待夜の小屋節』 하권 「与作小万夢路の駒」¹⁰⁾ 에도 같은 노래가 실려 있는 것을 보면 이전부터 유행했던 가요를 바탕으로 하여 작품을 써내려갔다는 것을 알 수 있다.

지카마쓰가 창조한 요사쿠라는 인물상은 유행가요의 이미지를 살려 재창조되었으나 고만은 유행가요에서 구체적인 이미지를 가지고 있지 않았기 때문에 지카마쓰에 의해서 새롭게 창조되었다고 할 수 있다. 단, 고만이 작품 속에서 자신이 널리 알려져 있는 인물이라는 것을 서술하는 장면이 있는데, 이것은 유행가요를 전제로 해서 창조된 인물이라는 것을 잘 보여주고 있다.

신분은 비록 오자레지만, 다이묘에게까지 알려진 세키의 고만이 아버님을 감방에서 물고문으로 죽게 할 수는 없어요. <중략> 그 일념 하나만으로 열심히 일하고 있는데, 세간에서는 나쁘게 노래로 퍼져나가서.¹¹⁾

이와 같이 유행가요 속의 전설적인 인물이었던 고만은 지카마쓰에 의해 새로운 인물로 창조되었는데, 특히, 미천한 오자레라는 신분과, 비참하고 처량한 자신의 처지를 한탄하는 고만을 상세히 묘사하고 있다.

유녀의 종류는 많지만 다유, 덴진과 같은 유녀들은 최고의 유녀를 비롯하여 여러 등급의 유녀가 있지만, 최하급의 오자레 신분이 되는 사람은 누구인지. 어둠이 가시

8) 諏訪春雄(1974) 『近松世話浄瑠璃の研究』 p.252 笠間書院

9) 与作丹波の馬追ひなれど、今はお江戸の刀さし 与作思へば照る日も曇る、関の小万か涙雨か

10) 与作丹波の。馬追なれど、今は。野末の。放れ駒ちや。しやんとさせ、与作。与作思へば。照る日も曇る。関の小まんが。涙雨か。 p.480

11) 所在こそ出女なれ。お大名へも知られた関の小まんが父親を。水牢では殺されず、<중략>念力一つで立てる身が。世間で悪う謡はれて、 pp.456-457

지 않은 이른 아침부터 가게 앞에 서서, 점심부터 잠자리에 들 때 까지, 요시와라의 참새가 지저귀듯이, 숨이 다할 때 까지 손님을 부르지만, 그래도 손님은 안 오고 요즘은 싼 값에 묵어가는 손님조차 없네. <중략> 저녁에는 모두들 각오를 하는 것이 좋을 것이야. 주인님의 씩씩한 얼굴. 늘 내민 뺨에 가지가 더 돌아날 것 같아. 아, 무서워라. 항상 우리를 돕던 마부들도 이럴 때 손님을 끌어다 줄 것 같지가 않네.¹²⁾

고만은 유녀 중에서도 오자레 신분은 최하위 중의 최하위 등급이었다. 동료 들에게도 차마 말하지 않았지만, 요코다무라의 아버지가 2석 2두의 연공미를 바치지 못하여, 육십 육세의 나이에 감방에 갇혀 물고문을 당하고 있었다. 자식이라고는 누남독녀이었기 때문에 아무도 돌볼 사람이 없었다. 고만의 고립무원의 신세이지만 부친을 구해야겠다는 강한 일념이 있었다.

이세신궁에 참배하러 간다고 둘러대고 휴가를 얻어서, 여자의 몸으로 다이칸쇼 에 바쳐야 할 쌀을 가을까지는 바치겠다고 보증서를 써내고, 겨우 아버님을 감방에서 빼내었지만, 무엇을 어찌해야 할지. 어찌된 일인지, 이전같이 손님은 없고, 부업으로 삼을 삼고, 여자 숙박객들에게 조금씩 푼돈을 받아 모았지만, 학이 좁쌀을 쪼는 듯, 모이지를 않네. 비참한지고 그러는 사이에 약속한 날은 나가오고 기운이 없어서, 몸도 아위어 고생을 하지만.¹³⁾

이와 같이 도저히 돈을 모으지 못해 고민하던 고만은 죽음의 길을 택하게

- 12) かうした勤めさまざまあれども。君傾城といふ者は、この類での王様。それから段々あるうちに、おぢやれの身には何かなる。朝の夜から見世ざらし、昼休から泊りまで。よし原雀の鳴くやうに、息のありたけしやべつて。それでも泊人あることか。どうしたことやら、この頃は一善盛の客さへない。<중략>晩にはみんな覚悟しや。旦那殿の苦い顔、日頃生えた角に股がさかうぞ、なう怖や。常に最眞な馬子衆も。こんな時に客引いてくれそなものではないかいの。 pp.454-455
- 13) 勤めの身にもおぢやれの身は。下の下と言ふはここのこと。傍輩衆へも言はなんだ。横田村の父様、二石二斗の未進に詰り。六十六で水牢。男にも娘にも。子としてはこの身ばかりなり。<중략>參宮するとて暇もらひ。女子の身で代官所を、秋納まで請合うて。牢を出しては出したれども、何をあだてになんとせう。前のやうに客は勤めず私仕事に賃麻績み。女中泊りの袖の下、小まんといふ名でほつほつと。鶴のあはれや、あさましや。請合の日は近づく。気が勇まねば身も瘦せて、辛苦するの、 pp.456-457

된다. 결국 요사쿠와 신주를 결심한 미치유키 장면에서는 자신의 비참하고 한 많은 인생에 대하여 다음과 같이 노래한다.

내가 열두 살부터 손님을 받기 시작해서, 지금은 스물 하나. 꼬박 9년 동안 거처간 손님 몇 만 명일까. 세키의 숙박소는 좁지만, 남녀 수많은 사람이 찾아와 좋은 친구되 자며 꽃을 피우더니 무상한 바람에 지고, 지금은 말 이외에 찾아오는 사람도 없네. 그런 나를 위해 당신은 울어주시나요. 상냥한지고.¹⁴⁾

이 작품은 이전의 작품들이 하급유녀들의 처지와 생활상이 상세히 묘사되지 않았던 것과 대조를 이루고 있다. 고만에 대한 묘사뿐 아니라, 오자레들의 호객행위에 대해서도, 중권 「旅籠屋の段」 첫 부분에서 자세히 다루고 있는데, 이것도 다른 작품에서는 찾아볼 수 없는 보기 드문 장면이라 할 수 있다. 당시의 유곽의 손님맞는 방식을 잘 엿볼 수 있는 귀중한 대목이기도 하다.

여기, 목어 가실거죠. 목어가실 거라면, 여기에서 목으세요. 자, 자, 목으세요, 목으세요. 싸게 헤드릴게요. 비싼 방, 보통 방, 바라시는 대로 좋아하시는 대로. 식기도 깨끗하고, 올 여름에 다다미를 갈아 산뜻한 객실. 이부자리 좋고, 술 좋고, 오차는 최상급이요. 취사를 해도 좋으니, 머물다 가소. 널찍한 욕탕도 펄펄 끓고 있소. 콧물, 마음 대로 물을 끼얹어 기분을 풀고, 여독과 목은 때를 씻어버리고 가소. 아침 4시 출발이요? 2시 출발이요? 베개 말의 이야기 상대가 필요하다면, 꽃 같은 젊은 색시도 있고, 성숙한 여인네도 있으니 취향대로 고르시오. 발을 주물러드리고, 허리도 두들겨주고, 그리고 나서 불붙인 담뱃대를 주거나, 받거나. 황홀한 대접으로 목덜미부터 짜릿하게 헤드리지요.¹⁵⁾

14) わしは十二で人呼び初めて。今年二十二、まる九年。泊めし旅人何万人ぞ。関一宿はせばけれど。男女にいくたりか、友のよしみも時の花、無常の。風にちり果てて。馬よりほかに。問ふ人も。ないてくれるか、やさしやと、 p.481

15) 「これ泊りぢやないかえ、泊りなら泊らんせ。泊らんせ泊らんせ。旅籠安うて泊めませう。上旅籠、中旅籠、お望みしだい、好きしだい。」 「椀家具もきれいな、座敷はこの夏表替へ。寝道具ようて、酒ようて、お茶は上上きちんでなりと。据風呂もしやんしやんかゝり湯取つて、加減みて。旅の汚れのあかつきは七つ立ちか、八つ立ちか。」 「枕のお伽が御用ならば、振袖なりと。詰なりと。足さすつて、腰打つて。吸付煙草の煙管の雁首。首筋元からぞつとしやう」 p.453

이와 같이 최하위 등급인 오자레의 생활상과 고만의 비참한 처지는 비교적 상세히 묘사되고 있으나, 신주모노의 하급유녀들과는 달리 고만이 차지하는 역할과 비중은 두드러지지 않게 나타나지 않는다. 신주모노에서처럼 남자 주인공 공을 리드하며 신주로 이끌고 있지도 않고, 신주모노가 아니기 때문에 종교적 특성도 지니고 있지 않다.

지카마쓰는 최하위 등급 유녀인 오자레를 원죄 깊은 존재로서 인식하여, 그들의 비참한 일상과 처지를 동정하며 유녀의 신분에서 벗어나게 하고는 있으나, 작품을 이끌어어나가는 주인공으로서의 존재감은 부족하다. 오히려 피치 못할 사정으로 이별한 자신의 친아들 산기치(三吉)를 우연히 만나지만 따뜻하게 안아주지 못하여 괴로워하는 요사쿠의 부인 시게노이(滋野井)의 존재가 더 비중 있게 묘사된다. 중권에 등장하는 고만과 요사쿠와의 관계보다도 상권에서부터 등장하는 요사쿠와 부인 시게노이의 깊은 사연, 그리고 마부가 된 그의 아들과의 슬픈 사연 등이 극의 중심축이 되어 작품이 전개되고 있다고 생각된다.

갑자기 신주로 치닫는 고만과 요사쿠의 설정도 설득력이 떨어지는 부분이다. 신주 직전에 사람들에게 발견되어, 목숨을 건지게 된 두 사람은 뜻밖의 행복한 결말을 맞이하게 된다. 시게노이가 유모로 일하는 주인 집 딸 시라베히메(調姫)의 자비와 시게노이의 노력으로 인해, 돈을 훔치고 살인까지 저지른 아들 산기치의 죄도 용서를 받고, 주인에게 쫓겨나 마부가 되었던 요사쿠도 다시 주인집으로 돌아가게 되었고, 오자레였던 고만은 아버지가 계시는 집으로 돌아가게 된 것이었다.

지카마쓰는 오자레인 고만에게도 괴로운 유녀의 신분을 벗어나게 해주었다. 유녀라는 신분에서 벗어났다는 점에서 볼 때, 현세에서 구원되었다고 할 수 있겠으나, 상급 유녀들이 현세에서 구원을 받던 형식과는 다소 차이가 있다. 여주인공으로 등장하고 있기는 하나 그 비중과 역할이 절대적이지 않고, 정인(情人) 요사쿠와 행복한 결말을 맺고 있지도 않다. 오히려 요사쿠는 주인 집으로 돌아가게 되어, 부인 시게노이와 아들 산기치와 행복한 삶을 살아간다는 여운을 남기고 있다. 고만을 둘러싸고 있는 사람들은 불행은 극복되었지만, 고만 자신의 행복을 보장받은 것은 아니었다. 즉, 고만의 행복보다는 요사쿠와 그의 식구들의 삶에 초점이 맞추어졌다고 볼 수 있다.

그러나, 지카마쓰는 최하위 등급의 유녀 고만의 인간상을 아버지를 사랑하고 한 남자만을 사랑하여 헌신하는 여성으로 형상화시켰고, 원죄 깊은 존재로서 인식하여 유녀의 신분에서 벗어나게 해줌으로써 앞의 유녀들과는 또 다른 형태로 현세에서 구원했다고 말 할 수 있다. 이는 지카마쓰가 추구하는 「현세의 평안태평을 바탕으로, 질서의 회복을 추구하려는 발상」¹⁶⁾이 희곡의 구성에 구현된 전형적인 사례라 할 수 있다.

III. 반전 끝에 이루어진 극적인 구원

— 『冥途の飛脚』의 우메가와(梅川) —

『冥途の飛脚』는 1711년 오사카 다케모토 극단에서 초연된 작품으로, 지카마쓰 세와조루리 중에 작품성과 상연횟수 면에 있어서 1, 2위를 다투는 걸작이다. 제목에서 알 수 있듯이, 히카쿠야(飛脚屋)의 추베(忠兵衛)가 공금을 횡령하여 죽음의 길로 치닫는다는 내용으로 쇼바쓰모노(処罰物)¹⁷⁾로 분류된다.

이 작품은 「당시 실제 일어난 히카쿠 가메야 추베라는 나마의 공금소비사건을 각색한 것」¹⁸⁾이다 소재가 된 사건에 대한 정확한 기록은 존재하지 않으나 당시 사건을 가늠할 수 있는 소설은 존재한다. 『冥途の飛脚』가 발표되기 일년 전인 宝永7年(1710) 9월 간행된 우키요조시 『御入部伽羅女』에 의하면, 신마치 즈치야(榎屋)의 유녀 우메가와를 만넨(萬年)이란 부자가 라쿠세키(落籍) 즉 기적(妓籍)에서 빼내는데 알고 보니 우메가와를 빼낸 돈은 공금이었고, 이로 인해 우메가는 다시 신마치로 되돌아가게 되고, 그후 교토에서 유녀생활을 계속하게 된다는 내용이다. 이것을 극화한 것으로는 1711년 교토 미야코 만다유(都万太夫) 극단에서 상연된 가부키 『けいせい九品浄土』가 있다. 우메가와가 추베를 이용해서 유곽을 나오지만 또 다시 에치젠(越前)에서 유녀 생활을 하게 된다는 내용이다.

이 작품은 실제 일어났던 사실을 바탕으로 재구성되었다. 즉 지카마쓰의

16) 向井芳樹(1976) 『近松の方法』 p.76 桜楓社

17) 鳥越文蔵(1989) 『虚実の慰み 近松門左衛門』 新典社

18) 向井芳樹(1976) 『近松の方法』 p.142 桜楓社

언어의 중심적 내용을 이루는 것은 실(實)과 허(虛)라는 피막 사이에 존재한다는 저명한 예술론, 즉 「허실피막론(虛實皮膜論)¹⁹⁾이 치밀하게 구현된 작품의 하나라고 할 수 있다.

1716년에 간행된 소설 『好色入子枕』를 살펴보면, 추베가 이웃집 딸인 오기치(お吉)와 정을 통하게 되었는데, 이를 안 오기치의 아버지가 분노하여 딸을 벌한다는 것이 마침내 죽어버리고 말았다. 추베의 아버지도 추베와 의절하고 그를 가메야(亀屋)에 양자로 보낸다. 양자로 간 추베는 그 곳에서 유녀 우메가와를 만나 사랑에 빠지고, 그녀를 유곽에서 빼내기 위해 공금을 횡령하고야 만다. 도망가는 도중에 붙잡힌 추베는 처형되고, 처형을 면한 우메가와는 여승이 되어 추베의 명복을 빌었다는 내용이다.

지카마쓰는 세간에 소문으로 떠돌아 유명해진 사건을 소재로 하여 『冥途の飛脚』를 창조했다고 볼 수 있다. 이후 많은 개작들이 발표되었는데, 1713년 10월 소네자키신치에서 초연된 기노카이온(紀海音)의 『傾城三度笠』와 1773년 소네자키신치에서 초연된 『けいせい恋飛脚』, 그리고 1796년 1월 오사카츠노(角) 극단의 가부키 『恋飛脚大和往来』 등이 있다.

『冥途の飛脚』의 남자 주인공 추베는 스무 살에 히카쿠야인 가메야에 양자로 가서 4년 동안 열심히 일을 하여 양어머니 묘칸(妙閑)의 신임을 얻었으나, 신마치의 유녀 우메가와와 사랑에 빠지게 된 후 그녀를 기적에서 빼 낼 돈을 마련하기 위해 공금에 손을 대어 파멸의 길을 걷게 된다. 에도시대에는 히카쿠야가 맡은 공금을 횡령할 경우, 그 죄를 엄중히 다스려 사형에 처해졌다.

추베의 성격은 지카마쓰의 세와조루리에서 보여지는 남자 주인공의 일반적인 성격을 크게 벗어나지 않는다. 무능하고 어리석은데다가, 매우 감정적이어서 순간적으로 흥분하여 결국 일을 그르치고야 만다. 이러한 추베에 대해 지카마쓰는 「다급한 성질은 손해를 본다고 하는데 다혈질인 추베는」²⁰⁾과 같이 묘사하고 있다.

우메가와를 기적에서 빼낼 돈을 마련하기 위해 친구 하치에몬(八右衛門)의 돈을 유용한 후, 이와 같은 사실이 발각되자 하치에몬에게 사정하여 조만간 돈을 갚을 것을 약속하고 양어머니의 눈도 속였으나, 이러한 사실을 하치에몬

19) 森修(1990) 『近松と浄瑠璃』 p.165 塙書房

20) 短気は損気の忠兵衛 p.49

이 유녀들에게 폭로하는 것을 엿듣고야 만 추베는 이성을 잃어버리고 만다. 자신의 사정을 이해해준 길로 알았던 하치에몬의 배신에 격노한 추베는 가슴에 품고 있던 삼백량이 들어있는 봉인을 뜯어 하치에몬에게 돈을 내던진다. 다시 한번 돌이킬 수 없는 실수를 범하고야 만 추베는 이 모든 것이 우메가와를 위한 것이었으나, 일을 그르치게 되자 매우 괴로워한다.

오십량의 푼돈을 빌려주고서 잘난 체하며 젊은 남자에게 치욕을 추다니. 우메가와가 들었다면, 죽고 싶다고 생각하겠지. 가슴에 품고 있는 삼백량 중에 오십량을 꺼내어, 하치에몬의 뒤통에 내던지고 할말은 다 쏟아 부어서, 나와 우메가와와의 체면을 세울 것이야.²¹⁾

자신을 기적에서 빼내기 위해 추베가 큰 죄를 범한 것을 안 우메가와는 매우 슬퍼하며 그의 다혈질적인 성격을 탓하기도 하나, 결국은 모든 것이 자신의 탓이고, 무슨 짓을 해서라도 추베를 부양할 수 있다며 침착하면서도 강인한 면모를 보여준다.

가여워라, 추베님. 어째서 그렇게 흥분하시나요 <중략> 저를 다른 사람에게 넘기고 싶지 않은 당신의 마음, 저도 마찬가지예요 내 한 몸 버린다고 생각하면, 가슴에 모두 생각이 담겨 있어요. 포주와의 계약기간은 앞으로 2년, 미야지마에 몸을 팔아서라도, 오사카 강가의 하급창녀가 되더라도, 당신만은 부양할거예요. 당신에게 고생은 시키지 않을 거예요. 침착하세요. 어째서 그렇게 흥분하여 일을 그르치시나요. 누가 당신을 그렇게 만들었나요, 제가 그렇게 했어요, 모두 이 우메가와와의 탓 이기에 면목이 없고, 당신이 가여워요. 이런 제 마음을 헤아려 주세요.²²⁾

21) 五十兩の目腐銀取りかへた僭上。若い者に恥かゝせ、川が聞いたら死にたかろ。懐の三百兩、五十兩引抜いて。面へぶちつけ、存分言ひ、我が身の一分、川が面目。すゝいでやらう。p.49

22) 情なや、忠兵衛様、なぜそのやうに上らんす。そもや、廓へ来る人の、たとへ持丸長者でも、銀に詰るはある習ひ。こゝの恥は恥ならず。何をあてに人の銀。封を切つて撒散し、詮議にあうて牢櫃の。繩かゝるといふ恥と、この恥とかへらるか。恥かくばかりか、梅川はなんとなれといふことぞ。とつくと心を落しつけ、八様に侘言し。銀を束ねて、その主へ早う届けてくださんせ。わしを人手にやりたいともない、それはこの身も同じこと。身一つ捨てると思うたら、みな胸に籠めてゐる。年とてもまあ二年、下宮島へも身を仕切り。大阪の浜に立つても、こな様あさまし

이와 같이 추베를 위로하며 설득하면서도 추베가 살길은 없다는 것을 인지한 우메가와와는 그와 운명을 함께 할 것을 다짐하며 죽음까지 각오한다. 이 대목은 「추베의 운명을 바꾼 행위로써 증권에서 지카마쓰가 창조해낸 가장 중요한 취향」²³⁾이 잘 드러나 있다. 죽음을 택하게 되는 결정적인 계기를 제시한 것이다.

목숨이 무엇이 아까운지요 우리 둘이 함께 죽는다면, 그것은 원래 바라던 소망. 지금이라도 죽을 수 있어요 결심을 하세요. 아, 그래요. 살 수 있는 만큼 이 세상에서 함께 해요.²⁴⁾

우메가와와는 그와 함께 죽을 결심을 하면서도 신주모노에서처럼 신주로 치닫지 않는다. 이 세상에서 함께 있을 수 있을 만큼 함께 있기로 함으로써, 죽음보다는 도피를 선택한 것이다. 현세에서 부부로서 하루라도 길게 살아가기를 바라는 이들의 모습에서, 현세를 긍정하는 다분히 근세적인 지카마쓰의 사상을 엿볼 수 있다. 또한, 급박한 상황에서 극단적인 방법인 신주를 선택하지 않음으로 인해 작품을 신주의 비극으로 끝내지 않고, 또 다른 갈등상황을 연출하며 비극의 방향을 달리하고 있다는 점 등이 이 작품의 뛰어난 면모라 할 수 있다.

이 작품을 구성면에서 살펴보면 인물간의 갈등과 고뇌가 복잡화되고 특별한 악역 없이²⁵⁾ 극의 갈등을 이끌어 간다는 점, 그리고, 결정적인 장면에서 추베의 아버지 마고에몬(孫右衛門)과 친구 추자부로(忠三郎)등이 등장하여

い気にならんした。かうは誰がした、わしがした。みな梅川が故なれば、添いやら、いとしいやら。心を推してござんせと。 pp.52-53

23) 白方勝 『近松浄瑠璃の研究』 p.455 風間書房

24) なぜに命が惜しいぞ。二人死ぬれば本望。今とても易いこと。分別据えてくだんせ、なう。ア、さうぢや。生きらるゝだけこの世で添はう。 p.56

25) 하치에몬이 추베와의 약속을 어기고 비밀을 폭로했다는 점에서 볼 때, 얼핏 하치에몬이 악역의 성격을 띠고 있다고 보여지나, 하치에몬이 유녀들 앞에서 비밀을 말한 것은 추베를 유곽생활에서 멀어지게 하려는 사려 깊은 마음에서였다고 묘사되고 있다. 그러나, 이와 같은 하치에몬의 행동에 대해서는 논란의 여지가 있다. 두드러지는 악역은 아니나, 악역이 아니라고는 할 수 없다는 등의 주장도 있으나, 지카마쓰가 극의 전개에 결정적인 영향을 끼치는 악역으로 설정하고 있지는 않다고 보여진다. 이후의 개작들에 서는, 하치에몬을 점점 악역으로 묘사하고 있다.

새로운 긴장과 감동을 형성시키는 등 다양한 시도를 하고 있다.

『心中重井筒』을 발표한 1707년 무렵부터 보이기 시작한 이와 같은 복잡한 극적 구성으로의 변화는 『冥途の飛脚』에 이르러 한층 더 발전되었다고 볼 수 있다.

지카마쓰의 세와조루리에서 『博多小女郎波枕』 『山崎与次兵衛寿門松』 『心中宵康申』 등에 인정이 깊고 의리 있는 연로한 아버지가 등장하여 감동을 자아내는데, 마고에몬은 이와 같은 전형적인 아버지상으로서 최초로 형성된 인물이라 할 수 있다. 이 작품에서도 중요한 장면에서 마고에몬이 등장하여 우메가와와 정이 넘치는 대화를 주고받으며 아들과 며느리에 대한 깊은 사랑을 드러내고 있다. 죄를 진 아들에 대해 마음 아파하면서도 양부모에 대한 의리 때문에 얼굴도 보지 않은 채, 모르는 척 아들내외에게 도피자금을 건네주며 이들의 무사안일을 기원하는 장면은, 이 작품의 클라이맥스라 말할 수 있다.

도피행각 도중에 추베의 고향 아마토 니노구치무라(大和瀬口村)에서 마고에몬이 얼어붙은 물구덩이에 미끄러져, 나막신의 끈마저 끊어진 채 나자빠져 있는 것을 보게 된 우메가와는 추베 대신 마고에몬을 일으켜 세우며 자신의 신분을 밝히지 않은 채,

아, 저는 여행객이에요, 저희 시아버님도 할아버지 정도의 연배로, 모습도 비슷해요. 남에게 도움을 준다고는 생각되지 않아요, 연로하고 병드신 시아버님의 시중을 드는 것은 며느리의 당연한 임무지요. 도움이 되신다면 저도 얼마나 기쁜지 몰라요.²⁶⁾

라며, 흐르는 눈물을 감추질 못한다. 우메가와와 지나친 상냥함과 슬픈 표정에 아들과 같이 도망친 유녀라는 것을 눈치 챈 마고에몬은 넌지시 돈을 건네며 빨리 여기에서 도망칠 것을 권유한다.

26) ア、我らは旅の者、私が舅の親仁様。ちやうどお前の年配で、恰好もそのまゝ。外へする奉公とはさらさらもつて思はれず。お年寄つた舅御の臥悩みの抱きかゝへ。宮仕へは嫁の役、御用に立てば私も。なんぼうか嬉しいいもの。p.67

내가 며느리라 생각해서 돈을 건네는 것은 아니오. 방금 나를 도와준 것에 대한 답례라 생각하시오. 이 부근을 돌아다니면, 쫓기는 죄인과 닮았기 때문에 붙잡히고야 마오. 색시의 동행인은 더욱 그렇소. 이것을 여비로 하여 고세가도 로 들어가서, 한시라도 빨리 도망치시게나. 당신의 동행인에게도, 대화는 나누지 못할지언정 잠깐 얼굴이라도 보고 싶으나, 아니오, 아니오, 그럼 세상에 대한 의리가 서질 않소. 부디 무사하다는 소식을.27)

우메가와를 중심으로 하여 이어지고 있는 아버지 마고에몬과 아들 추베의 끈끈한 부자지간의 정은 깊은 감동을 주며 극에 활력과 긴장감을 부여하고 있다. 그러나, 곧바로 두 사람은 체포되어 극은 급반전된다.

포승줄에 묶인 채 두 사람은 잡혀 들어오고, 마고에몬은 실신할 지경에 이르는 것으로 극은 마무리된다. 이후에 추베와 우메가와는 어떻게 되었는지에 대한 언급이 없어, 허무하면서도 어중간한 결말을 맞고 있다. 그러나, 신주에 의한 완전한 비극도 해피엔딩도 아닌 또 다른 형태의 추베와 우메가와와의 비극은, 어느 작품보다도 드라마틱하게 여겨진다.

극단적인 신주리는 방법을 선택하지 않고, 짧지만 현세에서의 부부의 연을 선택하여 도피 행각을 벌인 우메가와를 지카마쓰는 어떤 방식으로 구원하고 있을까.

우선 지카마쓰는 미세조로인 우메가와에 대해 가장 정이 깊은 유녀라 칭하고, 진실된 마음으로 한 남자를 사랑하는 여인으로 이상화시키고 있다.

덴진은 향기로운 매실, 다유는 지극히 높은 위치지만, 모두 합쳐서 가장 정이깊은 것은 미세조로.28)

중권의 그 유명한 「三世相の場」에서도 우메가와는 명기 유기리의 옛날을 현재 자신의 처지와 관련시켜29) 구슬픈 유녀의 신세를 탄탄하고 있으나, 오히

27) 嫁御と存じてやるでもなし。ただ今のお礼のため、この辺にぶらついては。よう似たとて捕へるぞ。連合はなほもつて。これを路錢に御所海道へかゝつて、一足も早く退かつしやれ。こなたの連合にも、言葉こそは交さずとも。ちよつと顔でも見たいが。いやいやそれでは世間が立たぬ。どうぞ無事な吉左右をと、 pp.69-70

28) 梅芳しく松高き。位は。よしや引締めて、あはれ深きは見世女郎。 p.42

29) 지카마쓰 작 『三世相』(1686)는 신마치의 명기 유기리의 9주기 추선극으로서, 유기리의

려, 유곽에 진심은 없다(傾城にまことなし)라는 말과 대조적으로 정이 깊고 진심어린 우메가와로 부각되어 이상화되고 있다.

유곽에 진심은 없다고, 세간의 사람들은 말하지만, 그것은 모두 거짓말. 남녀 간의 미묘한 감정을 알지 못하는 자들이 하는 말이지. 진심과 거짓은 원래가 동일체. 설령 목숨을 바쳐 제 아무리 정성을 다해도, 남자가 소식도 없이 멀어 진다면 마음으로 제 아무리 좋아한다 할지라도, 유녀의 몸으로서 어찌할 방도가 없는 법. 자신이 좋아하지도 않는 사람에게 팔려간다면, 언약도 모두 거짓이 되고 또 처음부터 진심이 없는 유녀라 생각하고 만나던 사람이, 계속하여 만나다가 마침내 정인이 되면, 처음의 거짓도 모두 진심이 되지.³⁰⁾

또한, 한 남자에게 맹목적인 사랑을 받고 유녀의 신분임에도 불구하고 마고 에몬에게 머느리वाद 같은 대접을 받음으로써 구원되었다고 볼 수 있다.

완전한 비극으로 끝나지 않고 또 다른 비극으로의 반전을 꾀한 『冥途の飛脚』에서의 우메가와와 구원은 「불완전한 듯한 클라이막스」³¹⁾ 즉 완벽하지는 않으나 가장 극적인 구원이라 할 수 있겠다.

IV. 타인의 죽음을 통하여 얻은 구원

— 『長町女腹切』의 오하나(お花) —

마지막으로 살펴 볼 『長町女腹切』는 正徳2年(1712) 다케모토 극단에서 초

이모토조로인 하기노가 유기리 딸인 하루히메에게 구슬픈 유녀신세에 대해 한탄하는 장면이 나온다. 우메가와와 유명한 이 장면의 한 절을 읊조리며, 자신의 신세를 한탄하고 있다.

- 30) 傾城にまことなしと、世の人の申せども。それはみな僻事、訳知らずの言葉ぞや。まことも嘘も本一つ。たとへば、命投打ち、いかにまことを尽しても。男の方より便なく遠ざかるその時は、心やたけに思ひても。かうした身なればまゝならず。おのづから思はぬ花の値引にあひ。かけし誓ひも嘘となり。また初めより偽りの勤ばかりに逢ふ人も、絶えず重ねる色衣、つい寄るべとなる時は。はじめの嘘もみなまこと。 p.45

- 31) 広末保(1984) 『近松序説』 p.195 未来社

연되었다. 오사카의 나카마치(長町)에서 여자가 할복을 한 보기 드문 사건에, 유녀 오하나와 한시치(半七)의 신주사건이 섞여 극화된 것으로 보이나, 이 두 사건에 대한 확실한 기록은 존재하지 않는다. 세키네 시세이(関根只誠)의 『戯場年表』에는 1699년 8월 7일에 일어난 사건으로 이즈쓰야(井筒屋)의 오하나와 가타나야(刀屋)의 한시치가 신주했을 때 여자가 할복을 했다고 되어있다.

제목에서부터 이색적인 느낌을 주는 『長町女腹切』은 그 내용과 전개 면에 있어서도 다른 작품들과 차이를 보이고 있다.

여자 주인공인 오 하나는 교토 이시가키마치(石懸町) 이즈쓰야의 유녀로 집안의 어려운 형편으로 인해 팔려온 것이 아니라, 악랄하고 비열한 계부 구헤(九兵衛)의 탐욕으로 인해 10년 계약으로 이즈쓰야에 팔려왔다. 그러나, 심성이 착한 오 하나는 열심히 일을 했고, 곧 그 계약기간도 끝나가고 있었다. 그녀는 계약이 끝나는 대로, 이시미야(石見屋)라는 가타나야의 직인 한시치와 부부의 연을 맺기로 약속을 했으나, 계부 구헤는 계약기간을 더 연장시키려 하였다. 이 작품에서 악역으로 등장하고 있는 구헤는 오 하나를 유곽에 팔아 그 돈으로 먹고 살기 위해 오 하나의 어머니와 재혼했다고 당당하게 말하는 구제불능의 인간형이다. 오 하나를 평생 유곽에 잡혀두고 본인은 안락한 생활을 하고자 하는 구헤는 오 하나와 한시치가 도피하게 되는 원인을 제공한다.

남자주인공 한시치는 무사의 아들로 태어났으나 대대로 이어져 내려오던 가보인 칼에 할아버지와 아버지가 뜻하지 않게 죽게 되자, 가타나야의 직인으로 일하게 된다. 3대까지 저부를 받는다는 불길한 이 칼은 결국, 한시치가 죄를 저지르고 마음 착한 고모가 할복하는 모티브가 된다.

전개에 있어서도 상권과 중권에서는 오 하나와 한시치를 중심으로 이야기가 전개되고 있으나, 하권에서는 느닷없이 한시치의 고모가 중심이 되고 있다. 이와 같이 갑자기 주인공이 바뀐 듯한 부자연스러운 전개는 여자의 할복자살 사건과 남녀의 신주사건을 무리하게 뒤섞어놓은 결과라 할 수 있다. 「비극으로써는 주제가 바뀌고 중단된 미완결의 작품으로 부정적인 평가」³²⁾를 받고 있다. 즉 극의 완성도는 떨어진다고 할 수 있으나 남녀 주인공을 구원하기 위해 제3자가 대신 죽는다는 설정은 참신하면서도 새로운 시도로서 평가할만

32) 勝倉壽一(1999) 「長町女腹切の構図」 『福島大学教育学部論集』67 p.54 福島大学

하다. 또한, 대대로 이어져오는 칼이 3대에 걸쳐 죽음을 부른다는, 다소 서스펜스적인 요소도 갖추고 있다. 극에 긴장감과 활력을 부여하고 있는 칼과 더불어, 상냥하고 사려 깊은 인물로 묘사되고 있는 한시치의 고모는 극을 이끌어가는 매우 중요한 존재이다. 고아가 되어 교토의 직인으로 보내진 조카를 마음 아파하며 가문의 저주에서 벗어나게 해주려 노력하다 결국, 자신이 자청하여 그 저주를 받게 된다.

이 작품이 극의 내용과 전개에 있어서 다른 작품들과 차이를 보이고 있으나, 남녀 주인공의 성격은 기존의 틀을 크게 벗어나지 않고 있다.

먼저, 남자 주인공 한시치는 오하나를 사랑하여 기적에서 빼내고 싶어하지만 무능력하고 어리석어, 돈을 마련하기 위해 고모한테 세공을 부탁받은 가보인 훌륭한 칼을 값싼 칼로 바꿔치기 하는 큰 죄를 범하고야 만다. 무사의 칼을 가짜로 바꿔치기한 죄로 사형당할 것을 두려워한 한시치는 다급하게 신주로 치닫지 않고 오하나와 함께 도피행각을 벌이는데, 이는 『冥途の飛脚』와 그 성향을 같이한다.

차야의 하급유녀 오 하나는 순정적이고 헌신적이며 정인을 위해서라면 죽음도 마다하지 않는, 지카마쓰의 전형적인 여성상이다. 돈이 없는 놈에게는 절대 딸을 줄 수 없다며 악담을 퍼부으며 소리치는 계부 구혜지를 향해,

사랑하는 남자와 함께 할 수 없다면, 차라리 죽여주세요.³³⁾

이라며 한시치에 대한 사랑을 굽히지 않는다. 돌이킬 수 없는 큰 죄를 범한 한시치를 따뜻하게 위로하며 자신을 기적에서 빼내기 위해 생긴 일이라며 모든 죄를 뒤집어쓰려 하고, 끝까지 부부로서의 운명을 같이 하려한다.

저런, 그런 일이 있을 것이라고 생각은 했었어요. 가엾게도, 저 때문에 여러 가지로 처신이 잘못되어가는군요. 조사를 받게 되면, 모두 제가 한 것이라 하고, 죄를 벗어나세요.³⁴⁾

33) 思ふ男に添はれぬからは、殺しやころしや。p.183

34) サアそんなことであらうと推量に違はぬ。いとしや、わし故いろいろにお身を狂はする。詮議の時は、みなわしがわざにして、身を逃れてくださいんせ。p.191

납득이 안가는 말씀을 하시네요. 기쁨도 슬픔도, 우리 두 사람이 함께 하기로 약속하지 않았나요.³⁵⁾

한편, 전혀 새로운 인물상인 한시치의 고모는 하권의 주인공이자 작품에 결정적인 영향을 끼치는 인물이다. 주인공의 부모도 아닌 친척이 이처럼 큰 비중을 차지하고 있었던 유례는 찾아볼 수 없다.

게다가, 성격의 변화도 격심하다. 상권과 중권에서는 상냥하고 사려 깊은 모습을 보이다가 하권에서 갑자기 할복자살이라는 돌출 행동을 함으로써 극 전체의 흐름을 완전히 바꾸어 놓는다. 오히려 한시치의 사랑의 도피 행각도 충격적인 고모의 할복자살로 인해 극의 중심에서 벗어나버린다.

갑작스런 고모의 할복자살에 대해 지카마쓰는 조카의 과오를 대신하여 죄 과를 받고자하는 깊은 마음과, 3대째 내려오는 칼의 저주가 자신을 마지막으로 끝나기를 바라는 심정에서 비롯되었다고 묘사하고 있다. 칼의 내력과 그 저주가 밝혀지면서 비극적 요소가 서술되는 장면은 다소 길지만 인용한다.

진품 칼은 노부쿠니의 것이고, 이것은 시모사카의 것이군. 직인이 변했다 할지라도, 칼에 찍혀있는 문양과 칼의 길이가 같으면, 일가에 재앙이 미치는 것은 마찬가지. 이 칼로 아버님이 사람을 찔러. <중략> 이런 바보 같은 놈 같으니. 너를 죽게 한다면, 어째서 이 고모가 긴 말을 했겠느냐. 자살은 하는 것이 아니야, 나쁜 행동을 하였지만, 도피해서 몸을 감추지 않고, 고모부의 난처함을 생각하여 여기까지 온 너의 마음은, 역시 가문의 피는 속일 수 없는 것이야. 적어도 이것만큼은 훌륭하구나. 너의 아버지는 나의 오라버니. 임종 직전에 너를 맡았으나, 옷 한 벌, 허리끈 한 개 시주지도 못하고, 상냥하게 대해주지도 못하고, 너를 맡은 보람도 없었으나, 이렇게 중요한 때에 대신 할 수 있는 이 목숨은, 너를 위한 것이 아니야. 모두가 오라버니를 위한 것. 나만 죽는다면, 나만 죄인이 된다면, 칼은 무용지물이 되고, 다른 조사도 이루어지지 않을 것이야. 칼의 저주도 삼대면 끝이지. 앞으로 행복하고 출세도 해서, 부모님과 할아버지의 이름을 이어나가거라. 자, 어서 빨리 도망가거라, 가거라.³⁶⁾

35) 聞えぬこと言うてくだんする。悦びも悲しみも、二人が身に引受ける。約束ぢやないかいの。p.197

36) 本のは信國、これは下坂。作はかはれど、焼刃、寸尺一対なれば。一家に崇るは同じこと。これ故に父様が。人を射つて。<중략>ヤイ戯氣者、そちを殺すほどならば。なんの叔母が長口上、自害をするものか。手の悪いことしたれども、驅落して

이와 같은 고모의 희생으로 인해 한시치는 죄를 방면 받고, 오하나 또한 그와 함께 구원되었다. 다른 사람의 희생으로 인해 정인과 함께 구원된 오하나의 구원은 이전의 작품들에서 보여지던 것과는 또 다른 방법에 의해 이루어졌다고 말할 수 있다.

이상의 第5章에서 살펴 본 하급유녀들은 신주모노의 하급유녀들과는 다소 차이가 있다. 성격적인 면에 있어서는 지카마쓰가 추구하는 전형적인 유녀상(인정이 많고 순정적이며, 헌신적임과 동시에 강인한 면모도 지니고 있는)에서 크게 벗어나지는 않으나, 극의 중심적인 역할을 다하고 있지 않다.

『丹波与作待夜の小屋節』에서 시게노이는 애절한 모성애로 큰 감동을 자아내게 함으로써 극 전체의 분위기를 이끌었고, 『冥土の飛脚』의 마고에몬은 엄격하면서도 자상한 아버지상을 형성시키며 극의 감동을 절정에 달하게 하고, 또 다른 비극으로의 반전을 이끌어내었다. 『長町女腹切』에서는 남자 주인공의 고모가 등장하여, 사랑하는 남녀를 구원하고자 자신이 죄를 뒤집어쓰고 할복자살함으로써 충격과 색다른 감동을 느끼게 하였다.

사랑의 성취방법과 결말에 있어서도 차이를 보이고 있다. 무작정 신주로 치달았던 신주모노의 하급유녀들이 정인과 함께 지카마쓰의 타계에서 구원되고 있는 반면, 第5章의 하급유녀들은 각각 그 방법을 달리하고 있다.

『丹波与作待夜の小屋節』의 미친한 오자레인 고만은 요사쿠와 신주를 시도 하나 발각된다. 목숨을 건진 고만은 유곽에서 벗어나 그리운 자신의 집으로 돌아가게 됨으로써 구원받고 있으나, 정인 요사쿠와는 맺어지지 않아 완전한 해피엔딩이라고는 볼 수 없다.

『冥土の飛脚』의 우메가와와는 무작정 신주를 선택하지 않았다. 정인 추베를 위해서 죽을 각오까지 하나, 신주 대신 도피를 택하고 있다. 도피를 하다 발각되어 또 다른 비극을 맞이한 우메가와와는 극적인 장면에서 시야머지 마고에몬

身も隠さず。叔母婿の難儀を思ひ身を捨てて来た心。さすが筋目ほどあつて。せめてもこれはでかしたな。そちが父御は我が兄様。最期の時に預りし甥なれど。着替一つ、帯一筋、何をやさしきこともなく。預りし甲斐もなかりしに。大事に代る命、そなたにはやらぬ。みな、兄様への奉公ぞや。叔母さへ死ぬれば、咎は一人に極つて。脇差は上り物、外に御詮議は残るまい。刃物の祟りも三代で済む。行く末めでたう出世して、親、祖父の名字を継ぎや。サア早う行きやいきやと。

과의 깊은 정의 교류로 인해, 구원되었다고 할 수 있다. 완전한 비극으로 끝나지 않고, 또 다른 비극으로의 반전 속에서의 우메가와와의 구원은 가장 극적인 구원이라 말할 수 있다.

『長町女腹切』의 오하나도 우메가와처럼 신주로 치닫지 않고 도피를 택하고 있다. 죽음을 각오한 도피 행각에서 뜻밖에도 한시치의 고모가 할복을 하여 이들의 죄를 대신함으로써 구원되고 있다. 매우 색다른 방법에 의한 구원이라 할 수 있다.

지카마쓰는 이들을 신주모노의 하급유녀들처럼 성스러운 존재로서 묘사하지 않고, 후세를 기원할 수 없는 원죄 깊은 존재로서만 묘사하였다. 이것은 앞의 다유들과 같은 시각에서 파악되고 있다고 할 수 있으나, 다유들과 같이 직접적인 범죄행위의 주체로서 묘사되지 않았고, 현세에서의 평범한 행복을 보장받지 않았다는 점에서 차별화된다.

신주를 행하지 않은 하급유녀들은 성스러운 존재로서 묘사되지도 극의 중심적인 역할도 부여받고 있지 않으나, 그들의 비참한 일상과 처지에 대한 지카마쓰의 변치 않는 동정심으로 인해, 완벽하지는 않으나 제각각 다른 방법에 의해 후세를 기원할 수조차 없었던 유녀의 신분에서 벗어나서 구원받고 있다고 말할 수 있다.

지카마쓰의 신주모노에서 추구하는 현세에서의 어려움을 죽음으로 승화시키며 이승과 저승 사이를 아름다운 비극으로 그려내는 즉 「비극의 창화(晶化)」³⁷⁾라는 수법과 또 다른 현실적 차원의 비극을 추구하려는데 의미를 찾아볼 수 있다.

V. 결론

지카마쓰의 세와조루리 중 특히 죽음과 연관되어 있는 신주모노에서 불교 사상을 기본으로 하는 지카마쓰의 사상을 엿볼 수 있는데, 이 또한 현세이익을 강조했던 근세불교의 성향이 잘 나타나고 있다. 극락왕생을 기원하는 정도교

37) 笠原伸夫(1994) 「巷説から悲劇への晶化」 『国文学解釈と鑑賞』1994.9 p.90 至文堂

사상에, 현세성불·변신성불·중생구원의 관음의 사상이 융합되어 나타나고 있는데, 이것은 속세를 벗어나서는 불교가 그 기능을 다할 수 없다는 것을 의미하는 것이 된다. 즉, 속세에 내재되어 있는 지극히 근세적인 불교사상이 지카마쓰 작품 속에서도 그대로 나타나고 있다고 말할 수 있다.

불교의 역할인 구원은 지카마쓰 개인의 사상과 세계관 등에 근거하여 그만의 방법에 의해 이루어지고 있다고 할 수 있다. 지카마쓰 세와조루리의 비극은 단순히 비극으로만 끝나지 않고 반드시 구원의 자세도 보여지고 있는데, 그 구원의 대상은 사회적 위치가 미천한 자들이었다. 지카마쓰 세와조루리 24편 중 무려 13편의 작품에서 여주인공으로 유녀가 등장하고 있고, 특히 흥행에 대성공을 거둔 작품 속 여주인공들은 대부분이 유녀였다.

근세시대의 유녀란 근세서민과 친밀한 존재이자 피로운 현세를 있게 해주고 향락을 제공해주는 존재였고, 지정된 장소를 벗어나지 못하고 비참한 생활을 강요당했던 원죄 깊은 존재의 여성이기도 했다. 거기에 일상성을 느낄 수 없는 신성한 부분도 지니고 있었다.

지카마쓰는 신주 등의 가장 비참한 처지에 놓인 하급유녀들만을 ‘성상’을 지닌 존재로서 파악하여 묘사하였는데, 미천한 유녀 중에서도 가장 비참한 처지의 유녀를 관음의 화신과도 같은 성스러운 존재로서 묘사했다는 것은 비극의 효과를 극대화시키기 위한 다분히 의도적인 지카마쓰의 시도였다고 생각된다.

본고에서는 하급유녀가 주인공인 작품 중 신주모노가 아닌 3작품을 택하여 그 구원의 방법에 있어서 신주모노의 하급유녀들과는 다소 차이를 살펴보고자 하였다.

지카마쓰는 이들을 신주모노의 하급유녀들처럼 성스러운 존재로서 묘사하지 않고 원죄 깊은 존재로서만 묘사하였다. 이것은 앞의 다유들과 같은 시각에서 파악되고 있다고 할 수 있으나, 다유들과 같이 직접적인 범죄행위의 주체로서 묘사되지 않았고, 현세에서의 평범한 행복을 보장받지 않았다는 점에서 차별화된다.

신주를 행하지 않은 하급유녀들은 성스러운 존재로서 묘사되지도 극의 중심적인 역할도 부여받고 있지 않으나, 그들의 비참한 일상과 불행한 처지에 대한 지카마쓰의 변치 않는 동정심으로 인해 완벽하지는 않으나 제각각 다른

방법에 의해 구원받았다. 즉, 이들 또한 후세를 기원할 수 있는 신분으로 재창조되었다고 말할 수 있다.

<參考文獻>

- 笠原伸夫(1994) 「巷説から悲劇への晶化」 『国文学解釈と鑑賞』9月號 至文堂
 勝倉壽一(1999) 「長町女腹切の構図」 『福島大学教育学部論集』67 福島大学
 白方勝(1994) 『近松浄瑠璃の研究』 風間書房
 諏訪春雄(1974) 『近松世話浄瑠璃の研究』 笠間書院
 高野正巳(1984) 『近松の女性群像』 赤坂書院
 滝口洋(1969) 「近松世話浄瑠璃の宗教的性格」 『茨城キリスト教短大紀要』 茨城キリスト教短大
 鳥居フミ子(1999) 『近松の女性たち』 武蔵野書院
 鳥越文蔵(1989) 『虚実の慰み 近松門左衛門』 新典社
 広末保(1984) 『近松序説』 未来社
 藤井乙男校注(1942-1944) 『近松世話物全集』1,2,3 富山房
 藤本箕山(1974) 『色道大鏡』 八木書店
 向井芳樹(1976) 『近松の方法』 桜楓社
 森修(1957) 『近松門左衛門』 三一書房
 ____ (1990) 『近松と浄瑠璃』 塙書房

접 수 일: 12월 31일
 심사완료: 01월 08일
 게재결정: 01월 29일

<要旨>

近松作品における下級遊女の救い方

本稿は下級遊女を主人公とする近松門佐衛の作品の中、心中物ではない三つの作品を対象に、遊女が救われる過程とその特徴を考察したものである。その救いの方法を比較してみるとかなりの差がある。近松はこれらを心中物の下級遊女を描く際、聖性を持った存在として描かれることも、原罪深い存在であることを強調した。これは位の高い遊女の太夫の場合でもそうであるが、太夫のように直接的な犯罪行為の主体として描かれることもなく、現世での平凡な幸せを保障されないという点で差別化された。

心中を成し遂げることができなかった下級遊女は神聖な存在として描写されるのも劇の中心的な役割を担うこともない。しかし、彼女らの惨めな日常と不幸な境遇を同情の眼でみる近松は完璧ではないが、他の手方によって救いあげようとしたと思われる。遊女の身分を脱し新しい身分に再創造されたことである。

近世の文化を論じようとする時、避けられない存在である遊女に焦点を合わせて、遊女の等級による近松の救いの方法を分析することで、女主人公の遊女は様々な特徴を見出すことができた。近松の思想を背景に、彼の特有の方法によって救われる模様を把握した。このような近松の劇の創作方法は悲劇の効果を極大化させて興行の面でも成功を納め、作家としての力量を高く評価されたのである。

末摘花物語における香り

— 内面と関係しない香り —

金 炳 淑*

ukihune@hanmail.net

< 目 次 >

>

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1. はじめに | 4. 父常陸の宮の靈威による香り |
| 2. 恋の世界へのしるべ | 5. おわりに |
| 3. 「松にかかれる藤」の「かをり」 | |

Key Words : 향(Scent), 소나무(Pine tree), 등꽃(Wisteria blossoms),
히타치노미야(Hitachinomiya), 영위(Divine power)

1. はじめに

「蓬生」巻は、「末摘花」巻に直属する、故常陸の宮の姫君である末摘花の後日譚として紡ぎ出されたものである。帰京後偶然、邸の前を通りかかった光源氏は、末摘花をふと思い起こし、再会に至る。以後、源氏は貧しさに耐えながら一途に自分を待ち続けていた末摘花に感動し、庇護の手を惜しまず、しまいには姫君を二条東院に迎える。三角洋一は、このような展開と関連して「蓬生」巻の手法を男女再会談の話型に沿って考察し、末摘花はさまざまな型の再会談の問いかける課題を一身に引き受けており、とりわけ『桂中納言物語』を下敷きに行っている」と指摘している。

* 韓国外国語大学校 日本学部 非常勤講師、日本古典文学専攻

1) 三角洋一(2004)「蓬生巻の短編的手法・続」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』③蓬生・関屋』

ところが、「蓬生」巻のみならず「末摘花」巻及び二条東院に移された以降点描される末摘花への批判的な記述態度を視野に入れた時、話型を超えて物語の展開を導く存在が目立ってくる。末摘花は没落しているものの二世女王として、故父宮の遺訓を守り、父宮の面影が残る空間と遺品に執着する。これは末摘花物語全般に一貫する末摘花の性質であるが、この裏面には故常陸の宮の霊が存在²⁾している。

そこで本稿では、末摘花物語における故常陸の宮の霊と伝領の邸宅を意識しながら、光源氏と末摘花の再会が、邸宅の「松にかかれる藤」から漂う「かをり」に端を発することに注目したい。「かをり」による源氏の想起が、末摘花本人への直接的な回帰ではなく、庭の樹木によって媒介されているのに着目して、末摘花物語における香りの機能と、「松にかかれる藤」の「かをり」という嗅覚表現が持つ重層的意味について考察する。そして、持ち主の人柄と関わらない末摘花の香りの特性と関連して、「蓬生」巻とその以降の末摘花造型の落差の理由について考えてみよう。

2. 恋の世界へのしるべ

次の箇所は、光源氏が須磨から帰京した後、末摘花を想起する場面である。源氏は花散里を訪問しようと外出したが、たまたま末摘花の邸の前を通りかかる。時折、松の大木に咲きかかる藤の花の芳ばしい「かをり」が風によって源氏の感覚を刺激する。そして、「かをり」は、源氏をして十年前の記憶を蘇らせて、末摘花との再会へと導く。

至文堂 pp.195-198 他にも『宇津保物語』俊蔭巻などの困窮の中で男を待ち続ける女の物語の話型の投影(今西祐一郎(1980)「古代の人 末摘花」『講座源氏物語の世界』第四集 有斐閣 p.57)や、中国の賢女伝の受容(田中隆昭(1998)「滑稽譚から賢女伝へ—末摘花の物語」『人物造型からみた『源氏物語』』至文堂 p.109)の指摘など、様々な見解が提示されている。

2) 藤井貞和(1980)「末摘花巻の方法」『講座源氏物語の世界』第二集 有斐閣 p.145

【場面1】

昔の御歩き思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。

大きな松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。橘にはかはりてをかしければさし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば亂れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。いとあはれにておしとどめさせたまふ。
(「蓬生」②344)³⁾

「かをり」という瞬間的なものが過去への回帰をもたらしたのである。源氏自ら「橘にはかはりてをかしければ」と断っていることから分かるように、本来ならば「橘のかをり」であるべきであるが、橘への言及は『古今集』の歌を想起させる。

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする (『古今集』夏歌139)⁴⁾

五月を待っている橘が咲いて、その花の香りを嗅ぐと、昔親しかったあの人の袖の香が思い出され、とても懐かしい気分には誘われると解されるこの歌は、『源氏物語』においても繰り返し引用されている。その内、地の文において実際に「橘のかをり」が漂っているのは、次の三箇所に限られる。

① 二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き影ども木暗く見えわたりて、近き橘のかをりなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、飽くまで用意あり、あてにらうたげなり。
(「花散里」②156)

② 五月雨はいとどなかめ暮らしたまふより外のことなくさうぎうしきに、十余

3) 本文の引用は、秋山虔 外 3人 校注・訳(1994-1998)『源氏物語』①-⑥ 新編日本古典文学全集20-25 小学館による。引用にあたって括弧内に巻名・巻数・頁数を記した。下線は筆者による。

4) 小沢正夫 外 1人 校注・譚(1994)『古今和歌集』新編日本古典文学全集11 小学館

日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきに、大将の君御前にさぶらひたまふ。花橋の月影にいときはやかに見ゆるかをりも、追風なつかしければ、
 (「女」④539)

- ③ 月たちて、今日ぞ渡らましと思ひ出でたまふ日の夕暮、いものあはれなり。御前近き橋の香のなつかしきに、ほととぎすの二声ばかり鳴きてわたる。
 (「蜻蛉」⑥223)

①は光源氏と麗景殿女御による桐壺帝在世のころの回想であり、②は光源氏と夕霧による紫の上の回想、③は薫による浮舟の回想である。三箇所ともに「橋のかをり」が昔の人を思い出すすがとして機能している。即ち、「五月待つ花橋の香」の歌は「物語表現の最も重要な要素である“時間”を、引用し重層させ、その転換や遡及をも含めたうえで、新たな時の創出を可能とする」⁵⁾機能をすると見えようが、【場面1】はこのような香りによる回想というメカニズムをみごとに働かせている。

つまり、源氏の「橋にはかはりてをかしければ」という言葉は、香りに触発される連想の不可思議を利用したもので、末摘花を昔の懐かしい人に位置づける表現であると言えよう。

旧宮家の高い出自の姫君が、没落して経済的に不如意な生活の中、ただ琴のみを慰めとして心細く暮していることを聞き知った光源氏は、昔物語に好んで展開されるような葎の宿の美しい女性を発見して恋が芽生える場面などに空想を刺激されて、末摘花にひどく興味をそそられた。しかし、雪の夜、故常陸の宮の姫君を訪ねた光源氏は、翌朝末摘花の醜貌に愕然とする。幻想を膨らませただけに失望も大きく、以降源氏の末摘花に対する態度は、「さる方の後見にてはぐくまむと思ほし」(「末摘花」①297)、「事にもあらずはななきほどの御情ばかりと思し」(「蓬生」②326)といったように、男女間というよりは後見役としてであった。それなのに、物語は、「橋の香」という文化的・時代的共感を得ている表現に倣った「藤」の「かをり」を漂わせて、突然に光源氏と末摘花を恋する男女関係に転換している。

5) 松井健児(2004・9-10)「よい匂のする情景—『源氏物語』の花の庭・樹木の香」『文学』岩波書店 p.107

「蓬生」巻の冒頭には、光源氏の須磨流謫の際に、光源氏を恋慕う女君たちの愁嘆が語られているが、次第に「なかなか、その数と人にも知られず、立ち別れたまひしほどの御ありさまをもよそのことに思ひやりたまふ人々の、下の心くたきたまふたぐひ」(「蓬生」③325)の一人である末摘花に絞られていく。即ち、「末摘花自身が源氏の愛人たちの象徴的な隠喩」⁶⁾となっているが、これは「蓬生」巻の物語の方向を示すものだと思われる。「蓬生」巻の末摘花と光源氏の再会場面における「かをり」は、「蓬生」巻の物語の展開方向とも照応するものである。

そして香りと関連しては、次の箇所にも目を留めるべきであろう。

【場面2】

ひき植えしならねど、松の木高くなりける年月のほどもあはれに、夢のやうなる御身のありさまも思いつづけらる。

源氏「藤波のうち過ぎがたく見えつるはまつこそ宿のしるしなりけれ
数ふればこよなう積もりぬらむかし。都に变りにけることの多かりけるも、
さまさまあはれになむ。いまのどかにぞ鄙の別れにおとろへし世の物語も聞こえ
尽くすべき。年経たまへらむ春秋の暮らしがたさなども、誰にかは愁へたまは
むとすらもなくおぼゆるも、かつはあやしうなむ」など聞こえたまへば、

末摘花 年をへてまつしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか
と忍びやかにうちみじろきたまへるけはひも、袖の香も、昔よりはねびまさ
りたまへるにやと思さる。 (「蓬生」②351)

源氏との対面の際、末摘花は服装のみすぼらしさを恥じて、叔母がくれた衣に着替える。この衣は不愉快に思う叔母のゆかりのものなので、見向きもしなかったのを、老女房たちが、香を入れる唐櫃に入れておいたものである。そのため、衣には「なつかしき香」(「蓬生」②349)が染みていたが、はからずも「袖の香」は、源氏に末摘花を魅力ある女性として感じさせる。これに似た状況は、既に「末摘花」にも見當られる。

6) 三谷邦明(1986)「末摘花」『源氏物語必携Ⅱ』學燈社 p.74

【場面3】

君は人の御ほどを思せば、ざれくつかへる今様のよしばみよりは、こよなう奥ゆかしうと思しわたるに、とかうそそのかされて、ゐざり寄りたまへるけはひしのびやかに、えひの香いとなつかしう薫り出でて、おほどかなるを、さればよと思す。（「末摘花」①282）

源氏は、末摘花の身分を考えて、「えひの香」が期待通りだと思う。末摘花の醜貌を見る前、匂袋の慕わしい香は、源氏に末摘花を葎の宿の美しくて高貴な女性として認識させている。

このような末摘花物語における香りの機能は、衣をめぐる記述との比較を通して、なおさら明らかになる。

今様色のえゆるすまじく艶なう古めきたる、直衣の裏表ひとしうこまやかなる、いとなほなほしうつまづまぞ見えたる。あさましと思すに、

（「末摘花」①300）

末摘花は源氏に元旦の装束を贈るが、これが流行の薄紅色の、どうにもがまんならないほどに艶も失せ古びている単衣と、表裏とも同じように濃い紅色の直衣なのであった。源氏は、まるで風情もなく端々を見せる衣に対して「あさまし」という辛辣を極めた評価をする。

即ち、常陸の宮の遺品である衣が揶揄の対象として扱われている反面、香りは一貫して由緒ある宮家の象徴として、光源氏との関係を恋する男女間の関係へと展開させる機能をする。

とすれば、光源氏と末摘花との再会において「かをり」が用いられている理由も想像に難くない。末摘花を恋にふさわしい高貴な宮家の姫君にさせるのは、香り以外にはなかったのではないか。

つまり、【場面1】に用いられた「松にかかれる藤」の「かをり」は、物語が「末摘花」巻の「をこ物語」とは異なる方向へ展開することを推認させる表現であると言えよう。さらに、恋物語の面貌は【場面2】において源氏と末摘花が歌を贈答する箇所からも窺うことができる。

末摘花の変わらぬ心に感動したと詠む源氏の歌に、末摘花は源氏の歌を受け、「まつ」に「待つ・松」をかけ、待つ身の辛さを表し、「花のたよりにすぎぬばかりか」とすねて見せる。「この唱和歌は、みごとな男女一對の唱和である。男君の歌も誠実で感慨深げに詠まれた歌であり、それに対する女君の歌は、女歌のもつ「挑み心」が下旬に響いている。そして、女君の「けはひ」や「袖の香」に、男君は「昔よりはねびまさりたまへるにや」と感じ入っている」⁷⁾のである。再会の場面の和歌は、「末摘花」巻において唐衣を詠んだ時、源氏に「さても、あさましの口つきや、これこそは手づからの御事の限りなめれ」(「末摘花」①299)と批判された和歌とは質を異にしている。

「末摘花」巻の末摘花は、容貌容姿の醜さと態度物腰から調度服装に至る古めかしさ、それに和歌の拙さ、口重のしじまが加わって造型されている。全般的に時代に取り残された女性というイメージのため、末摘花のあり方全体の待遇は、基本的には諧謔によって彩られている。ところが、源氏の須磨帰京後を描く「蓬生」巻に描き出されている末摘花像はかなり変わっているようである。確かに鼻の赤い醜女が「をこ物語」風に強調される前者と、必ずしも「をこ物語」風ではなく、荒廃していく邸宅で頑なに源氏を待ち続けながら、矜持を持って生き抜く宮家の姫君像が描かれている後者には違いが感じられる。

末摘花造型における「末摘花」巻と「蓬生」巻との人物の落差については、「変貌」を見ようとするのが一般的であるが、石川徹は、「資質の最もすぐれた一面が花開く機会を得た一生に一度の時機で「本質的に少しも変わっていない」⁸⁾と述べている。石川の指摘通り、末摘花という人物には本質的变化はないと思われるが、その落差については、両巻の「構想と主題が全然別個であるところに、同一人物の性格への照明の当て方がちがってきた」⁹⁾という森一郎の指摘に沿って考えるのが適切ではないかと思われる。

7) 長谷川政春(1991)「末摘花—「唐衣」の女君」『源氏物語講座』2 勉誠社 p.115

8) 石川徹(1971)「末摘花」『源氏物語講座』第三巻 有精堂 pp.81-82

9) 森一郎(1969)『源氏物語の方法』桜楓社 p.185 山本利達は「変貌と見える蓬生巻の末摘花の相貌も変貌ではなく、語り手の姿勢乃至は視点を変えた結果」(1985「作者の人間

前者は源氏の幻想と失望、後者は逆境と補償といった明白な粹取りが施されているからである。

さて、末摘花に関わる香りがただ源氏一人により評価されている点にも注目すべきであろう。源氏は、偶然の所産とも言える香りを、由緒ある宮家に相応しい文化とそれを体現する姫君、あるいは姫君の内的成長として捉える。源氏の誤解¹⁰⁾と言えようが、これが末摘花との関係において肯定的に働いていることは疑いを容れる余地のないところである。

結局、「末摘花」巻における香りは、貴なる宮家の姫君としての出自を示す唯一なものとして、源氏の荒屋に住む女性への幻想を充たせて光源氏と末摘花との関係を恋愛の局面に導く媒介として機能していると思われるが、「蓬生」巻の末摘花と光源氏の再会場面における「かをり」においても同じことが言えよう。

3. 「松にかかれる藤」の「かをり」

「蓬生」巻において源氏は、「大きな松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり」という風情に、昔日の常陸の宮家の気配を思い起こす。源氏の想起が庭の樹木の香りによって導かれているわけであるが、本節では「松」と「藤」といった樹木に注目して「かをり」の意味を探ってみる。物語における樹木は単なる背景ではなく、登場人物の性質などと密接な関係を持つ装置であるからである。

源氏が初めて常陸の宮邸を訪れて末摘花に逢う場面において、「松の梢吹く風の音心細くて、いにしへのこと語り出でてうち泣きなどしたまふ」（「末摘花」①279）とあり、「末摘花」巻の景物に「松」はあったものの、「藤」

理解—末摘花を中心に—『源氏物語の探究』第十輯 風間書房 p.109)であると述べており、同じ見解を提示している。

10) 瀬戸宏太(1992・9)「源氏物語の薫香—末摘花と紫上をめぐる—」『国語と国文学』東京大学国語国文学会 p.20

についての叙述はなかった。むしろ、橘の花を覆ってしまうほどに降り積った雪を、光源氏が隨身にうち払わせる条があって、邸内には橘があったと知れる。それでは、「末摘花」巻に登場しない「藤」をここに持ち出し、その「かをり」によって光源氏を引き止めるという筋書きを用意した理由は何であろうか。

藤田一尊は、花散里が花橘になぞらえる時、光源氏は時鳥に象徴化されることと、花散里を訪ねる途次であったという条件とを考慮して、「花散里を訪問するつもり光源氏が、予定を変更して末摘花邸に寄り込むという「蓬生」巻の筋立てを自然なものとする上では、橘と同様に時鳥の宿とされる藤こそが、最も相応しい道具立てであった」¹¹⁾と述べている。藤田のいう和歌的心象からの接近は恋物語としての「蓬生」巻を想定する上で有効であろう。ところが、末摘花造型の根幹にある神話的な特性と関連して、【場面1】の「松にかかれる藤」の「かをり」の意味を読み直すのも物語の理解に役立つ一つの方法になり得ると思われる。

末摘花の醜悪な容貌は笑いの対象となっているが、その造型の背景については、民俗学的な研究によって明らかにされてきた。高崎正秀の「常陸宮の姫君が、頗るの不器用であったといふことは、それは山の神の一人であり、またひなの世界から来た聖格なるが故に、醜女でなければならなかった—即ち黄泉津醜女の一人であった」¹²⁾という説を受けて石川徹は、「伊弉冉の尊のあとを追って黄泉国に至った伊弉諾の尊が、身体に膿が湧きうじがたかっている伊弉冉を見て、おそれて逃げ帰った時、伊弉冉が黄泉醜女(よもつ日狭女)八人にあとを追わせたといい、記紀に見える有名な伝説から得た自然の着想であろう」¹³⁾と述べている。また小林茂美も醜女の原像として黄泉津醜女・石長比売を挙げて「生命の磐石を保証する醜女の末摘花は、栄耀への予言をめざす光源氏ないし光源氏の物語世界にとっては、不可欠のスケープ・ゴートであり、その意味で必須の守護神的な存在

11) 藤田一尊(2004)「末摘花邸の木立」『源氏物語の鑑賞と基礎知識③蓬生・関屋』至文堂 p.79

12) 高崎正秀(1971)『源氏物語論』高崎正秀著作集第六巻 桜楓社 p.223

13) 石川徹、前掲論文、p.75

だった」¹⁴⁾と指摘する。なお、鈴木日出男も「醜女としての末摘花と源氏の結び付きは、いわば一種の神婚の構図」¹⁵⁾をなしており、霊力・呪力に溢れる醜女末摘花が、色好みの王としての光源氏を守護する¹⁶⁾と論じている。

要するに、光源氏の栄華の達成に関わる末摘花像を指摘するのであろうが、ここではこの点を意識しながら、「松」と「藤」の古代からの象徴性とイメージに着目して、【場面1】の「松にかかれる藤」の「かをり」の意味を考えてみることにする。

「松」は「末摘花」巻、「蓬生」巻両巻に、しばしば描かれる。源氏が末摘花と初めて逢瀬を遂げることになる日の場面においては、

星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへのこと語り出
でうち泣きなどしたまふ。(「末摘花」①279)

とあり、源氏が末摘花の醜貌をはっきりと見てしまった後、邸宅を出て行こうとする場面では、

いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみあたたかげに降りつめ
る、山里の心地してもあはれなるを、(「末摘花」①295)

と描写されている。【場面1】を含めて源氏と末摘花の出会いの場面には「松」が描かれているが、そもそも「松」は永久不変、不老長寿、慶賀、高貴、繁栄のイメージ¹⁷⁾をもつ植物である。

平沢竜介は、このように末摘花邸の「松」が執拗に登場するのは、「物語

14) 小林茂美(1980)「しこめの物語—神話的幻想の世界から」『講座源氏物語の世界』第二集 有斐閣 p.130

15) 鈴木日出男(1991・4)「夕顔と末摘花—『源氏物語』の古代的構造についての断章—」『文学』岩波書店 p.150

16) 鈴木日出男(2003)『源氏物語虚構論』東京大学出版会 p.286

17) 金炳添(2008・11)「明石の君物語に吹く「松風」」『日語日文学研究』第67輯2巻 韓国日語日文学会 p.37

作者が末摘花を松によって象徴し、その不変性を強調することを意図したことによるのではないか¹⁸⁾と指摘するが、その通りであろう。

前述したように、歌の世界では、「松」には「待つ」が掛けられて、変わらず待っていることを象徴する。その不変さというのは、「蓬生」巻の末摘花を象徴する性質のことである。源氏という後見を失った末摘花の生活は、次第に困窮し、邸は荒廃してゆく。そのような生活環境から逃れようと、女房達は末摘花に助言するが、末摘花は父常陸の宮が遣した調度品、邸を守ってきた。そのような実態を目にした源氏は、末摘花を労う。要するに、【場面2】の「ひき植ゑしならねど、松の木高くなりける年月のほどもあはれに」と、生活に困窮しながらも、大式の北の方の誘いを断り、邸宅をひたすら守り続け、源氏の訪れを一心に願っていた末摘花の誠実さが「松」に重ねられていると言えよう。

「藤」については、『古事記』応神記に次のような伝説がある。伊豆志大神の娘であった伊豆志袁登売の神を妻にしたいと思っていた兄の秋山之下氷壯夫が結婚しかねた後に、弟の春山之霞壯夫が、うまくいくよう母親に相談すると、母は一晩のうちに藤の蔓の繊維で上衣・袴・沓下を織って縫い上げ、弓矢も作った。それらを持たせて袁登売の家に行かせると、衣服や弓矢などすべてが藤の花に化した。袁登売は壯夫が厠に掛けておいた藤の花を不思議に思い家の中に持ち込む時に、壯夫が袁登売の後について部屋に入り、結婚することができたという¹⁹⁾。この話の「藤」には、人の魂を

18) 平沢竜介(2006・4)「末摘花論―石長比売と末摘花―」『古代中世文学論考』第17集 古代中世文学論考刊行会 新泉社 p.65

19) 故、茲神之女、名伊豆志袁登賣神、坐也。故、八十神、雖レ欲レ得二是伊豆志袁登賣一、皆不レ得レ婚。於是、有二二神一。兄號、秋山之下氷壯夫、弟名、春山之霞壯夫。故、其兄、謂二其弟一、吾、雖レ乞二伊豆志袁登賣一、不レ得レ婚。汝、得二此嬢子一乎。答曰、易得也。爾、其兄曰、若汝有レ得二此嬢子一者、避二上下衣服一、量二身高一而釀二甕酒一。亦、山河之物悉備設、爲二宇禮豆玖一云爾。自レ字至レ玖以レ音。下效レ此。爾、其弟、如二兄言一、具白二其母一、即其母、取二布遲葛一而、布遲二字レ音。一宿之間、織二縫衣・禪及 襪・沓一。亦、作二弓矢一、令レ服二其衣・禪等、令レ取二其弓矢一、遣二其嬢子之家一者、其衣服及弓矢、悉成二藤花一。於是、其春山之霞壯夫、以二其弓矢一、繫二嬢子之厠一。爾、伊豆志袁登賣、思レ異二其花一、將來之時、立二其嬢子之後一、入二其屋一、即婚。

ひきつけるような呪力がこめられている²⁰⁾と言えよう。

また「藤」は、「あてなるもの」(『枕草子』60)²¹⁾に挙げられているほか、「藤の花は、しなひ長く色こく咲たるいとめでたし」(『枕草子』50)と賞讃される植物である。そして、『伊勢物語』第百一段の挿話は、「藤」が栄華と関わることを語る。在原行平邸で宴を催した時に、花瓶に挿した藤の花を題にして人々が歌を詠んだ。業平の歌「咲く花の下にかくる人を多みありしにまさる藤のかげかも」(『伊勢物語』230)²²⁾の真意を人々が尋ねると、業平は太政大臣良房が栄華の絶頂で、藤原氏の繁栄を藤に託した旨を説明したという。

要するに、「藤」には恋する人を引き付ける霊力と高貴さ、栄華というイメージがつきまわっていると見えよう。それに、「松にかかれる藤」は貴族の庭園の景物として、屏風歌の図柄としても好まれたが、藤原氏の隆盛時には「藤」は藤原氏、「松」は皇室で、皇室と結ぶことで栄えを得ると喩えられることが多かった。ところが、『源氏物語』においては「藤」が藤原氏のゆかりの花に限られるとは見られない。「野分」巻に「これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、かくぞあるかし」(「野分」③284)と、明石の姫君が夕霧によって「藤」に喩えられているが、この箇所について河添房江は、「明石の姫君の<藤>は、常磐の松(天皇家)と結ぶことで片時の花でありながら悠久の栄えを得る藤のイメージからして、后がねとしての将来を囑望されたその人の位置を言いつるかのようである」²³⁾と述べ、「松にかかれる藤」が栄華を象徴するものであると指摘している。

つまり、「蓬生」巻の「松にかかれる藤」は、不変さと人の魂を惹きつけるような呪力、それに常磐の松と栄華の藤という既存の図像のイメージを利用して、光源氏を護る末摘花の誠実さと、これに基づいて繁栄の一途を

(山口佳紀 外1人 校注・譯(1997)『古事記』新編日本古典文學全集1 小學館 pp.278-280

20) 鈴木日出男(1989)『源氏物語歳時記』筑摩書房 p.82

21) 渡辺実 校注・譯(1991)『枕草子』新日本古典文學大系25 岩波書店

22) 片桐洋一 外3人 校注・譯(1994)『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文學全集12 小学館

23) 河添房江(1992)『源氏物語の喩と王権』有精堂 p.43

たどる源氏を象徴するものであり、そこから漂う「かをり」は源氏の栄華という含意の発現であると思われる。このように「松にかかれる藤」の「かをり」は恋の世界へのしるべにとどまらず、帰京後、「いにしへにもまさりたる御勢ひ」(「蓬生」②354)と語られる、政治的な威勢を強化していく源氏の位相とも照応する表現であると思われる。

4. 父常陸の宮の靈威による香り

さて、末摘花が二条東院に移された後は、香りの記述は見当たらない。末摘花物語における香りが源氏と末摘花を恋の世界へ導く機能をすることを考えれば、これは二人の関係がもはや男女の関係ではないことを示すことであると言えるだろう。

そもそも、『源氏物語』において香りは、「梅枝」巻の薫物合せの箇所で見られるように人物の人柄と堅く結び付けられる傾向がある。ところが、末摘花物語に漂う香りは、末摘花の内面と関わらない。【場面1】～【場面3】の三箇所ともに、末摘花が香りのために積極的に仕掛けた形跡は見られない。末摘花が放つ香りは故常陸の宮の遺品の香りである。

末摘花物語において欠かせない存在が、故常陸の宮の霊であろう。邸宅そのものといい調度といい、末摘花を取り巻く生活環境は、すべてが常陸の宮生前のままである。

末摘花は、「故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ」(「末摘花」①266-267)として物語に紹介される。末摘花は「常陸の宮にはしばしば聞こえたまへど」(「末摘花」①277)と、その邸の名と同様に呼ばれ、「常陸の宮の君」(「蓬生」②354)、「常陸の宮の御方」(「初音」③153)、「常陸の君」(「若菜上」④79)といった、父邸の名と関連する呼称が目立つ。末摘花のこうした呼称の頻出は、「父常陸の宮との関わりの深さ」²⁴⁾の表れである。

24) 原岡文子(2005・5)「末摘花考—靈性・呪性をめぐって—」『日本文学』日本文学協会

故常陸の宮の霊は源氏と末摘花物語の方向を決定づけるものとして働く。次の引用文は、末摘花の醜貌と貧困ぶりを見取った源氏が感慨を叙述する箇所であるが、源氏は自分と姫君の結縁を、故常陸の宮の魂に導かれたものであると思う。

思ふやうなる住み処にあはぬ御ありさまはとるべき方なしと思ひながら、我ならぬ人はまして見忍びてむや、わかかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべなめり、とぞ思さるる。

(「末摘花」①295-296)

また【場面1】に続く姫君の昼寝の場面にも故常陸の宮の霊が語られている。

昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覚めていとなごり悲しく思て、漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、ここかしこの御座ひきつくろはせなどしつ、例ならず世づきたまひて、

末摘花 亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ
も心苦しきほどになむありける。(「蓬生」②345)

昼寝の際に亡き父宮を見た末摘花は、その名残を悲しく思い、珍しく世間の女性並みになって、廂の間の端を拭かせたり、御座を繕わせたりするが、これは結果的には光源氏を迎える準備となった。亡き常陸の宮の霊威が現実働きかけ、光源氏を迎え入れたのである。

物語を動かす常陸の宮の霊力²⁵⁾については既に指摘されてきたが、【場面1】と関連して、「松にかかれる藤」の「かをり」による源氏の想起が、「見し心地する木立かな、と思すは、はやうこの宮なりけり」という、庭の樹木によって媒介されるという点に注目したい。『源氏物語』における庭園と植物は、ただ物語の背景としてあるのではなく、人物像の根幹に迫る方法と

p.42

25) 原岡文子、前掲論文、p.42

して用いられるが、物語は常陸の宮の邸宅の荒廃ぶりを濃密に提示している。

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて、疎ましくけ遠き木立に、梟の声を朝夕に耳馴らしつつ、人げにこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬ物ども所を得てやうやう形をあらはし、

(「蓬生」②327)

従者たちの離散により、邸は狐の住み処にもなり、不吉な梟の声に包まれ、さらには木霊のような異界の霊物がその形姿をあらわにするなど、不気味さを漂わせている。さらに「浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼ」(「蓬生」②329)り、「葎は西東の御門を閉ち籠めたる」(「蓬生」②329)状態である。ついに光源氏に発見されたときには、「形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなる」(「蓬生」②344)と描かれている。

父の死によって経済的に困窮に陥ることを邸宅の荒廃ぶりで示すのは、「ほどもなく荒れにける心地して、あはれにけはひしめやかなり」(「朝顔」②469)と語られている朝顔の姫君の場合にも見られる。ただ、末摘花の場合は、狐・梟・木霊などといったものを登場させており、普通の荒廃さを遥かに越えている。

このような庭の景物について小林茂美は、「雑草の生い茂ったあばら屋という類型の表現には、聖なる植物でタブーの標識としたく忌み籠りの仮屋>ほどの印象が重ねられている」し、既に「末摘花」巻でも、「父親王おはしけるをりにだに、古りにたるあたりとておとなひきこゆる人もなかりけるを」(「末摘花」①278-279)とあるように、「もともとこの宮邸は、人の近づいてはならない霊域一人里はなれた異郷世界というのが原風景であった」²⁶⁾と述べるが、末摘花の造型の根幹にあると指摘される神話的要素と関連づけて考える上で示唆的であると思われる。

物語は、邸がいかに荒廃していても、蓬や葎に埋もれた邸に執着する末摘花の強固な意志をも示す。受領階級の人が常陸の宮邸宅の木立や調度類

26) 小林茂美、前掲論文、p.119

を入手しようと思って、人を介して申し入れるが、末摘花は頑なに拒む。

末摘花「あないみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しかなごりなきわぎはいかがせむ。かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住み処と思ふに慰みてこそあれ」と、うち泣きつつ思しもかけず。

（「蓬生」②328）

御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様にてうはしきを、なま物のゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わぎとそのかの人の人にせさせたまへるとたつね聞きて案内するも、<中略>取り紛らはしつつ、目に近き今日明日の見苦しきをつくろはんとする時もあるを、いみじう諫めたまひて、末摘花「見よと思ひたまひてこそしおかせたまひけめ。などで軽々しき人の家の飾とはなきむ。亡き人の御本意違はむがあらはれること」とのたまひて、さるわぎはせさせたまはず。

（「蓬生」②328-329）

その根幹には「親の御影とまりたる心地する古き住み処」という感懐と、「亡き人の御本意違えることは決してすまい」という意志とが据えられている。要するに、末摘花にとって父宮の遺産である邸宅と調度類は、亡き父宮に代わるものとして認識されていると言えよう。

末摘花の邸は、故父宮により護られ、霊威が発揮される異空間であり、そのような異空間としての邸宅の不気味さは、光源氏的心情にも表れている。

侍従は、齋院に参り通ふ若人にて、このころはなかりけり。いよいよあやしう、ひなびたる限りにて、見ならはぬ心地ぞする。いと愁ふなりつる雪かきたれいみじう降りけり。空のけしきはげしう、風吹きあれて、大殿油消えにけるを、点しつくる人もなし。かの物に襲はれしをり思し出でられて、荒れたるさまは劣らざるを、ほどの狭う、人げのすこしあるなどに慰めたれど、すごう、うたていざとき心地する夜のさまなり。

（「末摘花」①291）

雪はいやましに降り続き、空模様もはげしく、風も吹きすさぶというだ

けでなく、大殿油も消えてしまっているというように、邸宅は暗闇の空間へと変容する。邸宅が恐怖の場として位置付けられているが、このような邸宅の雰囲気は源氏に「なにがしの院」で物の怪に襲われた夕顔のことを思い出させる。即ち、末摘花の邸宅は霊の出現する空間なのであることが分かる。鈴木日出男は、「末摘花を石長比売とすれば、父宮は大山津見神にあたる。神話的にいえば、源氏は、山の神に導かれて、その偉力ある醜女と結婚したことになろう」²⁷⁾と指摘するが、故常陸の宮の邸宅が世間とは絶縁した異空間として描写されていることは、末摘花と故常陸の宮の神話性を支える装置であると思われる。

香りに対比されて末摘花の時代遅れの象徴として評価される衣については前述した通りであるが、衣をめぐる評価にも落差が見られる。世間とは違う異空間である末摘花の邸では、古めかしさを愚弄される一世代前の「古代」の調度や衣さえも、その価値が認められる場面が見られる。例えば、「末摘花」巻の黒貂の皮衣は、若々しい女性の服装としてふさわしくはないが、「いとよりにかうばしき」「古代のゆゑづきたる御装束」(「末摘花」①293)と評される。反面、邸の外部に贈られた末摘花の衣と調度品は、その「古代なる」(「末摘花」①299)性質だけが際立ち、源氏から「あさまし」(「末摘花」①300)との評価を受ける。

このような傾向は、末摘花が二条東院に移された後はなおさら著しい。源氏は正月用の衣装を整えて女性たちに贈る。光源氏からの装束を届けた使いに対して、女性たちはおのおのの禄を授け謝意を表すが、末摘花の禄は自らが若い時分に着ていた「山吹の袷の袖口いたくすすけたる」(「玉鬘」③137)ものであった。

御使にかつきたるものを、いとわびしくかたはらいたしと思して、御気色あしければ、すべりまかでぬ。いみじく、おのおのはさきめき笑ひけり。かやうにわりなう古めかしう、かたはらいたきところのつきたまへる、さかしらにもてわづらひぬべう思す。恥づかしきまみなり。(「玉鬘」③137-138)

27) 鈴木日出男、前掲論文、p.150

むやみに古風に執着する末摘花の衣装贈與は、光源氏にとって「わりなう古めかしう」「さかしら」なことにほかならず、女房たちの擲揄の対象になるばかりである。松井健児の指摘通り、「禄として自分自身の着用していた衣を授けるのは、古代的な靈力分與の観点からすればきわめて正統的な行い」²⁸⁾であり、古代なる心性の持ち主である末摘花に相応しい行動かもしれない。

魂の分與としての衣の贈與を考えるなら、「蓬生」巻の侍従との別れに際して、梳った髪をまとめて作った鬘を贈る箇所にも注目すべきである。

形見に添へたまふべき身馴れ衣もしほなれたれば、年経ぬるしるし見せたまふべきものなくて、わが御髪の落ちたりけるを取り集めて鬘にしたまへるが、九尺余ばかりにていときよらなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薫衣香のいとかうばしき一壺具してたまふ。 (「蓬生」②341)

この箇所の鬘は衣の代わりであり、鬘の贈與は衣の贈與と等価なものである。それにもかかわらず、末摘花の行為への非難は語られない。要するに、末摘花の古代なる行動は、父常陸の宮の靈威の及ぶ、異界のような邸宅の空間に限られて認められているのが分かる。末摘花も衣服も調度類もこの邸にあってこそ護られることができたと思われる。

そうすると、伝領の邸を去って二条東院に移された後の末摘花が専ら否定的に語られる理由も推し測られる。邸宅を離れたことにより、末摘花は父宮の靈威の護りからも離れたのではないか。父宮の靈威の及ばない空間には、源氏と末摘花を男女関係へと導く香りも漂うことなく、洗練された貴族社会に相応しくない末摘花の資質が非難の対象になるばかりである。

『源氏物語』の香りは、人物と照応して当該人物の教養と性格、ひいては

28) 松井健児(2000)『源氏物語の生活世界』翰林書房 p.17 松井は衣の贈與に、支配/被支配のありようを探り、末摘花の衣の贈與は光源氏の支配する六条院の秩序を無化する越権行為であると指摘する。また、吉井美彌子は「末摘花—身体・衣・性」(2004・8『解釈と鑑賞』至文堂pp.66-67)において、魂の分與という意義を重視する観点で末摘花の身体=衣であり、衣の贈與は末摘花みずからの身体を光源氏に贈ることを意味すると述べている。

内面を示す機能をする。ところが、末摘花の香りは、常陸の宮という外部の力によるもので、末摘花自身の内面と関わらないという性格ゆえに、末摘花物語の最後まで機能しないという限界を示していると思われる。

5. おわりに

帰京後偶然、末摘花の邸宅の前を通りかかった光源氏は、時折、「松にかかれる藤」の芳ばしい「かをり」に刺激されて、末摘花のことを想起し、二人は再会に至る。「かをり」が二人の再会の媒介になったのである。「末摘花」巻においても確認できるように、洗練された貴族世界の教養に乏しい末摘花において、香りだけは、一貫して由緒ある宮家の象徴として示されており、光源氏と末摘花を恋の世界に導くしるべとして働く。

なお、「蓬生」巻の香りは、「松にかかれる藤」から漂う「かをり」である。この「松にかかれる藤」の景物は、不変さと人の魂をひきつけるような呪力、それに常磐の松と栄華の藤というイメージを有している。物語は、このような古代からのイメージを利用して、光源氏を護る末摘花の誠実さと、これに基づいて繁栄の一途をたどる源氏を象徴しており、「かをり」は「松にかかれる藤」の含意の発現であると思われる。このように、「松にかかれる藤」の「かをり」は、恋の世界へのしるべにとどまらず、帰京後、政治的な威勢を強化していく源氏の位相とも照応すると見られる。

末摘花の香りと関連して見過せない点は、香りが彼女の人格と無関係に展開されることである。これは、末摘花が常陸の宮の靈感により護られる存在であり、香りも常陸の宮の靈感により機能していることを語るほかならない。このような末摘花の香りは、二条東院に移された後の末摘花の否定的な造型と関連して考えれば、内面と関わらない、外部の力による香りが持つ機能の限界を提示していると思われる。

<参考文献>

- 秋山虔 外3人 校注・訳(1994-1998)『源氏物語』①-⑥ 新編日本古典文学全集 20-25 小学館
- 石川徹(1971)「未摘花」『源氏物語講座』第三卷 有精堂 pp.81-82
- 今西祐一郎(1980)「古代の人 未摘花」『講座源氏物語の世界』第四集 有斐閣 p.57
- 小沢正夫 外 1人校注・譯(1994)『古今和歌集』新編日本古典文学全集11 小学館
- 片桐洋一 外 3人 校注・譯(1994)『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文学全集12 小学館
- 河添房江(1992)『源氏物語の喩と王権』有精堂 p.43
- 金炳淑(2008・11)「明石の君物語に吹く「松風」」『日語日文学研究』第67輯2巻 韓国日語日文学会 p.37
- 小林茂美(1980)「しこめの物語—神話的幻想の世界から」『講座源氏物語の世界』第二集 有斐閣 p.130
- 鈴木日出男(1989)『源氏物語歳時記』筑摩書房 p.82
- _____ (1991・4)「夕顔と未摘花—『源氏物語』の古代的構造についての断章—」『文学』岩波書店 p.150
- _____ (2003)『源氏物語虚構論』東京大学出版会 p.286
- 瀬戸宏太(1992・9)「源氏物語の薫香—未摘花と紫上をめぐる—」『国語と国文学』東京大学国語国文学会 p.20
- 高崎正秀(1971)『源氏物語論』高崎正秀著作集第六巻 桜楓社 p.223
- 田中隆昭(1998)「滑稽譚から賢女伝へ—未摘花の物語」『人物造型からみた『源氏物語』』至文堂 p.109
- 長谷川政春(1991)「未摘花—「唐衣」の女君」『源氏物語講座』2 勉誠社 p.115
- 原岡文子(2005・5)「未摘花考—靈性・呪性をめぐって—」『日本文学』日本文学協会 p.42
- 平沢竜介(2006・4)「未摘花論—石長比売と未摘花—」『古代中世文学論考』第17集古代中世文学論考刊行会 新典社 p.65
- 藤井貞和(1980)「未摘花巻の方法」『講座源氏物語の世界』第二集 有斐閣 p.145
- 藤田一尊(2004)「未摘花邸の木立」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』蓬生・関屋 至文堂 p.79
- 松井健児(2000)『源氏物語の生活世界』翰林書房 p.17
- _____ (2004・9-10)「よい匂のする情景—『源氏物語』の花の庭・樹木の香」『文学』岩波書店 p.107
- 三角洋一(2004)「蓬生巻の短編的手法・続」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』蓬生・関

屋』至文堂 pp.195-198

三谷邦明(1986) 「末摘花」 『源氏物語必携Ⅱ』學燈社 p.74

森一郎(1969) 『源氏物語の方法』桜楓社 p.185

山口佳紀 外 1人 校注・譯(1997) 『古事記』新編日本古典文學全集1 小學館

山本利達(1985) 「作者の人間理解—末摘花を中心に—」 『源氏物語の探究』第十輯風間書房 p.109

吉井美彌子(2004・8) 「末摘花—身体・衣・性」 『解釈と鑑賞』至文堂 pp.66-67

渡辺実 校注・譯(1991) 『枕草子』新日本古典文學大系25 岩波書店

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

스에쓰무하나 모노가타리에 있어서의 향의 의미

- 내면과 무관한 향 -

『겐지 모노가타리』에 등장하는 스에쓰무하나는 용모를 비롯하여 와카의 교양이나 의상에 이르기까지, 당대의 세련된 귀족 문화와는 동떨어진 인물로 조형되어 있다. 그러나 향만은 일관되게 스에쓰무하나가 유서깊은 친왕가의 후손임을 상징하며, 히카루젠지와 관계를 넘겨 간의 연애의 장면으로 이끄는 길잡이 역할을 한다. 이와 같은 경향은 축대발 권(蓬生卷)에서도 확인할 수 있다. 귀경 후 우연히 스에쓰무하나의 저택 앞을 지나가게 된 히카루젠지는 소나무 가지에 달린 등꽃의 향에 이끌려 스에쓰무하나를 떠올리게 되고, 두 사람은 재회에 이르게 된다. 향이 두 사람의 재회의 매개로 작용한 것이다.

그러나 소나무 가지에 달린 등꽃의 향이 두 사람을 연애 세계로 이끄는 역할만을 하는 것은 아니다. 소나무 가지에 달린 등꽃에는 소나무의 불변성과 등나무가 갖는 사람의 영혼을 끌어들이는 주력이라는 상징적인 의미가 내포되어 있으며, 도상학적으로는 영화라는 의미를 추출할 수 있다. 즉 소나무 가지에 달린 등꽃은 히카루젠지의 영화의 기반을 보호하는 스에쓰무하나의 성실함과, 이에 근거하여 정치적 영화의 길을 걷는 겐지를 상징하며, 향은 이러한 의미의 발현이라 생각된다. 이와 같이 소나무 가지에 달린 등꽃의 향은 귀경 후 정치적 위세를 강화해가는 겐지의 위상과도 조응하는 것이다.

또한 스에쓰무하나 모노가타리에 나타난 향과 관련하여 간과할 수 없는 점은, 그것이 그녀의 인격과 무관하게 전개되는 것이다. 이는 스에쓰무하나가 아버지 히타치노미야의 영의 위력에 의해 보호받는 존재이며, 향 또한 히타치노미야의 영의 위력에 의해 기능하고 있음을 나타내는 것이다. 이러한 스에쓰무하나와 관련하여 제시되는 향의 특징은 히타치노미야의 영위로부터 벗어나 이조동원으로 옮긴 이후의 부정적인 조형태도와 관련하여, 내면화되지 않은 향이 갖는 한계를 제시하고 있다고 볼 수 있다.

오에 겐자부로에 『우리들의 시대』론

— 성(性)의 이미지를 중심으로 —

성 혜 숙*

simple108@hanmail.net

< 目 次 >

>

- | | |
|----------------------|------------------|
| 1. 들어가며 | 4. 성의 비유와 전형의 파괴 |
| 2. 성의 방법적 사용- 사회비판의식 | 5. 권력구도를 재구축하는 성 |
| 3. 경제의 시대와 매춘이라는 표상 | 6. 나오며 |

Key Words : 1960년(1960's), 성적 이미지(Sexual imagery), 정치(Politics)

1. 들어가며

1959년 발표된 『우리들의 시대(われらの時代)』(中央公論社, 1959)는 자신의 공간으로부터 탈출을 꿈꾸는 젊은이들의 좌절을 그린 장편소설이다. 『우리들의 시대』라는 타이틀에서 유추할 수 있듯이 소설이 발표된 당시의 시대상황을 당사자적인 시각에서 그리고 있다고 할 수 있는데, 내용면에서 시대에 대한 강한 비판의식을 엿볼 수 있다.

『우리들의 시대』가 발표된 1960년 전후의 시대상황을 살펴보면, 안보투쟁이 일어나는 등 국민들의 정치적 의식이 고양되었던 시기로 ‘정치의 계절’로 불리기도 했다. 이러한 사회적 분위기는 정치와는 무관한 영역으로 인식되었던 문단에까지 큰 영향을 끼쳐 문학과 정치 논쟁이 일어나는 등 문학자들이

* 고려대학교 일어일문학과 박사수료 근대문학

정치나 사회 문제에 적극적으로 발언했다.1) 1957년에 작가로 활동한 오에 역시 1960년대에 들어서면서 이전보다 더욱 적극적으로 사회비판적 작품들을 발표하기 시작한다.2)

이러한 작품들 중에 첫 작품이라고 할 수 있는 『우리들의 시대』는 노골적인 성묘사로 문단에 큰 충격을 주며 논란을 일으켰다.3) 이에 대한 선행연구는 『우리들의 시대』를 단독으로 연구한 논문은 거의 존재하지 않으며4), 1960년대의 성을 소재로 한 작품들을 동시에 다룬 연구가 주를 이루고 있는데 이를 살펴보면 다음과 같다.

모리가와 타쓰야(森河龍也)는 ‘노골적이고 비정상적인 성이 방법적으로 사용되었고 이 방법적 사용 자체에 오에 문학의 새로운 점이 있다’5)고 지적했다. 이치조 다카오(一條孝夫)는 노골적인 성 묘사는 ‘반발심 환기를 통해 인간 내부의 이상으로 이끌기 위한 것’이라고 말하고 오에의 성이 ‘노골적, 비정상적이며, 타자를 향해 있지 않고 자폐적이다’6)라고 지적하며 자폐적 특징의 근거를 비정상적인 성(동성애, 불능)에서 찾으며, 이 비정상적인 성은 반사회, 반질서를 말한다고 언급했다. 이소다 고이치는 성과 정치를 관련시켜 설명하고 있는데, 전후 사회를 정체된 사회로 보고 이 사회 구성원인 인물들이 정치적으로 행동할 수 없다고 설명하며 인물들은 방향을 잃고 제자리걸음 하거나 그 정체된 에너지가 폭발할 때 테러나 자기 처벌이라는 형태로 나타난다고 설명한다.7) 니시가와 다카아키는 “성적인 구도를 통해 점령하의 일본이 놓인

1) 与那覇恵子(1998・8) 「文学者の社会的発言」 『文学界』 p.187

2) 이에 해당하는 작품들은 1960년 전기에 발표된 작품들로, 「여기와는 다른 장소(ここより他の場所)」(1958), 『우리들의 시대(われらの時代)』(1959)를 비롯해 「늦게 온 청년(遅れてきた青年)」(1960), 「성적인간(性的人間)」(1963), 「일상생활의 모험(日常生活の冒険)」(1963・2-1964・2)등으로, 이 작품군의 특징 중 하나는 노골적인 성이 방법적으로 사용되었다는 평가를 받고 있으며, 그 최초의 작품은 『우리들의 시대』라 할 수 있다.

3) 이 논란이 거세지자 오에는 「우리들의 성의 시대(われらの性の世界)」(群像, 1959・12)를 통하여 성의 이미지를 사용한 이유를 밝히고 있다.

4) 「우리들의 시대」를 단독으로 다룬 논문으로 고쿠보 미노루(小久保 実)의 「우리들의 시대(われらの時代)」(1971・7) 『국문학 해석과 감상 특집 70년대의 정치와 성 오에겐자부로』를 들 수 있으나, 이 논문은 4페이지 분량의 소논문으로 간략한 작품 소개를 하는 수준에 머물며, 성 자체에 대한 분석을 하고 있다고는 할 수 없다.

5) 森川龍也(1971・7) 「大江健三郎における性の意味」 『国文学 解釋と鑑賞』 p.30

6) 一条孝夫(1985) 『大江健三郎の世界』 和泉書院 p.27

사회적·정치적 구도를 중층적으로 그리는 것이야 말로 오에가 지향한 것⁸⁾이라고 평가했다. 같은 맥락에서 히라노 겐은 “성과 정치의 통일적 파악을 시도”했다고 평가한 바 있다.

선행연구들은 성의 이미지가 일본사회에 대한 비판의식을 나타내고 있다는 점을 지적하고 있지만, 이에 대한 논증은 거의 이루어지지 않았으며, 소설 내부의 설명이나 작가의 언급을 근거로 하고 있다. 특히 선행연구에서 밝힌 성의 비판적 기능은 오에가 말하는 대립 불가능성이라는 의미에서의 정치적 행동의 불가능을 지적하고 있다고 할 수 있다. 이러한 결론은 「우리들의 성의 시대」에서 오에가 <성적 인간>과 <정치적 인간>을 대립시켜 설명한 내용에 입각한 것으로 보인다.⁹⁾ 이러한 맥락에서 이치조 다카오는 정치의식이 고양된 1960년대의 일본을 정치성이 결여된 <성적인간>의 사회로 그리고 있는 것은 시대착오라고 비판한 바 있다.¹⁰⁾

그러나 선행연구는 정치에 대한 반의어로서만 수동적으로 성의 의미를 파악하고 있으며, 성 자체에 대한 분석은 부족하다고 할 수 있다. <정치>와 더불어 <성>은 1960년대의 오에의 문학에 있어서 키워드의 역할을 하고 있는 개념으로, 이 자체에 대한 적극적 분석이 전제가 되지 않은 상황에서 <정치>의 대립어로서만 의미를 파악하는 것은 무리가 있다. 따라서 성의 이미지를 독자적 연구대상으로 삼아 분석하고 이를 토대로 성의 구체적 특징에 대해 고찰할 필요가 있다고 생각된다. 이러한 문제의식을 바탕으로 본고에서는 『우리들의 시대』의 성의 이미지를 연구의 대상으로 삼고자 한다.

7) 磯田光一(1968) 「大江健三郎の「政治」と「性」」 『全集現代文学の発見』(学芸林刊) p.14

8) 川西正明(2001) 『昭和文学史』下卷(講談社) p.229

9) 오에는 「우리들의 성의 세계」에서 <정치적 인간>을 “타자와의 대립 투쟁하는 자”로 성적 인간을 “타자와의 대립을 회피하는 자”로 규정했다. (大江健三郎(1959) 「われらの性の世界」, 『群像』) 여기에서 오에가 말하는 <정치적 인간>의 정치의 의미는 사전적 의미와는 다르다고 할 수 있다. 정치의 사전적 의미는 인간집단에서 질서의 형성과 해체를 둘러싸고 인간이 타자에 대해, 또는 타자와 함께 행하는 운영, 권력·정책·지배·자치에 관계된 현상. 주로 국가의 통치 작용을 지시하지만, 그 밖의 사회집단 및 집단 간에도 이 개념은 적용될 수 있다. 본고에서 사용한 ‘정치’라는 용어는 사전적 의미로, 오에가 말한 <정치적 인간>의 정치와는 다르다는 점을 밝힌다. 따라서 오에의 문학 키워드 <성적인간>과 <정치적 인간>을 대립하는 개념으로 받아들인다하더라도, 일반어인 <성>과 <정치>를 대립어로 성립한다고 할 수 없다.

10) 一条孝夫(1985) 『大江健三郎の世界』(和泉書院) p.27

1960년대 성을 소재로 한 오에의 소설들은 강간이나 치한과 같은 폭력적인 성이나 동성애나 간통과 같은 관습적으로 금기시되는 성이라는 특징을 갖고 있다. 이러한 성은 모두 비정상이라는 주관적 타자화의 여지를 안고 있다. 이러한 비정상적인 성이 본격적으로 채용된 첫 작품이 『우리들의 시대』라고 할 수 있는데 이 작품들에서 성은 매춘이나 동성애¹¹⁾, 강간의 형태로 등장하는 반면, 애정에 의한 정서적 행동이나 결혼을 통한 제도적 성은 등장하지 않는다는 점은 주목할 만하다. 또한 성이 탐미적으로 그려지기 보다는 오히려 혐오적으로 그려지고 있으며, 성적 쾌락보다는 무관심이나 “죽을 것 같은 고통”이 부각되어 나타난다. 이러한 성은 ‘탈출 욕망’과 표면적으로 연결되지 않으며, 매춘이나 동성애와 같은 성의 특징은 사회 비판보다도 개인의 문제로 치부될 가능성이 높은 장치라 할 수 있다. 그럼에도 불구하고 이러한 성이 『우리들의 시대』에서 중요한 소재로 채용된 것에 주목하여, 『우리들의 시대』¹²⁾에서 성이 의미하는 바는 무엇인지 확인해보고자 한다.

2. 성의 방법적 사용 - 사회비판의식

『우리들의 시대』의 중심인물은 대학생 미나미 야스오(南靖男)로, 외국인 상대 매춘여성 요리코의 정인이기도 한 그는 논문현상공모에 응모하여 일본 탈출을 꿈꾼다. 그의 동생 시게루(滋)는 동갑내기 다야 코지(田谷康二), 조선인 고정흑(高征黑)과 함께 “불행한 젊은이들”이라는 밴드멤버로, 언젠가 트럭을 타고 떠나는 것을 유일한 목표로 하고 있다. 조선인인 고정흑은 한국전쟁 참전 후 일본에 돌아온 인물로 유일하게 전쟁을 체험한 인물로, 전쟁을 계기로 백인 남성들과의 동성애자가 된다. 어느 날 “불행한 젊은이들” 멤버는 우연히 천황행사와 조우하여 테러로 천황을 놀라게 하겠다는 계획을 세우지만 두려

11) 동성애를 비정상적인 성으로 간주하는 것은 시대와 지역에 따라 다양하게 나타났으며, 오늘날 동성애를 비정상적으로 간주하는 경향은 매우 약화되었다. 그러나, 본고에서 다루는 텍스트의 시공간을 고려하여, 본고에서는 1960년대 일본이라는 시공간에 제한하여 동성애를 비정상적으로 간주하겠다.

12) 본고의 연구 텍스트로는 『大江健三郎全作品』(新潮社, 1994)에 수록된 「われらの時代」로 하며, 이하 인용문은 이 텍스트에서 인용하였다. 이하 텍스트라 표기한다.

움에 이 테러는 실행하지 못하고, 이를 만회하기 위해 한밤중 백화점 테러를 시도하다가 죽음에 이른다. 야스오는 현상공모에 당선되지만, 이 현상공모의 제국주의적 성격을 알게 되고 파리행을 포기한다. 이처럼 소설 전체의 줄거리는 젊은이들의 탈출 욕구와 그 실패를 그리고 있다. 1960년 전후 일본이라는 공간을 탈출해야할 공간이자 문제 해결이 불가능한 공간이라는 설정에서 사회에 대한 강한 비판을 읽어낼 수 있다. 그런데, 이 작품에서는 이러한 전체 스토리를 형상화하고 있는 중요한 소재로 성이 적극적으로 사용되어 있다. 이 장에서는 이러한 성이 형상화하고 있는 것은 무엇인지 살펴보고자 한다. 『우리들의 시대』는 구체적인 성 묘사로 시작되고 있는데, 아래 인용문을 통해서 이를 확인해보고자 한다.

쾌락의 동작을 계속하면서 형이상학에 대해 생각하는 것, 정신의 기능에 집중하는 것, 그것은 결코 하등한 즐거움은 아닐 것이다. 다소 우습기는 하지만, 그것은 어른의 방식이라고 할 만할 것이다. 미나미 야스오는 그의 젊은 근육과 매끈한 피부, 모든 것을 쾌락의 기쁨에 흠뻑 적시면서, 힘을 넣어 그의 사랑하는 부드러운 육체, 지방으로 가득 찬 땀투성이의 중년의 여자의 육체를 애무하면서, 고독한 사고에 머리를 맡기고 있었다. (중략)

일본의 젊은 청년에게 있어서 적극적으로 희망이라고 부를만한 것은 있을 수 없다고, 미나미 야스오는 땀 때문에 미끄러지기 쉬운 배를 안정시키기 위해서 팔꿈치에 힘을 주거나 무릎으로 버티면서, 그리고 그 끝에 그의 몸 아래의 뜨겁고 부드러운 몸에서 점점 거리낌 없이 신음소리를 이끌어내면서 눈을 감고 눈썹을 찌푸리면서 생각하고 있었다. 희망, 그것은 우리들 일본의 청년에게 있어서 추상적 단어로 밖에는 존재하지 않는다. 내가 보잘것 없는 어린아이였을 때 전쟁이 일어나고 있었다. 그 영웅적인 전쟁의 시대에 젊은이들은 희망을 가지고, 희망을 눈과 눈썹에서 흘러넘치게 했다.¹³⁾

위의 인용에서 성의 묘사는 탐미적으로 그려지기 보다는 기계적 행위로 그려지고 있으며, 육체적 성 행위와 함께 야스오의 당시 일본을 젊은이들에게 희망이 없는 공간이라는 차가운 사회 비판과 교차하여 배치되어 있다. 이러한 장면 묘사는 육체적 성행위에 수반될 것으로 예상되는 성적 쾌락을 의도적으

13) 텍스트 p.129

로 배제시켜 야스오의 비판의식을 더욱 강조하고 있다.

『우리들의 시대』의 성 묘사와 관련하여 특기할만한 것은 탐미적인 성격을 적극적으로 배제하고 있다는 것에 그치지 않고, 성행위의 실제적 결과로서 임신과 출산을 적극적으로 연결시키고 있다는 것이다. 텍스트에서는 야스오와 요리코의 임신에 대한 강한 두려움이 반복적으로 제시되고 있다. 쾌락과 더불어 성의 본래적 목적 중 하나인 임신과 출산은 생의 이미지 대신 죽음의 이미지와 강하게 밀착되어 있다. 잦은 중절로 약화된 요리코에게 임신과 출산은 육체적 죽음으로 직결되어 있으며, 일본 탈출을 유일한 삶의 희망으로 삼고 있는 야스오에게 임신은 이를 방해하는 심리적 장애물로 기능하기 때문에 정신적 죽음을 의미하고 있다.

이처럼 『우리들의 시대』에서는 성에서 일반적으로 유추할 수 있는 결과물들(쾌락과 임신 및 출산)을 적극적으로 제거하고, 이와 반대되는 특징들인 고통과 죽음의 이미지를 적극적으로 연결시켜서 성의 이미지를 구축하고 있다고 할 수 있다.

이러한 성의 이미지가 구축된 이유를 사회에 대한 개인의 인식에서 찾아볼 수 있다. 야스오의 경우, 임신에 대한 두려움은 단순히 개인의 이기적 이유뿐 아니라 사회에 대한 강한 불신에 그 원인이 있다.

진정 이제는 늦었다. 그러나 저 녀석들 중 하나가 태어난다고 해도 그것이 어쨌든
는 것인가. 이 세상은 저 녀석들에게 그 정도로 추천할만한 곳은 아니다.¹⁴⁾

위의 인용에서 성 행위 이후에 배수구에 버려지는 정자들에 대한 야스오의 의식을 나타내고 있다. 이러한 성 행동에 대한 인식은 행위에 대한 결과로서 임신을 적극적으로 끌어들이고 동시에 이를 거부함으로써 사회에 대한 비판 의식을 나타내고 있다. 야스오는 임신을 회피하는 이유를 무엇보다 당시의 일본사회가 태어나기에 추천할만한 장소가 아니라고 생각한다. 사회적 의미에서 출산은 그 사회를 존속시키는 근원적인 조건 중에 하나로, 출산에 대한 회피는 사회에 대한 강한 부정을 나타내면서 동시에 정부와 개인의 입장 차이

14) 텍스트 p.140

를 강력하게 나타내는 요소이기도 하다.

“임신의 대행기관, 미래 그 자체다. 인간의 미래 그 자체야. 그리고 골게다.”

“완성되면 누가 사는 걸까?”

“정부지, 아니면 의사.”¹⁵⁾

위의 인용은 야스오와 그의 동생의 대화로, 개인의 임신에 대한 강한 회피로 인해 임신의 대행기관이 출현하게 될 것이라는 내용이다. 덧붙여 이러한 대행기관을 필요로 하는 존재는 개인이 아니라 정부와 의사가 제시되어 있다. 정부는 스스로의 존속을 위해 사회를 존속시킬 필요가 있으며, 사회를 존속시키기 위해서 구성원들을 재생산시킬 필요가 생긴다. 의사의 경우는 경제적 수단으로 임신의 대행기관을 자처할 이유를 안고 있다. 이러한 맥락에서 볼 때, 정부와 개인 사이의 사회적 요구의 차이를 확인할 수 있는데, 개인들의 권리보호를 위해서 이차적으로 형성된 정부가 스스로를 존속시키기 위해서 사회구성원인 개인들을 재생산하고자 한다는 역전관계가 나타난다. 또한, 사회에 대한 불신으로 발생한 임신 회피라는 문제에 대해 근원적 해결책을 모색하는 대신, 편의적 해결을 시도하려고 하는 존재로서 정부에 대한 인식이 나타나 있다. 이러한 주체와 객체의 전도현상은 사회에 대한 강한 비판과 부정을 상징적으로 나타내고 있다고 하겠다.

이처럼 『우리들의 시대』에서는 성의 본래적 목적으로 예상되는 쾌락이나 임신과 출산을 고의적으로 부정합하고 역설적으로 죽음을 적극적으로 연결시켜서, 성의 이미지를 구축하고 있다고 할 수 있으며, 이를 통해서 사회 비판적 성격을 강조하고 있다고 할 수 있다.

『우리들의 시대』에서의 성의 비판적 이미지는 유산하는 고양이를 위로하는 강간당한 처녀의 에피소드로 대표될 수 있다고 하겠다. 강간이라는 폭력적 행위가 과거에 이루어진 사건이라면 유산은 현재적 사건으로 위치된다. 과거의 폭력적 행위의 결과물로서 상징적으로 제시된 유산은 『우리들의 시대』에서 1960년대의 일본사회를 상징적으로 나타내고 있다고 할 수 있다. 그리고 이러한 사회는 인용의 마지막 부분에서 알 수 있는 것처럼 1960년대의 젊은이들이 참가하지 못한 전쟁에 대한 결과로서 주어진 상황이라는 피해의식을

15) 텍스트 p.178

읽을 수 있다. 이 피해의식에서 확인할 수 있는 것은 피해자가 일본의 젊은이
에 한정되어 있으며, 그 가해자의 정확한 면모는 나타나 있지 않다는 점이다.
선행연구에서는 가해자로 미국을 지적하는 예가 적지 않다. 이것은 1945년
이후의 미군정에 의한 통치나 이후의 미일안보 조약으로 대표되는 미일관계
를 적극적으로 고려한 결과라 할 수 있다. 그러나 이러한 피해와 가해의 관계
에서 볼 때, 피해자로 상정될 수 있는 것은 일본인 전체여야 함에도 불구하고
『우리들의 시대』에서 피해자로 상정되어 있는 것은 일본의 젊은이로 한정되
어 있다는 것은 주목할 만하다.

전후 일본에서 중요한 문제 중 하나로 부상한 것은 가해와 피해의식과 깊은
관련이 있다. 2차 대전 이후 국제적으로 일본은 피해자의 표상을 강화해왔다
고 할 수 있는데, 이에 대해서 일본 내에서는 전쟁 책임자를 보다 세분화하여
전쟁을 결의하고 일반 국민에게 이를 강요했던 정부를 가해자로, 일반 국민은
피해자로 이분화하려는 경향을 보여 왔다¹⁶⁾. 특히 전시 의사결정에 참여하지
못한 채 전쟁에 동원된 당시의 젊은이들은 세대에 따라 구분하고 기성세대에
대한 강한 비판의식을 나타내고 있다.¹⁷⁾ 이러한 기성세대에 대한 젊은이들의
피해의식은 사회비판적 태도를 통해서 『우리들의 시대』에서도 강하게 나타
나고 있다고 할 수 있다.

3. 경제의 시대와 매춘이라는 표상

『우리들의 시대』에서 나타나는 성은 비정상적인 성이라는 공통점을 갖고
있는데, 그 형태는 매춘과 강간, 동성애로 나타나고 있다. 이 형태는 모두
사랑 등의 감정적 유대를 기반으로 하기 보다는 경제력이나 폭력이라는 물리
적 조건들로 성립되어 있다는 공통점이 있다. 이 장에서는 매춘이라는 성을

16) 이러한 노력은 전후의 전쟁과 관련된 언설에서 쉽게 찾아볼 수 있는데, 그 한 예로이노
우에 키요시(井上清)의 『일본의 역사(日本の歴史)』(岩波新書, 1963-1966)를 들 수 있다.
이 역사서에는 메이지 초기에 정부에 반대하는 민중의 봉기 등에 초점을 맞추어 전시기
에 정부와 일반 국민들의 입장 차이를 강조한 현대일본사라 할 수 있다.

17) 이러한 태도의 대표적인 예로 오구마 에이지(小熊英二)의 『민주와 애국(民主と愛国)』
(新曜社, 2002)의 언설을 들 수 있다.

통해서 경제적 종속의 관계를 살펴보자.

매춘은 성을 통한 경제적 종속 관계를 상징하는 대표적인 예라 할 수 있다. 『우리들의 시대』에서는 매춘 여성인 요리코는 ‘외국인 상대’라는 특징을 갖고 있는데, 『우리들의 시대』에 등장하는 외국인인은 주로 백인이라는 것은 주목할 만하다. 1945년 패전 직후 일본은 미군정의 통치를 받았으며, 통치가 끝난 1950년대부터 미군에 기지를 제공하고 있었다. 정치·경제적 측면에서 미국과의 밀접한 관계를 갖고 있었던 상황을 고려할 때, 이 백인이란 구체적으로 미국인으로 이해되기 쉽다. 이러한 맥락에서 니시가와 다카아키가 말한 것처럼 “성적인 구도”가 “점령하의 일본”이라는 사회의 표상으로 쉽게 이해될 수 있을 것이다. 그러나 “점령하의 일본”이라는 표현은 미군정에 의한 군사적 점령을 지시하며, 점령이 해제된 지 10년이 지난 1960년대에 대해서는 시간적 차이가 있다. 1960년 전후의 일본의 시공간의 특징을 염두에 둘 때 미군에 의한 정치적 지배라는 측면보다는 1950년대 한국전쟁으로 인한 전쟁특수로 대표되는 미일간의 경제적 측면이 강조되어 간 시기라고 할 수 있다. 이러한 시대상황을 배경으로 하여 외국인 상대의 매춘여성이라는 설정은 당시의 일본과 미국의 종속관계를 경제적 측면을 강조하여 형상화하고 있다고 이해할 수 있다.

그러나 『우리들의 시대』에서 요리코와 손님인 외국인 사이의 성 묘사는 사실적 상황으로는 나타나지 않으며 오직 야스오의 상상적 상황으로만 나타나고 있다는 특징이 있다. 이에 비해 요리코와 야스오의 성묘사가 중심을 이루고 있다고 할 수 있다. 이들의 성묘사는 작품의 모두에서부터 세밀한 묘사로 나타나고 있는데, 이들의 관계는 매춘의 성격을 강하게 나타내고 있다고 할 수 있다.

요리코의 정부인 야스오는 대학생으로 경제생활을 하고 있지 않고 요리코와 동거하며, 요리코의 손님이 방문하면 자리를 비켜주는 생활을 반복하고 있다. 여기에서 야스오는 요리코에게 경제적으로 의존하고 있다는 것을 추측할 수 있으며, 그 대가로 야스오는 요리코에게 성적 쾌락을 제공하는 것으로 보인다. 앞 장의 인용문에서 야스오가 자신의 쾌락을 추구하는 대신 요리코를 성적으로 만족시키기 위해 기계적인 성행위를 하고 있으며, 요리코는 성적 쾌락만 얻을 수 있다면 야스오의 정서적인 면에 대해서는 상관하지 않는다는

점에서도 확인이 가능하다. 따라서 중년의 매춘여성인 요리코는 젊은 야스오에게 쾌락의 대가로 경제적 지원을 제공하고 있다고 할 수 있다.¹⁸⁾ 이러한 성의 관계는 일종의 매춘행위이며, 두 인물의 관계는 성을 통한 경제적 종속관계라고 할 수 있다. 여기에서 성관계를 형성시키는 경제력은 매춘부와 대학생 혹은 여성과 남성이라는 사회적 위치를 초월하여 영향력을 행사하는 강력한 요인으로 나타나고 있으며, 외국인 상대 매춘여성과의 이중적 매춘은 야스오의 굴욕감을 심화시키고 있다고 할 수 있다.

『우리들의 시대』에서 매춘이라는 성을 통해 강하게 부각되는 것은 외국인과 요리코의 매춘관계가 아니라 요리코와 야스오의 매춘관계이다. 여기에서 비판의 초점은 외국에 의한 정치경제적 지배의 구도보다는 경제력 강화를 우선적 목적으로 삼았던 당시의 일본사회에 맞춰져 있다고 할 수 있다. 패전 이후 전쟁에 의한 세계진출이 좌절된 일본은 경제성장을 새로운 목표로 삼았다. 이러한 목표 설정은 패전 이후 극대화된 빈곤을 해결하고자 하는 개개인의 요구에도 대응되었을 뿐만 아니라, 자본주의 사회에서 경제성장은 선(善) 혹은 가치중립적 행위로 간주되었기 때문에 이러한 목표는 전쟁과는 달리 도덕적 결함을 갖지 않은 것으로 인식되었다. 하지만, 실제적으로 일본 경제의 발판이 된 것은 한국전쟁으로 대표되는 전쟁특수로, 일본의 경제력 강화는 전쟁이라는 행위와 밀접한 관계라는 국제정치적 행위와 밀접하게 관련되어 있었다. 이러한 시대상황을 볼 때, 당시 경제 발전이라는 국가적 목표에 대해 국민들이 무비판적으로 가담하고 있는 당시 상황을 매춘여성과 그녀의 경제력에 의존하는 젊은이라는 설정을 통해 당시 일본사회와 그 구성원들의 상황을 비판적으로 형상화 하고 있는 것으로 이해할 수 있다.

앞 장에서 쾌락이 부재한 성이나 임신을 회피하는 성행동이 정부 혹은 기성 세대에 대한 강한 비판 의식을 나타내고 있다는 점을 확인한 바 있다. 그러나

18) 즉, 『우리들의 시대』의 요리코와 야스오의 관계는 여성과 남성의 관습적 관계에 대한 반례로 작용한다고 할 수 있다. 먼저, 여성인 요리코가 남성인 야스오를 경제적으로 종속시키고 있으며, 성적 관계에서 능동적 역할을 하는 존재로 나타나고 있다. 이것은 <성적인간>과 <정치적인간>에 대해 정의하고 있는 「우리들의 성의 시대」에서 제시된 여성과 남성의 관계에도 역전된 것이라고 할 수 있다. 오에는 「우리들의 성의 시대」에서 여성으로 유추될 수 있는 암컷을 수동적 존재로, 남성으로 유추될 수 있는 수컷을 능동적 존재로 제시한 바 있다.

이 장에서 이중의 매춘은 자기 비판적 성격을 갖고 있다고 할 수 있다. 중년의 매춘 여성의 경제력에 의존하여 생활하고 있는 젊은이라는 인물 설정에서 나타난 비판 의식은 기성세대에 대한 비판이라기보다는 매춘이라는 굴욕적 행위에 가담한 젊은이라는 자기 비판적 측면이라고 할 수 있다.

4. 성의 비유와 전형의 파괴

『우리들의 시대』의 성의 묘사와 관련하여 특기할 만한 것은 실제로는 성행위와 무관한 행위를 성적 비유로 형성화하고 있다는 점이다. 이러한 성적 비유는 주로 정치적 종속관계를 나타내고 있는데, 그 구체적 예를 아래 인용을 통해 살펴보고자 한다.

단상에서 초로의 남자는 모든 모세혈관을 순식간에 조각조각으로 만들어버릴 기세로, 발정된 암컷처럼 격한 열정을 담아 외치고 있었다. (중략) “일본국민은 독재자를 구하여 말기의 목소리를 높이고 있다. 천황폐하야말로 일본국민의 존경스러운 독재자이다. 천황폐하는 빈사의 우리들을 구하기 위해 현명하시게도 출마의 의지를 품고 계시다. 남은 것은 우리들 신민의 요청뿐이다.” (중략) “아아, 천황폐하, 천황폐하의 독재야말로 우리들이 감응하여 맞이하는 것이다.” 감응하고 있는 암컷을 향해 맹렬하게 덮쳐오는 독재자는, 끌려나온 수컷으로서, 숨소리도 거칠어지고 지나치게 발기하여 죽을 것 같이 고통스러워하는 수컷으로서.¹⁹⁾

위의 인용은 천황행렬을 맞이하기 위해 환영연설을 하고 있는 중년남자에 대한 묘사이다. 이 묘사에서 성적 대상이 될 수 없는 천황에 대한 중년남자의 열광적 지지를 성적 이미지를 통해 희화화하고 있다. 연설내용을 살펴보면, 중년 남자가 자신의 연설의 주체를 “일본국민”으로 상징함으로써 자신의 주장을 사회 일반적인 것으로 피력하고, 이를 바탕으로 천황의 정치지배라는 개인적 요청을 공동체 일반의 요청이라는 일반성을 만들어내고 있다는 점이다. 이러한 연설내용은 패전과 함께 공식적으로는 정치권력에서 배제된 천황

19) 텍스트 pp.192-193

의 위치와 대비되면서 일본사회의 재건과 함께 천황을 복권시키고자 하는 일부의 의지를 반영하고 있다고 할 수 있다. 이것은 전후 전쟁책임문제가 청산되지 않은 결과 현대사회가 안게 된 정치적 문제로 이해될 수 있다.

그러나 위 인용문에서 주목하고자 하는 것은 언설 내용보다도 언설자에 대한 묘사 자체이다. 천황을 지지하는 언설자와 천황을 암컷과 수컷의 성묘사를 통해서 그려져 있는데, 능동적 의지를 갖고 있는 존재는 암컷에 비유되고 있는 언설자라고 할 수 있다. 이에 비해서 수컷에 비유되는 천황에 대한 세부 묘사는 “맹렬하게 덮쳐오는 독재자”이지만 뒤이어 “끌려나온 수컷”이라고 부연되어, 결과적으로 천황은 강한 수컷의 위용과 독재를 강요당하는 존재로 그려지고 있다. 이러한 성적 묘사에서 확인할 수 있는 것은 능동자로서의 수컷과 피동자로서의 암컷이라는 일반적 도식이 의도적으로 역전되어 있다는 점이다.

위의 인용에서 천황에 대한 묘사는 이중으로 비틀린 묘사라고 할 수 있다. 패전이후 천황 표상에 관련된 대표적 예는 연합군 총사령관이었던 맥아더와 함께 찍은 사진으로, 이 사진에서 큰 체격의 일상적 포즈를 취하고 있는 맥아더와는 대조적으로 쇼와 천황은 왜소한 체격의 경직된 포즈를 취하고 있다. 이러한 대비는 기존의 천황의 신성성을 파괴할 뿐 아니라, 패배자의 면모를 부각시켜 패전한 일본의 상황을 비극적으로 상징하고 있다고 할 수 있다. 그러나 『우리들의 시대』에서는 천황을 패배자로서 묘사하고 있기보다는 지지자들에게 존경받는 지배자로 그려 패전 이후의 천황 표상 내용을 역전시키고 있다. 그러나 이러한 표상 내용은 천황의 내재적인 특징이 아니라, 주변에 의해서 만들어지고 강요되고 있다는 점을 강조하여 기존의 천황 표상의 의미 작용을 부정할 뿐만 아니라, 정치적 관계에 따라 변화하는 천황 표상과 그 생성 메커니즘을 고발하고 있다고 할 수 있다.

또한 위의 인용에서 독재의 의지가 천황에게서 발신된 것이 아니라, 그의 지지자들에 의해서 발신되고 있다는 점은 주목할 만하다. 이러한 인식은 전쟁 책임과 관련하여 생각할 때, 독재나 전쟁이 정치 권력자 개인의 의사라는 인식보다는 국민을 포함한 국가적 의사라는 인식을 나타내고 있다. 이러한 책임 의식은 1950년대 이후 책임의 소재를 세분화하여 결과적으로는 그 책임 소재를 불분명하게 했던 당시 전쟁 책임 담론과는 차별적인 태도를 취하고

있다고 생각된다.

5. 권력구도를 재구축하는 성

앞서 종속적 관계를 형성시키는 기제로 성의 이미지들을 살펴보고 여기에 투영된 사회에 대한 강한 비판의식을 확인했다. 이처럼 성은 종속관계를 형성시키는 기제로 나타나는데, 이 성격을 통해서 기존의 관계를 역전시키는 예를 텍스트에서 찾아볼 수 있다. 이것은 요리코, 손님인 백인, 야스오의 관계에서 확인해 보고자 한다.

집 앞에서 요리코의 손님인 윌슨과 마주친 야스오는 윌슨에 대해서 굴욕적 감정을 느끼는데 이것은 강자 미국의 국민과 패자의 국민이라는 민족적 차원에서의 열등감으로 해석될 수도 있으며, 이러한 조건에서 자신의 정인을 순순히 내줄 수밖에 없는 것에 대한 굴욕감으로 해석될 수 있다. 혹은 경제적 측면에서 요리코를 매개로 야스오는 백인에게 경제적으로 종속되어 있다고 할 수 있다. 그러나 이러한 이중의 종속관계는 세 사람의 삼각관계를 통해서 다시 회복된다고 할 수 있다.

질투와는 다른 감정, 원격조정에 의한 자동인형의 자위. 윌슨 씨의 하얀 피부, 금색의 체모, 복숭아 빛의 커다란 성기, 그리고 요리코의 튼튼하고 남자다운 성적인 모든 기관, 오히려 윌슨씨가 장밋빛 방 안에서 강간당하고 있는 듯한 풍경일 것이다.²⁰⁾

위의 인용은 야스오가 손님을 상대하는 요리코를 상상하는 장면이다. 이 때 요리코는 남성적이고 지배적 존재로, 손님인 백인은 요리코에게 지배당하는 존재로 그려지고 있으며 두 사람의 관계에서 우위에 있는 것은 요리코이다. 야스오의 상상 속에서 요리코와 손님의 종속관계는 일반적인 관계가 역전되어 있다는 것을 알 수 있다. 요리코와 야스오의 관계는 경제 능력이라는 측면에서 야스오가 요리코에게 의존상태라는 점을 이미 밝힌 바 있는데, 이러한 우위를 전복하기 위해서 야스오는 자신의 우위를 확인하는 행위를 반복한다. 그 예를 다음 인용문에서 확인할 수 있다.

20) 텍스트 p.167

요리코는 여유로운 미소를 띠우며 담배를 피우면서 그를 바라보고 있었다. 그녀의 훌륭한 중년의 얼굴은 장중하게 화장하여 당당히 미소 짓고 있었지만, 그녀의 얼굴을 떠받치고 있는 몸, 전면에 과잉된 지방의 늘어진 살과 피부의 노화를 보이는 지나치게 살찐 몸은 결코 미소 짓고 있지 않았다. 그것은 오히려 측은하게 늘어져 있었다. 야스오는 혐오감에 고개를 숙여 자신의 젊고 팽팽한 허벅지를 내려다보았다.²¹⁾

위의 인용에서 야스오는 젊음으로 대표되는 성적 매력을 통해서 요리코에 대해 자신의 우위를 확인하고자 하고 있다는 것을 알 수 있다. 이러한 우위관계를 정리하면 요리코를 매개로 하여 야스오에 대한 백인의 우위가 무화된다 고 할 수 있다. 이러한 예는 조선인 동성애자 고정희의 경우에서도 확인할 수 있다.

그는 허벅지에 손톱을 세워, 죽을힘을 다해 감내했던 것이다. 그러나 그에게 있어서 동성애는 명예 회복의 의식이다. 민족적인 서열을 일거에 뒤집어 만회하기 위한 숨 막히는 의식이다. 그는 서구의 인간, 혹은 미국인, 어느 쪽이든 백인 외에는 지지 않았다.²²⁾

한국전쟁에 참가하는 과정에서 동성애자가 된 그는 동성애 상대를 백인으로 한정하고 있다. 그에게 있어 동성애의 목적은 쾌락이 아니라 “민족적 서열을 일거에 만회하기 위한” 것이라고 할 수 있다. 이와 같이 성은 기존에 성립된 서열을 무화시키는 기능을 하는 것으로 그려지고 있다. 그러나 이러한 시도들은 실제적 힘을 갖고 있는 것이 아니라 낮은 지위에 있는 개인들의 상상 속에서 이루어지는 자기 위안적 행위라고 할 수 있다. 이러한 시도들은 동등한 인간으로서의 복권을 바라는 개인들의 원망을 명확히 보여주지만, 이 원망을 이루는 실제적 해결책은 되지 않는다는 한계를 가지고 있다. 이처럼 부당한 서열의 문제를 해결하기 위한 유일한 방법이 사실상 개인의 환상에 불과하다는 것은 ‘해결책의 부재’를 강조하고 있다고 할 수 있다.

21) 텍스트, p.144

22) 텍스트, p.214

6. 나오며

지금까지 『우리들의 시대』를 분석하여 성의 이미지가 갖고 있는 다양한 의미에 대해서 살펴보았다. 『우리들의 시대』에서의 성의 특징은 크게 두 가지로 지적할 수 있다. 먼저, 쾌락추구나 임신과 출산과 같은 성의 본래적 목적이 배제된 비정상적인 성을 통해 사회비판적 성격을 획득하고 있다. 두 번째 특징은 매춘이나 동성애와 같은 비정상적인 성을 통해서 당시의 사회상의 문제점을 부각시키고 있다고 할 수 있다. 경제적 교환물로 등장하는 매춘은 당시 최고의 선으로 기능했던 경제 성장에 대한 욕망을 상징하는 동시에, 사실상 경제성장의 발판이 되었던 것이 패전이후 일본 사회가 부정해 온 전쟁과 밀접히 관련되어 있다는 것을 형상화하고 있다고 할 수 있다. 그리고 이 문제와 일반 개인이 직접적으로 연결되어 있다는 것을 상징적으로 나타내고 있다.

또한 성을 통해서 형성되는 타자와의 관계는 종속적 성격을 강하게 나타내고 있는데, 각각의 인물들의 성격이 평면적이지 않고 입체적으로 조형되어 있다. 각각의 인물들은 수컷-남성-강자-가해자, 혹은 암컷-여성-약자-피해자의 전형적 구도를 나타내기 보다는, 침략자를 강간하는 남성스러운 여성(요리코)이나, 강간하도록 강요당하여 죽을 만큼 고통스러워하는 독재자 천황과 같이 가해와 피해가 혼합된 관계망을 나타내고 있다. 이러한 표상 내용은 전형을 파괴하는 역할을 한다고 할 수 있는데 이러한 표상은 사회적 문제에 대한 근원적 책임의식을 특정 집단이나 개인에게 한정시킬 수 있는 것이 아니라, 공동체의 문제로서 나타난다고 할 수 있겠다.

이처럼 『우리들의 시대』는 성의 다양한 형태를 통해서 일본 사회가 안고 있는 정치 경제적 문제를 다양한 관점에서 형상화하고 그 비판점을 나타내고 있다. 이러한 성이 내포하는 있는 의미는 타자와의 대립을 회피한다는 의미를 갖기 보다는, 타자로서 정부나 기성세대를 정립시키고 이들에 대한 강한 비판의식을 반영한다고 할 수 있다. 그러나 관계를 전제로 하는 성은 타자와 자신을 이분화하는 것이 아니라 이들과의 연결고리를 확인하고 공동체적 의식을

내포하고 있다고 할 수 있다. 이러한 성의 이미지를 통해서 사회에 대한 강한 비판의식을 나타냄과 동시에, 개인이 그 사회의 일원으로서 부정할 수 없는 책임 의식을 확인하고 공동체의 문제로서의 자각 과정을 형상화하고 있다고 할 수 있다.

<參考文獻>

- 森川龍也(1971·7) 「大江健三郎における性の意味」 『国文学 解釋と鑑賞』p.30
 小久保 実(1971·7) 「われらの時代」 『国文学 解釋と鑑賞』 pp.94-97
 磯田光一(1968) 「大江健三郎の「政治」と「性」」 『全集現代文学の発見』(学芸林刊)
 p.14
 一条孝夫(1985) 『大江健三郎の世界』 和泉書院 p.27
 大江健三郎(1994) 「われらの時代」 『大江健三郎全作品』(新潮社)(텍스트)
 与那覇恵子(1998·8) 「文学者の社会的発言」 『文学界』p.187
 川西正明(2001) 『昭和文学史』下卷(講談社) p.229

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

大江健三郎の『われらの時代』論

— 性のイメージを中心に —

1959年発表された大江健三郎の『われらの時代』(中央公論社)は、自分の属している空間から脱出しようと試みる若者たちの挫折を描いている長編小説である。『われらの時代』というタイトルからわかるように、当時の時代状況を当事者的な立場から描いており、社会への強い批判意識が表れている。

『われらの時代』の著しい特徴は、生々しい性の描写であるといえる。先行論では大江の作品のなかの<性>とは、<政治>の対立項として扱われ、<反政治>の意味をもっていると解釈してきたが、これに関する論証は明らかではないと言える。本稿では、『われらの時代』で現れている性のイメージを分析し、その意味を明らかにしたい。

『われらの時代』の性は、非正常の性、異常な性という特徴を持っている。同性愛、売春などという、特殊な性の形式を見せているが、異常性は同性愛や売春の内部的な特徴から生じるのではなく、性を通じて人物だちの試みる目的から生じると思われる。

『われらの時代』の性行動の特徴は、快楽や妊娠と出産という性の本来的な目的が排除されており、代わりに、性行為を通じて人間関係の変化を試みる機能を持っているといえる。このような性は、当時の日本社会の政治経済的な特徴を浮彫りにしながら、当時の日本社会を歪んだ社会として批判していると思われる。そして、その批判の対象となっているのは、歪んだ日本社会だけではなく、そのような社会を支えている個人でもある。

今まで、先行論では、性を通じて描かれている人物像は、日本とアメリカの政治経済的な癒着関係を象徴していると解釈してきた。『われらの時代』の性ではそのような一面は著しいが、日本の内部的な問題に対する批判意識を現しているといえる。日本の内部的な問題とは、現在の問題としての戦争の責任であると言えるが、国家の政策を決定して行ってきた政府と、そのような政府を支持してきた国民がその責任者の実体として強調されているといえる。

『源氏物語』의 여성의 성인식 ‘모기(裳着)’ 고찰

신 미 진*

smiki@hanmail.net

< 目 次 >

>

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1. 서론 | 4. 내친왕의 성인식 |
| 2. 친부가 공표되는 성인식 | 5. 결론 |
| 3. 친모가 배제되는 성인식 | |

Key Words : 성인 의례(A coming-of-age ceremony), 모기(mogi),
 혼인의 전제 의례(A prior ceremony of marriage),
 등장인물의 위상(Phase of characters)

1. 서론

헤이안(平安, 794~1192) 시대에 여자가 성인이 되어 처음으로 ‘모(裳)’¹⁾를 입는 의식인 ‘모기(裳着)’가 있었다. 남자의 성인식 ‘겐부쿠(元服)’²⁾에 상당하는 것으로, 연령은 일정하지 않지만 대개 12세부터 14세 사이정도에 행해졌다. 일반적으로 결혼 이전에 행해지는데, 대부분 결혼 상대가 정해졌을 때 또는 그럴 가망이 있을 때에 행한 것으로 보인다.³⁾

* 한국의국어대학교 일본어과 강사, 일본고전문학

- 1) 平安時代 이후의 宮女の 裝束으로, 허리 아래의 뒤쪽에 두르던 옷을 일컫는데 장식적인 역할이 컸다.
- 2) 元服는 대개 11세에서 20세 사이에 행해지며, 남자가 성인이 된 표시로 아무 것도 쓰지 않았던 머리에 처음으로 관(冠)을 쓰는 성인 의례이다.
- 3) 池田龜鑑 編(1974) 『源氏物語事典』上卷, 東京堂出版. p.507

성인식 ‘모기’는 여러 문헌에 의해 대개 엔기(延喜, 901~922) 이전에 생긴 풍습으로 추정되는데, 성인식을 뜻하는 용례로 ‘고가이(笄, 비녀)’, ‘가가이(加笄)’라는 단어가 보인다. ‘고가이’는 머리를 묶어 틀어 올릴 때 필요한 도구이다. 엔기 시대의 남녀 성인식이 남자는 상투를 틀어 관을 쓰고, 여자는 머리를 틀어 올려 올림머리(結髮)를 한 머리 모양의 변화로 표시됐다는 것을 알 수 있다. 하지만 이는 헤이안(平安) 중기 이후의 머리 모양⁴⁾ 및 복식의 변화와 함께, 여자의 성인식은 머리 형태가 아닌 복식의 형태 즉 ‘모’를 입어 성인인 된 것을 표시하는 ‘모기’로 대표된다.⁵⁾ 여자의 성인식 역시 남자의 성인식 ‘겐부쿠’와 마찬가지로 여러 명의 여성이 동시에 행하는 경우도 있었다.⁶⁾

모노가타리에는 ‘모기’ 본래의 의식이 상세히 그려지는 일은 극히 적으며, 그려진 의식 역시 연령과 결혼의 관계, 생활환경의 차이 등 모두 다른 설정으로 구성되어 있다. 『겐지 모노가타리(源氏物語)』에서 보이는 ‘모기’ 용례는 총 7례인데, 그 중 1례⁷⁾는 언급뿐이므로 고찰 대상에서 제외하고, 겐지(源氏)의 아내인 무라사키노우에(紫上)와 온나산노미야(女三宮), 겐지의 딸인 아카시노히메기미(明石姫君)와 양녀인 다마카즈라(玉鬘), 그리고 겐지의 장자인 유기리(夕霧)의 딸인 로쿠노키미(六君), 밀통에 의해 태어난 겐지의 표면적인 아들인 가오루(薫)의 아내 온나니노미야(女二宮)의 성인식 용례, 총 6례에 대해 분석해 보고자 한다.

- 4) 성인 여성의 일상 머리가 ‘垂れ髪(늘어뜨린 머리)’로 이행된 것에 의한 변화.
- 5) 『日本紀略』에 延曆18, 20년에 기술된 內親王의 成人式 문장에 ‘笄·加笄’등이 보인다.(中村義雄(1962) 『王朝の風俗と文学』塙選書22, 塙書房, p.146) 服藤早苗가 이에 대한 눈을 여러 의식서와 문헌을 통해 자세히 증명하고 있다. (服藤早苗(2004) 『平安王朝の子どもたち—王権と家童』, 吉川弘文館, pp.262-301)
- 6) 裳着의 경우도 複数の 여성이 동시에 행하는 일이 있었다. 正暦元年 12월 26일에 権大納言 濟時女 二人의 裳着가 있으며(『小右記』), ‘太娘’의 腰結는 濟時, ‘二娘’는 大納言 朝光가 소임을 맡고 있다. 또 같은 4년 2월 23일에는 攝政道隆 여식 세 명이 한번에 成人式을 행하고 있다(『小右記』). 이때는 ‘今夜冷泉院四親王加元服、攝政二・三・四娘着裳’라고 기록되어 있으며, 道隆親王의 元服가 행해지고, 成人式을 행한 세 명 중 가운데딸이 장래 이 親王의 아내가 된다. (山中裕外 編(1994) 『貴族の通過儀礼』 『平安時代の儀礼と歳事(平安時代の文学と生活)』至文堂, p.117)
- 7) 弘徽殿 女御 소생의 姫君들의 裳着가 언급만 되고 있다. 源氏와 朧月夜와의 再會 장면에서 右大臣의 當世風 저택 설명시 서술되고 있다. ‘新しう造りたまへる殿を、宮たちの御裳着の日、磨きしつらはれたり。はなばなとものしたまふ殿のやうにて、なにごともしも今めかしうもてなしたまへり。(花宴①433)

『겐지 모노가타리』의 ‘모기’에 대한 선행연구를 살펴보면 하야시베 레이코(林部玲子)⁸⁾, 야나이 시게시(柳井滋)⁹⁾, 구보타 다카오(久保田孝夫)¹⁰⁾, 이나가 게이시(稲賀敬二)¹¹⁾, 소노 아케미(園明美)¹²⁾ 등의 논의 있는데 모두 무라사키 노우에의 성인식에 중점을 두어 고찰하고 있다. 우에다 야스요(植田恭代)¹³⁾와 이케다 세쓰코(池田節子)¹⁴⁾는 남녀의 성인식 ‘겐부쿠’와 ‘모기’의 서술법을 비교 검토하여 ‘집안의 영화’와의 관계성을 고찰하고 있다. 본고에서는 이와 같은 선행연구와 의례의 실태를 파악할 수 있는 개설서¹⁵⁾를 바탕으로, 『겐지

- 8) 林部玲子は ‘니마쿠라(新枕, 결혼 초야의 동침)’를 행할 당시에는 源氏와 紫上에게는 양육자·피양육자의 일면과, 구혼자와 여자(구혼 대상자)의 일면 즉 양면이 공존하고 있는 상태였다고 고찰하고 있다. 林部玲子(1979) 『源氏物語—裳着の周辺—』 『物語文学論究』4, 国学院大学物語文学研究会, pp.13-23
- 9) 柳井滋는 순서는 반대이지만 ‘니마쿠라’ 전에 ‘가미소기(髪削ぎ, 머리 끝을 맞추어 자르는 의식)’가 행해지고 있는 것에 주목해 성인식이 결혼 전에 그려졌다고 보며, 源氏が 자신들을 위해 의례를 본 따 ‘니마쿠라’ 후에 ‘모기’를 행하고 있다고 논하고 있다. 柳井滋(1981) 『紫の上の結婚』 『平安時代の歴史と文学』山本裕 編, 吉川弘文館, pp.337-365
- 10) 久保田孝夫는 ‘가미소기’와 ‘모기’ 및 혼인이 같은 해에 행해지는 고이치조(後一條, 在位 1016~1036) 천황의 딸인 내친왕 쇼시(章子)와 게이시(馨子)가 紫上的 경우와 비슷하다는 것을 지적한 후에, ‘미숙함(片生ひ)’이라는 관점에서 검토해 ‘가미소기’부터 ‘니마쿠라’까지는 私人的 세계이고, ‘모기’는 밖으로 향해진 公的인 의식에 근거하는 의례이기 때문에 ‘니마쿠라’와 ‘모기’의 역전 현상이 일어났다고 결론짓고 있다. 久保田孝夫(1997) 『紫上の「片生ひ」と成人儀禮—「片生ひ」と「片成り」を軸にして—』 『都城研究の現在』, おうふう, pp.143-167
- 11) 稲賀敬二는 紫上的 ‘모기’는 葵上的 死後, 우대신 일가로부터의 朧月夜와의 결혼에 대한 타진이 오는 것을 견제하기 위해 행한 것이라고 하며, 이 ‘모기’가 대(對)사회적인 영향력을 가진다는 견해를 밝히고 있다. 稲賀敬二(1991) 『求婚譚の流れと裳着—『住吉物語』 『源氏物語』前後—』 『論集源氏物語とその前後』2, 王朝物語研究会 編, 新典社, pp.5-23
- 12) 園明美는 紫上的 ‘모기’가 그녀의 격을 상승시키는 것으로, 오점이 되는 것으로 생각하기 어렵다는 논을 피력하고 있다. 園明美(2005) 『紫上の裳着—妻妾論との関わりから—』 『人物で読む』 『源氏物語』第六卷—紫の上—上原作和 編, 勉誠出版, pp.283-291
- 13) 植田恭代 『元服裳着—源氏物語にみる成人儀禮』 『源氏物語研究集成11源氏物語の行事と風俗』 風間書房, 2002, pp.129-144
- 14) 池田節子 『物語史における元服と裳着—源氏物語』 『狭衣物語』を中心に』 『生育儀禮の歴史と文化—子どもとジェンダー—』 森話社, 2003, pp.262-291
- 15) 概論書로 清水好子·森一郎·山本利達(1973) 『源氏物語手鏡』新潮社, 林田孝和·原岡文子 他編(2002) 『源氏物語事典』大和書房, 山中裕·鈴木一雄 編(1994) 『貴族の通過儀禮』 『平安時代の儀禮と歳事(平安時代の文学と生活)』至文堂, 池田龜鑑(1964) 『平安朝の生活と文学』角川書店, 中村義雄(1962) 『王朝の風俗と文学』塙選書22, 塙書房 등이 있다.

『모노가타리』에서 인물들의 위상 설정에 성인식이라는 의례가 어떠한 영향을 끼치고 있는지를 중심으로 살펴보고자 한다.

2. 친부가 공표되는 성인식

여성의 성인식 ‘모기’는 여성을 친족만이 아니라 귀족사회 전체에 피로하는 의례로, 부모자식 관계의 인지 즉 부친이 딸의 존재를 인지한다는 의미 또한 가진다.¹⁶⁾ 여성의 신분의 공표 및 부친에게 알리는 고지(告知)의 장으로서 성인식 ‘모기’가 택해지는 것은 무라사키노우에와 다마카즈라의 경우를 들 수 있다.

먼저 아오이노우에(葵上)의 사후, 무라사키노우에와 사실흘을 행한 겐지는 이어 무라사키노우에의 부친 식부경 친왕(당시는 兵部卿宮)의 인지를 얻고, 세상에 그녀의 신분을 공표하기 위해 성인식 ‘모기’ 준비에 들어간다.¹⁷⁾

이 이조원의 아가씨를, 지금까지 세상 사람들이 어떤 신분인지도 모르는 것도 여엿한 성인이라는 느낌을 들지 않게 하니, (이번에)부친 친왕(兵部卿)에게 알려야 겠다고 생각하시어, ‘모기’를 그렇게 소란스럽게는 하지 않아도 평범하지 않게 훌륭하게 이것저것 준비하시는 등,

この姫君を、今まで世人もその人とも知りきこえぬものげなきやうなり、
父宮に知らせきこえてむ、と思ほしなりて、御裳着のこと、人にあまねくはの
たまはねど、なべてならぬさまに思しまうくる御用意など、 (葵②76)¹⁸⁾

16) 服藤早苗, 上掲書(『平安王朝の子どもたち—王権と家童』), pp.2-14

17) 稲賀敬二는 物語 前後 상황에서, 紫上の 裳着는 葵上の 死後, 右大臣家에서의 朧月夜の 결혼에 대한 타진이 오는 것을 견제하기 위해 행한 것이라고 하며, 裳着가 對사회적인 영향력을 가진다는 견해를 밝히고 있다. (稲賀敬二, 上掲書, pp.5-23)

18) 텍스트로는 阿部秋生 外(1994~1998) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』一~六, 小学館의 原文을 인용하고 괄호 안에는 (卷名 卷數 페이지수)와 같은 식으로 표기한다. 원문 번역은 각종 주석서를 참고한 논자의 번역이며, 원문의 밑줄도 논자에 의한 것임을 일러둔다. 번역시 등장인물 卷名地名은 일본어 원음을 소리 나는 대로 쓰고 거러건물 직함 명은 한자음 그대로 읽는 것을 원칙으로 한다.

겐지가 무라사키노우에의 성인식을 계획한 것은 ‘궁중의 노보일 것이다’라는 소문을 듣고, 세상에서 가벼이 여기는 그녀의 신분을 밝혀 귀족사회에 인정케 하려고 한, 실로 무라사키노우에의 격 상승을 목적으로 한 것이었다.¹⁹⁾

성인식의 실제 의례 서술은 보이지 않지만, 주최자 겐지와 당사자 무라사키노우에의 심정은 보이고 있다. 주최자 겐지는 자신의 아내로서 당당한 위상을 부여하려는 마음으로 성인식을 준비하는데, 이와 달리 무라사키노우에는 부친 즉 양부(養父)처럼 생각²⁰⁾하던 사람과의 실질적인 혼인 이후 겐지에게 배신감을 느끼며 기분 좋지 않게 생각한다.²¹⁾

양부이면서 남편, 양녀이면서 아내라는 겐지와 무라사키노우에의 특별한 관계는 겐지가 무라사키노우에의 친부인 친왕 몰래 자신의 저택 이조원으로 어린 소녀 무라사키노우에를 데려와 양육한 이력에 의한 것이라고 할 수 있다.

그러한 미묘한 관계 즉 세상 사람들이 생각하는 궁중 시녀나 양녀가 아닌 친왕의 딸이라는 고귀한 황통의 신분을 가진 성인 여성으로서의 무라사키노우에를 피로하기 위해 성인식이 준비되고 있는 것이다.

겐지는 ‘모가’를 통해 무라사키노우에의 부친 친왕에게 딸의 존재를 인지시키며, 성인이 된 무라사키노우에와의 관계를 세상에 알리고, 양부와 같은 사위라는 스스로의 애매한 입장을 정식 사위로 등용시키고자 한다. 이러한 겐지의 의식에 힘입어 사적(私的)으로 진행된 혼인이 공적(公的)인 성인식 의례로 피로되고 있다고 할 수 있다.²²⁾

무라사키노우에의 성인식은 친부인 식부경 친왕이 아닌 남편 겐지의 주최로 이조원 자택에서 사적인 사실혼 이후 뒤바뀐 순서로 이루어지고 있다. 일반적인 의례와 다른 일탈된 의례가 행해졌다는 사실은 무라사키노우에의 정처로서의 위상을 가지는 데 있어 결점이 된다고 할 수 있다.

19) 若菜上卷(④27)에서 朱雀院이 이 관계를 일종의 理想으로 이해하고 있는 것을 통해서도, 역시 紫上の 裳着는 그녀의 격 상승이 되지 오점이 되었다고는 생각하기 어렵다. (園明美, 上掲書『人物で読む『源氏物語』第六卷—紫の上』, p.288)

20) 若菜卷에서 源氏로부터 紫上가 습자와 그림 등을 배운다.

21) 林部玲子は 양육자와 피양육자 입장에서 源氏가 琴의 전수 장면부터, 紫上가 멋진 여성으로 성장했는지 시험하는 의미를 포함한 新枕을 행한다고 한다. 그리고 紫上가 한 성인의 여성이 된 것을 확인하고, 그것을 공표하기 위해 裳着 의례를 준비하고 있다고 한다. (林部玲子, 上掲書, p.20)

22) 植田恭代, 上掲書, p.131

이어서 유가오(夕顔)의 유지(遺子)인 다마카즈라의 ‘모기’ 의례를 살펴보겠다. 모친 유가오의 죽음으로 마땅한 후견인도 없이 4세가 된 다마카즈라는 유모의 남편 대재소이(大宰少弐, 규슈의 외교·국방을 맡은 관청 대재부의 차관)를 따라 규슈(九州)의 쓰쿠시(筑紫) 지방으로 내려가 그곳에서 20세 정도가 되기까지 성장한다. 그리고 강제적으로 결혼하고자 하는 히고(肥後, 지금의 구마모토 현) 지방의 호족인 대부감(大夫監, 대재부의 판관)을 피해 도읍으로 탈출해 상경한다. 그리고 하쓰세사(初瀬寺) 참배를 가는 도중 우연히 유가오의 시녀였던 우콘(右近)을 만나 겐지에게 소식이 닿게 되어, 겐지의 양녀가 되어 육조원에 들어가게 된다.

다마카즈라의 성인식 ‘모기’는 그때까지 행해지지 않은 것으로 설정되고 있다. 부친 도노추조(頭中將) 내대신에게 다마카즈라를 보내는 것을 지상의 명제로 생각한 유모 일가 쪽에서는 쓰쿠시 현지에서 만들어 놓은 다마카즈라의 신분, 대재소이의 손녀딸이라는 표면상의 신분으로는 절대 성인식 ‘모기’를 행할 수 없었을 것이다.

20세가 넘는 다마카즈라의 ‘모기’는 겐지의 양녀²³⁾가 된 후에도 바로 이루어지지 않고, 육조원에 들어가 다마카즈라가 어느 정도 여러 남성들로부터 구혼이 끊이지 않는 구혼담의 여주인공이라는 위상을 가지게 될 때 행해진다. 나이시노카미(尚侍)²⁴⁾로 입궐을 시키기 위해²⁵⁾ 그리고 언제 복상(服喪)을 치를지 모를 정도로 병이 위중한 다마카즈라의 조모 오미야(大宮)를 위해 그 신분의 내력을 밝히고자 해서 거행되는 것이 바로 다마카즈라의 성인식 ‘모기’이다.²⁶⁾

23) 여자 아이가(血肉이 아닌 집안의)養女가 되는 것은 드문 일이라는 것이 內大臣 頭中將의 심정 표현에서 서술되고 있다. ‘女子の人の子になることはをさをさなしかし。いかなることにかあらむ(螢③220) 이런 드문 일이 흥미롭게 源氏를 養父로 해, 前齋宮와 玉鬘가 養女가 되는 예가 보이고 있다.

24) 尚侍 : 宮中 內侍司의 長官.

25) 野村倫子は 史料를 통해, 결혼과 직접 연결되지 않는, 입궐이 아닌 出仕나 齋宮인 경우에도 裳着를 행하는 예가 있다고 밝히고 있다. (野村倫子(1992.10) 『「玉鬘」筑紫流離小考—袴着と裳着をめぐって—』『古代文学研究 第二次』1, 古代文学研究会, pp.1-13)

26) 裳着를 통해 玉鬘의 존재를 頭中將 內大臣을 비롯해, 사회적으로 인정케 하는 목표는 달성되었지만, 그 裳着를 실현시키려고 氏神春日의 神意 및 끊어지지 않는 부모자식의 유대 확인이 필요하다는, 본래의 裳着에는 불필요한 그런 요소를 가져와, 23세라는 이미 어른이 된 玉鬘의 裳着가 실현되고 있다. 그것은 결혼 가능한 연령이 된 것을 사회적으

겐지는 사실을 밝히고 부녀 두 사람을 대면시키려는 의도로 도노추조 내대신에게 다마카즈라의 성인식 때의 ‘고시유이’ 역을 부탁하지만, 그 사실을 알 리 없는 내대신은 모친 오미야의 병을 이유로 거절한다. 하지만 도노추조 내대신의 진짜 거절 이유는 궁에 입궐해 있는 자신의 딸 고키텐 뇨고(弘徽殿女御)의 경쟁상대가 될 수도 있는 겐지의 딸의 성인 의례에 참가하고 싶 성인 의마음이 강하게 자리 잡고 있었기 때문이었다. 그러자 겐지는 내대신의 모친인 오미야를 문병한다는 구실로 찾아가 오미야에게 다마카즈라가 친손녀라는 사실을 밝힌다. 그리고 오미야의 소식을 듣고 온 내대신에게도 다마카즈라가 내대신의 리고 오미사실을 알린다. 하지만 겐지나 내대신 모두 가벼이 행동 내대신의오미높은 신분이기 때문에 그러한 사실이 어느 정도 완화되 다큰 화제 거리가 되 성인을 L겐지 다마카즈라의 출신에 대해서는 당분간 비밀로 하기로 한다. 그리고 겐지가 내대신에게 다시 다마카즈라의 성인식의 ‘고시유이’ 역을 부탁하고, 이에 내대신도 기꺼이 그 일을 승낙한다는 형식을 취하며 드디어 다마카즈라의 성인식이 성대하게 행해진다.

그(성인식)날이 되어 삼조궁(의 조모)으로부터 은밀하게 사자가 온다. 빛 상자 등 (중략) 중궁에게서 아주 훌륭한 하얀 ‘모’, 당의, 장속, 머리 틀어 올리는 비녀 도구 등과, 관례대로 여러 향통에 외국에서 건너 온 각별하게 향이 깊은 향을 넣어 보내신다. 육조원에 계신 분들(花散里, 明石君 등)은 모두 각자 생각대로 장속을, 뇨보들 뒹으로써 빛, 부채에 이르기까지 각각 준비하신다. (중략) 의식 등 정해진 예법 이상으로, 새로운 취향으로 하셨다. (중략) 해시(亥時)가 되어 내대신이 주렴(御簾) 안에 들어가신다. 관례대로 설치한 것은 물론이고, 주렴 안의 좌석은 실제로 들도 없을 정도로 훌륭하게 준비하시고, 안주를 낸다. 등불은 이런 경우의 관례보다는 좀 밝게 하고 (중략) ‘모’의 ‘고시유이’를 행하신다. (중략) 친왕들을 비롯해 그 이상의 사람들이 빠짐없이 모여 계신다. (중략) 내대신에게 보내는 하사품 등은 물론이고 모든 선물과 축의 등 각 신분에 맞게 관례로 정한 것이 있는데, 그 이상으로 유례없을 정도로 훌륭하게 준비하셨다. 오미야의 병을 이유로 일단은 거절한 입장도 있어 요란한 관현 연주 등은 없었다.

로 확인하는 것이 본래 목적인 裳着와는 근본적으로 다른 것이다. (豊島秀範(2006.3) 「物語と人生儀禮—『源氏物語』の裳着を中心に—」 『儀禮文化』第37号, 儀禮文化学会, p.150)

その日になりて、三条宮より忍びやかに御使あり。御櫛の箱など、(中略) 中宮より白き御裳、唐衣、御装束、御髮上の具など、いと二なくて、例の壺どもに、唐の薫物、心ことに薫り深くて奉りたまへり。御方々みな心々に、御装束、人々の料に、櫛、扇まで、とりどりにし出でたまへるありさま、(中略) 儀式など、あべい限りにまた過ぎて、めづらしきさまにしなさせたまへり。(中略) 亥の刻にて、入れたてまつりたまふ。例の御設けをばさるものにて、内の御座いと二なくしつらはせたまうて、御着まゐらせたまふ。御殿油、例のかかる所よりは、すこし光見せて、(中略) ひき結びたまふ (中略) 親王たち、次々の人々残るなく集ひたまへり。(中略) 御贈物などさらにもいはず、すべて引出物、祿ども、品々につけて (中略) 二なくせさせたまへり。大宮の御なやみにことつけたまうしなごりもあれば、ことごとしき御遊びなどはなし。 (行幸③312-319)

이러한 다마카즈라의 성인식은 밖으로는 겐지의 딸로서 귀족사회에 피교하고, 안으로는 내대신 도노추조와의 친자(親子) 관계를 내대신 일가에 공표하는 것이었다. 간진(勘申)²⁷⁾에 의해 2월 성인식 일자가 정해진 후 축하 전언과 선물이 조모로부터 보내지고 있다. 또한 의식은 야간에 진행되 진술시(戌時)·해시(亥時)에 행해지고 있다. 육조원과 이조원의 여성들로부터 화려한 축하 물품들이 전해지고, 한번 거절했던일자가 정해진 후 축내대신이 결국 받아들여 진겐지의 딸로서의 술시(戌時)·해시(亥時무사히時)에 행해져행되는 과정은 모두 겐지의 권력을 강조하고 있다고 할 수 있다. 성인식 이후 겐지는 술시(戌時)·장래를 위해 술시(戌時에게 연모)·마음²⁸⁾을 품는 것은 불미한 쯤해라고 생각에, 사윗감으로 호타루 병부경궁(螢兵部卿宮)과 히게쿠로 대장(鬚黒大將) 등을 생각하며 자신의 마음을 접으려고 노력한다.

또한 다마카즈라의 성인식은 그 동안 거리가 있었던 겐지 일가와 도노추조 일가의 화합을 이루고 있다고 볼 수 있다. 이 ‘미유키(行幸) 권 이후, 유키리와 구모이노가리(雲居雁)의 결혼도 성립되며 두 권세가의 유대가 한층 강해진다. 이는 겐지의 권세가 더 굳건해짐을 말한다고 할 수 있다.

27) 勘申: 조정에서 제반사의 先例와 典故, 日時와 吉凶 등을 조사해 상주하는 것.

28) 内大臣이 源氏 자신의 이러한 마음을 알면 자신을 사위 취급을 해 세상 사람들의 웃음거리가 될 것이라고 반성한다. (さて思ひ隅なくけざやかなる御もてなしなどのあらむにつけては、をこがましうもやなど思しかへさふ(行幸③289))

3. 친모가 배제되는 성인식

고인이 되거나 신분이 낮은 모친 대신에 고귀한 신분을 가진 여성의 양녀(養女)가 되는 절차를 거쳐 거행되는 의례로, 겐지의 딸 아카시노히메기미와 유기리의 딸 로쿠노키미의 성인식을 살펴볼 수 있다.

먼저 겐지의 딸이 황후가 될 것이라는 숙요의 예언의 논리에 의해 동궁의 성인식을 앞두고 서둘러 아카시노히메기미의 성인식이 행해진다. 하지만 이때 의례 당사자인 아카시노히메기미의 나이는 11세에 지나지 않는다. 하지만 동궁의 성인식 이후 너무 늦은 입궐은 그 동안에 다른 고관의 여식의 입궐과 함께 황자의 출산 가능성을 가정케 한다. 아무리 최고의 권세가 태정대신 겐지라고 해도 모든 가능성을 배제할 수 없으므로, 서둘러 입궐을 준비할 수밖에 없었을 것이다. 그리고 그 입궐의 전제 의례로 성인식 ‘모기’가 행해지고 있는 것이다. 아카시노히메기미가 아직 완전히 성인이 되었다고는 할 수 없지만 그렇다고 그저 성장하기만을 기다리고 있을 수는 없는 것이다. 본래 성인식은 육체적으로 성숙한 사람이 사회에 입문한다는 의미의 의례였던 것이 점차 육체적 성숙을 기다리지 않고 아이를 사회에 입문시키게 된 11세기 사회의 남성의 성인식 ‘겐부쿠’²⁹⁾와 같이 여성의 성인식 ‘모기’ 또한 다양한 정치적, 사교적 의도로 연령이 낮춰지고 있다고 볼 수 있다.

그리고 2월 11일에 전날의 ‘향(香) 조제 시험’에 이은 주연(酒宴)과 관현 연주로 아직 가지지 않은 흥을 이어, 아카시노히메기미의 성인식 의례가 아키코노무 중궁(秋好中宮)을 ‘고시유이’로 해서 성대하게 거행된다.

(아카시노히메기미의) ‘모기’ 의식을 준비하는 겐지 대신의 마음은 보통이 아니다. 동궁도 같은 2월에 성인식이 행해질 예정으로, 그에 이어 (히메기미) 입궐이 있을

29) 服藤早苗는 11세기가 되면 섭관가의 자식들은 11~12세는 보통, 10세 이하의 元服조차 출현한다고 말한다. 즉 父親의 地位의 여하에 따라 자식의 地位가 左右되는 시대가 되면, 자식을 빨리 元服시켜 명목상 어른으로 만들어 자신의 유리한 地位를 자식에게 繼承시키려고 한 것이다. 政治的 理由에서 元服가 低年齡化해 가지만 11, 12세는 ‘成人’이 아니다. (服藤早苗(1991)『家成立史の研究—祖先祭祀・女・子ども』校倉書房, pp.278-299)

것이다. (중략) 성인식 당일의 선물, 공경에 대한 축의품 등은 세상에 보기 드문 훌륭한 것들을 만들어야 한다며, 저택 안에서든 밖에서도 바빠 준비하시는데, (중략) 2월 10일, (중략) 하나밖에 없는 딸의 일이니, (중략) (사이가 소원한 남에게) ‘고시유이’ 역을 부탁하는 것도 좀 쑥스러워서, 중궁에게 (사저로의) 퇴궐을 부탁하려고 생각하고 있습니다. (중략) (11일) 대신은 서쪽 저택에 술시(戌時)에 드신다. 중궁의 거처가 되는 서쪽 별채의 행랑을 꾸며, 머리를 손질하는 역의 내이시(內侍) 등도 바로 이쪽으로 참석한다. 자시(오후 11시~오전 1시)에 히메기미가 ‘모’를 입으신다.

御裳着のこと思ひそぐ御心おきて、世の常ならず。春宮も同じ二月に、御かうぶりのことあるければ、やがて御参りもうちつづくべきにや。(中略) 贈物、上達部の祿など、世になきさまに、内にも外にも事しげく営みたまふに添へて、方々に選りととのへて(中略) 二月の十日、(中略) またもなかめる人の上にて、(中略) 疎き人はかたはらいたさに、中宮まかでさせたまつりてと思ひたまふる。(中略) 西の殿に戌の刻に渡りたまふ。宮のおはします西の放出をしつらひて、御髮上の内侍なども、やがてこなたに参れり。(中略) 子の刻に御裳奉る。

(梅枝③403-413)

당시 귀족사회에서 태정대신 겐지의 외동딸인 이 아카시노히메기미의 성인식은 곧 동궁비로 입궐할 것이라는 뜻으로 받아들여졌을 것이다. 이것을 아는 고관 귀족들은 자신의 딸들을 성인식을 치룬 동궁에게 입궐시키는 것을 머뭇거리다. 그만큼 겐지의 위상은 누구도 대적할 수 없는 높은 것이라는 것이 이 의례를 통해 다시 한 번 부각되고 있다.

또한 앞서 말한 숙요의 예언의 논리에 의해 황후의 자리가 예정되어 있는 아카시노히메기미의 결점이 될 수 있는 낮은 신분의 친모 아카시노키미가 아카시노히메기미의 성인식에서 배제되는 대신, 친왕의 여식 무라사키노우에가 아카시노히메기미의 양모로서 그 위상을 높이고 있는 면도 엿볼 수 있다.

단지 히메기미의 친모가 이와 같은 때조차 히메기미의 빛나는 모습을 볼 수 없는 것을 몹시 괴로워하고 있었던 것이 가여워서, 가능하다면 이 의식에 참석하게 해줘야지 생각하나, 남들의 소문을 신경 써 그대로 그냥 지나치신다.

母君の、かかるをりだにえ見たてまつらぬを、いみじと思へりしも心苦しうて、参上らせやせましと思せど、人のもの言ひをつつみて過ぐしたまひつ。

(梅枝③413)

일부다처제(一夫多妻制)라는 혼인제도 하에서 여성의 신분은 그 모친의 출신에 의해 많이 좌우된다. 겐지의 외동딸인 아카시노히메기미의 모친인 아카시노키미는 이전 하리마(播磨) 수령의 딸로 신분이 그리 높지 않은 인물이다. 겐지에게 부여된 예언의 논리에 의해 후에 황후가 될 아카시노히메기미의 모친의 출신이 그러하다는 것은 납득할 수 없는 부분이기 때문에, 겐지는 딸 아카시노히메기미를 친왕의 딸인 무라사키노우에의 양녀로 만든다. 겐지 일가의 영화담에서 조금이라도 방해가 되는 부분은 배제한다는 모노가타리의 논리에 의해 아카시노히메기미의 친모인 아카시노키미가 이후의 모든 의례에서 배제되어 간다.

다음으로 ‘사와라비(早蕨)’ 권에서 겐지의 장남 유기리 대신의 딸인 로쿠노키미의 성인식이 행해지고 있다. 겐지의 장남 유기리는 우대신이라는 높은 지위에 오르며 겐지 일가의 영화를 계속 유지해 나간다. 그리고 유기리는 많은 구혼자들의 연모를 받고 있는 로쿠노키미의 상대로 니오미야(匂宮)를 생각한다.³⁰⁾

(지금)이들(가오루와 니오미야)을 빼고 세상에 어깨를 나란히 할 수 있을 만한 사람을 찾아내는 것은 도저히 불가능하다며 고심하신다. 버젓한 정처의 딸들보다도 나이시노스케 소생의 로쿠노키미를,

この君たちをおきて、ほかにはなずらひなるべき人を求め出づべき世かは、
と思しわづらふ。やむことなきよりも、典侍腹の六の君とか、 (匂宮部卿⑤32)

이때 로쿠노키미의 나이는 이미 성인이 된 시점으로 15~16세 정도이다. 만약 처음 혼담 얘기가 나왔을 때 니오미야가 로쿠노키미와의 혼인을 받아들였다면 바로 성인식을 행하게 되어 성인 여성으로서 늦지 않은 나이에 성인식을 치르고 혼인을 하게 되었을 것이다. 하지만 니오미야는 로쿠노키미와의 혼인을 받아들이기는커녕 변방 우지(宇治)의 하치노미야(八宮)의 딸인 나카

30) 夕霧大臣은 처음에는 薫도 사뭇감으로 생각하지만 너무 근인척(배다른 형제사이)인데다가 天皇이 사뭇감으로 내정했다는 것을 알고 단념하며, 匂宮에게 더 적극적으로 접근한다.

노키미(中君)와 먼저 부부의 인연을 맺는다.

그리고 드디어 처음 혼담을 생각했을 때로부터 5년의 세월이 흐른 후, 유기리 대신은 드디어 로쿠노키미와 니오미야의 혼인을 아카시 중궁의 허락을 받아 확정하게 된다. 물론 그 혼인을 전제로 한 로쿠노키미의 성인식이 소문이 자자할 정도로 성대하게 준비되는 것은 말할 필요도 없을 것이다. 그런데 이와 때를 같이 해 니오미야가 나카노키미를 이조원으로 맞이하며 유기리 자신의 딸과의 혼인에 대해서는 계속 소극적인 모습을 보이니, 떠들썩하게 로쿠노키미의 성인식을 준비한 유기리로서는 심한 낭패감을 맛보았을 것이다. 그렇다고 성인식을 그렇게 요란하게 준비하고 날짜를 연기한다면 웃음거리가 될 것이라고 생각한 유기리는 예정대로 딸 로쿠노키미의 성인식을 행한다.

우대신은 로쿠노키미를 니오미야에게 시집보내는 것을 이 달로 예정하고 있었는데, 니오미야가 이렇게 생각지 못한 사람(나카노키미)을, 그것보다 이쪽이 먼저란 듯이 소중히 맞이하고 이쪽에는 가까이 오지 않으니, 대신이 무척 노여워하고 있다는 것을 (니오미야가) 들으면서도, 좀 안됐다는 생각으로 편지만 가끔 보낸다. (로쿠노키미의) 성인식 ‘모기’ 의례는 세상에 평판이 날 정도로 상당히 성대하게 준비했기 때문에, 이제 와서 날을 연기하는 것도 웃음거리가 될 것이라 생각하고 20일 지나 성인식을 행하신다.

右の大殿は、六の君を宮に奉りたまはんこと、この月にと申し定めたりけるに、かく思ひの外の人を、このほどより前にと申し顔にかしづきすゑたまひて、離れおはすれば、いとものしげに思したりと聞きたまふも、いとほしければ、御文は時々奉りたまふ。御裳着のこと、世に響きていそぎたまへるを、延べたまはむも人笑へなるべければ、二十日あまりに着せたまつりたまふ。

(早蕨⑤365-366)

이때 로쿠노키미의 나이는 21~22세 정도로, 여성의 성인식 치고는 많이 늦은 시기에 행해지고 있는 것을 알 수 있다. 변방에서 지내야했던 다마카즈라는 어쩔 수 없이 23세라는 늦은 나이에 성인식을 행할 수밖에 없었다고 이해되지만, 최고의 권력을 가진 유기리 대신의 딸의 성인식이 이렇게나 늦어진 이유는 역시 최고의 배우자 선정을 위한 어쩔 수 없는 선택이었다고 이해할 수밖에 없을 것 같다.

그리고 유기리 대신은 동궁 후보로까지 생각되는 황자 니오미야의 아내로 로쿠노키미를 생각했을 때, 그 모친 도나이시노스케(藤典侍)의 출신이 낮은 신분이라는 이유로 로쿠노키미를 사람들이 가벼이 여기는 것을 안타깝게 생각하고 로쿠노키미를 황녀인 오치바노미야(落葉宮)의 양녀로 삼는다.³¹⁾

니오미야에게는 먼저 혼인을 한 나카노키미라는 아내가 이미 있었지만, 후견인으로 최고의 권세가 유기리 대신을 둔 로쿠노키미에게 정치의 자격이 주어진다. 그런 자격에 흠이 없도록 친모 즉 겐지의 측근 신하였던 고레미쓰(惟光)의 여식인 도나이시노스케가 딸 로쿠노키미의 성인식에서 배제되고 있는 것이다.

4. 내친왕의 성인식

내친왕의 성인식 ‘모기(裳着)’의 서술은 신하와 결혼한 내친왕의 경우에만 보이고 있으며, 스자쿠 상황(朱雀院)의 황녀 온나산노미야(女三宮)와 긴조 천황(今上帝)의 황녀 온나니노미야(女二宮)의 성인식을 그 예로 들 수 있다.

먼저 온나산노미야의 성인식을 살펴보겠다. ‘와카나(若菜)’ 상권은 병이 위중해져 출가를 결심하는 스자쿠 상황의 모습으로 시작되고 있다. 그리고 출가를 하는데 가장 걸림돌이 되는 것으로 딸들 특히 모친 뇨고가 죽은 온나산노미야가 걱정된다며 자연스럽게 이야기가 딸의 후견인을 마련해 주기 위한 배우자 선정으로 이어진다.

출가 전에 딸을 후견해 줄 배우자감을 찾는 문제는 스자쿠 상황에게는 해결해야 할 숙제와 같은 것이었을 터이다. 이때 스자쿠 상황이 가장 이상적으로 생각한 부부관계의 선례는 바로 무라사키노우에(紫上)와 겐지였다. 이는 13~14세인 딸 온나산노미야의 인격을 고려해, 부친 상황이 자신을 대신해 부친과 같이 양육하며 돌보아 줄 수 있는 인물을 찾고자 한 것임을 의미한다.

31) 世のおぼえのおとしめざまなるべきしもかくあたらしきを心苦しう思ひて、一条宮の、さるあつかひぐさ持たまへらでさうざうしきに、迎へとりて奉りたまへり。(匂兵部卿⑤32)

또한 어느 방면에서는 모자란 점을 감싸주고 잘 가르쳐 줄 수 있는 사람으로, 안심할 수 있는 사람이 있다면 맡기고 싶다. (중략) 성인식 ‘모기’의 준비 등을 분부 하면서 ‘육조원의 대신(겐지)이 식부경궁의 딸을 잘 양육한 것처럼, 이 황녀를 맡아 양육해 줄 사람이 있으면 좋을 텐데.

かつはまた片生ひならんことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえばや」(中略) 御裳着のほどのことなどのたまはするついでに、「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほしたてけむやうに、この宮を預かりてはぐくまむもがな。

(若菜上④27)

그리고 스자쿠 상황은 원하던 대로 딸의 배우자로 겐지를 정하고, 겐지에게 의향을 묻는데 처음에는 거절당한다. 하지만 온나산노미야가 겐지 자신의 동경의 대상인 양모 후지쓰보 중궁(藤壺中宮)과 자매인 황녀의 소생이라는 것을 생각하면 겐지의 마음이 흔들리지 않는 것도 아니다. 그런 가운데 주작원(朱雀院)에서는 스자쿠 상황의 병이 위중해지자 출가를 서두르기 위해, 온나산노미야의 상대 배우자가 확정되지도 않은 상태에서 온나산노미야의 성인식을 거행한다.

온나산노미야의 성인식은 부친 상황의 출가 준비와 함께 이루어지고 있다. 여성의 성인식은 혼인 전에 행해지는 최고의 경사스런 의례라고 할 수 있다. 그런데 그 성인식이 부친의 출가를 앞에 두고 행해진다는 설정으로, 화려한 의식에 그들이 드리워져 마치 앞으로 펼쳐질 온나산노미야의 미래가 그저 평탄하지만은 않을 것이라는 것을 암시라도 하고 있는 것 같다.

웬지 마음이 부산해 출가를 생각하시고, (온나산노미야의) 성인식 ‘모기’ 의례를 준비하시는데, 그 모습은 지금까지도 또한 앞으로도 유례없을 정도로 장엄하며 무척이나 떠들썩하다. 방의 준비는 ‘가에도노(柏殿, 주작원에 있던 황후의 거처)’의 서쪽 행랑 마루에, ‘초다이(침실)’와 ‘기초(간막이)’를 비롯해 이 나라의 비단(綾錦)을 사용하지 않고 중국의 황후의 장식을 상상하시어, 위엄있고 훌륭하게 휘황찬란하게 준비하신다. ‘고시유이’ 역에는 태정대신을 (중략) 그리고 두 대신과, 그 외 공경 등 (중략) 친왕이 8명, 당상관은 말할 필요 없이 궁중과 동궁 처소의 사람들도 빠짐없이 참석해 성대한 의례라는 평판도 높다. (중략) 장인소(藏人所)와 납전(納殿)

의 의제품을 많이 헌상하였다. 육조원에서 보내신 물건들도 실로 엄청나다. (중략) 중궁께서도 의상과 머리빗 함을 특히 정성스럽게 준비하시어,

よろづあわたたくし思し立ちて、御装着のこと思しいそぐさま、來し方行く先ありがたげなるまでいつくしくのしる。御しつらひは、柏殿の西面に、御帳、御几帳よりはじめて、ここの綾、錦はませさせたまはず、唐土の後の飾りを思しやりて、うるはしくことごとしく、輝くばかり調へさせたまへり。御腰結には、太政大臣を、(中略) いま二ところの大臣たち、その残りの上達部など(中略) 親王たち八人、殿上人、はた、さらにもいはず、内裏春宮の残らず参り集ひて、いかめしき御いそぎの響きなり。(中略) 蔵人所納殿の唐物ども、多く奉らせたまへり。六条院よりも、御とぶらひいとこちたし。(中略) 中宮よりも、御装束櫛の箱心ことに調ぜさせたまひて、 (若菜上④41-43)

이 의례가 끝나자 3일 지나, 드디어 삭발(출가)하신다.

この御いそぎはてぬれば、三日過ぐして、つひに御髪おろしたまふ。

(若菜上④44)

출가를 앞 둔 스자쿠 상황이 주관하는 마지막 공적 의례라고 할 수 있는 온나산노미야의 성인식은 ‘고시유이’인 태정대신 외 친왕 8명, 좌유대신, 공경, 당상관이 빠짐없이 참석한 성대한 의례로서 서술되고 있다. 보기 드문 귀한 물품들이 훌륭하게 장식되고 준비되어 하사되는 이 성인식을 통해, 부친 스자쿠 상황이 딸 온나산노미야를 위해 얼마나 힘을 기울였는가를 알 수 있다. 또한 이 성인식을 통해 겐지와 혼인이 잠정적으로 예정된 새 여주인공으로서의 온나산노미야가 화려한 조명을 받으며 등장한다.³²⁾

그리고 성인식 다음 해에 행해지는 25, 26세의 나이차가 나는 두 사람의 혼인은 후에 밀통, 불륜의 아이 탄생이라는 사건으로 이어져 결국 언제까지나 굳건할 것만 같던 겐지의 아성 육조원의 평화를 무너뜨리게 된다.

다음으로 ‘야도리기(宿木)’ 권에서 긴조 친왕의 황녀인 온나니노미야의 성인식이 스자쿠 상황의 황녀인 온나산노미야의 전철을 밟듯이 비슷한 형태로 전개된다. 온나니노미야의 모친 후지쓰보 뇨고(藤壺女御, 이전 麗景殿女御)는 아카시 중궁의 위세에 눌러 행복하지 않은 자신의 삶을 한탄하며, 대신 자신의

32) 清水好子 外, 上掲書, p.78

딸이라도 행복했으면 하는 바람으로 온나니노미야가 14세가 되는 해에 성대한 성인식을 행해 주려고 봄부터 준비한다. 그러다 여름에 허무하게 원령으로 괴로워하다 죽고 만다. 이 온나니노미야의 모친의 죽음은 긴조 천황을 비롯해 하급 관원들에게 장중하게 애도되는데, 이러한 애도 서술은 간접적으로 온나니노미야의 격을 높이는 것이라고 볼 수 있다.³³⁾

이 온나니노미야의 모친의 죽음으로 온나니노미야에 대한 애정과 관심이 더해진 긴조 천황은 이렇다 할 후견인이 없는 온나니노미야의 장래를 위해 마땅한 후견인을 모색한다. 그리고 긴조 천황은 누이 온나산노미야가 출가해 평화로이 살고 있는 모습을 보고, 자신의 딸의 배우자로 온나산노미야의 배우자인 겐지와 같이 후견인이 될 수 있는 사람으로 고르고 싶다고 생각한다. 그리고 천황은 그 상대로 겐지의 후예라고 할 수 있는 가오루(薰)로 정하고, 가오루가 혼인을 받아들여줬다는 의향을 보이자, 바로 온나니노미야의 성대한 성인식과 혼인을 준비한다.

(2월)20여일에 후지쓰보 뇨고 소생인 온나니노미야의 성인식 ‘모기’의례가 행해지고, 그 다음날에 (가오루)대장이 (밤에 온나니노미야 처소에)다녀가셨는데, 당일 밤(의 혼인의례)은 은밀하게 눈에 띄지 않게 의식을 치르신다.

その月の二十日あまりにぞ、藤壺の宮の御装着のことありて、またの日なん大将参りたまひける夜の事は忍びたるさまなり。(宿木⑤474)

이 온나니노미야의 성인식과 혼인의례는 긴조 천황이 보위에 있을 때 행해진다. 그리고 성인식 다음날에 바로 혼인까지 행해지는데³⁴⁾, 이것을 관료들은 신화와 같이 급하게 의례를 행한다고 비난한다. 그런데 모노가타리 안에서는 이러한 태도를 가오루를 소중히 대하고자 하는 천황의 마음이라고 덧붙여 서술하고 있다. 유기리 대신은 자신의 부친인 겐지도 천황이 보위에서 물러난 후 출가하기 전의 상태에서 내친왕과의 결혼을 허락받았는데, 천황의 재위 상태에서 내친왕과 혼인한 가오루를 보며 그의 운세를 보기 드문 축복이라고

33) 日向一雅 編(2005) 『源氏物語の鑑賞と基礎知識』no.41宿木(前半)』至文堂, p.27

34) 故具平親王女가 敦康親王과 결혼할 때, ‘同時着裳’(御堂関白記, 長和2년 12월10일)라고 기록되어 있고, 裳着과 婚儀가 동시라는 경우도 있었다. (山中裕 外 編, 上掲書, p.116)

평한다.³⁵⁾ 이는 가오루의 위상 상승을 말하는 것이라고 할 수 있다.

긴조 천황은 부친 스자쿠 상황이 출가를 앞두고 온나산노미야의 배우자를 선정할 때 처음에 겐지보다는 연배가 적당한 유기리를 생각했으나³⁶⁾ 이미 유기리에게 정처가 있어서 체념했던 상황을 떠올리고, 언젠가는 높은 신분의 정처를 얻게 될 가오루를 지금 그냥 지나치면 다시 온나니노미야의 적당한 배우자를 찾기 힘들 것이라고 생각하고 재위 상태에서 바로 혼인을 성사시킨 것으로 보인다. 그리고 실제로 그 당시 유기리 대신이 자신의 딸 로쿠노키미의 배우자로 가오루를 생각하고 있었던 것을 생각하면, 마땅한 후견이 없는 온나니노미야를 위한 천황의 정확하고 빠른 판단이었다고 볼 수 있다.

여성의 성인식 ‘모기’ 후 바로 혼인을 하는 경우는 온나니노미야가 가오루에게 고카(降嫁)하는 경우 하나뿐이다. 혼인 배우자가 확정된 후 성인식 의례가 행해지기는 했지만, 즉일 혼인이 이루어지는 경우는 이 한 예밖에 없다. 남성의 경우에도, 남성의 성인식 ‘겐부쿠(元服)’ 의례 후 즉일 혼인이 이루어지는 경우는 겐지와 아오이노우에(葵上)의 결혼, 단 1례뿐이다. 이 두 경우 모두 남자 쪽, 겐지와 가오루의 격을 높이고 있다고 할 수 있다.

5. 결론

이상으로 『겐지 모노가타리』에서 보이는 여성의 성인식 ‘모기’를 살펴봤다. 6명의 여성의 성인식 의례는 모두 친모가 죽거나(4례) 제외된(2례) 상태에서 행해지고 있다. 그러한 관계로 성인식 ‘모기’의 당사자인 여성에게는 마땅한 후견인이 절대적으로 필요하게 된다. 즉 여성과 그 집안에 있어 배우자 선정이 중요한 일이 되는 것이다. 그리고 그를 위한 발판이 되는 의례로 성인식이 행해지고 있다.

이와 같이 『겐지 모노가타리』에서의 여성의 성인식은 혼인을 전제로 한 의례로, 성인식 ‘모기’가 끝난 후에 비로소 입궐하거나 결혼을 하거나 구애를

35) めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。(宿木⑤475)

36) この権中納言の朝臣の独りありつるほどに、うちかすめてこそ心みるべかりけれ。若けれど、いと警策に、生ひ先頼もしげなる人にこそあめるを(若菜上④27)

하는 구혼담이 나타나고 있다. 성인식은 그 의례를 주최하는 후견자를 필요로 하며 항상 공적인 성격을 가지기 때문에, 모노가타리를 둘러싼 인간관계에까지 영향을 미쳐 이후의 모노가타리 전개에 깊이 관여해 간다.

<參考文獻>

- 阿部秋生 外 校注・譯(1994~1998) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』一~六, 小学館
 池田龜鑑 編(1974) 『源氏物語事典』上卷, 東京堂出版, p.507
 池田節子(2003) 「物語史における元服と裳着— 『源氏物語』 『狭衣物語』を中心に—」 『生育儀禮の歴史と文化—子どもとジェンダー』叢書・文化学の越境9, 森話社, pp.262-291
 稲賀敬二(1991) 「求婚譚の流れと「裳着」— 『住吉物語』 『源氏物語』 前後—」 『論集源氏物語とその前後』2, 王朝物語研究会 編, 新典社, pp.5-23
 植田恭代(2002) 「元服・裳着—源氏物語にみる成人儀禮」 『源氏物語研究集成11源氏物語の行事と風俗』風間書房, pp.129-144
 久保田孝夫(1997) 「紫上の「片生ひ」と成人儀禮—「片生ひ」と「片成り」を軸にして—」 『都城研究の現在』, おうふう, pp.143-167
 園明美(2005) 「紫上の裳着—妻妾論との関わりから—」 『人物で読む『源氏物語』第六卷—紫の上』上原作和 編, 勉誠出版, pp.283-291
 豊島秀範(2006) 「物語と人生儀禮—『源氏物語』の裳着を中心に—」 『儀禮文化』第37号, 儀禮文化学会, p.150
 林部玲子(1979) 「源氏物語—裳着の周辺—」 『物語文学論究』4, 国学院大学物語文学研究会, pp.13-23
 日向一雅 編(2005) 『源氏物語の鑑賞と基礎知識no.41 宿木(前半)』至文堂, p.27
 服藤早苗(1991) 『家成立史の研究—祖先祭祀・女・子ども』校倉書房, pp.278-299
 _____(2004) 『平安王朝の子どもたち—王権と家・童』吉川弘文館, pp.262-301
 山中裕 外 編(1994) 「貴族の通過儀禮」 『平安時代の儀禮と歳事』至文堂, pp.116-117

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

源氏物語の女性の成人儀禮—裳着考察

本稿では『源氏物語』において成人儀禮である裳着が、登場人物の位相の設定にいかん影響し、長編物語の展開にどのような役割を果たしているかを考察した。『源氏物語』の中の女性の裳着は全て婚姻を前提とした儀禮で、成人式が終わった後、入内したり、結婚したり、求愛したりする求婚譚への展開に繋がっている。

まず、親父の公表儀禮としての裳着は、紫上の父親(式部卿宮)に実娘の存在を認知させ、そして、親王の娘である紫上との関係を世間に知らせ、養父のような婿という自分の曖昧な立場を正式な婿として登用させようとした源氏によって用意されている。それから、玉鬘の成人式も紫上の場合と同様に、表向きには源氏の養女として、裏では頭中将内大臣との親子の関係をその一家に公表することを目的として行われている。

次に、実母が排除される成人式では、まず、明石姫君が東宮の母后になるという予言の論理により、娘の明石姫君の成人式では実母の明石君が排除される代わりに、養母の紫上がその位相を高めながら、源氏の愛妻としてその威勢を固める。そして、大臣夕霧の娘である六君の成人式においてもやはり、東宮候補として期待されている匂宮の妻としての位相のため、身分の低い実母の藤典侍は排除し、皇女である落葉宮を養母にしている。

最後に、内親王の成人式では、まず、病の重態から出家を思う父親の朱雀院により、源氏が内定されてから、女三宮の裳着が婚姻の前提の儀禮として行われる。そして、今上帝は女三宮の結婚を先例に、薫を娘女二宮の後見としての配偶者に定め、成人式とともに婚姻を用意して行方。これは、薫の位相を高めることになる。

このように、六人の女性の裳着は全て実母に死なれたり、実母が除外された状態で行われている。それゆえ、裳着の当事者である女性には後見が絶対的に必要となり、立派な配偶者選びがより重要なことになっていくことが分かる。

아리시마 다케오(有島武郎)의 『다시 태어나는 고통(生れ出づる悩み)』에 보이는 죄의식 고찰

이재성*

aicharm@cau.ac.kr

최성윤**

hosanna73@hanmail.net

< 目 次 >

>

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 들어가며 | 4. 청년 기모토의 죄의식 |
| 2. 예술적 충동의 대상화 | 5. 나오며 |
| 3. 아리시마의 죄의식 | |

Key Words : 죄의식(sense of guilt), 문명비판(civilization criticism), 프로이트(freud), 칼비니즘(calvinism), 제 4계급(the fourth estate)

1. 들어가며

아리시마 다케오(有島武郎)의 소설로서 잘 알려진 『다시 태어나는 고통(生れ出づる悩み)』은 자기 본연의 요구대로 살아가고자 하는 인간과 자연 사이의 커다란 숙명이라는 주제가 관통하고 있는 작품이다.

하지만 소설의 다른 이면에는 작가인 아리시마의 ‘문명 비판’적 요소가 담겨져 있기도 하다. 이에 관해 혼다 슈고(本多秋五)는 『다시 태어나는 고통』에서는 부(富)를 가지고 무위도식하는 부자를 향해 쓰는 비난의 말투, 대규모

* 중앙대학교 일어일문학과 교수, 일본근대문학

** 중앙대학교 일어일문학과 박사 과정, 일본근대문학

의 해산물 제조 회사, 백화점 등의 커다란 자본이 지방 도시로 들어가 독립의 소기업들을 잠식해 가는 현상을 향한 시선(視線) 등이 작품 속에서 발견 된다¹⁾라고 지적한다. 또한, 다카하라 지로(高原二郎)는 ‘속류문명에 잠식되어 가는 현대인들에게 이중생활을 강요하는 사회를 향해 반역을 도모하고 있다는 점에서 아리시마의 본질적인 문명비판이 엿보인다²⁾’라고 언급하고 있다.

한편, 지그문트 프로이트(Sigmund Freud)는 그의 저서 『문명 속의 불만(Das unbehagen in der kultur)』에서 ‘문명 가운데는 인간의 죄의식이 널리 잠재되어 있다³⁾’고 역설한다. 그는 문명은 필연적으로 인간의 두 가지 커다란 본능, 즉 공격 본능(thanatos, 죽음의 본능)과 에로스적인 본능(eros)을 방해하게 되며, 그런 이유로 인간의 본능적 욕구와 문명은 서로 대립적 관계에 놓일 수밖에 없다고 설명한다. 그리고 그 과정 속에서 인간의 내면에는 ‘죄의식’이 자리 잡게 된다고 지적한다. 또한, ‘죄의식’은 양가 감정(Ambivalenz)으로 말미암은 갈등의 표현, 즉 파괴 또는 죽음의 본능과 에로스 사이에 벌어지는 영원한 투쟁의 표현이라고 정의 내린다.

본고에서는 이러한 주장들을 근거로 『다시 태어나는 고통(生れ出づる悩み)』에 담겨져 있는 문명 비판적 요소들을 재확인하고, 여기에서 한 걸음 더 나아가 이로 인해 인간에게 생겨난 ‘죄의식’의 문제에 관해 심도 있게 들여다보고자 한다. 물질문명이 발달하고, 화폐(貨幣)의 획득이라는 물질적 가치를 추구하는 근대 자본주의시대가 도래하면서, 그 폐해로써 인간 내면에 생겨나게 된 ‘죄의식’의 문제를 포착하고, 작가 아리시마와 주인공의 내면을 들여다봄으로써 그들이 느끼는 ‘죄의식’에 관해 고찰해 보고자 한다.

2. 예술적 충동의 대상화

소설 『다시 태어나는 고통』은 아리시마의 개인적 체험을 토대로 쓰여진

1) 有島武郎(2005) 「生れ出づる悩み」 『小さき者へ・生れ出づる悩み』新潮文庫 p.153

2) 高原二郎・福田清人(1991) 『有島武郎-人と作品』, 清水書院, p.169

3) 프로이트, 김석희 옮김(2009) 『문명 속의 불만(Das unbehagen in der kultur)』 열린 책들 p.314

작품이다. 이 소설은 1918년 3월 16일부터 4월 30일까지 『오사카 마이니치 신문(大阪毎日新聞)』에 연재된 작품이다. 그리고 이후 완성되어 같은 해 9월 『돌에 짓눌린 잡초(石にひしがれた雑草)』와 함께 『아리시마다케오 저작집 제 6집(有島武郎著作集 第6集)』(소분카쿠(叢文閣)에서 간행)에 실린 아리시마 유일의 신문 단편 소설이다.

아리시마는 1907년 미국 유학에서 돌아오자마자, 모교인 삿포로 농학교가 승격한 도호쿠제국대학(東北帝國大學)에 영어강사로 재직하며, 학생들과 미술 애호가들의 모임인 ‘흑백합회(黑白合會)’를 조직해 활동한다. 그리고 그들은 1910년 11월 말에 제 3회 흑백합전(黑白合展)을 개최한다. 당시 그곳을 찾았던 열일곱 살의 청년 기다 긴지로(木田金次郎)는 흑백합전에 전시되어 있던 아리시마의 그림 ‘황혼의 바다(黄昏の海)’를 보고 그에 매료되었다고 한다. 그리고 청년은 아리시마를 찾아가 작가로서의 아리시마가 아닌, 화가로서의 아리시마에게 자신의 그림을 보여주기도 한다. 이런 사실들을 토대로 아리시마는 소설 『다시 태어나는 고통』속에서 기다 긴지로라는 청년을 모델 삼아 기모토(木本) 청년의 삶을 그리고 있다.

이 작품은 매우 독특한 구성을 취하고 있으며, 서술의 주체인 화자는 ‘나(私)’로써 전개되어진다. 여기에서의 ‘나’는 작가인 아리시마 자기 자신이라고 말할 수 있다. 1장부터 3장까지는 기모토 청년이 화자(語り手)인 ‘나’의 집을 방문해 자신의 그림을 보여준 후, 다시 10년 만에 재회하는 장면까지의 내용이 담겨져 있다. 그리고 4장부터 8장까지는 ‘내’가 기모토 청년에게 전해들은 이야기들을 토대로 고향으로 내려간 청년의 일상의 모습에 대해 상상의 날개를 펼치는 내용으로 전개된다. 그리고 마지막 장인 9장에서는 청년에게 전달하고자 하는 ‘나의 충고와 격려의 내용’으로써 이야기가 마무리된다.

소설 속에서 아리시마는 전체적으로는 ‘나’라는 인물을 통해 자기 자신을 투영하고 있다고 말할 수 있지만, 한편으로는 실제 자신과는 너무나도 다른 외부적 환경에 놓여 있는 기모토 청년과의 내면적 공감대를 확장해 가고자 하는 시도를 엿볼 수 있다.

풍요로움 속의 쓸쓸함 같은 것이 공기 중에 조용히 떠다니고 있었다. 마침 그 무렵은 나도 삶의 하나의 기로에 서서 방향하고 있던 시기였다. 나는 겨울을 목전에

둔 자연 앞에서 몇 번이고 자신도 모르게 멍하니 멈춰 서서 자네의 일과 나의 일을 뒤섞어서 생각했다.4)

기모토와의 첫 만남을 가진 후, 그와 연락이 두절된 ‘나’는 어느 날 문득 그에 관한 기억을 떠올린다. 그리고 금세 자기 자신의 일을 떠올리면서, 기모토와 자신에 관한 일을 ‘뒤섞어’ 생각한다.

이렇게 청년의 일을 생각하다가 문득 자신의 일을 떠올리는 장면은 뒷부분에서도 다시 한번 등장한다. 후에 기모토와 10년 만에 재회한 ‘나’는 자연으로부터 부여받은 그의 섬세하고 고운 마음씨와 영혼에 관해 떠올리면서, 자기 자신의 일에 관해서도 다시 차분히 돌아보게 된다.5) 여기에서 ‘나’는 청년에 비하면 자신은 여전히 진정한 자기 개성을 발견하지 못하고 있으며, 비뚤어진 반항심이나 적개심으로 한때의 만족을 구하거나, 삶을 뼈뺌하게 보는 것으로 흥미를 찾으려는 마음의 빈곤함이 자신을 원통하게 만든다고 고백한다. 하지만, ‘내’가 청년의 일상을 상상하는 부분을 자세히 들여다보면, 청년 역시도 예술에 대한 확신을 가지지 못하고 갈등하는 모습으로 그려져 있다, 이런 점에서 기모토 청년의 모습 속에 아리시마의 내면이 투영되고 있다는 느낌을 받게 된다. 또한, ‘내’가 청년의 일상을 상상하는 부분에서 최근 몇 년 사이 기모토의 집안에 갑자기 불행이 닥쳐와, 오랜 병고 끝에 청년의 어머니가 세상을 떠나고, 그의 형도 첫 아이를 잃게 되는 장면이 등장하는데, 이는 실제

4) 有島武郎(2005) 『小さき者へ生れ出づる悩み』新潮文庫 pp.37-38

豊満のさびしさというようなものが空気の中にしんみりと漂っていた。ちょうどそのころは、私も生活のある一つの岐路に立って疑い迷っていた時だった。私は冬を眼の前に控えた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ちになって、君の事と自分の事をまぜこぜに考えた。

5) 上掲書, pp.57-58 踏まれても踏まれても、自然が与えた美妙的な優しい心を失わない、失い得ない君の事を思った。仁王のようなたくましい君の肉体に、少女のように敏感な魂を見いだすのは、この上なく美しい事に私には思えた。君一人が人生の生活というものを明るくしているようにさえ思えた。そして私はだんだん私の仕事の事を考えた。どんなにもがいてみてもまだまだほんとうに自分の所有を見いだす事ができなくて、ややもするとこじれた反抗や敵愾心から一時的な満足を求めたり、生活をゆがんで見る事に興味を得ようとしたりする心の貧しさ—それが私を無念がらせた。そしてその夜は、君のいかにも自然な大きな生長と、その生長に対して君が持つ無意識な謙讓と執着とが私の心に強い感激を起こさせた。

로 아리시마의 개인적인 가족사를 묘사하고 있다고 느껴질 만큼 아리시마 집안 상황과도 유사하다. 이처럼 소설 속에서 ‘나’가 자기 자신과는 완전히 다른 환경에 놓여 있는 청년과 자신의 상황을 서로 ‘뒤섞어’가며 떠올리고 있는 장면은 서로의 ‘차이’를 확인한다기보다는 오히려 그와의 ‘동질감’을 확인하려는 듯한 느낌을 준다.

삿포로에서 청년과의 첫 만남을 가진 후, ‘나’에게도 신상에 많은 변화가 생겨난다. 아내를 맞이해 세 아이의 아버지가 되고, 한편, 신앙을 버리고 교회와의 인연도 끊는다. ‘나’는 삿포로를 떠나 도시생활을 시작하게 되고, 그 이후 여러 차례의 불행을 겪으면서 문학가로서의 생활에 본격적으로 열중한다. 그리고 ‘나’는 늘 자신의 역량에 대한 의심을 여전히 품고 있으면서도, 신들린 사람처럼 정신없이 글을 써내려갈 때는 자신의 주위에 망령과 같은 영혼들이 왈자지껄하며 서로 종이 위에서 ‘다시 태어나려고’ 안달하는 모습을 느끼기도 한다. 그때마다 그는 감격의 눈물을 흘리며, 예술에 빠져 있는 사람이 아니면 느낄 수 없는 엑스타시를 맛보게 된다.⁶⁾

한편, ‘나’는 기모토 청년에 대해서도 ‘아무도 알아차리지 못하고 주의를 기울이지 않는 지구의 한 귀퉁이에서 존귀한 영혼 하나가 모태를 깨고 나오려고 괴로워하고 있다’⁷⁾라는 말로써 그의 예술적 열정을 표현하고 있다. 즉, 기모토 청년은 화가로서 다시 태어나려는 고통을 감내하고 있으며, 아리시마를 대변하고 있는 ‘나’ 역시도 작가로서 거듭남으로써 자신의 진정한 ‘개성’을 찾아 가고 있는 것이다. 이런 점에서 아리시마는 ‘예술적 충동’을 느끼며 고뇌하는 청년 기모토에게 자신의 예술적 고뇌와 열정을 감정 이입하고 있다고 풀이할 수 있다.

또한, ‘나’가 ‘신들린 사람’처럼 정신없이 글을 써내려가며 작품 활동에 몰

6) 上掲書,, p.40

私の周囲には亡霊のような魂がひしめいて、紙の中に生まれ出ようと苦しみあせているのをはっきりと 感じた事もあった。そんな時気がついてみると、私の眼は感激の涙に漂っていた。芸術におぼれたものでなくて、そういう時のエクスタシーを だれか味わい得よう。

7) 上掲書,, p.45

「だれも気もつかず注意も払わない地球のすみっこで、尊い一つの魂が母胎を破り出ようとして苦しんでいる」

두하였다⁸⁾는 문장이나, 청년 기모토가 주변 사람들로부터 ‘미친 사람’ 소리를 들으면서도 쉬는 날이면 아침 일찍 일어나 산에 올라가 그림에 열중했다⁹⁾라는 문장에서 ‘광기적 열정’으로 예술에 몰두하는 두 사람의 예술 충동이 서로 ‘다른 것이 아님’을 보여준다.

하지만, 엄밀히 말해, 4장에서 9장에 이르기까지 ‘나’의 상상을 통해 묘사되고 있는 기모토 청년의 고단한 일상은 작가 아리시마의 실제 삶과는 상당히 동떨어져 있다. ‘예술적 충동’으로 인해 갈등하는 모습을 제외하고는 실제 그들 사이에서 공통점을 찾아낸다는 것은 힘들다.

유산계급에 속해 있던 아리시마는 종종 소설 속에서 자신의 삶과는 동떨어진 하층민들의 생활을 이야기의 테마로서 그렸는데, 이에 관해서 아리시마는 그의 에세이 『아낌없이 사랑은 빼앗는다(惜しみなく愛は奪う)』에서 다음과 같이 설명하고 있다.

나는 자신의 개성이 어떤 것인가를 알기 위해, 타인의 개성에 관해 접해보고자 했다. 역사 속에서 그것을 찾아내려고 노력하거나, 예술 속에 그것을 찾아내려고 시도하거나, 주변 사람 속에서 그것을 발견하려고 찾기도 했다.¹⁰⁾

아리시마는 소설 속 ‘나’를 통해 자신의 현실 속 상황을 그리고 있으면서도, 한편으로는 자신과 동떨어진 세상에서 살아가고 있는 청년 기모토의 삶을 통해 자신의 내면의 모습과 개성을 발견하고, 자신을 인식하고자 했다. 한편으로는 자신과는 너무나도 다른 환경에 놓여있는 기모토 청년과 자기 자신 사이에 ‘동질감’을 부여함으로써 하층민에 대해 상대적으로 느끼고 있던 ‘부르주

8) 上掲書, p.40

人々が寝入って後、草も木も寝入って後、ひとり目ざめてしんとした夜の寂寞の中に、万年筆のペン先が紙にきしり込む音だけを聞きながら、私は神がかりのように夢中になって筆を運ばしている事もあった。

9) 上掲書, p.56

会う人はおら事気違いだというんです。けんどおら山をじっとこう見ていると、何もかも忘れてしまうです。

10) 有島武郎(1954), 「惜しみなく愛は奪う」 『有島武郎集』 筑摩書房 p.375

私は自分の個性がどんなものであるかを知りたいために、他人の個性に触れて見ようとした。歴史の中にそれを見出そうと勉めたり、芸術の中にそれを見出そうと試みたり、隣人の中にそれを見出そうと求めたりした。

아 죄의식'을 털어버리고자 하는 의도를 숨기고 있기도 하다. 즉, 그는 그들과 자신이 본질적으로는 결코 서로 '다르지 않은' 인간들이라는 공감대를 형성함으로써 죄의식으로부터 벗어나고자 시도하고 있는 것이다. 하지만, 후에 쓰여진 그의 작품 『선언 하나(宣言一つ)』에서 그는 자신은 제 4계급과는 관계없는 인간이며, 그들을 위해 대변하고, 사회 운동을 시도하는 것들은 모두 허위에 불과하다고 고백한다. 그리고 『선언 하나』에서 아리시마는 자신이 기존의 권리를 버리고 설혹 자신의 생활이 달라진다 해도 결국 자신은 기존 지배계급의 소산이며, 이는 흑인종이 아무리 비누로 닦아도 여전히 흑인종이라는 사실은 변하지 않는 것과 마찬가지로 설명한다. 결국 아리시마는 제 4계급인 그들과 자기 자신은 궁극적으로 '다르다'라는 결론에 도달하고 있으며, '죄의식'을 털어버리려던 시도 역시 실패로 돌아가 버린 게 아닐까 하는 추측이 가능하다.

3. 아리시마의 죄의식

좋은 집안에서 태어나고 머리가 좋고 재능도 있어 부러울 것이 없는 사람이 죄의식을 느껴 사회주의자가 되는 경우가 있다. 이것을 흔히 '부르주아 죄의식'이라고 부른다. 아리시마의 경우도 이에 속한다고 말할 수 있다. 아리시마 집안이 소유하던 가리부토 농장(狩太農場)은 제 1농장, 제 2농장으로 이루어져 있었으며, 그 총 면적은 441정보(町步)에 달할 만큼 방대한 규모였다. 이 농장은 아리시마의 장래를 생각해 그의 아버지 다케시(有島武)¹¹⁾가 국가로부터 매입한 농장이었다.

당시 이 아리시마농장에서는 농지로부터 막대한 이익을 거두고 있었다. 아리시마 농장의 지주였던 아리시마 다케시의 소작료 징수액은 체법 상당한 금액이었다. 농장에서는 소작인과 '소작계약서'를 교환하였는데, 그것은 실로 제23조에 걸친 것이었다. 소작료에 관해서는 '소작료 약정 증서'에 따르면, 만약 지연될 경우, 하루 10엔 당 1전의 체납금이 가산되었다. 이는 한 달의

11) 아리시마 다케오의 부친.

연체조차 결코 허락되지 않는 엄격한 내용이었다. 또, 흥작이어도 결코 가격을 내려주는 일이 없었던 것으로 보인다. 이렇게 아리시마 농장은 1920년까지 약 4만 엔의 투자액으로 수익을 5만8천 엔이나 거두었다고 한다. 이처럼 아리시마 농장의 소작인에 대한 착취 상황은 심각한 수준에 놓여 있었다고 말할 수 있다.

소설 속 이와나이 동네 거리도 대형 백화점의 임시 분점이 들어서서 거리가 변화해지는데 한편, 대규모 임시 점포로 인해 이와나이의 소매상들이 타격을 입게 된다. 그리고 바닷가에까지도 노동자들이 고생한 수확을 거대자본(착취계급)이 파고들어 그들의 노동력을 착취하고 그로 인해 막대한 이익을 거둬들이는 상황이 생겨난다.

이윽고 어부들의 동네를 빠져나가 이 시가지에서 가장 변화한 거리로 나오자, 겨우내 비워져 있었던 서양식 이층 건물의 덧문이 열려져 있고, 샷포로의 어느 대형 백화점의 임시 분점을 열려고 준비 중이다. 부검지와 신문지가 빠져나온 커다란 나무 상자 몇 개가 상점 앞에 내던져 있고, 화려한 홍보깃발이 활동 사진판 앞처럼 나란히 걸려 있다. 그리고 수완 좋은 점원들 열 명 정도가 민첩하게 움직이고 있다. 자네는 이 커다란 임시 점포가 이와나이 전체 소매상들에게 얼마나 큰 타격을 입힐까를 생각하면서, 자네들이 잡아 온 생선을 자본이 없어서 다른 지역에서 투자하는 해산물 제조 회사에 값싼 가격으로 넘기고 있는 원통함을 생각하지 않을 수가 없었다. ‘커다란 손에는 잡혀 먹히는 법이지’ 하고 생각하면서 자네는 그 점포의 모퉁이를 돌아 비교적 한적한 골목길로 꼬부라졌다.¹²⁾

12) 有島武郎(2005) 『小さき者へ・生れ出づる悩み』 新潮文庫 pp.107-108

やがて漁師町をつきぬけて、この市街では目ぬきな町筋に出ると、冬じゅうあき屋になっていた西洋風の二階建ての雨戸が繰りあけられて、札幌のある大きなデパートメント・ストアの臨時出店が開かれようとしている。藁屑や新聞紙のはみ出た大きな木箱が幾個か店先にほうり出されて、広告のけばけばしい色旗が、活動小屋の前のように立てならべてある。そして気のきいた手代が十人近くも忙しそうに働いている。君はこの大きな臨時の店が、岩内じゅうの小売り商人にどれほどの打撃であるかを考えながら、自分たちの漁獲が、資本のないために、ほかの土地から投資された海産物製造会社によって捨て値で買い取られる無念さをも思わないではいられなかった。「大きな手にはつかまれる」……そう思いながら君はその店の角を曲がって割合にさびれた横町にそれた。

실제 아리시마 농장 상황에 있어서도 소작 농민들의 생활은 그들의 노력과는 무관하게 전혀 개선되지 않았다. 아리시마는 1903년에 미국으로 건너갔다가 3년 후 다시 귀국하게 되는데, 그때 그가 다시 목도하게 된 농민들의 비참함 상황에 관해 아리시마는 『사유농장부터 공산농단으로(私有農場から共産農団へ)』에서 다음과 같이 언급하고 있다.

내 가리부토마을의 농장은 호수가 69호, ...약 70호이지만, 그것이 시간이 흘러도 판잣집을 벗어나지 못하고, 2년이 지나고 3년이 지나도 여전히 판잣집이더군요!¹³⁾

이와 같은 가혹한 현실, 합리적이지 못한 구조, 모순에 가득 찬 체제를 아리시마는 매우 심각하게 받아들이고 있었으며, 이런 부조리한 상황에 회의를 느끼면서 자기 자신도 그 특권계급에 속해 혜택을 누리는 입장이라는 사실에 ‘죄의식’을 느끼고 있었던 것으로 보인다. 그리고 아리시마는 이런 마음 속 갈등으로 인해 심각하게 흔들리게 된다.

또한, 이런 당시 일본의 현실 상황은 『다시 태어나는 고통』속에서도 잘 묘사되어져 있다. 지방의 작은 동네인 이와나이에 대규모 자본이 들어가게 되면서, 동네 사람들의 부지런한 노력에도 불구하고, 경제 사정은 매우 궁핍한 상황에 놓이게 된다. 이런 마을의 모습은 아리시마 농장의 소작인들의 상황과도 흡사하다.

한때는 홋카이도의 서해안에서 오타루 못지않게 활기를 떨 것 같던 이와나 이항 이 별다른 이유 없이 발전은 커녕 점점 퇴락해 갔기 때문에, 자연히 자네 집안도 형편이 점점 어려워갔다. 자네 아버지와 형과 누이동생이 합심하여 일가족이 열심히 일했음에도 불구하고, 서서히 수렁으로 빠져 들어가듯이 가운데 기울어가는 것은 어쩔 수가 없었다.¹⁴⁾

13) 北村巖, 『有島武郎論 — 二〇世紀の途絶した夢とその群像の物語』, 柏艸舎, p.68
私の狩太村の農場は、戸数が六九戸、...約七〇戸いふところですが、それが何時まで経っても、掘立小屋以上の家にならないで、二年経っても三年経っても依然として掘立小屋なんですわ。

14) 有島武郎, 『小さき者へ・生れ出づる悩み』, 新潮文庫, pp.52-53

이처럼 소작인을 착취하는 방식을 취하고 있던 아리시마 농장의 상황과 이와나이 마을에 들어선 거대 자본의 횡포 사이에는 상당한 유사성을 드러낸다.

한편, 소설 속 ‘내’가 기모토 청년의 일상을 상상하는 부분에서는 부모로부터 물려받은 재산을 가지고 무위도식하는 자들의 모습이 비판적 시선으로 그려지고 있다.

세상에는, 특히 자네가 소년 시절을 보낸 도시라는 곳에서는 매일매일 안일한 삶을 식상할 정도로 탐하면서 일생을 꿈같이 보내는 사람도 있다. 반드시 도시라고 말할 것도 없다. 점점 쇠락해 가는 이 이와 나이의 작은 동네에도 이삼백만 엔의 재산을 조상으로부터 물려받아 오타루에 근사한 별장을 지어 첩을 두고, 자신은 도쿄의 어느 고등학교를 어찌어찌 졸업하고, 대화를 나누어보면 그다지 우둔해 보이지는 않으나 일 년 내내 이렇다 할 직업도 없이 지루함을 달래기 위한 향락에 몸을 맡기고, 그래도 다 쓰지 못하고 남은 정력을 부자들의 사치의 하나인 짜증으로 푸는 사람이 있다.¹⁵⁾

역사가 트뢴취(E. Troeltsch)는 ‘칼빈주의의 원리에 의하면 교육을 받은 사람들에게는 상속받는 수입에 의지하여 생활하는 게으른 습관은 명백한 죄로 간주되었다. 또한, 어떤 분명한 목적이 없는, 그리고 물질적 이익을 발생시키

一時北海道の西海岸で、小樽をすら凌駕してにぎやかになりそうな氣勢を見せた岩内港は、さしたる理由もなく、少しも発展しないばかりか、だんだんさびれて行くばかりだったので、それにつれて君の一家にも生活の苦しさが加えられて来た。君の父上と兄上と妹とが気をそろえて水入らずに　せつせと働くにも係わらず、そろそろと泥沼の中にめいり込むような家運の衰勢をどうする事もできなかった。

15) 上掲書、新潮文庫、p.88

世の中には、ことに君が少年時代を過ごした都会という所には、毎日毎日安逸な生を食傷するほどむさぼって一生夢のように送っている人もある。都会とは言うまい。だんだんとさびれて行くこの岩内の小さな町にも、二三百萬圓の富を祖先から受け嗣いで、小樽には立派な別宅を構えてそこに妾を住ませ、自分は東京のある高等な学校をともかくも卒業して、話でもさせればそんなに愚鈍にも見えなくせに、一年じゅうこれと言ってする仕事もなく、退屈をまぎらすための行樂に身を任せて、それでも使い切れない精力の余剰を、富者の贅沢の一つである癩癩に漏らしているのがある。

지 않는 직업을 따르는 것은 어리석은 시간이나 정력의 낭비로 생각되었다라고 설명한다. 위의 문장을 살펴볼 때, 아리시마가 기독교를 배교했다고는 하나, 그가 여전히 기독교의 영향을 벗어나지 못하고 있음을 확인하게 된다. 그리고 아리시마가 스스로의 노력 없이 물려받은 재산만을 믿고 안일한 삶을 살아가는 이들에 대해 ‘죄악사’하고 있다는 점에서 정통적 칼비니즘(calvinism) 사상의 영향을 엿볼 수 있다. 성경에서도 게으른 생활에 대한 경고¹⁶⁾와 부의 추구를 경계하라는 내용¹⁷⁾이 담겨 있으며, 청교도 문헌 등에서도 금전과 재물에 대한 욕구를 죄악시하는 사례들이 많이 등장한다. 이는 소유가 바로 나태함을 불러오는 위험성을 지니고 있기 때문이다. 아리시마는 부모의 재산을 통해 많은 혜택을 누리며 풍족한 환경 속에서 성장했다. 따라서 스스로의 노력과는 상관없이 자신의 장래를 위해 부모가 준비해 둔 재산을 물려받게 된다는 것에 대한 죄의식, 그리고 그것이 소작인들을 착취함으로써 획득한 재산이라는 점에서 그에게 마음의 불편함이 존재했을 것이라는 사실만은 확실할 것이다. 그리고 그는 열심히 노동에 임한 이들은 여전히 가난에 허덕이고, 약탈과 기만으로 축적한 재산을 기반으로 노동을 하지 않는 이들이 자본주의 경쟁에서 오히려 막대한 부를 거머쥐게 되는 현상을 보면서 기득권층의 일원으로서 죄의식을 느끼고 있었을 것으로 여겨진다. 이처럼 아리시마는 자신이 소유한 ‘부(富)’에 대해 늘 의식하고 있었으며, 그리고 이것은 자연스럽게 죄의식의 문제로 연결되어졌을 것이라고 분석된다. 그리고 자기 자신도 노동을 하지 않는 안일한 상황에 놓이지 않기 위해 스스로를 ‘경계’하면서, 문학가로써의 작품 활동을 ‘죄의식의 해방구’로써 마련해 둔다. 즉, 다시 말해 아리시마는 ‘글쓰기 작업’을 통해 자기 현실 속의 죄의식으로부터 벗어나기 위한 도피처로써, 다른 가상의 공간을 창출해낸 것이라고 말할 수 있다. 그 중에서도 특히 아리시마의 고백체 소설 속의 보다 내밀한 자기 고백 형식은 글 쓰는 이가 품고 있던 내면 속의 죄의식을 풀어내는데 한층 용이하게 작용하지 않을까 생각된다. 그리고 후에 아리시마가 토지 재산을 정리하고, 셋집으로 거처를 옮겨, 오직 펜만을 의지해 생활을 유지하려 했던 시도 역시 이런 주장을 뒷받침해 준다. 이런 아리시마의 의지는 소설의 맨 시작 부분의 첫 문장 속에서

16) 대한성서공회(2001) 『데살로니가후서 3장 6-12절』 『성경전서』 생명의 말씀사 pp.336-337

17) 대한성서공회(2001) 『마가복음 10장 23-25절』 『성경전서』 생명의 말씀사 p.71

잘 드러난다.

나는 자신의 일을 신성한 것으로 만들고자 했다. 빼뺏어지려 하는 자신의 마음을 다잡으며 가능한 한 자유롭고, 올바른 밝은 세계로 나가 거기에 자신의 예술 궁전을 지으려고 몸부림치고 있었다.¹⁸⁾

인간의 세계에는 ‘죄의식’이 존재하지만, 신성한 신의 세계에서는 ‘죄의식’이 존재치 않는다. 아리시마는 현실 속 죄의식으로부터 벗어나기 위해 문학 세계로 숨어들어간다. 즉, 그는 ‘창작 세계’를 죄의식을 벗어날 수 있는 ‘신성한 공간’으로서 만들어가고자 한다. 아리시마는 1917년 「성서의 권위(聖書の權威)」에서 ‘예술은 나를 크게 감동시킨다. 그러나 성서의 내용은 모든 예술 이상으로 나를 움직인다. 예술과 종교를 병설(併設)하는 나의 태도가 잘못된 것인가, 성서를 하나의 예술로만 보지 못하는 내가 잘못된 것인가¹⁹⁾라고 고백하고 있는데, 이 문장을 통해서도 자신의 예술을 단순한 감동이 아닌, 그 이상의 ‘신성한’ 수준으로까지 끌어올리고 싶어 하는 아리시마의 욕구를 들여다 볼 수 있다. 그리고 이에 한걸음 더 나아가 ‘아리시마 농장 해방’이라는 결단 역시 실은 자기 내면의 문제, 즉 자신 내부의 ‘죄의식’이라는 제약을 해결하기 위한 하나의 배출구가 된 것이 아닐까 분석된다.

아리시마의 죄의식 문제를 프로이트의 이론에 기초해 풀어본다면, ‘죄의식’은 권위자에 대한 두려움에서 생겨난 것이라고 말할 수 있다. 아리시마는 권위자에게 공격당할지도 모른다는 공포와 권위자로부터 사랑을 잃을지도 모른다는 두려움 때문에 본능을 자제하게 된다. 그리고 그 후 내면 권위자가 확립되면서, 내면 권위자에 대한 두려움, 즉 양심의 가책으로 인해 본능을 자제하게 되는 것이다. 아리시마의 경우 주로 기독교적 교리가 초자아로서 작동하여 이것이 그의 본능에 제재를 가는 과정에서 종종 죄의식을 느끼곤 했음을 여러 자료들을 통해서도 확인할 수 있다. 특별히 그가 신앙과 성욕

18) 有島武郎、『小さき者へ・生れ出づる悩み』、新潮文庫、p.30

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしていた。ねじ曲がろうとする自分の心をひっぱたいて、できるだけ伸び伸びしたまっすぐな明るい世界に出て、そこに自分の芸術の宮殿を築き上げようともがいていた。

19) 有島武郎、『聖書の權威』『全集』第5巻 p.242

사이에서 갈등하면서 죄의식을 느꼈던 체험도 여기에 속한다고 할 수 있는데, 이것은 ‘성경의 경직된 해석’으로부터 생겨난 것으로 분석된다. 그러나 아리시마가 느끼고 있는 죄의식이 반드시 환경적 요인에 의해서만 발생한 것이라고 단언할 수는 없다. 프로이트가 그의 책 『문명 속의 불만』에서 초자아의 형성과 양심에 발생에 관해 타고난 기질적 요소와 현실적 환경의 영향이 함께 작용한 결과라고 언급하고 있듯이, 아리시마의 경우도 그의 민감한 기질적 요소와 환경적 영향, 이 두 가지 요소 모두가 함께 작용함으로써 그의 죄의식 형성에 영향을 미쳤다고 말할 수 있다.

4. 청년 기모토의 죄의식

삿포로에 머물고 있던 ‘나’를 찾아와 자신의 그림을 보여준 청년 기모토는 그후 다시 고향 이와나이로 내려간다. 그리고 10년 후 다시 재회하게 된 기모토는 어느새 건장한 청년이 되어 있었다. 기모토 청년이 이와나이로 내려간 이후, 어부로서의 일상을 보내는 기모토의 생활은 ‘나’의 상상의 세계로서 전개된다. 기모토는 일을 돕는 틈틈이 그림을 그릴 수 있기를 바라는 마음으로 고향으로 내려가지만, 그를 기다리고 있는 것은 그가 생각하는 그런 여유로운 생활이 아니었다. 그는 나이든 아버지와 태어날 때부터 어부로서의 체질을 갖추지 못한 형과 힘을 합쳐 일하지 않으면 생계를 유지하기조차 힘든 환경에 놓여 있었던 것이다. 기모토의 가족과 마을 사람들은 바다 위에서 죽음의 사투를 벌이기도 하면서 무시무시한 생사의 갈림길 속에서 요행을 바라며 하루하루를 보낸다. 그리고 이들은 자신들의 생활에 대해 완전히 체념하고 자신들의 생활에 조금의 의심도 하지 않고 안주한다.

그 사람들은 남이 보기에는 아무래도 불행한 사람들로 비쳐질 것이다. 그러나 자네 자신의 불행에 비하면 훨씬 행복한 것이라고 자네는 생각한다. 그들은 어쨌든 그런 생활을 하는 것이 사는 것이라고 여긴다. 그들은 완전히 체념을 하고 그 생활 속에 빠져 있는 것이다. 조금도 의심하지 않는다. 그런데도 자네는 끊임없이 초조해 하며, 눈앞의 생활을 의심하고 게다가 안주하지도 못하고 있다.20)

그들은 날씨가 흐리면 맑든, 날이면 날마다 목숨을 내던지는 긴장 속에서 온종일 노동을 하면서, 생명을 담보로 얻은 밥을 먹으며 일생을 보낸다. 어부의 생활, 거기에는 조금의 유희적인 여유도 없고 목숨과 맞바꾸는 진실한 작업인 만큼 말로는 형용할 수 없는 고귀함과 엄숙함이 존재한다. 하지만 기모토에게 예술에 대한 열정은 현재의 생활과 대립하는 것이었다. 그 때문에 기모토는 ‘죄의식’을 느끼게 되고, 다른 이들과 달리 끊임없이 초조해하고, 안주하지 못하며, 스스로를 불행하다고 느낀다.

하루도 마음 편히 지낼 날이 없는 힘든 어부 생활에도 기모토는 일 년에 몇 번 있을까 말까한 쉬는 날이 되면 한 권의 스케치북과 연필 한 자루를 들고 집을 나서 산을 오른다. 그는 ‘그림을 그리고 싶다’라는 하나의 소망을 가슴에 품고, 마치 사랑하는 사람에게 느끼는 감정처럼 산에 대한 애뜻한 감정을 그림으로써 풀어낸다. 그리고 그는 이런 자신의 생활을 ‘이중 생활’이라고 명명하면서, 자신에게 주어진 운명적 생활에 복종하지 못하는 스스로의 모습에 갈등한다.

또한, 기모토는 단 하나뿐인 말동무인 k를 통해 격려와 채찍질을 받는다. 친구 k는 문학가로서의 훌륭한 재능을 지니고 있음에도 불구하고, 아버지 밑에서 약사로서의 일생을 보내기로 결심한다.

“출생을 보든, 지금까지의 운명을 보든, 나는 어부로서 일생을 마치는 게 마땅한 것 같다. k도 그 간간한 아버지 밑에서 슬프게도 약사로서의 일생을 보내기로 결심한 것 같다. 내가 보기에는 k야말로 훌륭한 문학가가 될 만한 남자임에도, k는 과장 없이 자신의 운명을 체념하고 있다. 슬프게도 체념하고 있다. 잠깐, 슬프다는 말은 실은 k를 말하는 것이 아니다. 그렇게 생각하고 있는 나 자신을 말하는 것이다. 나는 정말 슬픈 남자이다. 아버지에게도 미안하고, 형이나 누이한테도 미안하다. 이런 일생을 어떤 식으로 보내야 나는 정말 나다운 삶을 살 수 있을까?”²¹⁾

20) 有島武郎, 『小さき者へ・生れ出づる悩み』、新潮文庫、p.89

その人達は他人眼にはどうしても不幸な人達と云わなければならない。然し君自身の不幸に比べてみると、遙かに幸福だと君は思い入るのだ。彼らにはとにかくそう云う生活をする事がそのまま生きる事なのだ。彼らは綺麗さっぱりと諦めをつけて、そういう生活の中に頭からはまり込んでいる。少しも疑ってはいない。それなのに君は絶えずいらいらして、目前の生活を疑い、それに安住する事が出来ないでいる。

기모토는 소질이 있음에도 불구하고 자신의 꿈을 접으려 하는 k를 마음속으로 가엾게 여기면서도, 다른 한편으로는 이중생활을 해야만 하는 자기 자신에 대한 ‘연민’과 가족을 향한 ‘죄책감’을 동시에 드러낸다. 그리고 그의 이런 심정은 ‘가족에게 미안하다’라는 말로서 반복된다.

“실제 산과 비교해 봐. ……난 아버지한테도 형한테도 미안해.”…(중략)…가족들이 열심히 살고 있는 모습을 지켜보면 나는 자신의 천재성이 그리 쉽게 믿어지지 않는다. 이 정도 그림 밖에 그리지 못하면서, 그들에게 예술가인 척 하는 것은 두렵기도 할뿐 아니라, 분수에 넘치는 일이라고 생각된다. 나는 이런 자신이 원망스럽다. 그리고 두렵다. 모두가 그렇게 진심으로 만족하고 하루 하루를 살아가는데, 나만 마치 음모라도 꾸미는 사람처럼 시종 어두운 마음으로 살아가고 있다. 어떻게 하면 이 괴로움, 이 외로움으로부터 구원받을 수 있을까? 평소의 이런 생각이 k와 마주 앉아 있어도 머리에서 떠나지 않았기 때문에, 자네는 자신도 모르게 아버지한테도 형한테도 미안하다고 말해 버렸던 것이다.²²⁾

한편, k의 아버지는 청년 기모토를 자신의 아들인 k의 ‘나쁜 친구’ 쫓으므로 간주하고, 그가 k를 만나기 위해 약국을 찾을 때마다 단 한 번도 그에게 기분

21) 上掲書, p.93

生まれから言っても、今までの運命から言っても、おれは漁夫で一生を終えるのが相当しているらしい。Kもあの気むずかしい父のもとで調剤師で一生を送る決心を悲しくもしてしまったらしい。おれから見るとKこそは立派な文学者になれそうな男だけれども、Kは誇張なく自分の運命をあきらめている。悲しくもあきらめている。待てよ、悲しいというのはほんとはKの事ではない。そう思っているおれ自身の事だ。おれはほんとうに悲しい男だ。親父にも済まない。兄や妹にも済まない。この一生をどんなふうにご過ごしたらおれはほんとうにおれらしい生き方ができるのだろう。

22) 上掲書, pp.118-120

「實際の山の形にくらべて見たまえ。…… 僕は親父にも兄貴にもすまない」…(中略) …家の者どもの実生活の真剣さを見ると、おれは自分の天才をそうやすやすと信ずる事ができなくなってしまった。おれのようなものをかいていながら彼らに芸術家顔をする事が恐ろしいばかりでなく、僭越な事に考えられる。おれはこんな自分が恨めしい、そして恐ろしい。みんなはあれほど心から満足して今日今日を暮らしているのに、おれだけはまるで陰謀でもたくらんでいるように始終暗い心をしていなければならないのだ。どうすればこの苦しさこのさびしさから救われるのだろう」平常のこの考えがKと向かい合っても頭から離れないので、君は思わず「親父にも兄貴にもすまない」と言ってしまったのだ。

좋은 얼굴을 비친 적이 없다.²³⁾ k의 아버지는 매번 그를 차갑게 대함으로써 그의 ‘죄의식’을 더욱 증폭시키는 존재가 된다. 그가 늘 성실하게 일하는 청년 입에도 불구하고, 그가 특별히 나쁜 행동을 하는 청년이 아님에도 불구하고, 자신의 예술 세계에 대한 본능적 욕구를 포기하지 못한다는 단 하나의 이유만으로 그는 ‘나쁜 친구’ 취급을 당한다. 이처럼 ‘죄의식’을 강요당하고, 세상을 변화시키려는 의지가 전혀 나타나지 않는 수동적인 삶, 모순적 사회구조 속에서 끊임없이 먹고 사는 문제로 인해 날마다 투쟁해야 하는 삶, 그것이 제4계급²⁴⁾에게는 하나의 ‘미덕’처럼 여겨지고 있는 것이다. 그리고 이런 환경은 주변인들끼리 주어질 환경에 순응하는 인간을 ‘씩 팬찮은 인간’으로서 대우하고, 대우받게끔 조정한다.

k와 인사를 나눈 후, 약국을 나온 기모토는 문득 무엇인가 결심한 듯 해산물 제조 회사 뒤편에 있는 절벽 위 야트막한 산 평지 쪽으로 향한다. 그리고 어두운 벼랑 끝에서 꿈인지 생시인지 알 수 없는 기분에 휩싸여, 그 아래로 뛰어내리고 싶은 충동을 느낀다.

잠시 못 막힌 듯 멍하니 서 있던 자네는 이윽고 자기 자신을 그 자리에서 떼어 내듯이 결연하게 어깨를 치켜 올리더니 다시 걷기 시작한다. 자네는 스스로도 어디를 어떻게 걸었는지 모른다. 이윽고 자네가 정신을 차리고 자신을 발견한 곳은 해산물 제조 회사 뒤쪽에 있는 험한 절벽 위의 작은 산 평지였다. …… 자네는 평지 위에 서서 멍하니 주위를 둘러보았다. 자네 마음속에는 아까부터 무서운 계획이 싹트고 있었던 것이다. 그것은 오늘에 이르러 갑자기 시작된 게 아니다. 걸핏하면 자네가 방심하는 사이를 타서 수렁 속에서 미끈거리며 머리를 내미는 물의 정령처

23) 上掲書, p.121

「飯だぞ」Kの父の荒々しいかん走った声が店のほうからいかにもつつけんどんに聞こえて来る。ふだんから自分の一人むすこの悪友でもあるかのごとく思いなして、君が行くとかつてきげんのいい顔を見せた事のないその父らしい声だった。

24) 제4계급(第四階級, the fourth estate) : 신문·언론에 대한 별칭. 제4권력이라고도 한다. 때때로 노동자계급을 가리키는 경우도 있다. 성직자·귀족·평민의 3계급 외에, 저널리즘이 정치적·사회적으로 새로운 힘을 형성하게 된 데서 비롯된 말이다. 이 같은 의미가 일반화된 것은, 1828년 T.매콜리가 의회의 기자석을 가리킨 것에서 유래하였다고도 하고, 37년에 간행된 T.칼라일의 『프랑스혁명(The French Revolution)』에서 유래하였다고도 전해진다. 오늘날에도 국민의 ‘알 권리’와 관련하여 정치의 감시자인 제4계급의 역할과 책임이 강조되고 있다.

럼 그 계획이 마음 밑바닥에서부터 머리를 내미는 것이다. 자네는 그것을 극단적으로 두려워하고, 미워하기도 하고, 경멸하기도 했다. 남자로 태어나 그런 유혹을 느끼는 것조차 한심하다는 생각도 들었다. 하지만 일단 이 계획이 머리를 쳐들면, 자네는 뭔가에 홀린 사람처럼 몸부림치며 괴로워하면서 조금씩 그것을 성취하기 위해서라면 어떤 희생을 치르더라도 후회하지 않을 것 같은 마음이 되어 가는 것이다. 그 무서운 계획이라는 것은 자살이다.²⁵⁾

돌연 자네는 뒤집어지듯이 제정신으로 돌아와 뒤로 물러선다. 귀청이 찢어질 것 같은 날카로운 음향이 자네의 신경을 흔들어 놓은 것이다. 흠칫 놀라서 새삼스레 눈을 동그랗게 뜬 자네 앞에는, 평지로부터 갑자기 아래쪽으로 꺾인 절벽 가장자리가 지구의 상처 자국처럼 깊숙하게 입을 벌리고 있다. 그쪽으로 자신도 모르는 사이 다가가고 있는 자신을 깨닫고는 자네는 본능적으로 소름이 돋는 것을 느끼며 정신을 차렸다. 날카로운 음향은 저 아래에 있는 해산물 제조 회사의 기적 소리였다. 열두시 교대 시간이 된 것이다. 먼 산에서 그 기적소리가 희미하게 메아리가 되어 이중 삼중으로 들려왔다. 이제 자연은 본래의 자연이었다.²⁶⁾

25) 上掲書, pp.124-125

しばらく釘づけにされたように立ちすくんでいた君は、やがて自分自身をもぎ取るように決然と肩をそびやかして歩きます。

君は自分でもどこをどう歩いたか知らない。やがて君が自分に気がついて君自身を見いだした所は海産物製造会社の裏の険しい峠を登りつめた小山の上の平地だった。

……君はその平地の上に立ってぼんやりあたりを見回していた。君の心の中にはさきほどから恐ろしい企図が目ざめていたのだ。それはきょうに始まった事ではない。ともすれば君の油断を見すまして、泥沼の中からぬるりと頭を出す水の精のように、その企図は心の底から現われ出るのだ。君はそれを極端に恐れもし、憎みもし、卑しみもした。男と生まれながら、そんな誘惑を感ずる事さえやくざな事だと思った。しかしいったんその企図が頭をもたげたが最後、君は魅入られた者のように、もがき苦しみながらも、じりじりとそれを成就するためには、すべてを犠牲にしても悔いのような心になって行くのだ、その恐ろしい企図とは自殺する事なのだ。

26) 有島武郎、『小さき者へ 生れ出づる悩み』、新潮文庫, pp.127-128

突然君ははね返されたように正気に帰って後ろに飛びすぎた。耳をつんざくような鋭い音響が君の神経をわななかせたからだ。ぎょっと驚いて今さらのように大きく目を見張った君の前には平地から突然下方に折れ曲がった崖の縁が、地球の傷口のように底深い口をあけている。そこに知らず知らず近づいて行きつつあった自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだてながら正気になった。鋭い音響は目の下の海産物製造会社の汽笛だった。十二時の交代時間になっていたのだ。遠い山のほうからその汽笛の音はかすかに反響になって、二重にも三重にも聞こえて来た。もう自然はもとの自然だった。

위의 두 번째 문장 중 마지막 부분의 ‘이제 자연은 본래의 자연이었다’라는 말의 의미가 자본주의 체제와 물질 문명으로 인해 변질되기 이전 상태의 자연, 즉, ‘문명의 힘이 닿지 않은 상태의 자연’을 뜻하는지, 아니면 ‘청년이 자살을 결심하기 직전의 자연’으로 돌아왔다는 의미인지는 확실치 않다. 바로 다음 문장에서 ‘어느 사이엔가 아까 그대로의 붕괴되어버린 듯한 적막한 표정을 한껏 짓고 끝없이 자네 주위에 펼쳐져 있다’라고 표현되고 있는 것으로 보아 환경적으로는 아무런 변화가 이루어지지 않은 것처럼 느껴지기도 한다. 하지만 청년 기모토가 자살을 포기하고 다시 살아가기 위해 내려왔다는 점에서 그에게 분명 어떤 심리적 변화가 있었음만은 확실하다. 따라서 여기에서는 전자의 의미인 ‘문명의 힘이 닿지 않은 상태의 자연’이라는 뜻으로 해석하는 편이 소설의 뒷부분에 등장하는 ‘봄이 오고 있다’라는 문장과 연결했을 때 좀 더 설득력을 지닌다고 할 수 있다. 즉, ‘문명’을 상징하는 해산물 제조 회사의 기적소리를 듣고 다시 정신을 차리게 된 기모토는 이 순간 자신을 ‘죄의식’ 속으로 몰아넣은 문명의 ‘정체’와 맞닥뜨리게 된 것이다. 그리고 청년은 본능대로 살아가고자 하는 인간의 욕구를 당연하게 받아들여 주는 ‘본래의 자연’ 속에서 ‘죄의식’을 벗어던지게 된다. 본래인간은 ‘훼손되지 않은 자연’ 속에서 본능적 삶을 살아가는 것이 가장 자연스럽고도 편안한 존재이기 때문이다. 그리고 아리시마는 기모토 청년이 느끼는 본능적 삶에 대한 추구하고 현실적 상황의 충돌에서 생겨한 ‘죄의식’은 결국 문명화되고, 변질된 자본주의 체제의 결과물일 뿐, 그의 책임이 아니라고 그를 다독거린다. 따라서 이제는 ‘죄의식’을 벗어던지고, 어떠한 가책도 느낄 필요 없이 ‘자연’ 속에서 당당히 살아갈 것을 그에게 주문하고 있는 것이다. 또한, 예술혼을 불태우는 ‘본능적 생활’ 속에서 진정한 행복과 만족을 맞보라고 조언한다. 즉, 아직 문명에 의해 훼손되지 않은, 즉 인간이 정한 규칙과 규율의 영향을 받지 않아도 되는 훗카이도의 ‘자연’ 속에서 예술적 기운을 받으며, 현실의 고통을 이겨나갈 것을 충고하고 있는 것이다.

다른 한편으로는, 아리시마는 기모토로 대표되는 제 4계급을 향해 하루하루의 끼니만을 걱정하며 일에 매몰되어 버리는 ‘습성적 생활’에 인주하지 말

고, 그들 스스로 적극적인 태도로 삶을 개척하고, 세상을 변혁해 나갈 것을 권고한다. 즉, 다른 계급의 노력을 빌리기보다는 이제는 그들 자신이 세상을 변혁시킬 새로운 시대의 담당자가 되겠다는 자각을 가질 때가 되었다고 그는 외치고 있는 것이다.

이러한 사실은 『선언 하나(宣言一つ)』에서 아리시마가 자신과 같이 지배계급에 태어나 자란 인텔리가 제 4계급을 진정으로 이해하고, 그 입장에 선다는 것이 불가능하다고 선언하고 있는 부분에서 더욱 선명하게 드러난다.

나는 제 4계급 이외의 계급에 태어나, 자라고, 교육을 받았다. 따라서 나는 제 4계급과는 인연이 없는 중생이다.²⁷⁾

이처럼 아리시마는 프랑스혁명이 민중혁명이었음에도 불구하고, 제 3계급에게 이익이 돌아갔다는 사실을 지적하면서, 자신과 같은 제 3계급에서 태어난 지식인들에게 사회변혁의 주체가 되어 주길 기대하지 말 것을, 그리고 이 부조리한 체제를 바꿀 수 있는 주체는 다른 누구도 아닌 바로 당사자인 제 4계급의 노동자들, 바로 그들 자신이 되어야 함을 주장한다. 그리고 아리시마 자신도 소극적으로 ‘부르주아 죄의식’을 꺼안고 있는 것이 아니라, 스스로의 ‘죄의식’을 벗어던지기 위해 ‘농장 해방’ 등과 같은 실천적 작업 속으로 돌입한다.

5. 나오며

인간 사회에 문명이 발달하게 되면서 인간에게는 노동에 대한 강박이 생겨나게 되고, ‘본성’은 더욱 더 억압받고 있다. 아리시마는 『다시 태어나는 고통』라는 작품을 통해 인간의 ‘본성’을 억압하는 문명에 대해 소리 없는 비판을 가한다. 그리고 작가 아리시마 자신의 내면과 소설 속 기모토 청년의 모습을 통해 문명과 본능의 대립의 결과로서 생겨난 인간 ‘죄의식’의 문제를

27) 私は第四階級以外の階級に生れ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に対しては無縁の衆生である(筑摩書房 『現代日本文学大系35 有島武郎集』)

보여준다.

아리시마는 현실 속 탐욕적 자본주의 체제와 기독교적 교리로 인해 ‘죄의식’을 느끼게 되고, 이를 극복하기 위한 수단으로써 다음과 같은 노력들을 진행해간다.

첫 번째, 그는 ‘작가’라는 직업과 작품 활동을 통해 죄의식을 해결할 배출구를 찾는다. 이것은 아리시마가 후에 자신의 토지 재산을 정리하고, 셋집으로 거처를 옮겨 오직 펜으로 벌어들인 수입만으로 생활을 꾸려갔던 모습 속에서도 잘 드러난다.

두 번째, 그는 아리시마가의 가리부토(狩太) 농장을 개방하고, 기존의 생활 방식을 적극적으로 바꿔나가기 시작한다. ‘기존의 지배계급’을 허물기 위한 ‘생활 혁명’을 실행하고, 그 실천으로써 개인(個人) 잡지 『이즈미(泉)』를 창간하고, 가난한 사회주의자들에게 활동자금을 원조하기도 한다.

한편, 소설 속 청년 기모토는 가난한 가정에서 태어나 아무리 몸부림쳐도 전혀 상황이 나아지지 않는 환경, 먹고 살기 위해 대부분의 시간을 노동에만 매달려야 하는 환경 가운데 놓여 있다. 그는 이런 생활에 만족하지 못하고 마음껏 ‘예술적 충동’을 충족하고 싶어 하는 자기 자신으로 인해 가족에 대해 ‘죄의식’을 느끼는 인물이다. 아리시마는 자신이 소설 속에서 그리고 있는 청년을 향해 그가 느끼는 ‘죄의식’은 문명화 속에서 변질되어진 자본주의 체제의 결과물일 뿐, 그의 잘못이 아니라며 위로의 메시지를 전한다. 그리고 그에게 이제는 ‘죄의식’을 벗어던지고 당당히 자신의 예술 혼을 펼쳐가라고 다독인다. 또한, 아리시마는 『선언 하나』에서도 언급하고 있듯이, 기모토를 향해 주어진 삶에 대해 수동적 태도로 안주하지 말고, 제 4계급 그들 스스로가 적극적인 변혁의 주체가 되라고 충고한다. 그리고 그런 과정 속에서 언젠가 그들에게도 ‘봄’이 찾아올 것이라는 ‘희망’을 던진다. 즉, 아리시마는 소설 속 ‘나’와 기모토, 두 사람 모두에게 ‘다시 태어나는 고통’을 견뎌냈을 때, 더 나은 자신, 더 나은 세상과 만날 수 있을 것이라는 하나의 가능성을 제시하고 있는 것이다. 그러나 아이러니컬하게도 아리시마는 이 소설을 발표하고 5년 후에 자살하고 만다. 프로이트가 ‘죄의식이란 모든 문명이 치러야 하는 대가이며, 사회적인 해결책은 존재하지 않는다’라고 지적한 것처럼, 아리시마가 긍정적인 해결책이 아닌, 죽음이라는 도피처를 선택했다는 점에서 결국은

그 역시도 프로이트와 같은 결론에 도달해 버린 듯하다.

<參考文獻>

대한성서공회(2001) 『성경전서』생명의 말씀사 p.71, pp.336-337

프로이트, 김석희 옮김(2009) 『문명 속의 불만(Das unbehagen in der kultur)』열린 책들 p.314

有島武郎(2005) 『小さき者へ・生れ出づる悩み』新潮文庫 p.153, pp.37-38, pp.57-58, p.40, p.45, p.56, pp.107-108, p.30, pp.52-53, p.88, p.89, p.93, pp.118-120, p.121, pp.124-125

有島武郎, 「聖書の權威」 『全集』第5卷 p.242

有島武郎(1954) 「惜しみなく愛は奪う」 『有島武郎集』筑摩書房 p.375

北村巖(2007) 『有島武郎論—二〇世紀の途絶した夢とその群像の物語』柏艸舎 p.68

高原二郎・福田清人(1991) 『有島武郎-人と作品』, 清水書院 p.169

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

有島武郎小説の罪の意識に関する考察

— 『生れ出づる悩み』を中心にして —

本稿では有島武郎の作品『生れ出づる悩み』の中で、人間の本能と文明の衝突によって発生した罪の意識について論じてみた。

まず、作家の有島武郎は罪の意識から開放されるために、小説の主人公である木本に欲望や芸術衝動を対象化する。

有島武郎は主人公の<私>の立場で、漁師をしながら絵を描き続ける木本に対して、羨望と嫉妬の感情を初め、ブルジョア階級としての罪の意識なども感じるし、木本と自分を同一視することによって、罪の意識から抜け出そうと思う。

また、有島はブルジョア階級であったが、この作品では下層階級の心情を本物みたいに表現している。富を得て無為徒食する金持ちに対する非難の口吻とともに、地方都市に大きな資本が侵入して、独立の小企業を蚕食して行くことに批判の視線を向けている。

木本の郷里の岩内に大規模な資本が流入したことによって生じた横暴は有島家の狩太農場の搾取の状況と似ていて、この描写から有島のブルジョアとして罪の意識を感じ取ることができる。そして、有島は罪の意識から逃れ、小説の空間を神聖なものにして文学世界の中に隠れ込もうとする。

一方、木本は貧しい階級に生れ、実生活と芸術生活との二重生活の中で、家族に対して罪の意識を感じることになる。

有島は自分自身と木本に向けて罪の意識を捨て、前向きにひたむきに生きて行くことを勧めている。そして、彼は最後にその希望を「春」として表現しているが、結果的には自殺してしまって、彼も社会的な解決策を探せなかったとも言えるだろう。

1960년대 원폭표상 연구*

— 『검은 비(黒い雨)』와 『시게마쓰일기(重松日記)』를 중심으로 —

최 명 숙**

glmschoi@yahoo.co.kr

< 目 次 >

>

서론	제3장 망각(妄覺)의 표상
제1장 미디어텍스트 공간속의 원폭표상	『검은 비(黒い雨)』
제2장 기억(記憶)의 표상	결론
『시게마쓰일기(重松日記)』	

Key Words : 검은비(Black rain), 원폭(an atomic bomb), 표상(representation), 전쟁(a war),

가해자(assailant), 피해자(victims)

서론

1945년 8월 6일과 9일 일본의 히로시마(広島)와 나가사키(長崎)에 원자폭탄이 투하된 지 60여년이 흘렀다. 원폭(原爆)은 제2차 세계대전(第二次世界大戦 : 1939. 09. 01~1945. 08. 15)을 종식시키는데 큰 역할을 했고, 세계에서 최초로 실행된 핵무기 사용이라는 점에서 인류역사상 특기할 사건이라 하겠다. 원폭 피해자들은 가공할만한 원폭체험에서 그 비참함을 절규하며, 전쟁 반대への 목소리를 높였다. 그러한 시대 상황에서 전후작가들은 자신, 혹은 주위 사람들

* 이 논문은 2009년도 BK21 고려대학교 중일언어문화교육연구단의 지원비에 의해 연구된 논문임.

** 고려대학교 중일어문학과 중일비교문화전공 박사과정

의 전쟁 체험을 상세하게 기록하듯이 작품화 했으며, 그렇게 역사를 기록하는 것이, 작가)의 사명이라는 자각)이 컸다.

본고는 시게마쓰 시즈마(重松静馬: 1910~1980, 이하 시게마쓰' 라고 함³⁾)의 『시게마쓰일기(重松日記)』(筑摩書房, 2001. 05. 25)를 토대로 한 이부세 마사지(井伏鱒二: 1898~1993, 이하 '이부세' 라 함⁴⁾)의 『검은 비(黒い雨)』(1966.10)를 비교하여, 두 작품에 나타난 원폭표상의 변화를 확인하고 이 작업을 통해 1960년대에 원폭표상이 어떤 식으로 변화되어 갔으며, 변화했다면 그 원인은 무엇인지를 분석해 보는 데 목적을 둔다. 동시에 언론에서의 원폭에 대한 묘사의 변화가 두 작품의 연구를 통해 일본인이 갖고 있는 원폭에 대한 개념을 정리해 보고자 한다. 이 작업은 소설 『검은 비』가 고유의 서사를 구축하기 위해 사용한 장치들이 전후 일본사회의 제2차 세계대전을 매개로 하는 참혹한 서사에서 보다 명료하게 피해자상을 생산하게 한 요인 중 하나라는 사실 즉, 제2차 세계대전의 전범(戰犯)적 요소가 원폭을 계기로 피해자표상으로 변용되어가는 과정을 좀 더 명확히 할 수 있을 것으로 생각된다. 이는 동시에 제2차 세계대전의 원인제공자 중 하나인 가해자로서의 일본제국의 가해자라는 사실의 은폐에 직결되므로 그 과정을 명확히 하는 것은 특히 피해당사자인 한국인에게 필요한 작업이라 하겠다.

-
- 1) 전쟁체험을 기록한 작가와 작품으로는 우메자키 하루오(梅崎春生, 1915~1965) 『桜島』(『素直』, 1946. 09), 오오카 쇼헤이(大岡昇平, 1900~1988) 『체포할 때까지(捉まるまで)』 『포로기(俘虜記)』(1948), 『들불(野火)』(『문학계(文學界)』, 1948. 02), 다케다 다이쥬(武田泰淳, 1912~1976) 『살무사의 후예(蝮のすゑ)』(1947), 노마 히로시(野間 宏, 1915~1991) 『진공지대(真空地帯)』(1952), 훗다 요시에(堀田善衛, 1918~1998) 『광장의 고독(広場の孤独)』(1951年, 中央公論社), 『기념비(記念碑)』(中央公論社, 1955) 등이 있다.
 - 2) 고영자(1993) 「일본 전후의 반전쟁시 고찰 - 반전쟁 원폭시인 도게 산키치를 중심으로 -」(『비교문학』한국비교문학회), pp.220-225 참조.
 - 3) 시게마쓰 시즈마(重松静馬: 1910. 04. 02~1980. 10. 19) : 소설 『검은 비(黒い雨)』의 실제 모델. 작중인물명은<시즈마 시게마쓰(閑間重松)>. 제2차 세계대전 중 히로시마 훗고(北郊)의 후루이치초(古市町)에 있는 일본섬유주식회사에서 근무. (涌田佑 編著(2000) 『井伏鱒二事典』明治書院), pp.182-183
 - 4) 이부세 마사지(井伏 鱒二 1898. 02. 15~1993. 07. 10) : 소설가. 본명은 이부세 마사지(井伏 満壽二, いぶしますじ). 히로시마현(広島県) 후쿠야마(福山市)시 가모초(加茂町)에서 출생.

제1장 미디어텍스트 공간속의 원폭표상

한국전쟁을 계기로 경제적 특수를 누리게 된 일본은 1956년에 발간한 『경제백서(經濟白書)』에서 <이젠 전후가 아니다(もはや戦後ではない)>⁵⁾라는 정부의 선언과 더불어 1958년에는 제3회 도쿄(東京) 아시안게임(Asian Games)⁶⁾을 개최하게 된다. 언론들은 다투어 각종 국제스포츠대회를 통해 일본의 우월성을 과시하고 전범국의 이미지를 탈피하여 원폭피해와 평화의 표상으로서의 일본을 대외적으로 알리기 위한 기사를 썼다. 아시안 게임의 성공적인 개최로 1964년 도쿄올림픽(1964. 10. 10~10. 24)을 유치하게 되고, 1994년에 개최한 제12회 아시안게임을 최초로 한 국가의 수도가 아닌 지방도시 히로시마에서 유치함으로써 원폭이 <가해자이미지>에서 <피해자이미지>로 변화되어 정착되게 된 것을 알 수 있다. 한편 1964년 개최된 일본 도쿄올림픽에서 일본올림픽위원회(JOC)는 올림픽 최종성화 봉성 주자를 원폭이 투하된 날, 히로시마에서 태어난 와세다(早稲田)대학생 사카이 요시노리(坂井義則)군으로 내정했는데, 내정한 이유와 관련된 기사를 보면 다음과 같다.

사카이군은 와세다 대학 육상부 4백미터주자로, 1945년 8월 6일 히로시마가 한 순간에 재로 변한 원폭투하 일, 히로시마현 미요시(三次)시에서 태어난 이른바 “원폭아이”다. 육상연맹수뇌는 원폭이 일본인이 “평화를 기원”하기 시작한 날이며, 이러한 점에서 사카이군을 최종주자로 선택한 것은 세계에서 유일한 원폭피해국인 일본에서 열리는 올림픽에 상징적이며 어울린다고 생각한 것이다.⁷⁾

5) 浦田佑 상계서 p.164

6) 도쿄아시아경기대회 (The 3rd Asian Games: 1958. 5. 24-6. 1) : AGF(Asian Games Federation:아시아경기연맹) 주관으로 아시아 20개국 이 참가. 경기종목은 13개, 참가선수 1,692명. 대회 사상 처음으로 ‘영원한 전진(Ever Onward)’이라는 공식 슬로건을 제정·사용하였고, 아시아 대륙의 종합 국제대회로의 면모를 갖추었다. 대회결과 일본은 금메달 67개로 특히 육상에서 12개, 수영에서 26개의 금메달을 획득하여 우승했다.

7) 同君は早大競走部の四百メートル走者で、昭和二十年八月六日、広島を一瞬の間に灰とした原爆投下の日に同じ広島県下の三次市で生れた、いわば“原爆っ子”である。陸連首脳としては、原爆は日本人の“平和祈願”への出発の日であり、こうした点から坂井君を選ぶことは世界でただ一つ原爆被災国の日本で開かれるオリンピックに象徴的であり、ふさわしいと考えるに至ったもの。(「聖火リレー 最終走者、一九

위의 기사에 보이듯이 세계유일의 원폭피해국임을 강조하면서 동시에 <히로시마 = 평화> 라는 등식으로 쓰고 있다. 처음에는 성화 최종봉성주자를 전국고교육상대회 출전 선수들 중에서 선발할 예정이었으나 책임자를 결정하지 못하고 원폭과 관련된 사람으로 선발했다는 사실을 확인할 수 있다. 세계의 이목이 집중되는 일본에서 처음 개최되는 올림픽을 이용해 일본을 최대한 원폭으로 인한 피해국으로 부상시키고 평화를 갈구(渴求)하는 국가임을 강조하기 위해서라고 할 수 있다.

같은 해 9월 20일자 아사히신문의 「더 이상 히로시마(와 같은 피해를 입는 나라)가 없기를(ノーモア・ヒロシマズ)」⁸⁾로 시작하는 기사는 「<평화의 종> 울려 퍼지다(「平和の鐘」鳴り響く - 広島で落成式)」라는 표제와 더불어 히로시마평화공원 내에 “평화의 종” 낙성식이 거행된다는 기사⁹⁾가 10월 10일 개최되는 올림픽 기사와 더불어 일면을 장식하고 있다. 이러한 기사들은 일본을 <원폭 = 피해 = 평화>라는 등식으로 그리고 있을 뿐 만 아니라 이를 지켜보는 <세계 = 가해자>라는 등식으로 설명하기를 주저하지 않은 것으로 간주된다. 그리고 평화를 강조함으로써 올림픽을 통해 전 세계에 일본은 이전부터 평화를 추구해 온 국가임을 최대한 인식시키고자 하고 있다.

올림픽 최종성화봉성주자 사카이군과 관련된 기사는 올림픽개최일인 10월 10일 석간 11면으로 이어 진다. <성화점화와 메아리치는 찬가(聖火ともりこだます賛歌)>라는 기사표제와 <경기장 가득 터져라하고 박수(満場割れよと拍手)>라는 부제 아래 성화를 점화하고 있는 모습을 담은 <사카이군이 점화한 순간, 타오르는 성화(坂井君が点火の一瞬、燃えあがる聖火)>라는 가로12 세로 11센티미터(centimeter)크기의 사진을 실고 있다. <진홍의 불꽃 기세 좋게(深紅の炎勢いよく)>라는 표제아래 다음과 같이 쓰고 있다.

歳の坂井君 原爆の日、広島県生れの早稲田大生」朝日新聞 1964. 8. 10. 一面).

- 8) ノーモア・ヒロシマズ(No more Hiroshima): ‘이제는 세계의 그 누구도 원폭투하로 인해 입은 히로시마와 같은 피해를 절대로 겪지 않게 되기를 바란다’ 는 슬로건.
- 9) 「「平和の鐘」鳴り響く - 広島で落成式」“ノーモア・ヒロシマズ”の被爆者の悲願を澄んだ鐘の音で世界に伝えようと、広島市平和公園の原爆供養塔東側に建設していた「平和の鐘」(高さ一メートル)の落成式が二十日朝十時、浜井広島市長、森戸前広大学長ら二百人が出席しておこなわれ、鐘のつきぞえめをした。(「朝日新聞」1964. 9. 15면 기사).

대형전광판시계가 3시 8분을 가리켰을 때, 트랙의 센다가야(千駄ヶ谷)게이트에서 하얀 연기가 피어오르고, 그 속에서 햇불을 든 사카이군이 달려왔다. 왁! 하고 스탠드(stand)가 술렁거린다. 성화대로 향해 사카이군은 왼쪽에 서고, 성화를 높이 들었다. 한 순간 흥분에 빈틈이 생긴 듯이 장내가 조용해졌다. 점화 - 성화대로부터 떨어지듯이 기세 좋게, 그리스의 불이 지금 도쿄에서 타오른다. 그 불꽃은 진홍색이었다. 장내의 흥분은 클라이맥스(climax)에 도달했다. 외국기자석에서 어느 기자가 「원폭 아이(atomic boy)」가 지금 평화의 불을 점화했다」고 타이프를 쳤다. 많은 관중들의 시선도 원폭아이가 아니라, 평화의 새로운 시대의 문을 두드리는 원자의 불이기를 바라는 바람이 담긴 엄숙한 순간이었다.¹⁰⁾

위의 기사에서 특히 주목해야 할 부분은 마지막 단락이라고 할 수 있다. 여기서 <어느 외국기자가 원폭아이가 지금 평화의 불을 점화했다고 타이프를 두드렸다>는 문장은 원폭을 평화를 위한 표상으로 쓰면서 그것을 단순히 <기자>나 <일본기자>라고 표현하지 않고 기자 앞에 <외국>이라는 수식어를 넣어 <외국기자>라고 명기함으로써 타자라는 매개체를 이용해 일본을 평화의 전달자(messenger)로 부각시키고 있다. 이는 일본기자들이 자신들의 직접적인 서술로 피해자로 표상하지 않고 <외국기자>라는 장치를 이용해 일본의 주장을 대변시켜 간접적인 선전효과를 유도한 것이라고 볼 수 있다. 이러한 서술, 즉 대상에 <외국>이라는 범위를 특정할 수 있는 장치를 붙임으로서 제3국이 일본을 <평화>라는 표상으로 바라본다고 암시하고 있는 부분이라고 할 수 있다. 일본 국내의 관점이 아닌, 제3국의 타자라는 장치를 이용해서 원폭투하로 인한 일본과 같은 피해가 더 이상 없게 하지는 <평화>의 메시지를 부각시킨

10) 電光板の大時計が三時八分をさしたとき、トラックの千駄ヶ谷ゲートから白いけむりが流れ、その中からトーチをかざした坂井君が走ってきた。ワットとスタンドがどよめく。聖火台に向かって坂井君は左に立ち、トーチを高らかにささげた。一瞬、興奮にきれ目ができたように、場内がしずまる。点火 — 聖火台からこぼれ落ちるように勢いよく、ギリシャの火がいま東京で燃える。そのほのおの色は深紅だった。場内の興奮はクライマックスに達した。外人記者席で、ある記者が「アトミック・ボーイ(原爆の子)がいま平和の火をとました」とタイプをたたいた。大観衆のまなざしも原爆の子でなく、平和の、新しい時代のトビラをたたく原子の火であってくれ、との願いがこもる厳粛な瞬間だった。『朝日新聞』(1964. 10. 10 夕刊)。

부분이다. 기억을 반추하면 1940년 제12회 일본 도쿄에서 개최될 예정이던 올림픽이 1937년 7월 일본의 침략으로 인해 중국 전 국토에서 전개된 중일전쟁으로 헬싱키로 바뀐 사실과 1948년 제13회 영국런던에서 개최된 올림픽에 제2차 세계대전의 추축국(樞軸國, Axis Powers) 독일과 더불어 참가하지 못했던 전범국 일본을 망각시키는 역할을 한 문장이라고 볼 수 있다. 이와 비슷한 서술 행위는 1994년 히로시마에서 열린 제12회 아시안게임과 관련된 사실에서도 동일하게 사용되고 있다. 히로시마에서 개최된 그 대회로 특징으로 수도가 아닌 지방도시에서는 처음 개최되는 것이며, 그것도 피폭지 히로시마에서 개최되는 만큼 <평화>의 메시지가 더한층 선명하다는 문장으로 기사는 시작된다. 그리고 마지막 부분을 내전을 극복하여 20년 만에 대회에 참가한 캄보디아(Cambodia)대표 선고(選考) 마라톤때 결승테이프에 쓰여졌던 문구라고 소개하며 <A WAY TO HIROSHIMA FOR PEACE(広島への平和の道)>¹¹⁾로 마무리하고 있다. 1960년대의 가해자표상에서 조금씩 피해자로의 도정을 거친 원폭표상은 1994년 히로시마에서 개최된 아시안게임과 관련된 사실에서는 <일본 = 평화 = 히로시마> 라는 도식이 완전히 정착되어 기술되어 있음을 확인 할 수 있다. 캄보디아의 마라톤대표선수선고대회 시의 결승테이프의 문구를 인용함으로써 일본이 스스로 <전쟁을 망각하는 것>이 아니라 제3국의, 그것도 한층 더 의미가 큰 1990년의 캄보디아라는 타자를 통해 <망각된 가해자상>을 재차 확인하게 하는 부분이라고 할 수 있다.

제2장 기억(記憶)의 표상 『시게마쓰일기(重松日記)』

원폭르포르타주 『시게마쓰일기』는 히로시마에 원자폭탄이 투하된 시공간에서 피폭을 체험한 시게마쓰의 체험담을 기록한 기록물로 『시게마쓰일기』

11) 今日開幕するアジア大会には、際立った特色がある。首都以外で初めての開催、それも被爆地広島で、である。「平和」へのメッセージがひととき鮮明といえる。もう一つは、隅から隅まで市民が支える大会であることだ。(省略)カンボジアの代表選考マラソンでは、ゴールのテープにこう書かれていた。<A WAY TO HIROSHIMA FOR PEACE(広島への平和の道)>「アジア大会の発信を聴こう」『朝日新聞』(1994. 10. 02. 日曜日. 12版).

라는 작품 그 자체에 대한 평가보다는 소설 『검은 비』의 원 소재가 되었다는 점으로 더 유명하다. 원폭투하를 전후한 당시의 자신의 체험담을 담은 『시계마쓰일기』 텍스트에서는 일본의 제2차 세계대전에서의 침략적인 면을 상기할 수 있는 장면묘사가 확인 되는데 일례로 1945년 당시의 히로시마를 다음과 같이 그리고 있다.

군사 도시 히로시마로 불려 매일 병사가 줄을 지어 우지나를 향했지만 오늘은 2, 3명 무리의 병사모습조차 보이지 않는다. 오늘은 경보도 울리지 않는다. 우군의 비행기조차 보이지 않는다. 폐허가 된 들판을 사람이 우왕좌왕하고 있을 뿐이다.¹²⁾

히로시마는 당시 아시아 침략전선의 기지였고, 우지나(宇品)항을 통해 군인들이 대륙으로 진출하던 곳이었다. 군항(軍港)이었던 우지나항은 현재의 히로시마 항을 가리키며 청일전쟁기간인 1894년에서 1895년 메이지(明治)천황은 대본영을 히로시마¹³⁾로 옮겼다. 1910년대의 일본초등학교 수신서에서도 침략국 일본의 본거지가 있던 곳으로 명기되어 있다. 20세기전후 히로시마 항은 근대일본이 대륙으로 수십만 명의 병사를 보낸 현관¹⁴⁾이었다. 또한 제2차 세계대전 당시 아시아침략전선기지로 군의 요충지였기 때문에 히로시마에 원폭을 투하하게 된 것이다. 우지나항이라는 공간은 일본의 제국주의적인 침략의 통로 역할을 한 장소라고 할 수 있다. 한편 동일한 히로시마피폭 군의 예비원 「이와다케 히로시(岩竹博)기록」 부분을 비교해 보면 『시계마쓰일기』에는 기록되어 있으나 『검은 비』에서는 인용하지 않은 부분이 상당부분 존재한다. 이와다케가 자신이 소속된 부대의 주된 목적을 언급한 부분도 인용되지

12) 軍都広島と呼ばれ、日夜兵隊が列をなして宇品に向っていたが、今日は二三人連れの兵隊の姿すら見えない。今日は警報も出ない。友軍の飛行機すら見えない。瓦礫の原を人が右往左往しているだけだ。(重松静馬 著 相馬正一 編集(2001) 『重松日記』 筑摩書房), p.135

13) 明治二七八年のいくさの時、天皇陛下は大本營を廣島へ御進めになりました。その時の御座所はそまつなせいやうづくりの一室であつたので、おそばの人人が度々たてましの事を申し上げました。

(김순전 외 공편(2005) 『日本尋常小學修身書(第 I ~ III期)』 제이앤씨), p.353 참조.

14) 香川檀(2009) 「越境する記憶 - 現代アートの日独比較から -」 고려대학교 일본연구소센터 국제학술 심포지엄 『Global 時代 外国研究와 自国研究』(고려대학 일본연구소센터), p.38

않고 있다.

우리 군의예비원 히로시마반의 보병부대의 주된 목적은 본토결전 때 적의 전차 부대에 폭탄을 안고 뛰어드는 결사대 훈련에 있었던 듯하다. 목조모형전차를 향해 돌진하고 그물이 붙은 폭탄형 각재를 던지고는 납작 엎드리는 훈련을 몇 십회나 반복했다. 후일 교습소 소속이 되었을 때 판명된 일이지만 우리들 예비원은 해안방 비대에 배치되어 병들거나 부상당한 병사의 진료는 불필요하며 적의 전차 한 대를 섬멸하면 임무완료라는 계획이었던 듯하다.¹⁵⁾

이부세는 <이와다케 히로시의 일가>가 자신의 생각보다 더 잘 정리되어 있어서 원문을 그대로 수정·가필하지 않고 인용한 부분이 많다고 언급하고 있다. 그러나 실제로는 이부세가 가필한 부분이 많으며, 전체적인 인용에서는 위와 같이 일본군과 관련된 부분을 원본 그대로 『검은 비』에 인용하지 않고 있다. 단지 병상에서의 생활만을 인용하고 있다. 이와다케 히로시 군의예비원이 소속된 부대의 주요임무는 가미가제(神風)와 같은 <자살특병대>라고 이와다케는 명확하게 소속부대의 목적을 명기하고 있다. 연합군이 일본본토를 공격해 왔을 때를 대비한 <자살특병대>로서의 임무와 더불어 부대에서 실시하는 주된 훈련에 대해서도 기술하고 있다. 일본이 가해자로서 동아시아와 적대국에 행한 잔혹한 행위는 일본본토에서 보다는 식민지로 점령한 국가에서 주로 시행되었기 때문에 국내에서 전시생활을 보낸 일본인들은 전쟁책임을 추궁당하면 가해자로서의 일본이 아니라 원폭투하로 인한 희생국임을 강조하며, 오히려 원자폭탄을 투하한 미국에게 책임을 전가하는 것을 보게 되는데 이는 가해자에서 피해자로의 일본으로 더 쉽게 변용해 간 원인이 되었다고 볼 수 있다.

15) 我々軍医予備員広島班の歩兵部隊在營中の主なる目的は、本土決戦に於ける敵戦車部隊に対し爆弾を抱いて飛び込む決死隊の訓練にあつたらしい。木造模型戦車に向つて突進し、網のついた爆弾型の角材を投げつけて打伏す練習を幾十回となく繰り返した。後日、教習所附きになつた時に判明した事であるが、我々予備員は海岸防備隊に配置され、傷病兵の診療は不必要で、敵戦車一台を屠れば任務完了と云う計画であつたらしい。(重松静馬 상계서), p.229

제3장 망각(妄覺)의 표상 『검은 비(黒い雨)』

원폭소설 『검은 비』로 이부세는 1966년 제19회 노마(野間)문학상, 12월에는 문예훈장을 받았으며, 소설이 간행된 당시 도쿄올림픽의 성공적인 개최, 베트남전쟁(Vietnam War : 1960 ~ 1975) 등 시대적상황과 접목되어 베스트셀러가 된다. 1973년부터는 일본 국내 5개 중고등학교 국정교과서에 채택되고 있다. 또한 28개 언어로 번역되어 국외에 소개되었으며 지금은 일본원폭문학을 대표하는 작품으로 자리매김 되어있다. 이부세는 『검은 비』를 창작하는 도정에서 『제비붓꽃(かきつばた)』(中央公論, 1951)이라는 원폭을 소재로 한 단편소설을 발표했다. 이 때까지만 해도 원폭으로 인한 피해자표상은 크게 강조되지 않고 있었다. 이부세는 소설연재 도중 「조카의 결혼」에서 원폭을 연상시키는 「검은비」로 제목을 바꾸었다. 이부세는 이 소설의 주인공인 시게마쓰의 조카 야스코의 「병상일기(病床日記)」가 2권 있다는 사실을 시게마쓰로부터 듣고 그 자료를 연재도중에 시게마쓰로부터 받기로 되어있지만 그녀가 원폭병으로 죽은 후 유족들이 고인의 유품을 볼 때마다 야스코를 생각하게 되는 것을 슬퍼한 나머지 그 자료를 소각¹⁶⁾했다고 듣고 자료부족으로 계속 연재할 수 없을 것으로 판단하여 소설제목도 바꾸었다고 하고 있다. 원폭문학의 정전(canon)이라는 수식구가 따라다니는 『검은 비』의 제목이 잡지 연재 도중에 「조카의 결혼」에서 『검은 비』로 바뀐 시점이 제2차 세계대전 종전(終戰) 20주년을 맞이하는 1965년 8월의 시점과 일치한다는 사실은 『시게마쓰일기』가 『검은 비』로 재창작되면서 원폭표상이 가해국에서 피해국으로 변용된 사실을 뒷받침하는 근거가 되기도 한다. 종전 20주년을 전후해 일본국내의 고도경제성장으로 인해 패전국으로 잃었던 자신감을 다시 회복되는 시기이다. 회복된 자신감의 표출로 가해국으로서 일본의 모습은 마스크를 비롯한 언론에서 어느새 자취를 감추기 시작하는 시기와 일치하기 때문이다.

16) 重松さんとは、(中略)一緒に釣り宿に宿まったとき、原爆をうけた姪の話がでて、自分の記録もあるから書いてくれというので、『姪の結婚』を書きはじめてみた。そのときは、姪の「病床日記」が二冊あると言っていたが、それはなかった(萩原得司(1994) 『井伏鱒二 聞き書き』青弓社), p.133

가해자의 표상이 망각의 표상으로 나타난 『검은 비』에서 텍스트 속의 원폭 표상이 비전투원인 피해자로서의 국민 - 어린아이와 여성 - 으로 부각시킨 장치들을 통하여 한층 더 극명하게 피해자임을 강조하고 있음을 알 수 있다. 텍스트에서 어린아이를 피해자로 그린 장면은 다음과 같이 묘사되어있다.

제방위의 길 가운데에 여자 하나가 옆으로 누워 죽어 있는 것이 멀리에서 보였다. 앞에 서서 걷고 있던 야스쿠가 “아저씨, 아저씨” 하며 뒤로 와서 울기 시작했다. 가까이 가서 보니 3살 정도의 여자아이가 시체의 원피스 앞섶을 헤치고 젖을 만지작거리고 있다. 우리가 가까이 가서 양쪽 젖을 꼭 움켜쥐고, 우리를 보며 불안한 표정을 지었다. (중략) 거기에도 네다섯 명의 여자시체가 풀숲에 뒹굴고 그 시체 틈에 끼워진 형태로 5, 6세쯤 되는 사내아이가 웅크리고 있었다.¹⁷⁾

아직 자신이 처해진 상황이나 자신의 눈앞에 어떠한 일이 벌어졌는지조차 인지하지 못하는 3살짜리 여자아이가 죽은 엄마의 원피스를 열어 가슴을 붙들고 있는 장면을 묘사하여 가련한 어린아이의 가족을 앓아가는 원자폭탄의 잔혹성을 부각시켜 그 피해자인 민간인희생자를 그리고 있다. 그 광경을 목격한 주변인들뿐만이 아니라 독자들에게도 그 비참함과 동시에 어린아이를 피해자로 세움으로써 더욱 더 피해자의식과 안타까움을 자아내게 한다. 이 작품에서 히로시마의 기억은 주로 민간인의 피해를 중심으로 구성되면서도 궁극적으로는 피해를 통해 전쟁을 어떻게 인식하는가라는 문제로 귀결되고 있다. 히로시마는 <원폭에 의한 피해> 와 <민간인의 피해> 를 중첩시켜, 결국 이러한 <특수한 피해>를 바탕으로 새로운 자기인식, 모든 형태의 전쟁을 반대하는 것으로 결론을 유도하여 전후 일본의 중요한 자기 인식이 <평화주의자>라는 것으로 귀결시킨다.¹⁸⁾ <피해자>의식이 만들어진 전후 일본사회에 대해 다나카

17) 堤防の上の道のまんなかに、一人の女が横に伸びて死んでいるのが遠くから見えた。先に立って歩いていた矢須子が「おじさん、おじさん」と後戻りして泣きだした。近づいて見ると、三歳ぐらいの女の児が、死体のワンピースの胸を開いて乳房をいじっている。僕らが近寄るので、両の乳をしっかりと握り、僕らの方を見て不安そうな顔つきをした。(中略)。そこにも四、五人の女の死体が草むらの一つところに転がって、その死体にはさまれた格好で五、六歳の男の児がうずくまっていた。(井伏鱒二 著(1994) 『黒い雨』(新潮文庫), pp.112-113)

18) 김상준(2005) 「기억의 정치학 : 야스쿠니 vs. 히로시마」 (한국정치학회보 제39집5호),

히로시(田中宏 : 1937. 2. 9~)는 전후 일본의 시기부터 확대된 <피해자>의식이 여러 논자들에게 의해 기회가 있을 때마다 지적해 왔다고 언급하고 있다. 그러한 맥락에서 이부세의 『검은 비』가 일본인이 피해자임을 부각시키기 위해 위의 인용문에서와 같이 텍스트에서 원폭투하로 인한 비전투원의 피해에 초점을 맞추고 있다는 사실을 알 수 있다.

작품 중 주인공이 소개하는 도중에 목격한 시체의 묘사를 통해 비참하게 희생된 피폭자들의 모습을 다음과 같이 그리고 있다.

다리 기슭에 사람이 위를 보고 사지를 편 채 넘어져 있었다. 얼굴이 검게 변색되었음에도 불구하고 가끔 불을 부풀려서 숨을 크게 쉬고 있는 듯이 보인다. 눈꺼풀도 움직이는 것 같았다. 나는 자신의 눈을 의심했다. 짐을 난간에 풀어 놓고 흠칫흠칫하며 시체에 가까이 가 보니 입과 코에서 구더기가 주르르 떨어진다. 눈에도 잔뜩 붙어 있다. 구더기가 움직이며 돌아다니기 때문에 눈꺼풀이 움직이는 것처럼 보이는 것이다. 나는 어떤 시인의 시구가 떠올랐다.

- 오오 구더기여, 내 친구여 -

또 하나, 이런 것을 떠올렸다

- 하늘이여, 터져라. 땅은 불타라. 사람은 죽어라 죽어라, 무엇이 감격인가, 무엇이 장관인가 -

꽤 씩씩한 말이다. 구더기가 우리의 친구라니 마치 인간 파리가 말하는 것같이 말하고 있다. 말도 안되는 소리를 하는 데도 분수가 있다. 8월 6일 오전 8시 15분, 사실로 하늘이 터지고 땅이 타고 사람이 죽었다.

“용서할 수 없다. 무엇이 장관이냐 무엇이 우리의 친구냐.”

나는 분명히 소리 내어 말했다.¹⁹⁾

p.229

19) 橋のたもとのところ、人が仰向けに倒れて大手をひろげていた。顔が黒く変色しているにもかかわらず、時おり頬を膨らませて大きく息をしているように見える。目蓋も動かしているようだ。僕は自分の目を疑った。荷物を欄干に載せかけて、怖る怖るその屍に近づいて見ると、口や鼻から蛆虫がぼろぼろ転がり落ちている。眼球にもどっさりたかっている。蛆が動きまわるので、目蓋が動いているように見えるのだ。

僕は或る詩人の詩の句を思い出した。少年のころ雑誌が何かで見た詩ではないかと思う。

— おお蛆虫よ、我が友よ……

もう一つ、こんなのを思い出した。

위의 인용문에서는 끔찍하게 죽은 시체 형상을 보들레르(Charles-Pierre Baudelaire : 1821~1867)의 『악의 꽃(Les Fleurs du mal)』(1857)에서 죽음의 공포를 가장 극적으로 그려 놓은 시로 평가되는 「시체(Une charogne)」에 나오는 시구(20)를 인용해 가면서 묘사·비판하고 있다.

원폭을 투하하기로 결정한 미국은 평균 7초에 한 명꼴로 자국의 청년이 전선에서 희생된다는 미육군성의 보고서가 결정적 요인이 되어 원폭투하를

一天よ、裂けよ。地は燃えよ。人は、死ね死ね。何という感激だ、何という壯観だ……

いまましい言葉である。蛆虫が我が友だなんて、まるで人蠅が云うようなことを云っている。馬鹿を云うにも程がある。八月六日の午前八時十五分、事実において、天は裂け、地は燃え、人は死んだ。

「許せないぞ。何か壯観だ、何か我が友だ」

20) - 「시체(Une charogne)」 Charles Baudelaire -

(... 생략 ...)

Les mouches bourdonnaient sur ce ventre putride, / D'où sortaient de noirs bataillons
/ De larves, qui coulaient comme un épais liquide / Le long de ces vivants haillons.
Tout cela descendait, montait comme une vague, / Ou s'élançait en pétillant ;
/ On eût dit que le corps, enflé d'un souffle vague, / Vivait en se multipliant.

(... 생략 ...)

(샤를르 보들레르(Charles Baudelaire) 지음 안재민 역편 한권의 시 『악의 꽃(Les Fleurs Du Mal)』 태학당출판사. 1993. 11. 15, 4쇄 발행), pp.57-59

- 「시체」 -

(... 생략 ...)

그 썩은 배때기 위로 파리떼는 뽁뽁거리고, / 거기서 검은 구더기떼 기어나와,
/ 걸쭉한 액체처럼 흘러나오고 있었다. / 그 살아 있는 누더기를 타고

그 모든 것이 물결처럼 밀려왔다 밀려나갔다 하고, / 그 모든 것이 반짝반짝 솟아나오고
있었다, / 시체는 희미한 바람에 부풀어 올라, / 아직도 살아서 불어나는 듯했다.

(... 생략 ...)

(보들레르(Charles Baudelaire) 지음 윤영애 옮김 『악의 꽃(Les Fleurs Du Mal)』 문학과 지성사. 2003. 10. 16), pp.85-87

감행할 수밖에 없었다는 사실은 망각되고 일본은 일본의 입장에서 기억들을 변용시키고 한 단계 더 진척시켜 점차 망각하게 하는 장치로 원폭표상을 사용하였다고 할 수 있다. 보들레르의 시구를 인용한 부분을 부정하면서 정의의 전쟁보다 부정의의 평화가 좋다는 말로 전쟁을 싫다고 묘사한 장면은 전쟁의 추축국이 일본이라는 사실을 찾아볼 수 없는 기억이 망각화 된 부분이라고 할 수 있다. 단지 피해자로서의 일본, 비참한 피해자의 모습을 형상화하면서 히로시마와 같은 인류최초의 사태가 다시는 생기지 않게 하도록 <노 모어 히로시마(No more Hiroshima)> 라는 구호와 더불어 평화를 상징하는 도시로, 더 나아가 일본으로, 기억의 변용으로 이어지는 것이라고 할 수 있다.

전쟁은 싫다. 승패는 어느 쪽이든 관계없다. 빨리 끝나기만 하면 돼. 정의의 전쟁보다도 부정의 평화쪽이 좋다.²¹⁾

비참한 시체의 모습을 묘사한 장면을 보고 난 후, 주인공 시게마쓰의 독백을 통해 전쟁을 부정함과 동시에 평화를 더 강조하기 위한 장치로 단순한 평화가 아니라 부정의 평화가 더 좋다는 말을 토로하게 하고 있다. 위의 인용문은 작품 『검은 비』의 문학 비(碑)에도 새겨질 만큼 유명한 문구로, 평화를 갈구하는 마음을 절실하게 드러내고 있다고 할 수 있다. 마치 이전의 구더기에 대한 보들레르의 시와 같은 리듬으로 평화의 시를 인용한 텍스트라고 할 수 있다. 이는 앞에 전개된 처참한 시체의 형상에 바로 연결해서 표현됨으로서 전쟁이 일어난 근본적인 원인과 상황을 생각해 볼 여지를 주지 않고, 일본의 피해자상만을 강조하고 있다고 할 수 있다. 『검은 비』 텍스트에서는 야스코의 원폭증에 의한 후유증 발병과 그로인해 그녀의 의지와는 상관없이 혼담이 성립되지 않는다는 설정으로 가해국으로서의 일본은 은폐되고 피해자로서의 평범한 민간인 여성만 부각되어 있다고 할 수 있다. 또한 텍스트 속의 어린이표상은 부모의 죽음 앞에 무방비한 모습으로 그려지고, 위급한 상황에서 혈연인 아버지로부터 외면당하는 소년의 모습으로 묘사되어, 피해자로서의 표상이 더 한층 확연하게 강조되고 있다는 것을 알 수 있다. 이와 더불어 『검은 비』에 그려진

21) 戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。

いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい。(井伏鱒二 상계서), p.170

원폭표상이 <히로시마 = 평화>의 등식으로 이어주는 계기를 마련해 주는 작용을 하고 있다고 하겠다.

결론

이상으로 본 연구에서는 『시계마쓰일기』에서 『검은 비』로 재창작되는 도정을 비교분석한 결과 1945년 8월 6일 피폭당일로부터 천황의 종전조서낭독 방송이 있는 8월 15일 정오까지 9일간의 기록물인 『시계마쓰일기』가 이 자료를 저본으로 쓰인 『검은 비』에서는 세월의 흐름에 따라 원폭투하라는 희대의 사건과 접목되어 일본이 제2차 세계대전을 일으킨 추축국에 속하는 가해자에서 피해자로 표상이 전환되었다는 사실을 확인할 수 있었다. 그 이유는 다양하게 분석할 수 있으나, 1960년대 일본의 고도경제성장, 도쿄올림픽의 성공적인 개최를 계기로, 일본인이 자신감을 회복하는 시기였던 것이 큰 계기가 되었을 것을 들 수 있다. 이와 더불어 긍정적인 일본인 론(論)이 하나의 정점을 형성한 시기라고 할 수 있다. 또한 1964년 도쿄올림픽특수에 따른 경제적 부흥을 주요한 요인으로 꼽을 수 있다. 메이지시대 청일전쟁²²⁾과 러일전쟁²³⁾에서 승리한 일본이 자신감을 얻어 나타난 <탈아입구(脫亞入歐)>라는, 아시아에서 벗어나 서양의 문명국과 진퇴를 같이하는, 즉 유럽과 동등한 위치로 자리매김 하려던 일본인들의 사상이 제2차 세계대전의 패배로 잃었던 자신감을 다시 회복한 것으로 나타난다. 그와 동시에 이제는 유럽이 아니라 히로시마에 원폭을 투하해 승전국이 된 미국과 어깨를 견줄 수 있는 위치에 서게 된 것도 큰 전환점이 되었음을 알 수 있다. 이는 경제적으로 부흥함에 따라 자신감을 나타내는 <탈아입미(脫亞入美)>라는, 아시아를 벗어나 일본근대초기의 유럽과의 동화시도가 이제는 패전 후 자국을 점령한 미국과 대등한 위치에 이르면서 일본과 동화한다는 현상으로 표출된 것으로 분석할 수 있다. 미국과 동등한 입장에 서게 된 일본인들의 자긍심 고양현상과 원수폭금지운동, 1960년대

22) 청일전쟁(淸日戰爭, First Sino-Japanese War) : 1894. 06~1895. 04.

23) 러일전쟁(Russo-Japanese Wars) : 1904. 2. 8~1905. 09. 05.

중반에 발발한 베트남전쟁에 대한 반전운동, 일본노동운동사상 최초의 <반전 파업>사태인 10·21반전 파업²⁴⁾ 등, 시대적 콘텍스트와 접목해서 일본이 전쟁에 참가하게 된 것은 일부 군부 지도자가 국민을 속인 것이라며 무모한 지도자에게만 전쟁의 모든 책임을 미루고 총동원체제 아래 수행된 전쟁에서 국민 한 사람 한 사람의 책임은 면죄해 주는 담론의 포석이 형성된 것으로 파악할 수 있다. 이러한 구도 속에서 전쟁의 기억을 상기시키고자 하는 일본 국내의 논의들은 가해자가 아닌 피해자로서의 전쟁 체험 측면을 강조하는 방향으로 나아가게 된다. 피해자로서의 측면만을 강조하는 이러한 담론들은 기본과 감정레벨(level)에서 반미내셔널리즘 및 반공·반소(反蘇)내셔널리즘과 결합되어 사실상 국민 개개인의 수준에서 벌어진 가해행위를 논의하지 못하도록 막았으며, 이에 따라 이들 개인차원의 가해행위를 둘러싼 책임소재도 애매해질 수밖에 없었다. 『검은 비』 텍스트도 피폭희생자를 사회적약자인 <여성>과 <어린이>, <민간인>에 초점을 맞추므로써 원폭표상이 더 한층 가해자가 아닌 피해자상으로 변하게 하는데 일조했다고 파악할 수 있다.

<參考文獻>

- 고영자(1993) 「일본 전후의 반전쟁시 고찰 - 반전쟁 원폭시인 도게 산키치를 중심으로 -」 『비교문학』 18집, 한국비교문학회, pp.220-225 참조.
- 김상준(2005) 「기억의 정치학 : 야스쿠니 vs 히로시마」 『한국정치학회보』(제39집5호), pp.225-229
- 김순전 외 공편(2005) 『日本尋常小學修身書(第I~III期)』 제이앤씨, p.353 참조.
- 샤를르 보를레르(Charles Baudelaire) 지음, 윤영애 옮김 『악의 꽃(Les Fleurs Du Mal)』 문학과 지성사. 2003. 10. 16), pp.85-87
- _____ 안재민 역편(1993) 한편의 시 『악의 꽃(Les Fleurs Du Mal)』 태학당출판사, pp.57-59

24) 10·21반전 파업 : 총평·중립 노선에서 48개 단위노동조합 211만 명이 파업에 참가하고 91개 단위노동조합 308만 명이 직장집회에 참가한다. 참가 520만 명이라는 통일행동으로 ‘평화를 위협하는 중대한 사태를 맞이하여, 일본의 노동자는 생산현장에서 단호하게 투쟁에 나선다’는 것을 내외에 선언한다.(『10·21 통일파업의 성과와 결합』). 정부는 파업 후 약 19만 명에 대해 행정처분이라는 대규모적인 노조탄압을 행한다.

- 이에나가 사부로(家永三朗) 著, 현명철 옮김(2005) 『전쟁책임』논형,
후지와라 기이치 지음, 이숙종 옮김(2003) 『히로시마·홀로코스트와 현재 전쟁을 기억
한다』 일조각
- 후지와라 아키라 외 지음, 노길호 옮김(1991) 『우리가 알아야할 일본의 현대역사』명진
출판, pp.187-233
- 『朝日新聞』(1964. 01月~1966. 12月, 1994. 10月. 02日)
- 井伏鱒二 著(1994) 『黒い雨』新潮文庫、51刷, pp.112-113, 170
- 江藤淳(1966.08.25) 『文芸時評』(『朝日新聞』夕刊)
- 大江健三郎(1980) 『ヒロシマの光—大江健三郎同時代論集 2』岩波書店
- 香川檀 『越境する記憶 — 現代アートの日独比較から —』고려대학교 일본연구센터
국제학술 심포지엄 『Global 時代 外国研究와 自国研究』(고려대학 일본연
구센터, 2009), p.38
- 加藤典洋(1996) 『戦後を越える思考』(加藤典洋の発言2(全3卷)、海鳥社, p.223
_____(1997) 『敗戦後論』講談社, p.113
- 小沼丹 外(1990) 『井伏鱒二』(群像 日本の作家 16、小學館), pp.172-183
- 金子博 (1985) 『黒い雨』(井伏鱒二) 『国文学解釈と鑑想』—特集原爆文学, pp.81-85
- 静馬重松 著 相馬正一 編集(2001) 『重松日記』筑摩書房, pp.135-229
- 萩原得司(1994) 『井伏鱒二 聞き書き』青弓社, p.133
- 涌田佑(2000) 編著 『井伏鱒二事典』明治書院, pp.164, 182-183

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 01월 08일

게재결정: 01월 29일

<要旨>

1960年代の原爆表象

— 井伏鱒二『黒い雨』を中心に —

本稿は井伏鱒二の作品『黒い雨』(新潮、1966)をもとに、1960年代の日本の原爆表象がどのように成り立っていったのかを考察したものである。

『重松日記』から『黒い雨』に新たに創作される課程を両作品において比較分析した。その結果、原爆が投下されるその当日から九日間を記録した日記である『重松日記』が、1960年代に入って書かれた『黒い雨』で、日本が東京オリンピックの成功的な開催がもたらした経済の特需、またベトナム戦争の反戦運動等、時代のコンテキストとの結び付きで原爆の表象が被害者に変ったことが分かった。1960年代は、日本がドイツと共に第二次世界大戦に枢軸国として参加したことを、一部の軍部の指導者が国民を騙して無謀な戦争に駆り出した為であるという認識が広がっていた。このような構図の中で、個々の日本国民は加害責任を巡っての戦争の記憶を想起しようという日本国内の議論を、被害者としての戦争体験の側面を強いる方向へと進んでいってしまったのである。そして、『黒い雨』でも被爆犠牲者を非戦闘員である女性や子供、または庶民に焦点をあてている。そのことにより一層原爆の表象を加害者ではなく、被害者として強調したのである。そして、今の日本人の認識を被害者としての原爆表象を創り出すのに一役を労したことが分かった。

일본근대문학연구*

— 한국적 한의 시각에서 —

한 기 련**

hanaro@gwnu.ac.kr

< 目 次 >

>

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. 서론 | 4. 근대일본문학속에 나타난
일본서민과 한 |
| 2. 한국적 한과 일본적인 한 | 5. 근대일본문학속에 나타난
일본지식인과 한 |
| 3. 근대일본문학속에 나타난
일본여성과 한 | 6. 결론 |

Key Words : 한('HAN', it is mixed feeling of sorrow and regret unique Korean),
근대일본 여성(Modern Japanese Women), 신평민(new commoner),
지식인(an intellectual), 혁명(revolution)

1. 서론

‘한’의 시각에서 일본근대문학을 살펴보는 것은, 독자론적 연구방법에 따른 것이다. 독자중심의 연구는, 작가가 작품에서 의도하지 않은 새로운 의미와 의의를 작품 속에서 발견하는 데 있다. 본 연구는, 근대문학 속에 나타난 한의 이미지를 통해서 근대 일본의 새로운 모습을 조명하고자 한다. 다시 말해서, 근대일본의 문학작품에 나타난 일본인의 삶과 슬픔에 대해 ‘한’이라는 새로운

* 이 논문은 2008년도 강릉원주대학교 해외장기파견연구 지원에 의하여 수행되었음.

** 강릉원주대학교 여성인력개발학과 교수 근대문학

시각에서 살펴보고, 이를 통해 근대일본의 모습에 대해 새로이 고찰하고자 하는 것이다.

이러한 연구는, 일본의 근대라는 시대구분의 문제와 함께, 일본근대문학 작품의 양도 방대하기에 쉽지 않은 작업이라 생각된다. 이와 같은 문제의 해결을 위해, 본 연구에서는 일본 근대문학의 범위를, 메이지 [明治]시대와 다이쇼 [大正]시대에 발표된 모든 작품을 포함시키고자 한다. '메이지'와 '다이쇼'는 일왕의 재위기간을 기준으로 나눈 시대구분으로, 문학사적 시대 구분과는 약간의 괴리가 존재하는 것도 사실이다). 하지만, 메이지 원년부터 다이쇼 15년까지는 58년이라는 짧지 않은 세월로, '문명개화'를 모토로 한 메이지 유신의 근대적 사고와 생활방식이, 일본인의 삶속에서 어느 정도 뿌리를 내릴 수 있는 충분한 시간이기에 이를 무시해도 문제가 없다고 판단되기 때문이다.

이 시기에 발표된 모든 소설과 시, 단가 등의 문학작품을 연구대상에 포함시켜야 하지만, 소설의 경우에는 그 양이 매우 방대하기에 일본 학등사(學燈社)에서 발행한 국문학(国文学) 일본의 소설 552) 중에서, 메이지, 다이쇼 시대에 발표된 작품을 우선적으로 분석한 뒤에, 한의 이미지를 찾아 볼 수 있는 작품을 추가로 분석한다.

그리고 모리 오가이 [森鷗外]의 『다카세부네 [高瀬舟]』와 아쿠타가와 류노스케 [芥川竜之介]의 『라쇼문 [羅生門]』 등 한의 이미지를 찾아 볼 수 있는 작품이라 하더라도, 근대일본사회와 일본인의 생활을 엿볼 수 있는 작품이 아닌 경우에는 다루지 않는다.

1) 일본 근대문학은, 연호에 따라 메이지 문학, 다이쇼문학, 쇼와문학 등의 세 시대로 구분하거나, 더 자세하게 메이지 유신 이후 20년 단위로 제1기(1868-1885), 제2기(1886-1905), 제3기(1906-1926), 제4기(1920년대 중반-1945), 제5기(패전 이후)의 다섯 시기로 구분하기도 한다.

2) 国文学(1985) 『日本の小説555』9月臨時増刊号 學燈社

2. 한국적 한(恨)과 일본적인 한 [恨み]³⁾

우리는 흔히 생활 속에서 ‘한(恨)’이라는 말을 자주 사용하기도 하고 듣기도 한다. 여러 계층의 사람들이 다양한 경우에 사용하는 용어인 만큼 사용하는 사람에 따라서 또는 듣는 사람에 따라서 그 의미가 폭넓게 사용된다는 점을 염두에 두어야 할 것이다. 따라서 ‘한(恨)’의 시각에서 일본의 근대문학을 재조명하기 위해서는 먼저 기준이 되는 ‘한(恨)’의 개념 정리를 명확히 하지 않으면 안될 것이다.

우리나라 사람들이 흔히 사용하고 있는 ‘한(恨)’의 개념과 완전히 일치하는 개념은 일본어에는 없다고 보아도 무리가 없다. 본 연구를 진행하기 위해서 먼저 한국적 한과 일본적 한에 대해 알아보고, 두 가지를 비교·분석한다.

‘한(恨)’을 국어사전에서 찾아보면, ①원한 ②한탄으로 매우 간단하게 나와 있다. 원한은 “원망스럽고 한되는 생각”을, 한탄은 “원통할 일이나 한스러운 일이 있을 때 한숨짓는 탄식”을 의미한다.

일본적인 한 [恨み]은 고지엔 [広辞苑]에, 아래와 같이 주로 “남을 원망하고 미워하는 것” 그리고 불만족스럽게 생각하거나 아쉬움 또는 안타까움이 남는 정도”의 의미로 설명되고 있다.

うらみ [怨・恨・憾] ①うらむこと。にくいと思うこと。

②不満足に思うこと。残念に思うこと。

한국민족문화대백과사전에는, “한 또는 원한의 의미가 무엇인가는 아직 모호하다”는 전제 하에, “욕구나 의지의 좌절과 그에 따르는 삶의 파국, 또는 그 자체의 파국 등과, 그에 처하는 편집적이고도 강박적인 마음의 자세와 상처가 의식·무의식적으로 얽힌 복합체라고 정의되어 있다.

한국민족문화대백과사전의 정의처럼, 한의 실체를 파악하기가 쉬운 일은

3) 필자는, 줄고 「다쿠보쿠 [啄木]의 단가(短歌)와 한(恨)」(한기련(1996) 일본학보 제42집 pp.314-316)에서 한의 개념에 대해 필자 나름으로 이미 정리했지만, 본 연구의 내용상 한에 대한 개념정리가 반드시 필요하다고 판단되기에 간단하게 다시 언급한다.

아니라 생각되지만, 김열규·천이두의 정의를 토대로 한에 대해 자세하게 알아본다.

김열규는 한을, 다음과 같이 정의했다.

극단적으로 한을 단순화하면 마음에 맺힌 응어리요, 매듭이다. 정신적인 어혈이라고 불려도 좋을 것이다. 무엇인가 마음에 맺혀 있고 사무쳐 있는 것이다. 맺힌 것, 굳어진 것, 응어리진 것, 그것이 한이라면 한은 풀어야 한다. 해원(解怨)이나 승원(承怨)이란 말이 쓰이는 것은 그 때문이다.⁴⁾

김열규는, 일차적으로 마음에 맺힌 응어리와 매듭인 한을 이차적으로 풀어야 하는 것, 다시 말해서 “맺힘과 풀”을 한의 대표적인 특징으로 생각하고 있음을 알 수 있다. 그러나 천이두는 한의 속성을 동적으로 파악하여, 다음과 같이 정의했다.

좌절·상실을 당하여 상대방 [誘因者]에 대하여 외향적 공격성(怨)이 일차적 정서현상이요, 뒤를 이어 무력한 자아를 되돌아보고 스스로를 자책하고 한탄하는 내향적 공격성(嘆)이 이차적 정서현상이라 하겠다. 이러한 외향적(怨)·내향적(嘆) 공격성이 우리가 운위코자 하는 이른바 「한국적 한」의 기점이 되고 있는 것은 사실이다⁵⁾. 한국적 한의 부정적 속성 즉 그 공격성(怨)과 퇴영성(嘆), 그리고 그 긍정적 속성, 즉 우호성(情)과 진취성(願)은 일원적 총체성으로 규명하지 않으면 그 정체를 규명할 수 없다.⁶⁾

김열규와는 달리, 천이두는 일차적 정서 현상인 외향적 공격성(怨)과 이차적 정서현상인 내향적 공격성(嘆)을 한국적 한의 기점으로 받아들여, 한의 공격적·퇴영적 속성과 우호적·진취적 속성을 총체적으로 파악함으로써, 한국적 한을 규명할 수 있다고 생각하고 있음을 알 수 있다.

그리고 욕구나 의지가 좌절이 되어 한이 맺히게 되는 원인이 자신에게 있으면 자한(自恨)으로, 그 원인이 사회제도나 시대상황 등의 외부적 요인에 있으

4) 김열규(1981) 『恨脈怨流 한국인 마음의 응어리와 맺힘』 主友 p.33

5) 천이두(1993) 『한의 구조 연구』 문학과 지성사 pp.14-15

6) 천이두(1993) 『한의 구조 연구』 문학과 지성사 p.99

면 타한(他恨)으로 나눈다. 자신을 한스럽게 만든 원인이 자신에게 있다하더라도 본인이 자각하지 못한다는 점에서, 한이 맺힌 후에 나타나는 현상은 동일하다.

한편, 일본적인 한은 김열규의 맺힘과 천이두의 공격적·퇴영적 속성과 비슷하다고 할 수 있다. 다시 말하면, 일본적 한에서는 김열규의 품과 천이두의 우호적·진취적 속성은 찾아보기 어렵다는 것을 의미한다.

이상과 같이 한국적인 한은 연구자에 따라 다른 시각으로 받아들이고 있으며, 그 의미가 일본적인 한보다 복잡 다양하기에 한마디로 정의할 수는 없다.

따라서 한국적 한이 지니고 있는 어느 한 특성만을 강조하기보다는, 김열규의 맺힘과 품, 천이두의 삭임의 과정에서 볼 수 있는 한의 긍정적 또는 부정적 속성(을 모두 한으로 받아들이고, 이를 토대로 본 연구의 기준으로 삼고자 한다.

3. 근대일본문학속에 나타난 일본여성과 한

메이지 유신은 자유와 평등을 일본인들에게 가져다준 것처럼 보였다. 하지만 일본의 근대는 본질적으로 시민의 힘에 의해 성립된 것이 아니었기에, 모든 사람은 자유롭고 평등해야 했음에도 불구하고 현실적으로는 많은 제약이 있었다.

근대일본 여성들의 사회적 지위는, 개인의 자아보다는 가족관계 속에서 파악되는 전근대적인 사회와 크게 다를 바가 없었다.

이러한 절대 권력을 지닌 가부장중심의 전근대적인 가족관계에서 일방적으로 희생을 강요당하는 근대 일본여성의 문제를 가장 심도 있게 다룬 작품은, 모리 오가이 [森鷗外]의 『기러기(雁)』이다.

남편 스에조 [末造]가 오타마 [お玉]를 첩으로 들어앉힌 것을 알게 된 오쓰

7) 천이두 (1993)는 『한의 구조 연구』에서 공격적 퇴영적 속성의 한(恨)에는 원(怨)으로서의 한, 원(冤)으로서의 한, 탄(嘆)으로서의 한, 설움으로서의 한으로, 우호적 진취적 속성의 한으로는 정(情)으로서의 한, 바람(願)으로서의 한, 긍정과 부정의 복합체로서의 한, 맺의 표상으로서의 한으로 분류했다.

네 [お常]는 스에조와 자주 부부싸움을 하게 되고, 화해한 후에도 그녀의 마음에는 가슴에 박힌 가시가 빠지지 않은 듯한 아픔이 남게 되었다.

그리고 오쓰네의 증상은 스에조와 오타마의 관계가 지속되면서 더욱 더 심해지게 되었다. 그녀의 절박한 심정을 아래의 인용문을 보면 쉽게 짐작할 있다.

스에조 집의 공기는 점점 가라앉아 무거운 쪽으로 바뀌었다. 오쓰네는 그저 하늘만 멍하게 쳐다보며 아무 일도 손에 잡히지 않는 때가 많았다. 그런 때는 아이들을 돌보는 것조차 싫어져 아이들이 무엇을 사달라고 하면 곧바로 소리를 지르며 야단쳤다. 소리치고 나서 문득 심했다는 생각이 들어 아이들에게 미안하다고 하거나 혼자서 울었다.

좋은 옷은 아닐지라도 항상 아이들의 옷을 깨끗하게 빨아 입혔던 그녀였지만, 아이들을 전혀 돌보지 않게 된다. 스에조와 오타마의 관계가 지속되는 한 아이들에게 신경질적으로 소리치곤, 미안하다고 하거나 혼자서 울곤 하는 오쓰네의 생활이 변하지 않을 것이다. 세월이 흐를수록 그녀의 스에조에 대한 배신감으로부터 오는 원망 등의 감정 또한 점점 커져 갈 것이라는 것을 알 수 있다.

자신의 힘으로는 아무것도 할 수 없는 이러한 절망적이고 비참한 현실 속에서, 그녀는 스에조에 대한 원망, 자신의 처량한 신세를 한탄하게 될 것이다. 그리고 이와 같은 비참한 현실에서 벗어나고 싶은 애절한 바람을 가지게 될 것이며, 그녀의 바람이 간절하면 할수록 천이두가 이야기한 바람으로서의 한국적 한의 요소가 존재하는 것이다.

『기러기』에 앞서, 전근대적인 가족관계에서 일방적으로 희생을 강요당하는 근대 일본여성의 문제를 다룬 작품으로는, 1894년에 발표된 히구치 이치요 [樋口一葉]의 단편소설 『십삼야(十三夜)』가 있다.

오세키 [お関]의 남편 하라타 [原田]는 결혼 6개월 후부터 7년이 지난 오늘 날까지, 바람을 피울 뿐만 아니라 아무 이유도 없이 “너는 배우지 못해서 상식이 없다”, “예절이 없다” 고 집안의 일하는 사람들 앞에서조차도 매일같이 그녀를 무시했다. 그녀는, 더 이상 지옥 같은 결혼생활을 견딜 수 없어, 독한

마음을 먹고 타로 [太郎]를 재워두고 다시는 돌아가지 않을 결심으로, 부모님에게 이혼허락을 받으러 친정에 왔다.

하지만, 친정아버지는 그녀의 문제를 함께 해결하려 하기보다는, “순간의 분노로 인해 백년가약을 깨트리면, 사람들로부터 비웃음을 사게 된다. 남편에게 미련은 없겠지만, 자식 타로를 생각하지 않으면 안된다. 네 남편은 고위공직자로 너와는 입장이 다르다. 이쪽에서 최선을 다해도 받아들이기에 따라 그렇지 않을 수도 있다. 지금까지 잘 참아왔으니 앞으로도 참을 수 있다.” 등의 이유를 들며, 그녀를 설득했다. 결국, 그녀는 이혼하고자 하는 마음을 접고, 악마처럼 생각하고 있는 남편에게로 다시 돌아가게 된다.

이는 한사람의 여성, 하라타의 부인 오세키로서의 삶을 포기하고, 오로지 자식 타로의 어머니로서의 삶만을 살게 됨을 의미한다. 그녀 자신으로서는 아무 것도 할 수 없는 절망적이고 비참한 결혼생활을 영위하는 동안 그녀의 가슴 속에는 자신을 이런 상황으로 몰아넣은 남편 하라타에 대한 원망과 자신의 처지를 서러워하는 마음이 교차하게 될 것이라는 것은 누구도 부정할 수 없을 것이다. 이러한 남편에 대한 원망과 자신의 서러운 처지에서 오는 한탄은 천이두가 이야기한 한국적 한의 대표적인 특성의 하나임에 틀림없다.

이혼조차도 당사자인 오세키 스스로가 결정하지 못하고 친정아버지로부터 허락을 받아야 하고, 그 이혼동의서를 친정아버지가 대신 받아 주지 않으면 안 되었던 내용으로부터, 근대일본 여성의 보잘것없었던 가정 내에서의 위치를 미루어 짐작할 수 있다.

한편 오쓰네의 입장에서 보면 가해자인 오타마 또한 전근대적인 가족제도의 또 다른 한명의 희생자로 볼 수 있다. 그녀를 속이고 사기 결혼한 경찰과 헤어진 뒤에, 아버지의 안정된 생활을 위해 고리대금업자 스에조의 첩이 되었다. 고리대금업자의 첩이라고 생선가게 주인으로부터 무시당했을 때 그녀가 느낀 분함은, 김열규가 이야기한 한의 속성 ‘혼자 마음속에서 들끓는 노여움, 분함, 분통인가 하면 남을 향한 저주와 앙갚음의 독기운’과 크게 다르지 않다.

집근처를 지나던 대학생 오카다 [岡田]가, 그녀가 기르던 홍작(紅雀)을 구해준 뒤부터 오타마는 혼자 있을 때는 물론이고 스에조가 같이 있을 때에도 오카다를 생각하게 되었고, 오카다를 생각하며 잠 못 울며 이루는 날도 있었다. 오카다에게 다가가고 싶은 그녀의 마음이 강하면 강할수록 스에조로부터

벗어나고 싶은 그녀의 마음 또한 강해졌다. 결국, 그녀는 스에조의 첩이 되어 일생을 보내는 것이 아쉽다고 스스로 생각하게 되었다.

스에조의 첩이라는 생활로부터 벗어나고 싶지만 벗어날 수 없는 현실, 결국 그녀의 마음속에는 이러한 현실에서 벗어나고 싶은 강한 바람이 자리를 잡게 되고, 그 바람이 강하면 강할수록 그녀의 가슴에 멎히게 되는 응어리 또한 지독한 한이 되어 그녀를 괴롭히게 될 것이다.

모리 오가이와 히구치 이치요는 어렴풋이나마 근대적 자아에 눈을 떴지만, 『기러기(雁)』의 오쓰네와 오타마, 『십삼야(十三夜)』의 오세키를 통하여, 전근대적인 가족제도 속에서 무책임한 가장으로 인해 부조리를 강요당하는 근대 일본의 여성문제를 다루고자 했다고 생각된다.

한편, 가정을 돌보지 않는 무책임한 가장으로 인해 피해를 입은 대표적인 근대일본여성의 한사람이 이시카와 세쓰코 [石川節子]이다. 이시카와 타쿠보쿠 [石川啄木]가 가장으로서 보여준 경제적인 무책임은, 가족을 가난으로 이끌었다. 부인 세쓰코도 타쿠보쿠 사후 1년도 지나지 않아, 7살된 교코 [京子]와 1살도 되지 않은 후사에 [房江]를 남겨두고 폐결핵으로 죽음을 맞이한다.

이때 노래한 세쓰코의 단가를 보면, 가난만 물려주고 어린 자식을 두고 떠나는 그녀의 한 맺힌 마음은 아래의 단가를 보면, 누구나 쉽게 짐작할 수 있을 것이다.

교코 가련한 / 가련한 교코 행복은 저멀리에/ 눈물의 원인은 부모에게 있구나
(京子あはれ/あはれ京子は幸はうすし/涙の主は父母にして)

갈 뿐이로다 / 흐르는 구름처럼 갈 뿐이로다/ 눈물로 빚은 새를 선물로 남겨 놓고
(逝くのみぞ/ただ雲のことくゆくのみぞ/涙の小がめ置土産にして)

앞에서 소개한 단가는 “자식을 두고 돌아서는 어미의 발자국마다 피가 고인 다”는 속담처럼, 사랑하는 어린 두 딸만을 남겨놓고 세상을 떠나야만 했던 세쓰코의 가슴에는 어머니로서의 한이 맺혀 있었다고 보아야 할 것이다.

모리 오가이와 히구치 이치요가 『기러기』와 『십삼야』에서 다루고자 했던 전근대적인 가족제도 속에서의 무책임한 가장으로 인해 부조리를 강요당하는

근대일본의 여성문제는, 이시카와세쓰코의 경우에서도 볼 수 있듯이, 많은 근대일본여성들이 현실적으로 당면한 문제였다.

4. 근대일본문학속에 나타난 일본서민과 한

메이지정부가 취한 부국강병과 식산흥업(殖産興業)정책의 가장 큰 피해자는, 농민과 노동자등의 서민이었다. 그들은 기생지주와 무거운 세금으로 시달렸고, 농민들은 가족 모두가 농촌을 떠나거나 도시의 일일 노동자로 나가기도 했다.

가난에서 오는 고통스런 생활에 견디다 못해 자신의 자식들마저 도시 근로자로 팔 수 밖에 없었던 처지의 당시 일본 농민들의 가슴에는 가난한 삶에 대한 한탄과 자식마저 돈에 팔았다는 자책으로 인해, 스스로 풀기 힘든 응어리가 생겼을 것으로 생각된다.

아래의 타쿠보쿠의 단가들은 이러한 노동자, 농민의 처지를 노래한 것이다.

일을 하여도 / 일을 해도 여전히 고달픈 살림 편안하지 않아서 / 지긋이 손만 보네
(はたらけど / はたらけど猶わが生活楽にならざり / ちっと手を見る)

농사꾼들의 대부분은 금주하였단다 / 살림이 더 어려워지면, / 무엇을 끊어야 하나.
(百姓の多くは酒をやめしといふ。 / もっと困らば、 / 何をやめるらむ。)

새로운 내일이 올 것이라고 믿고 있는 / 자신의 말에 / 거짓은 없건만
(新しき明日の来るを信ずといふ / 自分の言葉に / 嘘はなけれど)

오타마의 아버지는 어려운 살림으로 인해, 딸을 고리대금업자의 첩으로 보낸 뒤, 딸의 처지를 생각하여 마음대로 찾아가지도 못하고 딸이 찾아오더라도 한 시간도 안되어 돌려보내려고 애쓴다. 오세키의 아버지 또한 지옥같은 결혼생활에서 벗어나고픈 마음에 자신을 찾아온 딸을 다시 그대로 지옥 같은 상황으로 되돌려 보낸다. 그들의 마음속에는, 사랑하는 딸을 지옥같은 상황으

로 다시 둘러보내야만 하는 자신에 대한 자책, 후회 그리고 이러한 상황에서 벗어나고픈 바람등이 엉크러져 그들의 마음속에도 스스로 풀기 힘든 한국적인 한이 자리를 잡게 될 것이다.

그들의 마음 속 한구석에는 타쿠보쿠의 단가처럼 “새로운 내일이 오기를 기대하겠지만, 그들의 상황은 스스로 해결 할 수 있는 것이 아니기에, 시간이 흐를수록 그들의 바람은 간절해질 것이다. 그들의 바람이 간절하면 할수록 그들의 마음 한 구석에는 천이두가 이야기한 바람으로서의 한국적 한이 존재하게 되는 것이다.

한편, ‘신평민’이라 불리는 하층계급은 경제적인 어려움을 겪을 뿐만 아니라 신분제도에 의해서도 차별을 받았다. 더러움이 많다는 뜻에서 에타 [穢多]라 불리던 하층계급에 대한 멸시가 어느 정도였는가는 시마자키 토손 [島崎藤村]의 『과계(破戒)』를 보면 알 수 있다.

백정출신이라는 것이 밝혀져 병원에서 쫓겨난 뒤 우시마츠 [丑松]의 하숙집에서 머무르며 병치료를 하던 오오 히나타 [大日向]는 하숙집에서조차도 쫓겨난다. 오오 히나타가 쫓겨나던 날 저녁의 우시마츠의 복잡한 심정을, 아래의 글에 잘 나타나 있다.

연민, 공포, 수천가지 사념이 우시마츠의 흉중을 왕래했다. 병원에서 쫓겨나고 하숙에서 쫓겨나는, 그 잔혹한 대우와 치욕을 받고서도, 묵묵히 가마에 얹혀나가는 부자의 운명을 생각하니, 그는 얼마나 통탄의 피눈물을 짓고 있으랴 싶었다. 오오 히나타의 운명은 마지막에는 모든 백정의 운명이 아닌가? 생각해 보면 결코 남의 일이 아니다.

단순히 신평민이라는 이유만으로 병원에서뿐만 아니라 하숙집에서조차도 쫓겨날 때 오오 히나타는 마음속에서 우시마츠의 지적처럼 통탄의 눈물을 흘렸으리라 생각된다. 부당하다고 항의조차하지 못하고 묵묵히 쫓겨나는 오오 히나타의 모습에서 그들에 대한 사회의 평가 정도를 짐작할 수 있다. 이렇게 모욕적이면서도 비인간적인 대우를 받고 살 수 밖에 없었던 신평민들의 가슴 한구석에 맺힌 것이 풀기 힘든 지독한 응어리가 되고 한국적인 한으로 발전했으리라는 것을 누구도 부정할 수는 없을 것이다.

‘신평민’이라는 용어에서도 짐작할 수 있듯이, 메이지유신 이전에는 그들은 평민이 아니었다. 새로이 평민이 되었지만 온갖 사회적 냉대와 멸시는 계속되었다. 우시마츠의 아버지처럼 먼 곳으로 이사를 해서 신분을 숨기면서까지 그들은 이러한 사회의 멸시와 부당한 대우에서 벗어나기 위해 몸부림쳤다.

우시마츠의 아버지는 생전에 아들을 위해서 혼자서 깊은 산속에서 소를 키우며 생활했고 죽어서 까지 아들을 위해 장례를 산에서 치루어 목장의 흙으로 돌아간다. 처음부터 끝까지 할 수 있는 모든 방법을 동원해 백정이라는 사실을 숨기려고 했던 아버지의 유언을 저버리고 우시마츠는 자신이 가르치던 학생들에게 “자신은 백정출신”이라고 고백한 다음, 백정출신이라는 사실을 숨기고 여러분들을 가르친 점에 대해 사과한다고 무릎을 꿇는다. 자신이 가르치던 학생들에게조차 에타라는 이유만으로 무릎을 꿇어야하는 우시마츠의 모습에서, 당시 신평민들의 사회적 위치가 너무나도 보잘 것 없었다는 것을 알 수 있다.

우시마츠는 에타출신의 사상가 이노코 렌타로 [猪子連太郎]에게 자신이 백정이라는 사실을 여러 번 고백하려고 했지만 실행에 옮기지는 못했다. 그 과정에서 시시각각으로 변하는 그의 심경을 묘사한 부분을 보면, 그 것이 얼마나 힘든 결정이었나를 알 수 있다.

그 얘기를 해버리면 자기는 한 층 더 선배와 가까와 질 수 있으리라. 이렇게 생각하고 그 얘기를 하려고 했으나, 입이 떨어지지 않아 때때로 서서 한숨을 쉬곤 했다. 죽음하고도 관련 있는 진실된 비밀 - 설사 상대방이 같은 신분이라고는 하지만, 어떻게 쉽게 고백할 수 있으랴. 그는 말하려다가 몇 번이고 주저했다. 주저하는 스스로를 질책했다.

그가 이렇게까지 고백을 주저한 것은, 신평민이라는 사실이 알려질 경우, 그가 받아야 할 사회의 멸시와 천대는 견디기 힘든 것이었기 때문이었다. 우시마츠의 아버지는 에타라는 이유로 사회적으로는 아무것도 할 수 없는 현실에서 자식이나마 벗어나게 하려고, 에보시가타케의 산속에 숨어살았다. 그는 자식만큼은 사회에 나아가 하고 싶은 일을 뜻대로 할 수 있도록 해주고 싶었고, 자신이 꿈꾸던 바를 자식에게 시키고 싶었다.

그러기 위해서는 설사 해가 서쪽에서 떠서 동쪽으로 지더라도 그들이 에타라는 사실은 숨겨야만 했고, 우시마즈에게도 무슨 일이 있더라도 “숨겨라”라고 유언을 남긴 것이었다.

에타라는 사실을 숨기기 위해, 깊은 산속에서 소를 키우며 살지 않으면 안되었던 우시마즈의 아버지의 마음속에는 사회의 멸시와 천대에 대한 분노와 이러한 현실에서 벗어나고픈 욕망이 자리 잡고 있었으리라는 것을 짐작할 수 있다. 이렇게 그의 아버지의 마음속에 자리 잡고 있는 분노와 응어리, 현실에서 벗어나고픈 욕망을 한국적 한의 시발점으로 보아도 좋을 것이다.

우시마즈가 자신이 에타라는 사실을 고백함으로써, 평생 동안 아버지와 자신을 옹아뻐던 신분제도의 구속에서 스스로 벗어났지만, 사회의 냉대와 멸시로부터 벗어난 것은 아니었다.

한편, 운명에 정면으로 부딪쳐 간 우시마즈와는 달리 『무희(舞姬)』의 주인공 공 토요타로 [豊太郎]는 근대적 자아에 눈을 떴으면서도, 자신을 둘러싼 주위의 압력에 굴복해버린다⁸⁾. 아래는 에리스와 헤어진 뒤의 토요타로의 마음의 상태를 표현한 문장이다.

이 한은 한줄기 구름처럼 내 마음을 스쳐, (중략) 날마다 창자가 끊어질 듯한 고통을 맛보게 했다. 끝끝내 지금은 마음 속 깊은 곳에 응어리진 한 점 상처가 되어, 글을 읽을 때마다 뭔가를 볼 때마다 거울에 비치는 그림자나, 목소리에 대답하는 울림처럼 한없는 회고의 정을 불러 일으켜 수없이 내 마음을 괴롭힌다.

에리스와의 이별로 인해, 토요타로의 마음에 맺힌 한은 스스로 낸 상처로 자한(自恨)이라 할 수 있다. 하지만, 그는 자신이 선택한 운명이었음에도 에리스와의 사랑이 외적 요인에 의해 좌절되고 파국을 맞이했다고, 토요타로는 생각하고 있다. 따라서, 자한이라 하더라도, 한이 맺힌 이후의 마음의 상처와 전개과정은 타한(他恨)과 동일하다.

8) 한기련(2006) 「무희(舞姬)」小考 원주대학 학술논총 제37집 pp.68-71.

5. 근대일본문학속에 나타난 일본지식인과 한

1868년 도쿠가와막부를 대신하여 정치의 중심에 나선 메이지천황은, 1871년 질록처분(秩祿處分)과 폐번치현(廢藩置縣) 등의 조치를 통해 권력을 강화했다. 1889년에는 입헌군주제를 표방하는 흥정헌법을 발표하여, 메이지 천황에게 모든 권력을 집중시켰다.

당시의 일본 노동자와 농민은 메이지 정부가 취한 부국강병(富國強兵)과 식산흥업(殖産興業) 정책의 가장 큰 피해자였다. 1894년의 청일전쟁과 1905년의 러일전쟁에서 승리한 일본은, 천황을 정점으로 하는 제국주의의 길을 걷기 시작했으며, 결국 1910년 6월에 대역사건을 날조하고, 8월에는 총칼을 앞세워 한일합방을 자행한다.

이와 같이 군국주의를 향해 치닫는 메이지정부의 거침없는 행보에 대해, 부정적인 내용의 문학작품을 남긴 대표적인 문학가로, 요사노 아키코 [与謝野晶子]와 이시카와 타쿠보쿠를 들 수 있다.

1904년 8월에 일본의 젊은이들을 죽음의 러일전쟁터로 내모는 현실에 대한 비판적인 내용의 시 『동생이여, 너는 죽지 말지어다. [君死にたまふことなかれ]』를 발표했다. 그 중에서 1연과 3연을 소개하면 아래와 같다.

동생이여, 너는 죽지 말지어다.
여순 포위군 속의 동생을 그리며

아아 동생이여 너를 슬퍼한다,
너는 죽지 말지어다.
막내로 태어난 너이기에
부모의 사랑이 남달랐지만,
부모는 총칼을 손에 주고
사람을 죽이고 죽으라고는
24살까지 기르지 않았단다.(1연)

너는 죽지 말지어다.
천황께서는, 싸움에

몸소 나아가시지 않으시네.
 몸에 사람의 피를 묻히고,
 짐승의 길에서 죽으라고는,
 죽는 것을 사람의 명예라고는,
 자비로운 천황께서는
 그렇게 생각지 않으시네. (3연)

1연은, 여순전투의 참상과 전투에서 일본군이 어려움을 겪고 있다는 소식을 들은 아키코가, 동생에 대한 사랑과 연민의 정을 노래한 것이다. 사람으로 태어나 전쟁터에서 동생이, 다른 사람을 죽이고 마지막에는 동생마저도 죽는 일이 일어나지 않기를 바라는 누나의 마음을 노래한 것이다.

러일전쟁의 최대 격전지는, 동해해전과 러시아군의 최대 근거지였던 여순(旅順)전투였다. 아키코의 막내 동생은 노기 [乃木] 대장 휘하 제4사단에 소집되어, 여순 전투에 참가했다. 이 전투에서 일본군은 요새 203고지를 공격하면서 많은 인명피해를 입었다.

“너는 죽지 말지어다”의 표현을 통해 여순 전투에서, 많은 일본의 젊은이들이 죽어갔다는 것을 짐작할 수 있다. 사랑하는 자식을 전쟁터에서 잃어버린 부모들의 가슴 한 구석에는, 자식의 죽음을 슬퍼하는 마음과 자식에 대한 그리움 등으로 인해, 스스로는 풀기 힘든 응어리가 생겼으며, 이를 한국적 한으로 보아도 무리가 없을 것이다.

요사노아키코의 대표작으로 널리 알려져 있는 『동생아, 너는 죽지 말지어다』는, 발표당시 위에서 소개한 3연의 내용 때문에 천황제 내지 국가체제를 비판하고 전쟁에 반대하는 반전시로서 비판을 받아 사회의 물의를 일으키기도 했다. 그러나 발표 당시 아키코에게는 이러한 사회의식이 없었기에, 반전시로서 보기에 무리가 있다는 상반된 견해도 있지만, 본고에서는 이와 관련된 언급은 하지 않는다.

한편, 이시카와 타쿠보쿠는 “혁명을 꿈꾸는 용감한 인사는, 반드시 언어를 자신의 행동으로 실천하려고 한다. 특히, 폭정, 억압으로 인민의 위에 군림하려는 자에게는, 행동으로 언어를 대신하려 한다. 즉, 테러리즘이 발생하는 것은 피할 수 없는 필연적인 것”이라고 주장하는 크로포토키의 영향을 받았다.

그의 『한 스푼의 코코아』를 보면, 테러리스트가 될 수 밖에 없었던 그들의 슬픈 심정을 이해할 수 있다.

한 스푼의 코코아

나는 아노라, 테러리스트의
 슬픈 심정을 ---
 말과 행동이 둘일 수 없는
 오로지 한 마음을,
 빼앗겨 버린 말 대신에
 행동으로 대답해야 하는 심정을,
 나와 내 몸을 적에게 내던지는 심정을---
 그러나 그것은 진지하고 성실한 인간이 항상 지니는 슬픔이다.
 끝없는 토론 뒤에
 차디찬 한 스푼의 코코아를 훑적이며,
 그 씹쓸한 맛 혀끝에 닿는다.
 나는 아노라, 테러리스트의
 슬프디 슬픈 심정을

모든 것을 내 던져서라도 폭정과 억압으로부터 자유를 지키기 위해, 행동으로 나서는 테러리스트가 되기까지 그 들은 수많은 좌절을 경험하면서 슬픔을 맛보지 않으면 안되었을 것이다. 그리고 이 시에서의 테러리스트는 러시아의 여성혁명가였던 소피아를 비롯하여, 천황암살 미수사건인 메이카 [明科事件] 사건에 직접적으로 관련되었던 간노 스가 [菅野スガ], 미야시타 다이키치 [宮下太吉], 니무라 타다오 [新村忠雄]는 물론 대역사건으로 억울하게 죽어간 고토쿠 슈스이 [幸徳秋水] 등의 사회주의자를 말한다.

한편, 말년에 타쿠보쿠는 군국주의로 치닫는 일본의 현실 바꾸기 위해서 병상에서조차도 혁명을 입버릇처럼 이야기 했다. 그는 혁명의 필요성을 절감하면서도, 행동으로 옮기지 못하는 일본지식인들의 좌절을 「끝없는 토론 뒤에」서 노래했다.

이 시는 행동으로 옮기지 못하는 지식인들의 좌절과 일본사회가 바뀌기

위해서는 혁명이 반드시 필요하지만 현실적으로 기대하기 어렵다는 다쿠보쿠의 안타까움을 노래한 것이다. 그가 단가에서 이야기한 ‘새로운 내일’은, 물질적으로 보다 풍요로운 내일이라는 의미와 함께 모든 사람이 평등 속에서 자유롭게 행복을 추구하며 지낼 수 있는 일본의 밝은 미래를 의미하는 것으로 해석할 수 있다.

7. 결론

‘한’의 시각에서 일본근대문학을 살펴 본 이번 연구에서 얻은 결과를 정리하면 다음과 같다.

첫째로, 한국적 한의 이미지를 찾아볼 수 있었던 일본근대문학작품은 얼마 되지 않아서, 히구치 이치요, 모리 오가이, 시마자키 토손, 이시카와 타쿠보쿠, 요사노 아키코 등의 작품만을 제한적으로 다룰 수밖에 없었다.

한국적 한의 이미지를 찾아 볼 수 있는 작품이 절대적으로 부족한 상황에서, 『다카세부네 [高瀬舟]』와 『라쇼몬 [羅生門]』 등 한의 이미지를 찾아 볼 수 있는 작품이라 하더라도, 근대일본사회와 일본인의 생활을 엿볼 수 있는 작품이 아닌 경우에는 다루지 않았기에 보다 다양한 작가와 작품을 다루지 못한 점이 아쉬움으로 남는다.

그렇다고는 해도 한이 이미지를 통해 근대일본을 새롭게 다시 조명하고자 한 본 연구의 의의가 퇴색되는 것은 아니라고 생각된다.

둘째로, 『기러기』와 『십삼야』를 통해, 전근대적인 가족제도로 인해 근대일본의 여성들이, 현실 속에서도 견디기 힘든 고통을 받았으며, 그녀들의 가슴속에는 천이두가 이야기하는 서러움으로서의 한과 이러한 고통에서 벗어나고픈 바람으로서의 한이 자리 잡았으리라는 것을 알 수 있었다.

셋째로, 메이지 정부가 취한 사민평등의 신분제도가 완전하게 정착되지 않아, 신평민이 된 ‘에타 [穢多]’ 들이 사회적 멸시와 냉대 속에서 살 수 밖에 없었으며, 그들의 가슴에 맺힌 원통함으로 인해 원(冤)으로서의 한국적 한이 맺혔다는 사실을 시마자키 토손의 『과계(破戒)』를 통해 다시 확인할 수 있었다.

넷째로, 근대일본의 노동자와 농민 등의 서민이 경제적으로 매우 힘든 삶을 영위하고 있었다는 사실과 이러한 경제적 어려움으로 인해, 메이지일본의 서민들에게서도 가난에서 오는 한국적 한의 이미지를 발견할 수 있었다.

다섯째로, 청일전쟁, 러일전쟁, 한일합방 등을 거치며 군국주의를 향해 거침없이 치달았던 과정에서 희생된 일본인들과 이러한 당시 상황을 우려하는 일부 지식인들에게서도 그와 같은 사회상황에서 벗어나고픈 바램(願)으로서의 한국적 한의 이미지를 발견할 수 있었다.

마지막으로, 얼마 되지 않는 작가와 작품을 통해서이기는 하지만 한국적 한의 이미지를 정리함으로써, 개국과 근대화로 상징되는 일본의 메이지 시대를 다른 각도에서 바라다 볼 수 있었다는 점에, 본 연구의 가장 큰 의의가 있다고 생각된다.

<參考文獻>

- 김열규(1981) 『怨脈恨流 한국인의 응어리와 맺힘』主友
 천이두(1993) 『한의 구조 연구』 문학과 지성사
 한기련(1999) 『이시카와 다쿠보쿠의 슬픔과 한』월인
 한기련(2006) 「무희(舞姬)」小考 『원주대학학술논총』 제37집, pp.68-71
 芥川竜之介(1975) 『羅生門·鼻』新潮社
 森鷗外(1979) 『雁』新潮文庫
 _____(1979) 『高瀬舟』新潮文庫
 _____(1984) 『舞姫』日本近代文学大系 角川書店
 島崎藤村(1971) 『破戒』新潮社
 国文学(1985) 『日本の小説555』9月臨時増刊号 學燈社
 吉田静一外(1995) 『近代詩鑑賞辞典』, 東京堂出版
 小野隆編(1987) 『明治の文芸』双文社出版

접 수 일: 12월 31일
 심사완료: 01월 08일
 게재결정: 01월 29일

<要旨>

日本の近代文学研究

— 韓国的な恨の視角から —

今回私は読者論の立場から、日本の近代文学を再照明してみた。が、その結論は以下のことである。

一つ、日本の近代文学家として広く知られている樋口一葉、森鷗外、島崎藤村、石川啄木、与謝野晶子のどの作品から韓国的な恨のイメージが発見できた。

二つ、『雁』と『十三夜』から、前近代的な家族制度により近代日本の女性たちは作品のなかはもちろんのこと、現実の世界でも耐えがたい苦痛のなかで生きており、彼女たちのこころのなかに韓国的な恨ができていたことがわかった。

三つ、明治政府の四民平等のための身分制度は、まだ根をおろしておらず、新平民になった穢多たちは社会的な蔑視と冷遇をうけざるを得なかった。彼らの心のなかにも韓国的な恨ができていたことが、島崎藤村の『破戒』を通じて確認できた。

四つ、近代日本の労働者と農民などの庶民が困窮を極めていたことと彼ら明治日本の庶民からも、また韓国的な恨が発見できた。

五つ、日清戦争、日露戦争、日刊併合など軍国主義にはしる過程で犠牲になった日本人とこのような動きを心配していた知識人からも韓国的な恨のイメージが発見できた。

ちなみに、近代日本文学作品のなかにあらわれている韓国的な恨のイメージを整理したことをもって、明治日本の社会の一つの断面を、新しい角度で見ることが出来た点に、今回の研究の意義があると考えられる。

芭蕉의 俳諧世界에 나타나 있는 ‘無常’에 관한 고찰

許 坤*

heokon@kangwon.ac.kr

< 目 次 >

>

- | | |
|-----------------------|----------|
| 1. 序論 | 3.3 不易流行 |
| 2. ‘無常’의 의미에 관한 분석 | 3.4 無常迅速 |
| 3. 芭蕉에게 있어서의 ‘無常’의 의미 | 3.5 造化隨順 |
| 3.1 無常觀 | 4. 結論 |
| 3.2 死 | |

Key Words : 바쇼(Bashō), 무상(The Transitoriness), 인생관(View of life), 하이카이 문학(Hibungaku), 『오쿠노호소미치』(Okunohosomiti), 『오이노코부미』(Oinokobumi)

1. 序論

芭蕉의 俳諧師로서의 인생에 있어서 ‘無常’은 늘 가까운 곳에서 그와 동행한 삶의 일부분이라고 말할 수 있다. 자신의 삶에 있어서 무소유의 자유를 이미 깊이 통찰하고 있었기에 ‘無常’은 그와 항상 동행했던芭蕉의 생활의 한 단면이었다고도 할 수 있다. 그러나芭蕉에게 있어서 ‘無常’의 의미는 그의 삶의 변화와 더불어 다양한 의미로 변해왔으며 그것은 그의 俳諧文學이 형성되고 발전되는 과정을 알아보는데 있어서 소중한 메커니즘으로서의 역할을 할 수 있다고 말할 수 있다.

* 강원대학교 교수, 日本近世文學

本稿에서는 芭蕉의 俳諧文學에 나타나 있는 ‘無常’의 의미변화와 역할을 조명하고자 하는데, 이러한 접근방법은 芭蕉의 俳諧文學의 개혁의 과정에서 나타난 많은 변신과 고민을 정확하게 이해하는데 도움이 될 것이다. 이러한 의미에서 ‘無常’이라는 키워드는 芭蕉가 자신의 기존의 俳壇으로부터 독립해서 자신의 俳諧世界를 추구했던 계기와 蕉門俳諧가 近世俳壇의 중심세력으로 성장 발달할 수 있었던 과정을 더욱더 심도 있고 적확하게 파악하는데 있어서 대단히 중요하다고 할 수 있다.

2. ‘無常’의 의미에 관한 분석

‘無常’이란, 인간들의 삶과 대단히 관계가 깊은 말로서 일상생활을 통해서 빈번히 느끼고 접할 수 있는 말이라고 할 수 있다. ‘無常’이 가지는 이미지는 대부분이 부정적이라고 할 수 있는데, 芭蕉가 자신의 일생을 俳諧에 담아 표현하려고 노력하는 과정에서 접한 ‘無常’의 이미지를 명확히 밝히기 위해서는 먼저 일반적으로 ‘無常’이 가지는 사전적 의미에 있어서의 고찰이 필요하리라고 생각된다.

『日本国語大事典』¹⁾에 나타나 있는 ‘無常’의 의미는 다음과 같이 정리할 수 있다. 1) 모든 만물은 새롭게 태어나고 변하고 죽기 때문에 항상 그대로의 모습으로 존재 할 수 없다는 뜻. 현세에 있는 모든 것은 항상 빠른 속도로 변하기 때문에 잠시도 같은 모양이나 형태로 존재하지 않는다는 의미이다. 특히 생명의 덧없음을 뜻한다. 2) 죽음. 3) 특히 連歌나 俳諧에 있어서는 죽음과 장례에 관한 의미로 쓰인다.

이와 유사한 의미로서 芭蕉의 俳諧에서 사용되고 있는 단어로서 「虛無」가 있는데 이 말에 관한 의미는 上述한 사전에는 다음과 같이 정리되어 있다. 1) 속이 비어있는 모양이나 마땅히 있어야 하는 것이 없는 모양. 공허함. 2) 근거가 없거나 사실 무근인 상황. 3) 의지할 수 없는 임시로 존재하는 것. 4) 덧없이 지나가는 것. 5) 죽은 것. 6) 욕심과 집착이 없는 상황 등의 의미를 갖는다고

1) 日本大事典刊行会(1974) 『日本国語大事典』, 小学館

할 수 있다.

芭蕉에게 있어서의 ‘無常’의 의미에 관해서 『芭蕉語彙』²⁾에서는 다음과 같이 정리하고 있다. 1)항시 존재할 수 없는 것. 2)상주하지 않는 것. 3)인생의 덧없음. 4)죽음. 등으로 정리되어 있다. 그리고 「虛無」에 관해서는, 1)속이 비어있거나 공허함. 2)흔적이 없음. 사실이 아님. 3)무익하다. 덧없다. 4)죽다 등으로 정리되어 있다. 『日本國語大事典』과 『芭蕉語彙』에 나타나 있는 이 두 단어가 가지는 의미는 많은 부분에 있어서 유사한 면을 가지고 있다고 할 수 있으며, 그 이미지 또한 중첩되고 있는 부분이 많다고 할 수 있다.芭蕉의 俳諧世界에서는 이 두 단어의 의미가 혼용되어 나타나고 있으므로 芭蕉의 俳諧에 나타나 있는 ‘無常’이나 「虛無」의 의미를 포괄적인 의미에 있어서의 ‘無常’으로 한정해서 조명해 가고자 한다. ‘無常’의 의미는 芭蕉의 俳諧世界에서 표면적이거나 단편적으로 고정되어 있는 것이 아니고, 그의 俳諧世界의 변화와 더불어 그것이 갖는 의미도 민감하게 반응하며 변하고 있음을 알 수 있기 때문에 ‘無常’이 芭蕉의 俳諧世界에서의 의미적 변화과정을 분석하여 그것이 가지는 의의와 역할에 관해 고찰해 보고자 한다.

3. 芭蕉에게 있어서의 ‘無常’의 의미

芭蕉의 ‘無常’에 관한 선행연구로는 赤羽学 先生の 『芭蕉の不易流行説と仏教的無常觀』³⁾와 安部正美 先生の 『無常の觀は亡師の心-芭蕉の一面觀』⁴⁾ 등이 대표적이라고 할 수 있다. 赤羽学 先生の 논문은 「不易流行」의 근거를 「風雅와 誠」라고 밝히며 서술한 부분은 ‘無常’과의 관계를 밝히는데 있어서 의미 있는 연구라고 할 수 있다. 그러나 ‘無常’에 관해서는 불교와의 연관관계를 중심으로 접근함에 따라 芭蕉의 俳諧文學 전체에 나타나 있는 ‘無常’의 의미를 파악하기에는 종교적인 의미에 치우침으로 인해 순수한 의미에 있어서의 芭蕉의 俳諧文學에서의 ‘無常’을 파악하기에는 한계가 있음을 지적하지 아니

2) 宇田零雨(1984) 『芭蕉語彙』, 青土社

3) 赤羽学(1999.1) 安田女子大学 「國語國文論集」

4) 安部正美(1991.2) 専修大学 「専修國文」

할 수 없다. 그리고 安部正美 先生の 논문은, 芭蕉가 無常觀을 가지게 된 출발점을 深川庵의 화재로 단정하면서 芭蕉가 無常觀을 가지게 된 이유와 원인에 대해 명쾌하게 설명하고 있다. 하지만 芭蕉의 俳諧世界 속에서의 ‘無常’이 가지는 변화과정이라든지, 의미변화에 관한 접근보다는, ‘無常’이라는 표현의 빈도나 작품 속에 묘사된 ‘無常’에 대한 단편적인 설명에 치우치고 있다는 점을 지적하고 싶다. 그러므로 本稿에서는 앞에서 언급한 先學들의 연구를 토대로 芭蕉의 俳諧世界 속에 나타나 있는 ‘無常’에 관한 묘사와 그것이 가지는 의미의 변화 과정을 명확하게 조명하고자 하는 것이다.

3.1 無常觀

1680년 4월, 選集『桃青門弟 独吟二十歌仙』을 출판해서 江戸俳壇에 旋風을 일으킨 芭蕉는 그로부터 약 반년 후인 그 해 겨울에 江戸의 郊外에 있는 隅田川の 주변인 深川の 泊船堂로 이사하게 된다. 당시의 芭蕉庵은 江戸의 중심가에서 떨어진 郊外의 한적한 곳이었고, 도회지의 번잡한 생활로부터 한적한 생활을 추구하는 사람에게 있어서는 적합한 곳이었기 때문에 隱者라든지 浪人등 그곳으로 이주해오는 사람도 적지 않았다. 처음에는 泊船堂라고 불렀지만, 芭蕉의 門下生인 李下로부터 식물인 芭蕉를 선물로 받아서 심은 것이 무성히 자라서 그곳을 芭蕉庵이라 칭하게 되었고, 그 후 그곳은 芭蕉에게는 江戸에서의 생활의 근거지가 되었던 것이다. 芭蕉庵은 1680년부터 1694년의 14년 간, 세 차례에 걸쳐서 큰 변천을 가져오게 된다.

深川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり 苦をかつぎて煙のうちに生のひげん、是ぞ玉の緒のはかなき初め也。爰に猶如火宅の変を悟り、無所住の心を発して、其次の年夏の半に、甲斐が根にくらして富士の雪のみつれなればと、それより三更月下入無我といひけん昔の跡に立帰りおほしければ、

『芭蕉翁終焉記』

芭蕉는 1680년부터 1682년 사이의 약 2년간 제1차 芭蕉庵에서 생활했고, 이 암자는 芭蕉가 俳諧師로서 작품생활을 위해 江戸의 중심지에서 스스로 郊外인 深川로 이사를 한 후, 江戸의 대화재로 소실되었다. 위의 문장을 통해

당시의 상황을 살펴보면, 芭蕉는 대화재로 인해 芭蕉庵이 화염에 휩싸였을 때, 뜰을 끌어안고 강으로 뛰어 들어서 가까스로 목숨을 구했다고 한다. 당시의 충격으로 芭蕉는 인생에 대한 懷疑와 무상에 대해 다시금 생각하는 계기를 갖게 되었으며, 그것은 그 후의 그의 작품과 文學의 변화에도 영향을 미치게 되었던 것이다. 이 후에 芭蕉의 마음속에서는 無常의 관념이 점점 더 깊어갔고, 그러한 경향은 그의 서간문을 통해 엿 볼 수 있다. 현재 학계에서 인정되고 있는 芭蕉의 書簡文은 약 200여 통에 달하고 있으며, 그 속에서 芭蕉는 자신의 심경을 자유롭게 표현하고 있다. 그리고 여기서 시선을 끄는 것은, 無常觀에 관한 표현이 갑자기 증가했다는 사실이다. 결과적으로 이 시기는 芭蕉에게 俳諧師로서의 자신을 다시금 성찰하는 기회를 가지게 했고, 그것은 곧 그의 작품세계의 커다란 변화를 가져오는 계기가 되었던 것이다. 芭蕉는 이 시기의 경험과 고뇌를 바탕으로 자신의 俳風을 改革하고 俳諧觀을 순화시켜감으로 인해 결국은 遊戯性을 기본적인 원리로 하고 있는 談林俳諧의 껍질을 벗고 純粹文學으로서의 蕉門俳諧를 추구해 갈 수 있었던 것이다.

雪の朝獨り干鮭を嘯得たり

『東日記』

이 句는 芭蕉가 芭蕉庵으로 이사한 후 얼마 지나지 않은 시점에서 읊은 句인데, 여기에는 芭蕉庵에서의 생활과 그의 俳諧師로서의 마음가짐이 잘 나타나 있다고 할 수 있다. 이 句는 「비록 넉넉하지는 않지만 타향에서의 외로운 생활을 이겨내며 芭蕉庵에서의 생활에 自足하면서, 추운 겨울 아침 혼자서 이렇게 마른 연어 고기를 씹어 먹고 있다。」라는 의미이다. 여기서 芭蕉는 富를 부러워하지 않고 또 권력을 탐하지 않고, 이상향과 같은 자신만의 공간에서 자신의 꿈을 추구하며 살아가고자 결심한 初心을 기억하면서도, 한편으로는 아직도 세상에 미련을 떨치지 못하고 있는 자신에게 다시금 그러한 初志를 되새기고자 하려는 작자의 마음이 나타나 있다고 할 수 있다.

芭蕉는 한때 당시의 권력의 중심세력이었던 무사로서의 명예를 추구하려고도 했었고, 또 한때는 불교에 귀의함으로써 세상을 잊고 무심한 정신세계를 경험하고자 했었다. 그러던 자신이 지금은 俳諧師로서의 꿈을 이루기 위해

고향을 뒤로하고 江戸에 와 있지만, 자신의 삶은 결코 넉넉하지 않다는 것을 새삼 실감하고 있다. 하지만 자신의 꿈은 어디까지나 俳諧師로서의 충실한 삶이었기에 그러한 인간의 일장춘몽과 같은 출세를 지금은 자신이 소유하고 있지는 않지만 지금의 자신의 삶에 자족하고 있다고 스스로를 위로하고 있다. 하지만 한편에서는 위의 문장에는 젊은 시절 그가 추구했었던 세계에 대한 憧憬이 강하게 묻어나오고 있는 것을 느낄 수 있다. 현실과 꿈을 동시에 손을 넣을 수 없는 것이 인간의 유한한 삶의 한계 일 수밖에 없다는 無常觀이 위의 句에는 짙게 느껴지고는 있으나, 그것은 결코 芭蕉가 자신의 현재의 삶에 대한 懷疑나 후회하고 있는 심경을 표현한 句라고는 말할 수 없다. 이 句에서는 芭蕉가 인생의 無常을 극복하지 못한 자신의 운명 속에서, 俳諧師로서의 삶을 위해 체념 해버린 자신의 또 다른 삶에 대한 아쉬움을 토로하고 있는 부분이라고 할 수 있다.

師、或方に客に行きて、食の後「蠟燭をはや取るべし」といへり。夜の更くること目に見えて心せはしき、となり。かく物の見ゆる所、その目・心の趣、俳諧なり。つづいて曰く「命もまたかくの如し」となり。無常の觀、猶亡師の心なり。

『三冊子』

이 문장의 배경이 되고 있는 곳은 그의 고향인 伊賀 上野로 전해지고 있다. 내용은 다음과 같다. 「스승님이 어떤 집을 방문해서 저녁식사를 하고 난 뒤, ‘촛불을 끄고 호롱불을 켜시오’ 라고 말씀하셨다. ‘초가 점점 닳아 없어지는 것을 보고 있노라면, 깊어 가는 밤이 느껴짐으로서 마음이 편안하지 않기 때문’이라고 하는 것이었다. 이와 같이 사물의 모양을 잘 파악 할 수 있는 것은, 눈과 마음의 역할로 인해 句를 읊는 俳諧와도 서로 상통하는 부분이라고 할 수 있다. 그리고 계속해서 스승님은 ‘목숨 또한 이와 같이 언제든지 변하기 쉬운 것이다’ 라고 말씀하셨다. 이러한 ‘無常觀’은 역시 돌아가신 스승님의 정신세계의 근원이 되었던 것이다.’라고 서술하고 있다.

위의 문장 속에서 芭蕉는 초가 닳아 없어지고 있는 상황을 지켜보고 있자니, 그것이 마치 자신의 얼마 남지 않은 인생이 시시각각으로 사라져 가고 있는 듯이 느껴졌기 때문에 인간들의 삶이 얼마나 유한하고 無常한 것인지를 뼈저

리게 느끼고 있는 자신의 심경을 언급하고 있는 부분이라고 할 수 있다.

一夜の無常、一庵のみみだもわすれがたう覺、猶觀念やまず、水上の淡きえん日までのいのちも心せはしく、去年たびより魚類肴味口に払捨、一鉢の境界、乞食の身のこそたうとけれど、うたひに侘し貴僧の跡もなつかしく、猶ことしのたびはやつしへて、こもをかぶるべき心がけにて御坐候。

「猿離宛」

이 서간문은 芭蕉가 『おくのほそ道』의 기행을 나서기 직전에 쓰인 문장으로서 芭蕉의 無常觀이 여실히 잘 나타나 있는 대표적인 문장이라고 할 수 있다. 이글의 의미는 「비록 함께한 시간이 하룻밤에 지나지 않았지만, 서로의 헤어짐을 아쉬워하는 가운데 인생의 무상함이 느껴지며 기행에 나서고자 하는 마음 또한 간절하구나. 인간의 목숨의 덧없음을 생각하니 마음이 조금해지기도 하고 작년 여름에 岐阜縣의 長良川에서 가마우지로 물고기를 잡는 것을 보고서 흥에 겨워 식사도 하면서 句를 읊은 적도 있지만, 그 후에는 그것이 반성의 계기가 되어서 생식을 금하며 금욕생활에 빠지기도 했었다. 걸인으로 서의 삶은 참으로 재미있는 것이기에 그렇게 노래한 増賀上人이 그리워지는구나. 그렇기 때문에 올해 기행 길의 행색은 더욱더 초라하게 하고서 걸인으로 서의 삶을 각오하고서 길을 나서고자 한다.」라고 할 수 있다.

芭蕉는 俳諧師로서의 인생을 살면서 흐르는 물과 같은 변화무상한 인간들의 삶속에서 발생하는 다양한 일들을 경험했다고 할 수 있다. 영원할 것만 같았던 것이 일시적인 것에 불과하고, 마냥 즐겁고 재미있던 일로만 생각했던 것이 입장을 조금만 바꾸어 보면, 슬프고 잔혹한 일이 될 수 있다는 것을 깨닫고서 자신이 지금까지 지내왔던 삶에 대해 다시금 성찰하는 시간을 갖고 있다. 芭蕉가 자신이 무의미하게 살아왔던 삶과, 지금도 그러한 모습으로 살아가고 있는 인간들의 모습을 보면서, 인간의 삶에 대해 깊은 회의와 無常을 통감하고 있는 부분이라고 할 수 있다.

이와 같이 芭蕉는 자신의 삶을 통해 ‘無常’이라는 명제를 여러 각도에서

5) 鴨長明의 『発心集』에 등장하는 増賀上人에 관한 故事. 금욕하며 속세를 추구하고자 하는 심경으로 「名聞こそ苦しかりけれ、かたい(乞食)の身をぞ樂しかりける、と歌ひて」라고 읊었다.

체험하며, 자신의 앞으로의 삶에 절실한 참고자료로 삼고 있는 모습을 볼 수 있다. 이러한 환경과 과정에서 경험한 고뇌와 번민은 당시의 芭蕉에게는 대단히 힘든 하나의 과정이었지만, 그러한 삶의 순간순간이 축적되고 집약되어 형성된 그의 無常觀은 직간접적으로 芭蕉의 俳諧世界에 반영됨으로 인해 그의 俳諧가 더욱더 깊은 내면의 세계를 반영하게 되는 계기가 되었다고 할 수 있는 것이다.

3.2 死

‘죽음’이라는 것은 ‘無常’이라는 명제를 대단히 부정적으로 인식하게 한다. 자신의 의지와는 상관없이 누구나 필연적으로 맞이할 수밖에 없는 ‘죽음’은 인간의 삶에 종지부를 찍는 인간의 삶의 운명적인 마지막 통과 의례인 것이다.

大垣に泊りける夜は、木因が家があるじとす。武藏野を出る時、野ざらしを心におもひて旅立ければ、しにもせぬ旅寝の果てよ秋の暮れ

『野ざらし紀行』

芭蕉의 『野ざらし紀行』의 여정의 목적지는 大垣인데, 그곳에서 大垣 지방의 蕉門俳諧의 발전에 있어서 큰 공을 세운 인물인 木因의 집에 머무르게 되었다. 芭蕉는 여기에서, 「武藏野에서 여정을 나설 때는 「野ざらしを心に」라는 句를 읊으며, 여정의 도중에 죽어서 백골이 될 각오로 나섰는데」라고 하며, 위의 句를 읊은 것이다. 句의 내용은, 「어쨌든 무사히 지나간 여정을 마치고, 이곳에 도착하게 되었구나. 저녁 풍경을 보니 가을의 끝자락이 느껴지는구나.」라고 노래하고 있다.

여기에서 芭蕉는 자신의 모든 것을 俳諧 新風 개혁에 집약시켜가고 있음을 알 수 있으며, 그러한 과정에 있어서 발생하는 모든 것을 감내하기로 결심한 芭蕉의 단호한 모습이 느껴진다. 기행에 나서기 전에 芭蕉는 자신의 육신의 인식하였던 삶의 거처는 물론이거니와, 목숨에 대한 부질없는 집착도 이미 버린 모습을 찾아 볼 수 있는데, 이러한 모든 것은 芭蕉가 자신의 삶에 대해서 충분히 고민한 후에 내린 결정이라고 할 수 있을 것이다. 결국 삶의 有限性에서 오는 懷疑와 無常感, 그리고 물질의 소유욕에서 시작되는 인간의 추악한

모습을 이미 달관한 듯한 芭蕉의 모습은 그가 인생에서의 죽음에 대한 공포를 훌쩍 뛰어넘어 有限하고 無常한 것들에 대한 미련을 버렸음을 밝히고 있는 부분이라고 할 수 있다.

一笑と云ものは、此道にすける名の、ほのべ聞えて、世に知人も侍しに、去年の冬、早世したりとて、其兄追善を催すに、塚も動け我泣声は秋の風

『おくのほそ道』

이句는 芭蕉가 元祿2年(1689)의 『おくのほそ道』紀行 중에 읊은 句로써, 자신의 제자이자 당시 金沢 蕉門의 주축이었던 인물인 一笑의 죽음을 애통해 하며 읊은 句이다. 句의 내용은, 「나를 만나기 위해 기다리다 병들어 죽었다고 하는 一笑의 무덤에 가보니, 주위는 가을바람만이 무심히 불며 무덤을 스쳐지나가고 있구나. 이에 북받쳐 오르는 마음에 통곡을 하고 있자니, 그러한 애통한 마음이 가을바람이 되어 一笑의 무덤을 흔들고 있구나. 一笑 자네도 이에 무어라 응답 좀 해 주지 않겠는가」라는 의미로 해석할 수 있다. 이 句는 芭蕉의 많은 句중에서도 絶叫하는 모습이 가장 잘 묘사되어 있는 句라고 할 수 있다. 담담한 가운데 深味하는 句를 만드는 데 익숙해 있던 芭蕉가 이렇듯 激情的으로 자신의 感情을 표출하고 있다는 것은 亡者에 대한 芭蕉의 애정의 정도를 확인 할 수 있는 적합한 자료라고 할 수 있다.

인간의 삶을 가로막고 있는 「죽음」이라는 업보 앞에서 芭蕉는 인생의 虛無와 無常을 뼈저리게 실감하고 있다. 芭蕉는 평생을 자신의 강한 의지로 많은 난관을 극복하며 살아 왔지만, 인간의 힘으로는 어찌할 수 없는 「죽음」이라는 명제 앞에서 자신의 무능함을 통감하고 있는 것이다. 이로 인해 芭蕉는 「죽음」이라는 것이 인간의 삶에 얼마나 힘들고 어려운 상황을 만들어 내는 것인가를 통감하면서 인간의 삶에 대해 연민과 동시에 안타까움을 句 로서 표현하고 있는 부분이라고 할 수 있다.

3.3 不易流行

‘不易流行’에서 「不易이란, 시대가 변해도 가치가 변하지 않는 영원성을 의미하고, 流行은 그때그때 새롭게 형성되는 새로운 풍조를 뜻하며, 이 모든

것은 風雅의 근원이 됨으로 동일하다는 의미이다. 『広辞苑』⁶⁾ 그리고 『日本国語大事典』에 나타나 있는 不易流行의 의미는 「끊임없이 새로운 것을 추구하면서 변화하는 유행성이야 말로 영원히 변하지 않는 不易의 본질이고, 不易과 流行은 서로 근원이 같고, 그것은 風雅의 근원이 된다는 이념이다.」라고 설명되어 있다. 이러한 不易流行에 관한 芭蕉의 생각은 『去来抄』에 잘 나타나 있다.

『三冊子』를 통해서 보면, 芭蕉는 不易과 流行은 서로 전혀 상관이 없는 것 같지만, 필연적인 관계에 놓여 있으며, 서로 견제하는 듯이 보이지만 상호 보완 관계에 있다고 아래의 문장에서 언급하고 있다.

去来曰く 「蕉門に千歳不易の句、一時流行の句といふあり。是を二つに分けて教へ給へる、その元は一つなり。

不易を知らざれば基たちがたく、流行を知らざれば風新たならず。不易は古によろしく、後に叶ふ句なる故、千歳不易といふ。流行は一時一時の変にして、昨日の風今日宜しからず。今日の風明日に用ひがたき故、一時流行とはいふ。」

『三冊子』

去來는 위의 문장에서 다음과 같이 언급하고 있다. 「蕉門에는 千歳不易에 관한 句와 一時流行에 관한 句가 있다고 하며 스승님은 不易流行을 둘로 나누어서 설명하셨지만, 그것을 이루는 근본은 하나라고 하셨다. 不易을 모르면 俳諧의 근본이 성립되지 않으며, 流行을 모르면 새로워지지 않는다. 不易이라는 것은 과거나 후세에 있어서나 그 가치에 변함이 없기 때문에 千歳不易라고 한다. 그리고 유행은 그때그때 상황에 따라 변하기 때문에 어제의 俳風이 오늘 같지 못하고, 오늘의 俳風도 또한 내일은 통용되기 어렵기 때문에 一時流行이라고 한다.」고 하면서 不易流行에 관한 芭蕉의 견해에 대해 설명하고 있다. 그리고 이와 유사한 의미로서 아래의 문장에서는 不易과 變化에 관해 언급하고 있다.

6) 新村出(1992), 『広辞苑』, 岩波書店

師の風雅に、万代不易あり、一時の變化あり。この二つに究り、その本一つなり。その一つといふは風雅の誠なり。不易を知らざれば、實に知れるにあらず。不易といふは、新古によらず、變化流行にもかかはらず、誠によく立ちたる姿なり。

代々の歌人の歌を見るに、代々その變化あり。また、新古にもわたらず、今見る所昔見しに変わらず、哀なる歌多し。是まづ不易と心得べし。また、千變万化する物は自然の理なり。變化にうつらざれば風あらたまらず。

『三冊子』

위의 문장의 내용은 다음과 같이 해석할 수 있다. 「대대로 읊어져 왔던 歌人들의 노래를 살펴보면, 각각 그 나름대로의 변화를 가지고 있고, 또 古今을 가릴 것 없이 사람들의 정서또한 다를 바가 없기 때문에 “あわれ”를 느끼는 노래가 많다. 이것이 바로 不易이다. 그리고 만물이 千變萬化하는 것은 자연의 이치인 것이다. 이렇듯 俳諧도 변화를 추구하지 않으면, 俳風도 새로워질 수 없다.」고 하면서 俳諧에 있어서의 “不易과 變化” 즉, “不易과 流行”에 관한 芭蕉의 俳諧觀에 대해 강하게 역설하고 있다.

위의 문장에서 去來는 스승의 “不易과 變化”에 관한 思考에 관해 정리하고 있는데, 芭蕉가 그와 같은 思考를 가지게 된 결정적 계기는 기행이 전환점이 되었다고 할 수 있다. 원래 “不易과 變化”는 대조적인 개념이지만, 기행 중에 접하게 되는 유적지에서 느끼게 되는 無常과 현실 속에서 常住하며 끊임없이 변화를 추구하고 있는 자신과의 모순적 관계 속에서 “不易과 變化”는 서로를 배제하면서 성립하는 것이 아니라, 지나간 시간의 흔적이 존재했음으로 인해서, 비로소 현재의 자신이 변화를 추구하는 행위가 의미 있는 행위로서 성립될 수 있음에 관해서 언급하고 있는 것이다.

3.4 無常迅速

‘無常迅速’은, 「세상의 흐름이 무척 빠름을 의미하며, 그러한 세월은 결코 사람을 기다려 주지 않으며, 인간의 죽음 또한 그러함으로 인해 속히 온다.」는 의미로 芭蕉의 작품 속에서 빈번히 사용되고 있다.

仏の御心に衆生のうき世を見給ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがはしさも我身にかへり見られて、あはの鳴戸⁷⁾は波風もなかりけり。8)

『更科紀行』

이 문장은 「인간들이 서로 부딪기며 사는 이 덧없는 세상을 부처님이 보신다면, 아마도 이러한 생각을 하시지 않을까하는 생각이 들기도 하고, 인생의 무상과 삼라만상이 빠르게 변해가는 것을 보고 있으면, 마치 나의 신변에서 일어나는 일같이 생각되기도 하고, 이러한 세상의 빠른 변화는, 물살이 세기로 유명한 阿波의 鳴戸도 도저히 비교할 바가 못 되는구나.」라는 내용이다. 芭蕉는 위의 문장에서 너무나 빠른 세월의 흐름 속에 다사다난한 일들이 끊임없이 발생하고 변해가지만, 그 흐름이 너무나 빨라서 도저히 자신이 따라 잡을 수 없을 정도임을 고백하고 있다. 그리고 그러한 세상사 속의 한사람인 자신의 신변에도 많은 일들이 발생하고 변화함으로 인해 자신도 일희일비하지만, 돌이켜 생각해보면 살같이 무심히 지나가 버린 세월에 대한 아쉬움과 무상만이 자신의 삶의 거처에 남아있음을 스스로 안타까워하는 심경의 고백이라고 할 수 있다.

かの住捨し草の戸は、勇士菅沼氏曲水子の伯父なる人の、此世をいとひし跡とかや。ぬしは八とせばかりのむかしになりて、棲はまぼろしのちまたに残せり。誠に知覚迷倒も皆たゞ幻の一字に帰して、無常迅速のことはり、いさゝかも忘るべき道にあらず。

『幻住庵記』

-
- 7) 徳島県 북동쪽에 있는 市이며, 鳴戸海峡에 임하고 있다. 특히 이곳의 鳴戸海峡은 四国와 淡路島 사이에 있는 좁은 바다로서, 밀물과 썰물이 교차할 때, 해협을 통과하는 조수가 마치 천둥이 치는 것과 같은 큰 소리를 내며 커다란 소용돌이를 일으키는 곳으로 유명하다.
- 8) 「世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴戸は波風もなし」『兼好法師物見車』(힘난한 세상을 살다보니 이제 와서 겨우 깨닫게 된 것이지만, 세상살이의 어려움과 비교해보면, 격랑으로 유명한 阿波의 鳴戸海峡의 파도와 바람도 결코 비할 바가 되지 못하는구나.)라는 兼好法師의 句에 근거했다.

위의 문장이 언급되어 있는 「幻住庵記」에는 芭蕉의 인생관이 잘 나타나 있는데, 그 중에서도 芭蕉가 자신의 지나간 인생을 회고하고 「終に無能無才にして此一筋につながる。」라고 하며, 俳諧의 길을 추구하는 자신의 심경을 밝힌 문장은 너무나 잘 알려져 있고, 『笈の小文』의 序文과 더불어 芭蕉의 삶을 가장 잘 나타낸 문장이라고 할 수 있다.

이 글은 「집주인이 떠나가 버린 이 암자는 菅沼曲水の 숙부가 세속을 등지고 살던 곳이라고도 전해지고 있다. 이 암자의 주인도 이미 8년 전에 이 세상을 떠났고 암자만이 남아 있다. 실로 인간의 깨달음도 고민도 모두가 ‘無常’이라는 이 한마디에 귀착되기 때문에 허무한 이 세상을 살아가는 동안에는 잠시도 잊어서는 안 될 이치인 것이다.」라는 내용으로서, 芭蕉가 晩년에 약 4개월간 머물렀던 幻住庵에서 자신의 인생의 철학에 관해서 언급하고 있다. 여기에서 芭蕉는 인생이라는 것은 때때로 희로애락의 여러 가지 모습으로 다가오지만, 그것이 결코 인간의 의지나 뜻대로만 되는 것이 아니기 때문에 신속히 흐르고 변해가는 인생을 살다보면 때로는 실망이나 고민이 있을 수도 있음을 인지하고 자그마한 일에 너무 일희일비하지 않는 것이 현명한 처사임을 언급하고 있다.

芭蕉는 迅速하게 변화하며 흐르는 인생 속의 ‘無常’에 대해 자신이 명확한 인생관을 소유하고 있었기 때문에 자신의 삶 속에서 인생의 道를 이해하고 수긍하고 인위적인 인간의 의지에 의하기 보다는 자연의 진리인 천지인의 조화에 의한 무리가 따르지 않는 삶을 선택했었던 것을 볼 수 있다. 하지만 그러한 芭蕉의 철학은 인간의 무능함을 탓하거나 염세적인 思考에서 발생한 부정적인 人生觀에서 나온 것은 결코 아닌 것이다. 인생이란 인간 각자에게 주어진 하나의 여정과 같은 것이고 거기에는 반드시 자연의 법칙과 이치가 동반하기 때문에 그것에 순응하며 자신의 주어진 삶에 충실하자는 인생관으로 일관하고 있는 그의 삶의 모습이 이러한 그의 철학을 이루는 기반이라고 할 수 있는 것이다.

3.5 造化隨順

芭蕉는 항상 인간과 자연의 조화를 강조해 왔고, 자연의 일부분으로서의 인간이 갖는 의미를 중시했다. 이것은 즉, 모든 자연 만물은 자신의 本性을

망각하지 않고, 자연의 섭리에 따르면서, 천지자연의 질서에 순응할 때, 비로소 그 존재의 참의미를 찾을 수 있다는 사상을 강조해 왔던 것을 뜻하는 것이다. 그리고 만물의 「本情」·「本性」·「本意」등에서 오는 자연과의 造化는 인간의 주관에 의해 개념화되는 것이 아니기 때문에, 사심을 버리고 자연의 妙理에 겸허히 접할 수 있을 때, 자연과 詩人은 일체화 되는 物我一如의 세계에 도달할 수 있다고 주장하고 있는데 芭蕉의 그러한 사상의 중심에는 造化隨順이 자리하고 있는 것이다.

「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」と師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事なり。この習へといふ所を己がままにとりて、終に習はざるなり。習へといふは、物に入りて、その微の顕れて情感ずるや、句と成る所なり。たとへ、物あらはにいひ出でて、その物より自然に出づる情にあらざれば、物と我二つになりて、その情誠に至らず。私意のなす作意なり。

『三冊子』

『三冊子』는 芭蕉의 제자인 土芳에 의해 만들어진 俳論書로서 晩年の 芭蕉가 俳諧에 관한 이론과 俳諧의 예술적 경지에 관해 언급한 가장 대표적인 자료로서 인정받고 있다. 위의 문장은 다음과 같은 의미로 서술되고 있다. 「『소나무에 관한 것은 소나무에게 배우고 대나무에게 관한 것은 대나무에게 배워라.』라고 스승님이 말씀하신 의미도 결국은 私心を 버리라고 하는 의미이다. 여기에서 말하는 「배워라」라는 것을 私心を 가지고 받아들이기 때문에 결국은 배우지 못하게 되는 것이다. 여기서 「배워라」라고 하는 의미는 사물의 본질 속에 깊이 접근함으로써 작자가 감동을 얻고, 그것이 결국은 句의 실체가 되는 것이다. 예를 들면, 어떤 사물을 아무리 명확하게 표현한다고 하더라도 그 사물로 부터 자연히 느껴지는 감동이 아니면 사물과 작자가 별개가 되기 때문에 그러한 감동은 결코 진정한 것이라고 말할 수 없으며, 그것은 사물의 본질에 근거하지 않은 私心に 의한 것에 지나지 않는다.」라고 하는 것이다.

위의 문장에서 芭蕉는 私心を 버릴 것을 강하게 강조하고 있다. 즉 모든 자연적 존재는 자신의 주관을 버리고 객관적인 입장에서 그 내면에 존재해

있는 이치에 접근해 깨달았을 때, 비로소 진리를 깨닫고 자득하는 경지에 이를 수 있으며, 그것은 俳諧의 세계에 있어서도 중요한 것이라고 언급하고 있다. 특히 위의 문장에서 芭蕉는 자연이라는 존재에 대해서 ‘스스로 존재의 가치를 갖는 것’, ‘스스로 질서를 갖는 독자적이 존재로서의 造化’로서 이해하고 있는 것을 볼 수 있다. 芭蕉는 이러한 자연의 이치와 흐름에 거스르지 아니하고 순응하며 따르는 것이 인간의 삶은 물론이거니와 俳諧師의 생활에 있어서도 대단히 중요한 의미를 갖는다고 강조하고 있는 것이다. 芭蕉가 私心을 버리고 無心으로 배우라고 언급한 것은 불교의 無常觀으로부터 온 것이라고 할 수 있으며, 造化隨順·物我一如함으로서 인생의 無常을 극복하고 진정한 의미에 있어서의 자연의 일부분으로서의 삶을 영위할 수 있다고 말 하고 있는 것이다.

しばらく身を立む事をねがへども、これが為にさへられ、暫く学んで愚を曉ん事をおもへども、是が為に破られ、ついに無能無芸にして只此一筋に繋る。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、休休が茶における、其 貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処、花にあらずという事なし、おもふ所、月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり

『笈の小文』

위의 문장에서 芭蕉는 「나도 한때는 출세에 뜻을 세워보기도 했고, 불교에 귀의해서 해탈의 경지를 경험해 보고자 노력도 해 보았지만, 이 모든 것은 俳諧를 향한 열정 때문에 체념하게 되었고, 결국은 無能無芸함으로 인해 이렇게 俳諧師의 길에 들어서게 되었다. 西行가 추구했던 和歌의 세계와 宗祇가 連歌師로서 추구했던 세계, 그리고 雪舟가 추구했던 회화의 세계와 千利休가 추구했던 茶道의 세계 등은 그 근본은 일맥상통하는 동일한 세계이다. 俳諧라고 하는 것은 천지자연 속에서 사계절의 변화와 벗하는 것이다. 그렇기 때문에 눈에 보이는 모든 것이 꽃이고, 생각하는 모든 것이 달인 것이다. 이러한 모든 것은 속물과는 다른 것들이다. 인간의 눈에 보이는 사물이 꽃으로 보이지

않는다면 야만인이나 다름없고, 마음에서 생각하는 것이 꽃처럼 우아한 것이 아니라면 금수와 같다. 그러므로 야만인이나 금수와 같은 생활에서 벗어나 천지자연에 순응하며 따르라는 것이다。」라고 언급하고 있다.

芭蕉에게 있어서 「造化」라는 것은, 폭넓은 의미에서의 「大自然」을 의미하고 있으며, 그러한 大自然과 自我가 融合하고 同化하는 것을 중시하는 人生觀을 가지고 있었고, 예술적으로 그것을 표현하려고 시도했던 것이다. 芭蕉가 가지고 있는 「自然觀」이라는 것은, 자연과 인간을 별개의 존재로서 본 것이 아니라, 인간이 자연의 일부로 포함하는 의미에서의 「自然」에 귀결되고 있는 것이다. 그렇기 때문에 芭蕉는 그의 俳諧에서 「造化」를 자연의 묘리와 진리, 나아가서는 사물의 본성으로서 인식했으며, 인간이 그러한 인식의 단계를 넘어섰을 때 ‘無常’을 극복할 수 있으며, 비로소 자신이 俳諧師로서의 본연의 의미를 찾을 수 있다고 본 것이다.

자연의 흐름이라고 하는 것을 결국은 시간의 흐름을 의미하는 것으로서, 인간의 삶을 무력화하고 無常觀을 느끼게 하는 가장 큰 敵은 자연의 흐름 즉, 시간의 흐름이라고 인식한 것이다. 그러나 芭蕉는 인간의 삶을 자연과 별개로 보지 않고, 흐르는 자연의 일부로 인식하며 그 속에서의 인간의 삶의 모습과 감정을 俳諧로서 그려내고자 했던 것이다. 그러한 芭蕉의 의지는 진정한 俳諧師로서의 삶을 진지하게 追求하는 그의 모습에서 엿 볼 수 있으며, 그것을 자연에 順應하며 자연의 내면세계에 더욱더 접근할 수 있는 방법으로 인식했기에, 그의 俳諧 改革추진은 그러한 의미에서 無常을 극복하기 위한 노력의 일면이라고 이해 할 수 있는 것이다.

4. 結論

‘無常’이라는 개념이 가지는 총합적인 이미지는 삶에 활력이나 희망을 불어 넣는 적극적이고 희망적인 요소보다는, 인간의 삶을 부정적으로 한정짓고 회의적으로 만들어가는 필연적인 이미지로 말미암아 인간의 삶을 부정적으로 인식하게 하고 죽음의 그림자를 가깝게 느끼게 하는 요소로 작용하고 있음을

부정하지 아니할 수 없다.

‘無常’이라는 개념의 이러한 부정적인 이미지의 작용은 芭蕉에게도 여지없이 작용해서 芭蕉의 삶과 俳諧師로서의 초기 활동에 영향을 끼쳤으며 그의 작품에도 그대로 반영되었던 것이다. 芭蕉는 하급무사로 태어난 자신의 태생적 한계와 고향인 伊賀上野에서의 자신의 희망의 끈이었던 주군인 蟬吟의 요절로 인한 뜻하지 않은 환경의 변화 등으로 ‘無常’이라는 말에 익숙해지기 시작했던 것이다. 그리고 고향의 산천과 가족을 뒤로 하고 江戸에서의 금의환향을 꿈꾸며 자신의 삶이 기반을 잡아 갈 즈음에 발생한 江戸의 대화재로 말미암아 芭蕉庵이 소실되어 뜰을 끌어안고 강으로 뛰어 들어서 가까스로 목숨을 구했던 기억은, 그에게 ‘無常’의 의미를 더욱더 깊이 각인 시켰을 것이다. 그로 인해 芭蕉는 그 시점에서 이미 ‘無常’으로 인한 삶에 대한 체념이 무엇인지를 통감하면서 삶에 대한 체념과 수궁이라는 선택 앞에서 깊은 고민에 빠졌던 것이다.

하지만 芭蕉는 俳諧師로서 新風을 개척해나가는 과정에 있어서 경험한 많은 좌절과 번민을 겪으면서 자신을 삶을 막아서는 ‘無常’이라는 자연의 이치를 부정하거나 배척하기보다는, 자신이 자연의 일부분으로서 살아가는 동안에는 필연적으로 함께 할 수밖에 없는 동반적 요소로서 받아들여지게 되었던 것이고, 비로소 ‘無常’을 자연의 한 구성요소로 이해하고 긍정할 수 있었던 것이다. 어떤 의미에서는 그것은 ‘無常’을 인생을 보다 의미 있게 살 수 있는 방편으로서의 적극적인 극복의 대상으로 본 것이 아니라, 인간에게 주어진 필연적인 자연의 또 하나의 이치로 판단하고 수궁하며 순응함으로써 평소의 자신의 소신이자 철학인 物我一如와 造化隨順이라는 자연의 진리를 그의 삶 속에 그대로 실천하고 있는 것이라고 할 수 있다.

자신의 本性을 지키며, 천지자연의 질서에 순응하고자 노력함으로써 인간의 힘으로는 도저히 극복할 수 없는 숙제처럼 느껴졌던 ‘無常’이라는 과제를 자신의 작품 속에서 새로운 의미로서 소생시킬 수 있었던 원동력은 만년의 10년간에 걸친 기행이라고 할 수 있다. 기행을 통하여 더욱더 정화되고 연단된 芭蕉의 俳諧 思想과 삶의 哲學은 ‘無常’이라는 난관을 무사히 극복할 수 있었으며, 이러한 일련의 과정은 그의 俳諧를 近世俳諧의 주축으로 성장하게 한 절대적인 계기가 되었을 것이라고 평가할 수 있을 것이다.

<參考文獻>

- 김정례(1992) 「松尾芭蕉と宗教」, 전남대학교 인문과학연구
- 박소현(2003) 「하이쿠(俳句)의 본질과 예술성에 대한 고찰 - 센류(川柳)와 하이쿠의 비교를 통하여」 『日本學報』韓國日本學會
- 유옥희(2002) 『바쇼 하이쿠의 세계』보고사
- 이현영(2007) 「근세하이카이 속에 나타난 연중행사 고찰」 『일본연구』한국외국어대학교 일본연구소
- 허 곧(2008) 「芭蕉의 俳諧世界에 나타나 있는 「道」에 관한 고찰」 『日本學報』韓國日本學會
- 허 곧(2008) 「芭蕉의 俳諧世界에 있어서의 「가족」이 갖는 의미에 관한 연구」 『日本學報』韓國日本學會
- 허 곧(2008) 「芭蕉と莊子の 「自然」に関する研究」 『日本學報』韓國日本學會
- 허 곧(2007) 「『去來抄』에 나타나 있는 바쇼의 「웃음」에 관한 고찰」 『日本學報』韓國日本學會
- 허 곧(2007) 「바쇼의 사상세계와 「종교」에 관한 고찰」 『日本學報』韓國日本學會
- 赤羽学(1999.1) 『芭蕉の不易流行説と仏教的無常觀』安田女子大学 「国語国文論集」
- 安部正美(1991.2) 『無常の觀は亡師の心 -芭蕉の一面觀』専修大学 「専修国文」
- 井本農一(1968) 『芭蕉の世界』, 小峯書店
- 栗山理一(1963) 『俳諧史』, 塙書房
- 佐藤圓(1973) 『芭蕉と禪』, 桜楓社
- 杉浦正一郎(1958) 『芭蕉研究』, 岩波書店
- 広末保(1967) 『芭蕉 その旅と俳諧』, 日本放送出版協會
- 廣末保(1988) 『可能性としての芭蕉 完結拒否の發想』御茶の水書房
- 堀切実(1996) 『おくのほそ道 永遠の文学空間』, 日本放送出版協會
- 堀切実(1989.5) 「『おくのほそ道』序章の漂泊觀」, 『国文学』, 学燈社
- 堀切実(1989.12) 「『おくのほそ道』の文学空間—短詩型的紀行文学としての特質—」, 『文学』, 岩波書店
- 堀信夫(1990.4) 「『おくのほそ道』読解—その時間軸にそって—」, 『国語と国文学』, 東京大学国語国文学会,
- 村松友次(1983) 『芭蕉講座 文學の周辺』有精堂
- 村松友次(1977) 『芭蕉の作品と伝記の研究』, 笠間書院
- 宮西一積(1973) 『芭蕉の文学』, 桜楓社

접 수 일: 12월 31일
심사완료: 01월 08일
게재결정: 01월 29일

<要旨>

芭蕉の俳諧世界に現れている ‘無常’ に関する考察

‘無常’ という概念がもつ総合的なイメージは人間の生活に活力と希望を与えると
いう積極的で、希望的な要素よりは、人間の生活を否定的に限定させたり、懐疑
的にしていく必然的なイメージをもっている。‘無常’ のこのような否定的な概念は芭
蕉の作品のあちこちから散見できるのであり、特に芭蕉の初期俳諧師の活動に影響
したのである。

芭蕉は俳諧師として新風を開拓していく過程で多くの挫折と煩悶を経験しながら
も‘無常’ という自然の理を否定したり、排斥したりするよりは自分が自然の一部分
として生きていく間は必然的に同伴せざるをえない要素として認めて、それを受け
入れることによってはじめ‘無常’ を自然の構成要素として肯定するようになった
のである。ある意味では、それは‘無常’ という課題に対して、人間の人生をより豊
かにするため積極的に克復しなければならない対象として見たのではなく、人間に
与えられた必然的な自然の理として判断したのである。そしてそれに順應すること
によって‘物我一如’ とが‘造化随順’ という自然の眞理を自分の生活にそのまま適応し
ていくことに成功したのであると言える。芭蕉の俳諧は彼が‘無常’ という難關を克
復することによって彼の俳諧が近世俳諧の大黒柱として成長していく過程で決定的
な役割をしたのではないかと思うのである。

오다 노부나가의 정치수단으로써의 다도*

박 전 열**

ipark@cau.ac.kr

< 目 次 >

>

- | | |
|---------------------|---------------------|
| I. 서론 | IV. 다도구 하사의 증여문적 의미 |
| II. 명물수집의 시대적 상황 | V. 결론 |
| III. 다도구의 수집과 다회 개최 | |

Key Words : 오다 노부나가(Nobunaga Oda), 다도구(a tea service set),
명물수집(meibutu(noted product) hunting), 다회(a tea party),
포틀래치(a potlatch)

I. 서론

오늘날의 일본에서 다도는 취향이나 여건에 따라서 누구나 즐길 수 있는 전통문화의 한 가지이지만, 다도의 양식이 형성되던 16세기에는 일부 계층만이 향유할 수 있는 특권적인 문화 활동이었다.

격식이 확립되기 이전에 유흥적 요소에 흘러 비판의 대상이 되던 다도에 합리적인 진행방식과 미의식의 정립으로 다도의 체계를 구축한 센리큐(千利休 1522-1591)가 활동한 시기는 전국(戰國)시대의 중반기였다. 당시의 다도계의 최고 지도자인 센리큐는 최고 권력자 오다 노부나가(織田信長 1534-1582)와 도요토미 히데요시(豊臣秀吉 1536-1598)의 측근으로써 다도에 관련된 업무

* 이 논문은 2009학년도 중앙대학교 교내학술연구비지원에 의하여 작성되었음

** 중앙대학교, 일어일문학과, 교수, 일본문화론

를 담당하는 다두(茶頭)였다.

특히 일찍부터 무사가문의 문화로써 다도를 익히고 있던 노부나가는 권력의 정점에 오르자 다도를 적극적으로 즐기는 한편 다도의 진행에 소요되는 여러 가지 다도구를 재화(財貨)로 인식하여 적극적으로 수집하고, 다회(茶會)를 열어 다도구를 활용하였다. 뿐만 아니라 자신의 다회에서 실제로 썼던 다도구를 하사(下賜)함으로써 나의 귀중한 소장품이니 감사해야 한다는 분위기를 조성했다.

노부나가의 다도 즉 「다도구의 수집과 다회의 개최라는 일련의 행위」는 중요한 정치수단으로 활용되었으며, 히데요시가 남긴 서간 가운데 「다도는 곧 정치의 도(茶湯御政道)」라는 표현을 썼을 정도로 정치에 다도가 적극적으로 활용되었음을 잘 알 수 있다.

다도구는 「다이묘(大名) 사이에 신의의 징표로 다도구를 헌상되기도 하고 권력자층에서는 다도구를 하사함으로써 일종의 거래의 대상」¹⁾으로 삼았다. 하사하려면 먼저 하사품 즉 다도구의 확보가 선행되어야 하는데, 이는 권력을 바탕으로 하여 진상을 받거나 이른바 명물사냥(名物狩り)이라고 하는 강제매수 혹은 대가를 지불하는 매수 등의 방식으로 다도구의 수집이 이루어졌다. 일본의 다도는 정적(靜的)이면서 평화주의적인 이미지가 있지만 16세기 후반에는 정치와 깊이 관련되어 있었음이 흥미롭다.

본고는 노부나가와 권력의 정점에 이르던 시기이자 센노리가 다도를 담당하는 측근으로써 노부나가를 보필하던 시기에, 정치의 중심지인 교토와 경제의 중심지인 사카이(堺)를 중심으로 노부나가가 명물로 평가받던 다도구를 수집하는 과정과 하사하는 사례 등을 파악하여, 그 방식과 의미를 밝히고자 함에 목표를 둔다. 특히 다도구의 수집과 사용에 머물지 않고 이를 하사함 권력을 강화하려는 과정 등을 분석함으로써 다도가 지니는 권력의 확보와 유지수단으로써의 역할을 이해하고자 한다.

특히 다도구가 수집이나 하사라는 형식으로 이동됨은 시장경제원리와는 시간과 공간이 전혀 다른 세계에서 전개되던 재화의 증여방식의 하나인 포틀래치(potlatch)와 유사한 구조를 지니고 있다는 점에 주목하고자 한다.

1) 熊倉功夫(1991) 『茶の湯の歴史』 朝日新聞社. p.17

II. 명물수집의 시대적 상황

다도라는 일정한 양식이 형성되기 이전에 차를 마시는 방식은 무사계층과 도시의 상인계급 사이에 취미활동이나 놀이문화로써 존재하였다. 그러나 16세기 중반에 전문적인 다인(茶人)이 활동하기 시작하며 차마시기는 단순한 음료 행위가 아니라, 격식을 갖추어 차를 마심으로써 도(道)를 이루는 경지에 들어갈 수 있다는 새로운 경지를 제시하였고 이에 공감하는 무사와 상인들이 다도를 적극적으로 즐기며 새로운 방식을 고안해내기에 이른다. 지배계층으로써의 무사들이 새로운 문화활동으로써 다도를 수용하던 시기에 상업도시 사카이를 중심으로 유력한 상인 가운데 다도에 심취하는 이들이 등장하였다. 이런 시기에 공생관계를 구축해야 할 거물급 상인과 무사들 사이에서 다도가 공통된 문화활동의 중요한 매개체가 되었다. 특히 무사기문에서 성장한 노부나가는 일찍부터 다도에 흥미를 지녔고, 권력의 정점에 이르렀을 때는 당대 최고의 다인을 측근으로 고용하여 빈번히 대화를 개최하며 수집한 다도구를 부하에게 하사하였다. 이후 다도와 정치가 유착되는 문화적 구조의 시발점이 되었다고 생각된다.

무로마치 시대(1336-1573)의 말기 전국시대에 기나이(畿内)를 중심으로 각지에서 무력으로 기반을 굳힌 슈고(守護) 다이묘가 각자의 영지를 강력하게 지배하며, 전국(戰國) 다이묘로써 두각을 나타내기 시작하였다. 그 가운데 대표적인 무장(武將)인 오다 노부나가(織田信長)가 최초로 전국을 지배하기에 이른다. 그의 부친 오다 노부히데(織田信秀 1510-1551)는 오와리(尾張)의 슈고 다이칸(守護代官) 집안의 출신의 무장이었다. 부친이 죽자 가독(家督)을 상속받은 이래 동족과의 투쟁을 거친 뒤, 이마이 요시모토(今井義元)를 격파하고, 도쿠가와 이에야스(德川家康), 아사이 나가마사(淺井長政) 등과 동맹을 맺음으로서 대항세력이 없음을 확인하자, 이윽고 정치의 중심지인 교토로 입경할 기회를 기다렸다.

1568년에는 기타이세(北伊勢)와 오우미(近江)를 평정하고 9월에는 아시카가 요시아키(足利義昭)를 호위하여 입경하여, 그를 무로마치 막부 제15대 장군으로 임명받도록 하며, 실세로써 권력의 정점에 이르렀다. 노부나가는 서화를 익혀 능통하며 다도를 즐겼는데, 당시의 다도는 소박하고 검소하며 무일물

의 경지를 이상적인 세계로 여기는 이른바 와비(わび)의 다도를 추구하는 경향을 띠었다.

그러나 그는 와비의 이상세계를 구현하며 즐거움을 누린다는 본래의 목적과는 달리 다도구라는 물질주의에 이상할 정도로 집착했다. 무력으로 전국 다이묘를 제압하여 절대적인 권력을 확보하는 한편 사카이의 상인을 굴복시켜 경제력을 확보하자, 본격적으로 다도구의 수집에 나섰다. 권력과 재력을 동원하여 수집한 다도구는 중국에서 수입한 것, 이미 명물(名物)이라는 평가를 받아 유명해진 다도구, 즉 값비싼 다도구를 소장하려고 애썼다. 다도에 능통하며 다도구의 가치를 분별하는 감식안을 지닌 사카이의 유력한 상인 출신의 다인에게 능력을 과시하려는 의도가 있었다.

대권력자이자 무사이기 때문에 값비싼 다도구를 소장하지 않았다고 하여 체면이 손상되거나 평가가 나빠질 상황은 아니지만, 노부나가는 다도와 다도구를 철저히 정치수단으로 활용하였다.

1568년 제14대 장군 아시카가 요시히데(足利義榮)가 재위한지 9개월만에 병들어 죽자, 노부나가는 자신에게 항거할 세력이 없음을 확인하고 요시히데의 4촌인 요시아키를 호위하여 교토로 들어갔다. 요시히데는 조정으로부터 제15대 장군으로 임명받음으로써, 공로자인 노부나가는 실권을 장악했다. 이때부터 노부나가는 권력의 정점에서 대항하는 무장과 사찰세력을 격퇴하고 각지의 반란을 진압함으로써 통일된 정권을 수립하는 기초를 마련했다.

이와 과정은 강력한 무력과 경제력을 바탕으로 전개되었으며, 이 시기는 이전까지 유행하던 서원차(書院茶)²⁾가 시들해지고 새로운 와비차 방식이 대두되었다. 넓은 방에 중국에서 수입한 미술품이나 다도구 등의 장식품을 호화롭게 꾸며놓고 음식과 술을 마시면서 차도 마시고 놀이도 즐기는 방식인 서원차는 보다는 소박하고 검소하며 선적(禪的)인 정신세계를 중시하는 와비차가 유행하기에 이른다. 이런 새로운 다도를 선도하던 다케노 조오와 이마이 소큐(今井宗及 1520-1593), 쓰다 소큐(津田宗及 ?-1591), 센리큐³⁾는 사카이의 유력

2) 서원차는 무사계층이 자신의 위세를 과시하기 위한 연회이자 차맛을 겨루는 놀이로써 정치적 권력자 사이의 교류수단이기도 했다.

3) 3사람은 사카이의 유력상인 출신이며, 노부나가와 히데요시의 다도 사범으로 천하삼장(天下三宗匠)이라 일컫는다. 이들에게 노부나가는 다도고문역인 차도(茶頭)라는 직

한 상인출신이었다.

전국시대에 해외 무역항이자 군수품 제조업으로 번창하던 사카이는 상업과 제조업이 발달하여 부유한 상인들이 많았고, 전국 다이묘에게 군수품을 공급하며 막대한 부를 축적하였다. 상인들 가운데는 당시의 문화교양으로써 다도에 깊은 교양을 지닌 사람이 많았고, 이들은 다수의 값비싼 다도구를 소장하고 있었으며, 이 가운데서 새로운 다도를 양식을 체계화시키는 지도자가 배출되었던 것이다.

특히 대표적인 「중국문화이자 높은 공지를 지닌 선종(禪宗)」⁴⁾이 들어오고 여유 있고 자유로운 도시의 분위기가 문화활동을 활성화시켰다. 이런 분위기가 창조적인 취미활동의 산물인 와비차의 발상지로써 기능하게 되었던 것이다.

1569년 노부나가는 한창 번창한 상업도시인 사카이에 주목하여 일찍부터 이곳을 장악하여 직할지로 삼고자 하였다. 이를 위하여 먼저 상인집단에 대하여 화살 구입비 즉 군용금 명목으로 2만관을 강압적으로 부과했다. 사카이의 자치를 지도하는 유력상인 집단인 에고슈(會合衆)⁵⁾는 강압에 대응하는 방법을 논의한 끝에 항전하다가 도시를 황폐화시키기 보다는 비용을 치르고 도시를 지키는 것이 낫다고 판단하여 노부나가의 위세에 굴복하였다. 항전하지는 강경과를 설득하여 협상을 맡았던 상인 이마이 소큐는 이미 노부나가에게 다도구를 헌상하여 교분이 있던 인물이다. 노부나가가 아시카가 요시아키를 장군으로 취임하게 한 직후 「세쓰(摂津)의 이케다(池田)를 치고 아쿠타가와(芥川 현재의 高槻)에 머물던 1568년, 이마이 소큐는 명물이라고 알려져 있던 다도구 2점을 헌납」⁶⁾하여 장래의 안전을 대비해두었던 것이다.

노부나가는 이후에 사카이의 경제력을 활용하는 한편 사카이의 다인을 측근으로 두고 다회를 진행하도록 하는 한편 다도구를 평가하거나 수집하는데 도움을 받기도 하였다.

책을 임명하고 봉록으로써 토지를 주며 다도에 종사하도록 했다.

4) 永島福太郎(1982) 『茶道文化論集』 淡交社 p.127

5) 에고슈는 노야슈(納屋衆)라고도 하는 세습적인 문벌지배층의 유력상인집단으로, 사카이 등 중세자치도시의 행정과 사법을 담당하였다. 전국시대에는 36명이 활동했으며, 다인이 이마이 소큐, 쓰다 소큐도 포함된다.

6) 『信長公記』 권1 (이하 太田牛一 『信長公記』 国立国会図書館 近代デジタルライブラリー 2010) 今井宗久、是れ又、隠れなき名物松島の壺、并に紹鷗茄子を進獻

Ⅲ. 다도구의 수집과 다회의 개최

1. 수집 방법과 명물의 내용

노부나가가 위세를 이용하여 헌납하도록 하거나 대가를 치르고 명물 다도구를 매수하는 이른바 「명물사냥」은 교토에 진출한 1569년부터 시작하였다. 이후 사카이의 상인의 정보제공을 비롯한 여러 경로로 다도구의 수집이 집요하게 이루어졌다. 노부나가는 교토에 진출한 이래 숙소를 따로 짓지 않고 시내에 있는 대사찰을 이용하였고, 그때마다 무장이나 교토의 유지 혹은 사카이의 다인을 불러 다회를 개최했다. 이런 과정에 다도구에 대한 지식과 가치를 깊이 알게 되어 본격적인 수집에 나섰다고 볼 수 있다.

노부나가의 환심을 사려는 경우, 용서를 빌어 목숨을 건지려는 경우 등 궁지에 몰린 경우에는 아깝지 않게 여길 수도 있겠지만, 타의에 의하여 소중히 간직하고 있던 다도구를 내어놓을 때는 매우 분하고 억울하게 느끼는 경우도 있었을 것이다. 대개 명물을 소장하고 있는 사람은 일반인이 아니라, 무사이거나 경제적 능력이 있는 상인이 대부분이었다. 명물을 소장한다는 일 자체가 문화인이자 사회적 지위를 지닌 사람임을 상징하는 것이기도 하였다.

노부나가의 일대기를 편년체로 쓴 사료인 『신초공기(信長公記)』에는 전투와 정치활동뿐만 아니라 일상생활과 취미활동 등도 자세히 기록되어 있다. 1569년부터 1578년 사이의 기록을 통해서 다도구의 원래 소장자, 명칭, 수집 경위 등을 살펴볼 수 있다.

『신초공기』 권1은 1568년의 기록인데 권력을 장악한 직후 아쿠타에 체재할 때 선물을 들고 찾아온 사람이 문전성시를 이루었다고 했다. 이 가운데는 나중에 노부나가에게 반기를 드는 마쓰나가 히사히데(松永久秀)도 포함되어 있었다.⁷⁾ 그는 일본에서 제일간다는 차단지지를 현상했는데, 중국에서 전래되어 무로마치 제3대 장군 아시카가 요시미쓰(足利義滿 1358-1408)가 소장하다가 부하에게 주었다는 쓰쿠모나스(九十九茄子)라는 차단지였다. 이 차단지는 그후에 행방불명되었다가 다인 무라타 주코(1423-1502)가 발견하여 99관에

7) 『信長公記』 권1 松永弾正は我が朝無双のつくもがみ進上申ツされ、今井宗久、是れ又、隠れなき名物松島の壺、并に紹陽茄子を進獻。

구입했다는 일화와 더불어 히데요시 등 여러 유명인의 손을 거쳐 현재까지 전해지고 있다.

같은 시기에 이마이 소큐도 마쓰시마(松島)라는 차호와 다케노 조오가 쓰던 명물 차단지(茶단지)를 헌상하였다. 이를 계기로 이마이 소큐와 노부나가는 정치적 득실과 다회의 공유를 위한 유대관계를 지속하게 되었다.

『신초공기』 권2에 의하면 노부나가는 「금, 은, 쌀, 돈은 전혀 부족하지 않았기 때문에 중국제 다도구 천하 명물을 가지고 싶어했다」고 했다. 고토와 사카이에서 다도에 조예가 깊은 부하 마쓰이 유칸(松井友閑 1535-1585), 니와 나가히데(丹羽長秀 1535-1585)를 앞세워 명물수집에 나섰다. 고토에서는 1569년 봄에 다이몬지야(大文字屋)에게서 하쓰하나(初花)라는 명(銘)⁸⁾이 붙은 차단지(茶入れ), 유조호(祐乗坊)에게서 후지나스(富士茄子)라는 차단지, 텐노지에게서 대나무 차시(茶匙), 이케가미 조케이(池上如慶)에게서는 순무모양의 꽃병, 사노(佐野)에게서 매를 그린 족자, 에무라(江村)에게서 복숭아 모양의 꽃병 등을 매수했다.⁹⁾

노부나가는 은광(銀鑛)을 확보하고 무역을 통제하는 등으로 막대한 수입을 올리고 있었기 때문에 충분한 재력이 있었다고 생각된다. 특히 노부나가 금이나 은을 용도에 따라서 나누어 썼는데 다도구 등의 「명물을 징발할 때는 은을 사용」¹⁰⁾하여 대가를 지불했다고 한다.

1570년에는 마쓰이 유칸, 니와 나가히데를 앞세워 사카이에서 쓰다 소큐가 소장하고 있던 송나라 화가 조창(趙昌)이 과자를 그린 족자, 야쿠시지인(薬師寺院)의 고마쓰시마(小松島)라는 다호, 기름가게를 하는 조유(常祐)에게서 밀감 모양(柑子)의 꽃병, 마쓰나가 히사히데에게서 소상팔경도(瀟湘八景圖)¹¹⁾

8) 다도구의 명(銘)이란 소유자 제작자 혹은 다도구의 모양이나 특징 등을 풍류적인 어휘로 붙이는 명칭

9) 『信長公記』 권2 名物召し置かるゝの事 然るに、信長、金銀・米錢御不足なきの間、此の上は、唐物天下の名物召し置かるべきの由、御諒候て、先、上京大文字屋所持の一、初花。祐乗坊の一、ふじなすび。法王寺の一、竹さしやく。池上如慶が一、かぶらなし。佐野一、雁の絵。江村一、もゝそこ。以上。友閑・丹羽五郎左衛門御使申し、金銀八木を遣はし、召し置かれ、天下の定目仰せ付けらる。

10) 高木久史(2005) 「信長期の金銀使用について」 『福井県文書館研究紀要』2 福井県文書館 p.25

11) 13세기 남송의 화가 목계(牧谿)의 「소상팔경도(瀟湘八景圖)」가 일본에 전래되어 명물로

의 하나인 연사만종(煙寺晩鐘)을 그린 족자 등을 매수했다.¹²⁾

『신초공기』가 노부나가를 긍정적으로 평가한 기록이기 때문인지 다도구를 손에 넣을 때는 금은으로 대가(代物金銀)를 지불했다고 기술했지만, 그렇지 않은 경우도 많았다. 일본의 다도사 연구에 많은 업적을 낸 무라이 야스히코(村井康彦)의 「스스로 현상하는 사람도 있었기 때문에 노부나가의 수중에는 많은 명물이 수집되었다」¹³⁾는 지적은 권력의 속성을 전제로 하여 설득력을 얻고 있다.

노부나가는 명물 다도구가 있다는 것을 알면 사람을 시켜 강제로 매수하였는데, 매수당하는 측은 쉽게 내어놓지 않으려고 애를 썼던 사례가 있다. 사카이 이의 큰 상점인 덴노지야(天王寺屋)를 경영하던 쓰다 소타쓰(津田宗達), 소큐(宗及), 소본(宗凡) 등 3대는 모두 정치활동도 했고, 다인으로써 많은 다회를 열었는데 다회를 열 때마다 기록을 남겼다. 이 기록은 후대에 집대성되어 『덴노지야 다회기(天王寺屋會記)』라는 서명으로 간행되어 오늘날에도 전해지고 있다. 이 가운데 1574년 12월, 노부나가가 마쓰모토(松本)라는 명이 붙은 다완을 매수하는 복잡한 과정이 기록되어 있다.

노부나가에게 다완 매수 명령을 받은 이마이 소큐에게 마쓰모토 주호(松本珠翫)는 소중한 다완을 좀처럼 내어놓으려 하지 않았다. 마쓰모토는 12월 20일 노부나가의 뜻이 정 그렇다면 직접 서신을 보내달라고 이마이 소큐에게 조건을 제시했다. 7일 뒤에 쓰다 소큐가 개최한 다회에 노부나가의 부하 스가야 구에몬(菅屋玖右衛門)가 노부나가의 주인(朱印)이 찍힌 서신을 가지고 참석했고, 아타고산(愛宕山)의 스님도 동석했다.¹⁴⁾ 소장자의 위신을 세워주기 위하여 여러 증인이 합석했다.

여겨졌다.

12) 『信長公記』 권3 名物召し置かるゝの事 さる程に、天下に隠れたき名物、堺に在り候道具の事天王寺屋宗及一、菓子之繪。藥師院一、小松島。油屋常祐一、柑子口。松永弾正一、鐘の繪。何れも覚えの一種ども、召し置かれたきの趣、友閑・丹羽五郎左衛門御使にて、仰せ出ださる。違背申すべきに非ず候の間、違儀なく進上。則ち代物金銀を以て仰せ付けられ候ひき。

13) 村井康彦(2008) 「信長の茶頭となる」 『別冊太陽 千利休』 平凡社 p.35

14) 津田宗及 외(1977) 「天王寺屋會記」 『茶道古典全集』8 淡交社 p.198

一二月二十日昼、今井宗及一人、但松本茶碗之儀被仰出、御朱印被下候而其談合也。一二月二十七日昼、あたご上坊、菅屋玖右衛門尉か使也、但松本茶碗之儀候。

여기서 노부나가는 명물을 손에 넣기 위하여 금으로 대가를 치름은 물론 때로는 친필 문서를 부하를 통하여 전달하며 분위기를 조성할 정도로 명물 다도구 수집에 집착하였음을 알 수 있다.

이 다완은 센리큐의 제자 아마노우에노 소지(山上宗二 1544-1590)의 다도 관련기록인 『아마노우에노소지기(山上宗二記)』에 의하면 「마쓰모토 슈호가 쓰던 명물 다완은 노부나가의 손에 들어가 애용되다가, 노부나가 사후에 히데 요시가 물려받아 애용하였다.」¹⁵⁾고 한다.

이에스즈회에 소속된 포르투갈 선교사인 루이스 프로이스(Luis Frois 1532-1597)는 1563년부터 교토 일대에서 표교활동을 하며 노부나가와도 친교를 맺었다. 그는 『이에스즈회의 1582년 연보』에 노부나가가 다도구를 수집하는 과정을 다음과 같이 기록했다.

노부나가는 원래 욕심이 많아서 물건을 탐내는 사람이다. 혹시 누군가 좋은 다도구를 가지고 있다는 말을 들으면 사람을 시켜서 가져오게 하는데 거절하면 용서하지 않았다. 따라서 이런 다도구를 가지고 있는 사람은 빠져나갈 수 없음을 알고 미리 그것을 바쳤다. (중략) 노부나가가 다도구 60점 이상을 소유했음이 틀림없다.¹⁶⁾

이 기록에서 노부나가가 권력을 앞세워 강압적으로 명물 다도구를 수집한다는 사실이 널리 알려지자, 미리 헌납해버림으로써 화를 면하려 음을 알 수 있다. 빼앗기지 않으려고 숨기거나 버둥거리기보다는 어차피 빼앗길 것이라면 선수를 쳐서 환심을 사두는 것이 낫다는 생각이 확산되었던 것이다.

노부나가는 다도구의 수집에 머물지 않고, 『신초공기』 가운데는 금, 은, 투구, 갑옷, 칼, 말 등의 물품뿐만 아니라 성(城)이나 인질을 진상받았다는 기록을 여러 곳에서 찾아볼 수 있다. 특히 그의 호기심과 권력과시욕으로 도다이사(東大寺)에 보물로 전해지는 향목(香木)을 절단하였는데 이는 명물 수집욕의 연장이라고 볼 수 있다.

15) 熊倉功夫(2006) 『山上宗二記』 p.74 岩波書店

16) 재인용 村井康彦(1983) 「信長と戦国武士」 『茶道聚錦3 千利休』 p.28 小学館

[표1] 노부나가가 수집한 다도구¹⁷⁾

시기	소장자	수집품	형식	형식
1569	松永久秀	차단지 九十九茄子	현상	信長公記
	今井宗及	차호 松島	현상	
		차단지 紹鷗茄子		
1569	大文字屋	차단지 初花	은 지불 ¹⁸⁾	
	祐乗坊	차단지 富士茄子		
	法王寺	차시 竹茶杓		
	池上如慶	꽃병 蕪無		
	佐野	족자 鷹絵		
	江村	꽃병 桃底		
1570	天王寺屋宗及	족자 菓子絵	은 지불	
	薬師院	차호 小松島		
	油屋常祐	꽃병 柑子口		
	松永久秀	족자 鐘絵		
1573	本願寺	다완 白天目	현상	天王寺屋 會記
	朝倉義景	족자 牧谿 「遠浦帰帆」	현상	
족자 牧谿 「洞庭秋月」				
1574	住吉屋宗無	다완 松本	주인장(朱印状)발부	
1575	三好笑岩	차호 三日月	현상	
1577	津田宗及	꽃병 貨狄釣	현상	信長公記
		솔뚜껑마치개 開山		
		물구기 二銘		
1578	津田宗及	술 宮王	주인장 발부	
	鷗右衛門	향로 周光	은 지불	

란자타이(蘭奢待)는 당시에 이미 천하의 명물로 알려진 보물이자 천황의 허락을 받아야 하는, 바꾸어 말하자면 국가적인 보물로 소중하게 전해지는

17) 『信長公記』, 熊倉功夫(1991) 『茶の湯の歴史』 朝日新聞社 pp.168-169, 谷端昭夫(2007) 『茶道の歴史』 淡交社 pp.90-91 등을 참고로 작성

18) 高木久史(2005) 『福井県文書館研究紀要』2 福井県文書館 p.25
高木久史는 당시 상황으로 보아 『信長公記』의 기록에서 「금은」이고 하지만 실제로는 「은」을 지불했을 것이라는 견해를 제시했다.

향목이었다. 노부나가는 천황의 허락을 받아내어 1574년 3월 27일 부하를 보내 이 향목을 잘라내어¹⁹⁾ 자신의 다회에서 향을 피우기도 하고 일부는 측근의 다인에게 하사하기도 하였다. 595년 아와지(淡路) 섬에서 발견되었다는 란자타이는 황숙향(黃熟香) 즉 침향목인데, 「東大寺」라는 한자를 3글자에 포함시켜 「蘭奢待」라 불린다.

란사타이는 공식적으로는 아시카가 요시마사(足利義政) 이후에 노부나가 가 처음으로 잘라냈고, 근세에 메이지(明治)천황이 잘라냈던 일이 있을 뿐이다. 천황의 허락을 받지 않고는 잘라낼 수 없다는 전통이 있을 정도로 란사타이의 잘라내기는 오만한 권력의 극치를 상징적으로 나타내는 사건이라고 생각된다.

노부나가는 막부의 장군을 추대하기도 하고 추방하기도 할 정도의 막강한 무력과 권력 그리고 경제력을 장악하고 있었다. 다도구 가운데서도 명물이라고 알려진 것을 찾아내어 여러 가지 수단을 동원하여 수집하였으며, 수집한 다도구를 사용하는 다회를 개최하여 자신도 즐기고 남들에게 선보이며 능력을 과시하고자 했던 것이다.

2. 다도구의 향유방식

노부나가는 수집한 다도구를 소장하는데 머물지 않고 정략적 목표나 개인 취미를 위하여 필요할 때마다 다회를 개최하여 다도구를 감상하도록 하였다. 그러다보니 어떤 다도구라도 노부나가의 손에 들어가면 명물로 공인받는 결과를 낳았으며, 다회는 이런 다도구를 드러내 보이는 일종의 전시회이자 가치를 드높이는 기회가 되었다.

노부나가는 1573년 10월 23일에 교토 니조(二条)의 묘카쿠사(妙覚寺)에서 다회를 개최한다.²⁰⁾ 초대받은 손님은 사카이의 상인 쓰다 소큐(津田宗及), 시오야 소에쓰(塩屋宗悦), 마쓰에 류센(松江隆仙) 등 3명이었다. 다실에 놓은 이동용 선반(台子)에는 혼간사(本願寺)와 화해할 때 진상을 받은 하얀 천목(天

19) 『信長公記』 권7 三月廿八日、辰の刻、御藏開き候へ訖んぬ。彼の名香、長さ六尺の長持に納まりこれあり。則ち、多門へ持参され、御成りの間、舞台において御目に懸け、本法に任せ、一寸八分切り捕らる。

20) 津田宗及 외(1997) 「天王寺屋會記」 『茶道古典全集』8 淡交社 pp.187-190

目) 다완이 옷칠한 쟁반에 놓였다. 지난 해에 에치젠의 다이묘 아사쿠라(淺倉)를 칠 때 진상받은 목계(牧谿)가 「동정추월」을 그린 족자를 다실의 도쿄노마(床間)에 걸어 장식했다. 접디는 바이세쓰(梅雪)가 담당했는데 차를 다 마신 후에 새로 아사쿠라(朝倉)가 소장했던 목계의 그림 「원포귀범(遠浦歸帆)」 족자를 가지고 나와서 「동정추월」 족자 위에 덮어 걸었다. 아사쿠라와의 전투에서 승리하여 손에 넣은 족자임을 자랑하고 싶어서 족자 2개를 포개 걸었던 것이다. 노부나가는 자신과 적대관계에 있는 혼간사나 아사쿠라와 유대관계를 맺고 있던 사카이의 상인들에게 자신의 능력을 과시하고 싶었던 것이다.

다회기록에 따르면 그 후에 식사를 대접했다. 식사는 발이 달린 쟁반에 빨간 밥공기, 국그릇과 함께 꿩고기와 도미회 낙지 등이 채색한 토기 그릇에 담아내었다. 이런 그릇은 정식으로 손님을 대접할 때 쓰는 것이다. 놀라운 사실은 노부나가 자신이 직접 손님 앞에 식사를 날라다 주었다는 점이다. 사카이의 상인들을 매우 정중하게 대접했음을 알 수 있다. 이와 같이 손수 차를 대접함으로써 자기편의 상인들을 포용하며 나아가 「노부나가를 반대하는 세력을 봉기시키려는 의도」²¹⁾가 있었으리라고 생각할 수 있다.

오사카의 대사찰인 이시야마(石山) 혼간사(本願寺)는 오랜 동안 잇코슈(一向宗) 신도단의 봉기 즉 잇코잇키(一向一揆)로 노부나가에 항쟁하였는데, 결국 오오기마치(正親町) 천황의 중재로 화해하게 된다. 양자간의 화해를 문서로 확인하기 위해 노부나가는 부하 미요시 쇼안(三好笑岩)과 마쓰이 유칸을 파견하여 평화조건을 위반하지 않겠다는 서약서 즉 기청문(起請文)을 연명으로 작성한다.

1575년 10월 20일 혼간사 측에서는 중국의 화승(画僧) 「옥간(玉澗)이 고목과 꽃을 그린 족자 등 3점을 노부나가에게 바쳤다.」²²⁾ 명물 족자는 다실에 장식하는 중요한 다도구이자 미술품으로써 가치를 지니는데, 양측이 화해의 약속을 잘 지키지는 상징으로 기청문을 작성하고 노부나가가 좋아하는 다도구인 족자를 바쳐 환심을 사고자 했던 것이다.

그후 7일째 되는 10월 28일에는 노부나가는 새로 손에 넣은 명물 다도구를

21) 谷端昭夫(2007) 「織田信長と名物茶器」 『淡交』 7月号 淡交社 p.30

22) 『信長公記』 권8 天正三年十月廿一日、大坂門跡の儀、三好笑岩・友閑兩人御使申し、御赦免なり。小玉檻、枯木、花の絵、三軸進上候

여러 사람에게 선보이기 위하여 다회를 개최하였다. 『신초공기』에 의하면 교토와 사카이의 다인 17명을 묘카쿠사에 초대했다. 이때 점다(點茶)는 센리큐가 담당했으며, 다실에 장식한 족자와 다도구는 다음과 같다.

1. 도코노마(床間)에는 소상팔경도의 하나인 연사만종(煙寺晩鐘)과 초승달 모양(三日月)의 차호(茶壺)
1. 엇갈린 모양으로 만든 선반(違棚)에는 장식품, 깔판 위에 하얀 친목다완. 안쪽에 빨간 옷칠을 한 쟁반에 쓰쿠모나스라는 명이 붙은 차단지
1. 도코노마 아래에는 물그릇과 오토고제(おとごぜ)라는 명이 붙은 술
1. 마쓰시마(松嶋)라는 명이 붙은 차호
1. 다도는 센리큐가 진행²³⁾

이 다회에서 사용된 족자, 다완, 차단지, 술, 차호 등은 모두 당시에 이미 명물로 알려져 있던 다도구이며 이전부터 여러 다회 기록에 등장된다.

이마이 소큐는 상인으로써도 대성한 사람이지만 다케노 조오에게서 직접 다도를 배우고 스승의 사위가 되어 다도의 계승에 힘쓰는 한편 노부나가의 편에 가담하여 외교적 정치적 수완으로 도왔다. 그는 자신이 개최한 다회나 손님으로 참석했던 다회의 내용을 그때마다 정리하여 남긴 다회기(茶會記)를 「이마이 소큐 다도일기 모음(今井宗及茶湯日記拔書)」라 한다. 이 가운데 1570년 4월 사카이에 열린 다회에 이미 명물이라 평가가 완료된 다도구가 등장된다.

이곳 바닷가 즉 사카이에 있는 명물 다도구는 노부나가공이 참석한다고 하여, 마쓰이 유칸옹이 알려주었다. 오늘 그택에서 다도구를 감상하였다. 소큐의 다도구 가운데 마쓰시마 차호, 과자를 그린 족자를 감상하였다. 다음날 센리큐가 점다를 하여 박차를 대접했다. 그후에 차를 더 마시고 많은 은을 하사하였다.²⁴⁾

-
- 23) 『信長公記』 권8 天正三年十月廿八日、京・堺の數寄仕り候者、十七人召し寄せられ、妙光寺にて御茶下され候。御座敷の飾、一、御床に晩鐘、三日月の御壺、一、違棚に置物。七つ台に白天目。内赤の盆につくもがみ。一、下には合子しめきり置かれ、おとごせの御釜。一、松島の御壺の御茶、一、茶道は宗易。各生前の思ひ出、黍き題目なり。已上。
 - 24) 今井宗及(1977) 「今井宗及茶湯日記拔書」 『茶道古典全集』10 淡交社 p.21
当津ニ有之名器共、信長様御覽アルヘキトテ、松井友閑老ヲ以触ラレ、今日彼ノ宅

다회의 일반적으로 요리를 먹고 차를 마시고 이야기를 나누며 다도구를 감상하는 방식으로 진행된다. 위의 다회에서도 차호와 족자 등을 감상한 순서와 사용된 다도구의 명이 언급되어 있다. 여기서 알 수 있듯이 노부나가가가 이 다회에 참석하여 마쓰시마 차호와 과자를 그린 그림을 접하여 기억하여 두었고, 5년 뒤에 마침내 손에 넣는 집요함을 보였다.

노부나가는 이외에도 많은 다회에 참석하였다. 『텐노지야 다회기』에 의하면 1573년 12월 3일에 묘카쿠사에서 노부나가 자신이 개최한 다회에서 그동안 수집했던 여러 가지 다도구를 선보였음이 잘 드러나 있음은 앞에서 살펴 보았다. 또한 1574년 3월 24일에는 교토의 쇼코쿠사(相国寺)에 사카이의 유력상인들을 초대하여 자신의 여러 가지 소장품을 선보이며 다회를 진행했다.²⁵⁾

노부나가는 교토나 사카이의 사찰에서 그 지역의 유지를 초대하여 다회를 개최하거나 초대받아 참석할 때는 상대가 정치계의 인물이거나 지도자급의 유력상인임을 알 수 있다. 특히 「사카이의 유력상인들을 회유하려는 의도로 다회를 개최」²⁶⁾하는 경우가 많았음이 여러 다회기록을 통해서 알 수 있다.

노부나가의 이와 같은 면을 보면 차를 매우 좋아하기는 하지만, 체질적으로 다도를 좋아하는 다인이 아니라 정치적 수단으로 차를 이용하려던 것에 지나지 않았다고 생각된다. 뿐만 아니라 그는 명물 다도구를 일종의 재화로써 수집하고 소장함으로써 권세를 과시하려 함과 동시에 공적을 세운 부하에게 은상을 베풀므로 인심을 얻기 위한 것이었음을 알 수 있기 때문이다.

IV. 다도구 하사의 증여론적 의미

1. 하사의 동기와 하사품

노부나가는 많은 다도구를 소장하고 빈번히 다회를 열어 다도구를 활용하였다. 일단 자신이 일단 소장했다는 사실만으로도 다도구에 새로운 가치가

ニテ御覽アリ、宗久道具ノ内、松嶋ノ壺・菓子ノ絵召上ケラレ候、翌二日御前ニテ宗易手前ニテ薄茶玉ハリ、其後、御服・銀子多分ニ玉ハリ候也

25) 津田宗及 외(1997) 「天王寺屋會記」 『茶道古典全集』7 淡交社 p.194

26) 村井康彦(2008) 「信長の茶頭となる」 『別冊太陽 千利休』 平凡社 p.35

부가된다는 것을 알고 노부나가는 공로를 세운 부하에게 다도구를 더없이 좋은 하사품으로 활용하였다.

노부나가는 다도구를 전투에서 공로를 세운 부하, 귀순한 군인이나 토목공사를 했던 부하는 물론 유력상인들에게도 하사품으로 활용했다.

『신초공기』에는 다도구를 하사했다는 기록이 곳곳에 전해진다. 1576년에는 히데요시의 동생 하시바 나가히데(羽柴長秀 1540-1591)가 아쓰치성을 건축하는데 큰 공을 세웠음을 칭찬하며 주코(珠光)라는 명이 붙은 다완과 옥계가 그린 소상팔경도 중의 산중청람(山中晴嵐)을 하사했다. 이 2가지 다도구의 수집 경위는 알 수 없으나, 당시의 다인들 사이에 널리 알려진 명물이었다. 같은 해에 다지마(但馬), 하리마(播磨)의 전투에서 돌아온 하시바 히데요시(羽柴秀吉) 즉 도요토미 히데요시에게 명물 「오토고제 술」을 하사하여 공로를 칭찬했던 사실 등은 당시의 사정을 잘 설명해주고 있다.

노부나가는 1576년에 장남 히데타다에게 명하여 다회를 개최하도록 하였고, 1577년에는 전공을 치하하여 하쓰하나(初花)라는 다완 등 11점의 다도구를 하사하였다. 장남에게 가문의 계승은 물론 다회를 주최하여 권위를 세우고 정보도 입수한다는 정치활동의 방식으로써 다도를 철저히 익히고 활용하도록 지도하였음을 알 수 있다. 이 다회는 노부타카가 「노부나가의 후계자임을 암시하는 다회이자 여러 다이묘에게 명품 다도구를 과시하기 위한 자리였다. 여기 쓰인 하쓰하나 다완은 권위의 상징」²⁷⁾이기도 하였다.

많은 다이묘가 노부나가로부터 다도구를 하사받았다는 사례를 찾아볼 수 있다. 아케치 미쓰히데(明智光秀)는 「1578년 설날에 노부나가로부터 하사받은 팔각술(八角釜) 술」²⁸⁾을 선보이기 위해 11일에는 친지를 불러 다회를 열었다. 1580년 11월 11일에는 노다 사유(野田左右)가 다회를 열어 「노부나가로부터 하사받은 고려다완(カウライ茶碗)」²⁹⁾을 사용하는 다회를 개최했다.

노부나가는 1581년 연말에 한 해 동안 공을 세운 부하를 불러 축하해주는 의식을 열어 상을 주었는데 히데요시도 포함되었다. 히데요시도 상을 받을 것을 알고 미리 많은 선물을 준비해가지고 갔다.

27) 米原正義(1986) 『戦国武将と茶の湯』 淡交社 p.219

28) 津田宗及 외(1987) 「天王寺屋会記」 『茶道古典全集』7 淡交社 p.272

29) 津田宗及 외(1987) 「天王寺屋会記」 『茶道古典全集』7 淡交社 p.352

연말의 축하로 하시바 히데요시가 하리마로부터 부름을 받고 노부나가에게 갈 때, 옷 수백 점을 진상하는 한편 여자들에게도 줄 물품도 많이 준비해가지고 갔다. 이렇게 많은 선물은 처음이라고 모두가 크게 놀랐다. 이에 대하여 노부나가는 「이나 바국 돛토리의 각성과 강적을 이런 놈쯤이야 하며 신명을 다하여 평정한 무공은 전대미문의 명예이다」라고 상장을 주었다. 히데요시의 위신은 한껏 드높아졌다. 12월 22일 히데요시는 크게 만족한 노부나가로부터 상으로 명물 다도구 12점을 하사받고 영지 하리마로 돌아갔다.³⁰⁾

공을 세운 부하에게 여러 가지 상을 줄 수 있지만, 다도구는 특별히 상징적인 의미를 지닌 상품이라고 할 수 있다. 왜냐 하면 금은이나 현금과 달리 교환성은 약하지만, 당시로써는 다도란 아무나 할 수 있는 손쉬운 놀이가 아니었기 때문이다. 다도를 알고 다도구로 가지고 있으며 다회를 개최할 수 있는 사람은 특권층으로써, 교토나 사카이의 일부 유력 상인이나 다이묘에 한정되어 있었다. 이런 상황 속에서 다도구를 하사받는다는 것은 다도구라는 값비싼 재화를 획득한다는 물질적인 특혜는 물론 다도를 해도 좋다는 특권을 부여받는다는 상징성을 지니는 매우 영광스러운 일이었다.

다회를 할 때 피우는 향목은 매우 소중한 것이다. 노부나가는 다인들에게 진귀한 향을 하사하였다. 1574년 3월 27일에 노부나가는 천황의 특별 허가를 받아 잘라냈던 란사타이 향을 다회에 참석했던 센리큐와 이마이 소규에게 하사했다. 아주 작게 자른 향목을 부채에 얹어 전해주었는데 이는 다른 사람에게는 한 번도 나누어 준 일이 없는 과격적인 하사품으로 기록되고 있다.³¹⁾

노부나가는 다도구의 가치를 잘 판단하여 수집을 잘할 뿐만 아니라 활용하는 능력도 뛰어났다. 교토로 진출한 이후에 다도를 접하며 짧은 기간에 「명물

30) 『信長公記』 권14 歳暮の御祝儀として、羽柴筑前守秀吉、播州より罷り上り、御小袖数 式百、進上、其の外、女房衆かた、それぞれへ参らせられ、か様の結構生便敷様躰、古今承り及ばず、上下と耳目を驚かし候ひ訖んぬ。今度、因幡国取鳥、名城と云ひ、大敵と云ひ、一身の覚悟を以て一国平均二申しつけらるゝ事。武勇の名誉、前代未聞の旨、御感状頂戴なされ、面目の至り、申すばかりなし。信長公御満足なされ、御褒美として、御茶の湯道具、十二種御名物、十二月廿二日、御拝領候て、播州へ帰国候ひしなり。

31) 『信長公記』 권7 御会過テ、蘭奢待一包拝領申候、御扇子すへさせられ。御あふきともに被下候、宗易・宗及兩人ニ迄被下候

다도구의 의미를 파악해낸 통찰력과 직감은 노부나가 특유의 재능」³²⁾이었다고 평가할 수 있다. 물론 이런 과정에 당시에 명망 있는 다인을 측근에 두고 많은 조언을 받았으리라고 쉽게 짐작할 수 있다. 노부나가가 하사한 다도구의 일부 내역은 다음과 같다.

[표2] 노부나가 하사한 다도구³³⁾

시기	하사받은 부하	공적	하사품	출전
1575	柴田勝家	여러 전투	술 古天明釜	川角太閤記
1576	羽柴長秀	아쓰치성 건축	다완 珠光茶碗 족자 玉澗 「山市晴嵐」	信長公記
	豊臣秀吉	아쓰치성 건축	족자 牧谿 「洞庭秋月」	
1577	豊臣秀吉	다지마 공략	술 乙御前釜 등 12종	
	織田信忠	시기산성 공략	다완 初花 등 11종	
1578	市橋九郎右衛門	오다니성 공격	족자 芙蓉絵	天王寺屋會記
	明智光秀	시기산성 공략	술 八角釜	
	佐久間正勝	여러 전투	족자 雀絵	
1580	野間佐吉	귀순	족자 燕絵	天王寺屋會記
			다완 高麗茶碗	
1581	豊臣秀吉	돗토리성 공략	족자 竹林雀絵	信長公記
			꽃병 砧花入	
			차단지 朝倉肩衝茶入	
			다완 大覺寺天目	
			다완받침 尼崎台	
			차시 朱徳作茶杓	
			부젓가락 鉄羽火箸	
다완 高麗茶碗				
1582	明智光秀	여러 전투	술 平釜	天王寺屋會記
	村井貞勝	정무 담당	다완 豊後天目	

2. 하사의 증여론적 의미

노부나가 다도를 중요한 정치의 수단으로 활용하려는 의도는 히데요시가 쓴 「다도는 곧 정치의 도」라는 표현에 집약되어 있다. 히데요시가 처음으로

32) 谷端昭夫(2007) 「織田信長と名物茶器」 『淡交』 7月号 淡交社 p.29

33) 『信長公記』, 谷端昭夫(1999) 『茶の湯の文化史』 吉川弘文館 p.14, 金澤弘(1984) 「瀟湘八景図の諸相」 『茶道聚錦9 書と絵画』 小学館 p.228-232 참고 제작성

언급한 이 말은 노부나가가 죽은 1582년 10월에 노부나가의 3남 노부타카(信孝)의 부하들에게 보낸 서간 가운데 노부나가에게 입은 은덕을 기리는 뜻으로 썼다.

노부나가공으로부터 여러 차례 상과 상장을 받았을 뿐만 아니라 다지마의 금산을 비롯하여 다도구에 이르기까지 두루 갖추어주셨습니다. 「다도는 정치의 도」의 하나라고 합니다만, 내게도 다도를 해도 좋다고 허락하셨습니다. 이송에서는 물론 저승에 가더라도 잊을 수 없는 일입니다. 누구에게도 허락해주지 않으셨음을 생각해보면 감사하여 밤낮 없이 눈물이 납니다. 오다 가문 일족에게 어찌 소홀하게 할 수 있겠습니까.³⁴⁾

이 글을 쓸 당시 히데요시는 주군 노부나가를 죽인 아케치 미쓰히데를 물리치고 후계자를 자청하면서 노부나가에 대한 충성을 서약했다. 자주 상을 주셨으며, 다도구도 갖추어 주셨다. 다도란 곧 정치의 도라고 하는데 이처럼 중요한 다도를 해도 좋다고 허락해주셨으니 감격스러워 눈물을 참을 수 없다. 이 표현은 과장되어 있다고 해도, 히데요시는 다도를 매우 중요한 정치 수단으로 여기고 있었음에 틀림없다고 생각된다.

여기서 다도는 정치의 도(政道)라는 말은, 다도가 정치의 방법 혹은 수단이 된다는 말이지, 반드시 허가를 받은 사람만이 할 수 있는 것은 아니었다. 이미 당시에는 많은 다인이 활동하고 있었고, 이전부터 많은 센고코 다이묘들이 다도를 하고 있었기 때문이다. 사실 사적인 공간에서 개별적으로 이루어지는 다회를 위정자가 일일이 통제한다는 것은 불가능하며, 완전히 통제하겠다는 의지의 표현이라고 하기보다, 다도가 지닌 정치수단으로써의 기능을 잘 이해하고 활용하겠다는 의미로 파악할 수 있다.

즉 노부나가는 무력으로 권위를 유지하는 한편, 유형적으로는 다도구리는 재화를 하사하고, 무형적으로는 다도 개최 특권을 하사함으로써 정신적 문화

34) 熊倉功夫 외(1994) 『資料による茶の湯の歴史(上)』主婦の友社 pp.329-330

上様重々預御褒美御感状、其上但馬金山御茶湯道具以下迄取揃被下、御茶湯雖御政道、我等は被免置、茶湯を可仕と被仰出候事。今生後生難忘存候。たれやの御人かゆるしものにさせられるへきと存出候へは、夜昼涙をうかめ、御一類之御事迄あたにも不存候事。

적인 면으로도 부하를 장악하고자 했던 것이다.

1500년대의 일본과 1800년대의 북아메리카의 특정한 문화현상은 시대적으로도 지리적으로 크게 동떨어져 있기 때문에 비교하는 데는 여러 가지 제약이 따른다. 그러나 노부나가의 다도와 포틀래치 사이에는 「최고 권력자가 권위를 유지하기 위하여, 일단 모은 재화를 나누어주는 행위」라는 공통된 구조를 발견할 수 있다. 이와 같은 구조적 유사점은 프랑스의 사회학자이자 인류학자인 마르셀 모스(Marcel Mauss 1872-1950)가 주장한 「증여론(贈與論 Essai sur le don)」을 참고로 살펴볼 수 있다.

북아메리카 서부 해안부의 원주민인 콰키우틀(Kwakiutl)족의 추장이 이웃 지역에 재화를 증여하는 풍속인 「포틀래치(potlatch)」가 미국의 학자들에 의하여 조사보고 된 바 있다.

그들은 축제가 진행되는 것처럼 물건을 교환하는 일로 유명하다. 이것을 포틀래치라고 한다. 사람은 무엇보다도 소중하게 여기는 물건을 상대방에게 준다. 귀중한 것이면 귀중한 것을 줄수록 더 큰 권위를 획득한다. 이들은 권위를 획득하기 위하여 증여한다. 또는 상대가 자신에게 증여해줄 때 생기는 공포로부터 도망하기 위하여 이전 보다 더 큰 것을 증여한다.³⁵⁾

추장은 담요나 장식용 동판(銅版)을 이웃 지역의 추장들에게 대량으로 증여함으로써 위신을 세우고 내부적으로는 가족과 마을에서 최고의 지위를 유지하게 되며, 외부적으로는 평화를 도모하는 수단이 된다. 포틀래치란 원래 식사를 제공하다 또는 소비하다라는 뜻이다.

이들으로써는 매우 값비싼 재화를 남에게 미치광이처럼 퍼주는 증여와 소비, 또는 힘들여 모은 부(富)를 잠깐 사이에 상실 또는 파괴하는 까닭은 생활에 여유가 있어서가 아니다.

추장과 가신 사이, 가신과 그 추종자 사이에는 이러한 증여에 따라서 위계서열이 확립된다. 준다는 것은 자기의 우월성, 즉 자기가 더 위대하고 더 높으며 주인(magister)이라는 것을 나타내는 것이다. 답례하지 않거나 더 많이 답례하지 않으면

35) 栗本慎一郎(1984) 『經濟人類學』 東洋經濟新聞社. p.19

서 받는 다는 것은 종속되는 것이고, 손님 또는 하인이 되는 것이며, 작아지는 것이고 더 낮은 지위(minister)로 떨어지는 것이다.³⁶⁾

이와 같은 주장의 권위를 유지하기 위한 증여행위라는 포틀레치의 구조는 「명물 다도구의 수집 → 소유를 확인 → 다회 개최 → 다도구 보여주기 → 하사」를 반복했던 노부나가의 다도를 설명하는데 상응하는 모델이 라 할 수 있다.

V. 결론

전란을 평정하며 권력을 장악한 오다 노부나가가 장군을 옹립하며 교토에 들어갔던 목적의 하나는 당시에 금은이나 금전과는 다른 가치를 지닌 재화이자 문화적 상징물인 명물 다기를 수집하는 일이었다. 막강한 재력을 뒷받침하여 대가를 지불하는 수집이라고는 하지만 실제로는 징발이나 다름없었다. 그러나 그는 수집하여 소장하고 축적하는데 머물지 않고 문화활동으로써의 다도의 의미를 파악하고 다인들을 곁에 두고 활발하게 다회를 개최하였다. 다회에는 공을 세운 부하나 귀순한 사람, 전략적 손익을 따져보고 유력한 상인 등을 초청하여 차를 마시면서 회유하기도 하고, 정보를 수집하기도 하고 인맥을 형성시켜갔다. 뿐만 아니라 이들에게 소장하던 다도구를 하사함으로써 감격과 감사하는 마음을 지니도록 하며 자신의 위신을 높여갔다.

도요토미 히데요시도 다도구를 하사받고 다회를 개최해도 좋다는 특별히 가를 받아 감격하는 글을 남기기도 했다. 「다도는 곧 정치의 도(茶湯御政道)」라는 개념은 다도를 정치수단으로써의 기능을 단적으로 설명해주고 있다.

고가의 명물 다도구를 하사함으로써 수장으로써의 내외에 위신과 권위를 떨칠 수 있다는 인간관계의 구조, 즉 다도구라는 재화를 증여함으로써 권력의 강화를 심화시키는 습속이라 할 수 있다. 이와 같은 습속은 다른 문화권에서도 발견할 수 있는 현상으로, 북아메리카의 포틀레치와 유사한 구조를 지닌다는

36) 마르셀 모스, 이상률 역(2002) 『증여론』 한길사 pp.267-268

점을 발견할 수 있었다.

노부나가는 호사가의 취미활동에 머무르는 다도를 통치의 수단이자 권력 강화의 방법으로 활용하며 다도의 새로운 방식을 만들어갔으며 이후의 다도와 무사권력이 밀착되는 환경을 조성했다고 할 수 있다.

<參考文獻>

- 마르셀 모스, 이상률 역(2002) 『증여론』 한길사
 今井宗及 (1977) 「今井宗及茶湯日記拔書」 『茶道古典全集』10 淡交社
 太田牛一 (2009) 『信長公記』 国立国会図書館 <http://kindai.ndl.go.jp/2009.12.20>
 熊倉功夫 외 (1994) 『資料による茶の湯の歴史(上)』 主婦の友社
 _____ (2006) 『山上宗二記』 岩波書店
 _____ (1991) 『茶の湯の歴史』 朝日新聞社
 栗本慎一郎 (1984) 『經濟人類学』 東洋經濟新聞社
 高木久史 (2005) 「信長期の金銀使用について」 『福井県文書館研究紀要』2 福井県文書館
 谷端昭夫 (2007) 「織田信長と名物茶器」 『淡交』 7月号 淡交社
 _____ (2007) 『茶道の歴史』 淡交社
 津田宗及 외 (1987) 「天王寺屋会記」 『茶道古典全集』7,8 淡交社
 永島福太郎 (1982) 『茶道文化論集』 淡交社
 村井康彦 (1983) 「信長と戦国武士」 『茶道聚錦3 千利休』 小学館
 _____ (2008) 「信長の茶頭となる」 『別冊太陽 千利休』 平凡社

접 수 일: 12월 31일
 심사완료: 01월 08일
 게재결정: 01월 29일

<要旨>

織田信長の政治手段としての茶道

戦乱を平定し権力の頂点に立った織田信長が将軍を擁立して京都に入った目的の一つは當時に金銀や金銭以外に最高の財貨的価値と文化的象徴性を持つ名物茶道具の収集にある。金銀や代価を払う収集とは言うものの実際は徴発といえよう。しかし彼は収集品を所蔵するのにとどまらず、茶道の意味を把握して茶人を召し抱え活発に茶会を行った。茶会には功労者、帰順者、戦略的必要性によって有力な商人などを招いて茶を飲みながら懐柔し、情報を収集し、人脈を固めて行った。また、所蔵の茶道具を下賜することによって感激と感謝の意を持たせるようにし威信を高めた。

豊臣秀吉も茶道具を下賜され、茶会の開催の特別許可を得、感激したとの書簡を残した。茶道はすなわち政治の道(御茶湯御政道)という言葉は茶道のもつ政治手段としての機能を的確に説明してくれる。

高価な名物茶道具を下賜することで首長なる人は内外に威信をふるうことができるといふヒューマンリレーションズの構造、それは茶道具という財貨を贈与することによって権力を強化しようとする習俗と言える。このような習俗は他の文化圏でも類似する例がある。北アメリカのポトラッチという習俗と類似する構造を持つという点と対比できた。

信長は趣味活動にとどまるような茶道を統治の手段として、権力強化の方法として活用し、茶道の新しい方式を提示したと言える。

対立的意識活動としてのジャーナリズム

— 日本における批判的ジャーナリズム研究のポテンシャル —

安昌鉉*

ahnchanghyun@gmail.com

< 目次

>

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 序論~ジャーナリストの屈辱~ | 3. 対立的意識活動とジャーナリズム |
| 2. 意識活動としてのジャーナリズム | 4. 結論 |

Key Words : 저널리즘(journalism), 대립적 의식활동(confrontational consciousness activity),

비판적 저널리즘연구(critical journalism study in Japan)

1. 序論~ジャーナリストの屈辱~

2005年12月21日に開かれた東京高等裁判所におけるNHK裁判控訴審第8回口頭弁論におけるやりとりの一部をまず紹介したい。ドキュメンタリー番組「問われる戦時性暴力」の編集過程を繰り返してみると、「深い反省というか後悔というのもある」か、との訴訟代理人弁護士の質問に対し、同番組のデスクだった長井聡氏は涙を流しながら、次のように述べる。それは「非常に屈辱的な出来事でありましたし、ジャーナリストとして闘えなかった、そういう思いがございました」(長井口頭弁論2005: 17)と。同番組のチーフ・プロデューサー(CP)だった永田浩三氏も、2006年

* 東京大学大学院学際情報学府

3月22日の第10回口頭弁論において、経験したことのないレベルの編集過程に対し、「きちんと抵抗できなかったという思い」などで「非常に悔いの残る、残念な体験であった」と述懐する(永田口頭弁論2006：21)。

二人は、ドキュメンタリー番組の制作過程で「闘えなかったこと」が「屈辱的な出来事」であり、「抵抗できなかったこと」は「悔いの残る、残念な体験」だったという。二人がこうした悔恨を持つようになったのは何故か。これはジャーナリストとしてジャーナリズムを実践することができなかったということに起因すると思われる。すると、ジャーナリズムとは何か。この論文ではジャーナリズムに対する再定義、特に日本における批判的ジャーナリズム研究の成果を中心に論議してみたい。このため、本論では第一に、ジャーナリズムを意識活動と見なす批判的ジャーナリズム研究を紹介する。第二に、こうした見方を対立的意識活動としてのジャーナリズムと位置づけた後、その意味を四つのレベルでまとめる。第三に、結論的にジャーナリズム活動で対立・矛盾・葛藤を観察することのできるポイントを提示することで批判的ジャーナリズム研究の持つ潜在力を具体化するための提言をしたい。

2. 意識活動としてのジャーナリズム

2.1 ジャーナリズムとは

まず「ジャーナリズムとは何か」との問いかけから始めてみよう。その答えとしては、英国のメディア社会学者のMcNairの定義が取りあげられる。彼は、ジャーナリズムを「現実の、社会のこれまで知られていなかった(新しい)出来事に関する真実の説明、あるいは記録であると主張する(つまりそのようにオーディエンスに提示される)文章、音声あるいは映像の形態でつくられたテキスト」(1998:4、強調は著者)と定義する。しかし、彼の定義には、ジャーナリズムとその生産物としてのニュース(テキスト)との混沌がうかがえる。

それは日本における「ジャーナリズム論」でも例外ではない。たとえば、ジャーナリズムに対する一般的な定義として受け入れられてきた清水幾太郎の見解を見よう。ジャーナリズムとは「一般の大衆にむかって、定期刊行物を通じて、時事的諸問題の報道および解説を提供する活動」(清水1948 = 1992 : 215)と捉えられている。すなわちジャーナリズムは「大衆」という対象に、「時事的問題」という内容を、「定期刊行物」という形態を通して行なわれる「報道・解説する活動」というのである。こうした定義には、主体が抜けてはいるものの、ジャーナリズムが「マスメディアによる報道活動」として理解されている(林香里2002 : 17)。清水の定義は今日にまで受け継がれる。たとえば、大井真二は、マスコミュニケーションとジャーナリズムを論じる論文のなかで、それを「ニュース・テキストの収集から、編集、制作、流通へと連なる生産過程」(2004 : 40)とし、ニュース・テキストの生産に係わる過程ととらえる。こうした見解はニュース・テキストがジャーナリズムの生産物であり、ジャーナリズムがマスコミュニケーションの一部として把握されなければならないという意図を持っているにもかかわらず、依然としてマスメディアの枠組みの中での考え方だと指摘せざるを得ない。

また、こうした定義では、ジャーナリズムが報道機関、媒体、取材、編集、制作、報道、伝達、流通、公表などの概念で説明されている。これは「生産」の側面に焦点が当てられた見解であり、マスメディア時代の産物だといえるだろう。これに対し、米国のジャーナリズム学者のSchudson(2003 : 11)は「制度化された業務」と見なす。

ジャーナリズムは、公共の利益や重要性を持つ同時代の出来事に関する情報を生産して伝える実践あるいは業務(business)である。分散的で匿名のオーディエンスが公的に重要なことと見なす言説(discourse)の中に参加するよう、真実で正しいことのように見える、同時代の出来事に関する情報と論評を彼らに定期的に公表する一連の制度的業務である。

このように、ジャーナリズムを毎日の記録や報道機関、あるいはその活

動などとしてとらえることは、鶴見俊輔の言葉を借りると(1965: 11)、「一種のコミュニケーション万能主義におちいりやすい」考え方である。いざ彼はジャーナリズムを「同時代を記録し、その意味について批評する仕事」(1965: 41)と定義する。また、新井直之はジャーナリズムの定義において継続性や定期性より、責務を重要示す。彼は、ジャーナリズムを「いま伝えなければならないことを、いま、伝える。いま言わなければならないことを、いま、言う。『伝える』とは、いわば報道の活動であり、『言う』とは、論評の活動である」(1986: 25-26)と述べる。彼は娯楽や広告媒体としての活動はジャーナリズムの責務ではないとし、報道と論評の「活動」に限定しなければならないと指摘する。また、こうしたジャーナリズムの活動は、専門的ジャーナリストだけではなく、すべての人がなし得ることだという。新井の定義によれば、少なくともジャーナリズムは報道とともに論評を責務としており、その活動は必ず職業的ジャーナリストに限定されたのではないといえる。

2.2 意識活動としてのジャーナリズム

一方、鶴見の定義をジャーナリズムとは何かという問いかけに対する、「説得力のあるひとつの見事な回答」と評価する林利隆(2004:23)は、戦後学問的な議論や研究で、それが活性化せずに、マスメディアに傾倒した「時評的な規範論に終始する傾向」を量産したと指摘する。社会の成員の「一人ひとりの心の働きとしての毎日の表現・記録活動」にジャーナリズムの本質や原型があるという彼(2004: 23)は、ジャーナリズムを学問的に論ずる際には、職業としてのジャーナリストだけではなく、研究者や学生、市民などを「表現・記録活動の主体」として認めるべきだとし、「ジャーナリズム活動の主体の拡張」¹⁾を主張する²⁾。ジャーナリズム活動の主体の拡張は、

1) 彼は、デジタル化がジャーナリズムを担う主体の拡散と統合という現象を引き起こしていると指摘する。すなわちインターネットは放送や新聞、雑誌以外にジャーナリズムの機能的営為を展開することのできる個人集団の出現を可能としており、マルチメディアがジャーナリズム活動を担当できる基体の一つになるというのである(2006: 5-6)。

2) 既にジャーナリズム活動の主体の拡張はコミュニケーション・テクノロジー(ICTs)の革

ジャーナリストの外延を拡大させるだけでなく、ジャーナリズムにおける生産と消費の境界を曖昧にしつつある。

ジャーナリズムとは何かという問いかけに対するもうひとつの有用な回答は「マスメディア」と「ジャーナリズム」との峻別から得られる。一般的にマスメディアとジャーナリズムは類似のもののように見えるが、両者は必ず一致するものではないという主張は随分前から提起されてきた³⁾。これは長谷川如是閑や戸坂潤など日本における戦前のジャーナリズム研究の優れた成果を戦後の批判的ジャーナリズム研究が受け継いだことだといえる。最近では花田達朗(1996 : 2004)、林利隆(2004 : 2006)、林香里(2002)などにつながっており、彼らによってマスメディアとジャーナリズムとの峻別の議論は定着されつつある⁴⁾。

新によって現実化されている。さらにこうした主体の拡張はジャーナリズムがこれ以上生産の段階のみでの定義を許容しない。もちろんコミュニケーション・テクノロジーが即刻送信者と受信者の関係を変えないかも知れないが、少なくとも受信者だけにとどまる公衆に、より積極的にジャーナリズム活動に能動的で対抗的に関与することのできる回路が確保されたということは疑う余地のない事実である。ジャーナリズムはこれ以上職業としてのジャーナリストばかりの活動による産物ではないというのである。ゆえにジャーナリズムはコミュニケーションという主張も提起される。生産された言説に対するオーディエンスの受容過程、そして受容の結果として生産される新しい言説や議論のような再生産過程を含む概念として理解する必要がある。ジャーナリズムには社会的意味を生産する実践という過程を要するというのである。「情報のジャーナリズム」から「対話のジャーナリズム」への移行が要求されており、マスメディア時代に観客へ転落したオーディエンスはこれ以上観客ではないというのである。

- 3) 林香里は、すでに鶴見俊輔(1965)や渡辺潤(1977)、内川新井(1983)などがマスメディアとジャーナリズムの峻別を主張しており、これを通じて「日本のジャーナリズムの復活の希望」「ジャーナリズム概念の正当な復権」「参加なき、同意の強制としての言説空間への批判」が論議されたという。
- 4) 類似概念を無知覚的に使うのは、一種の「フェティシズム」(fetishism)ではないか。特定対象やある制度が、人間の行為や実践によって、構成され再構成されたという事実を考慮しないまま、その対象や制度が元々のように存在してきたと受け入れる。例えば、価値の記号に過ぎない貨幣を、そのなかに宿っている労働を考慮せずに、万能の力があるように錯覚し、それを絶対視する。同様に、ジャーナリズムを可能にする人間の意識活動を認識せずに、これをシステムとしてのメディアや事業体としてのマスメディアと同一視するのは、一種の「物神崇拜」ではなかろうか。それだけではない。「マスコミ」のような曖昧な造語も幅広く使われている(花田2004)。こうした概念使用が、ジャーナリズムに対する理解を妨害し、その社会的機能や役

たとえば、花田(1996 : 2004)は、メディアが「システム」のに対し、ジャーナリズムは「社会的な意識活動」の一つであると、両者の峻別を主張する。メディアは「モノとしての情報」を生産し、流通し、消費するシステムであるが、ジャーナリズムは「社会的な意識形態の一つであり、ひとつの意識活動」、つまり「同時代のアクチュアルな出来事についての言論、表現、批評、報道などの活動」(2004 : 9)というのである。ただ現在、ジャーナリズムという社会的意識活動は新聞メディア、放送メディアなど職業的で専門的な組織に制度化されたシステムで主に担っているだけであり、マスメディアではなくてもジャーナリズムは存在することができるため、両者の一致関係は自明なことではないと強調する(1996 : 287)。これはマスメディアとジャーナリズムが「公共圏」(public sphere)を構築する重要な社会制度という認識から出発する見解である。花田はマスメディアが「公共圏」を構築する重要な社会的制度の一つであることを認めながらも、その設営においてはマスメディアを「システム」と「意識活動」と区分して論じる(1996 : 78)。「公共圏」の構築にはマスメディアの構成原理と組織構造に「公共圏の原理」を貫徹することだけではなく、言い換えればマスメディア・システムの拡充とともに、空間意識を持つジャーナリズムの活動が「公共圏」を伸張するというのである。

一方、日本におけるジャーナリズム研究にはジャーナリズムの言説とマスメディアが「同一の実体」と認識される傾向が強いという林香里(2002 : 23)は、それがジャーナリズムの持つ潜在的な意味の理解を妨害してきたと指摘する。さらにマスメディアとジャーナリズムの両概念の不明な使用は次のような弊害さえ生み出したと語る。

「マスメディア」と「ジャーナリズム」の渾然一体化は、一方で一般市民の参加を困難にさせ、他方では「共通の社会意識」を創造し、それを広く社会に強要することを可能にできた。

ジャーナリズムを意識活動としてとらえる花田の主張を受容した林香里

割を曖昧にするのである。

は「マスメディア」と「ジャーナリズム」との峻別の必要性を提起し、日本における重要な議論をまとめた。林利隆も、ジャーナリズムが「意識行為」のに対し、マスメディアは「社会的ニュース生産システム」と両者を引き分ける。しかし、彼は戦前戦後のジャーナリズムに関する沢山の論議の特徴が、「意識行為としてのジャーナリズムと社会的ニュース生産システムとしてのジャーナリズムとを峻別しないままに議論することに必ずしも自覚的ではなかったこと」(2004:25)にあり、これが「ジャーナリズム論の限界」を露呈させてきたと指摘する。彼はジャーナリズムの原形を「毎日の表現・記録活動」から求める。

以上の論議を通じて、マスメディアはシステム、ジャーナリズムは意識活動と分離して理解することができる。こうした峻別の意義は、ジャーナリズムに「アクチュアリティ」(actuality)というモーメントを提供することにある。すなわちジャーナリズムを決まった枠組みや形式にかまけない独立的でダイナミックな「社会的活動」の一つとして把握するようにするのである。

3. 対立的意識「活動」とジャーナリズム

意識・思想など精神的生産の特殊な表現に関連した「活動」ととらえられるジャーナリズム活動は、他の意識活動とは何が違うのだろうか。これを戦前の長谷川や戸坂の業績と、それを受け継いだ戦後の批判的マスメディア/ジャーナリズム研究の成果に基づいて整理した後、その意味を論じてみる。

3.1 イデオロギーの活動

日本における批判的ジャーナリズム研究伝統におけるジャーナリズムは、イデオロギーの活動に関わることに於いて他の意識活動と異なる。イデオロギーとは様々な意味を持つが⁵⁾、長谷川の言葉を借りると、それは

社会的事実を「摂取し知覚する側に於て、対立的群関係に於ける動機によつて、それを公表すること」(長谷川1931=1990 : 100)であろう。すなわち一つのイデオロギーとしてのジャーナリズムは、「出来事」を「報道する事件」として作る論理といえる(山本明1980 : 53)。これはジャーナリズムという言葉そのものにおいても確認できる。ジャーナリズム(journalism)は一つの「イズム」であり、一つの「主義」にはかならない。ジャーナリズムは社会的制度になるための規範的主張でもあるが、同時に多様なイデオロギーや支配的イデオロギーを反映するものでもある。こうした意味で、新聞は単純な社会の反映や写真ではなく、一つのフレームである同時に(Gitlin1980)、「特殊の積極的性質」をもつ「設計」あるいは「註文書」にもなる(長谷川1931=1990 : 106)。

ジャーナリズムを意識活動やイデオロギーとしてとらえる議論は、戦前の戸坂潤のジャーナリズム論の一つの踏み台にしている。周知のように、戸坂はジャーナリズムが一つのイデオロギーの形態であり、形式であり、一つの契機と規定する。

戸坂にとって、イデオロギーは単なる意識や観念ではなく、「一定形態の下に歴史的社會によって決定された限りの意識、・・・、意識形態(乃至観念形態)」(戸坂1932=1966 : 107)であると同時に、政治的秩序や社会人の心理、諸観念・文化形態の各段階において多様な形態を持つ。すなわち上部構造としてのイデオロギー一般が存在するだけでなく、歴史的・社会的状況の中で相互対立するイデオロギーの諸形態もあるというのである。結局、ジャーナリズムはイデオロギー一般の本質的な契機であると同時に、コミュニケーションに対応するイデオロギーの現代的形態だといえる。

ジャーナリズムとは、一方において本質的な—昔から常に存在した—報道ないし交通関係というイデオロギーの一契機でありながら、同時にそれが、歴史的必然性に従って、今日の所謂ジャーナリズム(ブルジョア・ジャーナリズム)というイデオロギーの一形態にまで発展して来なければならなかった、その所以

-
- 5) たとえば、英国の社会学者Williamsはマルクスにおけるイデオロギー概念には①特定の階級や集団の特徴的な思想の体系、②真の或いは科学的知識に対比される虚偽的な信念—虚偽的思想或いは虚偽意識—の体系、③意味や思想を産出する一般的な過程などの意味があるという(1977 : 54)。

を弁証法的に物語る概念なのである。(戸坂1932=1966 : 120)

ジャーナリズムは様々なイデオロギーを提供することもあり、支配的イデオロギーを拡大再生産すると同時に、職業的イデオロギーでもあるというのである。こうしたジャーナリズムをイデオロギーの問題として把握することは、山本明(1962 : 29)によれば、マスコミュニケーション論に「積極的な意味」を持つ。何故ならばジャーナリズム的契機の貫徹あるいは歪曲の分析がマスコミュニケーションのイデオロギー性を明らかにするための一つの尺度を提供し、ジャーナリズムの概念に生産関係の導入によって特定の生産様式に照応するジャーナリズムの具体的なイデオロギー形態をとらえることができるためである。

ジャーナリズムをイデオロギーと見なすことは、一種の「ラジカル機能主義」の観点だといえる。すなわちジャーナリズムを一つのイデオロギー形態と理解することは、それを「全体社会の構成というコンテクストに置いた後に、機能的な価値評価を下す見解」(花田2004 : 11)である。こうした見方を代表するのがポリティカル・エコノミーのパースペクティブであろう。しかし、イデオロギーにはただ下部構造(土台)の中での利害関係が反映されているとはいえない。戸坂の言葉のように、イデオロギーの性格は土台に向けて「有効に反作用出来るという政治的效果——社会的機能——になっってはならない」(1933=1966 : 109)といえる。ジャーナリズムのより重大なイデオロギー性は「寧ろその政治的・社会的機能に横たわっていなくてはならない」(1933=1966 : 109)というのである。

3.2 アクチュアリティ

イデオロギー形態としてのジャーナリズム活動は、「アクチュアリティ」に係わる。戸坂と彼の影響を受けた批判的ジャーナリズム研究では、ジャーナリズム活動の原理としてアクチュアリティに注目する。ジャーナリズム現象の根柢を支えることとして、アクチュアリティを想定したためである(藤竹1968 : 337)。「日常生活社会活動」から生ずる意識であるアクチュアリティは、ジャーナリズム現象を規定する根本概念である。すなわちジャー

ナリズムは、新しいもの、新奇なるもの、日常的なるものを取り扱い対象とする活動である。また、こうした時事的・現実的問題に内在している政治性、普遍性、大衆性を求める。そのため、ジャーナリズムは社会的な批判性、活動性を持つ(戸坂1934；山本1962；花田2004)。これら特性はアクチュアリティと表現できる。こうした「アクチュアリティこそが、イデオロギーにおけるジャーナリズム形態をかたちづくる本質」という山本(1962：30)は、ジャーナリズムが総合性、政治性、批判性を持っているイデオロギー形態だと指摘する。すなわち社会的意識としてのジャーナリズムは、時間の現在性・事実の現在性・行為の活動性・実践の政治性・生活の社会性などを必要な条件としているのである。戸坂は次のように語る。

ジャーナリズムの特色は実は、その現実行動性・時事性(actuality)になければならなかったのである。と云うのは、それは、歴史の上からは現在性として、存在ないし事実の上からは現実性として、行為の上からは活動性として、生活の上からは社会性として、規定されねばならぬ。(戸坂1932=1966：122)

こうしたアクチュアリティは、現代のジャーナリズムに決定的な意味を付与する。すなわち林利隆(2006：255)は、ジャーナリズムに対する多様な物言いには決定的なモーメント(契機)が欠落しているといいながら、「<いま>、<ここ>におけるアクチュアリティというモーメント」(2006：255)が必要だと指摘する。アクチュアリティは、デジタル化の進行とともに、ジャーナリズムに新たな変化を要求する。すなわち「ジャーナリズムにアクチュアリティの内実、および、それを通じて社会とかがわる価値を積極的に再構築するよう要請している」(2006：10)。アクチュアリティは、当然空間を要する。アクチュアリティとしてのジャーナリズムは「公共圏」という社会的意味空間のなかで行われる活動だと花田(1996)はいう。

3.3 対立・葛藤・矛盾

ジャーナリズムの意識活動は対立関係・緊張関係・葛藤関係の中で行われ、こうした関係を明らかにすることで他の意識活動とは異なる。ジャー

ナリズム活動を対立から論じる代表的な者に長谷川如是閑がいる。彼は新聞の本質を「対立意識の表現」とであると述べる。多様な対立群、異種群から成立されている社会には多様な社会意識が存在するが、新聞は「もともと、こうした対立群のもつ社会意識を表明するものとして発生した」(田中1987: 820)というのである。長谷川のいう対立とは、「データとしての事実をもつものと、その事実の知識を与えられるものとのあいだ」の関係を意味する。この対立は社会集団や立場の対立と絡まりあっている。新聞は多様な集団的対立を媒介することで成り立ったというのが彼の主張である。

こうした新聞の発生事情や存在理由を規定する対立意識は他ならぬ近代市民社会の産物であり、ジャーナリズムとは「近代市民の主体的および自立的意識がもたらした」対立意識に係わる意識活動といえる(林香里2002: 22)。しかし新聞社が資本主義的企業になると、対立的社会意識は変質する。これは新聞がその自らの商品性を見つけただけでなく、対立的社会意識がブルジョア階級独裁の進展とともに社会的関心の中心から脱してしまったからだと長谷川は説明する⁶⁾。

一方、ジャーナリズムの問題をイデオロギーの問題としてとられる戸坂もイデオロギーには諸形態があり、それらは相互対立しているという。ジャーナリズムにも多様なイデオロギーが存在し、ジャーナリズムはこれらの対立関係をおおやけにするのである。

新聞は、それ自身対立性を有っている処の思想傾向——世論——と切っても切れない直接関係を有つ。処で対立的思想を吾々は一定の理由からイデオロギーと名づけることが出来る。なぜなら思想上の対立は必ず、思想以外の、思想を産んだ処の、より根本的な対立物に基くと考えられねばならないが、思想をこういうより根本的な思想外の下部構造の上に立つ上部構造と見れば、それが取りも直さずイデオロギーであるのだから。(戸坂1934=1966: 109)

対立的意識活動としてのジャーナリズムに対する戦前の理解は、前後高

6) こうした長谷川の観点はマルクス主義の階級対立と重なりながらも、完全には一致しない。むしろ階級概念より群や階、集団間の対立意識を強調、現実的な可能性を持つとらえかたを取っているといえる(吉見2000)。

度経済成長を経ながら、マスメディアとジャーナリズムの制度的矛盾として観察される。たとえば、戸坂の影響を受けた新井(1979: 202-3)は、マスコミュニケーションの製作(生産)過程・流通過程においては四つの階の間で三つの矛盾が存在するという。すなわち「政治権力独占資本⇔マスコミ資本経営⇔ジャーナリスト・マスコミ労働者⇔民衆」における矛盾や葛藤が潜んでいるのである。

マルクス主義のパースペクティブに立つ稲葉三千男(1987)は、コミュニケーションにおける資本主義的生産過程の矛盾を指摘する。「公共性」が重要視されたジャーナリズムに商品性の浸透による矛盾は、同時に新しい発展につながる可能性がある潜在力も含んでいるというのである。特に、彼はマスメディアが生産手段を支配することはできるが、ジャーナリストの認識能力と表現能力(労働力)を完全に所有することができないと、生産関係での矛盾が内在化されていると指摘する。したがって、専門職としてジャーナリストには一定の自律性があるため、資本の日常的な攻撃の中でどう「緊張関係」を維持するかが重要だという。塚本三夫(1974)も、マスメディアとジャーナリストは資本と労働に抽象される本質的に和解できない対立的存在だととらえる。こうした状況で日常的に営まれているジャーナリズム活動の「すみずみにおいて、さまざまな形で葛藤と対立を生み出す根源が不断に膨脹しつつある」(塚本1974: 49)。

日本においてマスメディアとジャーナリスト間の対立・矛盾は、特に「編集権」問題に集中される傾向があり、かなりの研究成果が蓄積された⁷⁾。代表的な研究としては、法的な根拠の不在(浜田1990)、組織ジャーナリズム(柴山2004)、市民社会との断絶(石川2000; 野原2006)、倫理意識の向上への妨害(花田1999)などがある。これらの研究では、「編集権」が冷戦の産物と見なされ、それがジャーナリストの意識を支配する一つの呪縛として作用していると批判され、その撤廃が主張されている。

7) 「編集権」問題は批判的ジャーナリズム研究だけでなく、法・政策的アプローチにおいてもその問題性が指摘された。

3.4 ヘゲモニー的闘争

ジャーナリズムをめぐる対立・矛盾には、これを解決しようとする「力」が様々な形で働きつつある。戦前の戸坂や長谷川が目にしたのは「政治性」である。前述したように、戸坂はアクチュアリティがジャーナリズムのイデオロギー形態を規定する本質とみた。アクチュアリティは、山本(1962: 30)によれば、事物の総合的把握、時事性と政治性の連結、政治性と批判性の結合ができるようにする。すなわち政治性とは、矛盾・葛藤・対立と不可分の関係があるのである。戸坂にとって、ジャーナリズムがイデオロギーの問題であることは、それが「文化闘争のための武器を生産する理論」(1934=1966: 166)であるためである。

取材・編集・公表過程において対立的関係を明らかにすべきだと指摘する長谷川は、新聞が「対立関係に於ける群双方の反撥又は吸引即ち分離又は結合の過程に伴う意識であって、事実の摂取、選択その発表の形式等は一つの関係に於ける認識の態度に規定されているものである」(1930=1990: 99-100)とし、ジャーナリズムにおける総合的・歴史的意識を強調する。彼のいう「新聞意識」とは歴史への積極的介入を意味する。すなわちジャーナリズム活動とは、「社会的の、政治的の、運動に動力を与へんとするのである」(長谷川1933: 14)というのである。

このように、戸坂と長谷川は、ジャーナリズムを「社会的対立と葛藤、支配と反抗、不均衡な権力のせめぎあいのなかで構成されるもの」(吉見2000: 211)として捉えており、その政治的働きかけを重要視する。しかし、戦後の批判的ジャーナリズム研究のなかで、ジャーナリズムをアクチュアルな対立的意識活動、つまり意味生産をめぐるヘゲモニー的闘争として認識し始めたのは1980年代後半の以降であろう。これは日本の政治経済的地形に関連する。自民党の長期安定的支配が揺れ、経済成長が停滞し始めた1980年代から支配的イデオロギーだった利益分配政治という自民党支配の正統性が問われることになっており、1990年代にはバブル経済や「55年体制」が崩壊し、対抗的イデオロギー論やヘゲモニー論が広がった。

これを先に察知したのは大石裕(1984)、佐藤毅(1986)、大畑裕嗣(1988)などであった。彼らは、活発になった市民運動に注目し、HallやGitlinなどを

参照しながら、マスメディアをめぐるヘゲモニー過程を分析した。たとえば、大畑(1988)はヘゲモニー概念を導入して社会運動のメディアと戦略を分析したGitlin(1980)のフレーム研究を批判的に受容した。すなわちヘゲモニー過程では、第一にマスメディアは一つの変数に過ぎないし、ヘゲモニーそのものがしばしば亀裂・分裂を持つ、第二にそれを利用してマスメディアとの闘争を行う社会運動は受け手の「読み」の構造を変えようと試みる、第三にその過程で受け手が複雑な影響を与える(1988 : 90-91)と、大畑はいう。

1990年代に、戸坂のジャーナリズム論にヘゲモニー概念を導入したのは花田(1991=1996)である。彼は(1991=1996 : 80)、ジャーナリズムが「言説空間のヘゲモニーにコミットしている」のであり、それゆえにアクチュアリティを担うという。花田は規範的側面においてジャーナリズムが公共圏を構築する活動と規定する。そのため、ジャーナリストは「言説を手段としてヘゲモニーを巡って展開される抗争の場である公共圏」のなかでの表現活動に携わる者であると同時に⁸⁾、一般市民のためにヘゲモニーの場を造形する者であるという意識が必要だという。ジャーナリズムが意識活動であるといい、マスメディアとの峻別を主張することもこのためである。

マスメディアというシステムはジャーナリズム活動にその舞台を用意するものであり、そのジャーナリズム活動は公共圏の伸縮や内部構造に決定的な影響を持つものである。・・・マスメディアは—ジャーナリズム活動の存在を介することによって—民主的な市民社会(civil society)によって必要不可欠な制度的空間である公共圏の存在様式に重大な役割を演じるものである、・・・

(花田1991=1996 : 81)

花田の影響によって、公共圏概念はジャーナリズムの制度的規範として受容されており、以降ジャーナリズムの潜在力を摸索しようとする研究が行われた。様々な研究結果が発表されたが、石田勝利(1995)と林香里(2002)

8) 公共圏にヘゲモニー概念を取り入れたのは、ほかならぬハーバーマス自身であった。特に、1990年代以降、こうした傾向は強まった(Habermas 1992 ; 1992=1996)。

を取りあげる。まず新聞社の重層的な言説生産過程の諸段階で対立関係、矛盾、問題が内包されているとみる石田勝利は、それが能動性や可能性として作用できると指摘する。その顕在化のためには、石田によれば、ジャーナリストの緊張関係の保持と練磨が重要である。

マスコミ労働者はそれ(緊張関係)を生産物として社会に流通させることが可能な、ある意味では特権的な位置にいる。だからこそ一般人以上にその「緊張関係」が求められるのである。また、この「緊張関係」によってこそ、マスコミ労働者は存立可能だとも言えるのである(石田1995 : 149)

石田のいう「緊張関係」とは、「社会と自己との関係」や「自己と受け手との関係」において生じる。つまりジャーナリストは「全体社会を対目的に認識し、それを個々の社会的事業に結び付ける努力を怠らない」労働者であり、同時に「独断的要素、自己検閲的要素の双方を排除し、社会的現実に関する研鑽された認識を提供する」プロフェッショナルだといっているのである(石田1995 : 141)。

一方、林香里(2002)は、長谷川や戸坂の議論を参照してジャーナリズム研究の復権を試みる。まずジャーナリズムの「意識」とは、「対立的意識活動」に関連するとし、長谷川の「ブルジョア・ジャーナリズム論」における「対立意識」に注目する。つまりジャーナリズムの機能的発展には「対立的社会関係」や「市民社会内部の結合の動因」(2002 : 22)が作用したといっているのである。さらに戸坂をとりあげ、ジャーナリズムの問題は、マスメディア(新聞)の問題ではなく、「社会のイデオロギーの問題」としてとらえるべきだと指摘する。結局「マスメディア・ジャーナリズム」という概念を導入する林は、現代社会で近代の産物としてのジャーナリズムの意識がマスメディアの中心ではなく、その週縁に生きていたとの仮説を提出する。それを検証するため、日本における新聞「家庭面」、ドイツのオルターナティヴ新聞『ターゲスツァイトウング』、米国のパブリック・ジャーナリズムを事例に、「マスメディア・システムの枠をもちながらもその理論から逸脱して活動する(あるいはしようとする)ジャーナリズムのダイナミックな意識

の表出のありさま」(2002：27)を観察し、ジャーナリズム活動とマスメディア・システムとの「葛藤」を明らかにする。

4. 結論～批判的ジャーナリズム研究の再生を向けて～

以上の議論をまとめると、ジャーナリズムはシステムであるマスメディアとは違って、対立的な意識活動であると同時に、矛盾や葛藤を伴うアクチュアルな活動であるにとらえられる。その特徴としてはイデオロギー性、アクチュアリティ、対立・葛藤・矛盾、ヘゲモニーの闘争が取り上げられる。つまりジャーナリズムとは規範と実態の間でのアクチュアルな活動であり、そのなかでは政治権力や経済エリート、ジャーナリスト、市民社会、オーディエンスなどがヘゲモニーをめぐる闘争を繰り返している。

こうしたジャーナリズムへのとらえかたは、ジャーナリズムそのものが所与のものではなく、言説生産をめぐる様々な諸行為者が作っていく非決定的な活動であることを強調するための戦略といえる。すなわちジャーナリズムは、特定の組織の状況で、具体的な組織の舞台の中で、そして特定の技術的状況の下で遂行される社会的制度であり、対立や矛盾を持つ活動であると同時に、ポテンシャルも持つ「アンビバレントなもの」として認識されるべきであるというのである。

対立的意識活動としてのジャーナリズムには、言説の生産・流通・消費をめぐるさまざまな行為者による多次的で重層的な葛藤・対立・矛盾が存在する。これを観察するのは、ジャーナリズム活動のポテンシャルを明らかにすることと関連すると思われる。これを簡単に議論することで結論づけたい。

第一に、ジャーナリズムの規範の「揺らぎ」のなかで、対立や矛盾が見つけられる。日本では「公共性」がジャーナリズムの制度的規範として受け入れられてきたが、1990年代後半からその「揺らぎ」を露呈し始めた。特に、政治権力とメディア産業が主張してきた「公共性」はその正当性がなく

なりつつある。その過程で公共圏概念がマスメディアのジャーナリズムの民主的可能性を提供する規範として新しく受容された。しかし、公共圏は抽象性が高い概念なので、それが宿ることのできる制度的実体を見つけることができなかった。これと共に、価値の側面においても対立は浮上する。公共圏とジャーナリズムをつなげる中間的な規範概念、すなわちニュース価値が再確立されなければならない。たとえば、対立的な意識活動であるジャーナリズムにアクチュアリティを付与するためには、客観報道や公正性、不偏不党などが再概念化されなければならないと思われる。

対立や矛盾の観察できる第二の領域は、権力との関係である。支配的なイデオロギーを行使する権力は後退している。政治権力もヘゲモニーを得るため、絶えず同意生産過程に参加しており、支配権力のイデオロギーが全体社会の支配的なイデオロギーにはなれない。むしろ社会の支配的なイデオロギーが支配権力のイデオロギーになる時代になったのである。ジャーナリストは公的情報源ばかりに依存するのではなく、それと対立し交渉する場合も少なくない。また、新たな情報源として市民社会が登場しているという点も注目しなければならない。

第三に、ジャーナリズムの一機関であるマスメディアの組織原理にも矛盾や対立が増えつつある。巨大化され商業化されたマスメディアは内部的対立や矛盾を処理するため、規律システムや慣行・慣習を取り入れてきた。これが日本では「組織ジャーナリズム」と批判された。マスメディア内部の組織原理は、ジャーナリストの統制手段として作用してきたが、ジャーナリストは様々な形態で抵抗している。それゆえに、緊張関係を意識しながら抵抗して交渉するジャーナリストの動きを明らかにする必要がある。この際、プロフェッショナルリズムやジャーナリスト間の連帯が重要な武器になるとと思われる。

最後に、今日のジャーナリズム活動において、なによりもアンビバレントな対立や矛盾を孕んでいる領域は公衆や市民社会、オーディエンスとの関係である。公衆や市民社会はマスメディア・ジャーナリズムの生産物に対する活発な批評活動を展開し、葛藤・対立を繰り広げている。こうした批評活動にジャーナリズムはどう「説明責任」(accountability)を果たしていく

かが問題になっている。また、ジャーナリズム活動は市民社会に情報源を拡大し、「生活世界」(lifeworld)の問題を積極的に取り上げるとともに、システムで得た情報を「生活世界」の言葉に翻訳して伝えることが求められる。

こうした多次的で重層的な対立・葛藤には様々な行為者が登場し、これらの力関係の中でジャーナリズムは営む。ジャーナリズムをめぐる以上の矛盾や対立は言論・表現活動を制約することもあるが、その活動が可能なアクチュアリティを提供することもある。ジャーナリズムが機能しにくい環境は、ほかならぬ矛盾や対立がないか、あるいはジャーナリストがこれを意識できない場合ではないか。特に、ジャーナリストには多様な制約やコントロールが与えられるが、それが対抗的影響力として作用するよう、ジャーナリストには対立的意識活動が求められるのである。

こうした制約や影響は、ジャーナリストに特定の業務遂行を強要する総体的なシステムとして理解される必要はない；むしろこれらはしばしば相反する影響力の範囲の中にあり、他よりあるものがもっと強力な場合もあり、特定の時期にもっと力強くなる場合もある。特定の方法でジャーナリストに影響を及ぼす傾向もある。ジャーナリストに対する制約は反対の圧力になりやすい場合もあり、それは受け入れられることもあるが、交渉されることもあると同時に、抵抗を受けることもある。(Harcup 2009 : 18)

これは単にジャーナリストだけの問題ではない。ジャーナリズムをめぐる相互行為の過程で多様な主体のネゴシエイティブな選択やコミュニケーションな態度が問題となり、その過程で手続きが相互行為の枠組みないし前提条件として重要になるといえるためである。結局、対立的意識活動としてのジャーナリズムは、非決定的な状態に置かれており、いつも運動するものとして認識する必要がある。何故ならば、花田の指摘のように、「公共圏およびマスメディアの機能と構造もまた所与の物として、あるいは先験的なものとして動かしがたく決定されているのではなく、それらはコミュニケーション過程の所産であり、その内実に依存している」(1999:22-23)ためである。

<参考文献>

- 新井直之(1979)『ジャーナリズム~いま何か問われているか~』東洋経済新報社 p.233
 _____(1986)「ジャーナリストの任務と役割」『マス・メディアの現在』[法学セミナー 増刊総合特集シリーズ三五]日本評論社 pp.25-26
- 石川明(2000)「市民社会とメディア企業」原寿雄(編)『市民社会とメディア』リベルタ出版 pp.162-193
- 岩井奉信(1996)「55年体制の崩壊とマスメディア」日本政治学会編『五五年体制の崩壊』岩波書店 pp.67-88
- 大井真二(2004)「マスコミュニケーションとジャーナリズム~研究のレリバンズ~」田村紀雄 他(編)『現代ジャーナリズムを学ぶ人のために』世界思想社 pp.34-55
- 佐藤毅(1986)「現代社会のなかのマスコミ~策略的コミュニケーションのなかで~」佐藤毅編著『現代のマスコミ入門』青木書店 p.230
- 清水幾太郎(1948=1992)「ジャーナリズム」『清水幾太郎著作集9』講談社 pp.189-312
- 田中浩(1987)「長谷川如是閑」田中浩(編)『近代日本のジャーナリスト』御茶の水書房 p.1246
- 塚本三夫(1974)「『編集権・編成権』をどう考えるか~今日における問題の性格と所在~」『講座現代ジャーナリズムIV:ジャーナリスト』時事通信社 pp.47-66
 _____(1995)「編集権」稲葉三千男他(編)『新聞学』(第3版)日本評論社 pp.136-147
- 鶴見俊輔(1965)「ジャーナリズムの思想」鶴見俊輔(編)『現代日本思想大系12:ジャーナリズムの思想』築摩書房 pp.7-46
- 戸坂潤(1932=1966)「イデオロギー概念」『戸坂潤全集第二巻』勁草書房 pp.95-222
 _____(1934=1966)「新聞の問題」『戸坂潤全集第三巻』勁草書房 pp.105-118
 _____(1934=1966)「新聞現象の分析」『戸坂潤全集第三巻』勁草書房 pp.118-144
 _____(1934=1966)「批評の問題」『戸坂潤全集第三巻』勁草書房 pp.154-166
- 長井口頭弁論(2005)東京高裁, 2005年12月21日第8回 口頭弁論 p.42
- 永田口頭弁論(2006) 東京高裁, 2006年3月22日第10回 口頭弁論 p.30
- 野原仁(2006)「市民拒否の倫理としての『編集権』」メディアの危機を訴える市民ネットワーク (編)『番組はなぜ改ざんされたか~NHK・ETV事件の深層~』一葉社 pp.275-295
- 花田達朗(1991=1996)「公的意味空間論ノート」『公共圏という名の社会空間』木鐸社 pp.55-86
 _____(1999)『メディアと公共圏のポリティクス』東京大学出版会 p.222
 _____(2004)「ジャーナリズムと情報化の日本的関係模様~下部構造、上部構造、

- プロフェッション~」柴山哲也編『日本のジャーナリズムとは何か~情報革命下で漂流する第四の権力~』ミネルヴァ書房 pp.3-26
- 浜田純一(1990)『メディアの法理』日本評論社 p.237
- 林香里(2002)『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』新曜社 p.462
- 林利隆(2004)「ジャーナリズム研究の射程」田村紀雄他(編)『現代ジャーナリズムを学ぶ人のために』世界思想社 pp.20-33
- _____ (2006)『戦後ジャーナリズムの思想と行動』日本評論社 p.291
- 長谷川如是閑(1931)「プルジョア・ジャーナリズム」『長谷川如是閑集第六券』岩波書店 pp.96-125
- _____ (1933)『新聞文学』日本文学第二〇回配本 pp.3-5
- _____ (1947)『新聞論』政治教育協会 p.220
- 藤竹暁(1968)『現代マス・コミュニケーションの理論』日本放送出版協会 p.389
- 山本明(1962)「イデオロギーとしてのジャーナリズム~マス・コミュニケーションのイデオロギー認識のために~」同志社大学人文学会『人文学』(61) pp.25-44
- _____ (1980)「イデオロギー」和田洋一(編)『新聞学を学ぶ人のために』世界思想社 pp.45-57
- 吉見俊哉(1998)「30年代日本における唯物論的メディア論の射程~長谷川如是閑と戸坂潤~」『大航海』(25)新書館 pp.147-159
- _____ (2000)「メディアを語る言説~兩大戦間期における新聞学の誕生~」『内破する知~身体・言語・権力を編になおす~』東京大学出版会 pp.177-237
- Gitlin, T.(1980) *The Whole World is Watching*. Berkeley, CA: University of California Press, p.327.
- Habermas, J.(1992) Further reflections on the public sphere, in C. Calhoun(ed.), *Habermas and public sphere*, Massachusetts: The MIT Press, pp.421-461.
- _____ (1992=1996) *Between facts and norms: contributions to a discourse theory of law and democracy*, Cambridge, Mass.: MIT Press, p.631
- Harcup, T.(2009) *Journalism: principles and practice*(2nd ed.), LA: Sage. p.244
- Schudson, M.(2003) *The Sociology of News*, New York: Norton, p.261
- Williams, R.(1977) *Marxism and Literature*, London and New York: Oxford University Press, p.217

접 수 일: 12월 31일
 심사완료: 01월 08일
 게재결정: 01월 29일

<Abstract>

**Journalism as a confrontational consciousness activity :
The potential of critical journalism studies in Japan**

The purpose of this article grasps journalism as a confrontational consciousness activity and is to grope for new potential. On this account, I tried re-define of the journalism in reference to the result of the critical journalism study in Japan. Primarily, I introduced critical journalism study in Japan which understood journalism as consciousness activity. Second, I compiled the meaning in four dimensions after having placed such a point of view with journalism as the confrontational consciousness activity. And, in journalism activity, I showed the spot that could observe opposition, contradiction and conflict. Finally I did a proposal to realize the potential that critical journalism study had.

일본 사회의 ‘다문화공생’의 의미와 다문화공생사회로의 과제*

李 吉 鎔**

ih_kilyong@cau.ac.kr

< 目 次 >

>

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1. 들어가며 | 4. 다문화공생사회로의 과제 |
| 2. 일본 사회의 다문화화 현상 | 5. 나오며 |
| 3. 일본 사회의 다문화공생론 | |

Key Words : 다문화주의(multiculturalism), 공생(coexistence),
정주외국인(permanent alien residents), 뉴커머(new-comers),
신자유주의(neo-liberalism)

1. 들어가며

21세기 한국 사회에서 외부적 요인에 의한 사회 변화 중 가장 주목 받는 것이 다문화화 현상이다. 법무부 출입국·외국인정책본부의 집계에 의하면 국내 체류외국인은 2009년 9월 30일 현재 1,149,493명에 달한다(불법체류자로 분류된 182,804명을 포함).¹⁾ 114만 9천여 명은 국내 거주인구의 2%가 넘는 숫자이다. 민

* 이 논문은 2007년도 정부(교육과학기술부)의 재원으로 한국학술진흥재단의 지원을 받아 수행된 연구임. (KRF-2007-411-JO2001)

** 이 논문은 한국일본언어문화학회가 개최한 국제학술대회(2008년 11월 8일, 동국대학교)에서 발표한 내용을 수정, 보충한 것이다. 토론을 맡아 주신 변인경 선생님 및 심사를 맡아 유익한 조언 및 제안을 해 주신 심사위원 세 분께도 감사를 드린다.

** 중앙대학교 일어일문학과 조교수, 사회언어학

족, 문화, 언어적으로 다원화된 인구학적 구성에 의한 다문화성의 증대 현상은 한국 사회에 다문화적인 사회로의 변화 및 적응을 요구하기 때문에, 학계의 각 분야에서 다문화성에 대한 광범위한 논의가 진행되어 왔다.²⁾ 특히 한국 사회의 현실을 반영하여 장기체류 외국인들의 실태를 조사하고 그들의 처우를 향상시킬 수 있는 정책적 대응의 모색이 주로 검토되기 시작했다(설동훈2004, 오경석 외2007, 윤인진2008). 캐나다³⁾ 및 호주와 같이, 다인종, 다민족으로 구성된 국가에서 복수의 문화집단들 간의 공존을 통해서 국가통합을 이루고자 하는 이념 및 정책으로서의 다문화주의⁴⁾에 대하여 이론적 검토와 사례들을 분석하는 한편,

1) http://www.immigration.go.kr/HP/TIMM/imm_06/imm_2009_11.jsp 참조

2) 전영준 (2009) 「한국의 다문화연구 현황」 중앙대학교 문화콘텐츠기술연구원 다문화콘텐츠연구사업단 편 『다문화총서1 다문화의 이해 : 주체와 타자의 존재방식과 재현양상』 도서출판 경진, 199쪽

3) 캐나다는 1971년에 서구 국가들 중에서 처음으로 다문화주의를 국가 정책으로 채택하였다. 서구사회에서 다문화주의가 등장하게 된 원인에는 (1) 선진국의 저출산과 고령화로 인한 이주노동자의 유입, (2) 1960년대의 인권운동으로 인한 내국인과 소수인종집단의 권리의식의 고양, (3) 민주주의의 확립, (4) 냉전의 종식으로 지정학적 안전의 확보와 그로 인한 소수인종집단을 억압하거나 통제할 필요성의 감소, (5) 자유민주주의에 대한 광범위한 합의와 지지의 존재 등이 있다(윤인진2008 : 77).

4) 다문화주의란 폭넓고 다양한 가치들을 반영하는 이념으로, 대체로 한 사회 내 다양한 인종이나 민족 집단들의 문화를 단일한 문화로 동화시키지 않고 서로 인정하고 존중하면서 공존하게끔 하는 데 그 목적이 있는 이념체계와 그것을 실현하고자 하는 정부 정책과 프로그램을 가리킨다(윤인진2008 : 73). 다문화주의 정책의 구체적인 내용의 한 예로 호주의 사례를 閔根政美(1997 : 148-150)에 의거하여 살펴보면 다음과 같다.

(1) 언어·문화유지 촉진 프로그램(이민·난민의 전통 문화·언어의 유지와 발전을 추구)

*에스닉 커뮤니티의 승인과 재정지원(가령 이민박물관 설립, 복지원·양로원 운영 등 복지 서비스의 실시에 대한 정부의 공적 재정지원)

*커뮤니티 언어에 의한 에스닉 미디어(TV·라디오 방송 등)에 대한 정부의 공적 지원

*에스닉 비즈니스의 정부에 의한 원조·장려

*정부, 지방자치단체 등에 의한 다문화 페스티벌 등의 적극적 실시

*비차별적 이주법의 실시와 동 이주법에 대한 초당적인 지지

(2) 사회참가 촉진 프로그램(이민·난민의 사회·정치 참가의 촉진)

*호스트사회의 언어·문화에 대한 교육서비스

*통역·번역서비스의 충실(전화 통역서비스나, 재판, 병원, 경찰 등 공공시설에서의 통역서비스 확충)

*공공기관에서 다언어 출판물의 배부

*국외에서 취득한 교육 및 직업에 관한 자격(증)의 적극적인 인정

*성인 영어교육 프로그램

가까운 일본 사회의 ‘다문화공생론’에 대하여 보고한 사례도 있어(조상균2007, 주효진2008, 윤인진2008), 관심의 대상이 됨을 알 수 있다.

그러나 일본의 ‘다문화공생’ 정책의 실체가 명확하게 파악되어 있지 않거나,⁵⁾ 1970년대 이후 일본 사회에 거주하면서도 ‘보이지 않는 사람들’로 여겨지던 재일한국인⁶⁾이 일본 사회에 요구한 ‘공생’ 개념을 검토하지 않고, 일본 정부가 2005년 6월에 총무성 산하에 결성한 ‘다문화공생 추진에 관한 연구회’에 있어서의 ‘공생’ 개념을 소개한 예가 대부분이다(조상균2007), 주효진2008). 그렇기 때

*특별 보장 조치

—신착 이민·난민을 대상으로 한 특별 복지지원 프로그램

—교육·취직에서의 차별시정에 관한 적극적 조치

*영주자·장기체류자에 선거권 부여(affirmative action)

*인종차별 금지법 및 인종차별행위 벌칙법 등의 제정

*인종·평등위원회 등의 설치

(3) 이문화간 커뮤니케이션 촉진 프로그램(수용국 사람들에 대한 계몽)

*공영 다문화방송의 실시(TV, 라디오)

*학교·기업·공공기관에서 다문화교육을 실시(이문화간 커뮤니케이션교육과 인권, 반차별교육을 포함함)

*다문화문제연구홍보기관의 설치

*다문화주의법의 제정(다문화사회인 것을 공적으로 인지함)

5) 윤인진(2008)은 “한국 정부의 정책은 일본의 ‘다문화공생’과 같은 수준이라고 보는 것이 정확한 평가라고 지적하며(84쪽), 한국의 다문화정책이 ‘다문화 지향’ 정책이고 일본의 ‘다문화공생’ 정책에 가깝다”고 지적하고 있다(99쪽). 그러나 이 연구에서 ‘다문화공생’ 정책의 실체가 소개되어 있지는 않다.

6) 일본에 살고 있는 남북한의 동포를 지칭하는 호칭은, 역사적, 정치적 상황에 따라 다양하게 나타나는데, 본 논문에서는 ‘재일한국인’으로 통일한다. 본문 중의 인용 등에서 나타나는 ‘재일’, ‘재일한국’, ‘조선인’, ‘재일코리안’ 및 일본어 문헌의 ‘在日’, ‘在日韓国・朝鮮人’, ‘韓朝鮮人’, ‘在日コリアン’의 번역도 모두 ‘재일한국인’으로 통일한다. 재일한국인의 호칭 문제에 관해서는 박용구(2008:335-336)에 자세히 언급되어 있다.

7) 조상균(2007 : 348)은 ‘공생’ 개념의 출처에 대하여 다음과 같이 지적하고 있다. “일본 정부는 1990년대의 새로운 환경의 변화, 즉 다문화 사회로의 본격적인 진입을 위한 다각적인 대안을 마련하기 위해 총무성 산하에 ‘다문화공생 추진에 관한 연구회’를 결성하고, 점차 정주화 경향을 보이고 있는 이들 외국인 문제에 적극 나서고 있는 실정이다. 이곳에서 설명하는 ‘다문화공생’이란 일본의 외국인 정책을 함축하고 있는 독특한 개념으로, 다른 문화적 배경을 갖는 사람들이 상호의 문화적 차이를 존중하면서 평등하게 공정한 관계를 구축하고 함께 생활해 가는 것을 말하고, 이러한 개념이 세간에 알려지기 시작한 것은 한신대지진을 계기로 외국인 지원을 위해 탄생한 ‘다문화공생센터’의 헌신적인 지원활동이 큰 역할을 담당했다고 일컬어지기 시작한 1995년부터다.”(밑줄은 인용자의 의함)

문에 일본 지방자치단체의 외국인 주민 지원시책에 대한 가이드라인인 ‘다문화 공생 추진프로그램(2006년 3월)’에서 발표된 것처럼 ‘공생’의 의미가 긍정적으로 받아들여지고 있다.⁸⁾

현재 일본에서는 교육계·재계는 물론 정계에서도 여·야당을 불문하고 ‘공생’이란 용어가 사용되고 있으며, ‘공생’ 그 자체는 ‘더불어 살자’는 공존, 상생의 개념이니 아무도 반대할 이유가 없다. 그러나 일본 정부가 주도하는 다문화주의 및 공생론이 ‘작은 정부’와 ‘큰 국가’를 특징으로 하는 2000년대 신자유주의를 배경으로 출발했으며,⁹⁾ 신자유주의 개혁에서 경쟁과 선별(選別)의 원리로 유용되고 있기 때문에,¹⁰⁾ 1970년대 이후 재일한국인이 중심이 되어 주장한 ‘공생’ 개념과는 별개로 보아야 할 것이다.¹¹⁾

본 논문에서는 이와 같은 문제의식에 기초하여 일본의 다문화공생론의 기원 및 전개 과정을 검토하고, ‘공생’의 의미를 역사적, 사회적, 정치적 관점에서 비판적으로 재검토하여 ‘공생’이란 용어가 어떤 의미로 사용되고 있는지 알아보고자 한다. 이러한 논의는 궁극적으로 한국 사회에 있어서 다문화사회의 실현 방향성

-
- 8) 주효진(2008 : 99)은 ‘다문화공생 추진프로그램’을 다음과 같이 긍정적으로 소개하고 있다. “다문화공생 추진프로그램에서는 기존의 외국인을 단순한 지원의 대상으로 삼았던 데서 탈피해 공생관계로 설정하고 외국인 주민에 대한 행정서비스가 완비되고 이들의 인권이 보장되며 다른 문화에 대한 주민들의 이해와 개방적인 태도가 확립된 지역사회를 만들려고 한다. 따라서 이를 위해 의사소통을 위한 다양한 언어자원 제공, 거주와 교육, 노동, 의료, 복지, 보건, 방재 등 기본적인 생활환경을 보장하며, 다른 문화에 대한 일본인 주민의 의식계발과 외국인 주민의 자립 및 사회 참여를 촉진하여 상호 교류가 활성화되도록 하는 데 주안점을 두고 있다.”
- 9) 加藤千香子(2008b) 『日本社会と『共生』の再定義へ』朴鐘碩·上野千鶴子他著, 崔勝久·加藤千香子編 『日本における多文化共生とは何か-在日の経験から』新曜社. 249頁
- 10) 上野千鶴子(2008) 『共生を考える』朴鐘碩·上野千鶴子他著, 崔勝久·加藤千香子編 『日本における多文化共生とは何か-在日の経験から』新曜社. 218頁
- 11) 일본제국주의 시절에 ‘공생(共生)’과 비슷한 뉘앙스를 가진 ‘공영(共榮)’이라는 용어가 사용되었다. 1940년 일본 정부가 ‘대동아공영권’을 발표했을 때, 당시의 외무상인 마쓰오카 요스케(松岡洋右)는 다음과 같이 연설을 하였다. “私は年来皇道を世界に宣布することが皇国の使命であると主張してきた者であります。国際関係より皇道を見ますれば、それは要するに各国民、各民族をして各その処を得せしむることに帰着すると信ずるのであります”(加藤千香子2008b : 243에서 인용). ‘황도를 세계에 선포한다’는 것은 바로 타국에 대한 주권침략행위를 동반하는 것임에도 불구하고, 그 점에 전혀 자각적이지 못한 채 아시아·태평양 지역의 각 민족과 ‘공영’이 제창되었던 것이다(앞의 논문. 243쪽). 정부 주도 ‘다문화공생론’에서 ‘공영’의 기억을 되살린 것은 필자한 사람뿐일까?

을 모색하기 위한 기초가 될 것이다.

이하, 제2절에서 일본 사회의 다문화화 현상에 대해 정리하고, 제3절에서는 ‘다문화공생론’의 기원 및 전개 과정에서 나타난 ‘공생’의 의미를 검토할 것이다. 그리고 제4절에서 일본의 다문화공생사회의 과제를 짚어보고, 마지막으로 한국 사회에의 시사점에 대해 검토한다.

2. 일본 사회의 다문화화 현상

2.1 일본 사회와 이문화 교류

일본은 섬나라이면서 근대 에도시대에 300년 넘게 쇄국정책을 실시하여 민족적 균질성을 유지해 왔다.¹²⁾ 또 명치시대(1868년~1912년)에 ‘단일민족국가관’이 정립되고, 언어의 통일 등을 강행하여 사회의 균일성을 달성하게 되었는데, 이러한 점들이 일본의 ‘단일민족신화’의 근간을 이루는 것이다. 또한 전후 일본 사회가 풍부한 노동력을 집중적으로 활용하여 경제발전을 이룩하게 되는데, 일본의 경제성장의 기본 원리는 효율성의 추구였으나,¹³⁾ 일본의 정부 고위 관리가 경제성장의 원동력으로 단일민족신화를 거론할 정도이다.¹⁴⁾

그러나 일본에는 선주민족으로 아이누민족과 오키나와인이 있다는 사실을 부정할 수 없으며 이들은 최근에 와서야 일본의 다양한 문화의 하나로 인정받게 되었다.¹⁵⁾ 또한 일본 사회는 일본제국주의의 식민지 지배에 의하여 도일하게 된 한국인과 중국인, 타이완인, ‘출입국관리 및 난민인정법’의 개정으로 인하여 일본 기업의 노동자로서 정책적으로 도입된 일본계 브라질인, 페루인 등 다양한 민족으로 구성되어 있다. 일본 사회의 구성원으로서 이른바 올드타이머(old-timers)와

12) 蔵田雅彦(2000) 『アジアの民族共生と在日韓朝鮮人』徐龍達·遠山淳·橋内武編著 『多文化共生社会への展望』日本評論社. 85頁

13) 毛受敏浩·鈴木江里子編著(2007) 『国際交流·協力活動入門講座Ⅳ: 「多文化パワー」社会』明石書店. 4頁

14) 徐龍達(2000a) 「多文化共生社会への展望: 定住外国人の市民的権利の獲得と今後の展望」徐龍達·遠山淳·橋内武編著 『多文化共生社会への展望』日本評論社. 2頁

15) 아이누인들의 민족적 긍지가 존중되는 사회의 실현을 도모하고 더불어 일본 내 다양한 문화의 발전에 기여함을 목적으로 하는 ‘아이누문화의 진흥 및 아이누의 전통 등에 관한 지식의 보급 및 개발에 관한 법률(1997년 법률 제52호)’이 1997년 7월 1일 시행되었다. 일본 사회의 다민족국가 인식과 다문화공생사회 발전의 이정표가 되는 획기적인 법률로 평가 받고 있다(徐龍達2000a : 6-7).

뉴커머(new-comers)라 불리는 정주외국인(定住外国人, permanent alien resident s)¹⁶⁾ 및 귀화 일본인이 증가의 일로에 놓여 있다는 것이다.¹⁷⁾

여기서 일본 사회와 이문화 교류에 관해 간략하게 정리를 하자면, 일본은 예로부터 이문화에 강한 호기심을 가지고 있었으며 신문물의 수용에 적극적이었다. 가령 중국·한국으로부터 ‘불교·한자·주자학’ 등 당시의 신문화를 받아들이고, 포르투갈로부터 ‘철포’라는 기술을 받아들였다. 또한 독일로부터는 ‘의학과 법률’을 받아들이고 미국으로부터 ‘경제 시스템과 민주주의’ 등을 받아들였다. 한편 일본 사회가 호기심을 가질 정도의 신문물을 제공하지 못하는 경우에는 ‘저가치의 이질성’으로 치부되어 억압과 차별을 받는 구조가 형성되어 있다(아이누민족 등 일본 내 선주민족 및 외국인 노동자 등). 이러한 일본 사회의 차별구조의 요인으로 생각할 수 있는 것은 동질성의 추구하고 효율성의 추구라는 일본 사회의 에토스(ethos)이다.¹⁸⁾ 이는 다음 <표1>과 같이 나타낼 수 있다.

<표1> 일본 사회의 차별구조

	효율적	비효율적
동질적	I 유형 : 일본인	II 유형 : 장애인 등 사회적 약자 (사회적 차별)
이질적	III 유형 : 정주외국인의 자손 (제도적 차별)	IV 유형 : 외국인 노동자 (사회적 차별/제도적 차별)

<표1>에 대해 간략하게 설명을 더하자면, II 유형은 인종적, 문화적, 언어적 동질성을 유지하지만 효율성 측면에서 걸림돌이 되는 장애인 등 사회적 약자가 해당되는데, 이들에 대해서는 편견과 오해 등 ‘사회적 차별’이 존재한다. 일반적인 일본인과 동등하게 고효율성을 유지하나 인종적, 문화적, 언어적 동질성을 확보하지 못한 정주외국인의 자손(III 유형)에 대해서는 참정권의 불인정 등의 ‘제도적 차별’이 인정된다. 또한 IV 유형과 같이 이질적인 저가치로 분류되는 외국

16) 徐龍達(2000b) 「共生社会への地方参政権：定住外国人の市民的権利の獲得と今後の展望」, 徐龍達·遠山淳·橋内武編著 『多文化共生社会への展望』日本評論社, 22頁

17) 徐龍達前掲論文(2000a)4頁

18) 이길용(2008) 「일본의 다문화공생의 실태와 전망」, 중앙대학교 문화콘텐츠기술연구원 다문화콘텐츠 연구사업단 정기 학술세미나 발표자료집, 77쪽

인 노동자 등에 대해서는 ‘사회적 차별’과 ‘제도적 차별’이 동시에 존재한다고 할 수 있다.

2.2 일본 사회의 다문화화 현상

이렇듯 현대 일본의 문화는 일본 내 소수민족, 정주외국인의 문화를 포함하고 있다. 다음으로 일본의 외국인등록자수 통계를 통해 다문화화 현상에 대해 알아 보자.

일본 법무성 출입국관리국의 2008년도 말 현재의 외국인등록자 통계에 의하면, 외국인등록자수는 2,217,426명으로 과거 최고를 갱신했다. 일본의 총인구 127,692,273명(총무성 통계국의 ‘2008년 10월 1일부 추계 인구’에 의함)¹⁹⁾의 1.74%를 차지하고 있다. 국적(출신지) 별로 보면 중국(대만·홍콩을 포함)이 655,377명으로 전체의 29.6%를 차지해 최대이다. 2006년도까지 최대였던 한국·조선은 589,293명으로 전체의 26.6%를 차지하며, 점진적으로 감소하는 추세이다. 브라질 출신자는 2008년 전세계적 금융위기에 직면하여 그 수가 약간 줄었으나 과거 10년간 거의 매년 증가를 계속해 외국인등록자 총수의 14% 전후(312,582명)를 차지하고 있다.

제2차세계대전 패전 직후 재일한국인이 재일외국인의 90% 이상을 차지하고 있었으나, 한·일 국제결혼의 증가, 1985년에 부모 양계 혈통주의로 법률 개정, 일본인으로서의 귀화 등의 요소에 의해 재일한국인의 비율이 점차 줄어들고 있다. 반대로 중국과의 국교 성립에 따른 중국인의 입국 증가와 출입국관리 및 난민인정법의 개정에 의해서 취업 및 정주가 인정된 브라질, 페루로부터의 일본계(외국)인의 증가가 특징적이라 할 수 있다.²⁰⁾ 이중 브라질인 커뮤니티는 시간과 공간을 달리하여 일본인과의 접촉을 피함으로써 스트레스가 적은 생활공간을 확보하려는 ‘분리거주’를 지향하고 있다. 당초의 ‘조화롭지 못한 상태(不調和な状態)’에서 상호 간의 조정 단계를 거쳐 ‘불만이 적은 상태(苦情の少ない状態)’로 경과하여 왔다.²¹⁾ 다문화란 서로 다른 문화가 접촉하여 영향을 주고받는데 각 문화를 연결시키고 조화롭게 적용시키고자 하는 사회적 필요성에 의해 생겨

19) <http://www.immi-moj.go.jp/toukei/index.html> 참조

20) 徐龍達前掲論文(2000a)5頁

21) 駒井洋(2003) 『多文化社会への道』明石書店. 32頁

난 개념이다.²²⁾ 그런 의미에서 일본 사회는 다문화공생사회로 진행되어 가는 과정에 있으나, 현재는 ‘이문화병존사회(異文化並存社會)’라 보는 것이 타당할 것이다.

3. 일본 사회의 다문화공생론

3.1 다문화공생론의 기원

지금까지 일본의 다문화화 현상에 대해 살펴보았다. 가시적으로 이질적인 뉴커머와의 병존이라는 사회 현상으로부터 일본인들은 선택의 여지없이 다문화성에 관한 인식을 깊이 해 외국인 주민과의 공생을 생각하지 않을 수 없는 시대를 맞이한 것이다. 일본 사회의 ‘다문화공생론’은 다문화주의의 번역 개념에서 생겨난 말²³⁾로 일본 사회에서 ‘공생론’은 다음 두 흐름으로 이해되고 있다.²⁴⁾ 즉, 1970년대 히타치 취직차별 투쟁을 중심으로 한 일본 내의 소수자(재일한국인)가 요구한 일본 사회에서의 공생이 하나의 흐름이고, 1990년대 이후 뉴커머의 급증으로 인한 일본 사회와 정부의 대응책으로 마련된 공생이 또 하나이다. 다음에서 이 두 흐름에 대해 알아보자.

3.2 재일한국인이 요구하는 공생의 의미

먼저 재일한국인이 요구하는 일본 사회에서의 공생의 의미에 대해 알아보자. 지배와 피지배라고 하는 특수한 역사적 관계를 배경으로 재일한국인 60여만 명이 생겨났다. 구식민지 지배국에 정주외국인으로서 거주하는 재일한국인은 이미 일본에서 태어나서 자란 사람이 대다수를 차지하며, 명확한 정주화 경향을 보이고 있다. 그런 의미에서 재일한국인은 소수민족에 한없이 가까운 존재라고 할 수 있겠다.²⁵⁾ 그러나 일본 사회는 재일한국인을 언젠가는 귀화를 하거나 또는 조국으로 귀국할 사람들로 보고, 주권자인 일본 국민과는 이질적인 존재, 즉 ‘보이지 않는 사람들’로 간주하여,²⁶⁾ 일본 국내에 거주하는 이분자로서 관리와 통제

22) 김홍운·김두정 (2007) 「한국 사회의 다문화 현상과 교육적 과제」 『인문학연구』 제34권 제3호. 155쪽

23) 上野千鶴子前掲論文. 210頁

24) 加藤千香子前掲論文(2008b)246-248頁

25) 藏田雅彦前掲論文. 90-91頁

26) 加藤千香子前掲論文(2008a)15頁

의 대상으로 삼았다.²⁷⁾

그러한 가운데 1970년대 히타치 취직차별 투쟁²⁸⁾을 시작으로 재일한국인 2세를 중심으로 한 인권투쟁은, 재일한국인을 사회적 권리 주체로 인정하지 않는 일본 사회에 대한 당사자로서의 이의제기이다. 달리 말하면 소수자의 입장에서 일본 사회에 대해 ‘공생(共生, 共に生きる)’을 요구한 것이다.²⁹⁾ 일본 내 소수자가 요구하는 일본 사회에서의 공생은, Ⅲ유형(<표1> 참조)의 정주외국인의 지순에 대한 참정권의 불인정 및 지방공무원의 국적조항 등 ‘제도적 차별’의 시정을 요구하는, 다문화주의 이념 중 하나인 ‘평등의 요구’³⁰⁾가 중심이었다. 일본 사회 속에서 그 존재가 은폐되고 잠재화되었던 재일한국인이 요구하는 공생이란 정주외국인이 일본 사회에서 일본 국민들과 똑같은 시민적 권리를 인정받고 지역 사회의 발전에도 기여할 수 있는 삶의 방법인 것이다.

한편 히타치 취직차별 투쟁의 시기는, 가와사키시(川崎市)와 같이 혁신적인 지방자치단체가 등장해 외국인시책 등에 관해 선진적인 시정(市政)이 추구된 시기와 일치한다. 1971년 4월 진보파인 이토(伊藤三郎) 시장이 등장한 이래, 가와사키시는 외국인시책의 선도지역이 되었다. 1986년 ‘가와사키시 재일외국인 교육기본방침 - 재일한국인의 교육을 중심으로’의 제정³¹⁾과 ‘후레아이관(触れ合い館, 상호이해회관)’의 설립³²⁾에서도 알 수 있는 바, 정주외국인의 대표격인 재일한국인이 참여하는 가운데 시책을 진행하면서, 가와사키시는 행정계획에

27) 加藤千香子前掲論文(2008b)245頁

28) 1970년에 아이치현의 한 고등학교를 졸업한 박종석 씨가 히타치 소프트웨어 도쓰카 공장의 채용시험에 내정(합격)되었다. 당시 이력서에 통칭명(新井鐘司), 본적란에는 아이치현이라 적었다. 회사 측의 호적등본 제출 요구에 박종석 씨가 재일한국인인 관계로 호적등본을 뗄 수 없다고 하자 일방적으로 채용을 취소당했다. 1970년 12월 8일 요코하마 지방법원에 제소하였으며, 제소로부터 4년 후 박종석 씨의 완전 승소 판결로 결정나게 된다(金命貞2007 : 65-67).

29) 加藤千香子前掲論文.(2008b)246頁

30) 上野千鶴子前掲論文 215頁

31) ‘더불어 살다(共に生きる)’라는 말은 당시에 이미 재일한국인들이 사용하고 있었다. 그것이 재일한국인과 일본인과의 연대, 상호존중이라고 하는 의미로 이 ‘교육기본방침’에도 들어간 것을 확인해 둘 필요가 있다(加藤千香子2008a : 21).

32) 후레아이관 조례에는 “일본인과 재일한국인이 중심이 된 재일외국인이 시민으로서 상호의 만남을 추진하고 서로의 역사·문화 등을 이해하며, 기본적인 인권존중의 정신에 근거한 더불어 사는(共に生きる) 지역사회의 창조에 기여한다”라고 명문화되어 있다(加藤千香子2008a : 22).

도 ‘다문화공생’이라는 말을 사용하게 된다.³³⁾ 다음과 같은 ‘공생정책’ 등도 등장하게 되며 ‘다문화공생’이라는 문구(praise)는 1990년대 이후에 전국적으로 퍼져 나가게 되었다.

- (1) 1993년 ‘가와사키 신시대 2010계획’에서 ‘다문화공생 도시 만들기 추진’ 이념을 제창
- (2) 1996년 가와사키시 시민국(市民局)에 ‘인권·공생추진담당 부문’을 설치
- (3) 1996년 지방공무원의 국적조항 철폐³⁴⁾
- (4) 1998년 ‘가와사키시 외국인교육기본방침-다문화공생사회를 목표로’

3.3 정부 주도하의 공생의 의미

한편, 1990년대 이후 올드타이머인 재일한국인과는 계통을 달리하는 뉴커머의 급증으로 인한 일본 사회와 정부의 대응책으로 마련된 공생의 의미에 대해 알아보자. 일본계(외국)인의 등장은, 재일한국인과 같이 일본 사회에 정착해 있으면서도 불가시화되어 있던 외국인의 존재를 극명히 드러나게 하였다. 인종적, 문화적, 언어적으로 이질적인 외국인에게 일본 사회에 적응할 기회를 제공해야 할 필요성이 제기된 것이다.

이러한 필요성의 따라 정부 주도의 ‘다문화공생론’이 퍼져갔으며, 2000년대에는 중앙 정부의 정책 과제에서도 ‘다문화공생’이라는 용어가 사용되었다.³⁵⁾ 즉, 총무성은 2005년 6월에 ‘다문화공생 추진에 관한 연구회’를 설치하여 ‘다문화공생’ 추진 과제 등에 대한 검토를 시작했고, 2006년 3월에 ‘다문화공생 추진 프로그램’의 제언-지역사회의 외국인 주민 지원시책에 관하여’를 발표하였다. 기존에 외국인을 단순한 지원의 대상으로 삼았던 데서 탈피해 공생 관계로 설정하고, 외국인 주민에 대한 행정서비스가 완비되고 이들의 인권이 보장되며 다른 문화에 대한 주민들의 이해와 개방적인 태도가 확립된 지역사회를 만들고자 한

33) 加藤千香子前掲論文(2008a)22頁

34) 지방공무원의 3509개 직무 가운데 ‘공권력의 행사에 해당하는 182개 직무를 남기고 기타 직무는 외국인에게 문호를 개방했다(崔勝久2008 : 155).

35) 加藤千香子前掲論文(2008a)11-12頁

것이다.³⁶⁾ 또한 지역사회에서 다문화공생을 추진하기 위해서 외국인 주민에 대한 시책을 강구하는 것뿐만 아니라 일본인 주민 측의 다문화공생에 관한 의식계발도 중요하다고 강조하였다. 지방자치단체에서 검토해야 할 구체적인 사항으로 다음과 같은 것들을 열거하고 있다.³⁷⁾

- (1) 지역주민 등에 대한 다문화공생의 계발
- (2) 다문화공생의 지역 조성
- (3) 다문화공생을 테마로 한 교류이벤트 개최

이렇듯 일본 사회가 요구하는 일본 사회에서의 공생은, 인종적, 문화적, 언어적 차이가 가지적으로 이질적인 문화적 소수집단을, 동등한 가치를 가진 집단으로 인정한다는 ‘인정의 정치(the politics of recognition)’가 중심이 된 것으로 볼 수 있다.

그러나 이러한 정부 주도하의 ‘다문화공생론’이 기본적으로 일본인과 외국인의 엄밀한 구분, 차이를 전제로 하여 외국인 주민에 대하여 일본 사회에 적응을 유도한다는 행정적 발상에서 나온 것으로, 이러한 행정적 발상에 기초한 ‘공생’론은 일본인과 외국인 사이의 서열관계를 유발함은 명확한 사실이다.³⁸⁾ 또한 배제와 동화화는 대조적인 뉘앙스가 함축된 ‘공생’이란 용어는 담론의 자원으로서 이용 가치가 있기 때문에, 2001년 고이즈미 정권 이후, 사회적 격차를 긍정하는 신자유주의 정권에 의해 경쟁과 선별의 원리로 유용되어 갔다.³⁹⁾ 즉, 외국인 중에서 국익에 부합되는 자를 선별함으로써, 소수자 집단을 개인화하여 자기책임을 지우는 효율성우선주의에 유용되어 간 것이다.

한편 고이즈미 정권과 때를 같이 하여 2001년 11월 가와사키시장 선거에서 보수계인 아베(阿部孝夫) 씨가 당선되면서, 1971년 이후 이어져 온 가와사키시의 혁신적 시정은 중지부를 찍게 된다. 진보파 정권 때 외국인시책이 전진하고 보수

36) 주효진 (2008) 「아시아의 다문화정책에 대한 비교 연구」 『한국행정학회 2008년도 추계 학술대회 발표논문집』99쪽

37) 毛受敏浩·鈴木江里子編著前掲書. 43頁

38) 加藤千香子前掲論文(2008b)248-250頁

39) 加藤千香子前掲論文(2008a)28頁

과 정권 때 후퇴하는 점은 아마도 한국에서도 확인할 수 있을 것이다.

4. 다문화공생사회의 과제

이상으로 일본 사회의 다문화공생론에 있어서의 공생의 의미에 관하여, 개인 한국인이 요구하는 공생의 의미와 정부 주도하의 공생의 의미로 나누어 살펴본다. 일본 사회에서 다문화공생사회를 실현하기 위한 방안이 다각도로 모색되고 있다.⁴⁰⁾ 이러한 제언도 참조하면서, 본 논문에서 논의한 사항을 바탕으로 일본의 다문화공생사회로의 과제를 정리하면, (1) 사회적 차별의 개선, (2) 제도적 차별의 철폐라는 두 요소가 필수적이라고 할 수 있겠다.

먼저(1) 사회적 차별의 개선에 관해서는 일본인의 의식 개선이 무엇보다 중요할 것이다. 일본 주민의 이질성과의 접촉 경험을 살려, 병존 상태인 다문화가 고정된 형태로 존재하는 것이 아니라, 바로 지금 정신의 변화를 촉진시키는 ‘진행 중인 변화(change in progress)’ 상태로 이끌어 가는 것이 중요하다. 다문화공생사회 실현의 과제로 지적되는 ‘마음의 벽’을 넘어 상호 소통적 융합을 위한 노력으로는 다음과 같은 사례를 꼽을 수 있다.⁴¹⁾ 2001년 외국인 밀집지역(도쿄 도요시마구, 가나가와현 야마토시, 군마현 이세자키시)의 의식조사(<그림1>⁴²⁾ 참조)의 결과에 따르면 일본인 주민과 외국인 주민의 ‘경계에 위치하는 인물’ 즉 외국인 주민과 교류가 있는 중요인물(key person)이 존재하며, 일본인 주민이 외국인 주민과 교류가 있으면 외국인 주민에 대하여 긍정적인 평가를 하는 것으로 나타났다.⁴³⁾

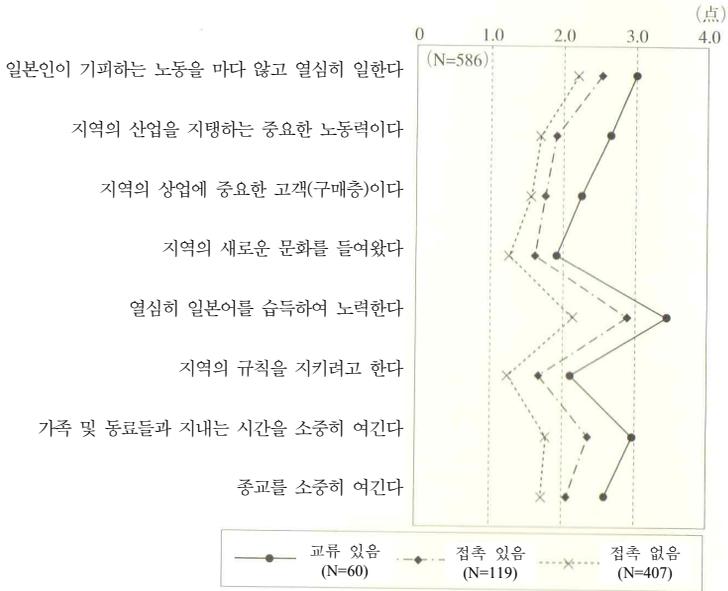
40) 예를 들어 야마다(山田貴夫) 씨는 다음과 같이 명확하게 제안해 놓은 바 있다. 즉, ‘다문화공생 지역사회를 구축하는 키워드’는 (1) 내외인 평등주의의 철저, (2) 민족문화종교 등의 차이를 존중하고, ‘아이덴티티 보전의 권리’를 승인할 것, (3) 시민으로서 ‘주민자치에 참가할 권리’를 보장, (4) 전쟁책임, 특히 가해자책임의 자각 등을 열거하고 있다 (崔勝久2008 : 186에서 재인용).

41) 毛受敏浩·鈴木江里子編著(2007) 『国際交流・協力活動入門講座IV : 「多文化パワー」社会』明石書店. 43-49頁

42) 조사의 개요는 다음과 같다. 각 지역에 거주하는 만20~75세의 남녀를 대상으로, 각 지역의 선거인명부에서 500명을 2단계 무작위 추출하였다. 조사법은 방문면접법을 실시하였다(毛受敏浩他編著2007 : 68).

43) 한국 사회보다 20여년 전에 다문화가족 문제에 직면한 일본 야마카다(山形)현 쇼나이 지방에서 다문화가족 문제를 시스템적인 측면에서 어떻게 접근하여 왔는지를 분석한 김범수(2007)에서도 다음과 같은 시사점을 열거하고 있는데, 여기에서도 지역사회에 헌신적으로 공헌하는 중요인물이 존재함을 볼 수 있다.

<그림1> 교제 정도에 따른 지역 사회의 외국인에 대한 평가의식



- ※ 교류 있음: 가족 단위로 친하게 지내는 사람이 있다
개인적인 사항에 대하여 상담할 수 있는 사람이 있다
세상 사는 이야기(世間話)를 하는 사람이 있다
- 접촉 있음: 인사 정도 하는 사람이 있다
- 접촉 없음: 전혀 아는 사람이 없다

다음으로 (2) 제도적 차별의 철폐에 관해서는, 과거 지배·피지배의 역사에 있어서의 전후보상문제와 정주외국인에 대한 법적 처우문제가 일본이 다문화 공생사회로 나아가는 데 있어서 저해요인으로 지적받고 있다.⁴⁴⁾ 즉 과거의 지배

- 첫째 다문화가족을 위해 공공기관에서 적극 참여
- 둘째 다문화가족 시스템 구축을 위해 한 사람의 헌신적인 활동
- 셋째 다문화가족을 위한 거점기관을 설립 운영
- 넷째 다문화가족을 위한 다양한 언어 교육을 지원
- 다섯째 다문화가족을 위한 음식축제나 의상 축제 등 다양한 축제와 프로그램의 개발 및 운영
- 여섯째 다문화가족 사업을 관광사업과 연계

44) 徐龍達前掲論文(2000a)11-12頁

와 피지배의 역사로부터 파생한 일본의 ‘전상병자 전몰자유족 등 원호법’에 의한 전후보상이나, 호적법에 의한 정주외국인의 참정권 박탈 문제 등이 공생사회의 실현을 가로막고 있다는 것이다. 다문화공생사회를 실현하기 위해서는 일본인 스스로가 ‘국적의 벽’을 철거하고 모든 차별 행정을 철폐하여 정주외국인을 지역사회의 구성원, 같은 동료로서 인정하는 것이 전제가 될 것이다. 그런 의미에서 일본의 다문화공생사회의 실현은 일본 정부의 전후책임의 완수 의지에 달려 있다고 해도 과언이 아닐 것이다.

아울러 국제인권기준에 맞는 외국인의 인권옹호법 정비도 시급하다 하겠다.⁴⁵⁾ 외국인을 받아들여 발전해 온 나라들은 법률에 의해 이주외국인의 권리를 지켜왔다. 한국에서도 저출산화, 고령화, 고학력화라는 사회적 기반 변화를 배경으로 외국인의 유입이 증가하고 정주화가 진행되고 있는바, 2005년 6월 말 한국 국회는 영주자격을 취득하여 3년 이상 경과된 19세 이상 외국인에게 지방의회 선거권을 인정하는 법안을 가결시켰다.⁴⁶⁾ 또 2007년 7월 ‘재한외국인 처우 기본법’⁴⁷⁾이 시행되어 종합적 정책으로서의 외국인정책이 법률적으로 명확하게 되었다. 일본의 민주당이 지난 2009년 8월 30일의 중의원 선거에서 총의석 480석 가운데 308석을 차지하는 압승을 거두어 하토야마(鳩山由紀夫) 내각이 탄생하였다. 하토야마 내각이 법적·제도적 개혁을 통해 다문화공생사회의 공고화를 이루어 주기를 기대한다.

5. 나오며

-
- 45) 川村千鶴子(2008) 「ディアスポラ接触—地域が日本を越えるとき」川村千鶴子編著 『「移民国家日本」と多文化共生論—多文化都市・新宿の深層』明石書店. 380頁
- 46) 総谷智雄(2006) 「外国籍住民への排除と同化の圧力」朴一·太田修他 『「マンガ嫌韓流」のここがデタラメ』コモンズ.
- 47) 2006년 11월 28일 노무현 대통령 주재 제52회 국무회의에서 외국인 정책의 체계적 수립 및 추진을 위한 근거법 마련을 위해 ‘재한외국인 처우 기본법’을 제정키로 의결하였고, 2007년 7월 18일부터 시행되었다. 이 법의 목적은 재한외국인이 한국 사회에 빨리 적응하여 개인의 능력을 충분히 발휘할 수 있도록 하고, 한국 국민과 재한외국인이 서로를 이해하고 존중하는 사회 환경을 만들어 한국의 발전과 사회 통합에 이바지함에 있다.

본 논문에서는 일본 사회의 다문화공생론의 기원 및 전개 과정을 분석하고 ‘공생’의 의미를 비판적으로 검토한 후, 일본의 다문화공생사회로의 과제를 정리하였다. 이러한 논의는 한국에 있어서 다문화사회의 실현 방향성을 모색하기 위한 기초가 될 것이다.

먼저 제2절에서 일본의 다문화화 현상에 대해 간략히 정리하고, 제3절에서 일본에서의 ‘다문화공생론’의 기원 및 전개 과정을 살펴보았다. 그 결과 재일한국인이 요구하는 일본 사회에서의 공생의 의미는 ‘제도적 차별’을 시정하는 ‘평등의 요구’가 중심이고, 일본 정부가 주도하는 공생의 의미는 문화적 소수집단을 인정하는 ‘인정의 정치’이지만, 경쟁과 선별을 바탕으로 한 행정적 발상에 기초한 것임을 알 수 있었다. 이어서 제4절에서는 일본의 다문화공생사회로의 과제를 (1) 사회적 차별의 개선, (2) 제도적 차별의 철폐로 요약 정리하였다. ‘공생’이라는 용어 그 자체는 본질적으로 ‘더불어 살자’는 의미로 그누구도 반대하기 어려운 긍정적인 개념이다. 그러나 ‘공생’이라는 용어가 어떠한 문맥에서 어떻게 사용, 유용, 도용, 동원될 수 있는가, 그러한 가능성에 주의하지 않으면 안될 것이다.⁴⁸⁾

여기에서 한국 사회에의 시사점을 검토해 보자. 먼저 한국 사회의 다문화정책에 대해 선행연구를 살펴보면, (1) 한국 정부의 다문화정책은 가부장적인 동화정책이며(윤인진2008 : 72, 이선옥2007 : 100),⁴⁹⁾ (2) 다문화정책이 사회적, 경제적 이익이라는 국익 우선의 시각을 반영하고(문경희2006),⁵⁰⁾ (3) 한국 국민의 다문화성에 대한 인식이 충분하지 못하며, 여기에는 한국 사회의 소수자 집단이 동화모형을 추구하고 있다는 요인이 작용한다(손철성2008 : 1-7)는 것을 알 수 있었다.

48) 上野千鶴子前掲論文. 231頁

49) 손철성(2008 : 9)도 최근에 정부가 시행하고 있는 ‘다문화정책’이라는 것이 기본적으로 동화 모형을 바탕으로 하고 있기 때문에 다문화주의의 이념과는 거리가 있다고 주장한다. 한국 정부의 다문화정책은 인권이나 후생 복지에 초점을 맞추고 있으며, 문화와 관련된 정책은 많지 않다. 그리고 외국인 아주자들이 한국 사회에 적응하는 것을 돕기 위해 한국 언어나 한국 문화를 가르치는 것이 주를 이루어 문화와 관련된 정책들도 적응과 동화의 관점에서 시행되고 있으며, 문화적 다양성이나 문화적 정체성의 관점과는 거리가 멀다고 볼 수 있다.

50) 윤인진(2008 : 79)에서 재인용. 이렇게 국가 경쟁력 확보 차원에서 다문화주의를 이용한다면 이주자, 특히 저숙련 및 미등록 이주노동자의 인권을 보호하기 힘들다고 지적한다.

한국의 다문화사회가 해결해야 할 과제에 관해서도 많은 연구자들이 제언을 하고 있는데,⁵¹⁾ 중요한 것은 다문화정책의 실행이 단순히 다양한 문화가 상호 공존할 수 있게 한다는지 그러한 공존을 위한 약자적 위치의 문화를 보존하는 것의 문제가 아니라 새로운 문화적 정체성을 제시하는 패러다임의 전환에 관한 문제라는 것이다.⁵²⁾ 한국인이 다양한 문화에 대한 지식과 이해의 부족으로 자문화만을 중심적인 가치로 인식하거나 소통의 자세가 준비되어 있지 않을 때에는 이주민의 동질화를 지향하는 정책에 대한 요구가 더 큰 힘을 발휘할 수 있게 될 것이다. 반대로 한국인의 문화 다양성에 대한 이해도와 수용력이 뛰어날 경우, 이주민 집단과의 사회적 관계 설정에 있어서 보다 유연하고 생산적인 방향으로의 진화가 가능해질 것이다.⁵³⁾ 또한 한국은 이민국가가 아니고 민족국가라는 점, 인종적으로 문화적으로 동질성이 크다는 점, 혈통적 민족주의가 강하다는 점 등 한국적 맥락을 고려하고 이러한 점을 현실로 받아들이는 것이 필요하다.⁵⁴⁾

마지막으로 한국인은 재한외국인의 인권에 대해 냉담하거나 또는 무관심한 측면이 있는데, 더불어 살아야 할 상대방의 인권에 공감할 수 없을 때 어떻게 ‘외국인과 더불어 사는 열린 사회’(김남일2007: 149)를 실현할 수 있겠는가? 나아가 한국인 자신의 인권에도 관심이 희박하다는 것을 지적하지 않을 수 없다. 문화적

51) 현재의 한국 사회가 당면한 문제인 ‘불법체류자’와 관련이 많다. 예를 들면 박재영(2009: 122)은, 범국가적 차원에서 서로 다름을 이해하고 차이를 인정하는 사회적 합의와 다문화사회로의 이행에 대한 장기적인 전략이 요구되며, 구체적으로 첫째, 불법체류자들에 대한 엄격한 법률적용과 대처, 둘째, 합법적 외국인 노동자에 대한 사회적·법적 지위 부여, 셋째, 국제결혼 가정의 문제에 대한 국가적 차원의 관심과 보장 등이 시급한 과제라 하였다. 또 윤인진(2008: 99-100)은 외국인의 인권보장과 국익증진이라는 두 목표를 달성하기 위해서는 ‘단계적인 다문화주의’를 실천하는 것이 현실적인 방안이라고 주장하였다. 다문화사회로 진입하는 1단계에서는 모든 외국인의 기본적인 인권의 보장을 충실히 하고 특히 여성, 자녀, 난민인정자 등 소수자 보호에 전력을 기울이는 것이 바람직하고, 2단계에서는 숙련 기능 인력의 장기체류와 정주를 허용하고, 일정한 조건을 갖춘 불법체류 외국인들을 합법화할 수 있는 합리적인 제도와 절차를 마련하는 것이 필요하며, 다문화주의가 성숙해진 3단계에서는 이민과 귀화의 문턱을 낮추고 이민자들의 사회적응과 사회통합을 지원하기 위한 법적·제도적 체계를 마련하여 소수차별금지 정책과 같은 적극적인 노력을 통해 이민자들이 주류 사회에 참여할 수 있는 기회를 제공해야 한다고 주장하고 있다.

52) 홍기원(2007) 「다문화사회의 정책과제와 방향: 문화정책의 역할과 과제」 『한국행정학회 학술대회 발표논문집』919-920쪽

53) 홍기원 앞의 논문. 915쪽

54) 윤인진 앞의 논문. 99쪽

소수자가 아니더라도 언제든지 공권력으로부터 인권이 침해 받을 수 있다는 것을 인식해야 할 것이다. 이러한 사회의 시스템을 시정해 가는 것이 곧 ‘외국인과 더불어 사는 열린 사회’이며, ‘공생’의 시작이 아닐까 한다.

<參考文獻>

- 김남일 (2007) 「열린 사회 구현을 위한 외국인정책 방향」 『한국사회학회 2007 전기 사회학대회 발표 자료』 pp.147-179
- 김범수 (2007) 「일본 아마가카(山形)현의 다문화가족 지원시스템에 관한 사례연구」 『다문화가족연구』2007.4 평택대학교 다문화가족센터. pp.55-76
- 김홍운 · 김두정 (2007) 「한국 사회의 다문화 현상과 교육적 과제」 『인문학연구』 제34권 제3호. pp.153-176
- 문경희 (2006) 「국제결혼 이주여성을 계기로 살펴보는 다문화주의(multiculturalism)와 한국의 다문화 현상」 『21세기 정치학회보』 제16집(3호). pp.67-93
- 박재영 (2009) 「유럽 다문화사회의 문화충돌 : 영국 · 프랑스 · 독일을 중심으로」 중앙대학교 문화콘텐츠기술연구원 다문화콘텐츠연구사업단 편 『다문화총서1 다문화의 이해 : 주체와 타자의 존재방식과 재현양상』 도서출판 경진. pp.97-122
- 박용구 (2008) 「재일코리안의 문화적 갈등과 분화하는 정체성」 『일어일문학연구』 제64집. 한국일어일문학회. pp.331-350
- 설동훈(2004) 「외국인 노동자 문제의 배경」 『실천문학』 74호. 실천문학사. pp.220-230
- 손철성 (2008) 「다문화주의와 관련된 몇 가지 쟁점들」 『철학연구』 제107집. 대한철학회 논문집. pp.1-26
- 오경석 외 (2007) 『한국에서의 다문화주의의 현실과 쟁점』 한울아카데미
- 윤인진 (2008) 「한국적 다문화주의의 전개와 특성 : 국가와 시민사회의 관계를 중심으로」 『한국사회학』 제42집 2호. pp.72-103
- 이길용 (2008) 「일본의 다문화공생의 실태와 전망」 중앙대학교 문화콘텐츠기술연구원 다문화콘텐츠 연구사업단 정기학술세미나 발표자료집. pp.70-100
- 이선옥 (2007) 「한국에서의 이주노동운동과 다문화주의」 오경석 외 『한국에서의 다문화주의의 현실과 쟁점』 한울아카데미. pp.82-107
- 전영준 (2009) 「한국의 다문화연구 현황」 중앙대학교 문화콘텐츠기술연구원 다문화콘텐츠연구사업단 편 『다문화총서1 다문화의 이해 : 주체와 타자의 존재방식과 재현양상』 도서출판 경진. pp.198-211

- 조상균(2007) 「일본의 다문화정책과 재일동포의 인권」 『민주주의와 인권』 제7권 1호
전남대학교 5.18연구소 pp.347-383
- 주효진(2008) 「아시아의 다문화정책에 대한 비교 연구」 『한국행정학회 2008년도 추계
학술대회 발표논문집』 pp.89-104
- 최성환(2009) 「다문화주의의 개념과 전망」 중앙대학교 문화콘텐츠기술연구원 다문화
콘텐츠연구사업단 편 『다문화총서1 다문화의 이해: 주체와 타자의 존재방식
과 재현양상』 도서출판 경진. pp.10-28
- 홍기원(2007) 「다문화사회의 정책과제와 방향: 문화정책의 역할과 과제」 『한국행정학
회 학술대회 발표논문집』 pp.909-928
- 上野千鶴子(2008) 「共生を考える」 朴鐘碩·上野千鶴子他著, 崔勝久·加藤千香子編
『日本における多文化共生とは何か-在日の経験から』新曜社. pp.192-237
- 梶田孝道(1992) 「『多文化主義』のジレンマ」 『世界』1992年9月号. pp.48-65
- 総谷智雄(2006) 「外国籍住民への排除と同化の圧力」 朴一·太田修他 『「マンガ嫌韓流」
のここがデタラメ』コモンズ. pp.151-172
- 加藤千香子(2008a) 「『多文化共生』への道程と新自由主義の時代」 朴鐘碩·上野千鶴
子他著, 崔勝久·加藤千香子編 『日本における多文化共生とは何か-在日の
経験から』新曜社. pp.11-31
- 加藤千香子(2008b) 「日本社会と『共生』の再定義へ」 朴鐘碩·上野千鶴子他著, 崔勝
久·加藤千香子編 『日本における多文化共生とは何か-在日の経験から』
新曜社. pp.242-251
- 川村千鶴子(2008) 「ディアスポラ接触—地域が日本を越えるとき」 川村千鶴子編著
『「移民国家日本」と多文化共生論—多文化都市·新宿の深層』明石書店
pp.75-110
- 金侖貞(2007) 『多文化共生教育とアイデンティティ』明石書店
- 蔵田雅彦(2000) 「アジアの民族共生と在日韓朝鮮人」 徐龍達·遠山淳·橋内武編著 『
多文化共生社会への展望』日本評論社. pp.84-93
- 駒井洋(2003) 『多文化社会への道』明石書店
- 徐龍達(2000a) 「多文化共生社会への展望: 定住外国人の市民的権利の獲得と今後の
展望」 徐龍達·遠山淳·橋内武編著 『多文化共生社会への展望』日本評論
社. pp.1-18
- 徐龍達(2000b) 「共生社会への地方参政権: 定住外国人の市民的権利の獲得と今後の
展望」 徐龍達·遠山淳·橋内武編著 『多文化共生社会への展望』日本評論
社. pp.19-49
- 徐龍達·遠山淳·橋内武編著(2000) 『多文化共生社会への展望』日本評論社
- 関根政美(1997) 「多文化主義国家オーストラリアの誕生とその現在」 西川長夫, 渡辺

- 公三,ガバン・マコーマック編著『多文化主義・多言語主義の現在』人文書院. pp.147-164
- 崔勝久(2008)「『共生の街』川崎を問う」朴鐘碩・上野千鶴子他著,崔勝久・加藤千香子編『日本における多文化共生とは何か-在日の経験から』新曜社. pp.151-190
- 西川長夫,渡辺公三,ガバン・マコーマック編著(1997)『多文化主義・多言語主義の現在』人文書院
- 毛受敏浩・鈴木江里子編著(2007)『国際交流・協力活動入門講座Ⅳ : 「多文化パワー」社会』明石書店

접 수 일: 12월 31일
심사완료: 01월 08일
게재결정: 01월 29일

<要旨>

日本社会における‘多文化共生’の意味と多文化共生社会への課題

本稿は、韓国における多文化社会の方向性を模索するための基礎資料づくりの一環として、日本社会における多文化共生論の起源および展開過程を分析し、「共生」の意味を批判的に検討したものである。日本の多文化共生論の起源は、1970年代の日立就職差別裁判闘争をきっかけとする、日本社会の中でその存在が潜在化されていた在日韓国人の人権運動に求めることができよう。定住外国人としての在日韓国人が日本社会に要求した「共生」とは、「制度の差別」の撤廃を中心とする「平等の要求」である。一方、1990年代以降、在日韓国人とは出自を異にするニューカマーの急増を背景に、日本社会の対応として生まれた「共生」は、文化的マイノリティーのアイデンティティを認める「承認の政治」と位置づけられる。しかし、これは、日本社会への適応を促すという必要から生まれた行政的発想に立つ「共生」論であって、「日本人」と「外国人」の厳密な区別を前提とし、日本人への同調を求めるニュアンスが含まれているものである。「共生」ということばは、本来、異なる背景をもつ者同士が相互の違いを認め合いながら交流や理解をはかろうとする点で、排除や同化とは対照的な意味で使われたものである。そのため、説得の資源として利用価値があり、社会的格差を是認するネオ・リベラリズムの競争と選別の原理として流用されていく。「共生」がどのような文脈においてどのように使用、流用、盗用、動員されるのかという可能性にいつも注意深くなければならない。

中国における日本語教育の現状と課題

— 北京日本学研究中心の取り組みを兼て —

曹大峰*

cdfeng2005@163.com

中国・日本・韓国は東アジアの隣国として文化交流と友好往来の歴史が長い。その中でことばの交流として、中国における日本語教育は今から640年前の明(1368Y)の時代から始まり、いくつかの成長期と低調期を経て現在に至るが、グローバル化と多文化社会を迎え政治と文化の流れを若い世代へ引き継ぐ今日、日本語教育は東アジアの平和と発展に寄与する中日両国の新しい関係作りのために果たすべき役割が大きい。本稿では中国における日本語教育の現状を分析し、筆者が所属する北京日本学研究中心の取り組みを紹介し、中国における日本語教育の課題を考えてみたい。

1. 中国の日本語教育の変化とその対応

中国では周知のように「改革・開放」政策のおかげで、世界とともに大きく変化してきた。特に今世紀に入って以来、経済の発展はいうまでもなく、人と文化の交流も内外的に盛んになり、新しい社会編成が進んでいる。それに伴って、日本語教育の分野にも新しい変化が見えてきた。

日本国際交流基金が実施した『海外日本語教育機関調査』のデータ²⁾によれば、1998年から2006年の8年間に中国の日本語教育状況が下表のように目

* 北京日本学研究中心副主任・教授

1) 徐一平・篠崎撰子(2005)

2) 日本国際交流基金(2007)

立つ変化が見られた。

国際交流基金 『海外日本語教育機関調査』		中国全体	教育対象別			
			高等教育	初中等教育	社会人教育	比例
学習者数	1998年	245862	95658	116682	33522	39 : 47 : 14
	2003年	388284	205841	79661	102782	53 : 21 : 26
	2006年	684366	407603	76020	200743	60 : 11 : 29
教師数	1998年	5156	2513	1588	1055	49 : 31 : 20
	2003年	6031	3437	1106	1488	57 : 18 : 25
	2006年	12907	7217	1310	4380	56 : 10 : 34
教育機関数	1998年	1098	477	422	199	44 : 38 : 18
	2003年	936	475	302	159	51 : 32 : 17
	2006年	1544	882	337	325	57 : 22 : 21

データに示されたように、1998年の調査以来、中国の日本語教育は学習者数・教師数・教育機関数において全面的に大きく増長した。教育対象別にみれば、高等教育の増長は最も目立ち、学習者と教師の数が大幅に伸び続け、機関数もここ数年倍増し、日本語教育における比重が大きく、世界一の学習者数を持つといえよう。また、社会人教育も同様な増長率を見せており、日本語教育における比重は初等・中等教育を超えてきた。このような高等教育と社会人教育の増長に対して、初等・中等教育における日本語教育は学習者・教師・機関の数が連続的に減少してきたが、2006年のデータに見られるように、教師と機関のほうでは減少が止まり少し回復し始めている。これらの変化は次のような原因によるものだろうと考えられる。

a. 英語の基礎教育化→初中等教育の減少

開放政策による欧米文化の受容とWTO加入や企業の海外進出などの需要により、英語教育が最も基礎的な教育として認識されるようになり、小・中学での日本語教育の減少を招いたが、最近、青少年間の交流が重要視され、日本語教育の必要性も見直しされつつあるようである。

b. 複合型人材の目標→高等教育の急増

日本経済とアニメ文化の魅力を背景に、小・中学・高校では英語、大学では日本語（専攻・第1・第2外国語）など、多専門・多言語を複合的に履修する学習志向と複合型人材の養成目標が相俟って、高等教育での日本語教育の急増を促した。

c. 社会と個人の需要→民間教育の成長

日本企業と会社の中国進出とその成功に伴う人材需要を背景に、就職や転職で裕福な生活や多文化体験を求める目標による学習ニーズが急増し、民間教育の成長を促した。

d. 教育部門の再編と質的発展→機関数の減少と再発展

初中等教育の学生減、社会人教育の進化統合、大学の学科再編と大学院課程の増設などで、一時は部門の数が減少したものの、その後学科の質的な成長と更なる増長が進んでいる。

このように、社会の変化と需要により日本語教育の状況が変化し発展している中で、いろいろな新しい課題に直面するようになった。まず、これまでの日本語教育では語学と文学の教育と研究が中心だったのが、文化・社会・経済・コミュニケーションなども総合的な学習・教育・研究が求められる、学科再建やカリキュラム再編などの対応が進められるようになった。また、学歴教育とエリート教育から実用化と大衆化の教育へと大きく変わってきたので、日本語教育では、新しい教授方法と学習内容が教師と教材に求められるようになり、その対応として日本語教育学という研究分野が重要視されてきた。このような社会の変化と需要により、教育改革・改善などその対応がトップダウン式に強く求められて、今後も日本語教育学の対応と発展が期待されている。

このような課題を控え、最近の中国の日本語教育と日本学研究では、語学・文学・文化・社会・経済・コミュニケーションなど総合的な学習・教育・研究を重要視するようになり、日本語学でも語や文中心の語彙論・文法論だけではなく、コミュニケーションに関する発話心理と機能・行動重

視の語用論や認知言語学も学ばれるようになった。2007年に上海、青島、大連、済南、北京で開催された下記の国際シンポジウムでは、そのような総合的な視点による研究成果の発表が特に注目されたのであるが、2008年に上海、湖南、北京、香港、広州で開催された下記の国際シンポジウムでもその成果の報告が目立っていたのである。

2007年

- 3月 2007年上海外国語大学日本学国際シンポジウム
- 4月 2007中日非言語コミュニケーション研究国際シンポジウム
- 8月 中日韓文化教育研究フォーラム「日本語コミュニケーション能力の向上について」
- 9月 東アジアを視野に入れた日本学研究国際シンポジウム
- 10月 「二十一世紀における北東アジアの日本研究」国際シンポジウム
- 11月 日本語同時通訳・翻訳教学国際シンポジウム

2008年

- 6月 2008年上海日本学研究国際フォーラム
- 9月 中国大学日語教学研究会「第4回日本語教育研究国際シンポジウム」
- 10月 「日本語動詞とその周辺」日本語学国際フォーラム
- 11月 第八回香港国際日本語教育及び日本研究シンポジウム
- 11月 2008年中国国際ビジネス日本語教育研究会年度大会
- 12月 中国日語教学研究会「日本語教育・日本学研究」国際シンポジウム

2. 北京日本学研究センターの取り組み

北京日本学研究センターは中日両国の協力事業として、その前身である「大平学校」の創業と成果を受け継いで、日本語学と日本語教育学を含む中国初の「日本学」専攻の大学院教育が実施されている。これまで言語・文

学・文化・社会を専攻とする修士コースと教師研修コース（後、日本語教育学在職修士コース）を経て、今は日本語学・日本語教育学・日本文学・日本文化・日本社会と経済という5コース（博士前期後期課程）を持つ中国で最も実力のある日文学専攻の教育・研究機関をめざして発展している。

これまでは中日両国の教師陣による複眼的指導体制と専門課程教育を続け、カリキュラムの充実と改善を図り、学生訪日研修の魅力と効果を高めてきたが、中日両国の教育者と研究者による共同運営がその大きな特色といえよう。また、研究会・セミナーとシンポジウムの共催・共同研究プロジェクトの企画など通して、国内外との交流を重視する研究活動と機関連携事業を続けている傍ら、中国最大の日文学専門図書館の蔵書拡充とサービス拡大・ネットワーク化を実現し全中国向けの図書情報事業を運営している。

われわれは教育・研究・情報という三つの柱で中国の日文学教育と研究に於けるセンター・オブ・センター的役割を果たそうと、さまざまな課題に積極的に取り込んできた。ここに、日本語教育関係を中心に、いくつかの事例を報告したい。

1.1 日本語教育学を専門とする大学院教育課程の建設

『海外日本語教育機関調査』（日本国際交流基金）2006年のデータによれば、高等教育における中国の日本語教育は前回調査より倍増し、学習者・教師・機関ともに世界一の規模を示しているが、その中で特に非専攻の学科から専攻の学科へ、専攻の学科から大学院研究科への発展が速いものである。いまは日本語専攻を持つ大学は385校、大学院修士課程のある大学は60校を超え、博士課程を持つ大学は15校にも達したのであるが、その多くが日本語学または日本文学のコースで、日本語教育学を専門とする大学院コースは殆んどない。そのため、日本語教育学を専門に学んだ人材が極めて不足しているのが現状であろう。

そこで、本センターでは教師研修コースの長い蓄積を生かして2001年か

ら日本語教育学在職修士課程を立ち上げ、日本国際交流基金の派遣教授と中国人教員の協力によるコース運営と共同授業を進めてきた³⁾が、2005年に「日本語学・日本語教育学」という大コース制を導入し、2008年に「日本語教育学」の単独コースをスタートさせたのである。これまでは現職教師の32人に日本語教育学在職修士課程で学ばせ、学部から直接入学した大学院生4人に日本語教育関係の学位論文を書かせた。彼らは今各地の大学で日本語教育の第一線で活躍している。われわれは中国における日本語教育のレベルアップと質的發展に役立つ専門学科の建設と専門的人材の養成こそ、日本語教育の持続的發展と良い教育効果につながるものであると認識している。

1.2 日本語教育学を内容とする研究プロジェクトの企画

上述の教育活動とともに、本センターでは日本語教育学研究室が中心となって研究活動を行ってきた。毎月の研究会はもとより、共同研究プロジェクトも企画・実施されてきた。

まず、「中国の日本語教育における主幹科目『精読』に関する総合研究」プロジェクト(2002-2005)では中国の日本語教育において主幹的な役割を担う「総合日本語(精読)」を対象に、最近の外国語教育学や第二言語習得研究の理論とコンピュータ情報学的手法による総合的研究を通じて、これまで行われてきた日本語教育の成果を客観的な枠組みで評価し、今後の課題を提示した。同プロジェクトの共同チームには本センターの日本側派遣教授と中国側スタッフのほか北京大學、北京外國語大學、北京第二外國語學院、北京師範大學、清華大學、北京語言大學、大連外國語學院、青島海洋大學、浙江師範大學、高等教育出版社等多数の教育機関の学者が参加していただき、国内外の多くの研究者からも暖かい協力と関心を得た。その成果として、過去十年間に出版された主要な教科書の文字内容を収録した日本語教科書コーパス、それに基づいて教科書はどんな学習を提供しているかをめぐって言語学・文化学・教育学の立場からその内容を調査し分析した報告、ま

3) 横山(2002) 篠崎・曹(2008)

た、学習環境と学習活動を対象に各種の観察と調査をしそのデータに基づいて教育カリキュラムや教室内外の学習および各種の学習法と教授法の長短を分析した論文など、沢山の成果が公開され⁴⁾、国内外から注目された。

教科書コーパス

教科書4種16冊・「大綱」3種
語彙・本文・文法練習分別
内容別一括検索・分段表示
研究・開発・教学評価利用

学習教授教材調査(6大学)

学生214人・教師29人
学習の動機環境・スタイル
教授法教室活動
教材評価と要望

授業の録画(5大学)

教師5人×6-8時間
「精読」一課の授業全過程
教師と学生へ複眼的観察
ビデオのCD-ROM化実現

成果の公開

論文集(2006) 研究論文23篇
(高等教育出版社・一般発行)
教科書コーパス第1版
(2006完成 内部発行)

2.3 日本語教育学を基礎とするデータベースと新教材の開発

前述のように、中国の日本語教育は社会環境と需要の変化により、以前の学歴教育とエリート教育から実用化と大衆化の教育へと大きく変わり、新しい教授方法と学習内容が教師と教材に求められるようになった。そこで、われわれは上述のプロジェクトの成果を生かし、中国の日本語教育を研究するために役立つ「日本語教育研究データベース」の開発と、「中国の日本語教育のための新しい教材像に関する研究」と新教材の開発を企画し実施してきた。

4) 曹(2006)



「日本語教育研究データベース」は、下図のように、教科書コーパス、インタビュー録音、アンケートの統計、授業の録画など電子化されたマルチメディアデータからなるものであり、コンピュータでこれまでの日本語教育の状況を分析しその長所と欠陥を見出すための資料と道具を提供するように作成している。これまでは研究プロジェクトのメンバーで教科書コーパス、アンケートの統計、授業の録画を利用した研究成果が数多く発表されていたが、データベース完成後、広く一般の研究者にも利用できるように公開する予定である。教科書コーパスはより客観的・能率的に教科書の調査と分析を行うために開発されたものであるが、実際、多くの分野で一般的に利用出来ると思われる。たとえば、教科書の選別とその教授・学習法の調整、新しい教科書や教材の開発、学習の定着化と体系化、教育の均質化と評価の客観化など、研究者・教師・学習者・管理者など利用者によっていろいろな利用法がある⁵⁾。

「中国の日本語教育のための新しい教材像に関する研究」は「中国の日本語教育における主幹科目『総合日本語(精読)』に関する総合研究」の成果を発展的に応用し、これからの中国の日本語教育の進化に求められる新しい教材像を究明しようとするものである。同プロジェクトは中国の日本語学習ニーズと時代要請に応じる新しい教材の開発をめざして、新しい教材像とそれに基づく開発方針及びモデルシラバスを提示することを目的とし、同

5) 曹(2006)

時にまた、共同研究によって共通認識を獲得し教材開発チームを準備することも目標とするものであった。

新しい教材製作の企画と実施

内容重視：話題シラバス先行
 活動重視：学習プロセス配慮
 応用重視：教育文法の再構築
 手段重視：マルチメディア活用
 協働重視：中日共同作成体制

これまでの大学の日本語専攻では、文法中心と教師中心の教授法により「精読(総合日本語)」という授業に比重が置かれ、その教科書では新出単語→本文→文法解釈→練習という流れを貫き、「会話」や「聴解」などの科目との整合性が配慮されなかった。そのため、教師の教授経験や能力によって知識の学習と技能の訓練には一定的な効果を果たしていたが、しかし、近年、中日の経済貿易関係がますます発展してきたことに伴い、大学の日本語学科が次々と新設され学生も急増したので、学習動機や学習スタイルを変えつつある学生に対し、新設学科の経験の少ない若手教師でも対応できるような教材が求められるようになったが、理想的な教科書はない。そこで、当今の学習者と若手教師のニーズに対応し、自律学習やコミュニケーションの能力などを含む総合的学習と応用力の養成に役立つような教科書を開発しなければならないと認識し、次のような教材開発の目標が立てられた。

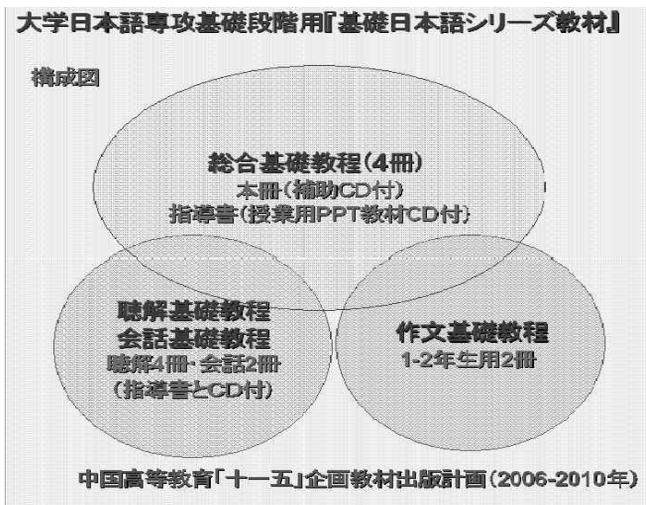
- 各科目の関連と整合をはかり知識と技能の融合を目指した大学日本語専攻基礎段階用シリーズ教材(総合基礎編・聞く話す編・作文基礎編)を開発する。
- 現実に即して真正性(authenticity)・規範性・実用性をもつ学習素材と多

様性のある視点を提供する。

- 使用場면을重視したトピック先行の総合シラバスを導入し、大学生の知的水準に合う学習内容と能力重視のタスク型学習形態を提示することによって、自主的で協働的・創意的な学習が可能な教材をめざす。
- トピックとタスクに見合った教育文法を考案し、文法運用能力の養成を目標に場面重視の文法配列と学習者向けの文法内容を提示する。
- マルチメディアによる多角的な補助教材、教授指導要領書と講義用PPTを作成し、学習の立体化と教育の均質化をめざして、学生の自律的学習と教師の持続的成長をサポートする。

この目標に基いて、われわれは新しい教科書の中日共同作成プロジェクトを企画し、国家教育部「十一五」教材出版計画に採用された。

同出版計画は下図のように、12冊の主教材と多数の指導書とマルチメディアCD副教材からなるシリーズ教科書を作成するものであるが、2011年の完成を目指して現在は、中日共同編集チームでシラバスの研究を経て各冊の作成に入っているところである。



3. 中国の日本語教育の課題

前述のような社会の変化と需要に対応して、中国の日本語教育ではまず、大学で急成長してきた新しい学科と若い教師に対する支援が大きな課題であろう。一方、衰退する傾向にある初等・中等教育に再び活力を入れることも、需要が大きい社会人教育やビジネス日本語教育にサポートを強めることも重要な課題であろう。

教育の内容や手段から見れば、多言語・多文化・情報社会を視野に入れた教育と研究が課題であろう。具体的には、多文化共生と人間性重視の日本語教育学の実現と展開、国際化や情報化社会に適応していく学習者と研究者の養成など、課題が多い。特に、日本語だけでうまくいかない日系企業の需要に適応する人材の養成とその教育内容と方法の開発が新しい課題として注目されつつある。

また、中日関係を含む今後の国際関係を改善していくためには、最も基本的な課題として、共生的意識・相対視能力と情報リテラシーの学習と獲得もますます重要視されるであろう。

21世紀は多言語社会と多文化共生の時代であり、また、教育と研究の国際融合と国際協力が大きく推進する時代である。東アジアにおいては、特に中日韓三国の「交流」と「合作」が時代の発展にとって重要だと広く認識されているが、このような時代における日本語教育とその研究も、中日韓三国の機関と研究者による「交流」と「合作」が必要であろう。北京日本学研究中心ではここ数年、国内と海外の多くの研究機関や大学と交流関係を結び、国際ジョイント教育と共同セミナーの共催、コンソーシアムの参加を通して、多言語多文化を視野に入れた日本語教育の研究に取り込んできた。

今回、韓国中央大学校韓日文化研究院主催の国際フォーラムに参加させていただき、韓国と日本の研究者と交流することができたこと、大変ありがたいと思う。ここに「交流」の場を作ってくださった中央大学校韓日文化研

究院任栄哲院長を始め諸先生に敬意と感謝を表すると同時に、今後ともこのような「交流」がさらに発展し、更なる成果を収められるよう期待している。

<参考文献>

- 徐一平・篠崎摂子(2005)「各国の日本語教育 中国」『新版日本語教育事典』大修館書店
 国際交流基金(2007)『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年』凡人社
 横山紀子(2002)「北京日本学研究中心・在職修士課程日本語教師研修コースについて」『日本語教育通信』43号
 篠崎摂子・曹大峰(2008)「中国の現職日本語教師向け修士コース－北京日本学研究中心在職日本語教師修士課程実施報告－」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号
 曹大峰ほか(2006)《日語教学与教材創新研究》高等教育出版社
 曹大峰(2008)「中国における日本語教科書作成 一歩み・現状・課題」『言語文化と日本語教育』35号

접 수 일: 12월 31일
 심사완료: 01월 08일
 게재결정: 01월 29일